昭和十年七月十日印刷
昭和十年七月十五日發行
昭和十五年六月二十日再版發行

國譯一切經 本緣部 六
【定價 金一圓五十錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
株式會社 大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝 三九四四番
三〇四〇番

製本所 兩角製本所

索　　引

（頁數は通頁を表はす）

—ク—

—ケ—

—コ—

—サ—

—シ—

—ス—

—セ—

— 本緣部六索引終 —

佛、諸の比丘に告げたまはく、『各、心口を護りて、愼みて放恣する無かれ。善惡は人に隨ひ、久しくして捨てず。宜しく明行を修すべし。從つて道を得可し。吾の償對する所、此に於て了れり』と。諸の比丘、經を聞きて歡喜し、受戴、奉行す。

中本起經（終）

るを最と爲す。人中の歸仰する所は、[143]遮迦越をもつて最と爲す。江・河・泉・源・流には、大海の深きをもつて最と爲す。衆の星、空中に列するには、日月の明らかなるをもつて最と爲す。佛、世間に出でては、施を受くるをもつて上最と爲す』と。

阿耆達、心に悦び、結、解し、[144]法眼淨を逮得せり。國人、大小、皆、道心を發す。前みて佛足を禮し、歡喜して退く。

時に、阿難、佛の威神を承け、諸の比丘の心中に大いに疑ふを知る。因りて宜しく佛に白すべし。『如來の神妙、三達廣照す。衆生の念、因緣の趣く所を知る。不審なり、何故に麥を食する一時なるや。願はくば、佛、化を開きて衆疑を散解したまへ』と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『過去、久遠の時に大國有り。名けて盤頭越と曰ふ。時に世に王有り。字けて頻頭と曰ふ。王に太子有り。名けて[145]維衞と曰ふ。出家して道を學び、道成じて佛と爲る。猶、維衞と名く。相好威德、諸佛の法は一なり。所從の比丘、六萬二千人と俱なり。時に父王、佛及び比丘僧に飯し、幢幡を嚴飾して、世の珍を極む。城內整頓して、燁々たり、煌々たり。時に梵志有り。淸潔にして德高く、諸の弟子を從へ、事に因りて城に入る。顧みて衆人に問ふらく、『何の異節か有りて、光飾乃ち爾るや」と。行人、答へて曰はく、「頻頭王の子、道を得て佛と號す。今日、當に來るべし。王及び臣民、供養せん故なるのみ」。道士、答へて曰はく、「世人、甚だ迷へり。甘饌を捐棄して、此の人に食ましゝむることを爲す。卿の人に說く所の如くんば、應に馬麥を食すべし」と。五百の弟子、聲を同じうして善と讚す。中に一人有り。師を諫めて曰はく。「師の言は非なり。若し彼の言の如くんば、此の人の德は尊し。應に天厨を食すべし」と』。佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時の高行の梵志とは、則ち吾が身、是なり。五百の弟子とは、若曹是なり。時の師を諫めし者は舍利弗是なり。吾が種、此に栽う。今に於て始めて畢れり』と。

【一四三】遮迦越(Cakravartin)。轉輪聖王のこと。

【一四四】法眼淨。分明に眞諦を見るを云ふ。

【一四五】維衞(Vipaśyin)。過去七佛の第一佛なり。釋迦菩薩、第三阿僧祇劫の滿時に此佛に遭ひ、初て百大劫種相の福を修するを以て七佛の首となす。而してその佛を讃する精進力に依り、九劫を超えて成佛せしを以て、此佛の出世が九十一劫前なるを知るなり。

母、阿難に答ふらく『吾れ今忽務にして、能く爲すを得ず』と。

比居の一母、佛尊を歎ずるを聞き、馳せ出でて求索む。阿難、之に授けて、即時に熱せしむ。佛、食して呪願したまふ。阿難、心結す。佛、之を解かんと欲したまひ、飯を餘して施與す。百味の香美、世の有る所に非ず。阿難、意解して曰はく『如來の妙德は、思議す可からず』と。

是の時に、世尊、拔耆國に詣らんと欲したまひ、先づ阿難をして[一四二]往きて阿耆達に告げしむ。阿難、敎を受け、即便はち往きて告ぐ。阿耆達、阿難の來れるを見て、意、猶、未だ悟らず。即ち阿難に問ふらく『如來、今、所在と爲す』と。

阿難、報へて曰はく『世尊、此に在して、爾來三月なり。前に卿の請を受けたまふ。尊に二言無し。一時已に竟り、別を告げて當に去るべし』と。阿耆達、佛の化を垂れたまふを聞くも、乃ち供養する無く、悲怖、交至る。即ち馳せて佛に詣し、頭面に禮を作し、自ら陳べて曰はく『愚癡にして罪覆ひ、言信に違失す。願はくば佛の慈悲をもつて、其の重きを恕原したまへ』と。

佛、梵志に告げたまはく『汝の至心を明かにす』と。

阿耆達、歡喜して、前みて佛に白して言さく『願はくば、留ること七日したまへ。供養を敍するを得ん』と。

佛、歲の至れるを以て、即便はち之を可とす。時日、舍利弗、天より來下す。歲節已に過ぎ、當に拔耆國に詣るべし。阿耆達、供養の餘具を取りて、遍ねく道中に散じ、佛をして上を蹈みて過ぎせしめんと欲す。

佛、梵志に告げたまはく『飯具、米糧は、是れ應に食噉ふべし。宜しく足にし蹈むべからず』と。

佛、其の施を受け、便はち爲に呪願したまふ。而して頌を作りて曰はく、

『外道の修事する所は、　火に精懃なるを最と爲す。　學問の日に益明かなるは、　衆義通ず

【一四二】往告阿耆達。大正大藏經には往古阿耆達に作る。卍藏、縮藏は共に往告阿耆達に作る。今は後者に從ふ。

阿耆達、佛の聖德を聞き、五情、內に慘し、卽ち問ひて曰はく『佛の今在す所、見るを得可きや、不や』と。

答へて曰はく『近く祇洹に在して、廣き眞言を開きたまふ』と。

明日、阿祇達、往きて祇洹に詣り、門に入りて佛を見たてまつる。威神、光明あり。敬心、內に發る。前みて佛足を禮して、却つて一面に住す。佛、爲に法を說きたまふ。歡喜踊躍し、卽便はち席を退きて、佛及び比丘僧に、化を垂れ照臨したまはらんこと、一時、三月なるを請ふ。佛、神旨を以て、往古の因緣を知り、默然として請を受けたまふ。阿耆達、佛の許可を得、辭退して國に還る。

是に於て、阿耆達、家に還りて嚴供するに、世の珍美を極む。是の日、世尊、五百の比丘僧と與に、往きて隨蘭然に詣りたまふ。時に、阿耆達、天魔の迷惑にて、[四一]五欲に耽荒す。一には寶飾、二には女樂、三には衣食、四には榮利、五には色欲なり。退きて後堂に入り、門士に告勅すらく。『客を通ずるを得ず。一時、三月、尊卑を問はず、吾の敎有るを須てよ』と。

如來、門に到りたまふに、閉ぢて通ぜず。便はち舍邊の大叢樹の下に止りたまふ。佛、比丘僧に告げたまはく『此の郡、旣に飢ゑ、人、道を好まず。各々自ら便はち利に隨ひて分衞すべし』と。

舍利弗、勅を受けて、獨り忉利天上に升り、日の食、自然なり。衆僧、分衞せるも、三日にして空しく還る。

時に馬師有り、麥を減じて佛及び比丘僧を飯す。阿難、已に其の麥を得て、鉢を以て之を受く。心、用つて悲疾して曰ふ『諸天の名味も、國王の供膳も、每に謂ふ、其の味、尊口に不可なりと。尊口、今、此の麥を得たるも、甚だ麁惡爲り。何んぞ此れを持つて、佛に供養するに忍びんや』と。

得る所の麥を持つて、一老母に造る『佛は至尊にして、法御、上聖なり。今、佛に飯せんと欲す。請ふらくは、母よ。之を熟せよ。功德無量ならん』と。

【四一】五欲。財欲・色欲・飲食欲・名欲・睡眠欲を以てするは普通なれども、こゝのは些か異る。

世尊、又、曰はく、『譬へば人有り、器を持つて水を取る。一器は完牢にして、二は穿壞なるが如し。若し持つて水を受けんに、完は恒に滿じ、穿は漏盡す。人、[二三六]道教を聞きて、精進し、修勤し、戒を奉じて違はず、身口に嚴勅するは、喩へば完器の受くる所限り無きが如し。人、道法を聞きて、受けず信ぜず、加ふるに謗毀を行じ、人本を忘失して、還つて惡道に入るは、喩へば穿器の盛貯する所無きが如し』と。

佛、長者に告げたまはく、『宿命の善行は、乃ち佛を見るを得。復、尊豪なりと雖も、然れども道を信ぜざれば、譬へば狂華の落ちて實を成ぜざるが如し』と。

拔提弗、心に喜び、善と稱す。眞言、神に感じ、所說、至誠にして、便はち無上正眞の道意を發し、戒を受けて退く。國內一切、皆、道意を發す。六師の邪術、一に皆毀廢し、天・人・龍・鬼、法聲を宣明す。

佛食馬麥品第十五

時に、佛、波和離[二三七]園より、千二百五十の比丘と俱に、祇樹給孤獨園に還りたまふ。是の時、舍衞國界の中間に、郡有り、[二三八]隨蘭然と名く。婆羅門有り。[二三九]阿祇達と名く。多智明慧にして、居は富に居ること無比なり。往きて[二四〇]阿難邠坻の家に詣り、論議、事訖りて、須達に問うて曰ふ、『今、此の都下に、頗る、神人の師宗す可き者有りや、不や』と。

須達、答へて曰ふ、『子、未だ聞かずや。釋種の王子、出家して道を爲し、道成じて佛と號す。身色相好、世の見る所に非ず。法戒雅正にして、心垢を照除す。神通明達にして、衆生の原を知る。諸天・龍神、奉承せざる莫し。每に法言を說くに、精義神に入る。吾が螢燭の能く宣陳ぶる所に非ず』と。

【二三六】道教。佛一代の敎法を云ふ。道は能通の意にて佛果に通入すべき意なり。

【二三七】園。麗本には國とあり、今宋・元・明三本に從ひて改む。

【二三八】隨蘭然（Vairantya）。佛、この國に於て毘蘭若婆羅門の請を受け三月、安居し、馬麥を食ふ。

【二三九】阿祇達。（Agnidatta）。佛を請じて安居せしめ、之を忘れて佛の至るを知らず、如來三月、唯馬麥を食したまへり。

【二四〇】阿難邠提。梵の Anāthapiṇḍada, 即ち須達長者なり。麗本には阿難邠邸に作る。今宋・元・明三本に從ひて改む。

水火・盜賊も、復、害するを得ず。壽終りて天に生じ、衣食、自然なり』と。

佛、長者に告げたまはく『眞言は至要にして、世の愚惑を化す。若し信ぜざれば、自ら人の本を毀り[一二二]三塗に墜墮す。若し能く覺[一二三]識して、改闢易行すれば、神を[一二四]無爲に遷して向ふ所分明なり』と。

阿夷拔提弗、佛の說法を聞き、情喜び內定る。坐を退きて自ら陳ずらく『愚癡にして惑を積み、未だ正眞を識らず。質す所の非法は、實に鄙意に非ず。尼揵の遣はす所、使を奉じて不遜なり。願はくば、佛、恩を垂れ、罪咎を原恕したまへ』と。

佛、言はく『汝、能く自ら覺したり。此の福量り無し』と。

長者、歡喜して復、佛に白して言さく『情、闇くして悟り難し。疑ふ所を問はんと欲す』と。

佛、言はく『所問に隨意なれ。今、當に汝の爲に事々分別すべし』と。

長者、問ひて曰ふ『伏して聞くらくは、如來の慈は等しく、普ねく救ふと。不審なり、法敎偏駁にして等しからざること。道を得る者有り、得ざる者有り。疑を抱くの日久し。願はくは、尊、蒙を開きたまへ』と。

佛、言はく『善き哉、問ふことや。諦かに聽き、諦かに受けよ。譬へば、農夫の如し。宿、二業有りて、一の田業は高燥肥沃、二の田業は下濕瘠薄なり。春和の時に於て、力を等しくして功を興し、種を下すこと節に應じ、草穢を耘除せんに、秋に至りて實を獲ること、斗斛懸かに殊なり』と。

佛、長者に告げたまはく『人の功は偏せざるも、收むる所等しからざるは、地の厚薄の故なり。人、吾が法を聞き、信受奉行せんに、意の如くに得る所、喩へば沃田の收むる所無數なるが如し。今の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷[一二五]は是なり。意に隨ひて深きに入り、神通、無礙なり。人、道言を聞きて背きて信ぜざるは、喩へば下田の、沒溺して生ぜざるが如し。今の六師・尼揵等是なり』と。

【一二二】三塗。卽ち地獄・餓鬼・畜生の三惡道なり。

【一二三】識（vijñāna）。根を所依として對境を識別する能緣の作用あるもの。

【一二四】無爲(Asaṃskṛta)。生滅變化なき眞理。諸法の眞實體を云ふ。

【一二五】優婆夷(Upāsikā)。五戒を受けたる女子の稱。淸信女と譯す。

對へて曰はく、『已に聞きたり』と。

尼揵、語りて曰はく、『汝、往きて沙門瞿曇に一事を難じ、當に噎するが如くならしむべし』と。

拔提弗、言はく、『何をか一事の乃ち對へざらしむると謂ふや』と。

曰はく、『汝、瞿曇を難ぜよ。「吾れ聞く。沙門は一切の普ねく飽滿を得んことを呪願すと。猥りに大衆を將ゐて飢國に來適す、人の食を費損じ、此れ大いに益無し」と』と。

拔提弗、命を受けて退く。卽ち佛所に詣して、神德を瞻覩するに、威相赫然たり。弟子の法儀、恂恂たり、洋洋たり。敬心踊躍し、袖を拱いて前に進み、直ちに輯し、却つて坐し、佛に白して言さく、『一事を請はんと欲す。願はくば授解を蒙らん』と。

佛、言はく、『聞かんと欲する所を咨へ』と。

跋提弗、言はく、『伏して聞くらくは、瞿曇は一切を饒益し、安隱を得せしむと。而るに大衆を將ゐて、飢國に顧臨したまふ。民の食を減損し、費して益無し』と。

佛、阿夷拔提弗に告げて言はく、『吾、九十一劫より以來た、未だ人に勸めて福を爲すに、損じて益無きを聞かざるなり。吾れ聞けり。尊貴・富樂は、本、[三〇]布施より起ると。未だ唐しく費を損じて報ぜざる有らず。人、仁義を行へば、現世に稱傳せられ、後、天に生ずるを得。善を勸め、代りて喜べば、福祐、身に隨ふ』と。

又、長者に告げたまはく、『財に八危有り。損じて益無し。何をか謂ひて八と爲す。一には官の爲に沒せられ、二には盜賊に劫奪され、三には火起りて覺えず、四には水の浚溺する所、五には怨家・債主に、橫しまに奪取せられ、六には田農修めず、七には賈作に便利を知らず、八には惡子*博掩して、用度、道無し。是の如きの八事は、至危にして保ち難し。八禍、當に至るべし、力の制する所に非ず。是の故に、如來、此の因緣を以て、人に布施を勸む。[三一]福田を安置して、深堅、動じ難く、

【三〇】布施。梵語檀那(dāna)の譯。慈心を以て普ねく他に物を施すことを云ふ。四攝・六度の隨一たり。

* 博掩。博奕なり。博はすごろく、掩はぜにうち。

【三一】福田。布施を行ずるに當りて之を受くる者を福田と稱す。但し、施者は農人の如く、受者は田の如く、施物は種子の如く、應に供養すべきものに供養すれば、能くその福報を受くること、農夫の田畝に播種して秋收の利あるに譬ふ。

るに、衆膳、具く備り、唯、薪炭のみ乏し。行き求めて得ず。庫の氈布を出し、香油、之に灌ぎ、以て飲具を供ふ。明日、時に至り、使を遣はして佛に白さしむ。

城門、復、閉づ。使、還りて白して言ふ、『城門開かず。是れ諸の長者子の所作と知る』と。

女、自ら念じて言ふ、『法、應に使を遣はして供辦を表白すべし。云何んが通ずるを得ん』と。

便はち鸚鵡に告ぐらく、『汝、行きて佛に白すべし』と。

鸚鵡、勅を受け、飛びて其の家を出づ。諸の長者子の輩、弓を擧げて之を射る。使を奉じて佛を請ず、威神の接する所、箭、化して華と作る。便はち佛所に詣し、飛びて虚空に住し、佛に白して言さく、『衆嚴、畢く辦ず。唯、願はくば尊を枉げたまへ』と。

時に、衆祐の、法の(ごとく)威儀を導き、足に門閫を蹈みたまふや、天地震動し、[二三]龍雨、塵を淹ふ。[二四]天樂下り從ひ、諸音の樂器、自然にして鳴る。

佛、坐して飯し竟り、澡水を行じ畢りて、爲に經法を說きたまふ。五百の長者子、阿凡和利、及び五百の女人、法眼を逮得せり。皆、五戒を受け已りて、佛、比丘僧と與に、還つて、[二五]奈氏園に詣りたまふ。一切、歡喜し、樂聞せざる無し。

[二六]尼揵問疑品第十四

佛、維耶離より、千二百五十の比丘僧、及び千の[二七]優婆塞と倶に、那難陀國[二八]波和離園に詣りたまふ。是の時、國內、[二九]六師に奉事し、邪行に迷へり。城中に豪長者有り。阿夷拔提弗と字く。尼揵に奉事して、精勤第一なり。佛の來顧したまへるを聞き、往きて尼揵の所に詣し、禮拜すること常の如し。

尼揵、問ひて曰ふ、『卿は瞿曇の此に來至せるを聞けるや、不や』と。」

【二三】龍雨。龍により變化されたる雨。
【二四】天樂。天人の伎樂。
【二五】奈氏園。奈氏の樹園、即ち菴沒羅園なり。
【二六】尼揵(Nirgrantha)。六師外道の一にして、裸形塗灰等離繫の苦行を修せり。
【二七】優婆塞(Upāsaka)。五戒を受けたる男子の稱。清信士と譯す。
【二八】波和離(Pravari)園。麗本には波和利國に作る。今宋・元・明三本に從ひて改む。
【二九】六師。六師外道なり。

諸の長者子、歡喜して坐を退き、長跪して佛に請ふらく、『明日、尊を屈して、蔬食に哀臨したまへ』と。

佛、便はち告げて曰はく、『已に先に請を受く。佛は二たび諾せず』と。

諸の長者子、復、佛に白して言さく、『不審なり。請主の姓字は是れ誰ぞ』と。

佛、言はく、『向に、阿凡和利の請を受く。明日、當に往くべし』と。

長者子、佛に白さく、『此は是、國の民。豈、先に在るを得んや』と。

佛、族姓の子に告げたまはく、『如來の慈は普ねくして、尊卑を問はず』と。

諸の長者子、前みて佛足を禮し、辭退して家に還る。

〔三〇〕過ぎて、阿凡和利と語りて曰ふ、『佛は至尊なり。一切を以ての故に、吾が國に來化したまふ。佛及び僧を飯するは、吾等、應に先なるべし。男は尊く女は卑し、卿は當に後に在るべし。愼みて供辦する勿れ。故に來りて相語る』と。

女、長者子に白さく、『豪强・威力を以て、弱きに加ふる無かれ。今、四事を乞ふ。若し惠まるれば、敢て先に在らず。何らをか四事と謂ふ。一には、我が心をして善を保ちて移る莫からしめんを乞ふ。二には、我が命をして保在し亡ぶ莫からしめんを乞ふ。三には、財物をして保在し滅する莫からしめんを乞ふ。四には、世尊をして常に住して教授し、餘國に詣る莫からしめんを乞ふ』と。

卽ち女に謂ひて曰はく、『善心、保ち叵し。命も亦是の如し。吾の能く辦ずるところに非ず』と。

便はち相謂ひて言はく、『此の女は福人なり。先づ佛を飯するを得、乃ち非常を覺ること、甚だ喜樂す可し』と。

中に年少きもの有り。〔三一〕其の後に出づるを耻ぢ、當に共に之を〔三二〕固すべしとて、便はち市監に勅して、寵めて市を作さず。阿凡和利、婢を遣はして市に買ふに、了に得る所無し。還りて庫藏を視

【三〇】過與。麗本には過告に作る。今宋・元・明三本に從ひて過與と改む。

【三一】其。麗本は甚に作る。今宋・元・明三本に從ひて、其と改む。

【三二】固。或は困の誤か。

化したまふを聞きて、歡喜すること無量、即便はち嚴出す、五百の女人と倶なり。佛、比丘に勅したまはく、『意を端しくし頭を低れよ、妄りに顧視する勿れ。色欲は人を亂す、唯、道のみあつて能く制す。情を抑へ心を撿すること、智者は必ず能くす。今、女人有り、阿凡和利と名く。五百の女人と倶に說法を聽かんと欲す。汝曹、各、淨行を護り、之を持ちて放つ勿れ』と。諸の比丘、唯、諾して教を受く。

阿凡和利、門に詣りて車より下り、叉手して心に當て、頭を低れて直ちに前む。頭面に佛を禮し、却つて女の位に就く。

世尊、告げて曰はく、『形は久しく住らず。色は久しく鮮ならず。命は風の過ぐるが如く、少壯も必ず衰ふ。容姿を恃みて、自ら汚行に處る勿れ。世間の迷惑・禍は色欲より起る。三塗の勤苦、智者は能く閉づ』と。

女、佛の言を聞きて、心、解し、欲、止む。便はち道意を發し、自ら三尊に歸す。

是に於て、阿凡和利、坐を退きて佛に白さく、『女を以て賤めざれ。法言、服するを得ん。願樂はくは、如來、明日、尊を枉げて、比丘僧と、顧みて薄食に下りたまへ』と。佛の法、默然は已に許可と爲す。起つて頭面を以て禮を作し、歡喜して去る。

是の時、城中に長者子、五百の同輩有り。佛の來りて訓を垂れ、[二九]奈園に止住したまふを聞き、即ち皆倶に行き、佛に詣して法を聽かんとす。車馬・服飾・五色輝煌たり。城を出でて園に詣り、人從・車馬、寂然として法の如し。門に詣りて車を下り、叉手して直ちに進み、禮拜して情を陳じ、却つて男の位に坐す。

佛、族姓の子に告げたまはく、『榮位、尊豪にして、快樂、意の如きは、皆、是れ、前世福德の致す所なり。今、復、佛を見る。功德、增益す』と。

るに音樂に熟達せしを以て、當時國內の婆羅門等の家女從學し、以て師と爲すもの五百人に及べり。奈女則ち弟子女と共に經術を研究し、音樂を奏し、常に園池の間に悠遊するを以て、國人譏謗し、呼びて婬女と云ふ。

【二四】迦維羅衞。迦維羅越に同じ、釋迦族の領土。

【二五】拔者（Vrji）國。維耶離城並にその以北の地に住せし拔者人の住地。

【二六】維耶離（Vaiśālī）。中印度に屬し恒河の北にあり。拔者族の都城たりし地。

【二七】奈氏樹園。奈女の所有せし菴沒羅園（Āmravana）、

【二八】阿凡和利。（Ambapālī）の音譯。即ち奈女なり。

【二九】奈園。即ち奈氏の樹園なり。

禪三昧を以て、自ら娛樂し、晝夜有ること無し。何等をか四と爲す。一には無形三昧、二には無量意三昧、三には清淨積三昧、四には不退轉三昧なり。迦葉比丘も亦是の三昧有り。吾、本、六通を樂ひて、今は已に六通を得たり。迦葉比丘も亦六通を得。何等をか六と爲す。一には[一〇五]四神足念、二には[一〇六]悉く一切の人の意を知り、三には[一〇七]耳徹聽し、四には[一〇八]衆生の本を見、五には[一〇九]衆生の趣行する所を知り、六には[一一〇]諸漏皆盡く。今は已に畏れ無く、三界に獨り尊し。吾、四定を以て、法御を表彰す。何等をか四と爲す。一には解定、二には智定、三には慧定、四には戒定なり。名色皆滅し、梵迹、獨り存す。憂・憙の想無く、生死の根斷ず。迦葉比丘も亦復是の如し』と。

世尊、又曰はく『過去、久遠の時に聖王有り。[一一一]文陀竭と名く。高行、世を暉らし、功勳、感動す。[一一二]忉利天帝、其の果德を欽じ、卽ち車馬を遣はし、闕に詣して王を迎へしむ。王、天車に乘り、忽然として虛に升る。天帝、出でて迎へ、王と共に坐し、娛樂、歡を盡して、王を送りて宮に還へす』と。

佛、比丘に告げたまはく『爾の時の天帝とは、大迦葉、是れなり。文陀竭王とは則ち是れ吾が身なり。往昔、天帝、生死の畏座を以て、吾をして並び坐せしむ。吾、今、無上正眞・法御の座を以て、昔の功德に報ずるなり』と。

佛、本昔を說き、加ふるに聖德を以て比丘迦葉を顯はしたまふ。一切、解脫し、皆、無上正眞の道意を發せり。法敎の名は遠く、樂受せざる無し。

度[一一三]奈女品第十三

佛、[一一五]迦維羅衞國より、千二百五十の比丘と俱に、[一一四]拔耆國の界を過ぎて、人民を度したまふ。去りて[一一六]維耶離に至り、[一一七]奈氏の樹園に詣りたまふ。城中に女人有り。[一一八]阿凡和利と名く。佛の來

【一〇五】四神足念。遊涉往來の自在なる通力。卽ち神足通。

【一〇六】悉知一切人意。他人の心念を知るに於て、無礙なる通力。卽ち他心通。

【一〇七】耳徹聽。色界天の耳根を得て聽聞無礙なる通力。卽ち天耳通。

【一〇八】見衆生本。自己及び六道衆生の宿世の生涯を知るに於て無礙なる通力。卽ち宿命通。

【一〇九】知衆生所趣行。色界天の眼根を得て照久無礙なる通力。卽ち天眼通。

【一一〇】諸漏皆盡。三乘の極致諸漏卽ち一切の煩惱を斷盡するに無礙なる通力。卽ち漏盡通。

【一一一】文陀竭(Mūrdhagata)。頂生と譯す。

【一一二】忉利天帝。忉利天(Trāyastriṁśa)は欲界六天中の第二、須彌山の頂、閻浮提の上八萬由旬の所にあり。忉利天帝はこれを司る帝釋なり。

【一一三】奈女。庵沒羅女(Āmrapālī(梵)Ambapālī(巴))なり。維耶離國の一婆羅門の庭園なる庵沒羅樹の瘤節上より分出したる枝條の間より生れ、彼婆羅門に長養せらる。長ずるに及び聰明、家父に從ひて學問し、博く經道を知り、天文の智識却つて父に勝れ、加ふ

者、愼みて守る所を護り、　調心正體なれば、　福は應に天に上るべし。　士、[九六]信行有れば、　聖の爲に譽めらる、　自愛は是の如く　快解して憂無し。　惡行は身を危くするも、　愚は謂ひて易しと爲す。　善は最も身を安んずるも、　愚人は難しと謂ふ。　法を信じ、戒を奉じ、慧意、能く行へば、　上天、之を衞り、　智者、玆を樂しむ。　仁愛にして邪ならざれば、安止して憂無く、　能く[九七]恚怒を除き、　是より淵を脫す』と。

王、法言を聞きて、愚、解し、＊妄、斷じ、前みて五戒を受く。群臣・從官、皆、[九八]道心を發し、天・龍・鬼神・歡喜樂聞す。

[九九]大迦葉始來品第十二

爾の時に、世尊、舍衞國祇樹給孤獨園に在して、衆の爲に法を說きたまふ。天・龍・鬼神・[一〇〇]四輩の弟子、嚴整して具足す。是に於て、[一〇一]摩訶迦葉、垂髮、弊衣にして、始めて來り、佛に詣す。世尊遙かに見て、歎じて言はく、『善來、迦葉』と。豫め[一〇二]半牀を分ち、命じて坐に就かしめたまふ。迦葉、前に進み、頭面に禮を作し、退き跪きて自ら陳べて曰はく、『余は是れ如來末行の弟子なり。顧命して坐を分ちたまふも。敢へて旨を承けず』と。

大衆、僉く念ずらく、『此の老道士、何の異德有りてか、乃ち世尊をして坐を分ちて之を命ぜしむる。此の人の儁乂、唯、佛のみ明らかなり』と。

是に於て、如來、衆の所念を察し、所疑を決せんと欲して、廣く迦葉の大行の、聖に齊しきを論じたまふ。世尊、又曰はく、『吾、四禪を以て、[一〇三]禪定息心す。始より終に至るまで損耗有ること無し。迦葉比丘も亦四禪有り。禪に因りて定意を得。吾、[一〇四]大慈を以て一切を仁愛す。迦葉の體性も、亦、慈なる、此の如し。吾、大悲を以て、衆生を濟度す。迦葉比丘も、大悲此の如し。吾、四

【九六】信行。敎を信じて行ずるを云ふ。
【九七】恚怒。三毒の一にして瞋恚忿怒の意なり。
＊ 妄。麗本に望に作る。今は三本に從ふ。
【九八】道心。菩提を求むる心。
【九九】大迦葉。即ち摩訶迦葉(Mahākāśyapa)にて、婆羅門種の一姓なり。能く大財と大姓を捨てゝ頭陀の大行を修して大人に讓らる。故に大の字を冠して他の迦葉姓に簡ぶ。
【一〇〇】四輩弟子。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆なり。
【一〇一】摩訶迦葉。前出の大迦葉なり。
【一〇二】分半牀。佛、迦葉に半牀を分てるは、解脫の床を同ずる義を表せるなり。
【一〇三】禪定。禪に同じ。これを譯して定と云ふ。禪定は即ち梵漢並擧して呼ぶなり。
【一〇四】大慈。佛菩薩の廣大なる與樂の慈。

匝して、群生を濟度す、[九〇]十力の世雄も、猶、泥洹を現す。人、世間に生じて、命、久しく停らず、忽ちにして電流の若く、風の庭を過ぐるが如く、尊榮の寶位、其れ、夢の若し。古を推し、今を驗するに、始まりて終らざるもの無く、五道に輪轉す。見諦して眞に反れ』と。

佛、國王の爲に、頌を作りて曰はく、

『河の駛く流れて、往いて反らざるが如く、人の命も是の如し、逝く者は還らず。壽、千年なりと雖も、亦死して過ぎ去る、合會には離有り、親の恃む可き無し。世、皆死有り、三界、安きこと無し。諸天、樂しと雖も、福盡くれば、亦、喪ぶ。志、堅きこと地の若く、德、重きこと山の若く、眞人は無垢にして、寂然、[九一]滅に歸す。快き哉、福の報、願ふ所、皆成ず。上寂の大人は自ら泥洹を見る』と。

是に於て、波斯匿王、復、佛に白して言さく、『何をか自ら愛すると謂ひ、何をか自ら護ると謂ふ』と。

佛、言はく、『善き哉、問ふことや。大王、諦受せよ。人の世に生るゝや、[九二]四大、合成す。性愚にして癡に習ひ、殺・盜・婬・欺にして、道行を信ぜざるは、此れ自ら愛せざるなり。善を習ひ仁を行ひ、世の非常を覺し。死して更に生ずるを信じ。情、三尊に存して、戒を奉じ心を攝し、信に以て道に篤く、禮を守りて以て謙に、孝順・至誠なるは、此れ・人の世に處して自ら愛する者なり。善を積み、德を履み、身に枉橫無く、志行修明なれば、上天、衞護す。男と無く女と無く、衆行、身に歸せば、兵刄傷けず、虎兕害無し。[九三]自護の方は、方に、唯、戒行を持つのみ』と。

佛、波斯匿の爲に、頌を作りて曰はく、

『凡そ人、惡を爲し、自ら覺る能はず、[九四]愚癡快意なれば、後に熱毒を受く。生れて善行無くば、死して[九五]惡道に墮ち往くことの疾き間無く、到るに資用無し。自ら身を愛する

【九〇】十力。一、處非處智力。二、業異熟智力。三、靜慮解脫等持等至智力。四、根上下智力。五、種種勝解智力。六、種種界智力。七、遍趣行智力。八、宿住隨念智力。九、死生智力。十、漏盡智力。以上如來の十力にして佛此の心力以て一切を了知するなり。

【九一】滅。泥洹(Nirvāṇa)の體は無爲寂滅なれば、譯して滅と名く。

【九二】四大。地・水・火・風の四原素なり。

【九三】自護之方。自護之力の誤ならんか。

【九四】愚癡。梵の慕何(Moha)、心性闇昧にして事理に通達する智明なきを云ふ。

【九五】惡道。惡行に乘じて行くべき道途。地獄・畜生など。

を以て、道、佛所を過ぎ、車を下り蓋を却け、袖を拱ねて直ちに前み、地に稽首して、却つて王の位に就く。佛、王に問ひて言はく、『何の所より來り、衣、弊れ、形、瘦せたるか』と。

王、即ち席を離れ、涙を揮ひて對へて曰ふ、『國の大夫人、天下を背棄す。侍して靈柩を送り、安措して始めて還る。近く、世尊の鄙國に顧臨したまふを承る。哀悴を以てすと雖も、*表見を得んを貪る。性、頑にして愚闇、情、邪聲に惑ふ。今、始めて乃ち明教の至眞なることを解せり。憂悲苦惱は皆恩愛に由る、毎に惟ふ、道訓は、世、希に聞く所なり』と。

時に、世尊、王に告げて曰はく、『復、坐して、善く聽けよ』と。

王、言さく、『唯、諾せり』と。

佛、言はく、『衆生の形を受くるや、老も無く壯も無く、豪も無く賤も無し。命盡の日に分散せざる無きこと、譬へば、春の華、色久しく鮮かなる無く、實を結びて華落ち、果熟して本を離るゝが若し。須彌の寶山も、劫盡きて壞爛し、大海の深廣も、猶、枯竭有り。人の命は危脆なり。[八八]智者怙まず。唯、德を修めて精進して道を履む有るのみ』と。

佛、時に、頌を作りて曰はく、

『命は菓の熟するを待つが如し、常に零落に會するを恐る。　生ずるを以て皆苦有り、　誰か能く不死を致さん。　河流の駛疾して　往いて大海に沒するが如く、　人命も亦是の如し、　逝く者は、復、還らず』と

佛、王に告げて曰はく、『[八八]遮迦越羅、四域を典領す。飛行案行して、七寶・導從す。壽、千年なりと雖も、亦、死して過ぎ去る。諸天の食福、肴膳、自然なるも、其の祿、盡くるに至りて、亦復、磨滅す。比丘は惡を破し、一心に思禪す。榮利に移らずして、志の重きこと山の若き、神通の眞人も猶復滅度す。如來世に出で、權慧、身に現じ、[八九]金剛の德體、明らかに大千を暉らし、三界を週

＊ 貪得表見。麗本には表災に作るも、今は三本に從ふ、

【八八】 遮迦越羅（Cakravart-in）轉輪聖王のことなり。
【八九】 金剛。堅固を以て義とし、金鐵の鏗鏘なるものを云ふ。何物にも破壞さるゝことなく一切を破壞するものなれば佛の體德を譬ふ。

卽便はち、婦を刺し、還つて復自ら刺す』と。

佛、那利繩に告げたまはく、『恩愛は相殺す。何ぞ但、憂悲のみならんや』と。

臣、佛の敎を受け、禮して退き、宮に還り、具に尊旨を宣ぶ。王、意に悟らず。猶、此の言を嗤ひて、復、末利に謂ふ、『瞿曇、何の故に正に此の語を作すや』と。

夫人、王に白さく、『一事を啓せんと欲す。願はくば、採省せられんことを』と。王、曰はく、『便はち說けよ』と。

夫人、問うて曰はく、『彼方の二郡、一を迦夷と名け、二を拘達盧と名く。若し王に白すものありて、彼の二國、他の王、劫取すと云はゞ、王、當に云何にすべき』と。

王、夫人に謂ふ、『吾が豐樂は此の二國に由る。若し此の問有るも、情、用つて憂憒す』と。

夫人、復、言ふ、『太子[八六]琉璃・皇女金剛、若し疾あり、若し亡ぜば、王、當に云何にすべき』と。

王、夫人に答ふらく、『此れ、情、堪へ難し』と。

夫人、王に問ふらく、『此れ、恩愛の憂悲を生ずと爲すや、不や。賤妾、醜陋にして幃幄に侍するを得。一旦病亡せば、王當に云何にすべき』と。

王、末利に答ふらく、『吾、情、迷荒して、命、將に全からざらんとす』と。

夫人、復、言ふ、『此れ、恩愛の憂悲を生ずと爲すや、不や』と。

王意乃ち解す。卽便はち床を下りて遙かに祇洹を禮し、三尊に歸命し、懺悔して過を謝し、形を盡くし命を竟るまで、尊敎を首戴せり。

[八七]自愛品第十一

佛、舍衛國、祇樹給孤獨園に在して、衆僧具足し、爲に法を說きたまふ。國王波斯匿、日昳の時

【八六】琉璃(Vaidūrya)。波斯匿王の子にて、後に琉璃王となる。金剛(Vajra)。

【八七】自愛。佛、波斯匿王の爲に、三寶に歸依して自らの三業を愛護し之を放從せしめざる所の三種自愛の法を說きたまふ。以て品に名く。

て憂悲を生ずる有らん』と。
夫人、對へて曰ふ、『佛は虛言せず。其れ、實に此の如し』と。
王、復、謂ひて言はく、『汝は瞿曇を尊ぶも、[八三]是の如き宗親は、其れ信ぜんのみ』と。
夫人、王に白さく、『何んぞ、自ら往きたまはざる。若し智臣を遣はさば、請ひて所問を啓し、世の狂惑を驗したまへ』と。
王、其の言を聞きて、卽ち智臣那利繩を召す、『汝、吾が聲を持つて、瞿曇に問訊すべし。「世人、愚惑にして妄りに尊旨を傳へ、橫しまに恩愛は憂悲を生ずと言ふ。其の理の乖くを怪む。是の故に信を遣はし、風化を下承す」と。若し、佛に敎有らば、汝、諦に之を受けよ』と。
臣、王命を受けて、卽ち祇洹に詣し、佛を禮し、却つて住す。斯に進前するを須つて長跪して白して言さく、『國主波斯匿、座前に稽首して、解せざる所を問ひまつる。願はくば、示導して[八四]敢て眞言を告げられんことを』と。
是に於て、如來、臣に命じて坐に就かしめ、之に告げて曰はく、『恩愛の本は、淵波盡き難し。憂悲の惱は、一に恩愛に由る』と。又、大臣に告げたまはく、『吾、今、卿に問はん。意に解せば便はち對へよ。譬へば、人有りて、父母は遂に亡し、妻子は死に盡き、財は縣官に沒せらるるが如し。此の人の憂惱、堪勝ふ可きや、不や』と。
大臣、對へて曰はく、『審に尊敎の如し』と。
又、大臣に[八五]告げたまはく、『古昔、人有り。貧に居して窮困す。而して其の婦を娶りて、富家の女を得たり。嬾墮にして計無く、日に更に貧乏し、家、餉饋に困す。奪うて更に稼せんと欲す。妻、家の議を聞き、便はち以て夫に語らく、「我が家の勢强し。必ず當に奪ふべし。卿、當に何の計をか作すべき」と。夫、婦の言を聞きて、將ゐて共に房に入り、「今は汝と共に一處に死せんと欲す」と。

【八三】如是宗親其信而已。卍藏には加是宗親其信而已に作る。前後の文より見るに、宗親を遣して佛に問はしめんとあるべき文勢なり。恐らく脫字あらん。

【八四】敢。麗本は散に作る。今宋・元・明三本に從ひ敢と改む。

【八五】告。麗本は言に作る。今宋・元・明三本に從ひて告に改む。

諦を見、淨にして無垢に、已に五道の淵を度り、佛出で丶世間を照らし、衆の爲に憂患を除く』。

〔八一〕王、正言を聞くも、垢重く、情蔽ひ、疑を遺して未だ悟らず。前みて佛の足を禮し、辭退して宮に還る。

是の時、國内に婆羅門有り、富に居り、寶多く、老いて兒子無し。祠に祈りて力を盡し、*末後に男を生む。其の年七歳にして、病を得て便はち亡し。其の父、憂毒し、臥して席に安んぜず、復、飲食せず。佛の能く憂患を除きたまふを聞き、卽ち祇洹に詣す。

佛、梵志に問ひたまはく、『何の愁憒有りてか顏色憔悴する』と。

婆羅門、言さく、『我、年、老耄にして正に一子有り。我を捨て丶終に亡じ。悲憐、痛毒す』と。

佛、梵志に告げたまはく、『人、恩愛有れば、便はち憂悲を得るなり』と。

梵志、情迷ひて、便はち佛に白して言さく、『恩愛の樂に、何ぞ憂悲有らんや』と。

佛、言はく、『然らず』と。

是の如きこと三たびに至るも、婆羅門、解せずして、祇洹より走りて出づ。二人の樗蒲を見て、心に自ら念じて言ふ、『此れ必ず智者にして、能く我が疑を解すべし』と。

便はち二人に問ふらく、『恩愛は樂と爲すか。憂悲と爲すか』と。

卽ち梵志答ふらく、『天下の樂、恩愛に過ぎたるは無し』と。梵志、復、言はく、『吾、瞿曇を見るに、我に向ひて此を説く』と。

二人、答へて曰はく、『沙門瞿曇、世に反し、人を惑はす。愼みて信ずる無かれ』と。

國内の愚者、共に佛の語を嗤ひ、乃ち王に上聞して、王をして意を惑はしむ。便はち夫人に謂ふ。

〔八二〕夫人は末利と字く。便はち之に告げて曰ふ、『瞿曇、笑ふ可し。論に反し、理を失す。何ぞ、恩愛にし

【八一】王。麗本は正に作り。今宋・元・明三本に從ひて王と改む。

＊末後。麗本に未後に作る。今、三本に從つて末後とす。

【八二】末利(Mallikā)。波斯匿王の夫人。末利華の園より將來せし故に末利夫人と云ふ。

具に有す。故に如來、無所著、正眞覺と爲す』と。
王、情に迷ひ疑ひて、重ねて質して言ひて曰はく、『瞿曇年少く、學ぶの日も甚だ淺し。所以は何ん。世に婆羅門有り。水火を修治し、精勤して體を苦しめ、晝夜を去らず。九十六術、經渉せざる靡く、年高くして德遠し。※不蘭迦葉等六子の輩、名稱、世を蓋ふも、猶未だ佛を得ず。佛は實に尊し。是を以て之を推すに、[七九]遲疑して信ぜず』と。
佛、王に告げたまはく、『吾、今、王の爲に法の眞諦を說かん。善く聽きて疑ふ勿れ』と。
王、曰ふ、『善き哉』と。
佛、王に答へて曰はく、『小に四事有り。皆、輕んず可からず。何らをか謂ひて四と爲す。一には、太子小なりと雖も、當に正君と爲るべし。此れ、輕んず可からず。二には、小火の草を燒くや、草盡きて乃ち止む。此れ、輕んず可からず。三には、龍子小なりと雖も、能く風雨・雷電・霹靂を爲す。此れ、輕んず可からず。四には、道士小なりと雖も、已に道要、深妙の慧に入り、飛行敎化して人民を度脫す。此れ、輕んず可からず』と。
是に於て、世尊、王の爲に、頌を作りて曰はく、
『太子は福成じて、　當に正君と爲るべし。　愚人は輕慢にして、　禍豊、是に生ず。／正に心より出でゝ、　能く重く能く輕く、　宿所の得る所、　福、自ら形に隨ふ。　能く德本を觀て、
然る後に人を觀よ、　道要、以て備る、　大王、思惟せよ』。
小火も草を得ば、　燒く所限り無し。　[八〇]須彌の寶山も、　亦、小より起る。　智者は物を觀るに、
小も無く、大も無し。
龍に遇ひて避けずんば　小毒も人を害す。
比丘は惡を破し、　精進して禪に入り、　道、神通を成じ、　變現して人を度す。

※不蘭迦葉(Pūrṇa-kāśyapa)。六師外道の隨一。
【七九】遲疑。麗本は惟疑に作る。今宋・元・明三本に從ひて遲疑と改む。
【八〇】須彌。世界の中央金輪上に屹立せる高山なり。

せしむ。所以は何ん、阿難よ、女人は五處有りて作るを得る能はず。何等をか五と爲す。女人は如來・至眞・等正覺と作るを得ず。女人は[六九]轉輪聖王と作るを得ず。女人は第二忉利天の帝釋と作るを得ず。女人は[七〇]第六魔天王と作るを得ず。女人は[七一]第七天の[七二]梵天王と作るを得ず。夫れ此の五處は、皆、丈夫の之に爲るを得るのみ。丈夫は天下に佛と作るを得。轉輪聖王と作るを得。天の帝釋と作るを得。魔天王と作るを得。梵天王と作るを得ん』と。佛、是を說き已りて、皆、歡喜して受行す。

度[七三]波斯匿王品第十

是の時に、如來、舍衛國に還りて、祇樹給孤獨園に在して、比丘僧千二百五十人と倶なりき。王、波斯匿、心に自ら念じて曰ふ、『佛は是れ釋種なり。出家して山に處り、以て無上正眞・等覺を成ず。[七四]威影神妙にして、天・龍・鬼神も宗仰せざる無し。人の爲に說法するに、上中下の言、悉く善し。其の所說を聞きて、歡喜せざる莫し。福を開き、禍を塞ぎ、言、泥洹に入ら(しむ)』と。卽便はち嚴出して、導從常の如し。門に至りて車より下り、群臣、倶に前む。直揖して、却つて坐し、佛に白して言さく、『頃、釋子、端坐すること六年にして、道成じ、佛と號するを承る。實に爾りと爲すや、不や。此れ世の美とする所か』と。

佛、王に語りて曰はく、『吾は眞に是れ佛なり。世、虛しく傳へず』と。

王、復、言ひて曰はく、『瞿曇、自ら稱して佛と爲す。故、佛に非ざるなり』と。

佛、復、王に答へたまはく、『過去、久遠の時、世に佛有り。名けて[七五]定光と曰ふ。吾に決を授拜すらく、「汝、來世九十一劫に於て、當に佛と作るを得べし。釋迦文と字し、[七六]三十二相・[七七]八十種好・十八特妙の法・十種の神力・[七八]四無所畏有らん」と。一事も不足せば名けて佛と爲さず。吾、今、

【六九】轉輪聖王(Cakravarti-rāja)。全世界を統御する大王。

【七〇】第六魔天王。欲界の天に六重ありて、他化自在天は第六に位し、その他化自在天王は常に佛道に障礙を爲す故に、魔天王と云ふなり。

【七一】第七天。梵天は色界の初禪天にて、欲界六天と通じて云ふ時、第七に位する故、第七天と云ふ。

【七二】梵天王(Brahma)。色界初禪天の主なり。

【七三】波斯匿(Prasenajit)。中印度舍衛國の王なり。須達、祇陀太子と共に祇園精舍を佛に奉るや、王亦外護の任にあたれり。

【七四】威影神妙。麗本は威景神妙に作る。今宋・元・明三本に從ふ。

【七五】定光(Dīpaṃkara)。過去の世に出で、釋迦菩薩の爲めに記莂を授けし佛なり。

【七六】三十二相。佛又は轉輪聖王の內德を表彰する三十二の相なり。

【七七】八十種好。三十二相を更に細別して八十種の好となす。三十二相に隨ふ好なり。

【七八】四無所畏(Catvāri-vaiśāradyāni)。佛・菩薩の說法師子吼するに當り、畏るゝ所無き四種の智力。

是の諸長老比丘尼は、皆、久しく梵行を修し、且つ已に諦を見る。云何んぞ、當に新たに大戒を受けたる幼小なる比丘僧の爲に禮を作すべきや』と。

阿難、言はく、『小且く、我の今入りて之を問ふを待つべし』と。

阿難、即ち入る。佛の足下に稽首して、佛に白して言さく、『大愛道比丘尼、言ふ、「是の諸の長老比丘尼は、皆、久しく梵行を修し、且つ已に諦を見る。云何んぞ、當に新たに大戒を受けたる幼少なる比丘僧の爲に禮を作すべきや」と』と。

佛、言はく、『止みなん、止みなん。阿難よ。當に此の言を愼みて説くを得る勿るべし。但、汝の知る所は、我が知に如かず。若し女人をして、我が道に於て沙門と作らざらしむれば、外、諸の(六四)異學の梵志、及び諸の(六五)居士、皆、當に衣被を以て地に布き、哀を諸の沙門に求めて言ふべし。「賢者、(六六)淨戒有りて高行なり。願はくば、此の衣の上を行きたまへ。我をして長く其の福を得せしめん」』と。

佛、阿難に言はく、『若し女人をして、我が道に於て沙門と作らざらしむれば、天下の人民、皆、當に髮を解きて地に布き、哀を諸の沙門に求めて言ふべし。「賢者、戒聞慧行有り。願はくば、此の髮の上を行きたまへ。我をして長く其の福を得せしめん」と。若し女人をして、我が道に於て沙門と作らざらしむれば、天下の人民、皆、當に豫め衣被・飲食・臥床・病瘦の醫藥を具し、諸の沙門の當に自ら來りて之を取るべきを願はん。若し女人をして、我が道に於て沙門と作らざらしむれば、天下の人民、沙門に奉事する、當に日月に事ふる如く、天神に事ふるが如く、諸の(六七)外道・異學の者の上に過踰すべし。若し女人をして、我が道に於て沙門と作らざらしむれば、佛の(六八)正法は當に千歳に興盛すべし』と。

佛、復、阿難に語りたまはく、『女人、沙門と作るを以ての故に、我が法をして五百歳にして衰微

【六四】異學。我が道に異る學問。こゝにては佛道に對して外道を指す。

【六五】居士(kulapati)。在家にて佛道を志す者。

【六六】淨戒。淸淨なる戒行。

【六七】外道。佛教外に道を立つる者。

【六八】正法。敎行證の三法具足の時期。

事を訟問するに、聞見する所を以てするを得ず。若し比丘僧、聞見する所有つて、比丘尼に訟問せば、比丘尼は卽ち當に自ら省察すべし。六には、比丘尼、道法を庶幾ふ有らば、比丘僧に經律の事を問ふを得ん。七には、比丘尼、自ら未だ道を得ずして、若し戒律を犯さば、當に半月、衆中に詣りて、首過自悔して、以て憍慢の態を棄つべし。八には、比丘尼は、百歲、大戒を持つこと有りと雖も、當に新たに大戒を受けたる幼稚なる比丘僧の下座に處り、謙敬を以て之が爲に禮を作すべし。是を八敬の法と爲す。我れ女人をして、踰越することを得ざらしむ。當に以て壽を盡して學びて之を行ふべし。假し大愛道をして、審に能く此の八敬の法を持たしめば、沙門と爲るを聽さん』と。

賢者阿難、佛の語を受け已つて[六〇]熟諦し、便はち禮を作して出づ。大愛道に報じて言はく、『瞿曇彌よ、復、愁ふること勿る可し。已に捨家の信を得たり。家を去りて戒に就け。佛、女人の沙門と作る者、八敬の法有りて踰越するを得ずと說きたまふ。但、當に身を終るまで、意を勤め、學びて之を行ふべきのみ。心を持つこと、當に防水の如くなるべし。善く堤塘を治して漏らす勿きのみ』と。阿難、卽ち一一伯母の爲に、佛の敎勅する所の八敬の事を說いて言はく、『能く是の如き者は、佛の法律に入る可し』と。

大愛道、卽ち歡喜して曰ふ、『唯、諾せん。阿難よ、我の一言を聽け。譬へば[六一]四姓の家の女、沐浴して香を塗り、莊嚴事を衣る。人、復、之を利益せんに、安穩にして怖れざらんを欲し、好華香・珍寶を以て、結びて瓔珞と爲し、持つて其の女に與ふるが如し。豈、愛樂して頭首に受けざらんや。今、佛の敎勅する所の八敬の法、我、亦、心に歡ぶ。願はくば、首頂を以て之を受けん』と。

爾の時に、大愛道、便はち大戒を受け、[六二]比丘尼と爲りて法律を奉行し、遂に應眞を得たり。然る後、異時、大愛道比丘尼、諸の[六三]長老比丘尼と俱に行きて阿難に詣し、問ひて言ふ、『阿難よ。

【六〇】熟諦。或は熟見諦の見を脫出したるものならんか。

【六一】四姓。婆羅門・刹帝利・吠奢・首陀羅なる印度に於ける民族の階級。

【六二】比丘尼。佛門に歸入し具足戒を受持せる女人。

【六三】長老。道德衆に長じ、年臘亦他より老大にして、人の爲に尊重せらるゝ者の謂なり。

るべし。是の家、以て爲に衰弱し、大いに强盛たるを得ざるなり。今、女人をして我が法律に入らしむれば、必ず佛の清淨なる梵行をして、久しく住まるを得ざらしめん。譬へば稻田の禾稼具熟するも、惡露、災氣有れば、則ち善穀をして傷敗せしむるが如し。今、女人をして我が法律に入らしめば、必ず佛の清淨なる梵行をして、久しく興盛なるを得ざらしめむ』と。

阿難、復言さく、『今、大愛道、多く善意有り。佛の初めて生じたまふ時は、力めて自ら育て養ひ、長大に至る』と。

佛、言はく、『是れ有り。阿難よ。大愛道は信に善意多し。我に於て恩有り。我れ生れて七日にして、母、終に亡し。大愛道、自ら我を育て養ひて、長大に至る。今、我、天下に佛と爲る。亦、多く、大愛道に恩德有り。大愛道、但、我に由るが故に、來りて[五一]自ら佛に歸し、自ら法に歸し、自ら比丘僧に歸し、又、佛を信じ、法を信じ、比丘僧を信じ、復、苦を疑はず、復、習を疑はず、復、盡を疑はず、復、道を疑はず、方に其の[五二]信を成じ、其の[五三]禁戒を成じ、其の[五四]多聞を成じ、其の[五五]布施を成じ、其の[五六]智慧を成じ、亦能く自ら禁制して[五七]殺生せず、盜竊せず、婬泆ならず、妄語せず、飮酒せざるを得たり。是の如きは、阿難よ、正に人をして身を終るまで、衣服・飮食・臥具・病困の醫藥を相給施せしむるも、我が此の恩德には及ばざるなり』と。佛、阿難に告げたまはく、『假し女人をして沙門と作るを欲せしめば、[五八]八敬の法有りて、踰越するを得じ。當に以て壽を盡し、學びて之を行ふべし。譬へば防水の如し。善く堤塘を治すれば漏る勿らんのみ。其の能く是の如き者は、我が律戒に入る可し。何らをか八敬の法を謂ふ。一には比丘の大戒を持てるに、女人比丘尼は當に從ひて正法を受くべし。二には比丘僧、大戒を持つこと半月已上なれば、比丘尼は當に禮して之に事ふべし。三には比丘僧・比丘尼は、相與に並び居、同じく止まるを得ず。四には、三月、一處に止まらば、自ら聞く所、見る所を相[五九]檢校し、當に自ら省察すべし。五には、比丘尼は、比丘僧の

[五一] 自歸佛自歸法自歸比丘僧。この佛・法・僧の三寶に歸依することを、三自歸と云ふ。
[五二] 信(śraddhā)。佛・菩薩・教法等に於て、疑心を起さず、其心澄淨なるを云ふ。
[五三] 禁戒。佛が其の弟子のために身口の非惡を制禁せる戒律のこと。
[五四] 多聞。教法を多く聞いて忘れざるを云ふ。
[五五] 布施(dāna)。慈心を以て他に普ねく物を施すこと。
[五六] 智慧。事理を照見して、得失邪正を分別する心の作用。
[五七] 不殺生・不盜竊・不婬泆・不妄語・不飮酒。これ即ち五戒なり。
[五八] 八敬法。女人出家のため正法千年を五百年に減じたるも、八敬法を持つために又千載に復す。
[五九] 檢校。麗本は檢押に作り、宋本は檢校に作る。今宋本に從ひて改む。

りて、衣を著け、鉢を持し、國を出でゝ去りたまふ。大愛道、即ち諸の老母等と倶に行きて佛を追ふ。佛、行きて、轉じて那私縣に到り、河上に頓止す。大愛道、便はち前みて稽首し、禮を作し却つて住す。佛に白して言さく、『我、女人の、精進して沙門の四道を得可きを聞く。願はくば、佛の法律を受くるを得ん。我は居家にして信有るを以て、出家して道を爲さんと欲す』と。

佛、言ばく、『止みなん、止みなん。瞿曇彌、女人を以て我が法律に入らんことを樂ふ無かれ。法衣を服する者は、當に壽を盡して清淨に、梵行を究暢すべし』と。

大愛道、則ち、復、哀を求むること、是の如くにして三たびに至る。佛、肯へて聽したまはず。便はち前みて禮を作し、佛を遶りて退く。門外に住し、幣敗の衣を被り、徒跣にして立つ、顔面垢穢にして、衣服汚塵なり。身體疲勞して、嘘唏、悲啼す。

[五〇]賢者阿難、伯母大愛道の是の如きを見て、即ち問ひて言はく、『瞿曇彌、何に因りてか、幣衣・徒跣して、面は垢に、衣は塵れ、疲勞して悲啼するや』と。

大愛道、答へて曰はく、『賢者阿難よ。今、我、女人を用つての故に、佛の法律を受くるを得ず。是を以て自ら悲傷するのみ』と。

阿難、言はく、『止みなん、止みなん。瞿曇彌。且く自ら意を寛にし、我の今入りて、佛に向ひて是の事を説くを待てよ』と。

賢者阿難、即ち入りて佛の足下に稽首し、長跪して佛に白して言さく、『我、佛より、女人の精進して沙門の四道を得可きを聞けり。今、大愛道、至心を以て法律を受けんと欲す。其れ已に家に居て信有り。出家して道を爲さんと欲す。願はくば、佛、之を許したまへ』と。

佛、言はく、『止みなん、止みなん。阿難、女人をして我が法律に入り、沙門と爲らしむるを樂ふ無かれ。所以は何ん。阿難よ。譬へば族姓の家、子を生ずるに、女多くして男少きが如し。當に知

【五〇】賢者。善道を修して未だ斷惑證理せざるもの。

[四三]瞿曇彌來作比丘尼品第九

爾の時に、佛、迦維羅衛國、釋氏の精舍に遊びたまふ。大比丘僧、千二百五十人と倶なり。是の時に、[四四]大愛道瞿曇彌、行きて佛所に到り、稽首して禮を作し、却つて一面に住し、[四五]叉手して、佛に白して曰ふ、『我、女人の、精進して沙門の[四六]四道を得可きを聞く。願はくば、佛の法律を受くるを得ん。我は居家にして信有るを以て出家して道を爲さんと欲す』と。

佛、言はく、『且く止みなん。瞿曇彌、女人を以て我が法律に入らんことを樂ふ無かれ。[四七]法衣を服する者は、當に壽を盡して清淨に、[四八]梵行を究暢すべし』と。

瞿曇彌、則ち、復、哀を求むること、是の如くにして三たびに至る。佛、肯へて聽したまはず。便はち前みて禮を作し、佛を遶りて去る。

其の後、久しからずして、佛、時に、諸の大比丘と倶なりき。釋氏の精舍より、迦維羅衛國に入りたまふ。大愛道、佛の諸弟子を從へ來りて、國中に入りたまふと聞き、心、大いに歡喜す。即ち行きて佛所に到り、佛の足下に稽首す。大愛道、復、佛に白して言さく、『我、女人の、精進して沙門の四道を得可きを聞く。願はくば、佛の法律を受くるを得ん。我は居家にして信有るを以て出家して道を爲さんと欲す』と。

佛、言はく、『止みなん、止みなん。瞿曇彌、女人を以て我が法律に入らんことを樂ふ無かれ。法衣を服する者は、當に壽を盡して清淨に、梵行を究暢すべし』と。

大愛道、則ち、復、哀を求むること、是の如くにして三たびに至る。佛、肯へて聽したまはず。便はち前みて禮を作し、佛を遶りて去る。

佛、時に、諸の比丘と與に、是の國に留止して、[四九]雨を避けたまふこと三月なり。衣を補成し已

【四三】瞿曇彌(Gautami)。佛の姨母なり。

【四四】大愛道(Mahāprajāpati)。瞿曇彌の本名。

【四五】叉手。禮拜の時に際し、兩手を束ね合はすこと。

【四六】四道。煩惱を斷ずる上の加行道・無間道・解脫道・勝進道。

【四七】法衣。僧尼の着用する衣服。如法衣・應法衣の意にて非法衣に對する言葉。

【四八】梵行(brahmacāra)。五行の一にして、清淨なる行業のこと。

【四九】避雨三月。印度に於ては、夏三月は雨期なり。この間外出を禁じて坐禪修學を勵むを通例とす。

んこと必せり』と。王、去りて後、女と父と謀りて該容及び其の侍女を燒殺し、詐りて失火と言ひ、掩塞す可しと謂へり。事、會、發露し、王、大いに之を恚り、吉星を斥徙し、外に捐弃す。其の道士たるを以ての故に、其の命を全うす。照堂等の輩は、之を地窟に幽し、邪道を推逐して、廣く佛法を闡む。

諸比丘、席を退きて、佛に白して言さく、

『王后該容及び其の侍女は、精進すること乃ち爾り。諦を見て道を得たり。不審なり、何の罪ありてか、此の火害に遇ふ。唯、願はくば、世尊よ、彰かに未だ聞かざる所を告げたまへ』と。

佛、比丘に告げたまはく、『過去に城有り、[三九]波羅奈と名く。婬女五百人有り、延致、輕薄、以て自ら供濟す。世に辟支佛有り。名けて迦羅と曰ふ。人民を敎化して、五戒を持たしむ。擧國の士女、歸心して師とす。諸女、恚りて曰ふ、『此の人、奚んぞ來りて吾が賓客を斷ずるや』と。咸、共に恚を興し、毀害せんと謀圖る。後日、迦羅、復、其の聚に入る。諸女、忿を同じくし、皆、火爐を以て迦羅を打撲す。擧身、焦爛するも、悔恨する所無く、便はち神足を現じて、飛びて虛空に升る。衆女、驚怖し、泣涙して過を悔ゆ。長跪して頭を擧げ、情を陳べて曰ふ、『女子、憃惑にして至眞を識らず。群愚、荒惑にして神靈を毀辱せり。自ら惟ふに、過疊、罪惡、山の如し。願はくば神德を降して、以て重殃を消したまへ』と。聲を尋ねて卽ち下り、[四〇]般泥洹す。諸女、塔を起て、[四一]舍利を供養せり』と。世尊、又曰はく、『[四二]時の彼の婬女とは、該容等是れなり。罪福は人を追ひ、久しく彰らかならざること無し』と。

是の法を說きたまふ時、國內の大小、信伏し、歡喜し、咸く、三尊に歸し、戒を受けて退く。佛、比丘と與に還りて舍衞に至り、祇洹に止頓したまふ。

【三九】波羅奈(Vārāṇasī)。

【四〇】般泥洹。泥洹に同じ。

【四一】舍利(Śarīra)。身骨。

【四二】時。麗本は于に作る。今宋・元・明三本に從ひて、時と改む。

度勝、勅を受け、具に聖旨を宣ぶ。該容、欣悅して、笥を開きて衣を出し、積みて高座と爲す。佛の威神を承け、應の如く說法す。夫人該容及び諸の侍女、疑は解け、惡を破し、道の溝港*を得たり。度勝、時に應じて、[三六]總持を逮得せり。

照堂、恨を挾みて、妬憤、內に發し、數、譖すること一に非ず。王、反つて辱めて曰はく、『汝輩の妖蠱、言、義に及ばず。彼の人の操行は、節を執りて貴む可し』と。

照堂、心に忌み、猶、之を害さんと欲す。密かに王に白して曰はく、『恒に青衣を遣はし、佛所に往來せしむ。情、外交に蕩き、志、邪趣に溢る。妾は實に良を修め、忠直なるも忽にせらる』と。數譖して已まず。王、頗る之を惑ふ。

照堂、心に謀り、念じて曰ふ、『子の齋日を伺へば、中らんこと必せり』と。其の齋日を伺ふ。因りて王に勸めて白さく、『今日の樂には、宜しく右夫人を請すべし』と。

王、便はち普ねく召す。命を被りて、皆、會す。該容のみ、齋を持して、獨り命に應ぜず。反覆して三たび召すも、節を執りて移らず。王の怒、隆盛なり。人を遣はして挽き出さしめ、縛して殿前に置き、將に射殺せんとす。該容、怖れずして一心に佛に歸す。王、自ら之を射るに、箭、還つて已に向ふ。後に射れば輒ち還る。王、時に大いに懼れ、惶怖して焉を解き、而して之に問ひて曰はく、『汝に何の術有りて、乃ち是を致すや』と。

夫人、對へて曰ふ、『唯、如來に事へ、三尊に歸命し、朝に佛齋を奉じ中を過ぎて飡せず、加ふるに[三七]八事を行じて、飾、身に近づけず。必ず是れ、世尊、哀顧して玆の若きのみ』と

王、曰ふ、『善き哉。[三八]豈、言ふ可きや。當に精舍に詣し、覲見して虔を表すべし』と。

會、敵國の兵を興して界に入る有り。彼の衆、强盛なり。王、自ら出征す。顧みて梵志に命ず。名けて吉星と曰ふ。權をもつて國政を領せしむ。照堂、喜びて曰ふ、『吾が父、政を領す。子を殺さ

*溝港。聲聞初果須陀洹の古譯。さとりの岸の意ならん。

【三六】總持(Dhāraṇi)の譯。善を持して失はず、惡を持して起らしめざる義、菩薩所修の念定慧に、この功德を具するなり。

【三七】八事。八關齋を云ふなり。

【三八】豈可言也。麗本は豈可言不に作る。今宋・元・明三本に從ふ。この一句、訓み難し。

又、大夫人二人を置きて、左右、番上す。二后の姿容、一國に雙び少し。左夫人は照堂と字け、人となり憍慠にして、唯、惡のみ是れ從ふ。賢良を譏疾し、〔三三〕人を譖して厭く無し。右夫人は該容と字け、仁愛を執行して、虔敬肅恭なり。淸素もつて己れを約し、文、身に加へず。王、其の操を珍とし、事毎に焉を私す。照堂、嫉を懷き、之を〔三四〕譖すること至深なり。王、其の行を察して、其の言を納れず。

該容に長老の靑衣有り。名を度勝と曰ふ。恒に行きて香を市ふに、因りて歸して問訊す。路、精舍に由り、過ぐる毎に敬を修す。香の錢を減省し、合集寄聚して、便はち行きて佛及び比丘僧に飯す。佛、爲に法を說きたまふに、心を〔三五〕盡くして忘れず。施し訖りて宮に還るに、肆を過ぎて香を取る。此の功福に因りて、本行の追ふ所、香氣、熏聞し、斤兩常に倍せり。詰問、理窮するに、實に任せ情を首すらく、『毎に香の錢を減じて、佛及び僧に飯す。法は深く、義は妙なり、世の聞く所に非ず』と。

該容、佛を說く聲を聞き、悚然として、心、歡喜し、自ら念じて曰ふ、『吾が心喜踊するも、何に因りてか無量の法を聞くを得んや』と。

卽ち度勝に告ぐらく、『試みに我が爲に說くべし』と。

度勝、白して曰はく、『身は賤しく、口は穢れたり。敢て便はち如來の尊言を宣べず』と。行きて佛に詣り、勅を受けて還らんことを乞ふ。

便はち遣はして宮を出でしめ、重ねて之に告げて曰ふ、『具に儀式を受くべし』と。

度勝、未だ還らざるに、夫人・侍女、中庭に側息す。

佛、度勝に告げたまはく、『汝、還りて法を說け、多く度する者有らん。說法の儀は、先づ高座を施す』と。

【三三】譖人。麗本は譖入に作る。今宋・元・明三本に從ひて譖人に改む。

【三四】譖。大正藏經は讃に作る。今縮藏及び卍藏に從ひて譖に改む。

【三五】盡。麗本は書に作る。今宋・元・明三本に從ひて盡に作る。

し、遙かに如來を瞻たてまつりて、情喜内に發す。五體、地に投じ、退きて一面に坐す。本心の旨を緣察し、法要を旨說す。五百の梵志、阿那含を得 便はち沙門と作り、美音の宗等、法眼を逮得せり。

諸の比丘、佛に白さく、『五百の梵志及び諸の長者、道を得る、何ぞ速かなる』と。

世尊、告げて曰はく、『過去、遠からずして、時に世に佛有り、號して迦葉と名く。衆の爲に法を講じ、吾の當に來るべきを說く。今の諸の梵志は、彼の佛前に於て、願樂して當來の[三一]釋迦文佛を見んと欲す。是の諸の長者も、亦、同じく斯く願へり。是の因緣に從ひて、吾を見るや便はち解せり』と。

比丘、歡喜して、盡く受けて奉行す。

美音の心念、世尊を請ぜんと欲す。佛、其の念を知りて、之に告げて曰はく、『彼に精舍無くば、汝が願は遂げず』と。

美音、悅び解して、喜びて前みて佛に白さく、『我に別宅有り。願はくば精舍と爲さん。唯、哀んで救を垂れ、群生を濟度したまへ』と。國に退き還らんことを乞ひ、所供を修備し、頭面に足を接し、禮し畢りて去る。

本起該容品第八

爾の時に、如來、比丘僧千二百五十人と倶に、舍衞の祇洹より、拘藍尼國、美音の精廬に遊びたまふ。足、門閫を蹈みたまふや、天地震動し、珠璣の樂器、鼓たざるに自ら鳴る。蠱毒、隱伏して、吉瑞、和淸なり。爾の日に當りて、境界の人民、世尊を驚肅、渇仰せざる靡し。

是の時の國王、名を[三二]優塡と曰ふ。強暴侵剋、佞言を開納し、女樂に躭荒し、疑網、自ら沈む。

【三一】釋迦文佛。釋迦牟尼佛の訛略なり。

【三二】優塡(Udayana)。

と。

爾の時に樹神、頌を作りて曰はく、

『祠祀は禍根を種え、　日夜、枝條を長くす。　唐しき苦は身を敗るの本にして、　法齋は度世の仙たり』と。

梵志、[二五]偈を聞きて、迷、解して信受す。舍衞に旋還するに、路、一國に由る。拘藍尼と名く。國に長者有り。瞿師羅と字く。—晉には美音と言ふ。—人民敬愛して、言へば輒ち順承す。梵志衆等、往き造りて宿を求む。美音、問ひて曰はく、『[二六]道士、何より來り、[二七]今は之く所を欲するや』と。具に彼の澤の樹神の功德を陳ぶらく、『舍衞に詣り、[二八]孤獨氏に造りて法齋を攢採し、本志を冀ひ遂げんと欲す』と。

美音、喜躍し、『[二九]宿行の追ふ所、解を亘めて行かんと欲す』と。

明旦、宗室及び親愛する所に宣令すらく、『誰か能く共に行きて齋の指式を受けんものぞ』と。合して五百人、僉然として命に應ず。本願相引き、義に感じて嚴出す。行きて舍衞に詣る。未だ[三〇]祇洹に至らずして、道に須達、往きて佛所に造らんとするに、逢ひ過ぎて而も識らず。顧みて從者に問ふらく、『此れは何の大夫ぞ』と。

對へて曰ふ、『給孤獨氏なり』と。

梵志入衆等、喜びて追ひて曰ふ、『吾が願、成ぜり。人を求めて人を得たり』と。馳趣して相見、聲を同じくして歎じて曰はく、『久しく令懿を承り、注仰して心を虛しくせり。道訓、八關齋の法有りと聞く。故に遠く投托す。幸に示導を蒙らん』と。

須達、車を止めて答へて曰ふ、『吾に大師有り。號して如來・衆祐と曰ふ。人を度したまひて、近く祇洹に在したまふ。共俱に進み、世尊に造りて覲す可し』と。命を聞きて敬諾す。恭肅して度を盡

【二五】偈（gāthā）。字數を定めて四句を結びしものにて、頌と譯す。

【二六】道士。沙門のことなり。

【二七】今欲所之。今欲何之の誤か。

【二八】孤獨氏。給孤獨氏の略。

【二九】宿行。宿世の行業。

【三〇】祇洹（Jetavana）。祇園に同じ。

て行く。前みて梵志に逢ひ、請うて之を持たしむ。共に精舍に詣して、手自ら斟酌す。顧みて梵志に命ずらく、『汝、便はち斟酌せよ』と。飯し訖りて澡を行ひ、儼然として法を聽く。一切歡喜して、善と稱すること、無量なり。

梵志、暮に還り、齋を奉して飡はず。婦、怪みて問ふらく、『不審なり。何の恨ぞ』と。答へて曰ふ、『悉らず。吾、齋する故なるのみ』と。

婦、重ねて之を質す、『何より齋し來れるや』と。

梵志、答へて曰ふ、『給孤獨氏、園に於て佛に飯す。吾に請ひて往きて齋せしむ。齋は[二二]八關と名く』と。

其の婦、涙を流し、忿然として恚りて曰ふ、『君は遺則を毀る。禍、此に興らん。瞿曇は法を亂す。奚んぞ採納するに足らん』と。迫蹴して、已まず。便はち共俱に飯す。

梵志の壽算、夜半に終へ、舍多羅衞國に生じて、大澤樹神と作る。時に婆羅門等五百人有り。恒水三祠の神池に詣り、垢穢を沐浴し、[二三]神仙を希望せんと欲す。中道にして糧乏し。遙かに彼の樹を望みて、流泉有るを想ふ。馳せて樹下に趣くも、了に見る所無し。斯の澤に窮困し、飢渴委厄す。

樹神、人と現れ、梵志に問ひて曰ふ、『道士、那より來るぞ、今は若し[二四]行かんと欲するや』と。聲を同じうして答へて曰はく、『神池に詣りて澡浴し、仙を望まんと欲す。今日、飢渴す。幸に哀矜して濟ひたまへ』と。

樹神、即ち手を擧ぐれば、衆味流溢し、衆飯飽足す。神に詣して請ひて曰はく、『何等の功德にてか、此の巍巍を致すや』と。

神、梵志に答ふらく、『吾れ舍衞の給孤獨氏に因りて八關齋を持つも、婦の爲に敗られ、其の業を卒へず。來りて斯の澤に生じ、此の樹神と作る。若し、齋の法を終らば、福、應に天に生ずべし』

【二二】八關。即ち八齋戒を云ふなり。關は禁なり。殺盜等の八罪を禁閉して犯さしめざるの法なり。

【二三】神仙（Ṛṣi）。長壽不死の稱。

【二四】欲行。麗本は行耶に作る。今宋・元・明三本に從ひて、欲行に改む。

園監に報勅すらく、『吾、自ら戯言す。錢を遺るも受くる勿れ』と。二人、共に諍ふ。擧國の耆老、馳せ往きて諫止す。耆老、當を斷ず。『地價、已に決す。應に悔ゆるを得べからず』と。

國政は清平なり。祇、法に違はず、卽ち錢を布くを聽す。門の裏、周ねからず。祇、意に喜びて曰はく、『吾、還つて園を得たり』と。人を遣はして催督せしむ。

須達、自ら往きて、共に園觀に詣れば、思ふ所未だ周ねからず、意憤れて樂します。

祇曰はく、『國賢、若し悔いなば、便はち止めん』と。

答へて曰はく、『悔いず。伏藏を得て、地の直を畢らんを思ふのみ』と。

祇、心に惟ふらく、『佛は必ず是れ至尊なり。能く斯の人をして財を竭して恨まざらしむ。戴く可く仰ぐ可し。神妙なること玆の如し』と。

便はち須達に謂ふ、『復、錢を足す勿れ。餘地は樹に貿へ、共に精舍を立てん』と。

須達、卽ち曰はく、『善き哉。許諾すること』と。

便ち功夫を興す。僧房、坐具はり、床榻茵褥、世の妙を極む。幢幡を加へ施し、香汁、地に灑ぐ。備さに供具を辦じ、兼ねて重饌を餚す。衆の名香を燒き、遙かに跪きて佛に請ふらく、『唯、願はくば、如來、尊神を枉屈げたまへ』と。

是に於て、*衆祐、大比丘僧千二百五十人と俱に、舍衞國に遊び、須達の請に應じたまふ。威神、震動して、國內咸く喜ぶ。男女、大小、路に塡ちて出づ。給孤獨氏及び王の弟[一九]祇陀、前みて佛足を禮し、共に精舍に上る。佛、呪願を受けたまふ。故に[二〇]祇樹給孤獨園と曰ふ。

王の國に事有り、急に須達を召す。赴行して應に會すべし。事訖りて馳還し、[二一]齋を奉し恭を盡す。却つて步涉に從ふ。中路にして人有り。酪一瓶を奉らんとす。使する所無きを顧み、自ら提げ

＊ 衆祐。世尊の古譯。

【一九】祇陀(Jeta)。舍衞國波斯匿王の太子とするが普通なれ共、こゝでは弟とせり。

【二〇】祇樹給孤獨園。祇陀太子と給孤獨氏によりて佛に献ぜられたる園林の意。卽ち祇園精舍なり。

【二一】齋。upāsatha の譯。清淨の義、罪を懺する謂なり。

寂悦にして、彼の安を悦ぶ』と。

長者須達、是を說きたまふを聞く時、本の功徳に因りて、便はち淨意を發し、法眼を逮得して、三尊に歸命し、[一七]次いで五戒を受けて清信士と爲る。前みて佛に白して言さく、『唯、願はくは、如來、舍衞に臨眄し、教授する一時して、君民を濟度したまへ』と。

世尊、又、曰はく、『卿が姓字は何ぞや』と。

長者、跪き、對へて曰はく、『鄙の字は須達なり。孤老を侍養して衣食を供給す。國人、我を給孤獨氏と稱す』と。

佛、告げて曰はく、『彼に精舍有りて吾が衆を容るゝや、不や』と。

對へて曰はく、『未だ有らず』と。

長者須達、佛の聖旨を承けて前に進み、長跪して世尊に白さく、『余は能く精舍を興隆するに堪任す。唯、比丘の監臨して處當せんことを須つ』と。

顧みて舍利弗に勅したまはく、『竝び行きて營佐せよ』と。即ち教命を受け、禮を作して退く。

彼の舍衞に還り、周行して地を求むるに、唯、[一八]祇の園のみ好し。衆の果・流・泉ありて、奇鳥翔集す。地、夷かに、木、茂り、城を去ること又近し。因りて守に往きて請ふ。祇、了に賣るの意無し。之を求めて止まず。恚りて言ひて曰はく、『若し能く金錢を以て、集め布きて園を滿たさば、爾らば乃ち出さんのみ』と。

重ねて問ふらく、『審實に爾るや、不や』と。

祇、謂はく、『價高くして、子必ず及ばじ。戲言の決のみ。復、何ぞ疑んや』と。

須達、辭して還り、輩に載せて錢を送る。園監、聽さず。走りて大家に白す、『須達、錢を送る。內るゝや不やを審にせず』と。

【一七】次。麗本は諮に作る。今宋・元・明三本に從ひて、次に改む。

【一八】祇園。祇陀太子の所有たりしところにて、長者須達が之を賣收して祇園精舍を建てしところ。

を修め、道を履み、榮を忽にし、利を棄つ。義、[一一]眞人と曰ふ。凡て一千二百五十人有りて倶なり』と。

善溫、佛を稱ふる聲を聞きて擧身毛竪し、心の喜、胸に交る。逸豫して明くるを待つ。[一二]五情、内に騷ぎ、轉側して寐ねず。至誠感通し、中夜にして霍かに明らかなり。即便ち嚴出して方に城門に向ふ。城の左を顧見るに神の祠舍有り、名けて*濕波と曰ふ。過ぎ往き、跪きて拜し、禮し畢りて旋顧するに奄かに、便ち更冥し。善溫、惶恐して趣く所を知らず。此の變有りと雖も、心に猶佛を存し、其の至心を承けて、恐畏消除す。空中に聲ありて曰ふ、『善き哉、須達、心至れば乃ち爾り』と。

即ち空の聲に問ふらく、『是を何の神と爲すや』と。

便はち之に答へて曰はく、『吾は是れ子の親、摩因提なり』と。

問うて曰はく、『卿は何許に生るゝぞ。奚んすれぞ此の間なるや』と。

即ち答へて曰はく、『吾、昔、佛の神足の弟子、大目犍連に從ひて經法を說くを聞けり。此の福報に因りて[一三]第一天上に生るるを得しも、功德甚だ少くして、別に此を典らしむ。卿の至心を見て、來り相佐助けしなり。佛は至尊なり。擧足の中間、福祐量り難し。恨むらくは、吾、生存して佛を覩たてまつるを獲ざりしことを。今、見たてまつる所の如くんば、明かに[一四]眞諦を驗す』と。

天、大光を放ちて竹園を照らす。善溫、光を尋ねて遙かに如來を見たてまつれば、聞く所に踰えたり。前みて拜し却つて住し、微心に相を視たてまつりて、佛に問ふらく、『神尊、寧安なり耶』と。

佛、須達の爲に頌を作りて曰はく、

『憂無く、喜相無く、　心は虛、清淨にして安し。　已に能く生ずる所無く、[一五]諦を見て泥洹に入る。　覺正しく、　念、清明にして、[一六]已に五道の淵を度る。　恩愛の網は斷壞し、　永く

【一一】眞人。總じて阿羅漢を云ふ。

【一二】五情。眼耳等の五根なり。

【※】濕波(Śiva)。麗本には濕披に作る。今は三本に從ふ。

【一三】第一天。六欲天の第一、四大天王の住する所なるを以て、四王天と云ふ。

【一四】眞諦。聖知所見の眞實の理性。

【一五】諦。眞實不虛の義。

【一六】已。大正藏經は已に作る。今縮藏並に卍藏に從ひて、已に改む。

卷の下

須達品第七[一]

佛　本國より、比丘僧千二百五十人と倶に、[二]王舍國の竹園中に遊びたまふ。長者[三]伯勤、佛の降尊を承り、馳せて竹園に詣る。五心に足を禮し、逡巡し、恭ひて住す。心を整へて佛に白さく、『唯、願はくは、世尊よ、顧みて薄食に下りたまへ』と。

佛の法、默然は已に許可たり、長者、欣悦し、接足して退く。家に還りて膳を具へ、幢幡を莊嚴す。親自ら事を執りて、世の味を極む。

[四]舍衞の長者、名を須達と曰ふ―[五]晋には善溫と言ふ。―主人伯勤と未だ相見ずと雖も、每に信ごとに相聞し、行同じく德齊しく、遙かに揖して友たり。須達、事に因り[六]來りて此の國に至り、親を推して往きて造る。伯勤、[七]親しく自ら膳を供して、出づるを得べからず。須達、踟躕殊に久し。使を呼びて曰ふ、『吾、故らに、遠く至つて、以て不面を展す。虛心は昔に在り。[八]遲く所懷を散ずるや、不や。謂はく今日薄んせらるゝや、不や』と。

偶、*事訖りて乃ち出で、相揖して坐す、『不面は昔に在り。辱を屈して臨顧す。傾企の情、來趣を兼ぬる有り。明、大賓を請ふ。事を執ること[九]自ら逼る。是れ、乃ち心に滯りて敍せざらしむ』と。

善溫、問うて曰はく、『何をか大賓と謂ふぞ。是れ、婚姻・國の節會と爲すや』と。

答へて曰はく、『同志の卿、聞かずや。[一〇]白淨王の太子、山に入りて六年、道成じて佛と號し、威相明遠、神、明らかにして幽を燭らしたまふ。方身丈六、華色紫金にして明らかに世に耀き、法を吐き戒を陳べ、義に精しくして神に入る。所從の弟子は比丘僧と名く。靜に居し、身を正しくし、德

【一】須達(Sudatta)。舍衞國の長者にて、祇園精舍の施主なり。
【二】王舍國(Rājagṛha)。中印度にありし國。
【三】伯勤。宋・元・明三本は迦蘭陀に作る。伯勤は麗本に從ふ。
【四】舍衞(Srāvastī)。中印度に屬し、迦維羅衞國の西北にあり。波斯匿王の都城たり。
【五】晉言。譯者の言葉なり。
【六】來至此國。麗本は來行の二字に作る。今宋・元・明三本に從ひて、四字に改む。
【七】親自供膳。麗本には親供の二字に作る。今宋・元・明三本に從ひて、四字に改む。
【八】遲。麗本は馳に作る。今宋元明三本に從ひて、遲と改む。
＊偶の下、麗本に、迦蘭迦の三字あり。
【九】自逼。宋・元・明三本は自逼の次に不暇得出の四字あり。麗本は之を缺く。
【一〇】白淨王太子。白淨王は迦維羅衞城主卽ち釋尊の父にて、白淨王太子は釋尊を指す。

佛、目連に勅したまはく、『汝が[二六]道力を現ぜよ』と。目連、教を受け、虚空に飛升して出沒すること七反、身より水火を出し、上より來下す。前みて佛足を禮し、却つて左に侍す。

父王、變を見て、心意解悦し、恩愛斷滅して、敬心、内に發す。前み起ちて佛を禮すらく、『甚だ善きかな。世尊よ。弟子の功德、猶尙乃ち爾り。如來の威德、度量す可きこと難し』と。便はち無上正眞の道意を發せり。

是の時、父王、每に佛所に詣し、迦葉等千人の形體の至陋なるを見て、每に心不平なり。『此等の比丘は、復、心、精なりと雖も、容貌に表るゝ無し。宗室の無爲を樂ふものに勸めて、沙門と作らんには、擇びて端政を取らしむべし』。即ち宗室に令す、『明日、殿に會せよ』と。令を受けて即ち到る。王、宗室に告げて曰ふ、[二七]『阿夷、相して言へり、「佛、出家せざらば當に聖王と作りて、四天下に君たるべし、左右侍從、率ひるに當に端政なるべし」と。今、諸の弟子の類、姿の觀る無し。今、道儀・容足有る者を禮娉して、僧の數を充備し、世尊を光暉せんと欲す』と。

咸く言ふ、『大いに善し』と。令を聽きて歡喜し、退きて、嚴辦せんを乞ひ、七日にして乃ち行く。調達、[二八]便はち行く者に告ぐらく、『吾等、王者の子弟、今は世の榮を棄て、出家して道に居る』と。服飾を整頓すること世の妙を極め、象馬車乘、價萬金に直る。其の日、嚴出す。觀る者、路に塡つ。調達が冠幘、自然に地に墮ち、[二九]衢和離の身、所乘の象馬は、四脚地に布きて鳥鳴を作す。相互に占ひて曰ふ、『餘は皆道を得たり。二人は不吉なり』と。俱に佛所に詣し、悉く沙門と作る。剛强も降伏し、樂受せざる莫し。

【二六】道力。道を得れば道に由りて發する無畏の道力。

【二七】阿夷。悉多太子を相せし阿私陀仙人。Asita

【二八】便告行者。或は便告行矣の誤ならんか。

【二九】衢和離。提婆の隨一の弟子 Kokalika ならん、然らば和は伽の誤なるべし。

を洗ふ』と。
『道藏は浴池爲(た)り。　正水、其の淵に滿てり。　浴し已りて、[二二一]三毒盡く。　三達して、快きこと
無雙なり』と。
是に於て、父王、佛及び僧を請じて、王園に詣らしめ、永く精舍と爲す。佛、王の意を受けて便ち精舍に入り、[二二二]尼拘類の樹下に坐して、廣く敎法を說きたまひ、七日・懈らず、聽く者、歡喜はす。中に[二二三]大乘を發す者有り、[二二四]辟支佛の行を樂ふ者有り、羅漢の意を發す者有り、沙門と作る者有り、各、心發に隨ひて、如行に得る所なり。
城内の母人、各、善念を生じ、悲泣して自ら責む『世尊、國に還りたまふ。男子、福德ありて、獨り佛を見たてまつるを得るに、我等、罪蔽あり、法味を服せずして、何ぞ苦しむこと是の如き』と。
佛、母人一切の心念を知りて、讃じて言はく『善き哉。乃ち好心を生じて、法を聞かんことを願樂す。眞に苦を度するを得ん』と。
佛、便はち王に語りたまはく『法興は値ひ難し、道敎は得難し。國内の諸母人の輩、法を聞かんと樂ふ者に勅して、出でて聽受せしむ可し』と。
王、即ち宣令すらく『佛を見たてまつらんと欲する者は聽けよ』と。
城内の母人、咸(みな)喜びて倶に出で、佛に詣して禮拜し、訖りて却つて住す。是に於て、世尊、應の如く說法す。各各解了し、法眼を逮得す。王及び臣民、歡喜して佛を禮し、而して退く。
是の時、諸の比丘、佛に白して言さく『舍夷の國内、男女・長幼、佛の說法を聞きて、心の所念の如く、各、其の決を得たり。父王、倶に聽くも、得る所を記せず』と。
佛、比丘に告げたまはく『父王の恩愛、未だ息まず。父王、相待つに、敬心未だ全からず。是の故に得ざるなり』と。明旦、如來、唯、[二二五]目連のみを將ゐて王宮に往詣し、殿に上りて坐したまふ。

【二二一】三毒。貪・瞋・痴の三煩惱。
【二二二】尼拘類(Nyagrodha)。下に成長する樹の意にて、即ち榕樹なり。
【二二三】大乘 Mahāyāna。灰身滅智の空寂の涅槃を求むる小乘に對し、一切智を開かしむる教を大乘と云ふ。
【二二四】辟支佛 Pratyeka-buddha。獨覺と譯す。十二因緣の理を觀じ、或は飛花落葉を觀じて斷惑證理す。
【二二五】目連。目犍連の略稱。

と。

是に於て、父王、偈を以て佛に問ふらく、

『子、本、吾が家に在るや、象の寶車と名くるに駕したり。今は、足、地を蹈む。是の苦、安んぞ堪ふ可き』と。

爾の時、世尊、偈を以て答へて曰はく、

『車馬は生死の乘なり。危嶮にして安んぞ久しかる可き。五通[二〇九]の參駕、馳するや、至る所、限礙する無し』と。

『本、七寶の衣を著け、珍妙にして雅好なりき。頭を剃りて納服を被る。如何ぞ、羞恥せざる』と。

『慚愧をもつて衣服と爲す。世の衣は塵垢を增す。法衣は眞人の服にして、息心、如來と名く』と。

『本、金銀の器を用ひ、衆味甚だ香美なりき。今は食を行乞す。麁惡にして何ぞ咽む可き』と。

『法味は道食爲り。飢渴、今は已に除こる。世を哀れむ故に行乞し、鉢を持して衆生を福す』と。

『本、別宮の中に處しては、衆の宮伎侍衛せり。獨り山樹の間に在りて、如何ぞ恐懼せざらん』と。

『生死の恐畏は除かれ、今は已に本無に入る。憂無く、喜想無し。止る所を道場[二一〇]と名く』と。

『本、我が家に在る時、澡浴には名香の汁あり。山樹の間に處しては、何物をもつてか身垢

【二〇九】五通。天眼等の五種の神通力。

【二一〇】道場 Bodhi-maṇḍa。佛道修行の區界。

況んや我が說く所、億の一にだも及ばず。唯、佛と佛のみ、其の德、乃し彰かなり』と。
王、言はく、『[二〇四]善き哉。佛、當に來るべきや、不や。何の日にか能く至らん』と。
憂陀、白して言はく『七日にして當に至るべし』と。
王、大いに歡喜し、即ち群臣に勅すらく『吾れ當に佛を迎ふべし。導從鹵簿、壹に聖王出入の法則に准ぜよ』と。
道路を平治し、香汁を地に灑ぎ、城中の街巷、盡く[二〇五]幢幡を竪て、其の修治する所、光色盡く宜しく、車馬・人從をもつて四十里を限る。
其の日、世尊、竹園を起ちたまひ、比丘僧、千二百五十人と倶なり。威神感動して諸天侍從す。始め舍夷に入るに、路、一水に由る。阿樓那と名く。水を度りて岸に上る。神通、照察して、深く[二〇六]調達の惡心內に興り、必ず開化し難きを知りたまふ。當に神足を現じて其れをして信伏せしむべし。即ち虛空に升り、地を去ること七仞なり。足、地を蹈むが若きも、其の實は空に在り。
佛、比丘に告げたまはく『彼の車馬を見よ。五色嚴麗にして、正に天帝の出で遊觀するの時に似たり』と。
爾の時、衆人、佛及び僧の其の地を步むを見る。仰いで足跡を觀るに空中に處在す。上より稍下りて、正に迎次に至りて人頭と齊し。剛强も靡伏し、[二〇七]歸命[二〇八]和南す。唯、調達のみ有りて獨り惡念を興し『子、行きて道を學し、但、幻術を作して人を惑はすこと是の如し。吾、亦、當に復術を作し、廣く衆人を化すべし』と。
是に於て、父王、遙かに佛の來れるを見て、愛敬交至る。一は道を敬し、二は子を愛す。即ち象車より下り、劍を解き蓋を却り、涕涙して佛に趣く。頭首に足を禮し、頌をもつて讃じて曰く、
『生るゝ時は福德に緣り、　瑞應三十二あり。
樹、傾き、敬ひて稽首せり。　道成ず、今、三禮す』

【二〇四】善哉。我意に適へるを稱揚讚美する辭。梵語の娑度(sādhu)の譯。
【二〇五】幢幡。幢は馱縛若(dhvaja)の譯。幡は波吒迦(patāka)の譯なり。共に旌旗の屬なり。
【二〇六】調達 Devadatta。釋尊の從弟にして、初に佛弟子となりしが、後に之に叛けり。
【二〇七】歸命(Namas)。心を傾むけて歸順すること。
【二〇八】和南(Vandana)。稽首又は敬禮。

騎乘に充てたり。今出づる處、何の駕乘する所ぞ』と。

憂陀、王に答ふらく、『四諦の神足をもつて、參駕飛行す』と。

王、憂陀に問ふらく、『吾が子、行觀には、幢麾、羽翮[二〇一]、以て光飾と爲せり。今、幖幟、復、何物か有る』と。

憂陀、答へて曰はく、『四恩[二〇二]の慈悲、廣く群生を飾る』と。

王、憂陀に問ふらく、『悉達、出づる每に、鐘を椎き鼓を鳴らし、觀る者、路に塡ちたり。今、遊止せんに、何の音響か有る』と。

憂陀、王に答ふらく、『佛、始めて道を得たまふや、波羅奈國に往詣し、甘露の法鼓を撃ちたまふ。拘憐ら五人、羅漢を逮得し、八萬の諸天皆道迹に入る。九十六種、欣伏せざる靡く、無上の法音、三千大千世界に聞ゆ』と。

王、憂陀に問ふらく、『悉達、今、何の國を領せんと欲するか』と。

憂陀、王に答ふらく、『世尊の所領は稱道す可からず。敎を衆生に授け、度を蒙らざる無く、心を等しくして普ねく濟ひ、適く處の所無し』と。

王、憂陀に問ふらく、『吾が子、國に在りて正治を思陳し、吾を助けて民を安んじ、動くごとに禮節に順じ、風を承けざるもの無し。今、獨處して何等をか思憶するや』と。

憂陀、王に答ふらく、『世尊、空[二〇三]を惟ふ。苦樂は眞に非ず、有は盡に歸す。神靜無爲なり』と。

王、是を聞きて言はく、『災なるかな、悉達。一切は皆有なり。汝、何ぞ無と言ふや。反せり。悉達は人と歸を爲す』と。

憂陀、王に白さく、『正に智人をして天下を滿たし、人ごとに百頭有り、頭ごとに百舌有り、舌ごとに百義を解し、此の人の數を合して如來を稱讃せしめんに、竟劫を彌盡するも、其の德を宣べず。

【二〇一】羽翮。宋元明三本は羽葆に作る。羽翮は麗本に從ふ。

【二〇二】四恩。こゝは父母の恩・衆生の恩・國王の恩・三寶の恩にあらずして、慈悲喜護の四等なるべし。

【二〇三】空。因緣所生の法、究竟して實體なきを空と云ふ。

る所、復、何物か有る』と。

憂陀、答へて曰はく、『時に至れば鉢を持し、往きて衆生を福す。食は麁細と無く、施家に呪願す』と。

王、是の語を聞きて、卽ち復涙を流す。

王、憂陀に問ふらく、『悉達の眠れる時、吾れ覺めしめんと欲すれば、琴を彈きて絃歌し、然る後、乃ち覺めたり。今、深山に在りては、何を用つて覺むる乎』と。

憂陀、王に答ふらく、『如來の三昧には、晝夜有ること無し』と。

王、憂陀に問ふらく、『吾が子、宮に在りては、若し其の澡浴には八種の香汁あり。若し今、澡浴せんに、皆、何物か有る』と。

憂陀、王に答ふらく、『八解の正水、以て心垢を洗ふ』と。

王、憂陀に問ふらく、『悉達、國に在りては、栴檀、蘇合、以て子の身に塗れり。今は道の爲にす。何物か有りと爲す』と。

憂陀、王に答ふらく、『[一九七]戒・定・慧の品[一九八]、香、[一九九]八種を薰ず』と。

王、憂陀に問ふらく、『悉達、家に在るや、吾、爲に床を作り、精實四種あり。今、坐する所、何物を用つて作れるか』と。

憂陀、答へて曰はく、『[二〇〇]四禪を床と爲し、心を息めて欲無し』と。

王、憂陀に問ふらく、『吾が子、宮に在るや、士衆衞侍せり。今、侍從、復、何人か有る』と。

憂陀、王に答ふらく、『道を學ぶの弟子、比丘僧と名く。世尊に翼從するもの、凡て一千二百五十人有りて倶なり』と。

王、憂陀に問ふらく、『悉達、家に在るや、若し其の出遊には、車、四品有り、牛・羊・象・馬、以て

【一九七】戒定慧。戒とは身の惡を妨ぐこと、定とは心の散亂を靜むること、慧とは惑を去り理を證ること。この三つを三學と云ふ。

【一九八】品。梵語の跋渠(Varga)。品類の義なり。

【一九九】八種。麗本は八難に作る。今宋元明三本に從ひて、八種と改む。

【二〇〇】四禪(Catvāri-dhyānāni)。當時一般に行はれたる四種の禪那。初・二・三・四に區別せらる。

是に於て、憂陀耶、還つて[一九三]舍夷に還り至り、宮に詣りて通を求む。門監、[一九四]即ち白さく、『憂陀、使して還り、門に在りて見えんことを求む』と。

王、推問せしめ、『吾、憂陀を望むこと、渴の飲を欲するが如し。何が故に稽停して、方に白して通を求むるや』と。坐者を推應して、反覆三たびに至る。然る後、乃ち前む。王、憂陀を見るに已に、法服を受けたり。而して憂陀に問ふらく、『卿、沙門と作るや』と。

憂陀、答へて曰く、『以て佛法に服せり』と。

王、憂陀に問ふらく、『悉達、宮に在るや、卿とのみ獨り親み、入出周旋、關白する所無し。今、使して來還し、何ぞ自ら外より門に詣りて、通を求むるを得んや』と。

憂陀、王に答ふらく、『佛、比丘に敎へたまふ、[一九五]白衣に親み、家居を戀すること莫かれ。道俗異る故に』と。

王、憂陀に問ふらく、『吾が子、宮に在りては衣服極好なりき。今は道の爲に、著る所は何の衣ぞ』と。

憂陀、衣を指して、『服する所、此の如し』と。

王、即ち淚を墮して曰ふ、『悉達、家に在りては、吾、爲に宮を作り、[一九六]七寶の刻鏤、世の珍妙を極めたり。今の屋室に於て、我が許のと如何ん』と。

憂陀、王に答ふらく、『常に樹下に處りたまふ。諸佛世尊の道法は皆爾り』と。

王、憂陀に問ふらく、『吾が子、宮に在りては、茵蓐綩綖として、錦繡細軟なり。今は坐する所の具、皆、何等か有る』と。

憂陀、王に答ふらく、『坐する所は草を用ひ、淸素、貪を除く』と。

王、憂陀に問ふらく、『悉達、家に在りては、吾、爲に厨を作り、甘肥、衆美なりき。今、飯食す

【一九三】舍夷 Sâkya の女姓 Sâki ならん。釋迦牟尼佛五姓の一とせらる。族姓はそのまゝ釋迦族の居住せし國土の稱に用ゐらる。

【一九四】即白。麗本は白曰に作り、宋元明三本は即白に作る。今後者に從ふ。

【一九五】白衣。俗人の別稱なり。

【一九六】七寶 Sapta ratna。金・銀・瑠璃・玻瓈・硨磲・赤珠・碼碯の七種の寶玉を云ふ。經に依りて、多少の異說あり。

是に於て如來、將に舍夷に歸らんとしたまふ。大比丘僧、皆、應眞を得たり。神靜、通徹、明かに三世衆生の行の源を曉れり。賢者舍利弗・大目揵連・鬱俾迦葉・那提迦葉・伽耶迦葉等、一千二百五十人なり。是の時に[一九一]迦維維越王[一九二]閱頭檀、梵志憂陀耶を遣はし、竹園に來詣して、國に還らんことを佛に請ふ。

爾の時に憂陀耶、佛の相好、明らかに天地を暉らすを見たてまつりて、五情、實に喜ぶ。頭腦に足を禮し、却つて一面に住す。心意齊整、長跪して佛に白さく、『父王、遠く悉達に謝し、「汝の道、成じ、復、一切を度すと聞く。我、獨り蒙らず。本要もて當に還るべし。今、故らに使を遣はす」』と。

佛、憂陀に問ひたまはく、『父王、起居、安きや、不や』と。

憂陀、佛に白さく、『大王は恙無し。唯、世尊を思ふのみ』と。

佛、憂陀に告げたまはく、『此の道を樂ふや、不や』と。

憂陀、對へて曰さく、『甚だ樂ふ。世尊よ』と。

佛、憂陀に授け、沙門と爲らしめ、其の法戒を授けたまふ。

憂陀、自ら念ずらく、『今、弟子と爲らば復還るに緣無し。王は消息を須ちたまふ。誰に因りてか報命せん』と。

佛、憂陀の心念を知りて、還り行かんと欲したまふ。憂陀、世業に親み、故家に戀著する莫し。

憂陀、佛に白さく、『佛、當に舍夷國に還至すべきや、不や』と。

佛、言はく、『當に還るべし』と。

憂陀、勅を受け、退き跪きて佛に白さく、『不審なり。何の日にか當に至るべき』と。

佛、憂陀に告げたまはく、『却後七日にして、必ず舍夷に至らん』と。憂陀、歡喜し、佛を禮して去る。

【一九一】迦維羅越(Kapilavastu)。釋迦族の領土。
【一九二】閱頭檀(Śuddhodana)。即ち佛の父なり。

かんとす』と。

門徒、對へて曰ふ、『今、視聽を得る、是れ大師の恩なり。大人宗仰して、命を承けて踊逸し、甘露を貪羨す。願はくば下風に從はん』と。師徒、志合せり。卽ち所止を出で、往いて竹園に詣す。時に世尊、諸の比丘に告げたまはく、『今、二賢有り、諸の弟子を從へて、本願行に乘じて、沙門と作らんと欲す。其の功を勸成するは、纇陸の力なり』と。比丘、敎を承け、其の衆を延望す。優波替・拘律陀等、遙かに如來の相好、暉光なるを見たてまつり、神動じ、情震ひ、自ら惟ひて、歎じて曰ふ、『幸なる哉、余、生れて淸誨を奉ずるを得たり。其の榮、云ひ難し』と。延きて趣き、前み坐し、頭面に佛を禮し、禮し畢りて喜歡し、重ねて喜ぶこと無量なり。斯れ須く乃ち進むべしとて、其に情を陳べて言ふ、『替等の罪弊、流に隨ひて淵に入る。始めて今日に於て、俗に反して源を極む。願はくは接納を蒙りて、僧次に充つるを得んことを』と。卽便はち許可せられて、頭髮、自ら落ち、皆、沙門と成れり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『此の二人は、古佛に於て、吾が道の成ずるを待ちて、左右に侍衞せんことを願へり』と。

佛、謂ひたまはく、『憂波替は高世の號、花さいて實のらず。復、汝か本字は舍利弗爲り。拘律陀、還つて大目揵連と字けよ』と。本に因りて法を說きたまふ。羅漢を逮得せり。

佛、侍者に勅したまはく、『古の千比丘、暮に當に結戒すべし。他に行くことを得ざれ。卽夜、籌數を行ひて、千二百五十人を得たり』と。佛、結戒し竟り、比丘、歡喜し、肅然たらざる莫く、佛を禮して退く。

還至父國品第六

覩せざるを見る。『何の所の法像にか、服を被り、俗を改むるか。須く至るべし。當に問ふべし』と。
二人倶に前み、中路に相逢ふ。便ち頞陛に問ふらく、『章服、常に反す。何の所よりか出づる。豈、師宗の聞くを得可き有るか』と。

時に頞陛、頌を以て答へて曰はく、

『我、年、既に幼稚にして、　學ぶの日も又初めて淺し。　豈、能く、至眞なる如來の廣大義を宣べんや。　一切諸法の本は、　因緣、空にして主無し。　心を息めて本源に達す。　故に號して沙門と爲す』と。

憂波替、方に法義を聞き、至理を尋思し、自ら惟ひて曰ふ、『吾、小にして學を好み、八歳にして師に從ふ。年、十六に至りて、古仙の道術、書として綜べざる靡し。[一八九]十六の大國、吾が廣博なる、未だ曾つて斯の眞要の義を聞かずと謂へり。今、偶々出遊して、此の寶藏に遇ふ。此の言の妙なる、甘露よりも美なり』と。心、寤め、意、解し、便はち法眼に逮び、精舍に旋還して、欣悦無量なり。

拘律陀、彼の容悦を見て、甘露を得たるを疑ふ。卽ち優波替に問ふらく、『甘露を得たる[一九〇]や。本要に違ふ勿れ、少少、惠及せよ』と。

優波替、具さに拘律陀に向ひて、聞く所の偈を說く。一たび聞きて解せず、再び說きて乃ち了す。尋思反覆して、亦、法眼を得たり。

二人、議りて曰ふ、『本、願ひし甘露、今、服し嘗むるを得たり。寧ろ共に大沙門の所に詣し、彼の海淵に就きて、沐浴清華す可し』と。議、合し、心、同じ。嚴辦して當に發すべし。

拘律陀、念じ曰ふ、『吾が師、終に望み、弟子を囑授して、吾をして濟を成さしむ。今、便はち委し棄つるは、義、安からざる所なり』と。便はち弟子に告ぐらく、『彼の大沙門に甘露の仙化有り。俗網を壞裂し、息心、寂行なり。吾、啓請して、徽を窮め、眞に反らんと欲す。汝、將に何にか趣

[一八九] 十六大國。佛在世にありし印度の大國。

[一九〇] 得耶。麗本は得那に作る。今宋元明三本に從ひて、耶をとる。

らしむるぞ。謂はざりき、長者に困せらるゝこと此の如き』と。

迦蘭陀、心に喜び『吾が願、遂げたり。佛聖、廣く我が心を覆照す』と。

即ち尼犍に答へて曰ふ『此れら諸の鬼子、强暴にして瞋を含み、必ず害を作さんことを懼る。委し去りて、更に其の安きを求むるには如かず』と。

尼犍、懟恨し、即日悉りて去る。長者、歡喜して、[一八二]精舍を修立す。僧房、坐具、衆嚴都べて畢りて、行きて樹王の祠處に詣り、佛及び僧を請ず。衆祐、施を受けて止頓する一時、大化の普濟、欣樂せざる靡し。

[一八三]舍利弗[一八四]大目揵連來學品第五

佛、羅閱祇の竹園精舍に在して、大比丘僧千人と倶なり。皆、[一八五]應眞を得たり。鬱俾羅等なり。彼に一卿有り。名を那羅陀と曰ふ。故より梵志有り。名を[一八六]沙然と曰ふ。仙行を精修し、來學を延納す。好仙の弟子、凡て二百五十人有り。門徒の中に二人有りて、高足、齊しくし難し。一は[一八七]優波替と名け、次は[一八八]拘律陀と名く。才明深遠にして、研精通微なり 沙然、病を得、自ら將に終らんとするを知りて、二賢に告ぐらく『此の諸の新學、志、道行に存す。卿、二人を累はす。必ず志を全くせしめよ』と。二人、敬諾し、教を受けて奉行す。

是の時、世尊、比丘頞陛に勅したまはく『汝、行きて宣化せよ。往けば必ず度有らん。見るべき所のもの、其の智明遠なり。如來を捨てて自り、能く與に論ずる無けん。若し與に相見れば、直ちに法本を說けよ。與に酬酢して、以て其の嗤を致す勿れ』と。頞陛、勅を受け、服を整へ、鉢を持し、佛を禮して行く。

時に優波替、諸の弟子を從へて、相隨ひて遊觀す。遙かに、頞陛の威儀庠雅にして、未だ曾て聞

【一八二】精舍。佛堂。

【一八三】舍利弗(Śāriputra)。佛十大弟子の隨一、智慧第一と稱せらる。

【一八四】大目揵連(Maudgalyāyana)。佛十大弟子の一、神通第一と稱せらる。

【一八五】應眞。阿羅漢の舊譯。人天の供養を受くべき眞人。

【一八六】沙然。麗本は妙然に作る。今宋元明三本に從ひて沙然に改む。Sañjaya

【一八七】優波替(Upatiṣya)。舍利弗の名。

【一八八】拘律陀(Kolita)、目揵連の異名。

て道位、次叙す』と。
佛、是を說きたまふ時、王及び國人、一萬二千、諸天八萬、皆、道跡を見る。佛、瓶沙に告げたまはく、『王、來りて已に久し。宮、遠し、早く還るべし。牛馬・人從、停住し勞疲す。後日に比びて、吾、當に城に詣るべし』と。
王、起ちて佛を禮し、戒を受けて退く。群臣・從官、喜びて前に戒を受く。王の群臣、五戒を受くるの時に當りて、內外の人馬、寂然として聲無し。諸の[一七六]婆羅門、感化して心伏し、皆、前に戒を受け、歡喜して退く。
王、車に升り已る。群臣、跪きて大王の功德、佛の出世に値ひ、幷に臣等をして沐浴清化せしむるを賀す。
瓶沙、宮に還り、宮內に勅して、齋を奉し、戒を持たしむ。國內一切、信解し、歡喜す。[一七七]忉利天帝の華、佛の上に散ず。時に坐の中に豪長の者有り。[一七八]迦蘭陀と名く。心中に念じて曰ふ『惜しむ可し、我が園、[一七九]尼犍に施與せしごとを。佛、當に先に至らば、佛及び僧に奉るべきに』と。前に施して永く爲に棄捐せるを悔恨し、長者の至心、臥すも席に安からず。先福、追逮せば、福德、應に全かるべし。大鬼將軍、名を半師と曰ふ。佛の神旨を承けて、其の心念を知り。即ち[一八〇]閱叉を召して、尼犍を推逐す。『裸形にして恥無きもの、應に此に止るべからず』と。鬼師、勅を奉じ、尼犍を搞打し、器物を拖拽す。
尼犍、驚き怖れ、馳走して言ふ『此れ何の惡人にして、暴害なること乃ち爾るや』と。鬼師、答へて曰ふ『長者迦蘭陀、當に[一八一]竹園を持つて、佛の精舍と作すべし。大鬼將軍半師、勅せられて汝輩を逐ふのみ』と。
明日、尼犍、共に長者に詣し、深く所以を責む。『何の故に施を改めて、吾等の類をして委頓を被

【一七六】婆羅門（Brāhmaṇa）。印度に於ける四姓中の最上位なる種族。
【一七七】忉利天（Trāyastriṃśat-deva）。欲界六天の第二。須彌山の頂上にありて、中央の大城には帝釋天止住す。
【一七八】迦蘭陀。Karaṇḍa
【一七九】尼犍（Nigrantha）。六師下道の第六。
【一八〇】閱叉（Yakṣa）。八部衆の一、羅刹と共に毘沙門天の眷屬となりて、北方を守護す。
【一八一】竹園。佛、こゝに久しく住し、國王の施をうけたまふ。

害すべからず、有道を誹謗すべからず。衆生の生死は、皆、恩愛に由る。父母、自ら言ふ、「是れ我が生む所にして、是れ我が子なり」と。子は父母の致す所に非ず、皆、是れ前世に戒を持つこと完具して、乃ち人と作るを得たるなり。惡行を爲せば、死して、[一七一]地獄・畜生・餓鬼に墮す。自ら行從り致し、他由り生ぜず、罪福明正なり。王、甚だ之を思へ』と。

佛、王に告げて曰はく、『兒の胎中に在るや、若し盲聾有らば、母、豫ねて知るや、不や』と。

王、佛に答へて曰ふ、『實に豫ねて知らざるなり』と。

佛、言はく、『此れ兒の宿命の罪行、然らしむるなり。父母の過に非ず。兒の胎中に在るや、若し其れ聖明なるも、母、豫ねて知らず。皆、淸純を履行するに由る。父母の力に非ず。此の理、明驗なり。王、善く之を惟へ。世人、罪を得るに、其の行に三有り。口に言ひて人を傷け、身に行ひて暴害し、心は專ら妬嫉なり。能く此の三を[一七二]捨つれば、未だ便はち泥洹を得ずと雖も、天上人中、豪貴自由なり。人の本を原ぬれば、[一七三]癡より形有り、形より情を生じ、情より識を生じ、識より欲を生じ、欲より父子有り、父子より恩愛を生じ、恩愛より憂悲を生じ、五道に展轉して休止有ること無し。人、亦、生の從りて來れる所、死して趣向する所を知らず。其の根を識らずして、各、相字名して、是れ父、是れ子と言ふ。唯、得道者のみ、乃ち其の原、生死の因緣は、本、癡より起るを知る。一切は無常なり。大王、受持せよ』と。

佛、瓶沙に告げたまはく、『若し國の善人、謹順・忠孝・廉貞・敬讓・才博・智遠にして、王法を犯さざれば、本、貴族に非ざるに、王、何ぞ異待する』と。

王、佛に答へて曰ふ、『姓名、顯達なれば、能を擇びて職を授く』と。

佛、大王に告げたまはく、『道法、親無し。唯、善、是れ輔く。五戒を成持するを淸信士と名く。精進直入して、見諦不迴なれば、便はち須陀洹・[一七四]斯陀含・[一七五]阿那含・阿羅漢を得。各、本心に因り

【一七一】地獄・畜生・餓鬼。罪惡に由りて果報を受くる苦惡の處、三惡道と云ふ。

【一七二】捨。麗本は撿に作る。今元明三本に從ひて、捨に改む。

【一七三】癡(Mūḍha)。諸の事理に迷惑する煩惱のこと。

【一七四】斯陀含(Sakṛdāgāmi)。小乘第二果。

【一七五】阿那含(Anāgāmi)。小乘第三果。

隨ふ莫れ。怒心に隨ふ莫れ。惡を息めて善ならしめ、[167]眞言を信守せよ。當に死の劇、[168]老病苦の劇を念ずべし。所行を思惟すれば、亦復、迦葉の神足を得べし。若し、眼に色を視ば、心に當に抑却すべし。好醜に不動ならん。耳に衆聲を聽かば、心に當に制持すべし。喜怒する所無からん。鼻に香臭を嗅がば、心に當に制伏すべし。情、著する所無からん。口に衆味を貪らば、心に當に秉持すべし。想、起る所無からん。身に著する所を更ば、心に當に制止すべし。識、[169]倚る可き無からん。五陰は外より來り、制するは心に由る。六情は主無し。陰、衰ふれば名無し。迦葉の功德は之を修して、便はち[170]得たり。人、生れて形を受くるや、憂・苦惱・飢渴・寒熱多し。愚は計して樂と爲すも、智士は是れ苦なりとす。妻子、利を營み、世人迷惑す。凡そ此の衆の事、分散せざる無く、千歲萬年にして、皆、磨滅に歸す』と。

佛、瓶沙の爲に、頌を作りて曰はく、

『夫れ、世間の將と爲りては、　正に順ひて阿枉せず、　矜導して禮儀を示す、　是の如きを法王と爲す。　慜み多くして、善く正を恕し、　仁愛にして人を利するを好み、　既に、利するに平均を以てせば、　是の如くにして、衆、附親す』と。

佛、瓶沙に告げたまはく、『王、宮舍を作りてより來た幾歲ぞ』と。

王、顧みて傍臣に問ふ。傍臣、對へて曰く、『宮舍を造起して七八百年なり』と。

佛、諸臣に問ひたまはく、『凡て幾王を更るぞ』と。

臣、即ち對へて曰はく、『二十餘王なり』と。

佛、瓶沙に問ひたまはく、『皆、諸王を識るや、不や』と。

瓶沙、答へて曰はく、『唯、我が父を識るのみにして、先人を識らず』と。

佛、瓶沙に告げたまはく、『但、地のみ常有りて、人は無常なり。人、自ら身を愛すれば、命を殺

【一六七】眞言。諸佛、菩薩の本誓を示せる言葉。
【一六八】老。麗本は者に作る。今宋元明三本に從ひて、老に改む。
【一六九】可倚。麗本は椅可に作り、宋本は可椅に作る。今元明二本に從ひて、可倚と改む。
【一七〇】得。麗本は是に作る。今宋元明三本に從ひて、得に改む。

無ければ、道、終に成ぜず』と。

迦葉、佛に白さく、『我、前に、火に事へて晝夜懈らず、勤苦して年を積む。好術の弟子、凡そ五百人有り。精鋭にして火を燃やし、寒暑を避けず。年、耆いて、根、熟するも、永く髣髴たる無し。先人、惑を傳へ、以て後生に授け、自ら是れ道なりと稱するも、唐しく苦しみて報無し。今、佛の教を得、心垢を洗浣して、已に羅漢を得たり』と。

佛、迦葉に告げたまはく、『汝が羅漢の神足を現ぜよ』と。

迦葉、勅を受け、即ち靜定に入る。身、虛空に升り、地を去ること數丈、腰より以上は火にして、腰以下は水なり。更に腰より以上は水にして、腰以下は火なり。水を以て火を雨らし、衣、燥きて軟かならず。空に住して變を現じ、出沒すること七反、身より光を出し、五色赫奕たり。飛びて東より來り、佛坐の前に沒す。四方上下の化現も亦爾り。變畢りて叉手し、長跪して佛に白さく、『弟子迦葉、佛の慈恩を蒙り、罪縛を解脫せり。如來は特尊にして、三界頂受す』と。

佛、迦葉の爲に、頌を作りて曰はく、

[一六六]『若し、人壽百歲、　火を奉じて異術を修するも、　正諦を尊びて、其の明　一切を照すに如かず。

若し、人壽百歲、　邪志・不善を學するも、　生る一日、　精進して正法を受くるに如かず』

と。

王及び群臣、乃ち迦葉の是れ佛弟子なるを知る。佛、瓶沙に告げたまはく、『天下の人の眼、但、色のみを視るにあらず。苦樂は無常なり。身は久しきを得ず。天下の人の意、惡多く、善少し。思想は萬端にして、欲に趣き意を快くす。能く此の志を棄つれば、亦、道を得て、功、迦葉に齊しかるべし。豪貴を以て自ら其の情を恣にする無かれ。自在なるを以て婬を貪り、厭く無きこと無かれ。豪强を以て弱者を侵陵する無かれ。瞋怒を以て過無きものを殺す無かれ。婬心に隨ふ莫れ。貪心に

【一六六】若人……正法。この句は法句經にあり。

車に升り、宮を出て城に趣く。城門、自ら閉ち、車馬俱に躓く。王、甚だしく驚怖し、大災有らんを懼るらく、『吾が罪重し。而して斷の禍有り』と。

空中に聲ありて曰ふ、『王の宿願の人、今は繋がれて獄に在り。誓要相連る。是れ、門をして閉ぢしむるなり』と。

即便はち大赦して、囚人を解放す。門、霍かに自ら開けて、佛所に詣するを得たり。王、遙かに、如來の相好、光光たるを見たてまつり、即便はち車より下り、從を却ぞけ、劍を解く。佛、瓶沙の性、素より憍豪・剛强・貢高なるを知りたまひ、速かに王の從者の儀式を解化せしめんと欲したまふ。若し、王瓶沙は、從者を顧視するに、已に似て異ること無し。佛の識りたまはざることを懼れ、[一六三]頭面に足を禮し、右遶すること三匝、禮し畢りて自ら陳ずらく、『我は是れ摩竭陀王、瓶沙の身なり』と。是の如きこと三たびに至る。

佛、王に告げて曰はく、『吾、卿の心を照す。何ぞ但、卿の形をのみならん』と。

瓶沙、大いに喜び、即ち退きて坐に就く。群臣庶民、各、其の敬を盡す。中に禮を作す者あり、自ら字を名のる者あり、直ちに揖拜する者有り。禮し畢りて却つて住す。佛、命じて坐せしむ。敎を受けて席に就く。

佛、瓶沙に告げたまはく、『宿福ありて王と爲り、今、復、增益す。王の國界人民をして、忠孝、富樂、憂無くして福に護られ、德吉有りて、不利無からしめん』と。衆會、疑有り。[一六四]鬱俾迦葉は、名聲先に達す。今、佛と俱なり。誰か應に師と作るべき。佛、衆の念を察したまひ、便はち迦葉に告げたまはく、『其れ、殺生祠祀し、其の福を欲望する有り、寧ろ能く得るや不や。山中に入りて道を求むるに師無し、能く道を得るや不や』と。

迦葉、佛に白さく、『殺生祠祀は其の福を得ず。[一六五]天神は食はず、殺す者、罪を得。道を學ぶに師

【一六三】頭面禮足。印度にて古來行はれし敬禮法、頭頂を以て他の足を拜し、禮の至極を表す。

【一六四】鬱俾迦葉（Uruvilvā-kāśyapa）。三迦葉の長兄。

【一六五】天神。天上の諸神。

よ。心・意・識・行の因緣染著を、決正分部するを、名けて教授示現と曰ふ。又、說法示現有り。比丘、諦思せよ。[一五三]目、[一五四]色を愛するを衰と爲す。[一五五]六情の愛する所を衰と爲す。衰止まざれば便はち[一五六]苦生ず。何をか苦生ずと謂ふ。婬・怒・癡の火起りて、便はち痛痒有り。老・病・死の畏なり。是を說法示現と爲す』と。

佛の說法、三たび轉ず。時に千比丘[一五七]漏盡き、望斷じ、皆、阿羅漢を得たり。佛、比丘の爲に、頌を作りて曰はく、

『今、千の比丘、長老にして尊德有るが邪を改めて正見を修し　無想にして禪慧に入る』是の法を說きたまふ時、天・龍・鬼神・樂聞せざる莫し。

度[一五八]瓶沙王品第四

時に世尊、[一五九]羅閱祇に詣り、君民を度せんと欲したまふ。卽日、[一六〇]羅閱祇王、使者を遣はす。命を奉じて佛に詣し、敬を修し、恭を盡し、禮し畢りて陳べて言ふ『國主、瓶沙、稽首して前に坐す。近く、釋尊の道成じ、佛と號したまふを承る。[一六一]天人雜類、時に遇ふを慶賴す。伏して惟ふに、世尊、利を興するに康寧なり。願はくは覆育を垂れ、鄙國に照臨したまへ。――聖化に飢渴し、虛心、踊逸なり。――群庶を哀矜して、解脫を得せしめたまへ』と。

佛、比丘に勅したまはく、『汝等、速かに嚴しめよ、當に王の請に就くべし』と。

比丘、教を受け、嚴しめ畢りて翼け從ふ。使者、馳せて白さく、[一六二]『世尊、千比丘僧を將ゐて、今、須波羅致樹下に頓りたまふ。城を去ること四十里なり』と。

王、卽ち先王の遺令を案ずらく、『若し、佛、國に入らば、當に自ら出で迎ふべし。之を迎ふる者は福を得ること無量なり』と。卽便はち、勅して車千乘・馬萬匹・從人七千を嚴しめ、嚴しめ畢りて

【一五三】目。麗本は自に作る。今宋元明三本に從ひて目に改む。
【一五四】色(Rūpa)。心法に對する物質。
【一五五】六情。卽ち眼・耳・鼻・舌・身・意の六根なり。
【一五六】苦(Duḥkha)。身心逼惱すること。
【一五七】漏盡(Āsravakṣaya kṣīṇāsrava)。漏は煩惱。三乘の極果に至り理智を以て煩惱を斷盡したるを漏盡と云ふ。
【一五八】瓶沙(Bimbisāra)王。摩竭陀國王。
【一五九】羅閱祇(Rājagṛha)。摩竭陀國の首府王舍城。
【一六〇】羅閱祇王。卽ち瓶沙なり。
【一六一】天人。人界と天上界の有情。
【一六二】世尊。麗本には世尊の次に以願の二字あり。今宋元明三本に從びて之を除く。

迦葉は、裘褐・水瓶・杖・履、諸の火に事ふる具を、悉く水中に棄つ。是の時、迦葉の二弟、次は[一四七]那提迦葉と曰ひ、幼は[一四八]迦耶迦葉と曰ふ。各、二百五十の弟子有り。廬舍の止る處、水邊に列居す。諸梵志の衣被・[一四九]什物及び火に事ふる具、流に隨ひて漂ひ下るを見、二弟、驚愕して、兄及び諸弟子の、人の爲に害せられたるを恐れ、卽ち門徒を從へ、河に順ひて上る。兄、師徒の沙門と作れるを見て、怪しみて問ふて曰ふ、『大兄は年高、、智慧、明遠にして、國王・臣民の共に宗事する所なり。我れ、意に謂ひて、兄は羅漢を得たりと爲すに、反つし梵志の道を捨て、沙門の法を學ぶ。此れ、小事に非ず。佛道は、豈、尊くして、德、獨りのみ高からんや』と。

迦葉、答へて曰ふ、『佛道は最勝にして、其の法は無量なり。我れ世に學ぶと雖も、未だ曾つて、道を得て、神智、佛の如き者有らず』と。

二弟、此れを聞きて、各、弟子に謂ふ、『吾、兄に從はんと欲す。汝等、何にか趣く』と。

五百の弟子、倶に聲を發して言ふ、『願はくは、大師の如くせん』と。皆、卽ち稽首して沙門と作らんことを求む。

佛、言はく、『善來、比丘』と。皆、沙門と成る。

時に、如來、千比丘僧と、迦耶悉大叢樹下の坐に詣し、[一五〇]三昧に入りたまふ。忽然として現ぜず。東方より來りて樹下に沒す。四方も亦然り。踊りて虛空に住し、墮墜せず。身より水火を出して、升降自由なり。諸比丘、頭を仰ぎて、喜悅し、如來の還つて本の坐に處るを覺せず。覺する者有ること無し。

比丘、歡喜し、前みて佛足を禮し、席を退きて佛に白さく、『此の[一五一]示現は、名けて何等と曰ふや』と。

佛、比丘に告げたまはく、『是は名けて[一五二]神足の示現と曰ふ。又、敎授示現有り。比丘、諦聽せ

【一四七】那提迦葉(Nadīkāśyapa)。三迦葉の一、迦葉は姓、那提河の邊にて得道したれば、那提迦葉と云ふ。
【一四八】伽耶迦葉(Gayākāśyapa)。同じく三迦葉の一なり。
【一四九】什物。雜具。
【一五〇】三昧(Samādhi)。心を一境に住せしめて散亂せざるを云ふ。
【一五一】示現。佛・菩薩の機緣に應じて種々の身を現ずること。
【一五二】神足。五神通の一なる神足通なり。

念に應じて忽ち至る。迦葉、大いに喜びて、『適に相供養せんと念欲するに、來りたまふは何ぞ快なる耶。聞者、那にか行きたる。今、何從りか來れる』と。

佛、迦葉に告げたまはく『汝、心に念じて言ふ「佛の德は聖明なり。衆人、之を見れば、必ず我を阻棄せん。其れをして、七日、現ぜざらしむる、快なる乎」と。是の故に隱るゝのみ。汝、今は我を念ず。是の故に復來れり』と。

迦葉、心に念ずらく『佛は眞に至神なり。誠に人の念を知りたまふ』と。

佛、迦葉の心、已に降伏せるを知りたまひ、便はち、迦葉に告げたまはく『汝は羅漢に非ず、眞の道を知らず。何ぞ虛妄を爲して、自ら貴しと稱するや』と。

是に於て、迦葉、心驚き毛堅ち、自ら無道なるを知りて、即ち稽首して言さく『大道人は實に神聖なり。乃ち人の念を知りたまふ。寧ろ大道人の神化に從つて[一四五]經戒を稟受し、沙門と作るを得べき耶』と。

佛、言はく『大いに善し。汝の弟子に報ぜよ。卿は是れ國師にして今や法服に入る。豈、獨りのみ知る可けんや』と。

迦葉、教を受け、顧みて弟子に謂ふ『汝ら、聞、吾と共に神化を觀る。吾、始めて信解す。當に沙門と作るべし。汝等、何にか趣く』と。

五百の弟子、聲を同じくして對へて曰ふ『我等の知る所は皆大師の恩なり。師の尊信する所、願はくは、皆、隨從せん』と。

即時に、師徒、俱共に佛に詣し、[一四六]稽首して白して言さく『我等、皆、信の意有り。願はくは弟子と爲したまへ』と。

佛、言はく『善來、比丘』と。皆、沙門と成る。

【一四五】經戒。經義と戒行。

【一四六】稽首。梵の Vandana, 又は Vandi, 頭を下げて地に至るなり。

て吾が用に給す』と。

迦葉、復、念ずらく『瞿曇の神德、感動せざる莫し』と。

佛、後に、指地池に入りて澡浴し畢りて、當に出でんとしたまふに、攀持する所無し。池上に樹有り。名けて迦和と曰ふ。絶大、修好なり。其の樹、曲り下りて佛に就く。佛、牽きて池より出でたまふ。迦葉、樹の曲り下れるを見、怪しみて佛に問ふ。佛、迦葉に告げたまはく『吾、朝、池に入る。將に水より出でんと欲するに、樹神、枝を垂れ、吾をして牽きて出でしむ』と。

迦葉、復、念ずらく『是の大道人は、至德多く感じ、大樹、垂下す』と。

佛、迦葉をして必ず伏せしめんと欲したまひ、便はち泥蘭禪河に入る。其の水、深くして駛(はや)し。佛、[一四三]神力を以て、水を斷ちて、住(とど)まらしめ、高さ人の頭を出で、底をして塵を揚げしめ、佛、其の中を行きたまふ。迦葉、佛の水に入りたまふを見、其の沒溺せんことを恐る。即ち弟子を將て、船に乗り、佛を救ふ。水、[一四四]高く起りて、其の下に塵の揚るを見、佛を見たてまつりて大いに喜ぶらく『大道人、尚、活きたまへる耶』と。又、問ふらく『船に上らんと欲するや、不(いな)や』と。佛、言はく『當に上るべし』と。佛、念じたまはく『當に船底を貫きて入り、迹を漏るゝ無からしむべし』と。

迦葉、大いに驚き『是の大沙門は、妙化、名け難し』と。

時に摩竭陀國王の吏民、歲會の禮を以て迦葉に往詣して、相樂しむこと七日なり。迦葉、心に念ずらく『佛の德は聖明なり。衆人、見たてまつらば、必ず我を阻棄せん。其れをして、七日、現ぜざらしむる、快なる乎』と。

佛、其の意を知りたまひ、即ち隱るゝこと七日なり。

八日の旦(あした)に至りて、迦葉、又、念ずらく『今、餘祚有り。佛に供する、快なる耶』と。

【一四三】神力。不測の妙力、變の融通自在なるを云ふ。

【一四四】高。麗本は隔に作り、元明二本は褰に作る。今宋本に從ひて高に改む。

之を問ふこと三たびに至り、對へて曰ふ『燃えしめんと欲す』と。

佛、言はく『去る可し。火、當に燃ゆるべし』と。聲に應じて皆燃ゆ。

迦葉、復、念ずらく『是の大道人、至神なること乃ち爾り』と。

迦葉、自ら三火に事ふ。明旦、之を然やすに、又、滅す可からず。五百の弟子、及び、諸の事ふる者、助けて之を滅せんとするに、了に滅す可からず。佛の所作なるを疑ひ、便はち行きて佛に白さく『我れ自ら三火に事ふ。滅するを得可からず』と。

佛、言はく『滅せしめんと欲する乎』と。

曰はく『實に滅せしめんと欲す』と。

佛、言はく『火、當に滅す可し』と。聲に應じて卽ち滅す。

迦葉、念じて曰ふ『大道人は極神・至妙なり。所作、皆、諧ふ』と。

後日、迦葉の五百の弟子、適共に薪を破る。各各、斧を擧げて、皆、下すを得ず。慊しく行きて、師に白す。師、曰ふ「是れ大沙門の所爲なり』と。

卽ち行きて佛に白さく『我が諸の弟子、向に共に薪を破るに、斧、擧げて下すを得可からず』と。

佛、言はく『去る可し。斧、當に下るべし』と。卽ち下りて用ふるを得たり。

迦葉、念じて曰ふ『是の大沙門、神は則ち神たり』と。

後日、佛、樹下に還り、棄てたる幣衣を見て、之を浣がんと念欲したまふ。天帝釋、佛の聖旨を承けて、頞那山の上に到り、四方石一枚、六方石一枚を取りて、浣曬に給用す。迦葉、遊觀して、池邊の兩石を見、怪しみて佛に問ふらく『今、此の池邊の兩石、妙好なり。此れ、何より出づるか』と。

佛、迦葉に告げたまはく『吾、浣濯せんと欲し、及び當に衣を曬すべし。[四二]天帝、石を送り、以

【四二】天帝。天帝釋に同じ。

迦葉、念じて曰ふ、『大道人、神妙にして、功德無量なり』と。

後日、世尊、移りて迦葉に近づき、一樹の下に坐したまふ。夜、第一の[一三五]四天王、俱に下りて、佛の說法を聽く。四天の光影、明かなること盛火の如し。迦葉、夜、起きて、佛前に四火有るを見、淸旦、佛に問ふらく、『大道人も亦、火に事ふるや』と。

佛、言はく、『しからず。昨夜、四天王、來りて說法を聽く。是れ、其の光のみ』と。

迦葉、復、念ずらく、『是の大沙門は極神なり。乃ち此の天を致す。爾りと雖も、故、我が道の眞なるには如かず』と。

明日、[一三六]第二の天帝釋、夜、來りて法を聽く。帝釋の光明、四天に倍す。迦葉、夜、起きて、佛前の光を見、意に獨り念ずらく、『佛、故火に事ふるなり』と。

平旦、佛に問ふらく、『火に事ふる無きを得んや。明、昨夜に倍せり』と。

佛、曰はく、『帝釋、來下して[一三七]經法を聽受す。是れ、其の光のみ』と。

後夜、第七の[一三八]梵天、又、下りて法を聽く。[一三九]梵魔の光景、帝釋に倍す。迦葉、光を見て、佛の火に事ふるを疑ふ。晨朝、佛に問ふらく、『大道人は、必ず火に事ふるなり』と。

佛、迦葉に告げたまはく、『第七の梵天、昨夜、法を聽く。是れ、其の光のみ』と。

迦葉、自ら念ずらく、『是の大沙門、威神、感動して、[一四〇]天・[一四一]梵、下降す』と。

迦葉の五百の弟子、人ごとに三火に事ふ。凡て千五百火なり。明旦、之を燃やさんとするに、火、了に燃えず。怪しみて師に白す。師、曰ふ、『必ず是れ、佛の所爲ならん』と。馳せ往きて、佛に白さく、『我が五百の弟子、今朝、火を燃やさんとするに、了に肯て燃えず。是れ、佛の所爲乎』と。

佛、迦葉に告げたまはく、『燃えせしめんと欲するや、不や』と。

【一三五】四天王。欲界六天の第一たる四王天の主にして、須彌四洲の守護神なり。
【一三六】第二天帝釋。帝釋天の止住する忉利天は、欲界六天の第二に相當するなり。
【一三七】經法。佛の說法。
【一三八】梵天(Brahma)。色界初禪天の主なり。
【一三九】梵魔。梵王と魔王を以て欲界色界の諸天を代表す。
【一四〇】天(Deva)。人間以上の勝妙の果報を受くる所。
【一四一】梵。梵天のこと。

に、已に其の床に坐したまふ。

迦葉、佛に問ふらく、『何に緣りてか先に到る』と。

佛、言はく、『南行して此の美果を取る。用つて病を癒す可し』と。

佛、飯し、去りて後、迦葉、念ずらく、『此の大沙門は實に神にして、實に妙なり』と。

明日、迦葉、復、行きて佛を請ず。佛、言はく、『今、後に隨ひて到らん』と。

佛、西、[三〇]拘耶尼に適き、[三一]阿摩勒の果を取り、鉢に滿して還る。迦葉、未だ到らざるに已に其の床に坐したまふ。迦葉、佛に問ふらく、『復、何從り[三二]而てか來る』と。

答へて曰はく、『西、拘耶尼に詣り、阿摩勒の果を取る。汝、之を食す可し』と。

佛、飯し已りて去りたまふ。迦葉、復、念ずらく、『是の大沙門の作す所は實に神なり』と。

明日、迦葉、復、行きて佛を請ず。佛、言はく、『今、後に隨ひて到らん』と。

迦葉、反顧るに、忽ちにして佛を見ず。佛、已に北方の[三三]欝單曰に到り、自然の粳米を取る。迦葉、未だ至らざるに、已に其の床に坐したまふ。

迦葉、佛に問ふらく、『復、何從りか來れる』と。

佛、答へて曰はく、『北、欝單曰に適きて、此の粳米を取る。卿、之を食す可し』と。

佛、飯し、去りたまひて後、迦葉、獨り念ずらく、『此の大道人は神妙なること乃ち爾り』と。

明日、食時、佛、鉢を持して自ら其の家に到り、飯を取りて還る。食し已りて、口を澡漱がんと欲するも水無し。[三四]天の帝釋、即ち下りて、手を以て地を指し、自然に池と成し給ふ。迦葉、晡時、彷徉して池を見る。怪しみて佛に問ふらく、『何に緣りてか、此れ有る』と。

佛、迦葉に告げたまはく、『朝、汝の食を得て、漱せんと欲するに水無し。天帝、地を指して池と成し給ふ。用つて當に此の池を名けて、指地池と爲すべし』と。

【三〇】拘耶尼(Godāniya)。四大洲中、西大洲。
【三一】阿摩勒(Āmalaka)。
【三二】而。麗本は面に作る。今宋元明三本に從ひて而に改む。
【三三】欝單曰(Uttarakuru)。四大洲中の西大洲。
【三四】天帝釋(Śakra)。忉利天の主なり。

爲ん』と。身を踊らして火に赴くに、清涼、和調なり。還顧して師に曰さく、『瞿曇、恙無し。本、龍火と謂ひしは、定めて是れ佛光ならん』と。師徒搔擾す。側息にして明に達す。清旦、如來、鉢を持して室より出でたまふ。

迦葉、大いに喜びて曰ふ、『大道人、猶存せりや。器の中は何等ぞ』と。

佛、迦葉に告げたまはく、『所謂毒龍、已に降りて法を受く』と。

五百の弟子、僉く、佛は神なりと言ふ。迦葉、内に伏すれども、名稱を悋惜して、聊か復、貢高たり。『大道人は實に神たり。爾りと雖も、未だ我の已に[126]阿羅漢を得たるには如かざるなり』と。

迦葉、佛に白さく、『願はくは、大道人、留止まりたまへ。相供養せんと欲す』と。明旦、飯を作り、自ら行きて佛を請ず。

佛、言はく、『便はち去れ。今、後に隨ひて到らん』と。迦葉、適に還る。

佛、人の臂を屈伸するが如き頃に、東、[127]弗于逮に適く。數千里にして、樹の果、閻逼と名くるを取り、鉢に滿して還る。迦葉、未だ到らざるに、已に其の床に坐したまふ。

迦葉、佛に問ふらく、『大道人、何れの徑より來たまへる』と。

佛、言はく、『卿、去りて後、吾、東、弗于逮に到り、此の果、閻逼と名くるを取る。香、美にして食す可し』と。

佛、飯して去り已りて、迦葉、念じて曰はく、『大道人は神たりと雖も、故、我が道の眞なるには如かず』と。

明日、[128]食時、復、行きて佛を請ず。佛、曰はく、『去る可し。今、後に隨ひて到らん』と。迦葉、旋還す。

佛、南行して[129]閻浮提の界を極め、果、呵黎勒を取り、鉢に盛滿して還る。迦葉、未だ至らざる

【一二六】阿羅漢(Arhān)。小乘の悟を極めたる位。略して羅漢といふ。

【一二七】弗于逮(Pūrva-videha)四大洲の中の東大洲。

【一二八】食時。正食の時、即ち日午時。

【一二九】閻浮提(Jambu-dvīpa。)四大洲の中の南大洲。即ち吾人の住む所なり。

迦葉、答へて曰ふ、『實に愛する有らず。龍に害せられんを恐るゝのみ』と。

五百の弟子、屛營、悚息して、師の佛に許さんことを恐る。重ねて借ること三たびに滿ず。迦葉は惟疑ふのみ、意、甚だ違ふ無し。必ず禍されんことを懼るゝのみ。

佛、迦葉に告げたまはく、『[一二一]三界の[一二二]欲火、吾、已に之を滅せり。龍も吾を害せざるなり』と。

迦葉、答へて曰ふ、『瞿曇は德尊し。能く居るは意の隨なり』と。

卽ち威神を撿めて便はち其の室に入りたまふ。五百の弟子、龍の害を爲さんことを信じ、涕涙せざる莫し。『惜しむ可し、尊人、龍の爲に害せらる』と。

佛、坐したまふや、須臾にして、龍、窟より出で、毒を吐きつゝ佛を遶る。如來、毒を化して、皆、華爲らしむ。龍、其の毒の華と作りて佛を遶るを見て、怒りて盛に火を吐きて、能く害を爲さんと謂ふに熱氣、龍に歸りて、鬱悶、死せんと欲す。頭を擧げて佛を視たてまつり、相を見て尊きを知るや、涼風、龍に趣く。涼を尋ねて佛に詣れば火は滅し、毒は除かれ、歸命して、[一二三]鉢に入る。是に於て、如來、便はち火光を現じたまひ、炯然として天に概す。迦葉の弟子、直ちに起ちて瞻候し、佛の光明を見て、是れ龍の火なりと謂ひ、聲を擧げて悲呼すらく、『惜しむ可し、眞人、竟に龍殃を被る』と。迦葉師徒、驚きて共に奔り出づ。五百の弟子、聲を同じうして師を責むらく、『天地開闢より、未だ人類の妙なる[一二四]瞿曇の如きを見ず。尊む可く貴む可し。恨むらくは熟觀せざりしことを。何に緣りてか、復、見えん』と。涙を垂れて眼を抆ふ。頌を作りて曰はく、

『容顏、紫金に耀き、　面滿の髮は紺靑なり。　大人にして百の福德あり、　神妙、相經に應ず。
方身、立ちて丈六、　姿好、八十章あり。　頂光、幽昧を燭らす、　何ぞ[一二五]便はち忽ちにして
無常せる』と。

後より來れる弟子、火、佛を害せりと謂ひ、悲喚、哀慟す。『瞿曇、害せらる。我れ生きて何んか

【一二一】三界。欲界・色界・無色界、凡夫の生死往來する三つの世界。
【一二二】欲火。欲の熱情盛なるを火に譬ふ。
【一二三】鉢(Pātra)。比丘の飯器。
【一二四】瞿曇(Gautama)。釋尊の姓。
【一二五】便。麗本には駛に作る。今宋元明三本に從ひて便と改む。

らず。馳走して師に白す。師徒、皆、出づ。世尊の威神、明儀煌煌たり。迦葉、情悸し、蒙蒙として悟らず。即ち自ら惟ひて曰ふ、『若し是れ日ならんか。吾が日をもつて逮ぶを得ん。是れ天人と謂はゞ、其の眼、復、眴す』と。後に思ひて即ち解して曰ふ、『是れ、白淨王の子、悉達なる者にて無きを得ん乎。吾が歴數に曰ふ、「白淨王の子、福、應に聖王たるべきも、榮位を樂はず、當に作佛するを得べし」と。昔、出家せるを聞きたり。其の道、成ぜしならんか』と。

如來、忽ち到る。迦葉、大いに喜ぶらく、『善來、瞿曇。起居、常に安きや』と。

佛、迦葉の爲に頌を作りて曰はく、

『戒を持てば終老安し。　正を信ずれば止る所善なり。　智慧は最も身を安んじ、衆惡を犯さざれば安し』と。

迦葉、佛に白さく、『唯願はくは、德を屈して、臨んで蔬食を晌たまへ』と。

佛、迦葉に答へたまはく、『[二八]古佛の道法、[二九]中を過ぐれば飯せず。且つ至心を明らかにせり。一事を託せんと欲す。庶ふらくは、悋むこと有らざれ』と。

迦葉、答へて曰ふ、『恨むらくは、備豫無きも、德を敬して虛心なり』と。

佛、迦葉に告げたまはく、『一宿を寄せんと欲す。寧ろ、容るさるゝや、不や』と。

迦葉、佛に白さく、『我が梵志の法、寢ぬるに室を同じうせず。幸に亘命を[三〇]受けざるを恕せ。如何ん』と。

佛、靖室を指したまふ、『此れ、復、何の室ぞ』と。

迦葉、答へて曰ふ、『中に神龍有り。性、急にして姤惡、室に入る者有れば、每に便はち火を吐きて、人を燒害す』と。

佛、迦葉に告げたまはく、『此を以て我に借せ』と。

【二八】古佛。過去世の佛。
【二九】過中。正午過ぎ。三世諸佛の法、中を過ぐる一髮、已に食するを得ずと云ふ。
【三〇】受。麗本は愛に作る。今宋元明三本に從ひて受に改む。

世人奉仰す。[一二]火祠を修治して、晝夜懈らず。好學の弟子、五百人有り。迦葉の二弟、其の兄を宗師として、謂ひて道を得たりと爲す。各、弟子有り、皆、下流に居れり。迦葉自ら念ずらく、『吾が名日に高く、國内注仰するも、術淺ければ窮まり易く、窮まれば則ち名頽れん、當に良策を作すべし。全國に大いに望まん』と。便はち行きて[一三]龍を求む。術を以て之を致し、爲に靖室を作し、龍を鞠して曰はく、『若し輕がるしく靖室に突入する者有らば、火を吐き毒を出し、以て來る者を滅せよ』と。

龍、節會に至り、火を放たざる無し。遠近僉く曰はく、『大師の道は神なり。迦葉此に由つて、功名[一四]日に隆し』と。

世尊、念じて曰はく、『吾、昔、出家して道に[一五]蓱沙に逢ふ。道成ぜば、先づ我を度脱せよと誓要せり。吾、一切を用つての故に、然り可とす。今、民心を察するに、普ねく迦葉に注ぎ、卒かに未だ迴る可からず。譬へば果美なるも樹高く、因りて食するを得る無きが如し。唯、樹根を伐り、枝を僻むるのみ有りて、從ひて果を食すること必せり。一切の忌む所は、咸、龍に在り。吾、先づ之を降さば、迦葉、來從し、爾らば乃ち大道、化する所、崖無けん』と。

如來、言ひて曰はく、『日の天下を照すや、其の德三有り。一に曰ふ、光耀きて冥を除き、分明ならざる無し。二に曰ふ、五色の雜類、其の形を宣叙す。三に曰ふ、萠芽を開發し、萬物を精榮せしむ。如來の世に出づるや、亦、三有り。一に曰ふ、一切の[一六]大智は愚冥を照除す。二に曰ふ、五道を[一七]分布し、言行の由る所なり。三に曰ふ、權慧をもつて拯濟し、利して之を安んず』と。

衆祐、念じ已り、便はち行きて斯奈園より起ちて、暮に投じて、往いて迦葉に造る。未だ所止に至らずして、便はち金光を現ず。樹木・土石、其の色、金の若し。迦葉の弟子、瓶を持つて水を取る。變を覩て心動じ、怪みて顧望す。遙に世尊を見たてまつるに、明、天下に耀く。何の妙なるかを識

【一二】火祠。正統波羅門の奉ずる宗教的作法なり。

【一三】龍(Nāga)。八部衆の一、神力を有す。

【一四】日。麗本は曰に作る。今宋元明三本に從ひて日と改む。

【一五】蓱沙。Bimbisāra.

【一六】大智。一切の事理に通達する廣大の智慧。

【一七】分布。麗本は分部に作る。今元明二本に從ひて分布と改む。

詣し、奄然として陰る。衆人、佛に問ふらく、『向に一女、並び舞ひて此に至る。瞿曇、豈之を見ずや』と。

佛、衆人に告げたまはく、『且らく自ら身を觀ぜよ。他を觀じて何か爲ん。色欲は無常なり、合會すれば離有り。泡の如く、沫の如し。愚者は戀著し、殃禍由りて生ず。身は苦の器たること、衆生皆然り』と。

大衆、心に解し、沙門と爲らんことを願ふ。佛、皆、戒を受け、[九七]導きて正諦を[九八]見(しめ)、皆[九九]應眞を得たり。

佛、諸比丘に勅したまはく、『汝曹、各行きて廣く衆生を度し、隨所にて法を[一〇〇]現じ、橋梁を示して導き、普ねく法眼を施し、三尊を宣暢して[一〇一]愛を拔き、[一〇二]有を除き、還して泥洹に入らしむべし。吾は今獨行して、[一〇三]憂爲羅縣に詣らん』と。諸比丘、教を受けて頭面に足を禮し、[一〇四]佛を繞ること三匝、是に於て別れて去る。

化[一〇五]迦葉品第三

是に於て、如來、還つて[一〇六]摩竭提界に詣り、優爲羅縣に至る。暮れて梵志の斯奈園に上り、明旦、鉢を持して斯奈園に詣る。佛、金光を現じて、其の堂上を照したまふ。梵志の二女、長は[一〇七]難陀と名け、次は難陀波羅と名く。光を見て喜悅し、尋ねて佛所に詣し、禮拜して佛に請ふ。如來、堂に昇り、二女に教授して、三尊に歸命せしめ、[一〇八]五戒を授け已り、世尊、告げて曰はく、『身は己の有に非ず。萬物は空に歸す』と。二人、心に解し、首戴奉行す。世尊、惟曰はく、『吾、本、學を起し、衆生を度せんと欲す』と。[一〇九]欲界の[一一〇]魔王、道化に歸伏しぬ。

[一一一]泥蘭禪河の邊に近く梵志有り。迦葉氏を姓とし、鬱俾羅と字す。年、百二十。名聲高遠にして、

【九七】導。麗本は道に作る。今、宋元明三本に從ひて導に改む。
【九八】見。麗本は現に作る。今、宋明二本に從ひて見に改む。
【九九】應眞。阿羅漢のこと。
【一〇〇】現。麗本は見に作る。今、宋元明三本に從ひて現に改む。
【一〇一】愛。物を貪る心。
【一〇二】有(Bhava)。迷たる生死の果報。
【一〇三】憂爲羅縣。梵の Uruvilva, 釋尊の苦行し給ひし地なり。
【一〇四】繞佛三匝。貴人を右遶する事は印度の禮法なり。これを三匝するは鄭重にする爲なり。
【一〇五】迦葉。Kāśyapa.
【一〇六】摩竭提(Magadha)。中印度の國。
【一〇七】難陀。Nanda.
【一〇八】五戒。殺生・偸盜・邪婬・妄語・飲酒の制戒。
【一〇九】欲界(Kāmadhātu)。婬食の二欲強き有情の住する處。
【一一〇】魔(Māra)。魔王は欲界の第六天主なり。
【一一一】泥蘭禪(Nairañjanā)。佛成道の時、先づ浴したる河なり。

稱心解し、便はち羅漢を得、父子相見るも、恩愛微薄なり。長者、歡喜し、退坐して佛に白さく、『今日心悅び、情、二つの喜有り。一は佛に遇ひて解する喜、二は愛を離れて快なる喜なり』と。

時に寶稱の親友四人。一は富樓と名け、二は惟摩羅と名け、三は憍炎鉢と名け、四は須陀と名く。寶稱已に沙門と作れるを聞き、驚喜毛竪して曰はく、『其の人德高く、明遠く、國に震ひ、吾等、咸く歸せるを、今、沙門と爲る。其の道必ず眞にして、乃ち斯人をして忽ち榮利を棄てしめしならん』と。共に出でて、佛に詣し、并びに寶稱を省る。即便はち倶に行きて、佛景を見んとて、則ち[九四]本願に乘じて行く。心に喜びて卽ち解し、頭面に禮を作して、前みて世尊に白さく、『道化を飢渴し、虛心日久し。鄙陋を以てせざれ、願はくば弟子と爲らん』と。

佛、言はく、『善來、比丘』と。皆、沙門と成る。[九五]爲に本旨を說きたまへば、意解して淸淨に、義を聞きて心に了し、便はち羅漢を得たり。

是の時、波羅奈の傍縣、名けて[九六]茶と曰ふ。五十人有り。事に因りて國に詣る。寶稱、富樓等の皆沙門と作れるを聞きて、又、各、念を生ずらく、『諸長者子の輩、樂に憍りて自ら恣にし、才藝世に高きもの、皆道化を感ず。瞿曇、必ず神ならん。乃ち貴族をして、復、榮を顧さらしむ』と。各各念を發し、佛に往詣せんと欲す。卽便はち倶に出でて、徑、鹿園に詣る。本願、應に度すべし。佛を見たてまつりて便はち解し、弟子と爲らんことを願ふ。

佛、言はく、『善來、比丘』と。悉く沙門と成る。因りて本旨に順ひ、速かに法要を成じ、垢は除かれ、縛は解して、皆、羅漢を得たり。

時に鹿園の中間に、大衆の會有りて、飲食歌舞す。時に一女有り。端正非凡、會の中に於て舞ふ。衆、咸、喜悅し、意、甚だ無量なり。女の舞ふこと未だ竟らざるに、忽然として見えず。衆、所歡を失ひ、惆悵、屛營す。乃ち復、彼に於て、百步にして影を現ず。大衆馳せ趣く。女、引きて佛に

【九四】本願（Pūrva-praṇidhāna)。佛の因位にて發起せる誓願。

【九五】爲說本旨意解淸淨。麗本には爲說心本旨解淸淨に作る。今は宋元明三本に從ひて改む。

【九六】茶。麗本には茶とあるも、宋元明三本には苓とあり。

貴み異しみ、字して寶稱と曰ふ。別に屋宇を作り、寒暑、處を易へ、妓女娛樂し晝夜を捨てず。寶稱、中夜にして欻ち覺め、諸妓女を見るに皆死狀の如し。膿血は流溢し、肢節は斷壞す。屋室の衆具、皆、塚墓に似たり。驚き走りて戶に趣く。戶、輒はち自ら開く。天地大だ冥くして、唯、小光のみを覩る。東の城門に趣くに、門、復自ら開け。明らかに鹿園を照す。光を尋ねて佛に詣り、相好を瞻覩するに、巍巍煌煌たり。怖は止り、迷は解し、聲を擧げて歎じて曰はく、『久しく[八八]恩愛の獄に在り、[八九]名色の械に縛著せり。今、馳せて[九〇]天尊に趣むく。寧ろ解脫を得んや、不や』と。

佛、言はく、[九一]『童子、善く來れり、覺れるかな。斯の處、憂無く、衆行畢竟る』と。

前みて佛足を禮し、却りて一面に住す。佛、爲に法を說きたまふ。無垢の法眼を逮し、席を退きて佛に白さく、『願はくば弟子と爲したまへ』と。

佛、言はく、『善來、比丘』と。便はち沙門と成る。

明旦、衆女、蚰蚰を見ず。周慞して遍ねく求め、噓唏し並びに泣く。大家、驚き恠しみて其の狀變を問ふ。

答へて言はく、『寶稱、今、いづこに在りと爲すを知らず』と。

長者怖悸し、卽ち馬騎を遣はし、四出して推索せしめ、父は子の車に乘じ、速かに出でて求む。道に一水を過ぐ。水は波羅奈と名く。水を渡りて、子の寶屣、岸邊に脫置するを見、卽ち足跡を尋ぬれば、徑、鹿園に趣く。佛、[九二]方便を以て、其の父子兩をして相見ざらしむ。長者、佛の尊儀なる相好を見たてまつりて、喜懼交至る。敬を修するを忘失して、佛に問ひて言はく、『我が子寶稱、足跡此に趣く。瞿曇、寧ろ見たりや』と。

佛、長者に告げたまはく、『若が子斯に在り、何ぞ見ざるを憂へん』と。

佛、爲に法を說きたまふ、「生死は癡に由り、恩愛は離有り」。二十億悲を破し、[九三]須陀洹に入る。寶

【八八】恩愛の獄。父母・兄弟・夫婦等の恩しみ愛するによりて罪惡を行じ、空しく流轉して盡期なきによりて、之を獄に譬ふ。

【八九】名色の械。名色は五蘊の總稱。五蘊は苦の源なれば械に譬ふ。

【九〇】天尊。佛の德名。

【九一】童子。發心求道するも未だ出家するに至らざる幼童。

【九二】方便(Upāya)。眞實法に誘引する爲めの手段方法。

【九三】須陀洹(Srota-āpanna)。小乘四果の初果。

心内に發り、便はち道人に問ふらく、『何が故に他の妓女を誘ひて、此の坐に著かしむることを爲す。卿は是れ何人ぞ』と。道人、王の意、必ず暴害を興さんことを豫知し、答へて曰はく、『是は忍辱の人なり』と。王、佩劍を拔きて其の兩臂を削り、而して問ふらく、『何人ぞ』と。答へて曰く、『實に忍辱の人なり』と。又其の耳鼻を截るも、心堅くして動ぜず、猶忍辱の人と言ふ。王、道人の顏色移らざるを見て、便はち前みて過を悔ゆ。道人、王に告ぐらく、『汝、今、女色を以ての故に刀を以て我が形を截る。吾、忍ぶこと地の如し。必ず平等正覺を得て、當に一切の大智を以て汝が生死を斷ずべし』と。王、罪深くして必ず重殃を得んを惟ひ、頭を地に叩きて矜恕せられんを願ふ。道人、王に告ぐらく、『吾、眞の忍辱ならば、血は當に乳と爲るべく、截る所は平復せん』と。尋いで所言の如く、乳出でて形復す。王、忍の證を見て、必ず全濟されんことを冀ふ。重ねて情を宣べて言はく、『若し眞に道成ぜば、願はくば先づ我を度したまへ』と。道人、可と答ふ。王、解して迷止り、辭し退きて宮に還る。

佛、拘憐に告げたまはく、『爾時の忍辱の道人とは我が身是なり。惡生王とは拘憐是也。解せしや、未だしや、拘憐よ』と。拘憐、席を退きて佛に白さく、『甚だ解しぬ。世尊よ』と。是の法を說く時、拘憐等五人、漏盡きて意解し、皆〔八五〕羅漢を得、及び上諸天八萬は法眼を逮得し、〔八六〕三千世界、爲に大いに〔八七〕震動す。是を如來始めて波羅奈國に於て無上法輪を以て未だ轉ぜざる者を轉ずるや、大いに一切を度し、樂受せざる莫しと爲す。

現變品第二

時に、波羅奈城中に長者有り。阿具利と名く。一子有り。字を蚰蜒と曰ふ。――晉には賓稱と言ふ。――時に年、二十四、稱、生れて稱、生れて奇妙なり。琉璃の屐有りて足に著きて生る。父母、

との正しき方便精勤。
【八〇】正志(Samyag-smṛti)。正しき觀念。
【八一】正定(Samyag-samādhi)。正しき禪定。以上八正道なり。
【八二】眞諦。眞實の諦理。
【八三】畢竟。麗本には畢故とあり。今は宋元明三本に從ひて畢竟と改む。
【八四】過去久遠時有國王。これより以下、佛の說き給ふ過去の因緣。
【八五】羅漢(Arhān)。應供と譯す。人天の供養に應じ得る資格あるの義。後には小乘の悟を極めたる位とせらる。
【八六】三千世界(trisāhasra mahā-sāhasraṁ-lokadhātavaḥ)。三千大千世界と同意。
【八七】震動。世に瑞祥ある時、大地震動すとせらる。

て、[七〇]法眼以て朗かなれば、彼の四諦を解して稍道迹に入る。何をか謂ひて苦と爲す。[七一]生苦・老苦・病苦・死苦・[七二]憂悲惱苦・恩愛別苦・怨憎會苦・所求失苦なり。要ず[七三]五陰の受盛に因りて苦を爲す。何をか謂ひて習と爲す。愛著する所は習にして、愛せざるも亦習なり。何をか謂ひて盡と爲す。其の愛有る所、滅有るを覺知し、愛せず念ぜずして、而して覺も皆盡くるなり。何をか道に入ると謂ふ。八正は眞爲り。一に曰く[七四]正見、二に曰く[七五]正利、三に曰く[七六]正言、四に曰く[七七]正行、五に曰く[七八]正命、六に曰く[七九]正治、七に曰く[八〇]正志、八に曰く[八一]正定。是を苦と習と、以て盡くると道に入ると爲す。[八二]眞諦は是れ無生爲り。無生なれば老無し。老無ければ病無し。病無ければ死無し。死無ければ痛無し。痛無ければ無上の吉祥、泥洹に向ふ』と。

時に如來、頌を作りて曰はく、

『至道往返無く、玄微にして清妙眞なり。沒せず復生ぜず。是の處、泥洹と爲す。此れ要ず寂なること無上なり。[八三]畢竟して新なるを造らず。天に善處有りと雖も、皆泥洹に如くは莫し』と。

佛、拘憐に告げたまはく、『解せりや、未だしや』と。

是の法を說きたまひ、已りて拘憐等五人、法眼を逮得せり。

拘憐、席を退きて對へて曰く、『未だ悟らず』と。

世尊、又拘憐に告げたまはく、『[八四]過去久遠の時、國王有り。名けて惡生と曰ふ。諸妓女を將ゐ、山に入りて遊戲す。王、官屬をして山の下に住頓せしめ、唯、妓女のみを從へて山頂を步涉す。王、疲極して臥す。諸妓女の輩、王を捨てゝ華を取る。一道人の樹下に端坐せるを見、諸女、心に悅びて、皆前みて禮を作す。道人、呪願すらく、『諸妹よ、那より來るや』と。命じて坐に就かしめ、爲に經法を說く。王、覺めて諸妓女を求めて、彼の道人の前に坐するを見る。王は性、妬害なり。惡

咒術を用ひて幻事を化作する人。

【六三】比丘(Bhikṣu)。佛門に歸依し具足戒を受持せるもの。

【六四】沙門(Śramaṇa)。妻子に別れて出家學道するもの。

【六五】四諦(Catvāri-arya-satyāni)。迷悟の因果を四つに分てるもの。

【六六】苦。迷の果。

【六七】習。迷の因、集に同じ。

【六八】盡。悟の果、滅に同じ。

【六九】道。悟の因、以上四諦なり。

【七〇】法眼(Samanta-cakṣus)。五眼の一にして佛法の正理を見る智眼。

【七一】生苦・老苦・病苦・死苦。是を四苦とす。

【七二】憂悲惱苦。以下四つを前四苦に加へて、八苦と云ふ。

【七三】五陰。色・受・想・行・識の有爲法。

【七四】正見(Samyag-dṛṣṭi)。正しき見解。

【七五】正利(Samyag-saṅkalpa)。正しき思念。

【七六】正言(Samyag-vācā)。正しき語。

【七七】正行(Samyag-karmanta)。正しき行。

【七八】正命(Samyag-ājīva)。生活の正しき方法。

【七九】正治(Samyag-vyāyāma)。未生の善を生ぜしめん

佛、是法を說きたまふに、五人未だ解せず。三人、分衞し、二人、供養す。爲に色苦を說きたまふ。「一切の衆禍は皆[六一]色欲に由る。衆好は無常にして、人も亦住ること無し。譬へば、[六二]幻師の、意を出して化を爲すが如し。愚者は愛戀して貪り厭く無きも、幻主は化を觀て染無く著無し。所以は者何ん。僞にして眞に非ざるが故なり」。佛、二人の爲に頌を作りて曰はく、

『志の蕩なるは欲行に在り。　嗜は根栽を增す。　色を貪れば怨禍長じ、　欲を離るれば則ち患無し』と。

三人、供養し、二人、分衞す。爲に貪苦を說きたまふ。「利を好み榮を求むるは、迷愚の專らとする所なり。行を害し德を毀るは、壹に貪に由る。得失を喜怒して、欲は厭く無し。斯の利の危脆なること。雲の庭過ぐるが若し。老病死來り、分散せざる靡きこと、譬へば人の夢の寤むれば則ち見る無きが如し。黠しくして能く貪を捨つれば、乃ち大安を得ん」。佛、三人の爲に頌を作りて曰はく、

『貪欲の意は田たり。　無厭心は種たり。　貪を斷じ、利求を捨つれば、　復、憂に往來すること無けん』と。

是に於て世尊、因りて廣く法を說きたまひて、分部を斷ぜず。五人、便ち解し、弟子と爲らんことを願ふ。

佛、曰はく、『善來、[六三]比丘』と。皆、[六四]沙門と成る。

佛、比丘に告げたまはく、『行に二事有り。爲に邊際に墮す。一は念、色欲に在りて清淨の志無し、二は愛に猗り貪に著し、志行を淸くする能はず。是の二事、還つて邊行に墮す。生じて佛に値はず、眞道に違遠す。若し能く貪を斷じて、精進して明を修せば、泥洹を得べし。何をか泥洹と謂ふ。先づ[六五]四諦を知る。何をか謂ひて四と爲す。一に曰く[六六]苦と爲し、二に曰く[六七]習と爲し、三に曰く[六八]盡と爲し、四に曰く[六九]道に入る。是の如く、比丘よ、次に覺慧を持ちて一心に思禪し、受道報應にし

と改む。
【四八】轉無上輪。無上の說法。
【四九】三界。欲界・色界・無色界の迷界。
【五〇】泥洹(Nirvāṇa)。生死の因果を滅したる狀態。
【五一】鹿園(Mṛgadāva)。佛、始めて法を說きしところ。仙人住處と云ふ。
【五二】共莫起言語間訊也。麗本には莫跪起言語間訊也とあり。今は宋元明三本に從ふ。
【五三】悅頭檀(Śuddhodana)王。迦毘羅衞國の王にして釋尊の父なり。
【五四】無上正眞。梵の阿耨多羅三藐三菩提の譯。
【五五】平等覺。佛の別號。
【五六】輕。麗本は卿に作る。今宋元明の三本に從ひて輕と改む。
【五七】道人。道を求むる人。
【五八】九十六術。九十六種の外道。
【五九】違。麗本は遠に作る。今、宋元明三本に從ひて違に改む。
【六〇】六通。神足通・天眼通・天耳通・他心通・宿命通及び漏盡通の六神通力。
【六一】色欲。人の世間の靑・黃・赤・白及び男女等の色を以て情を悅ばし、意に適はしめんとの欲。
【六二】幻師(Māyākāra)。幻術・

に佛の來りたまへるを見、便はち共に議して曰はく、『我等、勤苦して室家に離別し、山に登りて領を越え、困苦して疲極せるは、正に此の人に坐せり。麻米を供給せんは、其の堪へ叵きを謂ふ。魔の來り戰ふに因りて、是を以て委藏せん。今故らに復來る。一麻一米だも我等堪へず。今起ちて食を求むるも、奈何んぞ能く辯ぜん。但、爲に坐を施さんのみ、各、[五二]共に起つて言語し問訊する莫れ。此の不樂を得ば、必ず自ら去らん』と。

是の時世尊、其の五人の爲に、道神足を現じたまふ。五人の身、踊りて覺えず禮を作し、執侍すること前の如し。佛、五人に告げたまはく、『共に起つ勿らんを議し、今禮を作すは何の謂ぞ』と。五人悉く對へて曰ふ、『吾れ、悉達に坐して更に勤苦を歷たり。[五三]悅頭檀王の暴逆違道も皆、卿に由る』と。

佛、五人に告げたまはく、『汝、[五四]無上正眞・如來・[五五]平等覺を[五六]輕んずる莫れ。無上正覺は生死の意を以て待つべからず。何ぞ吾に對して面り父の字を稱するを得ん』と。

又、五人に告げたまはく、『汝、吾が身を觀ること、樹下と何如』と。

五人、佛に答ふらく、『爾の時は憔悴し、今は更に光澤あり。爾の時、樹に處るや、目を閉ぢて端坐し、日、麻米を食するだも猶道に非ずと謂ひたまふ。況んや人間に入るをや。身口自恣しつゝ、何ぞ道の爲にすと謂ふ』と。

佛、五人に告げたまはく、『世に二事有り。以て自ら侵欺す。何をか謂ひて二と爲す。殺生婬泆にして豪を恃みて貪欲なると、極力勞苦して內に道跡無きとなり。是の二事無ければ、是れ眞の[五七]道人なり。[五八]九十六術に於てせず、亦捨遠せざる、是れを中を取ると爲す、兩際有ること無し。何をか中を取ると謂ふ。覺慧の行を得て、衆智に[五九]達し、[六〇]六通悉く覺り、八正行を具す。是れを中を取ると名け、泥洹に止宿す』と。

【三一】 生死。一切衆生の感業に依り招かるゝところの迷界。
【三二】 五道。地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の五つの迷界。
【三三】 法鼓。佛の說法。
【三四】 三千大千世界。一佛の化境する世界。
【三五】 五人。佛弟子五比丘。
【三六】 拘憐 (Aj iāta-kauṇḍ-inya.)。
【三七】 頞陛 (Aśva-jit.)。
【三八】 拔提 (Bhadrika.)。
【三九】 十力迦葉 (Daśabala-k-āśyapa.)。
【四〇】 摩南拘利 (Mahānāma Kolita.)。以上、佛弟子五比丘なり。
【四一】 波羅奈 (Vārāṇaśi)國。中印度に屬し、摩竭陀國の西北にあり。
【四二】 相好。佛の色身に具備する端嚴微妙の形相。
【四三】 優呼。麗本は優吁に作る。今、元明二本に從ひて優呼に改む。Upaka.
【四四】 頌(Gāthā)。韻文。
【四五】 八正覺(Āryāṣṭāṅgika-mārga)。正見・正利・正言・正行・正命・正治・正志・正定にして、いづれも偏邪を離れたるものなり。
【四六】 積一德作佛。麗本には積一行作佛とあるも、今は宋元明の三本に從ふ。
【四七】 那。麗本に如とあるは那の誤なるべく、こゝには那

終れり』と。

佛、言はく、『彼の人長く衰ふ。甘露當に開くべきに、受問するを得ず。[三一]生死の往來、何に據りてか息むを得ん。[三二]五道の輪轉、痛しいかな、奈何』と。

佛、復惟ひて曰はく、『甘露の[三三]法鼓、[三四]三千大千世界に聞ゆ。誰か應に聞くを得べき』と。

父王、昔、[三五]五人を遣はす。一は[三六]拘憐と名け、二は[三七]頞陛と名け、三は[三八]拔提と名け、四は[三九]十力迦葉と名け、五は[四〇]摩南拘利と名く。麻米を供給し、執侍し勞苦す。功報、應に叙すべし。時に五人の者、皆、[四一]波羅奈國に在り。時に如來始めて樹下を起ちたまふ。[四二]相好、嚴儀にして世に明耀す。威神震動して見たてまつる者喜悅す。徑、波羅奈國に詣る。未だ中間に至らずして道に梵志に逢ふ。名を[四三]優呼と曰ふ。尊妙を瞻覩して驚喜交集る。下りて道側に在り、聲を擧げて歎じて曰ふ、『威靈、人を感ぜしめ、儀雅挺特なり。本、何れの師に事へてか、乃ち斯の容を得たまへる』と。佛、優吁の爲に[四四]頌を作りて曰はく、

『[四五]八正覺、自ら得て、　離無く、所染無し。　愛盡き欲網を破し、　自然にして師受無し。　我が行に師保無く、　志、獨りにして伴侶無し。　[四六]一德を積みて佛と作り、　是より聖道に通ず』と。

優吁、佛に問ふらく。『瞿曇、[四七]那に行くや』と。

佛、梵志に告げたまはく、『吾、波羅奈國に詣り、甘露の法鼓を擊ちて、[四八]無上輪を轉ぜんと欲す。[四九]三界の衆聖、未た曾て、法輪を轉じ、人を遷して[五〇]泥洹に入るゝこと、我が今の如き有らざるなり』と。

優吁、大いに喜びて曰ふ、『善き哉、善き哉。瞿曇の言ふが如し。願はくば甘露を開きて、應の如く法を說きたまへ』と。

時に如來、便はち波羅奈國に詣る。古の仙人[五一]鹿園の樹下に處れり。彼の五人に趣く。五人、遙か

三。
【一七】明行成爲。佛十號の一、三明を具足成就するの意。明行足に同じ。
【一八】前逝。梵の修伽陀（Sugata）、佛十號の一、善逝に同じ。
【一九】世間解。梵の路伽憊（Lokavid）、佛十號の一。
【二〇】無上士。梵の阿耨多羅（Anuttara）、佛十號の一。
【二一】道法御。涅槃に至る正道の法を得たる意。調御丈夫に同じ。
【二二】天人師。梵の舍多提婆魔㝹沙喃。（Śāsta-devamanuṣyānām）、佛十號の一。
【二三】衆祐。即ち世尊の古譯。
【二四】六度。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜。
【二五】群生梵釋。多くの衆生と梵天・帝釋天。
【二六】甘露。梵の阿密哩多（Amṛta）、甘くて蜜の如きもの、天人の所食。こゝには佛の說法に譬ふ。
【二七】梵志（brahmacārin）。波羅門教に於ける年少の學生。
【二八】阿蘭迦蘭（Ārāḍa-kālāma）。毘舍離城附近に住みし仙人。
【二九】天（deva）。印度に於ける諸神の總稱。
【三〇】鬱頭藍弗（Udraka Rāmaputra）。

中本起經 [一]

卷の上

轉法輪品第一 [二]

後漢　曇果・康孟詳共譯

[三]阿難曰はく、[四]吾、昔、佛從り是の如きを聞きたり。一時、佛、[五]摩竭提界善勝道場[六]元吉樹の下に在して、德力、[七]魔を降し、覺慧神靜に、三達無礙にして、[八]二賈客の提謂・波利を度し、[九]三自歸を授け、然して[一〇]五戒を許し、[一一]淸信士と爲し已りて、惟ふに、昔、先佛、名けて定光と曰ふ。吾に佛名を拜したまへり。『汝、來世九十一[一二]劫に於て當に作佛を得、[一三]釋迦文と字し、[一四]如來・[一五]至眞・[一六]等正覺・[一七]明行成爲・[一八]前逝・[一九]世間解・[二〇]無上士・[二一]道法御・[二二]天人師・[二三]衆祐と號し、人を度すること我の今の如くならん』。吾、是より來た、本心を修治して[二四]六度極り無く、功を積み行を累ねて、四等倦まず、高行殊異なり、苦を忍ぶこと量り無し。功報遺無く、大願果我せり。

世尊念じて曰はく、『吾、本、發心せるは、群生の爲にせんと誓へり。[二五]梵釋法を請ふ。[二六]甘露當に開くべし。誰か應に先づ聞くべき。昔、吾出家して、路、[二七]梵志に由る。[二八]阿蘭迦蘭、吾を待つに禮有り。二人應に先にすべし』と。念じ已りて行かんと欲す。

[二九]天、聖旨を承けて空中に白して言く、『彼の二人、亡じて來た七日なり』と。

佛、言はく、『苦しき哉、阿蘭迦蘭。甘露當に開くべし。汝何ぞ聞かざる』と。

佛、復惟ひて言はく、『甘露當に開くべし。誰か次に聞くべき』と。

[三〇]鬱頭藍弗、次に應に聞くを得べし。方に起ちて行かんと欲す。天、復白して言く、『此人は昨暮命

【一】中本起經。二卷、後漢の曇果・康孟詳共譯。如來初成道より以後、在世の中間說法敎化の行跡を叙せるもの。
【二】轉法輪。敎法を說くを法輪を轉ずと云ふ。
【三】阿難(Ānanda)。歡喜と翻ず。斛飯王の子、提婆達多の弟なり。
【四】吾。以下阿難の言葉。
【五】摩竭提(Magadha)。中印度の國名。善勝と翻ず。
【六】元吉樹。即ち菩提樹なり。
【七】降魔。惡魔を退治降伏すること。
【八】提謂(Trapuṣa)・波利(Bhallika)。佛始めて人天敎を說ける對告衆の二商主。
【九】三自歸。佛・法・僧の三寶に歸依する事。
【一〇】五戒。殺生・偸盜・邪婬・妄語・飮酒の制戒。
【一一】淸信士。在家の信者にして三歸・五戒を受けたるもの、即ち優婆塞(Upāsaka)。
【一二】劫(Kalpa)。長大の年月。
【一三】釋迦文。釋迦牟尼の訛略。
【一四】如來。梵の多陀阿伽陀(Tathāgata)、佛十號の一。
【一五】至眞。如來は一切の虛僞を離るる故に至眞と云ふ。
【一六】等正覺。如來十號の第

内面的にも前述の如く、この兩者は一つの佛傳の一半づつを傳へ、兩者が合することによつて完結せる一佛傳を形成するといふ狀態にある。この兩經が最初には一つのもので、後に二分されたのか、或は初めに修行本起經のみがあり、後に中本起經が出來るに至つたかは不明であるが、恐らく後者ではないかと思はれる。

要するに中本起經は修行本起經と合して一佛傳をなすものであり、この佛傳は佛傳文學中に於て、古い部分に屬し、而も特に中本起經は他の佛傳とは異つた數個の物語を擧げてゐる所に、其の特色がある。

本經幷びに十二遊經の國譯につきては、文學士三好鹿雄君の手を煩はし、解說につきては、文學士林得成君の手を煩はした事に對して、こゝに謝意を表するものである。

昭和七年五月三十日

譯者常盤大定識

なければならぬ。此の點に關しては、目下明瞭なる斷案を下すことは出來ない。但、推察によれば、此の經は、物語が簡潔であり、大乘等の語も一回顯はれてゐるけれども、他の大乘系統の佛傳の如く、大乘的の修飾が殆んど見出されない。そして內容から言へば、衆許摩訶帝經に最もよく似てゐる。然し衆許摩訶帝經の修飾多く、其の翻譯も遲きに比して、本經はかなり早い時期に譯せられ、素朴な形を具へてゐる。又佛傳としての全部の體裁を具へてゐる佛所行讃、佛本行經等よりも、古いものでないかと思ふ。又たとへば本經と過去現在因果經との先後に就いては、研究を要する問題であるけれども、後者がよく纒まり、殊に阿羅邏仙人の所說に數論說をもち來つてゐるが如き點から察すれば、本經は過去現在因果經よりも古いと見られる。又大乘思想の大いに混入してゐる普曜經等は、本經よりも新しいことは勿論である。最も問題になるのは、太子瑞應本起經及び佛本行集經と此の經との先後であるが、恐らくこの二經は此の經よりも次第の如く一は古く、一は新しいと見られる。

三、本經の翻譯に關して

本經は出三藏記集卷二によれば、漢の獻帝建安中に、康孟詳が譯せりとある。法經錄では、後漢の建安年中に、康孟詳と竺大力とが共譯すとある。次いで歷代三寶記卷四に依れば、道安によつて此の經は沙門曇果が、迦維羅衞國から梵本を將來して、建安十二年(A. D. 207)に雒陽で譯し、康孟詳が度語(通譯)したとある。其の後、此の說は普通、經錄に採用せられ、開元錄卷一、貞元錄卷二等でも同樣の說をなしてゐる。開元錄によれば、沙門曇果は西域の人で、廣く內外の諸典に通じ、迦維羅衞國から梵本をもたらし、洛陽に至つて獻帝の建安十二年に、中本起經を譯すとある。又同錄によれば、沙門康孟詳は、其の祖先は康居國の人で、慧學の譽あり、獻帝の興平元年(A.D. 194) 以後に數個の經典を譯したとある。

因みに本經と關係のあると思はれる修行本起經の翻譯に就いて見れば、出三藏記集卷三には、安公によつて、修行本起經は小本起とも、宿行本起とも呼ばれてゐたらしいことがある。法經錄卷三、歷代三寶記卷四、大唐內典錄卷一等に依るに、本經も、中本起經と同樣に、曇果が迦維羅衞國から梵本を齎らし、建安二年(A.D.197) に、竺大力が康詳詳等と共譯したとある。之によつて見るに、此の二經は、同じ人が同じ處から梵本をもたらし、又同じ人が之を譯してゐる。即ちこの兩經は常に密接な關係におかれてゐる。この關係は勿論外面的に過ぎないけれども、

第十二大迦葉如來品、茲では摩訶迦葉の歸佛が述べられてゐる。但し迦葉が始めて佛の所に來た時に、佛は豫め彼のために半座を分つて彼を優遇し、彼は最初から佛と同様に、四禪、大悲、六通等を具へてゐるとせられた。迦葉に對するかゝる物語は、他の佛傳中の何れにも見出すことが出來ない。但し本行集經卷四六には、半座以外の事は述べられてゐる。迦葉に半座を分つと言ふことは、雜阿含卷二三、卷四一及び增一阿含の序品等に出てゐる。最後に半座物語に對する本生譚が述べられてゐる。

第十三度奈女品、これは世尊入滅の少し前に起つた物語である。即ち拔耆(Vṛji, Vajji)國の娼婦奈女即ち阿凡和利(Ambapāli) を化導せられた事である。この話は長阿含遊行經 (Dīgha N. 16. Mahāparinibbāna S.) その他種々の涅槃經、四分律、五分律、有部雜事等に出で居り、般涅槃以後迄も取扱つた佛傳、即ち佛所行讃、佛本行經等にも述べられてゐる。

第十四尼犍問疑品、これは那難陀(Nālanda) 國に於て、六師等の外道が勢力を得た時に、佛はその國に到つて種々說法せられ、外道を制伏して正法を布かれたことを述べてゐる。この那難陀國の波和離園 (Pāvārikambavana) に於て佛が尼犍外道等の難問に接し、却つて之を信伏せしめられた物語は、經典の諸處に出てゐるけれども、本經に似た物語は見出せない。

第十五佛食馬麥品、佛が波和離園から祇園精舍に向ひ、多くの比丘衆を具して歸還の途中、婆羅門の阿祇達(Agnidatta)の招待を受けられたが、その婆羅門はその事を忘れて三ケ月の間、堅く門を閉ぢて居た。時にその地は飢饉であつたゝめに、行乞も出來なかつた。その時一馬師が馬の飼糧たる麥を佛に奉り、佛は之を食べられた。最後に其の事件に關する一の本生譚が擧げられてゐる。佛が馬麥を食べられたと言ふ此の物語は、十誦律、四分律、五分律、巴利律、大智度論等に出てゐるが、他の佛傳には見えない。

以上本經の內容を概說したが、本經が他の佛傳と異つてゐる點は、第一、本經には佛傳としての第一部、第二部、第四部に屬するもの全く存ぜず、第三部に屬する佛の成道後、般涅槃に至るまでの間の事件のみを取扱つてゐることである。第二、本經には他の佛傳中に見出すことの出來ない數個の物語が、採用せられてゐる事である。即ち前述の如く、第八品以後である。この事は、本經が他の佛傳類よりも後に成立したものか、或は第八品以後は後に附加せられたものかであり、若し又、此の經が古いとすれば、他の佛傳と關係があまりなかつたものと見

以上第三品以下第七品に至るまでの物語には本經獨特のものとてはなく、大體諸佛傳の所說と大同小異である。以下第八品以後に述べる所は、本經の特色と見てよい。

第八本起該容品、これは優填(Udyana)王の歸佛因緣を說いたものである。即ち優填王には、照堂（Māgandiyā）と該容(Sāmāvatī)との二夫人あり、前者は憍慢にして嫉妬深く、之に反して後者は貞節にして深く佛法を信じた。照堂夫人は該容夫人を妬み、該容夫人が佛を供養するを見て、王に對して、該容夫人は佛と怪しい關係があるといふことを讒言した。王は怒つて該容夫人を射殺しようとしたが、矢は却つて王の所へ戻つて來た。王はこの不思議を見て、その事情を聞き、遂に佛に歸依するに至つた。玆でその事件に關する本生譚が述べられてゐる。

この物語は、他の佛傳には見出されない。然し、優填王經、法句譬喩經卷四、大寶積經卷九十七優陀延王會等に、此の物語が擧げられてゐる。恐らくその何れかゝら引用したものであらう。

第九瞿曇彌來作比丘尼品、こゝには佛姨母、大愛道瞿曇彌　（Mahāprajāpatī Gotamī）が、佛に婦人の出家を願つたけれども、許されず、遂に阿難に依りて、比丘尼は八敬法（Aṣṭa-gurudharmā）を守るといふ條件の下に、婦人の出家を許されるに至つた。佛は婦人の出家を許しながらも、婦人には五障あるが故に、千年間隆盛であるべき佛の正法は、女人が沙門となつたゝめに、五百年に減じたと言はれた。

この物語も他の佛傳には見出されないで、中阿含の瞿曇彌經、四分律、五分律、十誦律、摩訶僧祇律等に出で居り、又巴利の Aṅguttara N. VIII. 51. にも出てゐる。

第十度波斯匿王品、波斯匿王は、六師外道等の名聲が世に高く、佛の名は餘り未だ知られてゐなかつたし、年少であつたゝめ、佛が偉大なる人物であることを聞いても、之を疑つて信じなかつた。佛は王に對して、小事であつても、輕んずることのできないものが四つあるとて、王に說法をせられた。この事は衆許摩訶帝經にも少し出てゐるが、蓋し雜阿含卷四六(Saṁyutta N. III. 1.1.)などから採つたものであらう。王の夫人末利(Malli)は、深く佛を信じ、恩愛は憂悲の根本であると言ふ佛說の辯護をした。

第十一自愛品、これは佛が波斯匿王のために、惡不善の行爲を捨てゝ、善法を行じ、三寶に歸依し、戒を堅く持し、以て自らを護るべきことを說法せられた物語である。この物語は、Saṁyutta N. III. 1.8 及び Udāna V. 1. 等に出てゐる。

如來至眞等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御天人師號佛世尊、度脫衆生、如我今也、吾從是來、建立弘誓、奉行六度四等四恩三十七品、善權隨時、一切諸法、積累不倦、高行殊異、忍苦無量、功報不遺、大願果成、佛說經已、一切衆會、皆大歡喜、爲佛作禮而去。

中本起經

阿難曰、吾昔從佛聞如是、一時佛在摩竭提界善勝道場元吉樹下、德力降魔、覺慧神靜、三達無礙、度二賈客、提謂波利、授三自歸、然許五戒、爲淸信士、已惟昔先佛、名曰定光、拜吾佛名、汝於來卅九十一劫、當得作佛、字釋迦文、號如來至眞等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御天人師衆祐、度人如我今世、我從是來、修治本心、六度無極、積功累行、四等不倦、高行殊異、忍苦無量、功報無遺、大願果成。

中本起經は、同樣に二卷十五品から成つてゐる。

第一轉法輪品、成道後、五比丘に最初の轉法輪をせられ、四諦、八正道の理を說いて、五比丘を化導せられる。この品の最後に之に關する一つの本生譚が擧げられてゐる。佛傳中、この說に最も似たものを求めれば、衆許摩訶帝經のそれである。

第二現變(善來)品、蚰蚰（Yaśa 實稱）及びその四人の親友、並に五十人の者が出家する話で、これも衆許摩訶帝經が最も似てゐる。

第三化迦葉品、鬱俾羅(Uruvilvā)、那提(Nadi)、迦耶（Gaya）の兄弟三迦葉を化するので、佛は種々の神通によつて長兄の鬱俾羅迦葉を服し、爲めにその弟子五百人を、又二弟の弟子合して五百人を出家せしめ、かくて千人の佛弟子が出來た。この物語は諸傳大體同樣である。

第四度瓶沙王品、瓶沙王（Bimbisāra）王に對する說法である。

第五舍利弗大目犍連來學品、舍利弗、目連の二人は、もと六師外道の一人なる沙然（Sañjaya）の弟子で、二百五十人の徒衆を率ゐてゐた。たま〳〵五比丘の一人の頞陛（Aśvajit）に遭ひ、佛敎の偉大さを知り、徒衆と共に歸佛するに至つた。かくて前の三迦葉の徒衆一千人と、この二百五十人とを合して、千二百五十人となり、釋尊が諸方に遊化せられる時に、常隨の比丘の如く考へられ、諸種の經典に、佛は千二百五十人の比丘と倶なりきとあるのは、此の數をいふのである。

第六還至父國品、釋尊が成道後始めて、父國迦維羅越（Kapila-vastu）城を訪問し、父王閱頭檀(Śuddhodana)及び諸釋迦族に說法をし、ために諸釋子が出家し、或は歸佛するに至つた。以上上卷。

第七須達品、舍衞城の須達（Sudatta）卽ち給孤獨(Anāthapiṇḍika)長者が、佛に歸依し、祇陀(Jeta)太子の所有林を買つて、祇園精舍を寄附するに至つた因緣を述べてゐる。その他、五百の婆羅門が、佛敎に歸依するに至つた物語等をも擧げてゐる。

paṅkara-buddha）の時に無垢光といふ婆羅門の童子となつて、賢劫の世に釋迦牟尼佛となるとの授記（豫言）を受け、それから修行をして、或は飛行皇帝（轉輪聖王）となり、或は梵天となり、帝釋となり、數十百返の生死を重ね、三阿僧祇と九十一劫の間、六波羅蜜を行ひ、十地行をなして、遂に一生補處の菩薩として、兜術（都率）天上に生ずる迄を述べる。

第二菩薩降神品、菩薩は兜率天を降り、白象に乘つて來り、白淨王（淨飯王）の摩耶夫人の胎に入り、月滿ちて四月八日に降誕し、長じて種々の學問を習ふ。

第三試藝品、太子十七歳に至り諸釋子と、諸藝を試合して優勝し、裘夷（Gopā）と名ける夫人を娶つたが、其の後太子は、世の愛慾等を樂しまず、周圍の人は心配して、更に衆稱味（Yaśodharā）、常樂意の二夫人をも娶らせた。然し太子は樂しまなかつた。

第四遊觀品、これが所謂出家の直接原因とせられてゐる四門出遊の物語である。又、農務を觀てゐる時に、諸の有情の弱肉强食の實際をも目擊したとも述べてゐる。

第五出家品、太子は世間を厭ふ心、益ゝ甚しく、年十九に至り、愈ゝ夜半に愛馬騫特に乘り、從者闡特（車匿）を連れて踰城出家せられる。途中摩竭國の瓶沙王は、太子のすぐれた容貌を見て、王とならんことを勸告したけれども、辭して山に入り、阿蘭迦蘭（Ārāḍakalāma）等に就いて修行する。

第六六年勤苦品、菩薩は彼等修行者の敎に滿足せず、自ら六年の間端坐して一心に修行し、身體瘦せ細り、氣力衰へた。この時、二女から乳糜の供養を受けて元氣を回復し、愈ゝ菩提樹下に向ひ、金剛座に安坐入定した。

第七降魔品、恩愛、常樂、大樂の三魔女を首として、大小諸種の惡魔の襲來を降伏し、遂に明星の出づる時に、廓然として成道せられた。そして十八法（十八不共法）、十神力（十力）、四無所畏等を具備せられた。

以上を以て修行本起經は終つてゐる。即ち佛傳の中で第一部と第二部とだけを取扱つてゐるのである。

中本起經は、恐らくは修行本起經の後を承けたものである。何となれば、修行本起經の最後の部分に、佛が菩提樹下で成道して、提謂、波利の二賈客に、三自歸、五戒を授けて信者となしたとあり、中本起經には、その後を承けて、殆んど同樣の文句を繰り返してゐるからである。即ち兩者を比較すれば左の如し。

修行本起經

是時佛在摩竭提界善勝道場貝多樹下、德力降魔、覺慧神靜、三達無礙、度二賈客、提謂波利、授三自歸、及與五戒、爲淸信士、念昔錠光、莂我爲佛、汝後百劫、當得作佛、名釋迦文

ふことになる。釋尊の滅後、餘り遠くない時代の佛教徒にとつては、成道後の事實は自ら直接に見たり、先輩から聞いたり、或は阿含經の諸所に說いてあつたりした爲めに、特別に說く必要がなかつた。寧ろ彼等にとつては、過去世の修行、成道前の狀態が問題とせられた。その爲めに出來たのが、右の因緣談である。故に佛傳の體裁としての發達を言へば、因緣談の部分が、最初に出來たと見なければならぬ。

次に佛傳の第三部として、成道後四十五年間の佛としての遊化說法がある。これは前に述べた如く、原始經典の諸所に散在してゐる。佛の傳記を、歷史そのものを問題にしなかつた印度佛教徒に於ては、その部分を完全に記述し整理しておかなかつたから、佛傳文學としては、成道、初轉法輪、耶舍出家、三迦葉歸佛、舍利弗目連歸佛、迦毘羅城訪問等、數個の重要な事件を除いて、別に統一したものがない。佛傳文學は、元來本起、本行の名によつて示される如く、因緣談が主であり、第三部は附けたりで、第二部の後に加說せられた形をなしてゐる。故に多くの佛傳は成道、(修行本起經)、轉法輪(異出本起經)、乃至、三迦葉の歸佛(太子瑞應本起經)、迦毘羅城訪問(佛本行集經、大莊嚴經、普曜經、衆許摩訶帝經等)迄を取扱つてゐる。

佛傳の第四部としては、佛滅及び滅後の物語があげられる。佛の般涅槃前後に關しては、それ自身獨立した多くの經典が成立した。所謂涅槃經はそれである。これらが佛傳中に採用されたのは、かなり後期に屬する。第一部から第四部迄を具備して始めて、完全な佛傳文學といふことが出來る。この意味に於て完全なる佛傳文學の出來たのは、ずつと後のことである。本行經、佛所行讃、僧伽羅刹所集經等がそれである。佛本行經は般涅槃迄を、後の二經は阿育王迄を述べてゐる。

二、佛傳中に於ける中本起經の位置

扨て佛傳は、概觀すれば右の如くであるが、今、國譯する中本起經は、いかなる體裁のものであらうか。この經には、第三部のみを說いてゐる。即ち成道後の初轉法輪から佛在世に於ける諸教化の事實を述べてゐるのである。この經が何故に第一部、第二部の佛傳を含んでゐないかと言ふに、元來中本起經は一つの佛傳の後半をなしてゐるもので、この經の前半を說くものに、修行本起經なる、姉妹經がある。この兩者を合すれば、かなりよく纏つた佛傳となる。先づ順序として修行本起經の大體を言へば、この經は上下二卷から成り、七品に分けられる。

第一現變品、釋迦牟尼佛が錠光佛(Dī-

中本起經解題

一、佛傳文學の概觀

傳記といふのは、主として或る人の一代記であるが、然し茲に佛傳といふ時には、普通の一代記とは異つてゐる。佛陀が、人間天上、卽ち一切世界での最も勝れた人として出世せられたのは、因果の思想によつて說明せられ、それは過去世に於て無數劫の間、菩薩としての大修行を積まれた結果であるとする。卽ち佛傳には、第一部として、佛陀の過去世に於ける物語がある。釋迦牟尼佛は、三祇九十一劫の間、菩薩としての修行をせられた。この部分で一番重要なのは、菩薩としての釋迦佛が、修行の第一阿僧祇劫の初に當つて、燃燈佛(定光佛)(Dīpaṅkara-buddha)の時に、善慧(Sumedha)道人として、始めて佛に遇ひ、佛を禮拜供養して、後世に釋迦牟尼佛となるべしといふ豫言を受けたことである。それから無數の佛の出世に遭ひ、六波羅蜜等の修行を爲し、最後に一生補處の菩薩として、都率天に上生する、都率天は佛の候補者の生れる所である。現に釋迦佛の次に出世すべき彌勒菩薩は、都率天に於て說法して居られると傳へられる。以上で第一部を終るが、此の部に入るべき菩薩修行の種々なる物語が、例の本生譚(Jātaka)である。その中には、釋尊自身の語られたものもあるかも知れぬが、後に五百五十の物語が創作せられた。この本生譚は、純粹に佛傳とは言へないが、佛傳を最も廣義に解する時は、これもその中に入ることになる。

以上の如く業因果に關する佛の前生の物語の外に、佛傳には猶ほ世俗に從つて、佛陀の生れられた世俗的の種族、卽ち釋迦族を日種として、甘蔗王以來釋迦佛卽ち悉達太子に至る王統を說明せんとする企も行はれた。

佛傳の第二部として、佛が都率天から印度の迦毘羅城摩耶夫人の母胎に宿り、月滿ちて悉達太子として誕生し、それから出家して菩提樹下に於て成道せられた迄の物語がある。第一部と第二部とは、成佛せられる以前の物語で、如何なる因緣によつて三界獨尊の佛となることができたかの因緣談(Nidāna-kathā)であり、本起とか本行とか言ふのは、佛の過去世に於ける修行なり、起つた事件なりを物語るものとしての名である。故に本起經本行經は本來の意味からすれば、佛傳の第一部第二部、卽ち佛の過去世の修行から菩提樹下の成道までを述べた經典とい

牟尼佛の佛位を紹ぐ補處の菩薩となりて、佛に先ちて入滅し、兜率天の內院に生じて、後四千歲、卽ち人中の五十六億七千萬歲を經て下生すと云ふ。

【七七】 波斯匿王(Prasenajit)。舍衞國の王なり。

【七八】 迦惟羅越。迦惟羅閱に同じ。

【七九】 維耶離(Vaiśāli)國。中印度に屬し、恒河の北にあり。

【八〇】 羅閱祇(Rājagṛha)。王舍城。

【八一】 鳩留國(Kuru)。恒河の上流にあり。

【八二】 波羅奈(Vārāṇasī)。中印度に屬し、摩訶陀國の西北にあり。

【八三】 閻浮提(Jambū-dvīpa)。須彌四洲の一、須彌山の南方にあり。

【八四】 十六大國。佛出世の頃、中印度地方に存在せし諸國。

【八五】 晉。東晉時代の支那をさす。

【八六】 天竺國。印度をさす。

【八七】 大秦國。羅馬帝國をさす。

【八八】 月氏。印度の西北にある國。健陀羅國のこと。

【八九】 鐵圍山。梵には斫迦羅婆羅(Cakravāda)と云ふ。須彌世界の外廓をなす高山。

七七波斯匿王、晉には和悅と言ふ、七八迦惟羅越、晉には妙德と言ふ。舍衞國は、晉に無物不有と言ふ。七九維耶離國は、晉は廣大と言ふ。一には度生死とも名く。八〇羅閱祇は、晉に王舍城と言ふ。八一鳩留國は、晉に智士國と言ふ。八二波羅奈は、晉に鹿野と言ふ。一に諸佛國とも名く。八三閻浮提の中に八四十六の大國、八萬四千の城有り。

八國王、四天子有り。東には八五晉の天子有りて人民熾盛なり。南には八六天竺國の天子有りて、土地に名象多し。西には八七大秦國の天子有りて、土地に金銀璧玉饒かなり。西北には八八月氏の天子有りて、土地に好馬多し。

八萬四千の城の中には、六千四百種の人、萬種の音響、五十六萬億の兵衆あり。魚に六千四百種有り。鳥に四千五百種有り。獸に二千四百種有り。樹に萬種有り。草に八千種有り。雜藥に七百四十種有り。雜香に四十三種あり、寶に百二十一種有り。正寶に七種あり。海中に二千五百國有り。百八十國は五穀を噉ひ、三百三十國は魚鼈黿鼉を噉ふ。

五國王は、一王ごとに五百城を主る。第一の王は斯黎王と名く。土地盡く佛に事へて、衆邪に事へず。第二の王は迦羅と名く。土地に七寶を出す。第三の王は不羅と名く。土地に四十二種の香及び白琉璃を出す。第四の王は闍耶と名く。土地に蓽茇・胡椒を出す。第五の王は那頞と名く。土地に白珠及び七色の瑠璃を出す。五大國の城の人は、多く黑くして短小なり。相去ること六十五萬里。是より但海水のみ有りて、人民有る無し。八九鐵圍山を去ること、百四十萬里なり。

佛說十二遊經（終）

に佛十大弟子の一。

【六三】分衞(Piṇḍa)。乞食することなり。

【六四】馬師比丘。梵名 Aśvajit五比丘の一なり。

【六五】諸法從因緣。因果經には、一切諸法本、因緣生無主、若能解此者、卽得眞實道とあり。

【六六】須陀洹道(Śrota-āpanna)。小乘四果中の初果。

【六七】四諦。梵には Catvāri-ārya-satyāni と云ひ、迷悟の因果を分つて四とす。

【六八】阿羅漢(Arhān)。小乘の悟を極めたるもの。

【六九】須達(Sudatta)。舍衞國の長者にて、祇園精舍の施主。

【七〇】祇陀。Jeta, 舍衞國王の太子。

【七一】拘耶尼國(Godhaniya)。須彌四洲の一、須彌山の西方にあり。

【七二】婆陀和(Bhadrapāla)。賢護と譯ず。在家の菩薩なり。

【七三】般舟經。賢護菩薩の請に依り、佛立三昧の法を說けるもの。後漢、支婁迦讖の譯あり。

【七四】屯眞陀羅王(Druma-kinnara)。緊那羅王とも云ふ。

【七五】摩竭(Magadha)國。中印度の古王國、恒河の南にあり。

【七六】彌勒(Maitreya)。釋迦

弟子[六四]馬師比丘を見て、之に問ふ、『何の道士たるが爲にか、衣服常と同じからざる』。馬師比丘答へて言はく、『吾は是れ佛の弟子なり』と。舍利弗問うて言はく、『佛は云何(いか)んが法を說く』と。馬師言はく、『[六五]諸法は因緣よりし、滅すれば諸苦盡く滅す』と。是に於て舍利弗、便はち[六六]須陀洹(すだおんだう)道を得たり。歡喜して便はち還り、目連に報じて言はく、『世間に神人有り』と。目連言はく、『云何んが法を說く』と。舍利弗、具(つぶ)さに本末を說く。目連、便はち須陀洹道を得たり。二人、便はち相將て、及び弟子と、佛所に至る。未だ至らざるに、佛、已に預知し、便はち比丘に告げて言はく(のたま)、『今當(まさ)に二賢士有るべし。一人は智慧比丘と名け、一人は神足比丘と名く』と。須臾にして來り到る。佛、爲に[六七]四諦を說きたまふ。舍利弗は、七日にして[六八]阿羅漢を得、目連は、十五日を以て阿羅漢を得たり。

六年、[六九]須達、太子[七〇]祇陀と共に、佛の爲に精舍を作る。十二の佛圖寺、七十二の講堂、三千六百間の屋、五百の樓閣を作る。

七年、[七一]拘耶尼國にて、[七二]婆陀和菩薩等八人の爲に、[七三]般舟經を說きたまふ。

八年、柳山の中に在(ま)して、[七四]屯眞陀羅王の弟の爲に法を說きたまふ。

九年、穢澤(えたく)の中にて、陀蝠摩の爲に法を說きたまふ。

十年、[七五]摩竭國に還り、弗迦沙王の爲に法を說きたまふ。

十一年、恐懼樹の下にて、[七六]彌勒の爲に本起を說きたまふ。

十二年、父王の國に還りて、釋氏の精廬を爲さんとし、城を去ること八十里にして、差摩竭の爲に法を說きたまひ、國に還りて、父王及び釋迦種の爲に法を說きて、八萬四千人を度し、須陀洹道を得しめたまふ。

是の十四國は、佛、十二年、中に遊化して法を說きたまふ。

【五二】鹿野園。梵には Mṛga-dava と云ひ、釋迦牟尼佛、始て法輪を轉じ、五比丘を度せしところ。

【五三】阿若拘憐。梵には Ajñāta Kauṇḍinya と云ひ、五比丘の隨一。

【五四】提和竭羅佛。Dīpaṃkara.

【五五】鬱爲迦葉。Uruvilvā-kāśyapa.

【五六】象頭山。中印度摩揭陀國伽耶城附近にある山。伽耶山と云ひ、山頂象頭に似たればこの名あり。Gaya ja, Śirṣa

【五七】龍。八部衆の一、梵には那伽(Nāga)に作り、神力ありて風雲を化作す。

【五八】鬼神。變化自在にして大力を有し、佛法・王法を護持し、或は魔道を用ひて佛道修行者を障害す。

【五九】竹園。卽ち迦蘭陀竹園(Karaṇḍaveṇuvana)にて中印度摩竭陀國王舍城の南方、迦蘭陀村にあり。

【六〇】舍衞。梵名室羅伐悉底(Śrāvastī)。中印度に屬し、迦毘羅衞國の西北に在り。

【六一】舍利弗(Śāriputra)。佛十大弟子の隨一、智慧第一と稱せらる。

【六二】目連(Maudgalyāyana)。中印度王舍城に近き拘離迦村に住せる波羅門の子なり。後

菩薩の婦の家は、瞿曇氏を姓とし、舍夷の長者にして、水光と名く。其の婦の母は、月女と名く。一城有り、居、其の邊に近し。女を生むの時、日將に沒せんと欲して、餘明其の家を照し、室內皆明かなり。因りて之に字して[四七]瞿夷と爲す。――晉には明女と言ふ。[四八]――瞿夷は是れ太子の第一夫人なり。其の父は水光長者と名く。太子の第二夫人にして、[四九]羅云を生める者を[五〇]耶惟檀と名く。其の父を、移施長者と名く。第三夫人は、[五一]鹿野と名く。其の父を釋長者と名く。三婦有るを以ての故に、太子の父王、爲に三時殿を立つ。殿に二萬の婇女有り。三殿に凡て六萬の婇女有り。太子は當に遮迦越王と作るべきを以ての故に、置くに六萬の婇女有り。

佛、二十九を以て出家し、三十五を以て道を得、四月八日より七月十五日に至り、樹下に坐する事、一年爲り。

二年、[五二]鹿野園の中に於て、[五三]阿若拘憐等の爲に法を說く。復、畢婆般等の爲に法を說く。復、迦者羅等十七人の爲に法を說く。復、大才長者及び二才念優婆夷の爲に法を說く。復、正念尼犍の爲に法を說く。復、[五四]提和竭羅佛の時の四十二人の爲に法を說く。

三年、[五五]鬱爲迦葉兄弟三人の爲に法を說き、千比丘に滿ず。

四年、[五六]象頭山上に、[五七]龍・[五八]鬼神の爲に法を說く。

五年、[五九]竹園の中に於て、私呵昧の爲に法を說く。

五年去りて未だ[六〇]舍衛に至らざる時なり。[六一]舍利弗、婆羅門と作り、百二十五の弟子有り、一樹の下に坐す。時に[六二]目連、彌夷羅國中の爲に承相將軍と作る。出で行きて舍利弗の樹下に坐するを見、便はち舍利弗に問ふらく、『何なんが爲に此に在りて坐するか』と。舍利弗答へて言はく、『吾、道を學ばんと欲す』と。目連言はく、『願はくば君を以て伴と爲ん』と。即ち百官群臣をして還り去らしめ、唯、百二十五人のみを留む。二人合して二百五十人有り。舍利弗城に入りて[六三]分衛す。佛

なり。

【三九】 阿難(Ānanda)。多聞第一を以て稱せらる。提婆の弟、佛の從弟なり。後に佛十大弟子の一。

【四〇】 穀淨王。梵名は(Dronadana-rāja)。釋迦牟尼佛の叔父なり。

【四一】 釋摩納(Mahānāma)。

【四二】 阿那律。梵名は阿㝹樓馱(Anuruddha)、佛の從弟なり。後に佛十大弟子の一、天眼第一を以て稱せらる。

【四三】 設淨王。梵名は(Sukl-odana-rāja)。

【四四】 迦惟羅閲(Kapilavastu)。中印度にあり、釋迦族の領土。

【四五】 丈五四寸。一丈五尺四寸。以下之に準ず。

【四六】 外家。妃の家。

【四七】 瞿夷(Gopikā)。

【四八】 晉。東晉の迦留陀伽は之を明女と譯す。以下之に準ず。

【四九】 羅云。即ち羅睺羅(Rāhula)、釋迦牟尼出家以前の子なり。後に佛十大弟子の一、密行第一と稱せらる。

【五〇】 耶惟檀。即ち耶輸陀羅(Yaśodharā)。拘利城主善覺長者の女とするを普通とするも、本經は移施長者の女とす。

【五一】 鹿野。又鹿王とも云ふ。Mrgaja

何に緣りてか、本の常坐を捨てゝ、他樹に就いて坐するか』と。天子有り、菩薩の意を知りて、天に答へて言はく、『卿、知らずや、今は菩薩、[二八]閻浮利に下生せんと欲し、何の國に生ずべきかを觀ず。唯、白淨王の家にのみ生ずべし』と。是に於て諸天皆言はく、『今、菩薩、下生す、當に何を以てか贈送るべき』と。各、方計を設けて言はく、『唯、淨明天上の四百四寶のみ』と。奇鏤別異にして、各、名類有り。同じく寶華有り、以て車乘と爲し、伊羅慢龍王、以て制乘と爲る。[二九]白象と名く。其の毛羽[三〇]白雪山の白きに踰ゆ。象に三十三頭有り。頭に七つの牙あり。一牙の上に七つの池あり。池の上に七つの[三一]憂鉢蓮華有り。一華の上に一玉女有り。菩薩、八萬四千人の天子と、白象の寶車に乘りて來下す。

時に[三二]白淨王の夫人、中寐して白象の髣髴たるを見、寐寤惕驚し、寤めて以て王に告ぐ。

菩薩の父は、白淨と名く。其の父、兄弟四人なり。白淨王に二子有り。其の大なるを[三三]悉達と名け、其の小子を[三四]難陀と名く。菩薩の母は[三五]摩耶と名け、難陀の母は[三六]瞿曇彌と名く。菩薩の叔父は[三七]甘露淨王と名け、亦二子有り。長子を[三八]調達と名け、小子を[三九]阿難と名く。菩薩の中叔は[四〇]穀淨王と名け、二子有り。大子を[四一]釋摩納と名け、小子は[四二]阿那律なり。菩薩の小叔は[四三]設淨王と名け、二子有り。大子を釋迦王と名け、小子を釋少王と名く。[四四]迦惟羅閱國に、八城有り。合して九百萬戶有り。

調達は四月七日を以て生れ、佛は四月八日を以て生れ、佛弟難陀は四月九日を以て生れ、阿難は四月十日を以て生る。

調達の身長は[四五]丈五四寸、佛の身長は丈六尺、難陀の身長は丈五四寸、阿難の身長は丈五三寸なり。其の貴姓舍夷は、長さ一丈四尺、其の餘國は皆長さ丈三尺なり。

菩薩の[四六]外家は、城を去る八百里、瞿曇氏を姓とし、小王と作り、百萬戶を主り、一億王と名く。

より人身に起る病苦の總數。

【二六】白淨(Śuddhodana)。即ち淨飯王なり。

【二七】兜術天(Tusita-deva)。即ち兜率天にして、欲界六天の第四なり。

【二八】閻浮利(Jambū-dvipa)。即ち閻浮提。須彌四洲の一にて須彌山の南方にあり。利は剎の誤ならんか。

【二九】白象。象は大威力ありて而もその性本來柔順なり。故に菩薩、白象に乘じて降下す。

【三〇】白雪山(Himālaya)。閻浮洲の北に存する高山。大雪山とも云ふ。

【三一】憂鉢蓮華(Utpala)。

【三二】白淨王夫人。佛母。即ち摩耶 Māyā なり。

【三三】悉達(Siddhārtha)。佛の出家前に於ける稱呼。

【三四】難陀(Nanda)。摩耶夫人の妹波闍婆提の生む所にして、釋迦牟尼佛の異母弟。

【三五】摩耶(Mahāmāyā)。淨飯王の妃にして、釋迦牟尼佛の生母。

【三六】瞿曇彌(Gautami)。佛の姨母摩訶波闍婆提なり。

【三七】甘露淨王(Amritodana-rāja)。甘露飯王とも書き淨飯王の弟。

【三八】調達。即ち提婆達多(Devadatta)にして佛の從弟

何れか嗣を繼ぐべき。痛を忍ぶこと此の如きを』と。菩薩、答へて言はく、『命、須臾に在り。何ぞ子孫を陳べん』と。是に於て國王、左右をして彊弩を以て、箭を飛ばし、射て之を殺さしむ。是に於て土中の餘血を取り、泥を以て之を團め、各左右に取りて、山中に持著し、其の精舍に還る。左面の血は左器の中に著く、其の右も亦然り。大瞿曇言はく、『子は是れ[12]道士なり。若し其れ至誠ならば、[13]天神、當に血をして化して人と成らしむべし』と。却後十月にして、左は卽ち男と成り、右は卽ち女と成る。是に於て卽ち瞿曇氏を姓とす。一に[14]舍夷仁と名く。[15]賢劫來、始めて寶如來[16]釋迦越と爲り、壽、五百萬歲なり。自下の二十五王は、其の壽、三百萬歲なり。[17]文陀竭王は、壽、百萬歲、頂生王[18]遮迦越の[19]左髀右髀王は、皆壽、十萬歲なり。歡喜王より、諸王は、皆壽、八萬四千歲なり。惡念遮迦越より、一牛を殺して祠祀し、害命に[20]金輪を失ひて、[21]銀輪を得、三天下を主る。壽、萬歲なり。堅念王、鎧を作りて、壽、五千歲なり。[22]銅輪を得て二天下を主る。西南に主たり。喜殺王は、壽、二千五百歲なり。[23]鐵輪を得て南天下を主る。其の王に太子有り。[24]五惡を行ず。一を殺して、壽千歲を減ず。古へ、人に、九病有り――寒・熱・飢・渴・生・老・病・死、婆羅門の生を殺して祠祀する――是より[25]四百四病を生ず。師子念王より、人壽轉減して、壽百二十歲なり。師子念王より後、師子意王、八十四王有り。人の命減じ、或は壽、八十、七十、五十、三十、二十、十歲なる者あり。是より後、師子命車王有り。[26]白淨と名く。是れ菩薩の父なり。菩薩の身を計るに、終始幷に前後、八萬四千なり。遮迦越王を瞿曇氏と名く。純熟の姓なり。

菩薩、兜術天の上に在りて、意に下生せんと欲して、天上を觀ず、「誰の國に生ずべきか」。言はく、「唯、白淨王の家にのみ、身を生ずべし」。是に於て天上に樹有り。[27]兜曇樹と名く。菩薩、退きて他の樹下に坐して思惟するに、其の本の樹に復精光無し。是に於て天有り、問うて言はく『菩薩、

【一二】道士。修道者、沙門の意なり。
【一三】天神。天上の諸神。
【一四】舍夷仁。舍夷は Śāki ならん。釋迦 Śākya の女姓なり。能と譯す。仁は譯者の附加なるべし。
【一五】賢劫(bhadra-kalpa)。三劫の一たる現在の劫。
【一六】釋迦越。Śākya-pati
【一七】文陀竭王(Mūrdhagata)。金輪王の名。初、母の頂上より生ずれば頂生王と稱す。
【一八】遮迦越 Cakravarti。轉輪王。
【一九】左髀右髀王。頂より生ぜるにあらず、左髀より、又右髀より生ぜるの義。
【二〇】金輪。金輪寶を感得する大王。四洲界に王たり。轉輪王の感得する輪寶に、金銀銅鐵の四種ありて其、間に優劣あり。
【二一】銀輪。銀輪寶を感得して、銀輪王となりて三天下を主る。
【二二】銅輪。銅製の輪寶。これを感得すれば、二大洲に王たる轉輪聖王となる。
【二三】鐵輪。鐵の輪寶。これを感得すれば、南閻浮提の一洲を統御する帝王となる。
【二四】五惡。殺生、偸盜、邪婬、妄語、飲酒。
【二五】四百四病。四大の不調

佛說十二遊經　一卷[一]

東晉　迦留陀伽譯

昔、阿僧祇劫[二]の時、菩薩、國王爲りき。其の父母、早く喪亡す。國を讓りて、持つて弟に與へ、國を捨てゝ行きて道を求む。遙かに一婆羅門を見る。瞿曇[三]を姓とす。菩薩、因りて婆羅門に從ひて道を學ぶ。婆羅門、菩薩に答へて言く、『體に著くる所の王者の衣服を解きて、髮を編み、莎[四]を結びて衣と爲すこと、吾が服する所の如くし、吾が瞿曇の姓を受けよ』と。是に於て、菩薩、服衣を受けて體を被ひ、瞿曇を姓とす。志を潔くして深山に入り、林藪の嶮阻に、坐禪して道を念ず。婆羅門言はく、『卿は是れ王者なり。久しく尊貴に在つて勤苦を簡[五]る。夏は水を飲み、衆の果蓏を食す可し。冬は城邑に還りて街里に食を乞ひ、其の樹の下に還りて、禪思[六]毀る勿るべし』と。菩薩、其の乞ふ所を食しつゝ、其の國界に還る。國を擧げて、王者より下庶民に及ぶまで、能く菩薩を識る者無し。謂ひて以て小瞿曇と爲す。菩薩、城外の甘果園中に於て、以て精舍[七]を作り、中に獨り坐す。時に國中の五百の大賊、官物を劫取して逃走し、路、菩薩の廬邊に由る。蹤跡放散して、遺物、菩薩の舍の左右に在り。明日、捕賊[八]、賊を追尋すれば、蹤迹、菩薩の舍の下に在り。因りて菩薩を收へ、便はち將て上問す。謂ひて菩薩を國中の大賊と爲す。『前後の劫盜、罪、死に過ぐる有り』。王、便はち臣下に勅したまはく、『此の如きの人、法、應に木を以て身を貫き、立てゝ大標と爲すべし』と。其身より血出で、流れて地に下る。是の大瞿曇、深山の中に於て、天眼[九]を以て徹視して之を見、便はち神足[一〇]を以て、飛來して之に問ふ、『子、何の罪有りてか、其の痛酷乃ち爾る乎。瘡、豈傷毒ますや。苦を忍ぶこと斯の如きを』と。菩薩、答へて曰はく、『外に瘡痛有るも、内に慈心を懷く。知らず、何の罪ありてか、横に誅害せらるゝ』と。大瞿曇言はく、『卿に、[一一]子姓無し。當に

【一】東晉の迦留陀伽譯、一卷、佛、三十五歲にて成道し、其後十二年にして始て父國に還る。其の十二年間の遊化を記す。

【二】阿僧祇は梵語Asaṃkhyaya、無數と翻ず。劫は年時の名。

【三】瞿曇（Gotama）は印土古代の仙人にして、釋迦族の祖先なりと稱せらる。

【四】莎。一種の草。

【五】簡。或は不閑の誤にてもあらんか。然らば「ならはず」なり。

【六】禪は禪那の略。寂靜の義なり。寂靜に思惟するを禪思と云ふ。即ち禪定なり。

【七】精舍。精進なる行者の住居。

【八】捕賊。捕吏なり。

【九】天眼（Divya-cakṣus）。天趣、又は禪定等に依りて得たる眼にて、遠く廣く微細に事物を見る事を得。

【一〇】神足。神は不測の義にて所爲の神異なるを稱し、足は所爲自在にて遊涉無碍なるに譬ふ。六通の一なり。

【一一】子姓。宋元明の三本には、子姪とあり。後繼者の意なり。

う。

(三)の十二年間の遊化の大體を、かく逐次に述べるものは、僧伽羅刹所集經以外には之を見ぬ。しかも本經は獨特の說をなす點に於て注意すべきものがある。即ち四月八日より七月十五日に至る間を一年とするを以て、鹿苑說法を第二年とし、度三迦葉を第三年とし、舍利弗の歸佛を第五年とする等、他の殆んど言はない所である。

殊に般舟經、屯眞陀羅經、彌勒經、差摩竭經等の如き大乘經典に關說せるも、他に見ぬ所である。

(四)その他に於ては、釋尊の出家を以て二十九歲とし、成道を三十五歲とするも、經說にはあるが、佛傳には他に見ぬ所である。又、祇園精舍の規模を以て、十二佛圖寺・七十二講堂・三千六百間屋・五百樓閣とするも、好箇の資料であり、その他にては、佛時代の諸國、八國王四天子の如き記事もあり、而して最後の五國王は暗示多き記事と思はれる。

斯く見る時は、極めて小經なるに係はらず、頗る多量の材料を含めるもので、相當に重要視せらるべく、記事の體裁は、翻譯といふよりも寧ろ選述と見らるべき底のものである。恐らくは迦留陀伽が諸經律に散說せらるゝ諸傳を、綜合し來れるもので無からうかと思ふ。然らば兩譯あつたといふ事は、そのまゝに肯定出來ぬ事となる。

昭和七年五月三十日

譯者　常盤大定　識

佛說十二遊經解題

「佛說十二遊經」東晉西域沙門迦留陀伽譯。

梵名は明でない。

【漢譯】「出三藏記集」以下諸經錄に依れば、本經には古く二譯あつた如くである。而して「出三藏記集」は、兩者共に失譯としてゐる。「大唐內典錄」には一は晉武帝大始二年(266, A.D.)外國沙門彊良流至譯、二は晉孝武帝太元十七年(392,A.D.)外國沙門迦留陀伽譯とし、「開元釋敎錄」には、一は武帝(晉景帝の誤なるべし)太康二年辛丑(281, A.D.)彊良婁至譯、二は大唐內典錄と同じく晉孝武帝太元十七年、外國沙門迦留陀伽譯としてゐる。以後の經錄は、多く之にしたがつてゐる。而して此等の二譯は、多く異らずと、總ての經錄が言つてゐる。

【成立年代】若し開元錄の所說が正しいとすれば、本經成立の最下年代は(281, A.D.)となり、內典錄に依れば、尙少く遡つて(266, A.D.)となる。然し果してこれら二錄が、出三藏記集の失譯とする以上に、權威あるものであるか疑なきを得ない。而してその最上限は、本經に般舟三昧經、彌勒本起經を引いてゐるが、これらは大體世紀前一世紀の成立と見られるから、紀元前後を以てその最上限と推定する事は出來よう。何れにしても大乘の佛傳としては古いものに屬し、それだけ大乘味も少い。

【大意】本經はその名の示す如く、佛成道後十二年間の遊化を中心とした佛傳であるが、その他の敍述も多く含んでゐる。大別すれば

(一)釋迦族の祖先及び家系。
(二)佛降神母胎より出家迄。
(三)出家成道より十二年間遊化。
(四)當時の諸國人民等。

となる。しかも此等が他の如何なる傳說とも殆んど一致せず、獨特のものである事は、注目に値する。

(一)釋迦族の祖先は通常甘蔗王(Ikṣvāku)とし、大仙の血から生じた二甘蔗から生れた(本行集經)とされるが、本經に於ては、說話の類似はあるが、全く之と異つてゐる。又其後の系統も、各傳と全く一致しない。

(二)佛陀の伯叔從兄弟に關する傳も、亦各傳と一致しない。而してその妃の、夢に白象を見て、受胎するといひ、妃を三人とし、その名をあげてゐるものは、よく說一切有部の傳說に合し、從兄弟の傳も大體それに近い所からすれば、主として說一切有部の傳によつたものであら

育てしが若し。斯の如くすること七年にして仁功勳著にて壽終せり。魂靈上りて梵皇と爲り號して梵摩と曰ふ。彼の天位に處せり。更に天地の七成七敗を歷て當に敗れんと欲せし時に當りて吾れ輙ち第十五約淨天に上昇したり。其の後更に始まれり。復梵天に還れり。清淨無欲なり。在所自然にして後下りて忉利天帝と爲りしこと三十六返なり。七寶の宮闕飮食被服音樂自然なり。後復た世間に還り、飛行皇帝と爲りぬ。七寶導從す。一には紫金の轉輪。二には明月の神珠。三には飛行の白象。四には紺馬の朱鬣。五には玉女の妻。六には典寶の臣。七には聖なる補臣なり。事々八萬四千なり。王に千子あり。皆端正皎潔なり。仁慈勇武なり。一人は千に當る。

王は爾の時〔至三〕五教を以て政を治め、人民を枉げざりき。一には慈仁にして殺さず恩は群生に及ぶ。二には清讓して盜まず。己を損てゝ衆を濟ふ。三には貞潔にして婬ならず諸欲を犯さず。四には誠信にして欺かず言に華飾なし。五には孝を奉じて醉はず行沾汚無し。

此の時に當りて牢獄設けず。鞭杖加はらず。風雨調適五穀豐熟なり。災害起らずして其の世太平なりき。四天下民相率ゐて道を以てし、善を信じて福を得、惡なれば重殃有り。死して皆天に昇れり。三惡道に入る者無し。

佛、諸の比丘に告げたまはく、昔、我れ前世に四等心を行じて七年の功もて上りて梵皇となり、下りて帝釋となれり。復た世間に還りて飛行皇帝と作りぬ。四天下を典すること數千百世なり。功積み德滿ち、諸惡寂滅し、衆善普會したり。世に處して佛となりて隻步して三界特尊を獨言せり。諸の比丘經を聞いて歡喜し佛の爲に禮を作して去りき。菩薩の普智度無極なり。明施を行ずること是の如し。

六度集經（終）

【至三】五教。此の五教は所謂佛教の五戒といふに同じ而も第五に飮酒を掲ぐるは古經典に見る多し。

元妃侔りて曰はく「大王、悅ばずんば具さに伎樂を奉ぜん」と。飲むに葡萄酒を以てしければ重ねて醉ふて知ること無し。其の舊服に復して迯つて麁床に著けり。酒醒めて卽ち寤り。其の陋弊賤衣舊の如きを覩たり。百節皆痛むこと猶し杖楚を被るがごとし。

數日の後、王又之に就けり。翁曰はく「前に爾と酒を飲み、【五二】湎眩知る無し。今始めて寤れるのみ。夢に王位に處し、衆官を平省したるに國史過を記せり。群僚切磋し、內に惶灼を懷けり。百節の痛みは笞を被りて踰えざるなり。夢すら尙斯の若し。況んや眞の王となるをや。往日の論定んで然らざると爲す」と。王は宮內に還り、群臣と斯の事を講論したれば笑ふ者耳を聒したり。王は群臣に謂つて曰はく「斯れ一身の視聽を更ふる所なり。今より始めてすら尙自ら知らず。豈況んや異世故きを捨て、新を受けて、衆艱魃魅の拂痱忤の困を更ふるをや」と。而も云へり。「靈化の往く所、身を受くるの土を知らんと欲するも豈難からざらんや」と。

經に曰はく「愚、衆邪を懷きて魂靈を覩んと欲するも猶曚晦の行なり。仰いで星月を視、躬を勞して齒を沒するも何時能く覩んや」と。是に於て群臣率土黎庶は始め魂靈と元氣と相合し終りて復た始まり、輪轉して際無きを照して生死と殃福の所趣有るを信じたり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、時の王者は是れ我が身なり。菩薩の普智度無極なり。明施を行ずること是の如し。

九十一、梵摩皇經

是の如きを聞けり。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。佛、諸の比丘に告げたまはく、汝等德を修めて衆善を奉行せば必らず景福を獲ん。譬へば農夫宿に良田有るが如し。耕犂調熟に雨潤和適に種を下すに時を以てし、節に應じて生ぜん。草穢を芸除して又災害無し。何ぞ獲ざるを懼れん。昔、我れ前世に未だ佛たらざりし時、心弘く普愛し愍みて衆生を濟ふこと猶し慈母の其の赤子を

【五二】湎眩。飲酒に荒みふけること。

の類と爲し、行に由りて身を受く。厥の形萬端なり。識と元氣と微妙にして覩難し。形糸髪無し。孰れか能く把るを獲ん。然れども其の故を釋して新を稟け終始窮り無し」と。王は靈元化して常體無く五塗を輪轉して綿々として絶えざるを以て群臣の意を釋すらく「衆闇寤め難し猶疑有らん」と。曰はく「身死して神生ず、更に異體を受く。臣等衆けれども往世を知ること尠し」と。王曰はく「論未だ端を志さず。焉んぞ能く歴世の事を識らんや。視れども耗を覩ず。孰れか能く魂靈の變化を見んや」と。

王は閑日を以て私門より出づ。龜衣にて自ら行けり。[四七]補履翁に就いて戯れて曰はく「率土の人孰か樂しまんや」と。翁曰はく「唯王者は樂まんのみ」と。曰はく「厥の樂は云何」と。翁曰はく「百官虔奉し、兆民貢献し、願は即ち心に從ふ。斯れ樂しみに非ざらんや」と。王曰はく「審かに爾の云ふが如し」と。即ち之と飲むに葡萄酒を以てす。厥の醉知る無し。抗して宮中に著けり。元妃に謂つて曰はく「斯の[四八]蹠翁云はく『王者は樂むと』吾れ今之を戯れり。衣王服を以て國政を聽かしむ。衆駭くこと無かれ」と。妃曰はく「敬んで諾す」と。其の醒めたるの日、侍妾伴はりて曰はく「大王酒にて醉へり。衆事猥に積れり。宜しく平省に在るべし。將に出でて臨御せんとす。百揆惟して其の事を平かにせよ」と。矇々[四九]瞢々として東西を照さず。國史過を記し。公臣切磋せらる。座に處すること終日なり。身都べて[五〇]痟痛し、食爲に甘からず。日々痩疵有り。宮女誂りて曰はく「大王の光華損ずる有り何の爲ぞや」と。答へて曰はく「吾れ夢に補蹠翁と爲り躬を勞して食無し。甚だ難きを爲せりと云ふ。故に爲に[五一]痟するのみ」と。衆竊かに之を笑はざるはなし。從寢して寐ねず、展轉反側して、曰はく「吾れは是れ補蹠翁ならんや眞の天子ならんや。若し是れ天子の肌膚ならば何ぞ麁なる。本補蹠翁ならん。緣ありて王宮に處し、余の心荒めり。目精亂れたり、二處の身孰れか眞なるを照さゞらん」と。

【四七】補履。老翁に同じ。
【四八】蹠は補なり。謂はく補履の老翁なり。
【四九】瞢々。くらき貌にいふ語。
【五〇】痟痛。骨節痛むこと。
【五一】痟。頭痛のこと。

已に繫世の五宅に墮し　自ら綺すべし行は彼に勝ると
癡を抱き望に住して善を致せりと　以て邪學して得度を蒙れりと
所見聞の諦を受思して　持戒せりと雖も可しと謂ふこと莫かれ
世行を見て悉く隨ふこと莫かれ　黠念すと雖も亦彼れ行ず
與行等も亦敬持す　想の不及過を生ずること莫かれ
是を以て斷じたる後亦た盡く　亦想獨行得を棄つ
自ら知りて以て黠を致すこと莫かれ　見聞すと雖も但だ行觀す。
悉く兩面を願ふこと無かれ　胎の亦胎合して遠離す
亦兩處に所住無し　悉く法を觀て正上を得たり
意受行も見聞する所なり　所邪念小にして想はず
慧は法を觀て意は意を見る　是れより世を捨つるの空を得たり
自ら何の所待有ること無し　本行法は義諦を求む
但だ戒のみを守りて未だ慧を爲さずんば　度無極終に不還ならん

と。

九十、察微王經［察微王の本生］

昔、菩薩あり。大國王と爲れり。名づけて察微と曰ふ。志淸く行淨なり。唯三尊に歸するのみ。佛經を稟翫し心を靖らかにして義を存す。深く人の原始を見るに自は本無生なり。元氣强なるものは地と爲し、軟なるものを水と爲し、煖なる者を火と爲し、動く者を風と爲す。四者焉に和して識神生ず。上明なれば能く覺す。欲を止め心を空にして神本無に還れり。因誓して曰はく「覺は寤めざるの儔（たぐひ）なり。神は四に依りて立つ。大仁を天と爲し、小仁を人と爲す。衆穢離行を蜎飛蚑行蠕動

は何の類ぞや」と。足を持ちし者對へて言はく「明王よ、象は【四五】漆筩の如し」と。尾を持ちし者は言はく「掃箒の如し」と。尾の本を持ちし者は言はく「杖の如し」と。腹を持ちし者は言はく「鼓の如し」と。脇を持ちし者は言はく「壁の如し」と。背を持ちし者は言はく「高き机の如し」と。耳を持ちし者は言はく「【四六】簸箕の如し」と。頭を持ちし者は言はく「魁の如し」と。牙を持ちし者は言はく「角の如し」と。鼻を持ちし者は對へて言はく「明王よ。象は大索の如し」と。

復た王の前に於て共に訟ふて言へり。「大王よ。象は眞に我が言の如し」と。鏡面王は大いに之を笑ふて言はく「瞽ならんや。瞽ならんや。爾は猶佛の經を見ざるものなり」と。便ち偈を說いて言はく、

今無眼の曹たるや　空諍して自ら諦と謂ふ
一を覩て餘は非ざるなりと云ふ　一象に坐して相怨めり

と。

又曰はく「夫れ小書を專らにして佛經の汪洋として無外に巍々たる無蓋の眞正者を覩ず。其れ猶眼無きがごとからんか」と。是に於て尊卑は並に佛經を誦せり。

佛、比丘に告げたまはく、「鏡面王とは卽ち吾が身是れなり。無眼人とは卽ち講堂の梵志是れなり。是の時の子曹は智無し、盲に坐して諍を致せり。今諍ふも亦冥なり。諍に坐するは益無し。佛、是の時具さに此の卷を撿し、弟子をして解せしめ、後の爲に明を作り。我が經道をして久しく住せしむ。是の義足經を說きて

自ら冥して是を言ふ彼れ及ばずと　癡に著して日漏る何時明かならんと
自ら道無くして學悉く然らんと　倒亂して行なし何時解せんと
常に自ら覺りて尊行を行ず　自聞し見行して比無し

【四五】　筩は竹筒のこと。
【四六】　簸箕。糠を去る箕。

合せり。汝の知る所は道に合せず。我が道法は施行すべし。汝の道法は親しむべきこと難し。前説、に當るを說いて後に著け、後說に當るを反りて前說せり。多の法說くは非なり。重擔と與に擧ぐること能はず。汝の爲に義を說くも解する能はず。汝空しく知る汝は極めて所有無しと。汝迫りて復た何ん」と、對ふるに、舌戟を以てす。轉相の中、害一毒を被りて報ふるに三を以てす。

諸の比丘、子曹の惡言を聞ける是の如し。亦子曹の言を善しとせず、子曹の正しきを證せず、各坐より起ちて舍衞に到りて食を求めたり。食し竟りて應器を藏し、還りて祇樹に到れり。佛の爲に禮を作し、悉く一面に坐して事の如く之を說いて「念ずるは是れ曹梵志なり。其の學自ら苦しめり。何時當に解すべきや」と。

佛、比丘に告げて言はく「是曹の異學は一世の癡冥に非ず。比丘よ、過去久遠に是の閻浮提の地に王有り、名づけて鏡面と曰ふ。佛の要經を諷して智恒沙の如し。臣民は多く誦せず、銷小書を帶し、螢灼の明を信ぜり。日月の遠見を疑ひければ目瞽の人を以て喩と爲し、彼の行獨を捨てゝ巨海に遊ばしめんと欲す。使者に勅して國界を行き、生盲者を取りて皆將に宮門に詣らしめんとせり。臣、命を受けて行き、悉く國界眞無き人を將ゐて宮所に到り、白して言さく「已に諸の眼無き者を得たり。今殿の下に在り」と。

王曰はく「將ゐ去りて象を以て之に示せ」と。臣王命を奉ず。彼の瞽人を引いて將ゐて象の所に之けり。手を牽いて之に示せり。中に象の足を持てる者、尾を持てるもの、尾の本を持てる者、腹を持てる者、脇を持てる者、背を持てるもの、耳を持てるもの、頭を持てるもの、牙を持てるもの、鼻を持てる者有り。瞽人は象の所に於て之を爭ふこと紛々たり。各己は眞にして彼は非なりと謂へり。使者牽いて還れり。將ゐて王の所に詣れり。

王之に問ふて曰はく「汝曹象を見たるや」と。對へて言はく「我曹俱に見たり」と。王曰はく「象

念彌とは是れ我が身なり。諸の沙門仂行精進せよ。生老病死憂惱の苦を脱すれば應眞滅度の大道を得べし。悉く行ずる能はずとも不還・頻來・溝港の道を得べきなり。明者は深く惟るに人命は常無し恍惚として久しからず。纔かに壽百歳だに或は得るあり、或は得ざるあらん。百歳の中凡そ三百時を更り、春夏冬月各其の百を更り、千二百ヶ月を更る。春夏冬節各四百月を更り、三萬六千日を更る。春は萬二千日を更り、夏暑く冬寒く各萬二千日あり。百歳の中に一日再飯すれば凡そ七萬二千飯を更る。春夏冬の日各二萬四千飯を更るなり。幷に其の嬰兒たりし乳哺未だ飯する能はざる時、儽し懅れて飯せず、或は疾病、或は瞋恚、或は禪或齋、或は貧困にして食に乏しきの時を除く。皆七萬二千飯中に在り。百歳の中、夜臥して五十歳を除く。嬰兒たりし時十歳を除く。病時十歳を除く。家事及び餘事を營みて憂ふる二十歳を除く。人壽百歳纔かに十歳の樂を得んのみ。

佛、諸の比丘に告げたまはく「吾れ已に人命を說きて年を說き、月を說き日を說き、飯食壽命をも說けり。吾れの當に諸の比丘の爲に說くべき所の者は皆已に之を說けり。吾が志の求めし所は皆已に成ぜり。汝ら諸の比丘の志願の求むる所も亦當に之を卒はるべし。當に山澤に於て若しは宗廟に於て經を講じ道を念じて懈惰を得ること無かるべし。決心の士は後に悔いざる無かれ」と。

佛、經を說き已りたれば諸の比丘歡喜せざるは無し。佛の爲に作禮して去りき。

八十九、鏡面王經〔鏡面王の本生〕

是の如きを聞けり。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。衆比丘食時を以て[四四]應器を持して城に入りて食を求めたり。而るに日未だ中らず。心に倶に念言して城に入る甚だ早し。我曹寧ろ倶に異學の梵志講堂に到りて坐して須臾すべけんや」と。僉然曰はく「可し」と。卽ち倶に彼に之けり。諸の梵志と更に相勞來せり。便ち座に就いて坐せり。是の時梵志自ら共に經を爭へり。結を生じて解せず。轉た相謗怨して「我れ是の法を知れり。汝は何なる法を知るや。我が知る所は道に

【四四】應器。比丘の食器、鐵鉢のこと、梵名(Pātra)鉢多羅なり。法に應ずる食器のこと。人の供養を受くべき者の用ふる食器のこと。量に應ずる器より應量器ともいふ。

するがごとし。命の流去は又此より促し。人命譬へば水の山より下り晝夜進疾して須臾も止まることと無きが若し。人命の過ぎ去る此より疾きこと有り。晝夜に死に趣けり。進疾して住まること無し。人世間に處して勤苦すること甚だしければ憂念多し。人呼得難く斯を以ての故に當に正道を奉ずべし。經戒を守行して毀傷を得ること無かれ。窮乏に布施せよ。人は世に生れて死せざる者無ければなり」と。念彌の諸弟子を教ふるに斯の如し。

又曰はく「吾れ、貪婬・瞋恚・愚癡・歌舞伎樂・睡眠・邪僻の心を棄てゝ清淨心に就きて愛欲を遠離したり。諸の惡行を捐てゝ内に心の垢を洗ひ、諸の外念を滅したれば善を見て喜ばず。惡に逢ふて憂へず。苦樂二無し其の行を清淨にす。心を一にして動かさず第四禪を得たり。吾れ慈心を以て人物を教化し善道を知りて天上に昇生せしむ。悲憐傷愍して其の惡に墮せんことを恐る。吾れ四禪及び諸の空定を見て照達せざるはなし。其の心歡喜し、其の所見を以て萬物を教化す。深法を見せしむ。禪定佛事に若し得者有らば亦之を助けて喜べり。萬物を養護すること自ら身を護るが如し。此の四事を行じて其の心正等なり。眼の受見する所の麁好の諸色、其の耳に聞く所の歎音罵聲・香熏・臭穢・美味・苦辛・細滑・麁惡・可意の願と違心の惱みは好んで欣豫せず。惡んぞ怨恚せざらん。斯の六行を守りて以て無上正眞の道を致せり。若曹も亦當に斯の六行を行じて以て應眞の道を獲べし」と。

念彌なるものは三界衆聖の尊師なり。智慧妙達窈として明かならざるは無し。其の諸弟子未だ即ち應眞道を得ざる者と雖も要らず其の壽終らば皆天上に生ぜん。心寂に志寞たり。禪定を尙ぶものは皆梵天に生ぜん。次に[四〇]化應聲天に生ぜん。次は[四一]不憍樂天に生ぜん。次は[四二]兜術天に生ぜん。次は炎天に生ぜん。次は[四三]忉利天に生ぜん。次は第一天上に生ぜん。次は世間王侯の家に生ぜん。行高きは其の高きを得、行下れば其の下るを得。貧富貴賤、延壽夭逝は皆宿命に由る。念彌の戒を奉ずれば唐しく苦しむ者無し。

【四〇】 化應聲天。別名他化自在天なり。梵名(Paranirmitavaśavartin)波羅尼密婆舍跋提と音譯す。大論に曰はく此天奪他所化。而自娛樂。故言他化自在。亦名化應聲天。別行疏云。是欲界頂天。假他所作。以成己樂。卽魔王也。此の天は欲界の主にして色界の主魔醯首羅天と共に正法に害をなす魔王なりとせり。

【四一】 不憍樂天。別名化樂天なり。梵名(nirmāṇarati)或は(Sunirmāṇa)須涅蜜陀或は尼摩羅と音譯す。大論云。秦言化自樂。自化五塵而自娛樂故言化自樂。楞嚴名樂變化天。六欲天の第五にして仁王經に若し菩薩十億佛國中に住して化樂天王と作り千億法門を修すとあり。

【四二】 兜率天。別名兜率天なり。梵名(Tuṣita)なり。前註第二卷[六六]を見よ。

【四三】 梵名 Trāyastriṃśa なり。前註第四卷[八七]參照。

り。樹に五面有り。一面王及び宮人共に之を食し、二面百官之を食し、三面衆民之を食し、四面沙門道人之を食し、五面鳥獸之を食したり。其の樹果の大なること二斗瓶の如し。味甘蜜の如し。守護者無くとも亦相侵さず。時人皆壽八萬四千歲なりき。都べて九種の病あり。寒熱・飢渴・大・小便・利愛・欲食・多年・老・體・羸の斯の九病有り。女人の年五百歲すれば乃ち行きて出でて嫁せり。

時に長者有り。阿離念彌と名づく。財賄無數なり。念彌自ら惟らく、「壽命甚促なり。生れて死せざる無し。寶は己の有に非ず。數〻災患を致せり。布施して以て貧乏を濟ふに如かず。世榮樂しむと雖も久しく存する者無し。家を棄て穢濁を捐て、清潔を執り〔三九〕袈裟を被て沙門と作るに如かざるなり」と。卽ち賢衆に詣でて沙門の戒を受けたり。凡人念彌の沙門と作れるを見て數千餘人あり。其の聖化を聞いて皆無常にして盛あれば卽ち衰へ存無くして亡びず、唯道のみ貴ぶべきを覺れり。皆沙門と作りて其の教化に隨ふ。念彌諸の弟子の爲に經を說いて曰はく「人命短なるを致し恍惚として常無し。當に此の身を棄てゝ後世に就くべし生れて死せざるはなし。焉んぞ久しく長ずるを得んや。是の故に當に慳貪の心を絕ちて貧乏に布施し、情を撿して欲を攝し、諸の惡を犯すこと無かるべし。人の世に處するに命流甚だ迅なり。人命譬へば朝の草上の露の如し。須臾にして卽ち落ちん。人命も此の如し。焉んぞ久しく長ずるを得んや。人命譬へば天雨墮水して泡起たじ卽ち滅するがごとし。命の流疾泡よりも甚しきあり。人命譬へば雷電の恍惚須臾にして卽ち滅するが若し。命の流疾する雷電より甚だしき有り。人命譬へば杖を以て水を搥たんに、杖去れば水合するが若し。命の流疾する此より甚だしきものあり。人命譬へば熾火上に少膏を炒りて中に著け須臾にして燋盡するが若し。命の流去するは少膏より疾し、人命譬へば織機經縷すれば稍〻滅盡に就くが若し。天命日夜耗捐すること茲の如し。憂多ければ苦重し。焉んぞ久存するを得んや。人命譬へば牛を牽いて市に屠らんに、牛一たび歩を遷さんに一たび死地に近くが若し。人一日を得ること猶し牛の一歩

〔三九〕袈裟。梵名(Kaṣāya)。

人身を放捨すれば天上に上生して釋と相樂まん」と。

佛、阿難に告げたまはく「南王とは吾が身是れなり。子孫相傳へて千八十四世なり。子を立てゝ王となし、父行じて沙門と作れり」と。阿難歡喜して稽首して曰はく「衆祐は衆生を慈愍せらるゝ恩潤卽ち爾く、功德朽ちずして今果して佛を得、三界中の尊と爲りたまひ、諸天仙聖宗敬せざるはなし」と。諸の比丘歡喜して禮を作して去りき。

八十八、阿離念彌經〔阿離念彌の本生〕

是の如きを聞けり。一時、佛、舍衞國の優梨聚中に在しき。時に諸の比丘、中飯の後講堂に坐して、私かに共に講議して「人命短を致し、身安きこと幾くも無ければ、當に後世に就くべし。天人衆物生じて死せざるは無し。愚闇の人慳貪にして施さず、經道を奉ぜず、善して福無く惡して重殃無しと謂ふ。心を恣にして志を快として惡至らざるは無し。佛敎に違ふて後悔いる何ぞ益せん」と。佛、〔三八〕天耳を以て、遙かに諸比丘の非常無上の談を講義せしを聞きて、世尊卽ち起ちて比丘所に至り座に就きて坐せり。曰はく「屬者何をか議するや」と。長跪して對へて曰はく「飯の後を屬するに共に人命恍惚として久しからず當に後世に就くべきを議したり」と。對ふるに上に說けるが如し。

世尊歎じて曰はく「善い哉、善い哉甚だ快し。當に爾家を棄てゝ道を學ぶべし。志は當に清潔ならしむべし。唯善は念ずべきのみ。比丘の坐起するには當に二事を念ずべし。一には當に經を說くべし。二には當に息を禪すべし。經を聞かんと欲するや不や」と。對へて曰はく「唯然り、願樂して之を聞かんとす」と。

世尊卽ち曰はく「昔、國王有り。名づけて拘獵と曰ふ。其の國に樹有り。樹を須波桓樹と名づく。國は五百六十里なり。根を下すこと四被して八百四十里、高さ四千里あり。其の枝四布し二千里な

〔三八〕天耳。天耳通のこと。梵名（Divyaśrotra-abhijñā）なり。六通の第二、天耳と相應する智慧を以て一切の聲境を證智して無礙自在なるをいふ。佛は六通に通達すればなり。

天曰はく「積年の願なり。實に明教の如し」と。帝釋卽ち臂を伸ばせし如きの頃、南王の慈惠の殿上に至りて、南王を見て白はく「聖王の盛德を諸天飢渴して相見えんと思欲せられ、日として願はざるは無し。聖王は豈忉利天を見んと欲するや。其の上自然に願として有らざる無し」と。南王曰はく「善し。遊戲せんと思欲す」と。

帝釋彼を還さんとして御者を呼び名を摩妻と曰へるに「吾が所乘の千馬の寶車を以て南王を迎へ來れ」と。御者命を承はり、天車を以て南王を迎ふ。車至りて闕下に止まりたれば、群臣黎庶愕然せざるはなし。斷の聖王の瑞未曾有なりと歎じ、更に相宣稱すらく「率土咸く歡び我が王の普慈は潤ひ衆生に逮んで、月六齋八戒自ら修まれり又以て民に敎ふる斯の德重れり。故に天帝は敬愛して來り迎へしむるなり」と。

南王車に昇りたまふ、車馬倶に飛べり。徐々として徘徊し民を具に見んと欲す。王は御者に告げて「且らく將に吾れ惡人の二道なる地獄餓鬼にて燒け煮られ拷掠められて其の宿罪を受くるの處を觀んとす」と。御者命の如し。畢りて乃ち天に上りたり。

帝釋歡喜して床を下り出でて迎へて曰はく「心を勞して經緯衆生を憂濟せらる。四等六度は菩薩の弘業なり。諸天相見えんと思欲す」と。帝釋自ら前んで臂を把りて共に坐せり。南王の容體は更に變じて香潔なり。顏光端正にして釋と異り無し。卽ち名樂を作すに其の音無量にして寶華香を散じて世の覩し所に非ず。

帝釋重ねて曰はく「愼んで世間の故居を戀慕すること無かれ。天上の衆歡は聖王の有なり」と。南王の志は愚冥を敎化し衆の邪心を滅して三尊を知らしめんとするに在りたれば帝釋に答へて曰はく「借人の物の如し。會ず主に還すべし。今斯の天座は吾が常居に非ず。暫らく世間に還りて吾が子孫に敎へん。佛の明法を以て心を正しうして國を治め孝順をして相承せしむ。戒具にして行高し。

摩調法王の子孫相繼いで千八十四世なりき。聖皇正法末後に斷かんと欲す。摩調聖王復た天上を捨てゝ魂神を以て下れり。末世王より生れ、亦飛行皇帝と爲り、號して三五南と名づく。正法更に興れり。明かに宮中の皇后貴人に勅すらく「八戒を奉ずること月六齋ならしむ。一には當に慈惻愛もて衆生を活すべし。二には愼んで盗むこと無かれ、富者は貧を濟へ。三には當に貞を執りて清淨に眞を守るべし。四には當に信を守りて言に佛教を以てすべし。五には當に孝を盡して酒もて口を歷る無かるべし。六には高床繡帳に臥すこと無かれ。七には三六哺冥には食は口を歷る無かれ。八には香華脂澤、愼んで身に近くること無かれ。婬歌邪樂もて行を穢すこと無かれ。心に之を念ずること無かれ。口に言ふこと無かれ。身に焉を行ずること無かれ」と。

諸の聖臣に勅すらく「英士を導行して下黎民に逮び、人に尊卑無く六齋を奉ぜしめよ、八戒を諷讀し之を帶して身に著け、日に三たび諷誦すること、父母に孝順に耆年に敬事し、息心を尊戴し詣りて經を受けしめよ。鰥寡幼弱乞兒に給救し、疾病には醫藥と衣食もて相濟ひ、乏無を共にする者は宮門に詣りて足らざる所を求めしめ、化に順ぜざるもの有れば三七徭を重ねて之を役し、其の一家を以て賢者と處らしむ。五家の間に五をして一を化せしむ。先きに順ずる者は賞し、輔臣は賢を以てし貴族を以てせざれ」と。王の明法施行より後、四天下民、慈和相向ひ、殺心滅したり。得るに應じて常に護り、夜、門を閉さず。貞潔清淨にして妻に非んば欲せず。一ありて二を言はず。敎ふるに出でては仁惻なり。常に誠ならざるを覩ては辭は華綺せずして彼の吉利を見るまで心に喜び言もて助く。大道化行し、凶毒消滅し、佛を信じ法を信じ沙門を信ぜり。言に復た疑結無し。南王の慈潤、澤至らざるは無く、八方上下德を歎ぜざるはなし。

第二天帝及び四天王、日月星辰、海龍地祇は日に共に講議して「世間の人王は四等慈惠あり。恩の至る所諸天に過ぐ」と。天帝釋諸天に告げて曰はく「寧んぞ南王を見んと欲せんや不や」と。諸

【三五】南。宋・元・明の三藏本には名曰南とあり。

【三六】哺。申の刻、今の午後四時なり。哺冥は夕ぐれは時刻なり。沙門は日中を經過すれば食すること能はざる規則あればなり。

【三七】徭。公務に從事せしむること。

欣然として笑ふ。口光五色なり。時に當りて見るもの踊豫せざるはなし。咸共に歎じて曰はく「眞に所謂天中天なり」と。阿難服を整へ稽首して曰はく「衆祐の笑は必らず衆生の冥を濟度せんと欲するなり」と。衆祐曰はく「善い哉。實に爾云ふが如し。吾れ虛笑せず。卽ち法を興すなり。爾、笑意を知らんと欲するや不や」と。阿難對へて曰はく「聖典を飢渴するは誠め飽足無きなり」と。衆祐曰はく「昔、聖王あり。名づけて摩調と曰ふ。時に飛行皇帝と爲り四天下を典す。心正にして行平なり。民に竊怨無し。慈悲喜護す。意、帝釋の如し。時に民の壽八萬歲なり。帝に〔三三〕七寶有り。(1)紫金の轉輪、(2)飛行の白象、(3)紺色の神馬、(4)明月の神珠、(5)玉女と聖妻(6)主寶聖臣、(7)典兵聖臣なり。

帝に千子有り。端正にして仁靖なり。往古を明らかにし未然を預知せり。有識の類敬慕せざるはなし。帝、東西南北を遊觀せんと欲し、意適ま念を存す。金輪前に處し、意の之く所に隨ふ。七寶皆然り。飛んで聖王を導けり。天龍善神防衛せざるはなし。衆の寶華を散じ、壽を稱ふること無量なり。帝は近臣の〔三四〕巾櫛を主る者に勅して「爾其の吾が頭髮白きを生じたるを見なば卽ち當に以て聞すべし。夫れ髮の白色は毀死の明證なり。吾れ穢世流俗の役を捐てゝ清淨淡泊の行に就かんと欲す」と。近臣命の如し。後髮の白きを見たり。卽ち以て上聞せり。帝心に欣然たり。太子を召して曰はく「吾が頭白きを生じたり。白きは無常の證信なり。宜しく念を無益の世に散ずべからず。今爾を立てゝ帝と爲し四天下を典す。臣民命を爾に繫けたり。爾、其れ之を愍め。法は吾れの若く行はゞ惡道を免るべし。髮白くして國を棄てなば必らず沙門と作れ。子の敎を立つるに四等五戒十善を先と爲せ。明敎適ま畢んぬ」と。

卽ち國土を捐てたり。此の鷹地の樹下に於て鬚髮を除き、法服を著して沙門と作りぬ。群臣黎庶哀慕躃踊し、悲哭感結せり。

〔三三〕七寶。金銀等の七寶に異なる七寶なり。

〔三四〕巾櫛。毛髮を處理する櫛のこと。今日の理髮師、調髮師を意味す。

したれば而して佛至れり。身の鹿皮の衣を解き其の濕地に著し五華を以て佛上に散ず。華は空中に羅れり。若し手に種を布き根地に著して生ずるなり。

佛、之に告げて曰はく「後九十一劫にして爾は當に佛と爲るべし。號して[三一]能仁如來無所著正眞道最正覺法御天人師と曰ふ。其の世顚倒せり。父子讎を爲せり。王政は民を傷ること猶し衆刄を雨すがごとし。民之を避くると雖も其の患を免れ難し。爾は當に彼に於て衆生を拯濟すべし。時度するを獲ん者は籌算し難し」と。

儒童心に喜べり。踊りて虛空に在り。地を去ること[三二]七仭なり。空より來下し髮を以て地に布きて佛をして之を踏ましめたり。世尊跨がり畢りたまふ。諸比丘に告げて「斯の土を踏むこと無かれ。然る所以は受決の處、厥尊無上なればなり。有智の士は玆を峙刹す。受決を與ふると同じ」と。諸天僉然として聲を齊しうして云はく「吾れ當に刹を作るべし」と。時に長者子有り。名づけて賢乾と曰ふ。微柴を以て其の地を挿んで曰はく「吾が刹已に立てり」と。諸天顧みて相謂つて曰はく「凡庶豎子よ。而して上聖の智有らんや」と。卽ち衆寶を賛して上に於て刹を立てたり。稽首して白して言さく「願くは我れ佛を得たらんに教化今の若からん。今立てる所の刹は其の福云何」と。

世尊曰く「儒童佛と作りしの時、爾、當に受決すべし」と。

佛、鶖鷺子に告げたまはく、儒童とは我が身是れなり。華を賣りし女とは今の俱夷是れなり。長者子とは今座中の非羅余是れなり。非羅余は卽ち佛足を稽首したれば佛は其れに決を授けて、後當に佛と爲るべし」と。號づけて快見と曰ふ。佛、經を說き竟りぬ。諸の四輩の弟子、天人龍鬼は歡喜せざる靡し。稽首して去れり。菩薩の普智度無極なり。明施を行ずること是の如し。

八十七、摩調王經[南王の本生]

是の如きを聞けり。一時、衆祐無夷國に在り。樹下に坐せり。顏華煒煒たり。紫金に踰ゆるあり。

【三一】能仁如來。(Sâkyamuni Buddha)のことなり能仁と譯するなり。

【三二】仭は尺度の名なり。支那にては八尺をいひ、或は四尺をもいふなり。七仭は五十六尺なり。

に曰はく「斯れ高智なりと雖も然れども異國の士なり。吾が國の女を納るべからざるなり」と。益して錢を以てし焉に贈れり。菩薩答へて曰はく「道高者は厥の德淵なり。吾れ無欲の道を欲し、厥の欲珍なり。道を以て神に傳ふ。德を以て聖に授く。神聖相傳ふ。影化朽ちずして良嗣者と謂ふべけんや。[28]汝道の原を塡ぎ德の根を伐らんと欲す。後者無しと謂ふべけんや」と。說き畢りて即ち退きぬ。衆儒愡然として耻有り。女曰はく「彼の[29]高士者は卽ち吾が君子なり」と。衣を褰げて徒步して厥の跡を尋ねて諸國を渉れり。力疲して足瘡す。道側に頓息せり。鉢摩國に到りぬ。王を制勝と號したり。國を行いて界を嚴にす。女の疲息せるを覩て問ふて。「爾は何人ぞや。道側にて何を爲さんや」と。女は具に其の所由を陳したり。王は其の志を喜び甚だしく之を悼めり。王は女に命じて曰はく「吾を尋ねて宮に還れ。爾を以て女となさん」と。女曰はく「異姓の食徒らに食すべけんや。願くは守職有らば卽ち大王に從はん」と。

王曰はく「爾、名華を採りて吾が飾りに供へよ」と。女卽ち敬んで諾したり。王に從ふて宮に歸り日々名華を採りて以て王の用に供ふ。儒童國に還りて路人擾々として塡墟を平らかにして地の穢きを掃ふを覩る。行人に問ふて曰はく「黎庶欣々として將に慶有らんとせんや」と。答へて曰はく「[30]定光如來無所著正眞道最正覺道法御天人師あり。將に來りて敎化せんとするが故に衆爲に欣々たり」と。儒童心に喜び寂定に入れり。心淨にして垢無し。佛の將に來らんとするを覩たり。道に前の女の華を採りて瓶に挾めるに逢へり。從ひて華を請ふて華五枚を得たり。王后庶人皆身づから道を治む。菩薩地の少分を請ふ。躬自づから之を治めんとす。

民曰はく「餘小溪有り、而して水湍疾なり。土石立たず」と。菩薩曰はく「吾れ禪力を以て彼の小星を下し、之を塡ぎて可ならんや」と。又念じて曰はく「供養の儀は四大力を以てす。躬を苦しめて善を爲さん」と。卽ち星を置いて石を輦び。身力を以て之を塡ぐ。禪力焉に住り、微淹塹を餘

【二八】汝は三藏本に女とあり。依るべし。
【二九】高士者。志操の堅固なる人士のこと。
【三〇】定。錠に同じ。(Dipaṁkara) 如來のことなり。

夜行するは」と。答へて曰はく「趣かに[26]前隙に及ぶ」と。曰はく「禁ずる有り。行くこと無かれ」と。內人前を呼びしに覩る所上の如し。婦曰はく「無數に去るより誓つて室家と爲れり、爾、走りて之を安んぜんや」と。

菩薩念じて曰はく「欲根拔き難きこと乃ち之の如からんや」と。即ち四非常の念を興して曰はく「吾れ非常・苦・空・非身の定を以て三界の諸穢を滅せんと欲す。何ぞ但だ爾く垢のみを殄す能はざらんや」と。斯の四念を興したるに鬼妻即ち滅したり。中心晃如たり。便ち諸佛己の前に處して立てるを覩て空・不願・無想の定を釋てゝ沙門の戒を受け無勝の師と爲れり。菩薩の普智度無極なり。明施を行ずること是の如し。

八十六、儒童受決經「儒童梵志の本生」

昔、菩薩あり。鉢摩國に生る。時に梵志と爲り名づけて儒童と曰ふ。師に白して學問したり。仰いで天文を觀るに[27]圖讖衆書、聞見すれば即ち貫けり。眞を守りて孝を崇ぶ。國儒焉を嘉したり。師曰はく「爾の道備はり藝足れり。何ぞ遊志教化して始して萠さゞらんや」と。對へて曰はく、「宿貧乏にして貨は以て潤に報ふる無し。故に敢て退かざるなり。母の病尤も困し。以て醫療すること無し。乞ふ傭賃を行じて以て藥直に供へん」と。

師曰はく「大いに善し」と。稽首して退きぬ。近國を周旋したるに、梵志五百人講堂に會し高座を施き、華女一人と銀錢五百あり、高座に昇坐し、衆儒共々難じて、博く道淵を覩る者は女と錢と之に貢ふを覩たり。菩薩、觀るに臨んで、其の智薄く難ずれば即ち辭窮まれるを覩て、衆儒に謂つて曰はく「吾れも亦梵志の子なり、議するを豫るべけんや」と。僉然として曰はく「可し」と。

即ち高座に昇れり。衆儒の難淺くして道に答ふる弘し。問ひ狹にして義を釋すること廣し。諸儒曰はく「道高明にして遐なる者は師となすべし」と。僉降りて稽首せり。菩薩辭退したり。諸儒倶

【二六】隙はすみ(隅)に同じ。

【二七】圖讖衆書。將來の興廢徵兆などを書きたる書なり。

昔、菩薩あり。時に凡人爲り。年十有六なりき。志性開達にして學博く覩弘し。經として貫綜せざるは無し。精深に衆經道術にて何經は最も眞に何道は最も安なりと思ふ。思已りて[二四]喟然として歎じて曰はく「唯佛經のみ最も眞にして無爲最安なり」と。重ねて曰はく「吾れ當に其の眞を懷き其の安きに處すべし」と。親は爲に妻を納れんと欲す。悵然として曰はく「妖過の盛なる色より大なるはなし。若し妖蠱臻らば道德喪ふ。吾れ遁邁せずんば將に狼呑たらんとするや」と。是に於て遂に異國に之けり。

力賃して自ら供ふ。時に田翁あり。老いて嗣無し。草むらを行いて一女を獲たり。顏華國に絕す。欣育して嗣と爲せり。男を求めて偶と爲さん。國を遍すれども可無し。翁菩薩を賃して積るに五年有り。其の操行を觀るに微より著に至る。中心焉を嘉す。曰はく「童子よ。吾が居に足ること有らば女を以て爾に妻さして吾が嗣と爲さん」と。女に神德有りて、菩薩の心を惑はせり。之を納れて幾くも無く、卽ち自ら覺りて曰はく「吾れ諸佛の明化を觀るに色を以て火と爲す。人、飛蛾となり、蛾は火色を貪ぼりて身燒煮せらる。斯の翁は色火を以て吾が躬を燒けり。財餌は吾が口を釣り、家穢くして吾が德を喪ふ。夜默して遁邁せり。行くこと百餘里なり。空亭に依りて宿す。宿亭人曰はく「子は何人ぞや」と。曰はく「吾れ寄宿せん」と。亭人將に入らんとす。妙床の蓐を觀るに衆珍月を光やかせり。婦人有り。顏は己の妻に似たれば、菩薩の心を惑はせり。之と居らしむ。積りて五年有り。明心は焉を覺れり。曰はく「婬して[二五]蠾蠱と爲れり。身を殘し命を危くするものなり。吾れ故に馳せて隱れたれども。妻は又焉に逢へり」と。默して疾邁したり。

又宮寶の婦人を覩るに前の如し。復た厥の心を惑はせり。與に居ること十年なりき。明心は焉を覺れり。曰はく「吾が殃は重なれり。奔りて免れず」と。深く自誓して曰はく「終に寄宿せざらん」と。又復た遁れ逃れり。遙に大屋を覩、之を避けて草行したり。守門の者曰はく「何人ぞや。

【二四】喟然。歎聲なり。なげく貌。

【二五】蠾蠱。宋・元・明の三藏には蠋とあり。依用すべし。さそりといふ虫なりと。音義に依るに海中を出でゝ人を食するなりといふ。

太子は月光の舊婿なるを知れり。卽ち良輔の武士を選んで翼從せしめ各國に還さしめたり。九國和寧に兆民[三]抃舞したり。僉然として讃歎して曰はく「天は吾が父を降したり。夫れ聖人の權術は凡の所照に非ず。德聚り功成る。爾乃ち炅然として復た誹謗すること無かれ」と。

國に還りて年あり。大王崩殂したまへり。太子位に代れり。衆罪を大赦し、五戒・六度・八齋・十善を以て兆民を敎化し、災蘖都べて息めり。國豐かに衆安んず。大化流行し皆三尊を奉じたり。德盛んに福歸し、衆病消滅し、顏影韡々として彼の桃華に踰えたり。然る所以は、菩薩宿命に室家と倶に耕せり。妻をして食を取らしむ。妻の還るを望視して一辟支佛と倶に行いて山岸に隱れたり。久しく至らざれば疑心を生じたり。恚を興して鋤を執り往いて之を捶たんと欲せり。其の妻は食する所の分を以て沙門に供養し退いて叉手して立ち、沙門食し竟りて鉢を虛空に拋てるに光明暐曄として飛行して退けるを見るに至りて婿の心悔い愧ぢたり。妻に德有りて乃ち斯の尊を致せるを念ひ、吾れに重愚有りて將に其の殃を受けんとす。卽ち妻に謂つて曰はく「爾の供養せし福は吾れ當に之を共にすべし。餘の飯は倶に食すとも爾、訧無きなり」と。其の命終するに至りて各王家に生じたり。妻に淳慈の惠み有りたれば生れて端正なり。婿先に恚りて後慈なるが故に初め醜にして後好きなり。

佛、諸比丘に告げたまはく、夫れ人の行を作すに先に惠みて而る後奪ふ。後世初め豪富に生るれども長くは卽ち貧困なり。初め奪ひて後惠む、後世之を受くるに先に貧賤にして後長く富貴なり。太子とは吾が身是れなり。妻とは倶夷是れなり。父王とは白淨王是れなり。母とは吾が母舍妙是れなり。天帝釋とは彌勒是れなり。開士は世々衆生を憂念して塗炭を拯濟せらる。菩薩の普智度無極なり。明施を行ずること是の如し。

八十五、菩薩以明離鬼妻經〔凡人の本生〕

【三】抃舞。兩手もて拍手して舞ひあがること。悅べる貌。

たり」と。各手書を出し、厥の怨みは聲と齊し。當に爾の嗣を滅すべし。其の[一七]不忒の爲に使を遣はして書を還さしめん」と。僉然として詰りて曰はく「爾の一女を以て吾が七國を弄ぶ。怨は齊しく兵盛なり、爾の國を喪はん事今に在らん」と。

父王懼れて曰はく「斯の禍は弘し。將、宿行の招きし所ならんや」と。月光に謂つて曰はく「爾は人の妃と爲れり。若し婿の明愚・吉凶・好醜は厥の宿命に由れり。孰れか能く之を攘はん。貞一にして孝を盡して尊を奉ぜず。婿に薄くして國に還りたれば禍玆に至れり。吾れ今當に爾の尸を七分して以て七王に謝すべきのみ」と。

月光泣いて曰はく「願くは吾が命を漏刻の期假したまはんことを。智士を募求せば必らず能く七國の患を却くる者有らん」と。

王卽ち募りて曰はく「孰れか能く斯の禍を攘はゞ妻すに月光を以てし育むに原福を以てせん」と。太子曰はく「疾く[一八]高觀を作らば吾れ其の之れを攘はん」と。觀成れり。太子權病になり[一九]躇步して地に倒れて「月光の荷負を須てせば爾れ乃ち敵を却けん」と。月光[二〇]惶怕として屠戮せらるゝを懼れたれば[二一]胳を扶けて登觀し、僅かに能く立てり。太子高聲に七國の王に謂へり。厥の音遠くに震ひて師子吼の若く、喩ふるに佛敎を以てせり「天の牧民と爲らば當に仁道を以てすべし。而るに今怒を興したり。怒盛なれば卽ち禍著く。禍著かば卽ち身喪ふ。夫れ身を喪はゞ國を失ふ。其れ名色に由らんや」と。

七國の師雄[二二]尸蹌せざるものなし。斯を須ちて穌れり。本土に旋らんと欲す。太子王に啓して「婚姻の道は諸王に若くは莫し。何ぞ七女を以て彼の七王に嫡し子婿を蕃屛とせざらんや。王元より康く臣民休んず。親しく養を獲られん」と。王曰はく「善い哉。斯の樂しみ大なり」と。遂に七主に命じて女を以て之に妻はせり。八婿の禮豐なり。君民欣々たり。斯に于て王逮び臣民は始めて

【一七】不忒。たがはざること。忒は差ふなり、更るなり。

【一八】高觀。タカミダイのこと。物見ヤグラのことなり。

【一九】躇步。猶豫躊躇の貌。

【二〇】惶怕。驚き怖れる貌。

【二一】胳。脇の下のことなり。

【二二】尸蹌。恐れ動きて走り去ること。

と翼從して侍衞せしめたれば、后妃之を觀て厥の心微喜したり。後又苑に入れり。太子樹に登り、果を以て背を擲てり。妃曰はく「斯れは是れ太子ならん、定んでなり」と。夜其の眠りを伺ふて默して火を以て照したり。其の姿狀を觀て懼れて奔り歸れり。

后、忿りて曰はく「焉んぞ妃をして還さしめんや」と。對へて曰はく「妃の適つるは天下泰平の基なり。民は終に其の親を寧んぜん」と。

拜辭して之を尋ねんとす、妃の國に至り佯りて陶家と爲り瓦器を賃作したり。器、妙にして國に絕せり。陶主妙なるを觀て齎して以て王に獻じたり。王は器を獲て喜び、以て小女を賜ふ、傳へて諸姉を現ぜり。月光は婿の所爲なりと知りて地に投じて焉を壞したり。

又城に入りて賃して衆綵を染めたり。其の一疋を結びて衆の奇巧と爲せり。雜伎充滿して世に覩ること希れに見るなり。染家欣んで異となして又以て王に獻じたり。王は重ねて之を悅びて、以て八女に示したるに月光焉を識りて捐てゝ覩ざりき。

又大臣の爲に賃して馬を養ふ。馬肥えて又調へり。曰はく「爾、悉て何の伎有らんや」と。對へて曰はく「太官衆味餘其れ備れり。臣は饌を爲りて以て大王に獻ぜしめん」と。王曰はく「孰れか斯の食を爲りしや」と。臣實の如く對ふ。王命じて太官と爲し、監して諸の[一六]餚膳を典す。羹を以て內に入れ王の八女に供ふ。權道を致さんと欲す。佯り覆ひて身を沃す。諸女驚いて懼る。月光眄せず。

天帝釋喜び歎じて曰はく「菩薩の憂ひは衆生を濟ふに卽ち茲に至らんや。吾れ將に權して之を助けんとす。七敵國に挑んで女の都に會せしむ。爾は乃ち兆民にして元より禍息まん」。化して月光の父王の手書を爲り「月光を以て之に妻はせ」と。七國禮を興して國に造り親しく迎へん。俱に會して相勞す。茲を翔けるは何爲れぞや。各云はく「女月光と名くるを娉娶せん。之を訟ふこと紛々

【一六】餚膳。餚は肴に同じ。

以て軀を山險に捐てたり。愴然として之を愍み「忽ちに爾、降らんことを」と。器を以て果を盛り之に授けて曰はく「姉よ、爾、斯の果を呑まば必らず聖嗣ありて、將に世雄たらんとす。若し王に疑あらば、器を以て之に示せ。斯れ天王の神器にして明證の上なるものなり」と。

后、天を仰いで果を呑めり。忽然として天帝の之く所を覩ざりき。應ずれば則ち身重く、宮に還りて王を覩、具に誠を以て聞したり。時滿ちて男を生じ、厥の狀甚だ陋なり。世に覩るに希有なり。年、〔一四〕齠齔に在り、聰明博く暢べ、智策儔ひなし。力能く象を躃し、走りて飛鷹を攫めり。聲を舒しなば響震師子吼の若し。名は遐邇に流れ、八方咨嗟せり。王は爲に隣國の女を納れたり。厥の名月光、端正妍雅にして世好備さに足れり。次いで七弟あり。又亦姝好たり。后は月光が太子の狀の惡しきを懼れ、詭りて曰はく「吾が國に舊儀あり、家室白日を相見ること無きなり、禮を重んずればなり。妃よ儀を失すること無れ」と。對へて曰はく「敬んで諾す」と。敢て尊教を替へざりき。斯れ自り後、太子の出入は未だ嘗て色を別たず、深く惟るに本國は七國と敵と爲り力諍して寧きこと無し。兆民咨嗟せり。吾れ將に權となり之を安んぜんとす。心に自惟して曰はく「吾が體至陋なり、妃、覩れば必らず邁らん、邁れば則ち天下康く兆民休まん」と。欣んで后に啓して「一たび妃を覩て厥の儀容を觀んと欲す」と。

后曰はく「爾の狀醜なり。妃容〔一五〕華豔なること、厥れ天女に齊し。覺すれば即ち捨邁せん。爾、終に鰥とならん」と。太子辭を重ねたり。后之を愍みて、即ち其の願に順じたり。

妃を將ゐて馬を觀せしむ。太子佯りて牧人と爲れり。妃之を覩て曰はく「牧人醜ならんや」と。后曰はく「斯れ先王の牧夫なり」と。後將に象を觀んとす。妃又焉を觀たり。之を疑つて曰はく「吾れの遊びし所は輙ち斯の人を覩る、將た是れ太子ならんや」と。妃曰はく「願くは太子の光容を見たてまつらん」と。后卽ち之を權すらく「其の兄弟をして出遊して國を行ぜしめむ」と。太子は官僚

【一四】齠齔。男女七八歲の幼時にいふ語なり。

【一五】華豔。容色の美しくして華麗なること。

哽咽せり。辭退して「國に歸らん」と。
天王曰はく「斯の國は衆諸なり、今以て子に付せんとす。而るに去るは何爲るぞや」と。開士又辭すること前の如し。王の曰はく「且く留ること七日、樂を盡して相娛まれよ」と。七日の後、大神王あり。天王の所に詣りて賀して曰はく「王女既に歸れり。又聖婿を致せり」と。天王曰はく、「吾が女微賤にして[三]聖雄の婿を獲たるも歸りて親を養はんことを思ふ。煩の爲に之を送れ」と。鬼王敬んで諾したり。即ち天寶を以て殿となし、七層の觀衆寶天樂は世に希に覩る所なり。鬼王掌に奉送したれば本土に著けり。稽首して退けり。開士親を覩て、虔辭備さに悉せり、祖王喜んで位を禪せり。天女鬼龍善を稱せざるは無かりき。衆の罪を大赦し、國を空しく布施し、四表黎庶に下は衆生に逮べり。其の窮乏を濟ひ、心の所欲に從ふ。衆生踊躍して咨嗟せざるは靡かりき。佛の仁化を歎じ、潤天地に過ぎたり。八方澤を慕ひて國に入ること幼孩の慈母に依るが若し。祖王壽終りて即ち天上に生ぜり。

佛、鶖鷺子に告げたまはく、皇孫とは我が身是れなり。四禪梵志とは鶖鷺子是れなり。優犇とは今の目連是なり。闍梨とは今車匿是なり。天帝釋とは揵德是なり。父王とは迦葉是なり。祖王とは今白淨王是なり。母とは吾が母舍妙是なり。妃とは倶夷是なり。菩薩累載して四等を以て弘く慈せり。六度無極もて衆生を拯濟し、籌算をなし難し。佛、經を說き竟りたれば諸菩薩、四輩弟子、天・龍・鬼神及び質諒神、歡喜せざるは靡し。禮を作して去りき。

八十四、遮羅國王經[太子の本生]

昔、遮羅國王は嫡后に嗣無し。王甚だ悼めり。命じて曰はく「爾、女宗に歸して以て有嗣の術を求めよ。還らば吾れ尤せざるなり」と。后泣いて辭退せり、誓命して自ら捐て、投じて山險に隕つ。遂に林藪に之けり。天帝釋感じて曰はく「斯の王の元后は故き世の吾が姉なりき」と。今嗣無きを

【三】聖雄。佛の異名なり。

「妃は斯を歴たるを覩しや」と。答へて曰はく「茲を歴たり。且坐すること須臾なれば、吾れ爾に處を示さん」と。

時に天王釋化して獼猴となり、威靈山に震へり。皇孫大いに懼る。梵志曰はく「爾、懼るゝことなかれ、彼れ來りて供養せん」と。獼猴三道士を覩て疑住して前まず。梵志曰はく「進めよ」と。獼猴卽ち進めり。果を以て供養したれば梵志之を受けたり。四人共に享く。獼猴に謂つて曰はく「斯の三人を將ゐて似人形神の所に至れ」と。曰はく「斯れ何人ぞや、之をして昇天せしめんや」と。梵志曰はく「國王の太子〔三〕開士の元首なる者は方に如來無所著正眞道最正覺道法御天人師たり。衆生當に其の澤を蒙らば本無に還るを得べし」と。獼猴歎じて曰はく「善い哉、開士佛たるを得ば吾れ乞ふて馬とならん」と。

優犇の二人、一は奴たらん事を願ひ、一は應眞たらんことを願へり。開士曰はく「大いに善し」と。卽ち倶に天に昇れり。道に緣一覺五百人あり。倶に過りて稽首せり。獼猴を遣はして還りて華を取り、諸佛の上に散じて願じて曰はく「吾をして疾く正覺と爲ることを獲、衆生を將導して生死を滅し、神をして本無に還らしめんことを」と。三人又前の如く願へり。倶に諸佛たらんとし、稽首して去れり。似人形神城門の外に到りて獼猴稽首して退けり。三人倶に坐せしに時に青衣あり、出でて水を汲めり。

開士問ふて曰はく「爾水を以て何爲るぞや」と。答へて曰はく「王女をして浴せしむるなり」と。開士指環を脫して其の水中に投じたれば天女環を覩て卽ち止りて浴せざりき。其の親に啓して曰はく「吾が夫相尋ねて今來りて茲に在り」と。親を頭摩と名く。喜んで疾く出でて之と相見へり。開士稽首して婿の禮を爲し、兩道士稽首して退けり。王請ふ内に入らんことをと。手づから女を以て授けたり。侍女千餘あり天樂もて相娛めり。彼に留ること七年にして親の生養を存し之を言ひて

【三】開士。菩薩の德名なり。開士とは謂く法を以て開導するなりといふ。

を學び、一切智を求むるは斯れ六なり。斯の弘德を懷きて終始尤無し。衆めて三界の法王と爲り、天に昇ることを得べきこと何ぞ難からんや。若し佛の慈敎に違ひ、彼の凶酷を崇び、衆の生命を殘し、婬樂邪祀すれば生れては卽ち天棄て、死して三塗[二]に入らん、更に相彫戮し、禍を受けて窮り無し。斯の元惡を以て昇天を庶望するは譬へば王命に違して高位を獲んと冀ふがごときなり」と。

王の曰はく「善い哉信ずることは」と。獄を開きて大赦し、諸妖を却絕せり、卽ち國寳を擧げて孫に命じて德を興したれば皇孫寳を獲て窮民を都料せり。布施すること七日にして乏しき足らざる無し。布施したる後、民に勸めて戒を持し、率土感潤せり。遵承せざるは靡し。天龍鬼神僉然として善を歎じたれば爲に名寳衆綵諸穀に雨し、隣國德を慕ふて歸化せしこと猶し衆流の海に歸せしがごとし。

皇孫妃を將ゐて親を辭して退けり。國に還り閤を閉し事を廢して相樂めり。衆臣以て聞して曰はく「其の妃を除かずんば國事將に朽ちんとす」と。父王の曰はく「祖王之を妻はせり、焉んぞ除くことを得んや」と。

召して之を閉したれば妃聞いて恧然たり。飛んで本居に還り第七山に之けり。優犇等を覩て之に告げて曰はく「吾が壻來らば吾が爲に之を送れ。金指鐶を留めて信と爲せ」と。父妃の去るを聞いて子を遣はして國に返したれども其の妃を覩ざりき。悵然として淚を流したり官を護るの神は曰はく「爾悼むこと無かれ。吾れ爾に路を示さん。妃は第七山に在り。疾く尋ぬれば及ぶべし」と。皇孫之を聞いて卽ち珠衣を服し、劒を帶して弓を執れり。衣の光四十里に燿けり。明日七山に至れり。妃樹枝を折りて地に投じて識と爲せるを覩たり。前んで兩道士を見て問ふて曰はく「吾が妃、玆を歷たらんや」と。曰はく「然り」と。環を以て之に付し、翼從して俱に行き。木を以て橋と爲し、彼の小水を度りて八山上に之き、四禪梵志を覩て五體を地に投じて稽首して禮を爲して曰はく

【二】三塗。前註せり。第三巻〔二二〕

皇孫之を聞いて憮然として悅ばず。梵志を難じて曰はく「斯の祀の術何なる聖典に出づるや」と。答へて曰はく「夫れ斯の祀を爲りて祚らば應に天に昇るべし」と。皇孫難じて曰はく「夫れ殺さば衆生の命を害す、衆生の命を害する者は逆惡の元首なり。其の禍際り無し。魂靈轉化して更に相慊怨し、刃毒相殘す。世々休まること無し。死して太山に入り、燒かれ煮られて脯割せられん。諸毒備さに畢り、出でて或は畜生となり、死すれば輙ち更に刃す。若し後に人と爲りて戮戸の咎あるものは殘殺の由る所なり。豈虐を行じて而も天に昇る者あらんや」と。梵志答へて曰はく「爾年東[7]の始めなれども、智將何ぞ逮ばん。而して吾等を難ずるや」と。

皇孫曰はく「吾れ宿命たりし時、梵志の家に生れたり。五百世を連ねて爾の道書を翫べり。淸眞を首となすなり。爾等巧に僞はれり、豈經の旨に合せんや」と。梵志曰はく「子、吾が道を知らば、奚んぞ之を陳べざらんや」と。皇孫具に說いて「梵志は景則にして聖趣至淸なり。而るに爾等は穢濁にして殘酷[8]食餮なり。虛しく邪祀を以て人衆畜を殺し、酒を飲みて婬亂なり。上を欺き民を窮め、民をして佛に背き、法に違ひ、賢を遠けて宗せず、財を盡して鬼に供へ親ら飢寒ならしむ。豈聖趣は沙門の高行に合せんや」と。梵志等惡ぢ慚づ、稽首して退けり。

孫、則ち祖王の爲に、無上正眞最正覺の至誠の信言を陳べて「夫れ天に昇らんと欲せば當に[9]三尊に歸命し、四非常を覺り、都べて慳貪を絕ち志を殖やし淸淨なり、己を損てゝ衆を濟ひ、潤ひ衆生に逮ぶべきこと斯れ一なり。生命を慈愍し、己を恕して彼を濟ふ、志恒に止足る、有に非ずんば取らず、貞を守りて決ならず、信じて欺かず、酒は亂毒を爲さん。孝道枯朽して十德を遵奉し、親を導くに正を爲すこと斯れ二なり。衆生の辱を忍び狂醉を悲傷し、毒來りて哀み往く、濟ふて害せず、喩ふるに三尊を以てすれば解卽ち助喜し、慈育等護し思[10]二儀に齊しきこと斯れ之なり。志を鋭くし精進に仰ぎ登る高行は斯れ四なり。邪を棄て垢を除き、志寂寞の若き斯れ五なり。博く無蓋

【七】年齒未だ若きに譬ふるなり。

【八】食餮。前揭、見よ。第四卷註〔二九〕

【九】三尊。前註あり。第一卷〔三二〕

【一〇】二儀。前註せり。第一卷註〔三一〕第二卷註〔四八〕

世に絶たば將に誰と樂を爲さんや」と。答へて曰はく「頭摩王の女等千餘人、斯に于いて遊戯せり。方に來りて修度すれば爾等早く退けよ」と。命を受けて退隱して議して曰はく「斯は梵志道德の靈なり。吾等當に何なる方を以て天女を致すべけんや。唯當に蠱道を以て草を結び、祝禱[五]して之を水に投ずべし。梵志の體重は天女をして靈歇せしめん耳」と。即ち草を結んで水に投じ、蠱道を以て呪したれば帝釋旋邁せり、諸天都て然り。唯斯の天女翻飛するを獲ざりき。兩道士水に入りて其の上衣を解き以て之を縛したり。女曰はく「爾等、將に吾れをいかゞせんとするや」と。答ふるに上の說の如し。竹を以て[六]箄を爲り道を行くこと七日にして乃ち王の國に之けり。宮に詣りて自ら懼れたり。王は女の現じたるを喜び之が爲に食を設け、道士を慰勞して曰はく「吾れ天に昇るを獲ば斯の國を爾に惠まん。王の元子を難維尸と名け、異國の王たり。厥の太子を須維と名く。先づ內には慈仁あり。和明照大なり。初め世の衆生の未然の事を見るに窈として覩ざる無く、微として逹せざる無く、六度の高行心を釋てず。自ら誓つて如來・無所著・正眞覺・道法御・天人師・善逝・世間解を求めて本無に逮べり。

王曰はく「吾れ當に天に昇るべく皇孫を呼んで辭せん」と。孫至りて稽首し、辭を受け畢り退いて座に就けり。王曰はく「爾の親逮び民安んぜんや」と。對へて曰はく「潤を蒙りて普ねく寧し」と。孫曰はく「吾れ天女を求めて妃と爲さずんば王は必らず其を殺さんや」と。儻ち人以て聞したり。王曰はく「吾れ當に其の血を以て陛と爲し昇天すべし」と。孫即ち食を絕ち、退寢して悅ばず、王其の喪はんことを懼れたれば即ち妃を以てせり。內外欣懌して患ふ所都べて歇めり。

四月の後、梵志復聞して曰はく「當に埳を爲り諸の畜生を殺して以て埳中に塡め神女の血を取りて以て其の上に塗り吉日を擇んで天に祠るべし」と。王曰はく「善い哉」と。諸の國老群僚黎庶に命じて「當に斯の祀を興すべし」と。

【五】祝禱。呪厭と他の宋元、明三藏に在り。依用すべし。

【六】箄は宋藏に依れば簰に作り竹をあみたるいかだを意味せり。或は又小さき竹をもて編みたる籠ならん。

上聞せり。王の曰はく「甚だ善し」と。王卽ち外臣に命じて「疾く具に之の如くせよ」と。悉く獄に閉著せしむ。哭する者路に塞がれり。國人僉曰はく「夫れ王者と爲り、佛の眞化に背きて妖蠱を與すは國の基を喪ふなり」と。梵志又曰はく「儻ひ斯の生を殺すとも、王天に昇ること獲ざらん、吾等尸を市朝に戮すること其れ必せり」と。重ねて謀りて曰はく「香山の中に天王妓女あり。人形神に名似せり。神聖にして獲難し。王をして之を求めしめん。若し夫れを致さずんば、衆事都べて息まん。吾等尤無かるべし」と。又王の所に之きて曰はく「香山の中に天樂女あり。當に其の血を得て人畜に合し以て陛々と爲さば、爾乃ち天に昇るべし」と。王重ねて喜びて曰はく「早く之を陣へずんば、今已に四月の始めなり云へるあらんや」と。對へて曰はく「吾が術に本末あり。王は國内の黎庶をして並會せしめ快大なれば賞賜せよ、酒樂備さに悉くさば、今日孰れか能く神女を獲んや」と。民に知者ありき。曰はく「第七山中に兩の道士あり、一を闍梨と名け、一を優禅と名く。此の神女の處る所を知れり」と。王曰はく「呼んで來れ」と。使者命を奉ぜり、數日にして卽ち道士を將ゐて還れり。

王、喜んで酒を設けて樂を爲せしこと七日なりき。曰はく「爾等、吾が爲に神女を獲來れよ。吾れ其れ天に昇りなば國を以て爾に惠まん」と。對へて曰はく「必らず自ら勉め勵まん」と。退坐して、尋いで求むること二月有餘、七重山を經て乃ち香山に之き、大池水を覩たり。縱廣三十里、池邊が平地にして大寶城あり。縱廣起高各八十里、寶樹もて城を周らし曜々として國を光かせり。池の中に蓮華あり、華に千葉あり、其の五色ありて光々として相照せり。異類の鳥唱和して鳴き、城門七重、樓閣宮殿、更に相因仍れり。幢幡煒曄、鍾鈴〔四〕五音にして天帝中に處れり。唱人相娛めり。七日の後、釋出でて遊戲し、池に於て沐浴して快樂已に畢れり。當に還りて天に昇るべし。

池邊樹下に聖梵志あり。内外垢無し。五通の明を獲たり。兩道士進んで稽首して曰はく「斯の音

【四】五音。宮、商、角、徵、羽是れなり。

巻の第八

明度無極章第六（此に九章あり）

八十三、須維太子の本生

是の如く聞けり。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。千二百五十の比丘と俱なりき。菩薩萬人と共に坐したまへり。第一の弟子鶖鷺子、前んで稽首し、長跪して白して言さく「車匿[一]は宿命に何なる功德ありてか、菩薩の家に處らば、當に飛行皇帝たるべきを而も勸めて國を棄て山に入りて道を學び、自ら佛と爲らんことを致さしめ、衆生を拯ひ濟ふに功勳巍々として乃ち滅度に至らしめしや。唯願くは世尊よ。爲に其の原を現じたまへ」と。

佛、歎じて曰はく「善い哉、善い哉。鶖鷺子よ、問ふ所甚だ善し。車匿の累世の功勳量り無し。爾等、諦に聽け、吾れ將に之を說かんとす」と。對へて曰はく「唯然り」と。佛の言さく「吾れ昔、菩薩爲り、尼呵遍國に在り。其の王は人或は道を爲して天に昇り、或は神祠を爲りて天に昇る者ありと聞けり。王[二]童孺自り來た、常に昇天を願へども未だ所由を知らず、國に梵志四萬餘人あり、王之を現じて曰はく「吾れ天に昇らんと欲すれども何なる方を以てすべきや」と。耆艾[三]對へて曰はく「善い哉、問へり。王は將に斯の身を以て天に昇らんと欲するや、魂靈を以てせんや」と。王の曰はく「斯の如く坐して天に昇らんと欲するなり」と。曰はく「當に大祀を興したらんに之を獲べし」と。

王の喜び量り無し。金銀二千斤を以て之に賜へり。梵志寶を獲て歸り、快く相娛み樂めり。寶盡き議して曰はく「王をして童男童女の光華衆に踰えたるもの各百人、象・馬・雜畜事各百頭を取りて先づ吾等に飯せしめよ。却りて人畜を殺し其の骨肉を以て陛と爲し昇天せしめん」と。事を以て

【一】車匿。Chanḍaka なり。前揭せり。卷七註〔三八〕

【二】童孺。いとけなき子供のこと。

【三】耆艾。年たけき人。老人なり。

王及臣民僉然として戒を受けたり。王は國に還りて詔有り曰はく「人には尊卑無し。五戒十善經を帶して以て國政を爲さん」と。斯れより後は王の潤は草木に及べり。忠臣誠にして且淸讓なり。父法・母儀・室家各尙ばる。道を守りて貞信なり。家に孝子有り。衆祐曰はく「兩菩薩は其の國主三尊を知らず、臣民憒々にして邪見自ら蔽へり。猶し冥中に目を閉ぢて行くがごときを覩て其の徒らに死して佛經を覩ざるを愍みたり。故に斯の變を爲して其の明を覩んと欲せばなり」と。

佛、諸丘丘に告げたまはく、那賴とは吾が身是れなり。題耆羅とは彌勒是れなり。菩薩の禪度無極なり。一心すること是の如し。

稽首せざるはなし。山澤に處して六十餘年なりき。衆生の愚冥に展轉して惡を爲して後重殃有ることを覩ざるを悲念せり。情に約して欲を棄て三尊を敬奉し、福至りて響應ずれば必らず其の榮を獲ん。
二りの梵志なるものあり。一は題耆羅と名け二は那賴と名づく。題耆夜興きて經を誦し疲極して臥出す。那賴時に亦經を誦せり。誤りて題耆羅の首を蹈めり。題耆卽ち興ちて曰はく「誰れか吾が首を蹈みたる者ぞ。明旦日出づる一竿ならば爾の首を破して七分と爲すも善からんや」と。那賴曰はく「誤りて爾の首を蹈めり。祝誓何ぞ重からん。凡器不行の類なるも尙相觸るゝあり。豈況んや人に於て共處するをや。終年にして誤り失せざらんや。爾の言は常に誠なり。明旦日出づ。吾が首必らず七分とならん。吾れ當に日を制して其を出さしめざるべし」と。

遂に爾く出でず。五日の間は國を擧げて幽冥なりき。炬燭相尋ねて衆官修まらず。君民惶惑せり。群寮を會して道士に請へり。王曰はく「日の出でざるは其の咎安くに在るか」と。道士の中に五通者有り。曰はく「山中に道士あり。兩微諍有りし故に日を制して出さゞらしめしのみ」と。王曰はく「其の諍の緣有らんや」と。道士具さに本末を以て王の爲に之を說けり。王曰はく「之を奈何せん」と。答へて曰はく「王は群寮を率ゐ、民巨細無く馳せて彼に詣り稽首して和解せしめなば、彼れ必らず慈和せん」と。王卽ち詔有りて道士の令せし如く山澤に詣りて叩頭して曰はく「國豐かに民寧きは二尊の潤なり。而るに今和せずんば率土の失ふ所なり。其の咎我れに在り。黎民過無し。願くは之を赦せ」と。那賴曰はく「王勸めて彼の意を曉れ。彼の意解すれば吾れ日を放たん」と。王は題耆羅の所に之き那賴の旨を宣べたり。王卽ち曰はく「彼れ泥を以て其の首に塗らしめば日を放たん。泥首卽ち破れて七分と爲らん。那賴爲すこと無し」と。

王臣黎民欣澤せざるは靡し。兩道士王の爲に廣く國を治むるに當に四等無蓋の慈を以て勸め五戒を奉じ十善を載せて行ずべきことを陳したり。

諦かに聽け。愼しんで忘るゝこと無かれ。是れより東行して三萬里、國有り、揵陀越と名づく。諸菩薩の城なり。一國の內皆是れ上士にして凡庸人なし。爲に諸菩薩の德を說かんと欲す。劫數已に盡きたれども其の德は餘り有り。至尊の上德菩薩を法來と名づく。彼の諸聖に於て猶し星の月有るがごとし。諸の經典を懷きて其の明限り無し。明度無極の經を敷演し反覆して之を敎ふ。諸菩薩に經を受くる者・誦者・書者、經の原を定むる者あり。爾、往いて焉を見よ。必らず爾の師と爲らん。爾を勸めて佛を索む。疾く馳せて之に就け。自ら當に爾の爲に內外の明度無極の景德を說くべし」と。

常悲菩薩は佛は彼の菩薩の名德を歎ずるを聞きて心法喜に入りて現在定を得、衆想都べて寂せり悉く諸佛己の爲に明度無極の德を說けるを覩て己れ精進して佛を索むるの勳を歎じたり。僉曰はく「善い哉。佛の志を求むるに爾、之を得るとやせん。吾れ、往昔に於て始めて意を發したる時も亦皆然り。[六四]已逝・[六五]甫來・現在の諸佛も皆爾の如く索めたり。爾、必らず佛を得て一切生を濟はん」と。

常悲菩薩定より寤めたり。左右顧視するに復た諸佛を覩ざりき。卽復た心悲しみ淚を流して且云はく「諸佛の靈耀は何なる所より來るか、今逝いて焉くの如し」と。菩薩の禪度無極なり。一心すること是の如し。

八十二、那賴梵志の本生

昔、兩菩薩あり。志淸く行淨なり。內寂にして欲無し。表は天金の如し。穢濁の群を去りて山澤に處し、石を鑿ちて室と爲す。閑居して靖志せり。菅衣草席にして果を食し泉を飲む。淸淨無爲なり。志は虛空のごとし。四禪備さに悉くし五通智を得たり。一に能く徹視して逷として覩ざる無し。二に能く洞聽して微かに聞えざるは無し。三に能く騰飛して無間に出入す。四に能く通じて十方衆生の心中の所念を知る。五に能く自ら無數劫より來た宿命更ふる所を知る。梵釋仙聖、諸天龍鬼は

【六三】結も煩惱の異名なり。梵語 (Saṃyojanaṃ)。
【六四】已逝。過去に同じ。
【六五】甫來。未來に同じ。

けんや。何なる方便を以て何この國土に之かんや。厥の師の族名をや」と。

天人報へて曰はく「爾、斯れより正しく東行せよ。[六〇]色・痛・想・行・識を念ずること無かれ。苦・樂・善・惡・耳・目・鼻・口・身・心は吾れ我れにして及び人往いて世の更る所、來世の事を念ずること無かれ。地・水・火・風・空・青・黄・白・黑都べて及び衆色と貪淫・瞋恚と愚痴・嫉妬と男・女の九族・左右・前後・高下の遲疾を念ずること無かれ。有佛・無佛、有經道・無經道・有賢聖・無賢聖を念ずること無かれ。爾の意を空しくして衆の願を絕てよ。爾の心を執し、吾が教に違ふこと無かれ。今明度無極の聖典を覩ん」と。

常悲菩薩仰いで曰はく「敬しんで諾す。終始之を戢てん」と。天人重ねて曰はく「精進して之を存せよ」と。言竟りて忽然として現ぜず。

菩薩は教を受けて心を端にして內淨なり。東行して之を索む。數日にして卽ち止めたり。深く自思して曰はく「吾が宿、薄祐なり。生れて佛に値はず。世に沙門無し。君臣[六一]憒憒たり。佛者の明度無極は冥を除ける尊師にして斯を去ること幾里なるかを知ること無し」と。未だ覩ざるの頃は心中悲猛に哀を擧げて行けり。精誠の至は諸佛に感ず。上方より佛來り飛んで其の前に在り。身色は紫金なり。相好は絕聖なり。面は滿月の若し。項に日光あり。諸天翼從せり。寶帳華蓋あり。樂を作して華を散ぜり。叉手して首を垂れたり。

佛、菩薩を歎じて曰はく「善い哉、善い哉。爾の快健なること世を覩るに希有なり」と。菩薩佛を見て且は喜び且は悲み、稽首して曰はく「願くは佛よ、我れを哀れみ、我が[六二]繫を斷ち、吾が[六三]結を解き、吾が盲を開き、吾が病を愈やし、吾れの爲に經を說かんことを」と。

佛、之に告げて曰はく「三界は皆空なり。夫れ有は悉く無なり。萬物幻のごとし。一生一滅は猶し水泡のごとし。世を覩るに皆然り。爾、其れ之を思へ、吾れ爾の爲に經を說かん。心を端にして

da-āveṇikā buddhadharmāḥ)なり。是れ佛に限る十八種の功德法なり。佛に限りて他の三乘に通ぜず故に不共法といふなり。一は身無失。二は口無失。三は念無失。四は無異想。五は無不定心。六は不知已捨。七は欲無滅。八は精進無滅。九は念無滅。十は慧無滅。十一は解脫無滅。十二は解脫知見無滅。十三は一切身業隨智慧行。十四は一切口業隨智慧行。十五は一切意業隨智慧行。十六は智慧知過去世無碍。十七は智慧知未來世無碍。十八は智慧知現在世無碍。

【六〇】色・痛・想・行・識、色は(Rūpa)なり。物質なり。變壞、變礙、質碍の義なり。痛は受なり(Vedanā)なり。苦・樂・捨の三境を領納する作用なり。想は(Saṁjñā)なり。事物を想像する作用なり。行は(Saṁskāra)なり。過去世の煩惱によりて作りし善惡の行業なり。識は(Vijñāna)なり。心境に對して了々別知するを名づけて識となす。認識のこと。

【六一】憒々。心昏くして亂るゝ貌。

【六二】繫縛と熟字し煩惱の異名なり。Granthaḥ なり。

八十一、常悲菩薩の本生

衆祐自ら說けり。菩薩たりし時名づけて常悲と曰ふ。常悲菩薩は常に淚を流して且つ行けり。時の世佛無く、經典悉く盡き、沙門賢聖の衆を覩ざりしかば、常に佛を覩て經の妙旨を聞かんことを思ふ。時の世穢濁なり。正に背きて邪に向ふ。華僞りて利に趣くこと猶し蛾の火を樂しむがごとし。[五三]四等六度は永康の宅なり。而して世は佛の斯の法を廢して彼の危禍に就き以て自ら破碎せるなり。故に愁荒となりにければ哀慟して且つ行けり。

往昔佛有り。影法無穢如來王と名づけ、滅度より來た久しく、經法都べて盡きたり。常悲菩薩夢に其の佛を見、其が爲に法を說いて云はく「愼んで貢高すること無かれ。學士の行は心恩愛の垢を去り六情の塵勞に著すること無かれ。衆愛毛髮の大爾の心內に藏するを遺るゝこと無かれ。諸念寂滅するを是れ[五四]無爲となすなり」と。菩薩は佛より斯の法を聞いて猶し餓夫の甘食を得たるがごとし、其の喜び無量なり。心垢除かれて淨定に入る。卽ち家を棄て、妻子を捐てゝ深山に入る。[五五]閑寂に處し、山水の果蓏を以て自ら供ふ。山に處し手を擧げ、心を椎ち哀號して去り「吾れ生れて怨まんや。佛世に値はず、佛經を聞かず。十方の現在至眞の世尊は洞視徹聽したり。皆[五六]一切知なり。恍惚髣髴として暉いて之かざるは靡し。願くは尊靈を現じて吾れに佛を覩せしめたまへ。弘摸大道極趣を聞くことを得ん」と。哀聲適訖りぬ。

天神下りて曰はく「明士は乃ち爾り。復た哀號すること莫れ。佛に大法有り。明度無極の明と名づく。過去の諸佛、今現に在せり。甫めて當來皆斯れに由りて成る。爾は必らず之を索めて其の文を誦習し、其の義を懷識して奉じて之を行ぜよ。爾は必らず[五七]四無所畏・[五八]十種力・[五九]十八不共を得ん。身色紫金にして項光際無し。十方に經道あり。爾、明主、衆聖の尊、天人の師と爲らん。應儀の各佛も有ること無き所なり」と。常悲菩薩仰ぎ視て報へて曰はく「當に誰に由りて斯の尊法を聞くべ

【五三】四等六度。慈悲喜捨の四無量心なり。

【五四】無爲。梵語(Asaṁskṛta)なり。爲は造作の義。因緣の造作なきを無爲といひ、又生住異滅の四相の造作なきを無爲といふ。卽ち眞理の異名なり。

【五五】閑寂。空閑寂定なるをいふ。

【五六】一切知(sarvajñā)なり。佛の異名。一切知らざることなきをいふ。

【五七】四無所畏。四無畏に同じ。化他の心怖れざるを以て名く。四無畏に佛のそれと菩薩のそれとあり、こゝは佛のを指すなり。一は一切智無所畏、二は漏盡無所畏、三は說障道無所畏、四は說盡苦道無所畏なり。智度論四十八卷の所說による。(Catvāri tathāgatasya vaiśāradyāni)

【五八】十種力。如來の十力のことなり。一は智覺處非處智力。二は智三世業報智力。三は知諸禪解脫三昧智力。四は知諸根勝劣智力。五は知種々解智力。六は知種々界智力。七は智一切至處道智力。八は知天眼無礙智力。九は知宿命無漏智力。十は知英斷習氣知力之れなり。智度論廿五卷に出づ。(Daśabala)なり。

【五九】十八不共。梵名(Aṣṭā-

んや』と。車前を歴て身塵に汚さるれども覺らず。其の人彼の志の幽玄なるを覩て師事して年を終れり」と。

胞罽曰はく「佛の寂定無猗の志、猶し我が往ける師のごとし。今日より始めて命を終るまで佛の五戒を奉じて淸信士と爲らん。敢て衆惡を履まんや」と。

佛、胞罽に告ぐ「五百車の聲孰れか雷震の響の如からんや」と。對へて曰はく「千車の聲は猶し雨の小雷に比せず。豈況んや激怒の霹靂をや」と。世尊曰はく「吾れ昔阿譚縣に處し蓬廬の下に坐して生死の本を惟ひしに暴風雨・雹・雷電・霹靂は四特牛耕者の兄弟二人を殺したり。其の縣の黎民覩る者甚だ衆し。吾れ時に出でゝ經行せり。一人有り吾が所に至る。吾れ之に問ふて曰はく『衆將何をか觀んや』と。其の人事の如く之を說けり。人曰はく『佛、時に何くにか之く』と。答へて曰はく『獨り屋下に在り』と。人曰はく『佛、時に臥せしや』と。曰はく『不らず』と。人曰はく『焉んぞ寤めて聞かざる有らんや。道に志すこと甚だ深し。今より後、願くは世尊に師事して五淨戒を奉じて淸信士となり身を終るまで眞を守らん』」と。胞罽之を聞いて心開け結解したり。其の喜び無量なり。顧みて從者に勅して曰はく「內藏せる金織成衣は千領あり。妙なる者を擇取して來れ。吾れ佛に上らんと欲す」と。從者命を承けて家に歸りて取り來れり。

胞罽自ら手に衣を以て佛身上に被せて退き稽首して曰はく「自今願はくは世尊よ。影靈を屈して吾が鄕の諸の信士の所に之き、幷に吾が家を顧下したまはんことを。宗門の巨細を各自に親しく身づから佛を供養せしめたまへ。天地の壽を畢るまで至恭の心を以て天・龍・鬼神・蜎飛・蚑行・蠕動の類を奉養するとも一日一沙門に飯するに如かず。豈況んや無上正眞の佛をや。願くは弘慈を垂れて吾れに無極の福を授けたまへ」と。世尊曰はく「大いに善し」と。菩薩の禪度無極なり。道志すること是の如し。

龍、稽首して言はく「今より以後自ら佛に歸し法に歸せん」と。佛、龍に告げて「方に衆聖有りて其の應儀欲除饉苦を誓はん。亦當に豫め自ら之に歸すべし」と。龍曰はく「諾す」と。自ら除饉衆に歸する畜生の中、佛に歸する先化は斯の龍を首と爲せり。菩薩の禪度無極なり。一心すること是の如し。

八十、佛の得禪

佛、行きて小徑を得たり。其の邊に樹有りたれば佛其の下に坐したまふ。千二百五十比丘と倶なりき。心を一にして定に入れり。五百乘車有りて過ぎぬ。佛、時に盛んに渴したれば、阿難に告げて曰はく「爾、水を取れ。吾れ之を飮まんと欲す」と。曰はく「屬五百乘車有りて過ぎたれば其の水盛んに濁りて飮むべからず」と。又重ねて勅して曰はく「吾が渴尤も甚だし。爾、駃く水を取りて來れ」と。再三に至れり。阿難曰はく「溪有り鳩對と名づく。清澄にして且つ美なり。浴すべく飮むべし」と。佛、阿難と斯れを說き未だ竟らざりしに、時に一人有り、胞罽と名づけ、逝心に師事せり。逝心を羅迦藍と名けたり。

胞罽、佛の靈輝を視るに身色[五二]紫金にして相好甚だ奇なり。古聖だに希有なれば心喜踊溢せり。手を拱いて直進して稽首して曰はく「屬五百乘車あり。斯より行けり。世尊寧んぞ聞見せんや」と。曰はく「聞かず見ざるなり」と。胞罽曰はく「世尊臥せんや」と。曰はく「吾れ坐禪して一心定を得たり」と。胞罽歎じて曰はく「如來無所著正眞覺の玄深の定は乃ち斯に至らんや。車向はば國を震ひ、躬づから塵埃を汚せり。道に志して猗る無く聞かず見ず。乾坤動かすべけれども斯の志傾き難し。吾が師在りし時、亦道邊樹下に於て禪を得たり。時亦五百乘車ありて其の前を歷たり。人有り問ふて曰はく『寧んぞ聞見せんや』と。曰はく『聞かず覩ず』と。其の人問ふて曰はく『吾れ其の心を一にして清淨定を得たり。故に聞かざりき』と。其の人曰はく「羅漢の道志深ければ乃ち之の如け

なり。無相とは滅諦の滅靜妙離の四行相と相應する三昧なり。涅槃は色聲等の相を遠離するが故に無相と名け無相を緣とする故にいふなり。

【五二】紫金。紫磨黃金のこと。

忍辱・精進・禪定・明度の積功の願にて始めて今極尊を得たり。善を作したる福は歸して我が功を亡さず」と。佛、適ま之を念じて便ち禪度無極に入れり。

佛、水邊に在りしに光明は龍の居る所處を徹照したれば龍光影を覩て鱗甲皆起ちたり。龍は嘗て三佛を見たり。[四七]拘婁秦佛・[四八]拘那鋡牟尼佛・[四九]迦葉佛なり。三佛の道を得たる、皆此の坐にて在りき。明かに悉く龍の所居を照せり。龍光明を覩て念じて曰はく「斯の光前の三佛の光影と齊同なり。世間復佛有ること無きを得んや」と。龍大いに歡喜し、水を出でて左右を顧視するに佛の樹下に坐するを覩たり。身[五〇]三十二相有り。紫磨の金色光明奕々として月に過ぎ日に踰え、相好端正にして樹の華有るが如し。

龍前んで佛に趣き、頭面を地に著け、佛を遶ぐること七匝なり。身、佛を去ること四十里にして七頭を以て佛上を覆へり。龍喜んで風雨を作り七日七夕佛端坐して動かず搖がず喘がず息まず。七日食はずして佛を得たり。心喜都べて想有ること無く、龍大いに歡喜せり。亦七日食せざれども飢渇の念無く、七日畢りて風雨止み、佛禪覺悟したり。

龍化して梵志と爲りぬ。年少の鮮服なり。長跪叉手して稽首して問ふて曰はく「無寒・無熱・無飢・無渇を得、功福會ま聚りて衆毒加はらず。世に處して佛と爲り、三界特尊なり。豈快ならざらんや」と。

佛、龍に告げて曰はく「過去の諸佛經說するに衆生三惡道を離れて人たるを得たる快なり。世に處し閑居して道志を守る快なり。昔は聞きし所今皆獲たる快なり。世に處し慈を懷き衆生を害せざる快なり。天魔重毒皆歇む快なり。惔怕にして欲無く榮を慕はざる快なり。世に於て道を得、天人師と爲り、[五一]空・不願・無相の定を志し、衆欲の有身は神を本無に還し、長く之を存して寂し、永く苦と絕てる斯れ無上の快なり」と。

【四七】拘婁秦佛。梵名(Kra-kucanda)なり。拘樓孫佛ともいひ、又迦羅鳩飡陀ともいふ。現在賢劫の中第四に位す。過去七佛の中第五に位す。

【四八】拘那鋡牟尼佛。梵名(Kanakamuni)なり。拘那含ともいひ、又迦那伽牟尼ともいふ。現在賢劫の出世にして過去七佛の第五に位す。

【四九】迦葉佛。梵名(Kāśyapa)なり。前掲せり。之等の佛に關しては七佛經一卷はその教化の本末を說ける最も詳なりき。

【五〇】三十二相。具には三十二大人相といふ。此の三十二相は佛に限らず總ての大人の相なりとし、此の相を具するものは家に在りては輪王となり出家しては無上覺を成就するといふ。

【五一】空・不願・無相、此れ三空なり。三三昧ともいひ、三三摩地ともいふ。三定、三等持と譯す。空とは苦諦の空、無我の二行相と相應する三昧なり。諸法は因緣生にして我なく我所有なしと觀ずるなり。不願とは又無願ともいひ是れ苦諦の苦、無常の二行相・集諦の因・集・生・緣の四行相と相應する三昧なり。之等は厭惡すべきが故に總じて之を願樂せざれば之を緣とするをいふ

て自惟して曰はく『城門の開閉四十里に聞ゆ』。云はく「之を如何せん」と。諸天僉曰はく「敬んで諾す。世尊よ。吾等門を御して其をして聲無からしめむ」と。宮人知ること無し。馬蹄寂然として微聲だに聞えず。太子馬に上りぬ。百億の帝釋・四百億の四大天王・天・龍・鬼神・翼從導引せり。塗路を平治し、天樂[四〇]詠謌す。「無上の巍々たる吾れ生れて遇はん哉」と。靈輝を覩るを得て心の塵勞を消し永世衰へず。「痛ましい哉。夫れ八難は尊を遠ざけて哀むべし」と。重ねて曰はく「遇はん哉。吾等偶諧せん」と。馬始めて門を出でたり。門には卽ち聲有り。馬哽咽して悲鳴す。涙流れて頰を交へ諸天は王を[四一]癵せり。一國知る無し。然る所以は太子をして早く佛道を得せしめんと欲すればなり。太子金輪王七寶の位を棄てゝ衆苦を忍んで衆生を度したまふ。菩薩の禪度無極なり。一心すること是の如し。

七十九、太子の得禪

太子未だ道を得ざりし時地より[四二]稾草を取り、樹下に於て叉手して正坐せり。衆の[四三]垢念を棄て其の心を淸くし其の志を一にせり。自念して曰はく「今日を始まりと爲し肌筋枯腐せんも此に於て佛を得ざらんには吾れ終に起たず」と。菩薩卽ち一禪を得たり。二三より四禪に至れり。卽ち一夜に於て一[四四]術闍を得たり。無數劫の父母・兄弟・妻子・九族を知れり。二夜の中に二術闍を得たり。自ら無數劫の貧富・貴賤・長短の白黑を知れり。衆生の心中有念無念知らざるなきを得たり。三夜の中に三術闍を得たり。[四五]三毒都べて滅す。夜明に向ふの時佛道成じたり。

深く自思して曰はく「吾れ今佛を得たり。甚深甚深にして知り難く了し難し。微中の微、妙中の妙なり。今佛道成じて知らざる無きを得たり」と。起ちて龍の水所に至れり。龍を文隣と名づく。文隣の處る所の水邊に樹有り。佛、樹下に坐して曰はく「昔、錠光佛は吾れに尊決を授けて『當に[四六]釋迦文佛たるべし』と。眞に聞きし所の如く、吾れ今佛たるを得、無數劫より來た、布施・持戒・

【四〇】謌。歌なり。

【四一】癵。厭なりと三藏本に在り。從ふべし。

【四二】稾草。宋藏に依れば好草とあり。從ふべし。吉祥草のことならん。

【四三】垢念。垢も亦煩惱の異名なり。妄惑心性を垢(ケ)がせば垢と名く。

【四四】術闍。禪(Dhyāna)といふに同じ。卽ち第一禪のこと。

【四五】三毒。貪・瞋・痴の三毒煩惱のこと。

【四六】釋迦。梵名(Sākyamuni Buddha)なり。

の鳥あり、[二八]鴉鶄・[二九]鴛鴦・驚き鳴いて相屬す。

太子年十七にして經として通ぜざるはなし。師更に拜受す。王爲に妃を納れたまふ。妃の名[三〇]裘夷なり。容色の華は天女と雙と爲せり。力勢頓に六十巨象を卻けたまふ。年十九に至り、太子都べて諸伎を合すること凡そ千五百人共に一殿に處し、其の伎樂を極めたり。疲れ臥して捨て去るを得べからしめんと欲す。天・樂人をして皆臥して知ること無からしむ。太子思を靖めて諸の伎人を視るに猶し[三一]木梗人のごとし。百節皆空なり。中は竹節の如し。手足地に垂らし、涕涙流れ出し口唾頰を汚し鼓に伏して頭を亂す。樂人皆[三二]名璫を著け垂れ懸けて步搖華光す。[三三]珠璣・[三四]瓔珞・[三五]琨環・雜巧、[三六]羅縠・[三七]文繡・上服・御衣、琴・瑟・箏・笛・笳・簫の樂器を縱横に地に著く。警備の鳥及守衞者は頓瞑して識ること無し。太子は無蔽の眼を以て遍く衆身を觀じたり。還りて其の妃を觀るに頭・髮・髑髏・骨・齒・爪・指・皮膚・肌・肉・膿血・髓腦・筋・脈・心膽・脾・腎・肝・肺・腸・胃・眼竅・屎・尿・涕唾して內視するに猶し枯骨のごとし。外視するに猶し肉囊のごとし。一として貴ぶべき無し。不淨臭處を之れ視て憶を存し人をして吐逆せしむること猶し藍假面の文綵もて之を衣、熏ずるに其の表を香し屎・尿・膿血を以て其の內に滿著するがごとし。愚者其の表を信じ明者は其の內を覩る。之を萬里に遠くるは猶し復た閉目するがごとし。

太子之を覩て幻は久しく保つべきこと難きが若く、世に處して假借すれば、必らず當に主に還すべし。臥する者縱横すること猶し死屍のごとし。愈〻焉を樂しまずして一心に禪を得んと。禪により覺り仰いで沸星を視たり。夜已に半ばに向ふ。諸天側塞せり。叉手して禮を作し、華香衆樂頭を擧ぐる無量なり。太子諸天の稽首を覩て卽ち經を說いて曰はく「淫泆は最惡なり。人をして狂醉せしむ。正を謗じて邪を歎ず。瞑を以て明と爲す。是の故に諸佛、辟子佛・阿羅漢、譽めて善と爲さず當に疾く之を遠くべし」と。反覆思惟して[三八]車匿を呼んで曰はく「疾く[三九]犍陟を被つれよ」と。重ね

【二八】鴉鶄。鳧に似て脚高く毛の冠ある一種の鳥なりといふ。

【二九】鴛鴦。をしどり。梵名(Cakravākaḥ)なり。

【三〇】裘夷。俱夷とも譯す。耶輸陀羅 Yaśodharā 姬のこと。

【三一】木梗人。人の形になぞらへて作りたるもの、でくなり。木人に同じ。

【三二】名璫。有名なる耳かざり。

【三三】珠璣。梵名(Maṇi)のこと。璣は小さき珠なり。

【三四】瓔珞。梵名(Keyūram)のこと。珠をつなぎて作りたる首飾。

【三五】琨環。玉に次ぐ一種の美石なりといふ。

【三六】羅縠。絽ちりめんのことならん。

【三七】文繡。あやのぬひとり。

【三八】車匿。梵名(Caṇḍaka)なり。或は闡鐸迦に作り欒欲と譯す。佛出城の時の馭者なり。後出家して比丘となれども惡口の性癖改らず六群比丘の一人となれり。佛涅槃に臨んで阿難に勅して默擯の法を以て之を治したれば遂に果を證したりといふ。

【三九】犍陟。梵名(Kaṇṭhaka)なり。建佗歌と音譯す。佛出城の時に乘りし馬。此の馬帝釋の化身なりといふ。

ること無し」と。太子曰はく「吾れ患を免れず後必らず之の如けん」と。宮に還りて之を存す「心を一にして禪に入らん」と。

後ち出でたり。帝釋復た化して死人と爲れり。舁擔[二六]せられて旐を建て哀慟して路に塞がれり。曰はく「斯れ復た何人ぞや」と。對へて曰はく「死人なり」と。「何をか謂ひて死と爲すや」と。「命終して神遷す。形骸分散し長く親と離る。痛ましいかな。夫れ處し難し」と。太子曰はく「吾れ亦然らんや」と。對へて曰はく「上聖の純德なりとも斯の患を免るゝこと無し」と。車を迴らして宮に還りて「心を一にして禪に入らん」と。

後復た出遊したり。王の田廬に之き、樹下に坐して耕犁者を覩たりしに土より反りて蟲出で或は傷き或は死したり。鳥追ふて之を食ふ。心中愴然として長歎して曰はく「咄！衆生、擾々たるかな。痛ましいかな。處し難し」と。之を念じて悵如として「心を一にして禪に入らん」と。時に日盛に出でて太子の身を照し樹は爲に枝を低くして日炙ならしめざりき。王は之きし所を尋ねて遙かに無上聖德の靈を覩たり。悲喜交集ふ。識らずして身を投じ稽首して禮を爲せり。太子亦倶に地に稽首したり。父子辭し畢りぬ。王は宮に還れり。太子「心を一にして禪に入らん」と。菩薩の禪度無極なり。一心すること是の如し。

七十八、太子の得禪

太子初生したまひしに、王は師をして相せしむ。「國に處らば必らず飛行皇帝とならん。國を捐てゝ沙門とならば當に天人師たるべし」と。王は三時殿を興て春・夏・冬・各自ら殿を異にせり。殿に五百妓人あり。肥えず痩せず、長短訶無く顏華鮮明なり。皆桃李に齊し。各數伎を兼ね姿態賢を傾けて以て太子を樂しましむ。殿前に甘果を列種して華香芬芬たり。清淨なる浴池あり。中に雜華あり。異類の鳥ありて鳴聲して相和せり。宮門開閉するに四十里聞ゆ。忠臣衞士　徼循[二七]して懈らず。警備

【二六】舁。兩手を掛けて擧げらるゝことなり。

【二七】徼も亦循に同じ。めぐることなり。以て盜賊に備ふるなり。

し、道人內に四大を分別し、此の地彼の水・火・風倶に然るを觀る。都べて人無しと爲す。之を念じて志寂なり。「其の心を一にして禪を得ん」と。(27)道人自ら喘息の長短を覺る。遲疾巨細皆別ちて之を知ること猶し人物を削りて自ら深淺を知るがごとし。念息此の如く「其の心を一にして禪を得ん」と。菩薩の禪度無極なり。一心すること是の如し。

七十七、太子の得禪

太子出遊す。王國內に勅して「衆穢彼の王道に當らしむる無かれ」と。太子城を出でたり。[二二]第二天帝化して老人と爲りて其の車前に當れり。頭白くして背[二三]僂なり。杖に倚りて[二四]羸歩す。太子曰はく「斯の人何ぞや」と。御使對へて曰はく「老人なり」と。「何をか謂ひて老と爲すや」と。曰はく「四大根熟して餘命幾くもなし」と。太子曰はく「吾れ後亦當に老ゆべけんや」と。對へて曰はく「古より老あり。聖も玆を免るゝこと無し」と。太子曰はく「吾れ謂へらく『尊榮は凡と異り有らん』と。而も倶に免れず。榮ゆる何ぞ己を益さんや」と。宮に還りて之を存し「心を一にして禪を得ん」と。

王は僕に問ふて曰はく「太子は出遊して國を觀て喜びしや」と。對へて曰はく「道に老[二五]叟を觀たり。世の非常を存して心に欣びを爲さゞりき」と。

王は國を去らんことを懼れて重ねて樂人を益し之を惑はすに榮華を以てし、之を亂すに衆音を以てす。其の道意を壞して尊位を守らしめんと欲せり。

後復た出遊したり。王重ねて勅して曰はく「羸老をして道側に在らしむること無かれ」と。

前の釋復た化して病人と爲り體疲れ氣微なり。肉盡き骨立ち惡露身に塗れり。倚りて門側に在り。曰はく「斯れ復た何人ぞや」と。對へて曰はく「病人なり」と。曰はく「何をか謂ひて病と爲すや」と。「飲食節せず、臥起常無し。故に斯の病を獲、或は愈え或は死せん」と。曰はく「吾れ亦飲食を節せず、臥起常無くんば當に更に病むべけんや」と。對へて曰はく「身有らば卽ち病む。斯の患を免る

【二二】第二天帝。帝釋天のこと。前掲せり。卷一註〔一五〕參照。

【二三】せむしのこと。

【二四】羸歩。弱々しく歩める貌。

【二五】宋・元・明の三藏本は耄と書けり。用ゆべし。おいぼれなり。

(24)道人禪を念ずる當に云何すべき。目に死人を見て頭より足に至る。諦に思ひ熟視して想を存し心を著す。行坐臥起し飯飲萬役す。常に念じ心に著し以て其の志を固む。所念を自在にすること譬へば人數斛の米飯を炊いて熟未を知らんと欲して直ちに一米を取りて捻變して之を視、一米熟せば餘は皆熟したるを明にするが如し。道志茲の若し。心の迴走は猶水の流るゝがごとし。道人は直一事を念じて、「心停するも意淨なれば應儀・眞道・滅度するを得べきや。第一の禪に應儀を得んと欲して得べきや不や」と。曰はく「中に得るものあり得ざるものあり。何なる行や能く得て、何なる行や得ざらん。一禪の中に於て念有り愛あり道なれば則ち成ぜず。天地常無し、虛空保ち難し。內穢垢を盡して貪愛の念無し。志淨きこと斯の如くんば應眞得べし。二三より四に至る心を執すること當に一禪の如くなるべし。志一禪に存して未だ應儀を得ずんば命終して趣くべし。

　卽ち七天に上りて壽を受くること一劫なり。二禪に在りて終に十一天に上りて壽を受くること二劫なり。三禪に處し終に十五天に上りて壽を受くること八劫なり。四禪に處し終に十九天に上る。壽十六劫なり」と。

(25)道人自ら內體惡露を觀ずるに都べて不淨と爲す。髮・膚・髑髏・皮・肌あり、眼・瞬・涕・唾あり、筋・脉・肉・髓あり、肝・肺・腸・胃あり、心・膽・脾・腎あり、屎・尿・膿血あり、衆穢共に合して乃ち成じて人と爲ること猶し囊を以て五穀を盛るが若し。目有りて囊を瀉し分別して之を視る。種々各異れり。明人此の如く內に其の身を觀る。四大種數各自名有り都べて人無しと爲す。無欲觀を以て乃ち本空を覩て「其の心を一にして禪を得ん」と。

(26)道人は深く身の四大を別ちて地水火風と觀る。髮・毛・骨・齒・皮・肉五藏は斯れ卽ち地なり。目淚・涕唾・膿血・汗肪・髓腦・小便は斯れ卽ち水なり。內身の溫熱・消食を主る者は斯れ卽ち火なり。喘息・呼吸は斯れ卽ち風なり。譬へば屠兒・殺畜を刳解して別ちて四分と作し具さに委曲を知るが如

て行いて索むるに兒は泥塵に汚されて飢渇啼呼せるを覩、兒の玆の若きを覩て、悲涙して抱いて歸り、洗浴衣食せしめ身康ければ心に悅ぶなり。慈母歡喜して愛攝徘徊して捨てざること前の如し。道人慈悲して衆生を愛護すること彼の慈母に踰え、天下の人蜎飛蚑行蠕動の類に敎へ、佛を奉じて經を覩る。沙門衆に親み、佛戒を採執し懷いて之を行ず。三惡を遠離し心に善を念じ口に善を言ひ身に善を行ず。上三の惡を仰いで永く三善を興し長へに太山・地獄・餓鬼・畜生・窮苦の險處に更らしめず安んずるに無極の福堂を以てす。尋いで復た追誨す。其の福に處し之が爲に憍蕩し恣に惡心を縱にして還りて三塗に處せんことを懼る。非常・苦・空の變を以て之を誡むるなり。勸めて無爲を取りて彼の慈母攝護の意の如し。

十六事を思ふて「其の心を一にして禪を得ん」と。(21)何をか十六と謂ふ。喘息長短は卽ち自ら知る。喘息身を動さば卽ち自ら知る。喘息微著ならば卽ち自ら知る。喘息快不快ならば卽ち自ら知る。喘息止走せば卽ち自ら知る。喘息歡慼(ぜんそくくわんしゃく)せば卽ち自ら知る。自ら萬物の無常なるを惟ひ喘息自ら知る。萬物過ぎ去りて追ふて得べからず喘息自ら知る。內に思ふ所無く所惟を棄捐して喘息自ら知る。軀命を放棄して軀命を棄てず喘息自ら知る。道人を深く思ふ。是有らば卽ち是を得、是無くんば是を得ず。夫れ生必らず老死の患有り。魂靈滅せず卽ち更に身を受く。生ぜずんば卽ち老無し。老せずんば卽ち死無し、是を念じて「其の心を一にして禪を得ん」と。

(22)道人眼を以て世の生死を觀るに但だ[三二]十二因緣(いんねん)を以てす。此を念じて「其の心を一にして禪を得ん」と。(23)道人は五事を以て自ら形體を觀る。一に曰はく自ら面類數變を觀る。二に曰はく苦樂數々移る。三に曰はく志意數々轉ず。四に曰はく形體數々異る。五に曰はく善惡數々改まる。是を五事と謂ふ。數々變異有り猶し流水の前後相及ぶが如し。此を念じて「其の心を一にして禪を得ん」と。

【三二】 十二因緣。(Dvādaśāṅga Pratītyasamutpāda) 十二支緣起のことなり。是れ緣覺佛卽ち辟子佛の觀門にして衆生が三世に涉りて六道に輪廻する次第の緣起を說きしものなり。只名目丈けを揭げん。一、無明(Avidyā.) 二、行(Saṁskāra) 三、識(Vijñāna.) 四、名色(Nāmarūpa.) 五、六處(Ṣaḍāyatana.) 六、觸(Sparśa.) 七、受(Vedanā.) 八、愛(Tṛṣṇā.)九、取(Upādāna.)十、有(Bhava.)十一、生(Jāti.)十二、老死(Jarāmaraṇa.)詳くは辭典を見よ。

ん」其の心を一にして禪を獲ん」と。

(9)盛なれば衰有り榮財保ち難く少壯老病有り壽猶電光のごとしと覩て之を憶ひ愕然として「其の心を一にして禪を得ん」と。(10)佛の巍々たる相雙び難しと念じ、皆清淨に由りて衆祐と爲らんことを致さん。之を存して欣然として「其の心を一にして禪を得ん」と。(11)經の深義沙門の高行を覩て「其の心を一にして禪を得ん」と。

(12)惟だ身善を行じて前後に德を積み「其の心を一にして禪を得ん」と。(13)惟愚にして求むる所は佛の明法に違ひ勞して罪を益し諸天世に處して戒を守り齋を奉じ自ら升天を致し榮壽無量なれば「其の心を一にして禪を得ん」と。(14)佛の深經を受けて反覆之を思ひ、衆の爲に訓導して中心歡喜して「其の心を一にして禪を得ん」と。(15)衆生成ずる有れば輙ち壞す、壞するは皆苦痛なりと存憶し之を惟ふて愴然として「其の心を一にして禪を得ん」と。

(16)衆生の性能く自ら保つこと莫し、來始の變は道人自ら懼る。命盡きて卒かに至る。或は惡道に墮し世の榮樂眞僞を視て夢の如し。志重醒悟して「其の心を一にして禪を得ん」と。(17)諸食口より入り涕唾と澆潰し外好に內臭にして化して屎尿となる。之を憶ふて惡むべし。「其の心を一にして禪を得ん」と。

(18)兒は母腹に在り初め凝粥の如し漸を以て長大す。三十八七日身體皆成れり。生に臨むの難は危多くして安んずる少なし。既成の後諸病並進す。或は一或は十或は五十より百年に至る。皆當に老死すべし。斯の患を免るゝなし。己も亦然なりと惟ふて「其の心を一にして禪を得ん」と。(19)存有りて卽ち滅す。之を尋いで處なし。三界皆空なり。志貪慕無し。衆生の佛經を覩ず邪欲の蔽ふ所を悲念し非常を知る無く誓ひて拯濟を願ふて「其の心を一にして禪を得ん」と。(20)志成じて行高し、四等心を懷き衆生を愍育すること猶し慈母の幼兒を哀護するが若し。兒輩に隨ひて熙戲し、母慈心を以

こと是の如し。

七十六、菩薩得禪

菩薩道に志すに凡そ〔三〇〕幾事を以て能く內淨に心を一にして禪を得せしむるや。

(1)或は老者の頭白く齒落ち形體變異するを見て之を覩て意悟りて曰はく「吾れ後必然に一心に禪を得ん」と。(2)或は病者の身心困痛せるを覩て猶し杖楚を被るがごとく悵然として悟りて曰はく「吾れ後必然に一心に禪を得ん」と。

(3)或は衆生の壽命終り訖りて息絕え熅逝して神遷身冷かなり。九族之を捐て遠く外野に著く。旬日の間に胮脹爛臭して或は狐・犬・衆鳥の噉ふ所と爲る。肌肉に蟲を生じ蟲還りて身を食む。膿血・惡露・滂沱として地を流し骸骨解散し節々處を異にす。足・趺・脛・髀・尻・脊・脇・臂・頭・齒・髑髏、各自分離したるを覩て道人念じて曰はく「夫れ生れて死有り。人物猶し幻のごとし。會ふものは卽ち離るゝことあり。神逝體散す。吾れ豈止だ獨り彼の如からざるを得んや」と。之を覩て愴然として「一心に禪を得ん」と。

(4)或は久しく死して體骨消滅し泥土塵に同じうするを見て深く自ら惟みて曰はく「吾が體も方に爾り。一心に禪を得ん」と。(5)或は太山湯火の毒、酷烈の痛さ、餓鬼飢饉積年の勞と畜生の屠剝割截の苦を聞くを以て之を存して愕然として「一心に禪を得ん」と。(6)或は窮凍餓死せるを見、或は非を履むの人が王法に戮せらるゝを見て道人念じて曰はく「斯の人患に遭ひて道志無きに由る。吾れ精進せずんば必らず復た彼の如からん、其の心を一にして禪を得ん」と。

(7)深く惟みて內觀するに下りては卽ち屎尿の迫る所と爲り、上は卽ち寒熱の惱かす所と爲る。身の惡むべきを覺りて「一心に禪を得ん」と。(8)或は惡歲にして五穀豐ならず民窮して亂を爲し更に相捔戰して死屍縱橫なるを見る。之を覩て愴然として「吾れ道の爲にせずんば必ず復た之くの如け

【三〇】菩薩得禪するに凡そ次の如く廿七事を以て數へたり。試みに之が一々西洋數字を以てせん。

心に念を滅す。內意心中に五蓋を消去せり。五蓋滅したる後其の心照然たり。冥退き明存す。顧みて天人蜎飛蚑行蠕動の類を愍み、其の愚惑は斯の五蓋を懷き明善の心を遏絶せるを傷みたり。五蓋を消去すれば諸善卽ち强きこと猶し貧人の債を擧げて生を治め利を獲て[一三]彼を還し餘財もて居を修め日に利有りて入り其の人心喜ぶがごとし。又奴使は免れて良民と爲り困病瘳ゆることを獲て九族日に興り牢獄重罪の赦に逢ふて出づることを得るが如し。又重寶の海を渡りて險を歷て家に還り親を見て其の喜び無量なるが如し。心に五蓋を懷くは猶し斯の[一四]五苦のごとし。

比丘は諦を見て五蓋を去離するは猶し彼の凡人の上の五患を免るゝがごとし。蓋退きて明進む。衆惡悉く滅す。道志强盛なれば卽ち一禪を獲たり、一禪より二禪に之くに凡そ三行有り。一には曰はく[一五]勤伆なり。二には曰はく[一六]數念なり。三には曰はく[一七]思惟なり。斯の三事より四禪を成ずることを得るなり。

一禪を以て二禪に至り、二禪を以て三禪に之く、三禪を以て四禪に之く。四禪は三禪に勝る。三禪は二禪に勝る。二は一に勝る。第一の禪は十惡退きて五善進む。何をか十惡と謂ふ。眼に色を樂み耳音鼻香口味身好に上の五蓋を幷せて之を十惡と謂ふ。何をか五禪と謂ふ。一には計、二には念、三には愛、四には樂、五に曰はく一心なり。斯の五善は內に處し第二の禪は計せず念ぜず。心を刺して內に觀ず。善行內に在りて復た耳目鼻口に由りて出入せず。善惡の二行は復た相干せず。心處內に在らば唯歡喜あるのみ。三禪の行は歡喜を除去して心淸淨を尙ぶ。[一八]怕然として寂莫たり。衆祐は各佛應儀に曰はく「諸の能く欲を滅して其の心を淨むる者は身終始安んず。第四の禪喜心去らば寂定を得ん。一禪は耳聲の爲に亂す。二禪は心念の爲に亂す。三禪は心歡喜して亂す。四禪は心喘息の爲に亂す。一禪は耳聲止まりて進んで二禪に至る。二禪念滅して進んで三禪に至る。三禪歡喜滅して進んで四禪に至る。四禪喘息滅して[一九]空定を得るなり」と。菩薩の禪度無極なり。一心する

[一三] 負債のこと。

[一四] 五苦。一に生老病死苦。二に愛別離苦。三に怨憎會苦。四に求不得苦。五に五陰盛苦なり。詳しくは辭典を見よ。

[一五] 勤伆。勤めつとむること。精進するを意味す。

[一六] 數念。數〻念ずる。念ずるを數ふる。卽ち懈怠なきなり。

[一七] 思惟。定こそ思惟することなり。思惟することなしには定は獲られざればなり。

[一八] 怕然。靜かなる貌。

[一九] 空定。空相を觀ずる禪定。是れ諸法を空ずるも獨り我を空ずること能はざるが故に却つて三有に輪廻すといふ。

善惡寂滅にして心に入らず。猶し蓮華の根莖は水に在りて華合して未だ發せず水の覆ひし所と爲るがごとし。三禪の行は其の淨きこと猶し華のごとし。衆惡を去離して身意倶に安んず。心を御すること是の如し。便ち四禪に向ふ。善惡皆棄てゝ心善を念ぜず亦惡を存せず。心中の明淨なること猶し琉璃珠のごとし。又士女淨にして自ら沐浴し名香身に塗り、內外衣新に鮮明なる上服は表裏香淨なるが如し。菩薩心端にして彼の四禪を獲たり。

群邪衆垢にして能く其の心を蔽ふこと無きこと猶し[九]淨縟もて何なる色も作るに在るが若し。又[一〇]陶家の[一一]埏埴もて器を爲るが如し。泥ありて沙礫無くば何なる器を作るに在らんや。又猶し鍛師の名金を熟煉するがごとし。百奇千巧も心の所欲に從ふ。菩薩心淨にして彼の四禪を得たり。意の出る所に在り。輕擧して騰飛す。水を履みて行けども身を分ちて體を散ず。變化萬端なり。出入して間無し。存亡自由なり。日月に捫し、天地を動かし、洞視徹聽して聞見せざるはなく、心淨に觀明にして一切智を得たれども未だ天地衆生の更る所有らず。十方の現在衆心念ずる所は未萌の事なり。衆生の魂靈は天と爲り、人と爲り、太山餓鬼畜生道中に入り、福盡きて罪を受け、殃訖りて福を受け、遠く如かざるは無くんば夫れ四禪を得たり。溝港・頻來・不還・應眞を得んと欲せば各佛如來至眞平等正覺無上の明なり。之を求めなば卽ち得ること猶し萬物皆地に因りて生ずるが若し。五通智より世尊に至る皆四禪成ずるなり。猶し衆生の作る所地に非ずんば立たざるがごとし。衆祐又曰はく「群生世に處し正しく天帝仙聖をして巧黠の智あらしむ。斯の經を覩ずんば、[一二]四棄の定を獲ざる者にして、猶し愚矇と爲すなり。旣に智慧有り而して復た心を一にすれば卽ち度世に近し。此れを菩薩禪度無極と爲す。一心することと是の如し。

七十五、比丘得禪

昔、比丘あり。飯畢りて澡漱せり。深山の丘に入り、墓間樹下に坐し、叉手して頭を低くし、一

【九】淨縟。汚れなき絹帛なり。
【一〇】陶家。やきもの師のこと。
【一一】埏は瓦を燒くに用ふる型。埴はねばつちなり。
【一二】四棄。比丘の四波羅夷を四棄といふ。此の罪を犯せば永く佛法の邊外に棄てらるるを以てなり。

卷の第七

禪度無極章第五（此に九章あり）

七十四、得禪法

禪度無極とは云何。其の心を[1]端にし其の意を壹にす。衆善を合會して心中に內著す。意に諸穢惡あれば善を以て之を消すに凡そ[2]四禪あり。一禪の行とは貪愛する所の五妖邪事を去り、眼、華色を覩なば心淫狂となり、耳聲・鼻香・口味・身好を去り、道行の志あらば必らず當に彼を遠くべし。又[3]五蓋あり。[4]貪財蓋・[5]恚怒蓋・[6]睡眠蓋・[7]淫樂蓋・[8]悔疑蓋なり。有道無道・有佛無佛・有經無經・心意識念・清淨無垢なり。心明かに眞を覩なば知らざること無きを得ん。天龍鬼妖の惑ふ能はざる所なり。猶し人に十怨有りて身を脫して之を離るゝがごとし。獨り山間に處し衆の知らざる所復た畏れざる所なく人、情慾に遠かる。內淨に心寂すれば斯れ一禪と謂ふ。

心に一禪を獲なば進んで二禪に向ふは第二の禪なり。如し人、怨を避くれば深山に處すと雖も怨んで之を尋ねんことを懼る。逾えて自ら深く藏して行く。寂として十情の慾怨を遠かると雖も、猶し慾賊來りて道志を壞すを恐るゝがごとし。第二の禪を得たり。情慾稍遠かりなば已を汚すこと能はず。第一の禪は善惡諍ふて已む。善を以て惡を消す。惡退いて善進むは第二の禪なり。喜心寂止す。復た善を以て住して彼の惡を消せざるなり。喜善の二意は悉く自ら消滅す。十惡の煙絕えて外因緣來りて心に入る者無し。譬へば高山あり其の頂きに泉有り流入するもの無く、亦龍雨水は內より出づるに非ず水淨くして泉滿つるが如し。善は心を內にして出でて惡んぞ復た耳目鼻口由り入らざらんや。心を御すること是の如し。便ち三禪に向ふ。

第三の禪は意を守りて牢固たり。善惡入らず、心安んずること須彌の如し。諸善外事を出でず。

【一】端。直なり。正なり。

【二】四禪。具には四禪定といふ。Catur-dhyāna なり。此の四禪定を修して色界の四禪天に生ずるなり。こは內道外道共に修し因に在りては欲界の惑を超へ果に在りて色界に生じ且つ諸の功德を生ずる根本なる故に本禪といふ。

【三】蓋。煩惱の異名なり。覆蓋の義にして行者の心を覆ひて善心を開發せしめざるものなり。Pañca āvaraṇāni.

【四】貪賊蓋。貪欲蓋ともいふ。五欲の境に執着し以て心性を覆ふもの。

【五】恚怒蓋。瞋恚蓋ともいふ。違情の境に於て忿怒を懷き以て心性を蓋ふもの。

【六】睡眠蓋。心は悴く身重くして其の用をなさず以て心性を蓋ふもの。

【七】淫樂蓋。淫情もて五境に執着し心性を蓋ふもの。

【八】悔疑蓋。悔は掉悔なり。心の躁動するを掉といひ、動作の事に於て心に憂惱するを悔といひ、法に於て猶豫して決斷なく以て心性を蓋ふもの。

く「夫れ身とは四大の有なり。吾れ長く保つに非ざるなり」と。樓に登りて願じて曰はく「今の穢身を以て衆生の飢渇せるものに惠まん。乞ふ男の躯を獲て決を受けて佛と爲らん。若し濁世の衆生ありて盲冥にして正に背き邪に向ひ佛を知ること無きものならば、吾れ當に彼の世に於て之を拯濟すべし」と。高きより投じ下りしかば觀る者寒慄したり。佛至意を知り化して地を軟かならしむ。猶し天の婉綖なるが如し。身を覩て害無し。卽ち化して男と爲れり。厥の喜び量り無し。馳せて佛の所に詣り踊躍して云はく「世尊の恩を受けて已に淨身を獲たり。唯願くは哀を加へ、吾れに尊決を授けたまへ」と。

佛、之を歎じて曰はく「爾の勇猛は世の希有とする所なり。必らず佛と爲ることを得ん。疑望を懷くこと無かれ」と。

然燈の除饉は其の佛を得たらん時は當に汝に號を授くべし。天人鬼龍は當に佛と爲るべきことを聞いて皆向つて拜賀し、居に還りて咨歎し、各精進を加へたり。爾の時群生を勸發せしこと計數すべからず。

佛、鶖鷺子に告げたまはく、時の老比丘とは錠光佛是れなり。獨母とは吾が身是れなり。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

き燈を然し、緒を懸けて華を奉ず。朝夕禮拜し、稽首して自ら歸せり。子當に之に事ふべし。必らず聖則に合せん」と。婿大いに歡喜し、一心に肅虔せり。國人巨細僉然として風を承けたり。是の如く八萬四千餘歲なりき。

佛、鶖鷺子に告げたり。爾時の婦人とは吾が身是れなり。時の婿とは彌勒是れなり。獨母とは鶖鷺子是れなり。隣兇夫とは調達是れなり。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

七十三、然燈授決經〔獨母本生〕

昔、菩薩あり。身女人と爲れり。少寡にして節を守り、三尊に歸命し、貧に處して道を樂しみ、精進して倦まざりき。兇利を[五〇]蠲除し、膏を賣りて業と爲せり。時に沙門あり。年西夕にあり。志し高行に存す。文學するに遑あらず。內否の類之を無明と謂ふ。禮敬して偏あり終始就無し。麻油を分衞して以て佛前に供ふ。獨母照然たり。貢ぐこと日を缺かさず。

一除饉あり。佛足を稽首して叉手して質して曰はく「斯の老除饉は其の明尠しと雖も戒具はり行高し。燈を然して供養せり。後何の福を獲んや」と。

世尊歎じて曰はく「善い哉。問ふことや。是の老除饉は無數劫を卻けて當に如來無所著正眞道最正覺たるべし。項に重光あれば三界を將導して衆生を度するを得、其れ無數ならん」と。

獨母之を聞いて馳せて佛所に詣り、稽首して陳して曰はく「除饉は燈を燃やせり。膏は卽ち吾が貢ぎし所なり」と。云はく「其の當に無上正眞道と爲ることを獲、衆生を將導して神本無に還り、天人鬼龍逸豫せざる靡かるべし。唯願くは哀を加へたまへ。復た吾れに決を授けたまへ」と。

佛、女人に告げたまはく、女身は佛、緣一覺道・梵・釋・魔天・飛行皇帝と爲ることを得ず。斯の尊魏々として女人身の作すを得る所に非ざるなり。夫れ彼れを獲んと欲せば當に穢體を捐て丶清淨身を受くべし」と。女稽首して曰はく「今當に之を捐つべし」と。居に還りて淨浴せり。遙拜して曰は

【五〇】 蠲除。除去すること。

と與に偶居して志を同じうして嫉妬の行無からしめんことを。二に曰はく身口意行端正にして世と絶せんことを。三に曰はく世々三尊を慶奉し心垢日に消え道を進めて倦むこと無く、諸佛祐助し、衆邪遌ぶこと能はずして必らず一切智を獲て衆生の難を濟はんことを」と。

衆祐歎じて曰はく「善い哉、善い哉。汝をして之を得せしめん」と。婦大いに歡喜し稽首して退いて本居に歸れり。厥の婿賈し還ろに舟に乘じて水を行けり。當に斯の日を以て至るべし。天帝が婦の高行なる願を發して無雙なるを覩、助喜して善を歎じたり。爲に風雨を興して其の舟行を住めて明日乃ち臻れり。婦後ち壽終し神有道の家に生れ容華世を光せり。年長じて出でて嫡して國儒士の妻と爲れり。國の高賢と稱せり。時に婿海に入りて寶を採り窮民を濟はんと欲す。婦は家に居り禮を以て自ら衞ること猶し城の寇を衞るがごとし。國王の后妃、大臣の妻妾仰いで則らざるは靡し。門に詣り雲集して婦德の儀を稟けたり。婦、夜寐覺して世の無常を憶ふて「榮富猶幻のごとく孰れか長存を獲ん。躬づから坏舟を爲りて我が神之を載すれども猶ほ影を獲て天寶を望むものゝごとし。心を勞し身を苦しめて何ぞ己を益せん。夢幻皆空なり。天神世榮え其の歸すること玆の若し。明晨當に無上正眞天中の天を求めて吾が師と爲すべし」と。

晨に興きれば卽ち石塔の庭に在り、佛像金耀に、壁を琢きて經を書し、佛を歎じて衆聖の師三界の獨步爲るを覩て婦喜び歎じて曰はく「是れ則ち如來應儀正眞道最正覺者ならんや」と。卽ち五體を地に投じて廟を遶ること三匝なり。華を散じ香を燒き燈を然やして繒を懸けたり。晨夜肅虔し、稽首して恭禮せり。王后、國婦は淸風を請承したり。邪を退きて眞を崇べり。隣りに兇夫の賈あり。婦の婿に逢ふて曰はく「子の妻は妖虛を造り鬼廟を立てたり。朝暮香熏じて妖蠱を呪咀して爾を喪はしめんことを願ふ。不祥の甚だしきなり」と。婿歸れり。婦啓して曰はく「妾、前一夜に世の無常を覺れり。晨に宗靈無上正眞絶妙の像が來りて中庭にありしを覩たり。妾今は供事せり。香を燒

執れり。

佛、鶖鷺子に告げたまはく、爾の時の婦人とは彌勒是れなり。天帝釋とは吾が身是れなり。菩薩の鋭志度無極なり。精進すること是くの如し。

七十二、女人求願經〔婦人の本生〕

昔、菩薩あり。身女人と爲れり。厥の婿氣を稟け兇愚妬忌したり。出でて商行する每に妻を以て隣獨母に囑す。母、佛戒を奉じて淸信の行を爲せり。

時に佛、國に入れり。王逮び臣民戒を受けざるは靡し。獨母、經を聞きて還りて婦の爲に之を說けり。婦喜び歎じて曰はく「斯れ卽ち無上正眞道最正覺者なり、母に從ふて佛より聞かん」と。卽ち遙かに稽首す。齋日に母曰はく「往いて化を聽くべけんや」と。婦喜びて曰はく「可し」と。尋いで城外に之けり。忽ち婿の妬に存せり。悵然として悅ばず。居を旋して自ら鄙して吾が殃重ならんや。母、還りて爲に陳して「天・龍・鬼神・帝王・臣民經を聽けり。或は沙門の四[49]道を得し者あり。或は菩薩の決を受くる者あり。佛時値ひ難し。經法聞き難し。爾還りて爲さんや」と。婦佛德を聞いて淚を流して具に婿の妬の意を陳べたり。母曰はく「試みに一行すべし」と。婦曰はく「敬んで諾す」と。

明日卽ち母に隨ひて行いて佛を覩たり。五體地に投じて却りて立ち心を靜かにせり。佛の相好を覩、佛の淸淨を念ずるは眞に是れ天尊なり。佛、女に問ふらく「爾の來る何をか願はん」と。卽ち稽首して對へて「我れ、佛は無上正眞道最正覺道法御天人師たり德は恒沙の如く智は虛空の若し、六通四達して一切智を得しと聞けり。勢來りて尊を請ふ。願くは佛、我れを哀しみたまはんことを」と。

世尊告げて曰はく「佛は一切の護たり、汝の所願を恣にせん」と。女人稽首して曰はく「夫れ人世に處して未だ本無を獲ざる者なり。皆欲を以ての故に匹偶の爲に居れり。我をして世々至德

【四九】道（Mārga）とは涅槃への道路なり。此に乘じて涅槃の城に到るなり。一、加行道。二、無間道。三、解脫道。四、勝進道是れなり。然るにこゝにては一、須陀洹。二斯陀含。三、阿那含。四、阿羅漢のことならん。

子と作れり。一世の間父有りて識らず。何かに況んや長久なるをや。鼓を播きし兒とは本是れ牛なり。牛死して靈魄還りて主の爲に子と爲れり。家牛皮を以て用て此の鼓を貫けり。兒は今播弄して踊躍し戲舞したり。此の皮は是れ其の故體なるを識らず故に之を笑ひし耳。牛を殺して祭り父病みて活けんことを請ふ。生を求めて殺すを以てす。不祥の甚だしきこと猶鴆毒を服して以て病を救ふがごとし。斯の父方に終り、終りて則ち牛となれり。世を累ねて屠戮し禍を受けて已むこと無し。今此の祭牛命終して靈還れり。當に人體を受けて憂苦を免脱すべし。故に復た之を笑へり。母の面を刮りたる兒は本も小妻なり。母は是れ嫡妻なり。女情は婬を專らにす。心に嫉妬を懷きて常に酷暴を加ふるなり。妾は怨恨を含み、壽終りて則ち生じ嫡妻子となれり。今來り讎を報いて面を攫み體を傷けたれども故に敢て怨まざるのみ。是を以て之を笑ふ。夫れ衆生の心は其の恒無しと爲す。古憎みて今愛す。何の常か之れ有らん。斯れ皆一世見て知らず。豈況んや累劫をや。經に曰はく『色を以て自ら壅する者は大道に盲なり。專ら邪聲を聽く者は佛音の響を聞かざるなり』と。吾れ是を以て之を笑ふのみ。世榮電の若く恍惚として即ち滅す。當に非常を覺るべし。愚を竝ぶこと莫れ。修德を崇修し、六度妙行なれ。吾れ今居に反す。後日必らず子の門に造らん」と。

言竟りて忽然として現ぜず。婦悵然として歸り、齋肅望慕せり。一國咸な聞けり。王逮び群寮欽延せざるはなし。商人、後果して門に在り。狀醜にして衣弊なり。曰はく「吾が友內に在り。爾之を呼んで來れ」と。門人入りて告ぐるに具に狀を以て言へり。婦出でて曰はく「爾は吾が友に非ず」と。釋、笑つて云はく「形を變へ服を易ゆれば子尙識らず。豈況んや異世斯を捨てゝ彼を受けんや」と。

重ねて曰はく「爾は勤めて佛を奉ぜよ。佛時値ひ難し。高行の比丘は供事を得難し。命呼吸するに在り。世の惑に隨ふこと無かれ」と。言畢りて現ぜず。國を擧げて歡歎せり。各六度高妙の行を

【四八】齋肅望慕。つゝしまやかに欣慕すること。

「佛の仁化乃ち玆に至らんや」と。二屍を殯葬して國を擧げて哀慟したり。王卽ち命じて曰はく「佛の六度十善を奉ぜずして妖鬼に事へたる者あらば罪、眷屬と同じ」と。斯れより後、[四五]刹に千數の沙門ありて比肩して行く。國内の士女皆淸信の高行を爲せり。四境寧靖にして遂に太平を致せり。

佛、諸比丘に告げたまはく、時に兒とは吾が身是れなり。弟とは彌勒是れなり。毒龍とは調達是れなり。菩薩の鋭志度無極なり。精進すること是の如し。

七十一、彌勒爲女人身經〔帝釋の本生〕

昔、菩薩あり。天帝釋と爲れり。位尊榮にして高し。其の志恒に[四六]非常・苦・空・非身の想を存せり。坐すれば則ち思惟し、遊べば則ち敎化す。愚を愍みて智を愛し、誨ふるに智慧を以てす。精進して休むこと無し。其の宿友を覩て婦人の身を受け富姓の妻と爲れり。財色を惑はして無常を覺らず。市に居りて肆に坐せり。釋化して商人と爲れり。伴りて市る所あり。婦人の前に至りて住したり。婦人喜悅して兒をして馳せ歸らしむ。獨坐の床を取りて以て之に坐せんと欲す。商人乃ち婦人を熟視して笑ふ。婦高操を執りしに意商人を怪めり。住笑するは宜しきに非ず。兒床を取ること遲ければ還りて卽ち之を捊てり。商人又住笑したり。側らに一兒有り。[四七]鼗を播きて踊戲したり。商人又之を笑ふ。父の病者あり。子牛を以て鬼を祠にす。商人亦之を笑へり。一婦人有り。兒を抱へて仿佯し、行きて市中を過ぎたり。兒面頰を刮れり。血流頸に交はれり。商人復た之を笑ふ。是に於て富姓の妻問ふて曰はく「君は吾が前に住して笑を含みて止らず。吾が屬兒を捊てり。意與りて子に由れり。子何ぞ以て笑はん」と。

商人曰はく「卿と吾れは良友たり。今相忘れたらんや」。婦人悵然たり。意益悅ばずして商人の言を怪めり。

商人又曰はく「吾れ兒を捊てりを笑ふ所以のものは兒は是れ卿の父なり。魂靈旋感して卿の爲に

【四五】刹。梵名(Kṣetra)なり。掣多羅、差多羅など音譯す。土田、國など譯す。

【四六】四非常なり。

【四七】鼗(フリツヾミ)鼓に同じ。

を釋し六冥を開導したり。內垢を練棄して止觀寂定なり。諸國の三尊を闇くするを聞く每に輙ち往いて導化し六度正眞の妙行を奉ぜしむ。時に大國あり。其の王道を樂めるに衆妖之を誘ふて其の邪僞を授け、率土風を承けて皆蠱道に事へたり。風雨時ならず妖怪首尾あり。

菩薩の伯は叔に自ら相謂つて曰はく「吾が本土は三尊化行す。人十善を懷き君仁に臣忠なり。父義に子孝なり。夫信じ婦貞なり。比門賢有り。吾等將に復誰れか化せんや。彼の國妖を信じ蛟龍之に處して其の黎庶を吞む。哀嗥救ひ無し。夫れ志を建て佛を求むるは唯斯の類を爲さんのみ。道を以て化し之を喩ふるに仁を以てすべし。龍は凶毒を含む。吾等焉を摧かん」と。

叔曰はく「佛戒は殺を以て凶虐の大なりとなし、生を活すは仁道の首なり。將彼をいかんせん」と。

伯曰はく「夫れ一人を殘する者は其の罪百刧なり。龍は一國を吞めり。吾れ懼る恒沙の刧畢りても厥の殃未だ除かず。苟くも尠味斯れを須るの利を貪ぼり太山燒煮の咎を覩ず。吾が心愍然たり。人道獲難し。佛法聞き難し。龍を除いて國を濟はん。導くに三尊六度の高行を以てせば、禍、絲髮のごとし。福は二儀に喩ふ。爾は化して象と爲り、吾れは師子と爲らん。二命殞さずんば斯の國濟はれざるなり」と。十方に稽首して誓ひて曰はく「衆生寧からざるは餘の咎なり。吾れ後に佛を得たらんに當に一切を度すべし。象は龍の所に造り師子は之に登れり。龍即ち勢を奮ひて霆耀雷震す。師子踊吼せり。龍の威靈と師子の赫勢と普地爲に震ひ三命絕せり。諸天善を稱し仁を歎ぜざるはなし。爾菩薩終りて[四四]第四天上に生じたり。一國命を全ふせり。屍を抱きて哀號して曰はく「斯れ必らず神ならん」と。

孰れか仁の玆の如けん。門徒之を尋ねたり。師の普慈身を殺して衆を濟ふを覩る。哀慟して德を稱したり。各又進行して師の道化を宣べたり。王逮び臣民始めて佛有ることを知れり。率土僉曰はく

【四四】第四天上。欲界の第四天卽ち兜率天(Tuşita)のことならん。前註第二卷〔六六〕參照。

ず。佛の至戒を奉じたれば國遂に豐沃なり。時の童子とは吾が身是れなり。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

六十九、調達敎人爲惡經【天王の本生】

昔、菩薩あり。位天王たり。精しく微行を存し、志進流るゝが若し。齋日に到る毎に馬車に乘じて四天下を巡り佛の奧典を宣べ衆生を開化して其の瑕穢を消やし如來の應儀正眞覺天中の天衆聖中の王道敎の尊を崇めしむ。三塗衆苦の原を離るべし。

調達も亦[四三]魔天王と爲れり。四天下を行じ人を敎へて惡を爲し心の所欲に從ふて「太山殃禍の報あること無し」と。行いて菩薩に逢へり。問ふて曰はく「子何をか行ぜんや」と。答へて曰はく「民を敎へて佛を奉じて上聖の德を修めしむ」と。調達曰はく「吾れ民を敎ふるに欲を恣にすれども二世の禍無し。善の爲に志を勞して己を益すること無かれ」と。

菩薩曰はく「爾、吾が道を避くるや」と。答へて曰はく「子は善を爲すこと猶金銀のごとし。吾れ惡を尙ぶこと猶剛鐵のごとし。剛鐵は能く金銀を截るも金銀は剛鐵を截ること能はず。子道を下らずんば吾れ子を斬らん」と。

調達惡盛にして禍成る。生れて太山に入り、夫人も惡を爲りたれば皆死して三塗に入れり。三塗に善を執りて天に昇らざるはなし。尊榮に處すと雖も元惡を懷きしは三塗にて佛の一言を懷くに如かざるなり。

佛、諸比丘に告げたまはく、人に敎へて善を行ぜし天王は吾が身是れなり。人を導いて惡を爲りし魔天は調達是れなり。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

七十、殺龍濟一國經【兄の本生】

昔、菩薩あり。伯叔の志齊し。倶に學道を行じ、仰いで諸佛逮び難きの行を慕へり。經を誦し義

【四三】魔天王。惡魔の天神なり Māra-devarāja なり。欲界の頂上に在り他化自在天のことなり。

ゑて食するを夢るがごとし。處する所の國の其の王は無道なり。財を貪り色を重んず。賢に薄くして民を賤くせしかば、王は無常を念じて自惟して曰はく「吾れ不善を爲し、死して太山に入らんとするや。何ぞ金を聚めて以て太山王に貢がざらんや」と。

是に於て民金を斂めて重ねて令を設けて曰はく「若し[四一]銖兩の金を匿すこと有らば其の罪死に至らん」と。斯の如くすること三年なり。民金都べて盡きたり。王詭り募りて曰はく「少金を獲て以て王に貢ぐ者有らば妻すに季女を以てし之に上爵を賜はん」と。童子、母に啓して曰はく「昔、金錢一枚を以て亡父の口中に著け以て太山王に賂せんと欲す。今必らず存すれば取りて以て王に献ずべし」と。母曰はく「可し」と。

兒取りて焉を献ず。王は金を獲られし所由を錄問せしむ。對へて曰はく「父喪亡の時、金を以て口中に著け、太山に賂せんと欲す。實に大王の爵を設け金を求めたりと聞きたり。始めは塚を堀りて木を發して金を取れり」と。

王曰はく「父の喪來りて年有らんや」と。對へて曰はく「十有一年なり」と。曰はく「爾の父太山王に賂せざらんや」と。對へて曰はく「衆聖の書、唯佛教のみ眞なり。佛經に曰はく「善を爲さば福追ふ。惡を作さば禍隨ふ。禍と福と猶影響するがごとし。身を走りて以て影を避け、山を撫して以て響を關さんも其れ獲べけんや」と。王曰はく「不可なり」と。曰はく「夫れ身は卽ち[四二]四大なり。命終して四大離る。靈逝して變化す。行、之く所に隨ふ。何ぞ賂之れ有らんや。大王の前世は布施して德を爲したれば今王爲ることを獲たり。又仁愛を崇び澤は遐邇に及べり。未だ道を得ずと雖も後世必らず復た王とならん」と。王心に歡喜し、獄囚を大赦して奪ふ所の金を還したり。

佛、諸比丘に告げたまはく、時の王は民間の餘金を殘するを以て無罪者を戮害せんと欲す。菩薩は民の哀號を覩て、之が爲に涙を揮ふ。身命を厲政に投じ、民難を塗炭に濟へり。民は其の潤を感

【四一】銖。量名兩の二十四分の一なり故に極めて少量のものをいふ。

【四二】四大。地水火風なり。前掲せり。

せん」と。恐怖して色を易へ天を仰いで哀を求めたり。菩薩愴然として心に計を生じて曰はく「吾れ佛を求むるは但衆生の爲なるのみ。海神の惡む所、死屍甚だしと爲さん。命を危くして衆を濟ふは斯れ乃ち開士の尙業なり。吾れ身血を以て海に注がざれば海神之を惡まん。意者船人終に岸に渡らざらん」と。衆人に謂つて曰はく「爾等手を屬して相持し幷に吾が身を援けよ」と。衆人命を承く。菩薩卽ち刀を引いて[三九]自ら刎ねたり。海神焉を惡めり。舟を漂はして岸に上れり。衆人普く濟はる。船人屍を抱いて天に號して哭して曰はく「斯れ必らず菩薩にして凡庸の徒に非ざるなり。躃踊して天を呼べり。寧んぞ吾等の命をして玆に殞さしめんや。上德の士を喪ふこと無かれ」と。其の言眞誠なり。上諸天に感じたり。

天帝釋、菩薩の弘慈を覩て世の希有なりと覩たり。帝釋身づから下りて曰はく「斯の至德菩薩將に聖雄たらんとす。今自ら之を活けん」と。天神の藥を以て其の口中に灌ぎて幷び通じて屍に塗れり。菩薩卽ち蘇へり。忽然として起坐し衆と相勞したり。帝釋名寶を以て其の舟中に滿てり。前に千倍したり。卽ち本土に還れり。九親相見て歡悅せざるは靡し。窮に賙ひ乏を濟ふ。惠衆生に逮べり。佛經を敷宣して愚冥を開化したれば其の國王菩薩の德に服したり。詣りて淸化を稟けて君仁に臣忠なりき。率土戒を持したり。家に孝子有り。國豐かに毒歇め黎庶欣々たり。壽終天に生ず、長く衆苦を離れたり。菩薩劫を累ね精進して休まず遂に佛を得るに至れり。

佛、諸比丘に告げたまはく、身を殺して衆を濟ひし者は吾が身是れなり。天帝釋とは彌勒是れなり。五百商人とは今坐中の五百[四〇]應眞是れなり。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

六十八、童子の本生

昔、菩薩あり。獨母子と爲れり。朝に佛廟に詣り邪を捐てゝ眞を崇び、沙門を稽首し、佛の神化を稟けて朝益暮誦せり。景明日に昇り、衆經を採識したり。古賢の孝行に精誠仰慕すること猶し餓

【三九】自殺すること。

【四〇】應眞。阿羅漢のこと。前掲見よ。

夫人は產にありて挽振して男を得、又惡露無し。其の兒適生じ、又手長跪して般若波羅蜜を誦せり。夫人產し已りて還りて本時の如く復た知る所無く、夢寤め已り了りて所識無きが如し。長者即ち復た衆僧を呼べば比丘都べて集れり、往いて小兒を視經の故事を說きたれば初めて躓礙無し。

是の時衆僧各々一心に此の小兒の本を觀るに皆知ること能はず。長者問ふて言はく「此れ何等をか爲さん」と。比丘答へて曰はく「眞の佛弟子なれば愼んで驚疑すること莫れ。好んで之を養護せよ。此の兒は後に大いに當に一切衆人の爲に師と作るべし。吾等悉く其の啓受に從ふべし」と。時に兒長大して年七歲に至りて悉く微妙を知り、道俗皆備り、衆と超絕し、智度極り無し。諸比丘等、皆從ひて受學せり。經中誤脫して短少する所有れば皆删定を爲し、其の乏しき所を足さん。兒、入出する每に至止する所有り。輙ち人を開化して大乘を發さしむ。長者の家室內外大小五百人衆あり。皆兒に從ふて學す。[三四]摩訶衍の意を發して悉く佛事を行ぜり。兒に教授せられ、城郭市里開發する所の者八萬四千人ありき。皆無上正眞道の意を發したり。弟子の乘ぜし者五百人ありき。諸比丘は兒の所說を聞いて本[三五]漏意解したり。志大乘を求むるものは皆[三六]法眼淨を得たり。

佛、阿難に告げたまはく、是の時の小兒とは吾が身是れなり。時の比丘とは[三七]迦葉佛是れなり。是の如く阿難、我往昔の時、一たび比丘に從ふて摩訶衍品を聞きて讃善開解したり。心意歡喜して轉ぜず。精進して忘れず。深く宿命を識り自ら無上平等の正覺を致せり。一聞の德乃ち尙是の如し。何に況んや終日修道に遊ふ者をや。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

六十七、殺身濟賈人經〔商人の本生〕

昔、菩薩あり。五百商人と倶に巨海に入れり。衆寶を採らんと欲して海に入ること數月なり。其の獲られし所の寶は重載して舟に盈ち、將に本土に旋らんとせり。道に飄風に逢ひ雷電地を震ひ、水神雲集して四周城の若く眼中に火を出せり。波涌は山に灌ぎたり。衆人[三八]嚾啼して曰はく「吾等死

【三四】摩訶衍。梵語(Mahāyāna)の音譯なり。所謂大乘なり。

【三五】漏。煩惱に同じ。梵語(Āsrava)なり。

【三六】法眼淨。明瞭に第一義諦を見るを法眼淨といひ大乘にては初地の位にて無生法忍を得るをいふ。

【三七】迦葉佛。梵名(Kāśyapa Buddha)なり。現世界に於て人壽二萬歲の時出世して正覺を成じ釋尊より直ぐ前の佛陀にして過去七佛の第六なり。

【三八】嚾啼。わめきなげく貌。

り暮に至る初めより懈息せず。其の長者の家は素と法を知らず。此の夫人口に妄語を爲すを恠みて謂く鬼病と呼べり。下問請祟するに至らざる所無けれども能く知るもの無し。長者甚だ愁へり。夫人の那ぞ此の病を得たるやを知らず。家中の內外皆悉く憂惶す。是の時比丘城に入り[三二]分衞して長者の門に詣れり。遙かに經の聲を聞きて心に甚だ喜悅し門に住まる頃有り、主人偶出で、此の比丘を見たれども亦禮を作さず。比丘之を怪みて「此の賢者の家內に經を說き聲妙なるは乃ち爾ならんや」と。今此の長者は我と語らず卽ち長者に問ふて「內中誰れか深經を說く者有りて音聲微妙にして乃ち是の如くならんや」と。長者報へて言はく「我が內中の婦は鬼病を得たりと聞く。晝夜妄語して口初めて息まず。比丘よ爾は乃ち長者の家は法を解せずと爲すを知らんや」と。

　比丘報へて言はく「此れ鬼病に非ず。但だ尊經佛の大道を說けるのみ。願くは內に入り與に共に相見ゆるを得んことを」と。長者言はく「善し」と。

卽ち比丘を將ゐて入りて婦所に至る。婦比丘を見て卽ち爲に禮を作す。比丘呪願して言はく「佛たるを得ば疾くせん」と。便ち比丘と與に相難じて經法を說き、反覆披解したれば比丘甚だ喜べり。長者問ふて言はく「此れ何等の病ぞや」と。比丘報へて言はく「病あること無きなり。但だ深經を說くに甚だ義理有り。疑ふらくは此の夫人の懷姙する所の兒は是れ佛弟子ならん」と。長者の意、解したり。卽ち比丘を留めて與に飲食を作し、飲食し畢訖りて比丘便ち精舍に退きぬ。展轉して相謂はく「一長者の夫人有り。懷姙甚だ奇怪なるべし。口に尊經を誦し所說流るゝが如し。其の音妙好なり。經理を解釋すること甚だ深し」と。後日長者復た比丘に請ふて普ねく衆僧に及び、悉く舍に詣らしむ。飲食の具を辦ず。時至りて皆到る、坐定し、行水飲食し已りて呪願[三三]達嚫せり。時に夫人出でゝ衆比丘を禮し却りて一面に坐せり。復た比丘の爲に快く經法を說き、諸の疑難有りて及ぶ能はざる者盡く比丘の爲に具足解說したれば、衆僧踊躍して歡喜して退きぬ。日月滿足せり。

【三二】分衞。前揭乞食に同じ。

【三三】達嚫。梵語(Dakṣiṇā)財施の義又右手の義なり。右手を以て施物を受くるなり。卽ち齋食の後に僧に財物を施し右手にて受けしむればなり。然るに僧はそれに對して說法を以て報いるこれも亦達嚫なり。

浄法を散說し、以て德本と爲し、凶禍を防絕す。而るに子姪し荒む。詭りて務有りと云ふ。吾れ佛廟に詣りしに子往いて道を亂せり。斯れより後、吾れの生れし所、佛に逢ひ法を聞き沙門と志を齊しくす。德行日に隆なり。遂に如來無所著正眞道最正覺道法御天人師となり、三界の尊と爲れり。號して[三〇]法王と曰ふ。隣人好んで鬼術に事へ群生を殘賊したり。女色を洪蕩して酒亂孝ならず。自ら志を得たりと謂ふ。三道に輪轉して苦毒無量なり。

吾れ已に佛と爲れり。子は續いて臭蟲と爲れり。是を以て之を笑ふ。

佛、阿難に告げたまはく、吾れ劫を累ね、經を稟けて義を採れり。沙門に親樂して斯の巍々たるを得たり。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

六十六、小兒聞法卽解經〔小兒の本生〕

昔、比丘有り。精進して法を守れり。少く禁戒を持し、初めて毀犯せざりき。常に梵行を守れり。精舍に在りて止む。諷誦すべき所は是れ[三一]般若波羅蜜なり。經を說くに聲妙にして能く及ぶもの無し。其れ此の比丘の音聲を聞くこと有りて歡喜せざるなし。一小兒あり。厥の年七歲なり。城外に牛を牧し遙かに比丘經を誦說する聲を聞けば、卽ち音を尋ねて精舍の中に往詣し、比丘を禮し已りて却りて一面に坐し其の經言を聽きたり。時に色本を說けり。之を聞いて卽ち解し、兒大いに歡喜したり。經句絕え已りて便ち比丘に問ふ。比丘の應答は兒の意に不可なり。是の時小兒反して解說を爲せり。其の義甚だ妙なり。昔希聞する所なり。比丘之を聞いて歡喜甚だ悅びて、「怪なり此の小兒は。乃ち智慧有り是れ凡人に非ざるなり」と。時に兒卽ち去れり。還りて牛の所に至れり。牧する所の牛犢散走して山に入れり。兒は其の迹を尋ねて追逐して求め索めたり。爾の時虎に値へり。此の小兒を害したれば小兒命終して魂神卽ち轉じたり。

長者の家に生れ、第一夫人の子と作れり。夫人懷姙せしに口便ち能く般若波羅蜜を說けり。朝よ

〔三〇〕法王。梵名(Dharma-rāja)なり。佛は法に於て自在なれば法王といふ。

〔三一〕般若波羅蜜。梵語(Prajñāpāramitā)。六波羅蜜及び十波羅蜜の中の第六なり。實相を照了する智慧は生死の此の岸を度りて涅槃の彼の岸に到る船筏なれば之を波羅蜜といふ。般若は智慧なり。波羅蜜は度又は到彼岸と譯す。

時行市を歴、一老翁の斗量魚を賣るを覩、哀慟して噿（二九）んで曰はく「怨まんかな皇天を。吾が子何の咎ありて早く身を喪ひたる。子存して魚を賣り吾れ豈勞せんや」と。

佛、其の然りを覩て之を笑へり。口光五色市に度するに斯を須ゆ。又大猪の尿に浴して路を行くを覩て佛、復た焉を笑ふ。阿難服を整へて稽首して白して「屬、人を笑ふに多く敬を致すに出ること莫し。而るに今重ねて笑ふは必らず教詔有らん。願くは衆疑を釋てゝ後の景模と爲さんことを」と。

世尊告げて曰はく「阿難、吾が笑ひに三因緣あり」と。一に曰はく「彼の老公の愚を觀て、其れを弘普と爲し、日ゝ罾網を以て群生の命を殘す。蓋し絲髮の惻隱無し。子に禍して自ら喪ふ。而して諸天を怨む。呼嗟して驚怖したるは斯れ下愚の行なり。二儀の仁、賢聖の恕に非ざるなり。是を以て笑ふのみ。

昔、飛行皇帝は福を植ゑ巍々たり。志憍に行逸なり。今魚を斗量せんと爲すは斯れ二なり。

不想の人天は壽八十億四千萬劫なり。意專らに空に著し、空を空として本無に還ること能はず。福盡きて罪を受く今斗中に在るは斯れ三なり。

阿難質して曰はく「飛行皇帝と逮び彼の尊天は其の德巍々たり。何の故ぞ。罪を免れざらんや」と。

世尊曰はく「禍福は眞に非らず。當に何の常かあるべき。夫れ尊榮に處し四等恩を施し、四非常を覺らば彼の禍を免るべし。若し貴に因りて自ら遂ぐ。心を快にして邪に從ふ。福盡きて罪を受く。古來より然り。殃福己を追ふこと猶し影の形を尋いで響の聲に應ずるがごとし。豈貴賤有らんや。惟ふに吾れ前世に淸信士と爲れり。時に隣人有り、好んで鬼魅を奉ぜり。姦蠱群を爲す。信ぜずして惡を作り、重禍響應せり。齋日に至る毎に、吾れ要らず佛正眞の廟に入り、沙門衆に聽かしめて

【二九】噿。宋・元・明の三本は噿は號なりと。

日沒華還りて合す　世尊の般泥洹なり
如來世に値見して　當に憂く精進して受くべし
睡陰蓋を除去して　佛の常在を呼ぶこと莫れ
深法の要慧は　色因緣を以てせず
其の現に智有るものは　當に善權たるを知るべし
善權の度する所は　有益して唐擧せず

而も此の變化を現じて亦一切を以てするが故なりと。時に德樂正は其の說を聽聞して卽ち[二五]不起の法忍を得たり。諸法の本を解して[二六]陀羅尼に逮べり。乃ち精進辯の善權の方便たるを知れり。常に獨り[二七]經行して復た懈念せず。時に應じて亦[二八]不退轉地を得たり。

佛、阿難に告げたまはく、爾の時の精進辯とは今の我が身是れなり。德樂正とは彌勒是れなり。

佛、阿難に告げたまはく、我れ爾の時倶に彌勒と共に經法を聽けり。彌勒時に睡眠して獨り所得無し。設ひ我れ爾の時に善權を行じて救度せずんば、彌勒今に生死の中に在りて未だ度脫を得ざらん。是の法を聞くものは常に當に精進すべし。廣く一切を勸めて皆睡眠の蓋を除去せしむ。當に光明智慧の本に造るべし。是の事を說ける時に、無央の數人皆無上平等の度意を發さん。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

六十五、佛以三事笑經【淸信士の本生】

昔、菩薩あり。淸信士と爲り、三尊に歸命したり。慈弘仁普して群生を恕濟す。淸を守りて盜まさりき。布施等至るも貞淨にして泆ならず。觀じて內婬を捐て、信四時に同じ。重なること須彌の如し。酒を絕ちて飮まず、孝を尊んで親に喩ふ。正を以て月に六齋を奉じ精進して倦むことなし。生ぜし所佛に遇へり。德行日に隆んなり。遂に如來無所著正眞覺道法御天人師を成ず。敎化周旋し、

【二五】不起の法忍。前掲せり。無生法忍に同じ。
【二六】陀羅尼。梵名(Dhāraṇī)といふ。持・總持・能持能遮といふ。善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用に名づく。法・義・呪・忍の四種陀羅尼あり。
【二七】經行。一定の地を旋繞し往來すること。卽ち坐禪して睡眠を催せし時之を防がんが爲、又養身療病の爲になすなり。
【二八】不退轉。是れ梵語の阿毘跋致なり。所修の功德善根に於て愈々增進し更に退失し轉變せざるなり。

で華上に住し、[二三]甘露味を食したり。

時に德樂正は端坐して之を視たり。復た飛び來るを畏れて敢て復た睡らず。蜂王を思惟して其の根本を觀たり。蜂王食味して華中を出でず。須臾の頃、蜂王睡眠して汚泥の中に墮したり。身體沐浴し、已に復た還りて飛んで其の華上に住したり。時に德樂正は蜜蜂王に向ひ此の偈を說いて言はく。

是の甘露を食する者は　其の身安隱なるを得たり
當に復た持ち歸りて　遍く其の妻子に及ぼすべからず
如何が泥中に墮して　自ら其の身體を汚さん
是の如きを無黠となし　其の甘露味を敗る
又此の華の如き者は　中に久住すべからず
日沒華還りて合す　出づるを求めば則ち能はず
當に須らく日光明を須ちて　爾乃ち復た出づるを得べし
長夜の疲冥は　是の如く甚だ勤苦なり

と、

時に蜜蜂王は德樂正に向ひて偈を說いて報へて言はく、

佛者は甘露に譬ふ　聽聞は厭足無し
當に懈怠あるべからず　一切を益すること無し
[二四]五道生死の海は　譬へば汚泥に墮するが如し
愛欲は纏裹せらる　無智甚だ迷へりと爲す
日出でゝ衆華開くるを　佛の色身に譬ふ

【二三】甘露味。梵語(Amrta)なり。味甘くして蜜の如きもの。天人の所食なりといふ。甘露は是れ諸天不死の藥にして食する者は命長く身安んず。

【二四】五道生死。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間なり。

を除いて食を捐てよ。我の如くにすべきなり」と。言畢りて飛び去れり。
佛、諸比丘に告げたまはく、鴿王とは吾が身是れなり。菩薩の鋭志度無極なり。精進すること是の如し。

六十四、佛說蜜蜂王經［精進辯比丘の本生］

是の如きを聞けり。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。
佛、諸の弟子に告げたまはく「當に勤精進に聽聞諷誦すべし。懈怠陰蓋に覆はるゝを得ること莫れ。吾れ念ひらく過去無數劫の時に佛有り。一切度王如來無所著最正覺と名づく。時に一切の諸天人民を不可計數と爲す。而して經法を說けり。是の時衆中に兩比丘有り。其の一比丘を精進辯と名づく。一比丘を德樂正と名づく。共に經法を聽けり。
精進辯とは經を聞いて歡喜し時に應じて卽ち[一六]阿惟越致を得、[一七]神通具足したり。德樂正とは[一八]睡眠して覺らざれば獨り所得無かりき。
時に精進辯は德樂正に謂つて曰はく「佛者値ひ難し。億百千世の時乃ち一たび出でんのみ。當に精進して衆の爲に本と作るべし。如何睡眠せん。夫れ睡眠とは[一九]陰蓋の罪なり。當に自ら勗め勉めて覺悟の心有るべし」と。時に德樂正其の敎詔を聞いて便ち卽ち經行したり。祇樹の間に於て甫めて經行を始めたれども復た睡眠に住したり。是の如き煩亂して自ら定むること能はず。泉水の側に詣りて坐して思惟せんと欲す。復坐して睡眠せり。
時に精進辯は便ち善權を以て往いて之を度せんとす。化して蜜蜂王と爲れり。飛んで其の眼に趣き、之を螫さんと欲するが如し。時に德樂正は驚覺して坐し、此の蜂王を畏れたり。須臾にして復た睡れり。時に蜜蜂王飛んで腋下に入れり。其の胸腹を螫したり。德樂正驚いて心中[二〇]慷悸たり。敢て復睡らざりき。時に泉水中に雜色の花あり。[二一]優曇・[二二]拘文、種々の鮮潔あり。時に蜜蜂王は飛ん

【一六】阿惟越致。梵語（Avaivarti）なり。阿鞞跋致ともいふ。不退轉と譯す。成佛の進路を退轉せざる義なり。菩薩の階位にして一大阿僧祇劫を經て此の位に達するなりといふ。
【一七】神通。梵語（Abhijñā）といふ。測るべからざる無礙の力用を神通又は通力といふなり。
【一八】睡眠。心をして闇昧ならしむる精神作用のこと。意識の惛熱を睡といひ、五識の闇冥にして働かざるを眠といふなり。煩惱の一なり。梵語（Middham）なり。
【一九】陰蓋。五蓋はこれなり。睡眠は五蓋の一なり。陰は蘊に同じ。
【二〇】慷悸。おそれ戰く貌なり。
【二一】優曇。梵名（Udumbara）なり。花の名なり。優曇波羅、烏曇跋羅などゝ音譯す。靈瑞、瑞應などゝ譯す。三千年に一たび現じ現ずれば則ち金輪王出づといふ。
【二二】拘文。梵名（Kumuda）。ならん。花の名にして地喜花、赤蓮花、白蓮花などゝいひ、蓮の未だひらかざるものならん。

の鸚鵡の所に詣りて曰はく「吾が王喪へり。願くは臣僕とならん」と。曰はく「爾の王死したらんに屍を以て相示せ。若し夫れ眞に喪はば、吾れ將に爾の衆を納れんとす」と。

還りて屍を取らんとするに霍然として見ず。四布行索して其の王を獲たり。僉然として禮を爲し故に復して供養せん。王曰はく「吾れ尙未だ喪せざるに爾等委捐したり。諸佛の明訓は世を觀るに親無し。唯道のみ宗たるべし。沙門鬚髮を以て亂志の穢と爲せり。故に之を捐棄して無欲の行を崇べり。爾等讙鬧し邪聲志を亂せり。獨にして偶無し。上聖の德に齊し」と。言畢りて翩飛したり。閑して[一四]窈寂に處し欲を棄てゝ爲す無し。定行を思惟して諸穢都べて滅したれば心天金の如し。

佛、諸比丘に告げたまはく、時の鸚鵡王とは吾が身是れなり。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

六十三、鴿王の本生

昔、菩薩あり。身鴿王たり。徒衆五百あり。國王の苑に於て翺翔として食を索めたれば、國王之を覩て、牧夫に勅令して「率網張捕せよ。其の衆巨細にして子遺あること無れ」と。籠もて之を閉し、食粳米を以てして肉を肥やせり。太官以て肴膳を供したり。鴿王拘へらる。一心に佛を念じ、過を悔いて慈を興したり。衆生の拘者をして解くことを得て疾く八難を離れて我れの如く無からしめんと願ふなり。

諸鴿に謂つて曰はく「佛經の衆戒は貪もて元首と爲せり。貪して以て榮を致すものは猶し餓夫毒を獲て飮むがごとし。志を得るの樂や其の久しきこと電の若し。衆苦己を困らすこと其の億載有り。爾等食を捐てゝ身命を全ふすべし」と。衆、之に對へて曰はく「拘はれて籠に處し將何を冀はんと欲するや」と。王曰はく「佛敎に違替して情を縱にし貪欲にして身を喪はざる者靡し。己自ら食を捐てたれば肥體日に耗じたり。[一五]間關して出づることを得たり」と。顧みて餘に謂つて曰はく「食

【一四】窈寂。深く靜なる貌。

【一五】間關。幾たびとなく艱難に會ふにいふ語なり。

は靡し。

佛、諸比丘に告げたまはく、時に魚王とは吾が身是れなり。左右の臣とは鶖鷺子大目揵連是れなり。菩薩の鋭志度無極なり。精進すること是の如し。

六十一、龜王の本生

昔、菩薩あり。身龜王と爲れり。晝夜精進して善方便を思ひ、衆生神をして本無に還らしむ。又龜王有り。共に深山に處る。倶に[二]蝘蜓樹に登りて自ら投じ、斯の如くして寧きこと無きを覩たり。菩薩占つて曰はく「斯れ身を危くするの象なり。吾等宜しく早く之を避けて善を爲すべし」と。其の一龜王は專愚にして自由なり。眞言に從はず。菩薩心を盡して其の從者を濟ひて難を免るゝことを得せしむ。十日の後に象王徒衆は樹に就いて燕息したれば、蝘蜓自ら投じて象耳の中に墮したり。則ち驚いて啼呼したり。群象犇り赴けり。其の來る縱横にして諸龜を踐み殺したり。龜王恚りて曰はく「事の玆の如きを知りて指して云はず。吾れ死し爾生きん。心に於て善ならんや。劫を累ねて爾を尋ね、逢へば必らず殘戮せん」と。

佛、諸比丘に告げたまはく、善占龜なるものは、吾が身是れなり。自專して去らざるものは調達是れなり。菩薩の鋭志度無極なり。精進すること是の如し。

六十二、鸚鵡王の本生

昔、菩薩あり。鸚鵡王と爲り。徒衆三千あり、兩鸚鵡あり。力幹衆に踰えたり。口に竹莖を銜み以て車乘と爲れり。王は其の上に乘れり。飛止して遊戲したり。常に莖車に乘れり。上下前後左右の鸚鵡各五百衆あり。六面輔翼合して三千有り。所珍に貢献して娛樂時に隨ふ。王深く自ら惟るに衆讙しく德を亂し定を獲るに由し無し。吾れ將に權して病に託して食はず。佯り死して衆を棄てんとす。其の諸衆者[三]簟を以て之を覆ひ、各捐てゝ去れり。王興ちて食を求む。諸の鸚鵡衆は他山

【二】蝘蜓。やもりなり。

【三】簟。竹又は葦を以てあみたる席、たかむしろのこと。

其の肉を食ひ其の髓を吮れり。

馬王遙かに婬鬼の人を噉ふを覩て之が爲に涙を流し因りて飛んで海を渡れり。海の彼岸に之き成擣の粳米を獲たり。馬王食飲し畢んぬ。山に登りて呼んで曰はく「誰れか度せんと欲する者あらんや」と。此の如きこと三たびなり。商人之を聞いて喜んで曰はく「常に聞くに神馬哀みて危難を度すと。今其れ臻らんや」と。喜んで之に趣けり。曰はく「哀めり、吾等を度せんことを」と。馬曰はく「爾等去る者ならば婬鬼必らず當に子を提げて爾らに示し、號呼して追ふべし。顧戀の心あらば、吾れ去りし後、鬼必らず復た鐵錞を以て爾らの咽を刺し、爾らの血を飲み、爾らの肉を呑まん。心を正しくして善を存ぜば命を全ふすることを得べし。夫れ歸らんと欲せば吾が背に騎り吾が〔一〇〕鬣尾を援け頭頸を捉へ自由に執る所なり。更に相攀援せば必ず活かりて親を覩るならん」と。

商人の其の言を信用する者は皆命を全ふして歸りて六親を覩るを獲たり。婬惑の徒は鬼妖の蠱を信じて噉はれざるは靡し。夫れ正を信じ邪を去らば、現世永へに康し。

佛、諸比丘に告げたまはく、時に馬王とは吾が身是れなり。菩薩の鋭志度無極なり。精進すること是の如し。

六十、魚王の本生

昔、菩薩あり。身魚王と爲れり。左右の臣有り。皆高行を懷き、常に佛教を存せり。食息めて替へず。水の生菜を食ひ、苟くも命を全ふするを以て群小を慈育せり。猶し自身を護るがごとし。潮を尋ねて遊戲せり。誨ふるに佛戒を以てす。覺漁の人網を以て之を挾まず。群魚巨細悼灼せざるは靡し。魚王愍みて曰はく「愼んで恐るゝこと無かれ」と。一心に佛を念じて衆生の安きを願ふ。普慈弘誓なること天祐猶響のごとし。疾く來りて相尋ねて「吾れ爾等を濟はん」と。魚王首を以て倒れ、泥中に殖やす。尾を仕めて〔一一〕綱を擧げたり。衆皆馳せ出でたり。群魚活くるを得て附親せざる

〔一〇〕鬣尾。たてがみとしっぽ。

〔一一〕綱。明藏に依れば網なり。

て喪はんとす。而して君之を濟へり。願くは水草を給して終身の奴と爲らん」と。吾れ之に答へて曰はく「爾、去りて自ら之く所に在れども愼んで人に向ひて吾れ斯に在りと云ふこと無かれ」と。鹿王又曰はく「寧ぞ水中浮草木を出でて陸地に上著して無反復の人を出さゞらんや。財を劫めて主を殺し、其の惡原ぬべし。恩を受けて逆を圖れり。斯の酷陳べ難し」と。王驚いて曰はく「斯れ何ぞや、畜生にして弘慈を懷き、命を沒するまで物を濟ひ以て艱と爲さず。斯れ必らず天ならん」と。

王は鹿の言を善しとし、喜んで德を進めたり。國内に命じて曰はく「今日より後鹿の食ふ所を恣にして敢て犯す者あらば、罪皆死に直せん」と。王還れり。元后は王の之を放ちしを聞いて、恚盛んに心碎けて、死して太山に入れり。天帝釋は王の志を建てて仁を崇べるを聞いて其の玆の若きを嘉して化して鹿類となれり。國を盈たして穀を食ふ。諸穀苗稼土を掃ひて皆盡くして、以て其の志を觀たり。黎庶之を訟へたり。王曰はく「凶訛國を保んぜんも、信を守るの喪ふに若かざるなり」と。釋曰はく「王は眞に信ぜり」と。鹿をして各去らしめたり。穀豐なる十倍なり。毒害消歇して、諸患自ら滅したり。

佛、諸比丘に告げたまはく「時の鹿王とは吾が身是れなり。烏とは阿難是れなり。王とは鶖鷺子是れなり。溺人とは調達是れなり。王の妻とは今の調達の妻是れなり。菩薩の鋭志度無極なり。精進すること是の如し。

五十九、驅耶馬王の本生

昔、菩薩あり。身馬王と爲れり。名を駈耶と名づく。常に海邊に處れり。漂流せる人を渡したり。時に海の彼岸に婬女鬼あり。其の數甚だ多し。若し商人を覩れば即ち化して城郭居處、田園伎樂飲食を爲り變じて美人と爲れり。顏華曄曄たり。商人を要請して酒樂もて之を娛めり。鬼魅人を惑はしめ、皆留らして匹偶たり。一年の間に婬鬼厭ふが故に〔九〕鐵錞を以て其の咽を刺して其の血を飲み

【九】鐵錞。鐵のいしづきのこと。

二儀に喩えたり。終始忘れず。願くは奴使と爲りて乏しき所に供給せん」と。鹿曰はく「爾、去れ。吾が軀命を以て汝の終身を累ひせん。夫れ我れを索むること有らば我れ之を覩るといふこと無かれ」と。溺人、敬んで諾す。命を沒するまで違はず。時の國王を摩因光と名づく。稟操淳和にして黎庶を慈育せり。王の元后厥の名は和致なり。夢に鹿王の身毛九色を見る。其の角犀に踰ゆ。寤寤して以て聞して「鹿の皮角を以て衣を爲り珥を爲らんと欲す。若し之を獲ざれば妾必らず死せん」と。

王重ねて曰はく「可し」と。晨に群臣に向ひて鹿の體狀を說く。命を布いて募り求めたり。獲者は之を一縣に封ず。金鉢之に銀粟を滿し。銀鉢之に金粟を滿さん。之を募ること斯の若し。溺人悅びて曰はく「吾れに一縣の金銀滿鉢を獲なば、終身の樂ならん。鹿は自ら命を殞さんとしたり。余何をか豫らん」と。卽ち馳せて宮に詣りて事の如く陳聞して之を啓したり。斯を須ちて面には卽ち癩を生じ、口朽ちて臭を爲せり。重ねて曰はく「斯の鹿に靈有れば王は將に衆を率ゐて乃ち之を獲べけんのみ」と。王卽ち兵を興して江を渡り、之を尋ねたり。鹿、時に烏と素結びし厚友なりき。然も其の臥睡して王の來るを知らず。烏曰はく「友ならんや。王來りて子を捕へん」と。鹿疲れて聞えず。耳を啄へ重ねて云はく「王來りて爾を殺さん」と。

鹿驚いて王は弓を彎して己に向ひたるを覩たれば、疾く馳せて前に造り、膝を跪いて叩頭して曰はく「天王よ吾れに漏刻の命を假したまはんことを。愚情を陳べんと欲す」と。王、鹿の然るを覩て卽ち命じて矢を息めたり。鹿曰はく「王重ねて元后躬を勞して之に副へなば、吾れ終に免れず。天王は深宮の內に處したりしに焉んぞ微蟲の斯に處するを知らんや」と。王手指して云はく「癩人之を啓したり」と。

鹿曰はく「吾れ美草を尋ねて之を食したりしに、遙かに溺人の天を呼んで哀を求めたるを覩たり。吾れ窮を愍みて危きに投じて之を濟へり」と。其の人岸に上りて叩頭して曰はく「吾が命且くにし

【八】漏刻。水時計のこと。數時間のことならん。

鹿王對へて曰はく「操を執りて淑からず。命を稟けて獸と爲れり。美草を尋求して以て微命を全ふせんに、國境を干犯し罪應尤も重し。身肉盡きたりと雖も兩脾五藏完具して倘存す。惟願くは太官一朝の膳に給せよ」と。王曰はく「爾何に緣りてか玆の若からんや」と。鹿王は本末其の所以を陳べたり。其の王惻然として之を爲し、涙を流して曰はく「爾は畜生たれども乾坤の弘仁を含み、命を毀ちて以て衆を濟ふ。吾れ人君となりて苟くも貪して殘を好み天の所生を殘したり」と。即ち重命を布きて、國の黎庶に勅すらく「自今獵を絕てり。鹿肉を貪ること無れ。索を裂いて鹿を擧ぐ。安んぞ平地に居かんや」と。群鹿其の王を覩て天を仰いで悲號せり。各前んで瘡を舐めたり。分布して藥を採り[六]咀咋して之を傳ふ。人王焉を覩る。重ねて爲に涙を抆りて曰はく「君子を以て其の衆を愛育す。衆は親恩を以て其の君を慕ふ。君爲るの道不仁たるべけんや」と。斯れより殺を絕ちて仁を尙びたれば天即ち之を祐けたり。國豐かに民熙なり。遐邇仁を稱したれば民歸すること流るゝが若し。

佛、鶖鷺子に告げたまはく、鹿王とは吾が身是れなり。五百鹿とは今の五百比丘是れなり。人王とは阿難是れなり。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

五十八、[七]修凡鹿王の本生

昔、菩薩あり。身鹿王となり名づけて修凡と曰ふ。體毛九色は世の希有なりしを覩る。江邊遊戲せるに、溺人あり。天を呼んで哀を求むるを覩たり。鹿之を愍みて曰はく「人命得難し、而して當に殞すべけんや。吾れ寧ろ危きに投じて以て彼を濟はん」と。即ち泅ぎ之に趣いて曰はく「爾恐るること勿れ。吾が角を援けて吾が背に騎りなば今自ら相濟はん」と。人即ち之くの如し。鹿、人を出し畢りぬ。息微かに殆ど絕えたるに、人活けられ甚だ喜べり。鹿を遶ること三匝なり。叩頭して陳して曰はく「人道遇ひ難し。厥の命甚だ重し。大夫危きに投じて吾れを濟ふ。命を重んず。恩

【六】咀。咬決し、かみわけることなり。咋は咲ひ嚙むこと。

【七】九色鹿經大正No.181と異譯なり。此の經は吳の月氏優婆塞支謙譯とあり。

水邊の岸に墮す。絕して復た蘇れり。

國王、晨に往いて案行して大獼猴を獲たり。能く人語を爲せり。叩頭して自ら陳して云はく「野獸生を貪して澤を恃み國に附したるに時旱にして果乏し。天苑を干犯したる咎過我れに在り。原ぬるに其の餘を赦さんことを。蟲身朽肉なれば太官一朝の餚に供すべし」と。

王仰ぎ歎じて曰はく「蟲獸の長なれども身を殺して衆を濟ふは古賢の弘仁有り。吾れ人君たり。豈能く如かんや」と。之が爲に涕を揮ふ。命じて其の縛を解き、扶けて安土に著く。一國中に勅すらく「猴の食ふ所を恣にせよ。之を犯す者あらば罪は賊と同じ」と。還りて皇后に向ひ、其の仁澤を陳べて「古賢の行も未だ玆に等しからざらん。吾が仁、糸髮なるに、彼れ崑崙に踰えたり」と。后曰はく「善い哉。奇なり斯の蟲や。王は當に其の食ふ所を恣にして衆をして害せしむること無からしむべし」と。王曰はく「吾れ已に命じたり」と。

佛、諸比丘に告げたまはく、獼猴王とは吾が身是れなり。國王とは阿難是れなり。五百獼猴とは今の五百比丘是れなり。菩薩の銳志度無極なり。精進すること是の如し。

五十七、鹿王の本生

昔、菩薩あり。身鹿王と爲り、力勢衆に踰えたり。仁愛普覆し群鹿慕從せり。遊びし所苑に近し。牧人以て聞す。王は士衆を率ゐて合圍して之に逼れり。鹿王乃ち知れり。泣を垂れて而も曰はく「爾等斯れ厄なり。厥の尤我れに由るなり。吾れ將に命を沒して爾ら群小を濟はんとす」と。鹿王索に就き前の兩足を下げて曰はく「吾れに登りて踊出せば爾等全ふすべし」と。群鹿之くの如くして咸免るゝことを獲たり。身肉決裂して血流泉の若し。地に踣れて纔息したり。其の痛み言ひ難し。群鹿啼呼して徘徊して去らず。人王其の體殘にして血流地を丹くしたるを覩て鹿衆を見ざりき。曰はく「斯の者は何の以ぞや」と。

答へて曰はく「佛を聞かば則ち殞ちんも吾れ欣んで之を爲さん。豈況んや身を刺して生存するものならんをや」と。即ち針を布いて以て身に刺したり。血流泉の若し。菩薩法を聞くことを喜びて無痛の定を得たり。

天帝釋は菩薩の志鋭なるを覩て其が爲に愴然たり。化して擧身の一毛孔なるものをして一針あらしめたり。其の人之を覩て厥の志高きを照し即ち之を投けて曰はく「口を守り意を攝して身惡を犯すこと無し。是の三行を除いて賢を得て度するを經たり。是れ諸如來の無所著正眞尊最正覺の戒の眞說なり」と。菩薩戒を聞いて歡喜して稽首す。顧て身針を視、霍然として現ぜず。顏景弈弈として氣力前に踰えたり。天人鬼龍歎懿せざるはなし。志進み行高し、踵指相尋いで遂に得佛することを致して衆生を拯濟せり。

佛、諸比丘に告げたまはく、菩薩に偈を投けし者は今の調達是れなり。調達は先づ佛偈を知れりと雖も猶し盲の燭を執りて炤すがごとし。彼れ自ら明らかならず。何ぞ已れを益せん。菩薩の鋭志度無極なり。精進すること是の如し。

五十六、獼猴王の本生

昔、菩薩あり。獼猴王と爲れり。常に五百獼猴を從ふて遊戲す。時世枯旱にして衆果豐ならず。其國の王城山を去りて遠からず。隔つるに小水を以てす。猴王其の衆を將ゐて苑に入りて果を食す。苑司以て聞す。王曰はく「密に守りて去ることを得せしむること無かれ」と。猴王之を知りて愴然として曰はく「吾れ衆長たり。禍福は由る所なれども果を貪りて命を濟ふ。而も更に衆を誤れり」と。其の衆に勅して曰はく「布行する[五]藤を求めよ」と。衆還りて藤至れり。競ふて各連續す。其の一端を以て大樹枝に縛れり。猴王自ら腰に繫けて樹に登りて身を投ず。彼の樹枝に攀ぢりて藤短かく身垂る。其の衆に勅して曰はく「疲く藤に緣て度れ」と。衆以て過ぎ畢りぬ。兩掖倶に絕す。

【五】藤。藤なりと宋・元・明の三藏云へり。蔓かづらならん。

卷の第六

精進度無極章第四（此に十九章あり）

精進度無極とは厥は則ち云何。精しく道奥を存し之を進めて怠る無きなり。[一]臥坐行歩するに喘息替へず。其の[二]目髣髴たり。恒に諸佛の靈像變化して已の前に立てるを覩る。厥の耳聲を聞くに、恒に正眞が誨徳の音を垂れたるを聞く。鼻は道香を爲し、口は道言と爲る。手に道事を供へ、足道堂を蹈む。斯の志を替へざること呼吸の間にもす。衆生長夜の沸海、洄流輪轉して毒加はりて救無きを憂慼す。菩薩之を憂ふること猶し至孝の親を喪ふがごとし。若し夫れ衆生を濟ふの路は前に[三]湯火の難、刃毒の害有らば躬を投じて命を危くして喜んで衆難を濟ふ。志は六冥の徒らに榮華を獲たるを踰えん。

五十五、凡人の本生

昔、菩薩あり。時に凡人と爲れり。佛の名號相好道力を聞き、功徳は魏々として諸天共に宗とす。則ち高行なる者は衆苦都べて滅す。菩薩想を存し、吟泣して寧きこと無し。曰はく「吾れ得天師に從ひ經典諷誦して行を執り以て佛と爲ることを致し、衆生の病を愈やして本淨に還らしめん」と。

時に佛世を去りて除饉の衆無く、受聞するに由無し。隣りに凡夫あり。其の性貪殘なり。菩薩の精進志鋭なるを覩て曰はく「吾れ佛[四]三戒の一章を知れり。爾稟けんと欲せんや」と。菩薩之を聞いて、其の喜び無量なり。足下に稽首し、地に伏して戒を請ふ。偈を知る者曰はく「斯れを無上正眞最正覺道法御天人師の要教と爲すなり。子徒らに之を聞かんと欲す。豈其れ然らんや」と。答へて曰はく「請ふ法儀を問はんに、厥の義何こに之かん」と。曰はく「爾審かに懇誠する者ならば身毛の一孔一針もて之を刺し、血流れて身痛くとも心に悔いずんば尊教聞くべし」と。

【一】臥坐行歩。行住坐臥に同じ。四威儀のことなり。
【二】眼耳鼻舌身の五根もてするは悉く佛道に精進する爲にせよとなり。
【三】湯火。地獄の苦難なり。
【四】三戒。歸佛、歸法、歸衆の三なり。

たり。率土生れて太山地獄に入る。留りて岸に在るものは微怖して全し。

佛、是の日に於て[五七]慈心定を興したり。諸の沙門は阿難に問ふて「佛出でざらんや」と。答へて曰はく「一國大喪なり。佛、慈定を興す。故に出でざるなり。佛、明晨に出でん」と。諸の沙門地に稽首す。釋梵四王諸龍鬼神帝王臣民稽首して座に就けり。阿難服を整ふ。二國の禍變の元を問へり。「願くは衆疑を釋いて、群生をして禍福の所由を照さしめんことを」と。

佛、阿難に告げたまはく、「昔三國有り比隣して王たり。時、佛世を去ること久遠なり。經典修らず。菩薩處するの國に湖池有り魚を獲て無數なるを致す。近國聞いて喜べり。財に資し來り買ふ。魚盡き慘として還れり。遠國知らず亦買心なし。漁獵國者は今釋三億人の死者是れなり。其の一國喜んで魚を貿はんと欲するものなり。今一城の人徒らに財を亡ふことを恐るゝもの是なり。遠國魚を得るを聞かざる者今一城の中人王の來るを知らざるもの是れなり。我時に魚の首を破るを見て失言して之を可としたり。

今已に佛を得たり。三界の尊と爲れり。尙首疾の殃を免れず。豈況んや凡庶をや。諸弟子よ。爾の心を端にし、德惠を興して群生を安んぜよ。己を恕して彼を濟ひ、愼んで生を殺し人の財物を盜み、彼の妻に非ざるを婬すること無かれ。兩舌惡罵し、妄言綺語し、嫉妬恚癡もて三尊を誹謗するは禍の大なることなり。十惡を尙ぶこと莫かれ。福榮の尊、夫れ唯十善なるのみ。

物を殺す者は自殺となす。物を活くるものは自ら活くと爲す。心に惡を念じ、口に惡を言ひ、身に惡を行ずるを棄するは心に道を念じ、口に道を言ひ、身に道を行ふに若くは莫し。惡を爲らば禍尋ぐこと猶響の聲に應じて影の形を追ふがごとし。斯の變を覩るものは愼んで春天の仁に違ひて犲狼の兇を尙ぶこと勿れ」と。

佛、經を說き畢りぬ。[五八]四輩の弟子、天龍鬼神、皆大歡喜して稽首して去りき。

【五七】慈心定。人に樂を與ふる三昧なり。四無量心の一なり。

【五八】四輩。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷のことなり。

救ひ難きこと猶し釋の禍攘ひ難きがごとし。

佛、阿難をして鉢を擧げしむ。鉢の下の人亦終れり。佛、諸の沙門を將ゐて梵志の講堂に至れり。道、諸釋の死地を經たり。或は已に死したるあり。或は臂・髀・脛を折りし者あり。佛の來りしを覩て或は頰を博ち、呻吟して云はく「佛に歸命し法に歸命し聖衆に歸命す。願くは十方の群生皆永へに重きを獲、我等の如く莫からんことを」と。

時に自然に床地より出でたり。其の地間無し。諸の沙門皆坐せり。佛言はく「斯の王勃逆にして罪を興すこと弘廣なり」と。

又沙門に問ふて「若し屠獵魚網者は[五四]飛行皇帝爲ることを獲たるを見しや」と。對へて曰はく「見ず」と。佛言はく「善い哉。吾れも亦見ず。其の四等心が彼の群生を惠むこと無きを以ての故なり」と。

王湖邊を行けり。衆水に入りて浴す。神化して毒虫と爲り、其の士衆を螫したり。毒行いて身黑し。或は水中に死する者あり。或は百歩一里して死する者あり。且半ばにして國に入れり。兇鬼宮中に雲集す。夜時人聲物鳴き、聚居して相持す。旦を須ちて命と爲せり。日月薄蝕し星宿度を失ふ。怪異首尾王を怨まざるはなし、王は佛戒火變の異を聞いて內湯灼の如し。使者を遣はして其の事に參す。佛の說きしこと上の如し。

使返りて具に聞す。國振ひ瓦崩す。王群臣に會ひ議して言はく「或は山に於てし或は水に於てせん」と。遂に船に乘じて海に入りしに强富は從を得たり。貧羸國に留まりぬ。王の內宮の人船に登りて服を上る。火を望んで衣を解きたるに[五五]陽燧の珠を脫す。服上に著けたり。其の日雲興れり。[五六]壅々曖々たり。風雨凌々たり。窅絕ちて舟漂ふ。臣民僉曰はく「弊王凶を行へり。乃ち兇禍を致せり」と。向中の時日出でて炙陽燧陽あり。燧化して火となり。始め王舟より太山鬼神雲集躃踊

【五四】飛行皇帝。轉輪聖王のこと。

【五五】陽燧。日光を受けて火を取るものなりといふ。

【五六】空くもりて暗く風ふく貌。

はく「罪をいかんともすること無けん」と。目連言はく「吾れ能く有形を壞へども無形の罪をいかんともすること無し」と。衆祐曰はく「惡を種ゑなば禍生ず。孰れか能く之を壞はん。釋氏の一字を取りて吾が鉢の下に置け、以て其の實を效せよ」と。目連命の如し。釋の諸耆舊教を承けて門を守れり。魔化して舊徳と爲れり。諸釋を呵して曰はく「王の假拏之く所有り。爾其れ彼れを絶ちて將に後尤を益さんとす。佛弟子行いて爾るを得べけんや」と。

魔勢を奮ひ鑰[五二]を拔いて門を排して兵入れり。猶し塘決して水翻するが如し。釋摩南[五三]大將軍となりたり。王と先王と師を同じうして學び、死友の誓あり。王に謂つて曰はく「爾の兇士を住めよ。一飡の頃、城中の人をして出づるを獲せしめ命を全ふせしめよ」と。王曰はく「可し」と。

大將軍水に臨んで佛に向ふ。叩頭して涙を流して曰はく「吾れ微命を以て彼の少人に請ふ。願くは十方の群生をして皆佛教を奉じ、己を恕して衆を濟ひ、潤ひ二儀に合し、狼蚖の毒と爲し、衆生を殘賊して斯の無道の王の若く無からしめんことを」と。

水に入りて髮を以て樹根を繼ひ頃有りて命終せり。王使者を遣はして之を視る。還りて事の如く云へり。兵入り地を堀る半ば釋人を埋めたり。材を横にし象牽いて概ね之を殺したり。或は馬蹟し或は兵刃あり。佛の時首疾む其の痛み言ひ難し。梵王帝釋四大天王皆叉手し侍して之が爲に痛心したり。釋人自ら三尊に歸命する者、經を誦する者、慈心を起す者あり。釋三城有り。征事未だ畢らず。王は釋摩南身を殺して衆命を請ひしを憶ひ之が爲に愴然たり。師を旋らして軍を罷めたり。使者を遣はして敬を致して曰はく「士衆疲勞す。國に還りて師を息め、異日束修して足下を稽首し、佛教謝王自愛せん」と。使者退きぬ。佛之を覩たり。

阿難法服を整へて稽首して曰はく「佛、虛視せず。其れ必らず緣有らん」と。衆祐曰はく「釋罪畢れり。王の罪興れり」と。却いて後七日にして太山の鬼火を以て王及其の臣民を燒けり。王の罪

【五二】鑰。門戶のしまりをなすに用ゐる金具にして錠或はかぎなり。

【五三】釋摩南大將軍(Mahānāma Kulika)のこと、五比丘の一人、拘利の太子なりき、大名と譯す。善見律に云はく釋摩男は是れ佛の叔父の子なり。大經の中に諸の瓦礫を執りて皆悉く寶となしたり。斯れ過去の心力の致す所に由るといへり。

庶子出でゝ其の友に謂つて曰はく「斯の辱め[五〇]を外にする無かれ。吾れ若し王と爲らば爾茲を忘るゝこと無かれ」と。友曰はく「倶に然らん」と。旋らして其の母を守りて太子と爲らんと欲す。母妖蠱を以てすれば請ふて「子の願の如くせん」と。王曰はく「古來、未だ狂言を設けて自ら耻を招きたること無きを聞かず。妖蠱內に處る。佞臣の巧辭あり。遂に二嫡を立てゝ民を分ち正治せよ」と。

大王崩じたり。位兩國を立つ。民は悅ぶ所に隨ふ。仁凶流れを分てり。仁卽ち兄を奉ず。兇、馳せて叔に詣れり。友を相國と爲せり。干戈を修治し軍用衆備し、舊事を以て聞す。王曰はく「可し」と。

卽ち雄將の武士を寵して路に就きしに、佛は道の邊り半枯の樹に坐せるを覩たれば、王進んで稽首して曰はく「佛、純生に坐せずして半枯に處する將由有らんや」と。衆祐曰はく「斯の樹を釋と名づけ、吾れ其の名を愛せり。仁道を以て其の難を濟へり。其の枯を潤ほして其の生を惠むなり」と。王悵然として內に耻ぢて曰はく「佛の仁弘く普し。惠、草木に逮べり。豈況んや人をや」と。是に於て軍を旋したり。

相國仰いで天文を察するに、釋氏の宿を覩るに福索めども禍興れり。復以て之を聞す。軍又出でて未だ釋氏城に至らざるに數里あり。城中の弓弩矢聲猶し風雨のごとし。幢幡傘蓋竿を斷じ斗を截り鎧を裂いて控を斬り、士馬震ひ奔りて魄を失はざるはなし。王は又奔り歸れり。釋人佛に啓して「當に賊をいかんすべきか」と。曰はく「關門を牢して塹橋[五一]を廢せよ」と。王は又軍を出したり。目連啓して言はく「吾れ羅漢威神を以て化して天網と爲し城を覆ひて四十里に面せんとす。王、釋人をいかがせん」と。

衆祐曰はく「罪をいかんともすること無けん」と。又言はく「他方の利土を跳著せんか」と。曰

【五〇】斯の耻を他言することなかれといふに同じ。

【五一】塹橋。城を遶れる堀にかゝれる橋。

明に盛螢火隱退するがごとし。貪嫉之れ興らば亡身の火を覩ず。邪黨謀を搆へ女弟子を勸めて名づけて好首といふ。以て天尊を毀てり。國人未だ[四八]眞諦を獲ざるものは沈吟の疑有り。心、諸の沙門を疑ふ。王も亦焉を怪めり。蠱道貪濁にして財を諍ひて相訴ふ。濁現じて禍歸せしかども。卽時に廢せらる。貞眞照現す。天人歎善す。

王は精舍に詣り頓首して過を悔いたり。斯れに由りて王に慚ぢる心あり。媒に因りて啓問し佛女の妹を求め、婚姻の固を結びて以て釋家の怨を絕たん。衆祐曰はく「吾れ家を去りて沙門となりて世業に豫らず。嫁娶の事、一に父王に由る」と。是に於て使者を遣はして敬を致し結親の辭を宣すれども諸釋許さず。

王曰はく「佛は其の國に處せり。爾由りて往來せよ。明者は怨み無し。愚夫は讐有り。女は吾が賤妾の子なり。何ぞ以て恨を致すに足らんや」と。

王許して曰はく「可なり」と。遂に婚姻を成し男有り嗣なり。一たび諸舅を見んことを請ふて卽ち釋國に之く。

時に佛は當に還りて諸釋を開化すべし。諸釋欣々として佛の精舍を興し、土を堀ること三尺なり。栴檀香を以て之を塡めたり。國の衆寶を撿して佛の精舍を爲れり。[四九]焜々奕々として天宮の若き有り。聲隣國に聞え、躍逸せざるはなし。佛未だ之に坐せずして而も彼の庶子入觀して曰はく「斯の精舍の巧、衆珍の妙は唯天帝宮のみ匹と爲るべし」と。曰はく「佛、未だ玆に翔けず。吾れ一たび座に坐せん。命を沒するまで恨みざるなり」と。

庶子嬖友を名づけて頭佉摩と曰ふ。對へて曰はく「夫れ亦何の失かあらん。卽ち座に升れ」と。釋氏雄士、聲を壯にして呵して曰はく「衆祐の尊座なり。天帝臨まざるに何ぞや婢の子敢て座に升らんや。坐を裂いて更に興せよ」と。

【四八】眞諦。第一義諦に同じ。佛教の眞精神といふに同じ。

【四九】輝やける貌。

り。民飢へし者は吾れ自ら飢へり。寒なるものは卽ち衣單なり。豈況んや道を懷きて德を施すものならんをや。國寧く民安んず。四時順穀豐穰なる戒の德に非ずんば其れ誰れか之を致さんや」と。

道士に謂つて曰はく「水を飮んで告げず。罪乃ち此の若し。豈況んや眞盜の重咎有らざるをや。斯を以て子を赦さん。必ず後患無からん」と。梵志曰はく「大いに善し。王の洪潤を受けん」と。斯れより後、生死に輪轉して際無し。臨みて佛を得るに至るも食はざること六年なり。罪畢りて道成ず。倶夷を以て自解し羅云乃ち生ず。太子國を棄てゝ山林に勤す。邪見の徒咸狂惑と謂ふ。謗聲一に非ず。太子焉を聞けり。斯の忍辱を忍び追ふて慈濟を以てす。福隆んに道成ず。諸天雲集す。稽首して風を承け、帝王臣民歸命せざるはなし。

佛、諸の比丘に告げたまはく、時の王者は則ち吾が身是れなり。夫人とは倶夷是れなり。太子とは羅云是れなり。夫れ惡を崇めば禍追ふ。德を施せば福歸す。愼まざるべけんや。王道士を忘る餓せしむること六日なり。罪を受くること六年なり。飢饉纔息六日の後王身づから供養するが故に、今六年の殃畢りて道成ず。倶夷之を笑ふ。今羅云を懷きて六年重病なり。太子梵志を以て深く苑內に著けるが故に、六年幽冥に處せり。愚夫闇を重ねて去就を明にせず。惡心を以て佛の沙門に向ふ。梵志手を截りて舌を抜くものは斯れ一世の苦なり。妄りに手を以て捶てり。虛しく口をもて謗らば、死して太山に入らん。太山の鬼其の舌を抜出し、熱沙を著け牛を以て上を耕せり。又然釘を以て其の五體を釘にす。死を求むれども得ず。殃惡此の若し。順行邪無し。菩薩の法忍度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

五十四、釋家畢罪經

昔、菩薩あり。戒を守りて行淨なり。功を積み德を累ねて遂に如來無所著正眞道最正覺を獲、舍衞國に遊處し、天・龍・鬼神・帝王・臣民歸宗せざるはなし。蟲道邪術佛影の隆なるに値へり。猶ほ日

五十三、六年守飢畢罪經〔國王の本生〕

昔、菩薩あり大國王と爲り。三尊に歸命して具に十善を奉ず。德は[四六]遐邇を被りて風を承けざるはなし。兵刃施さず。牢獄有る無し。風雨時節、國豐に民富めり。四表康休す。路に怨嗟なし。華僞小書國を擧げて口を絕す。六度眞化して人誦せざるなし。

時に梵志有り。操を執りて淸淨なり。山林に閑居して流俗に豫せず。唯德は是れ務め、夜渴して行いて飮めり。誤りて國人の種へし所の蓮華池水を得たり。飮み畢りて意悟りて曰はく「彼れは此の池を買ひて華を以て佛廟を奉じ水果もて自ら供ふ。吾れ其の水を飮めり。其の主に告げずんば斯れ卽ち盜なり。夫れ盜の禍を爲さば先づ太山に入り、次に畜生と爲り。屠して市に賣られ以て宿債を償ふなり。若し人と爲ることを獲ば當に奴婢と爲るべし。吾れ早く今を畢りて後の患を遺すこと無きに如かず」と。

闕に詣り自ら告げて其の犯盜を云ふて「唯願くは大王、法を以て相罪せんことを。之を今に畢るまで後尤無からん」と乞へり。王告げて曰はく「斯れは自然の水なり。不賓の物なり。何の罪か之れあらん」と。對へて曰はく「夫れ其の宅を買はゞ卽ち其の井あり。其の田を占むれば則ち其の草を惜む。井を汲み芻を刈りて告ぐるに非ずんば取らず。吾れ告げずして飮めり。豈盜に非ざらんや。願くは王之に處せよ」と。王曰はく「國事多きが故に且く苑中に坐せよ」と。太子之を深く苑內に處らしむ。

王、事[四七]總猥して之を忘るゝこと六日なり。忽然として悟りて曰はく「梵志故に在らんや。疾く之を呼んで來れ」と。梵志戒を守り、飢渴六日にして王の前に之きて立てり。厥の體瘦疵なり。起ちて地に跪めく。王、覩て淚を流して曰はく「吾が過重なれり」と。王后之を笑ふ。王、人を遣はして梵志を澡浴せしむ。具に餚饌を設け自身供養せり。叩頭して過を悔いて曰はく「吾れ人君た

〔四六〕遐邇。遠近といふに同じ。

〔四七〕總猥。多忙なる貌。

べし。而も吾等往く。俯仰其の意を取り豈難からざらんや。國に入らば俗に隨ふ。進退儀に尋ぐ。柔心言遜にして明を匿し愚を揚ぐるは大士の慮なり」と。伯曰はく「禮は虧くべからず。德は退くべからず。豈裸形して吾が舊儀を毀つべけんや」と。叔曰はく「先聖影すれば則ち隕身して隕ちず行戒の常なり。金を内にして銅を表にす。儀を釋して時に從ふ。初め譏りて後歎ずるは權道の大なり」と。遂に俱に彼こに之けり。

伯曰はく「爾今先づ入りて其の得失を觀ぜよ。使を遣はして誠を告げよ」と。叔曰はく「敬んで諾す」と。旬日の間に使返りて伯に告げて曰はく「必らず俗儀に從はん」と。伯勃然として曰はく「人を釋てゝ畜に從ふ。豈君子の行ならんや。叔、吾が爲にせざるなり」と。

其の國俗月晦十五日の夜を以て常に樂を爲す。麻油膏を以て首に膏す。白土身を畫き、雜骨頸に瓔し兩石もて相叩く。男女手を携へて逍遙歌舞す。菩薩之に隨ふ。國人欣歎す。王民を愛し賓を敬し俠ちて相屬す。王悉く貨十倍を取りて之を雇ふ。伯、車乘して國に入れり。言嚴法を以てしたれば輙ち民心に違ふ。王怒り民慢り、財を奪ひて[四五]撾捶せり。叔、請ふて乃ち釋され、俱に本國に還りたり。

叔を送りし者は路に被ひ、伯を罵りしものは耳を聒したり。伯耻ぢ怒りて曰はく「彼れ爾とともに何ぞ親まん。吾れと何ぞ讐ならん。爾の惠み吾れを奪へり。豈讒言に非ざらんや」と。叔の帶を結んで曰はく「今自り後、世々相酷して終に爾を赦さゞらん」と。菩薩愴然として涙を流し誓ひて曰はく「吾れ世々、佛に逢ひ法を見、沙門に親奉して、四恩普く覆ひて衆生を潤濟せしむ。伯を奉ずること已の若く斯の誓に違はざるなり」と。此れより後、伯は輙ち叔を尅し、叔は常に之を濟ふ。

佛、諸の比丘に告げたまはく、時に叔なるものは吾が身是れなり。伯なるものは調達是れなり。菩薩の慈柔度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

【四五】撾捶。杖もて撃つこと。

佛、諸比丘に告げたまはく、槃達龍王とは吾が身是れなり。抑迦達國王とは阿難是れなり。母とは今の吾が母是れなり。男弟とは鶖鷺子是れなり。女妹とは[四三]青蓮華除饉女是れなり。時の龍を酷せし人とは調達是れなり。菩薩の弘慈度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

五十一、雀王經［雀王の本生］

昔、菩薩あり、身雀王と爲れり。慈心衆を濟ふこと慈母を倚ぐがごときあり。彼の艱苦を悲しむは情親に離るゝに等し。衆の道を稟けたるを視て喜ぶこと己の寧きが若し。衆生を愛育すること猶し身瘡を護るがごとし。虎有り獸を食す。骨は其の齒を柱にすれば病困將に終へんとす。雀其の然るを視て心に悲楚を爲し、曰はく「諸佛は食を以て禍と爲す。其れ果して然らん」と。口に入りて骨を啄む。日々茲の若し。雀口瘡を生じ、身瘦疵と爲れり。骨出でて虎穌れり。雀飛んで樹に登り、佛經を說いて曰はく「殺は兇虐たり。其の惡大なるは莫し。若し彼れ己を殺したりせば豈之を悅ばんや。當に己を恕して彼を度すべし。即ち春天の仁あり。仁者は普慈し祐報響應す。兇虐衆を殘す。禍影を尋いで追ふ。爾、吾が言を思へ」と。

虎、雀の誡を聞いて、勃然と恚りて曰はく「爾は始め吾が口を離れて而も敢て多言するや」と。雀其の化すべからざるを視て愴然として之を愍めり、即ち速かに飛び去れり。

佛、諸比丘に告げたまはく、雀王とは吾が身是れなり。虎とは調達是れなり。開士世々慈心あり衆を濟ふを以て悍務と爲して猶自ら身を憂ふるがごとし。

菩薩の法忍度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

五十二、之裸國經［叔の本生］

昔、菩薩あり、伯叔二人は各國貨を賫して倶に[四四]裸鄉に之けり。叔曰はく「夫れ福厚きものは衣食自然なり。薄祐なるものは筋力を展ぐ。今彼の裸鄉は佛無く法無く沙門衆無し。無人の士と謂ふ

【四三】青蓮華除饉。（Utpala）比丘尼のことならんか。常に貴人の婦女に向ひて出家の功德を讚せりといはる。

【四四】裸鄉。佛教が行はれず、道德の行はれざるを指していへるならんか。

問ふ。兒曰はく「吾れ一蛇の槃屈して斯の樹下に臥したるを見たり。夜樹上に數十の燈火あり。光明耀曄たり。華の下雪の若し。色耀香美にして其の喩へ難しと爲す。吾れ身を以て之を附したれども亦賊害の心無し」と。術士曰はく「善い哉吾が願を獲んことを」と。

則ち毒藥を以て龍の牙齒に塗れり。牙齒皆落ちたり。杖を以て之を捶てり。皮傷骨折したり。術士首自り尾に至る。手を以て之を捋とせり。其の痛み量り無し。亦た怨心無し。自ら宿行朽ちず乃ち斯の禍を致せしを咎むるのみ。誓願して曰はく「吾れ佛を得せしめ人に群生を拯濟して都べて安隱ならしむ。我が今の如からしむること莫れ」と。術士龍を取りて小篋の中に著けり。荷負して以て行いて乞匃したり。毎に至る所の國にて輙ち龍をして舞はしむ。諸國の群臣兆民は之を懼れざるは靡し。術士曰はく「金銀各千金と奴婢各千人と象馬牛車衆畜事各千數を乞はん」と。

諸國に至る毎に獲られし所皆然り。轉じて龍王の祖父の國に入れり。其の母及龍兄弟は皆陸地に於て之を求めたり。化して飛鳥と爲り王宮に依偟したり。術士至れり。龍王化して五頭と爲れり。適ま出でて舞はんと欲す。而して其の母の兄妹を見たり。[四二]羞鄙逆縮して復た出でて舞はず。術士之を呼んで五六たびなれども龍遂に頓服したり。母復た人形と爲りて王と相見え、其の本末を陳べたり。王及臣民哀を興さゞるは莫し。王術士を殺さんと欲したり。龍之を請ふて曰はく「吾が宿行に種へし所は今當に報を受くべし。宜しく之を殺し後怨を益すこと無かれ。其の求むる所に從ひて以て之を施與せん。弘慈斯の如くんば佛道得べきなり」と。

王卽ち異國を以て例と爲せり。其の所好を具にして悉く以て之を賜ふ。術士は斯の重寶を得たり。喜びて以て國を出でたり。他國の界に於て賊に逢ひ、身菹醢せられ、財物索盡したり。龍の母子王と訣別したり。若し大王我を念じて名を呼ばゞ吾れ則ち來らん。憔悴すること無かれ」と。

王逮び臣民渚に臨んで之を送れり。一國哀慟して躃踊せざる者靡し。

【四二】羞鄙逆縮。はぢらひちゞくまる貌。

所謂酷なる者なり」と。龜笑つて曰はく「唯斯れ酷なるのみ」と。王之を江中に投ぜしむ。

龜、免るゝことを得たり。喜び馳せて龍王の所に詣る。自ら陳して曰はく「人王抑迦達に女有り。端正光華なり。天女と雙をなす。人王乃ち心區々たり。大王女を以て結して媛親と爲さんと欲す」と。龍曰はく「汝は誠ならんや」と。龜曰はく「唯然り」と。

龜の爲に具に盛饌を設くるに皆寶器を以てす。龜曰はく「早く賢臣を遣はして相尋ねよ。吾が王その決を得んと欲す」と。龍賢臣十六を遣はしたり。龜に從ふて人王城下の壍中に入れり。龜曰はく「汝等此に止まれよ。吾れ往いて上聞せん」と。龜遂に遁邁して復た來り還らず。

十六臣[四一]悁悒して倶に城に入れり。王を見たり。王曰はく「龍等の來る何爲るぞ」と。對へて曰はく「天王の仁惠は臣等に接す。王貴女を以て吾が王妃と爲さんと欲す。故に臣等を遣はして來り迎ふ」と。王怒りて曰はく「豈、人王の女と蛇龍と偶を爲す有らんや」と。龍對へて曰はく「大王故(ことさら)に神龜を遣はして宣命せらる。臣等は虚(むな)しく來らず。王之を許さゞらんや」と。

諸龍變化して宮中の衆物をして皆龍耀と爲して王の前後を遶(めぐ)らしむ。王懼れて叫呼す。群臣驚愕したり。皆殿下に詣りて所以を質問したり。王具に其の狀を說けり。衆臣僉曰はく「豈一女の故を以て而も國を亡すべけんや」と。王及群臣水に臨んで女を送れり。遂に龍妃と爲れり。男女二人を生みたり。

男を盤達と名けたり。龍王死せり。男位を襲ふて王と爲れり。世榮の穢を捨てゝ高行の志を學ばんと欲す。其の妻萬數あり。皆尋いで之に從ふ。幽隱を逃避したれども猶免れず。陸地に登りて私梨樹の下に於て形を隱し變じて蛇身と爲れり。槃屈して臥せり。夜は則ち燈火の明あり。彼の樹下に在ること數十枚あり。日々若干種の華を雨(ふ)らし色曜香美なること世の覩る所に非ず。國人能く龍を厭ふ者有り。陂圖と名く。山に入りて龍を求む以て行乞せんと欲す。牧牛の兒を覩て其の有無を

【四一】悁悒。說文に悁は忿なり言膓中悁悒は憤懣なり。

し。王寤めて曰はく「國を分ちて受けず。豈當に盜むべけんや」と。問ふらく「子は何國の人ぞ。何を以てか沙門爲るを見ん。何に從りてか珠を獲たる。行高にして乃ち然り。忽ちに斯の患に罹る。將た何の由を以てする」と。道士本末焉を陳べたり。

王は爲に愴然として泣き、涙面より流れたり。王獵者に告げて曰はく「子は國に功勳あり。悉く九親を呼んで來れ。吾れ之を重賜せん」と。親は巨細なく皆宮門に詣る。王曰はく「不仁は恩に背く惡の元首なり」と。盡く之を殺したり。道士は山に入りて道を學べり。精進して惓まざりき。命終して天上に生ず。

佛、諸の比丘に告げたまはく、時の道士なるものは吾が身是れなり。烏なるものは鶖鷺子是れなり。蛇とは阿難是れなり。獵者は調達是れなり。其の妻なるものは懷槃女子是れなり。菩薩の弘仁度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

五十、盤達龍王の本生

昔、拘深國王を抑迦達と名く。其の國廣大にして人民熾盛なり。國を治むるに正を以てし兆民を枉げず。王に子二人あり。一男一女なり。男を須達と名く、女を安闍難と名く。執行清淨なり。王甚だ之を重んず。爲に金池を作り二兒池に入りて浴す。池中に黿有り。黿を金と名く。一眼瞽なり。亦水に於て戲る。二兒身に觸れたり。兒驚きて大いに叫べり。王則ち其の所以を問ふ。云はく「池中に物有り、觸るれば我等を怖る」と。

王怒りて曰はく「池は兒の爲に設けたり。何物か之に處らん。而して吾が兒恐る。」罠を施して之を取らしむ。鬼龍奇怪ならん。趣かに之を得しむ。罟師黿を得たり。王曰はく「當に何を作りてか之を殺すべき」と。群臣或は言はく「首を斬れ」と。或は言はく「生きながら燒け」と。或は言はく「之を剉りて羹を作れ」と。一臣曰はく「斯れを殺すも酷ならず。唯以て大海中に投ぜよ。斯れ

王は臣民に勅すらく「之を得し者有らば金銀各千斤と牛馬各千首を賞とせん。得て貢がざる者は罪重く宗を滅するなり」と。

道士は獵者に惠みたり。獵者は縛りて之に白す。王曰はく「汝は何より斯の寶を得たりしや」と。道士深惟して狀を以て之を言へり。卽ち一國の烏皆死したり。盜んで之を得たりと云ふは斯れ佛弟子に非ざるなり。默然として拷を受けたり。杖楚千數さるれども王を怨まず、彼を讎とせず弘慈して誓つて曰はく「吾をして佛を得たらんに、衆生の諸苦を度せしめんことを」と。王曰はく「道士を取りて之を埋めよ。唯其の頭を出せよ。明日焉を戮せん」と。

道士乃ち蛇を呼んで哀と曰へり。蛇曰はく「天下に我が名を知るもの無し。唯道士ありしのみ。聲を揚げて相呼ぶは必らず以有るなり」と。疾く邁るに道士の玆の若きを見たり。叩頭して問ふて曰はく「何に由りてか此に致りき」と。道士具さに厥の所由を陳べて然り。蛇淚を流して曰はく「道士の仁天地の如し。尙禍に會ふ。豈況んや無道なるをや誰れか將に之を祐くるとせんか。天仁怨みなし。斯の王に唯太子一人ありて他の[四〇]儲副無し。我れ將に宮に入り太子を咋殺せんとす。吾が神藥を以て之を傳ふれば卽ち愈ゆ。蛇夜宮に入り之を咋めば卽ち絕てり。屍を停ること三日なり。令して曰はく「能く太子を活くる者あらば國を分ちて治めん。之を載せて山間にあり當に之を火葬すべし。行くに道士の邊を經歷したり。道士曰はく「太子何の疾か有りて身を喪ふに致りしや。且らく葬ふこと無かれ。吾れ能く之を活けん」と。

從者說くを聞いて馳せて以て上聞す。王の心悲喜せり。重ねて更に哀慟して曰はく「吾れ爾の罪を赦し、國を分ちて王と爲さん」と。

道士藥を以て身に傅ふ。太子忽然として興きて曰はく「吾れ何に緣りてか斯に在る」と。從者具に所以を陳したり。太子還宮せり。巨細喜んで舞ふ。國を分ちて之に惠めり。一として受くる所な

【四〇】儲副。世繼ぎ者の外の子なし。

を獲て群生を開示して本元に還らしめんと願ふ。豈但だ汝等三人而已ならんや。各〻舊居に還りて汝の所親を見、三たび自ら歸して佛教に違ふこと無からしめよ」と。

獵者曰はく「世に處する年有り。儒士を覩て德を積み善を爲すと雖も、豈佛弟子の若き己を恕して衆を濟ひ、隱處にて名を揚げざる者あらんや。道士の若き之れ有り。願くは吾が家に至りて微供養を乞はれんことを」と。

烏曰はく「吾が名は鉢なり。道士難有らば願くは吾が名を呼ばれんことを。吾れ當に馳せ詣るべし」と。

蛇曰はく「吾が名は長なり。若し道士患(うれひ)有らば願くは吾が名を呼ばゞ必らず來りて恩を報ぜん」と。辭(ことばをは)畢りて各退きぬ。

他日道士獵者の舍に之(ゆ)きたり。獵者遙かに其の來るを見たり。妻に告げて曰はく「彼の不詳の人來れり。吾れ汝に勅して饌(せん)を爲さん。徐々として之を設けたり。彼れ日中を過ぎなば即ち食はず」と。妻道士を覩て勃然として色を作し、詭りて留りて食を設けたり。虛談中(きよだんちう)を過ぎたり。道士退きぬ。山に還りて烏を覩る。名を呼んで鉢といふ。

烏問ふて曰はく「何(いづこ)より來りしや」と。曰はく「獵者より來りし所なり」と。烏曰はく「已に食したるか」と。曰はく「彼の設未だ辦へずして日中を過ぎたり。時、食すべからず故に吾れ退きしのみ」と。

烏曰はく「凶咎の鬼は慈を以て濟(すく)ひ難し。仁に違して恩に背きしは凶逆の大なり。吾れに飲食なし以て供養する無し。心を留めて斯に坐せよ。吾れ須臾にして還らん」と。

飛んで[三九]般遮國(はんしや)に之き、王の後宮に入れり。王の夫人臥し、首飾の中明月の珠有るを覩たり。烏銜み馳せ還れり。以て道士に奉じたり。夫人寤寐して之を求むれども獲ざりき。即ち以て上聞す。

【三九】般遮國。(Pañcala)のことならんか未審なり。

るなし。七日食を絕てり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、爾の時蚖を害せんと欲せしものは阿難是れなり。忍法を說きし龍なるものは吾が身是れなり。毒を含みし蚖なるものは調達是れなり。菩薩の所在世々忍を行ず。禽獸に處ると雖も其の行を忘れざるなり。菩薩の法忍度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

四十九、難王の本生

昔、國有り摩天羅と名づく。王を難と名づく。學は神明に通じ幽として覩ざるなし。世の非常を覺りて曰はく「吾が身は當に朽つべし、世の糞壤と爲らん。何の國か之れ保つべき。榮を捐て樂を棄てゝ[三七]大士の法服を服し、一鉢食して足ると爲さん」と。沙門の戒を稟けて山林に居を爲すこと積りて三十年なり。樹邊に坑あり。坑の深さ三十丈なり。

時に獵者あり。馳騁して鹿を尋ねて坑中に墮せり。時に烏蛇各一有り。亦驚いて俱に隕ちたり。體皆毀傷し俱に亦困しみ、天を仰いで悲號したり。孤窮の音あり。道士愴然たり。火照して之を見たり。涕泣して頸を交ふ。坑に臨んで告げて曰はく「汝等憂ふること無かれ。吾れ汝の重難を拔かん」と。卽ち長繩を作り、懸りて以て之に登る。三物或は銜み或は持てり。遂に命を全ふすることを得たり。俱に叩頭して謝して曰はく「吾等の命は轉燭に在り。道士の仁惠弘く普く量りなし。吾等をして天日を視ることを得せしむ。願くは斯の身を終るまで衆の乏しき所に給し、微を以て重に報いて萬に一をも賽まつらざらんや」と。

道士曰はく「吾れ國王となり國大にして民多し。宮寶婇女諸國を上と爲せり。願くは卽ち響應して何をか求めて得ざらん。吾れ國を以て怨窟と爲せり。[三八]色聲香味華服邪念を以て六劍もて吾が身を截り六箭もて吾が體を射ると爲せり。斯の六邪に由りて輪轉して苦を受く。三塗酷烈にして忍び難く堪へ難し。吾れ甚だ之を厭ふ。國を捐てゝ沙門となり、如來無所著正眞道最正覺道法御天人師

【三七】大士。菩薩に同じ。

【三八】色聲等。六塵のことなり。

昔、菩薩あり。阿難と倶に罪畢りて龍となりぬ。其の一龍曰はく「惟だ吾れ卿と共に海中に在りて覩ざる所靡し。寧ろ倶に陸地に上りて遊戲すべけんや」と。答へて曰はく「陸地の人惡起り非常に逢はゞ出づべからざるなり」と。

一龍重ねて曰はく「化して小蛇と爲らんのみ。若し路に人無くんば大道を尋ねて戲れん。人に逢へば則ち隱くる。何ぞ憂ふる所あらんや」と。是に於て相可しとせり。倶に升りて遊觀せり。水を出でて未だ久しからずして道に毒を含みたる蚖に逢へり。蚖、兩蛇を覩て厥の兇念生ず。往いて犯害せんと志したり。則ち毒を吐いて兩蛇を喣沫したり。一蛇意を起しぬ。將に威神を以て斯の毒蚖を殺さんと欲す。一蛇慈心ありき。忍んで諫止して曰はく「夫れ高士と爲るものは當に衆愚を赦すべし。忍ぶべからざるを忍ぶ者は是れ乃ち佛正眞の大戒と爲すなり」と。卽ち偈を說いて曰はく。

貪欲を狂夫と爲す　仁義の心あること靡し
嫉妬は聖を害せんと欲す　唯默忍するを安しと爲すのみ
非法不軌なるものは　內に惻隱の心無し
慳惡は布施を害す　唯默忍するを安しと爲すのみ
放逸無戒の人は　酷害して賊心を懷く
道德を承順せず　唯默忍するを安しと爲すのみ
恩に背きて反復無し　虛飾を諂僞と爲す
是を愚癡の極と爲す　唯默忍するを安しと爲すのみ。

一蛇遂に稱して忍德を頌す。偈を說き義を陳ぶ。一蛇敬受したり。遂に蚖を害せざりき。一蛇曰はく「吾等海中に還らん。可ならんや」と。相然として倶に去れり。其の威神を奮ひしに天震ひ地を動かしたり。雲を興し雨を降したり。變化して龍耀たり。人鬼咸驚けり。蚖乃ち惶怖したり。屍視知

佛、諸比丘に告げたまはく、時の國王とは我が身是れなり。妃なるものは倶夷是れなり。舅なるものは調達是れなり。天帝釋なるものは彌勒是れなり。菩薩の法忍度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

四十七、獼猴の本生

昔、菩薩あり。身獼猴となり。力幹輩尠く、明哲人に踰ゆ。常に普慈を懷きて衆生を拯濟す。深山に處在し樹に登りて果を採れり。山谷の中に[三六]窮陷の人有り自ら出づる能はず、數日哀號す。天を呼んで活けんことを乞ふを覩たり。獼猴聞いて哀めり。愴として爲に涙を流して曰はく「吾れ誓ひて佛たらんことを求むるは唯斯の類を爲さんのみ。今此の人を出さずんば其れ必らず窮死せん。吾れ當に岸を尋ねて谷を下り負ひて之を出すべし」と。遂に幽谷に入り人をして己に負はしむ。草を攀ぢて山に上り之を平地に置けり。其の徑路を示して曰はく「爾、之く所に在り。別去の後は愼んで惡を爲すこと無かれ」と。

出でて人疲極して閑に就きて臥息したり。人曰はく「谷に處りて飢饉なりき。今出でて亦然り。將何をか異ならんや」と。心に念ずらく「當に獼猴を殺して之を噉ひ以て吾が命を濟ふべきも亦可ならずや」と。石を以て首を椎ち、血流れて地に丹す。猴臥し驚きて起ちて眩倒して樹に緣る。心に恚意なし。慈哀愍傷して其の惡を懷きしを悲めり。自ら念じて曰はく「吾が勢度する能はざる所の者は願くば其の來世に常に諸佛に逢ひ、道教を信受して之を行じ得度して世々惡を念ずること斯の如き人有ること莫からんことを」と。

佛、諸比丘に告げたまはく、獼猴とは吾が身是れなり。谷中の人とは調達是れなり。菩薩の法忍度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

四十八、龍の本生

【三六】窮陷。山谷に落ちて困窮せること。

し。其の海沙を踰ゆるに何ぞ彼の洲に達せざるを憂へんや。今各復た石を負ひて海を杜ぎ以て高山と爲すべし。何ぞ但だ洲に通ずるのみならんや」と。猴王卽ち之を封じて監となす。衆其の謀に從ふ。石を負ひて功成れり。衆濟度することを得たり。洲を圍んで累沓す。龍は毒霧を作り猴衆都べて病みて地に仆れざるは無かりき。二王悵愁せり。小猴重ねて曰はく「衆の病をして瘳やしめん。聖念を勞すること無かれ」と。卽ち天藥を以て衆の鼻中に傅ふ。衆則ち鼻を奮つて興り力勢前に踰えたり。龍卽ち風雲を興して以て天日を擁す。電耀海に光けり。[三五]勃怒霹靂乾を震ひ地を動かす。小猴曰はく「人王射するに妙なり。夫れ電耀なるものは卽ち龍なり。矢を發して凶を除けば、民の爲に福を招かん。衆聖怨み無し。霆耀電光に王は乃ち箭を放てり。正しく龍の胸を破れり。龍射られて死す。猴衆善を稱す。小猴龍門の鑰を拔いて開門して妃を出せり。天鬼咸く喜べり。二王倶に本山に還れり。更に相辭謝せり。謙光崇讓なり。會ま舅王死したり。嗣子有ること無し。臣民奔馳して舊君を尋ね求めたり。彼の山阻に於て君臣相見ゆ。哀泣して倶に還れり。并せて舅國をも獲たり。兆民歡喜して壽萬歲を稱せり。大赦して寬政す。民心欣々として笑を含んで且行けり。王曰はく「婦は所天を離る隻行一宿す。衆疑望有り。豈況んや旬朔ならんをや。還りたれども爾の宗事は古儀に合するや」と。

妃曰はく「吾れ穢蟲の窟に在りと雖も猶し蓮華の汚泥に居るがごとし。吾が言に信あらば地其れ坼けん」と。言畢りて地裂けたり。曰はく「吾が信現ず」と。王曰はく「善い哉。夫れ貞潔なるは沙門の行なり」と。

斯れより國內の商人利を讓り、士なるものは位を辭し、豪能く賤を忍び、强は弱を陵さゞるは王の化なり。婬婦は操を改め、命を危くして貞を守り、欺くものは信を尙ぶ。巧僞眞を守りしは元妃の化なり。

【三五】勃怒霹靂乾。盛んにいかる貌なり。

め政苛に民困しむ。怨泣して相屬したり。舊君を思詠すること猶し孝子の慈親を存するがごとし。王は元妃と與に山林に處したり。海に邪龍あり。妃の光顏を好む。化して梵志と爲りぬ。詭して叉手して箕坐し首を垂れて思を靖んず。道士の惟だ禪定の時に似たる有り。王は覩て欣然たり。日々果を採りて供養す。龍は王の行を伺ふ。妃を盜み挾んで去れり。將に海居に還らんとす。路に兩山道を夾ふするの徑あり。山に巨鳥あり。翼を張りて徑に塞がる。龍と一戰したり。龍は震電となり、鳥を擊ちて其の右翼を墮し遂に海に還るを獲たり。

王は果を採りて還れり。其の妃を見ず。悵然として曰はく「吾れ宿行違ひ、殃咎隣して臻らんや。乃ち弓を執りて矢を持し、諸山を經歷して元妃を尋ね求めんとす。滎流[三二]有るを覩たり。尋ねて其の原を極めたり。巨獼猴の哀慟を致せしを見る。王は愴然として曰はく「爾復た何を哀まんや」と。獼猴曰はく「吾れ舅氏と與に肩を併せて王と爲れり。舅勢を以て吾が衆を强奪したり。嗟乎訴る無し。子何に緣りてか玆の山岨を翔くるや」と。

菩薩答へて曰はく「吾れ爾と其の憂齊し。吾れ又妃亡し。未だ之きし所を知らず」と。猴曰はく「子、吾が戰を助けて吾が士衆を復さば子の爲に之を尋ねて終に必らず獲せしめん」と。王は之を然りとして曰はく「可し」と。

明日猴舅と戰ふ。王乃ち弓を彎して矢を擩へ、股肱して勢張せり。舅遙かに悚懼し、播徊[三三]して迸馳したり。猴の王衆反したり。遂に衆に命じて曰はく「人王の元妃は迷ひて斯の山に在り。爾等布索せよ」。猴衆各行く。鳥の翼の病めるを見たり。鳥曰はく「爾等奚を求めんや」と。曰はく「人王其の正妃を亡ふ。吾等之を尋ねん」と。鳥曰はく「龍は之を盜みたり。吾が勢如く無し。今は海中大洲の上にあり」と。言畢りて鳥絕す。猴王衆を率ゐて徑に由りて海に臨みたり。以て海を渡る無きを憂ふ。天帝釋卽ち化して獼猴となり。身は疥瘙[三四]を病めり。來りて進んで曰はく「今士衆之れ多

【三二】滎流。極めて小さい水の流なり。

【三三】播徊。のがれもどる貌。

【三四】疥瘙。ひぜん病のこと。

古より然り。男は賢にして女は貞誠なる亦値ひ難し。遂に禮を納れて宗と會す。九族歎じて曰はく「斯の榮は世に傳はる。妻を納るゝの禮成る。邸閣馳せて啓す。四姓之を聞いて結疾殊に篤し。兒は親の疾を聞いて哽咽して言はく「夫れ命は保ち難し。猶し幻のごとし。眞に非ず」と。梵志良日を擇んで遣はし還さんと欲す。菩薩內痛して其の云ふに從はず。室家馳せて歸り堂に升りて稽首す。妻尋ねて再拜して泣を垂れて進み三步して又拜す。名を稱して曰はく「妾は是れ子の男某の妻なり。親妾を召して某となす。當に二八宗嗣箕帚の使を奉じて禮を盡して孝を修むべし。唯願くは大人疾瘳へなば福臻らん。永く無終の壽を保たん。其の情を展げて孝婦の德を獲せしめんことを」と。四姓結忿して內に塞がりて殞せり。菩薩は二九殯送し慈慟して哀慕したり。一國孝と稱せり。喪畢りて修行し馨十方に熏じたり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、童子なるものは吾が身是れなり。妻なるものは倶夷是れなり。四姓なるものは調達是れなり。菩薩の法忍度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

四十六、國王の本生

昔、菩薩あり。大國王となれり。常に四等を以て衆生を育護す。聲日遐邇を動かし、歎懿せざるはなし。舅は亦王の爲に異國に處在して性貪にして耻なし。兇を以て健なりと爲す。開士林歎ず。菩薩、二儀の仁惠を懷き、三〇虛誣謗訕して爲に訧端を造れり。兵を興して菩薩の國を奪はんと欲す。菩薩の群僚僉曰はく「寧ろ天仁を爲して賤しくとも豺狼を爲して貴からざらんや」と。民曰はく「寧ろ有道の畜を爲すとも無道の民と爲らざらん」と。武士を料選して軍を陳ぶ旅を振ふ。國王臺に登りて軍の情猥なるを覩て涙を流して涕泣し頸を交へて曰はく「吾が一躬を以て兆民の命を毀つ。國亡びて復し難し。人身獲難し。吾れは之れ遁邁せん。國境咸く康く將誰れか患有らんや」と。王は元后と倶に國に委して亡し。舅入りて國に處し貪殘を以て政を爲す。忠貞を戮し三一佞蠱を進

【二八】宗嗣箕帚。國の後繼者にちりとりやはうきもて仕ふること。

【二九】殯送。屍を送り埋沒すること。

【三〇】虛誣謗訕。虛誣はいつはり。謗は短惡を指してそしること。訕は他人の德擧を損じ毀ること。

【三一】佞蠱。姦佞なる惡人ばらを指す。

無くんば已まむ。斯の子を以てはなさず必らず之を殺さんと欲す」と。父に邱閣あり。國を去ること千里なり。仍て斯の兒を遣はして曰はく「彼れ吾が財を散ず。爾往いて計校せよ。今[二五]邱閣の書を與ふ。囊藏蠟封したり。爾急に以て行け」と。書陰勅して曰はく「此の兒到らば急に石を以て腰を縛り之を深淵に沈めよ」と。

兒命を受けて稽首したり。輕騎して半道を進めり。梵志あり。父と遙かに相被服せり。常に相問ふ、遺書數往來せり。梵志に女有り。女既に賢明なり。深く[二六]吉凶天文占候を知れり。兒行きて梵志の所居に到れり。曰はく「吾が父親しき所の梵志正しく斯に在らば止らん」と。從者に謂つて曰はく「今過ぎりて禮を修めんと欲して可ならんや」と。從者曰はく「善し」と。即ち過ぎりて觀禮せり。梵志喜びて曰はく「吾が兒の子來れり」と。

便ち四隣に命ず。學士儒生耆德雲集せり。娛宴歡樂せり。幷に衆の疑を諮れり。欣懌せざるはなし。日を終り夜を極めたれば各疲れて眠寐したり。女竊かに男を視たり。其の腰帶に囊封の書を佩せしを見て、默して解き取還したり。其の辭を省讀するに悵然として歎じて曰はく「斯れ何の妖厲にして仁子を賊害する乃ち斯に至らんや」と。書を裂きて之を更ふ。其の辭に曰はく「吾が年西に垂んとす。重疾日に困し。彼の梵志は吾の親友なり。厥の女は既に賢にして且明なり。古今兒の匹になすに任へたり。極めて寶帛を具へ娉禮せよ。務は好んで小にして禮は大にして娉せよ。妻を納るゝの日斯の勅を案ず」と、書を爲して畢り關を開いて之を復せり。明晨して路を進む。梵志衆儒尋いで歎ぜざるはなし。

邱閣書を得て命を承け禮を具して梵志の家に詣れり。梵志夫妻議して曰はく「夫れ婚姻の儀は之を始むるに行を擇ぶに於て咎を問ふ占兆なり。彼の善禮備さなり。即ち吾れ焉を許さん。今現に男は媒せず禮娉便ち臻れり。彼れ豈將に慢ならんや」と。又退いて[二七]譏息して曰はく「男女偶を爲す

【二五】邱閣。說文に屬國舍なりと。そこをまもれる人を指せり。

【二六】梵志の女。天文に通じ禍福吉凶を觀ずといふ。

【二七】譏息。語ること。話すこと。

又衆寶を以て兒を請ふて家に歸れり。哽噎して自ら責む。等しく二兒を育てり。數年の間兒の智を覩るに奇變縱橫なり。惡念又生じて曰はく「斯の明溢度するに吾が兒否なる哉必らず之を虜にせん」と。褻裹して山に入り棄て竹中に著く。食を絕ちなば必らず殞さん。兒慈念を興して曰はく「吾れ後に佛を得たらんに必らず衆苦を濟はん」と。山は谿水に近し。兒は自力もて搖ぎて竹より地に墮したり。展轉して其の水側に至れり。水を去ること二十里ばかり死人を擔ひし有り。隊々として人あり行いて樵を取れり。遙かに小兒を見たり。就いて視て歎じて曰はく「上帝其の子を落したるか」と。抱き歸りて焉を育てり。四姓又聞きて厥の恨み前の如し。衆くの名寶を以て請ふて歸りて悲泣す。并に書數を敎ふるに仰ぎ觀て俯占せり。衆道の術、目を過ぎりて卽ち能くす。稟性仁孝なり。言輙ち導化す。國人聖と稱して儒士雲集したり。

父兇念生じて厥性惡重なり。前家に[二一]冶師あり。城を去ること七里、圖りて兒を殺さんと欲す。書もて冶師に勅して曰はく「昔此の兒を育つ。兒、我が家に入りしに疾疫相仍る。財耗し畜死す。太卜占して云はく「兒は此の災を致す。」書到らば極擗して之を火中に投ぜよ」と。詭りて兒に命じて曰はく「吾年[二二]西夕なり加へて重疾あり。爾、冶師の所に到りて諦かに錢寶を計れ。是れ爾の終年の財なり」と。兒命を受けて行く。城門の內に於て弟輩と與に胡桃を彈きて戲るゝを覩たり。弟曰はく「兄來れり。吾の幸なり。吾の爲に復た折れ」と。兄曰はく「父當に行くべきを命じたり」と。弟曰はく「吾れ請ふて行かん」と。書を奪ひて冶師の所に之けり。冶師書を承りて弟を火に投じたり。父の心[二三]忪々として怖れ使を遣はして兒を索めたり。使兒を覩て曰はく「弟之きしが如きか」と。

兄狀の如く對へたり。兄歸りて之を陳したり。父驛馬もて兒を追ひしも已に灰と爲れり。父躬を投じて天を呼び氣を結んで內に塞がれり。遂に[二四]癈疾と爲れり。又毒念を生じて曰はく「吾れに嗣

【二一】冶師。いものを業とする工人のこと。いものし。鑄匠なり。

【二二】西夕。日暮れのこと。年のそれは老年なり。

【二三】忪々。惶遽なり。あはただしい貌なり。

【二四】不具の病氣を意味す。

り。錢一千を并せ送りて其の道に著けり。國俗斯の日を以て吉祥の日と爲せり。率土野會し君子小人は各ゝ其の類を以て盛饌快樂したり。

梵志戯るゝを覩て會者を讃じて曰はく「嗟乎今日會ふ者は別に粳米純白にして粺無し厥の香苾芬の如く有り。若し夫れ今日男女を産生すれば貴にして且つ賢なり。坐中に一理家あり。獨りにして嗣無し。之を聞いて默喜せり。人を四布して子を棄てる者を索めしめたり」と。使ひ路人に問ふて曰はく「子を棄つる者有るを覩んか」と。路人曰はく「獨母有り。焉を取れり。人をして尋ねしめば其の所在を得ん」と。曰はく「吾れ四姓にして富みて而も嗣無し。爾兒を以て貢ぎなば衆寶を得べし」と。母曰はく「錢を留めて兒を送り、欲に從つて貨を索むべし。」と母獲たる志の如し。兒を育すること數月にして而して婦は妊身せり。曰はく「吾れ嗣無きを以ての故に異姓を育てたるに天余に祚を授くるに今子を以てしたり」と。褻を以て之を裹み、夜、洴中に著けり。家羊日ゝ就きて乳せり。牧人尋察して兒を覩る。卽ち歎じて曰はく「上帝何に緣りてか其の子を玆に落したるか」と。取りて歸り之を育てたり。羊湩の乳を以てす。四姓覺知したり。詣けて曰はく「緣りて湩を竊みしか」と。對へて曰はく「吾れ天の遺子を獲たり。湩を以て之を育てり」と。四姓悵悔したり。還りて育てしこと數ケ月なり。婦遂に男を産み惡念更に生ぜり。又復前の如く褻を以て之を裹み車轍の中に著けり。

兒の心佛の三寶を存し其の親に慈向したり。晨に商人數百乘の車有りて徑路玆に由る。牛躓いて進まず、商人その所以を察す。兒を覩て驚いて曰はく「天帝の子なり。何に緣りてか玆に有らんや」と。抱きて車中に著きたれば牛進むこと流の若し。前んで二十里にして牛亭の側に息めり。獨母有り。商人に白して乞ふて曰はく「兒を以て相惠みなば吾が老窮を濟はん」と。卽ち之を惠めり。母育して未だ幾ならず。四姓又聞けり。愴然として曰はく「吾の不仁なること天德を殘せんや」と。

【二〇】 苾芬。かうばしき貌。

彼に加へたるに由れり。惡を爲らば禍追ふこと猶し影の形に繋るがごとし。昔之を種ゑしこと少く、而も今獲たること多し。吾れ若し命に順ずれば禍天地の若し。劫を累ねて咎を受けたり。豈畢るべけんや」と。

黎民變を覩て馳せ詣り過を首し聲を齊うして曰はく「道士は玆に處れり。景祐國を潤し、災を禳ひて疫を滅す。而るに斯の極愚の君は臧否を知らず。去就を明にせずして惡を元聖に加ふ。惟願くは聖人、吾等を以て上帝に報ずること無かれ」と。菩薩答へて曰はく「王は無辜の惡を以て痛みを吾が身に加ふ。吾が心之を愍む。猶し慈母の其の赤子を哀むがごとし。黎庶何ぞ過りて之を怨まんや」と。假ひ疑望有り爾は斷臂を捉へて以來、民即ち之を捉ふ。乳湩交ゝ流る。曰はく「吾れに慈母の哀あり。今其れを信ず。玆に現ず。民は覩、弘く信じて化を稟けざるはなし」と。欣懌して退けり。菩薩に弟有り。亦道元を覩る。巽山に處在し [17]天眼を以て徹視するに天神鬼龍の會議を覩る。王の惡に忿を懷かざるはなし。兄德を損ずるの心有るを懼る。神足を以て兄の所に之きて曰はく「中傷する所有らんや」と。答へて曰はく「不ず。爾、吾が信を照さんと欲せば斷じたる手足耳鼻を取りて其の故の處に著けよ。復すれば即ち吾れ信ず」と。弟之を續ぎたれば即ち復す。

兄曰はく「吾が普慈の信は今に著はる」と。天神地祇悲喜せざるはなし。稽首して善を稱す。更に相勸導す。志を進め行を高くす。戒を受けて退けり。斯れより後は日月は光無く五星は度を失ひ、妖怪相屬す。枯旱穀貴にして民困しみて其の王を怨みたり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、時の羼提和なる者は即ち吾が身是れなり。弟は彌勒是れなり。王なるものは羅漢 [18]拘隣是れなり。菩薩の法忍度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

四十五、童子の本生

昔、菩薩あり。貧家に生れて貧家に育たず。[19]褻を以て之を裹み、夜人無き時、默して四衢に置け

【一七】天眼は、天眼通のこと。五通六通の一なり。智度論五に色界四大所造の清淨の眼根を以て麁細遠近の一切の諸色、又は衆生の未來に於ける生死の相を前知するをいふとあり。梵語 Divya-cakṣus-jñāna なり。

【一八】拘隣。又居隣、居倫、拘輪、俱隣等に作る。五比丘の一人にして阿若憍陳のことなり。Ājñātakauṇḍiya。玄應音義に云はく居倫は譯して本際といひ、第一に法を解せしものなり。居倫は姓なり。

【一九】褻。普斷着のこと。

消災滅す。君臣熾盛なり。

其の王を迦梨と名く。山に入りて畋獵す。麋鹿を馳逐して其の足跡を尋ぬ。菩薩の前を經たり。王は道士に問ふて「獸跡玆を歴たり。其れ如行と爲さんや」と。菩薩默して惟るに「衆生は擾々たり。唯身命を爲すのみ。死を畏れて生を貪る。吾が心何ぞ異ならんや。吾れ儻し王に告げなば虐殺仁ならず。罪王と同じ。儻し見ずといはゞ吾れ欺きを爲さん」と。中心悪然たり。首を低くして云はず。王卽ち怒りて曰はく「當に死すべし。乞人よ。吾れは現に帝王にして一國の尊なり。問うても時に對へず而も佯りて低頭するか」と。

其の國名は[一六]摦手爪曰不なり。菩薩は惆悵として摦手爪曰不ならんや。王に示して以て見ずと爲せり。曰はく「獸跡玆を歴たり而も見ずと云ふ。王の勢自在なり、爾を戮する能はざる爲ならんや」と。菩薩曰はく「吾れ王に聽されんのみ」と。

王曰はく「爾は誰と爲すや」と。曰はく「吾れは忍辱の人なり」と。王怒りて劒を拔きて其の右の臂を截れり。菩薩念じて曰はく「吾れ上道を志して時と諍ふこと無し。斯の王は尚吾れに刃を加ふ。豈況んや黎庶をや。願くは吾れ佛を得たらんに必らず先づ之を度せん。衆生をして其を效とし惡を爲らしむる無きなり」と。

王曰はく「若を誰と爲すや」と。曰はく「吾れは忍辱の人なり」と。又其の左手を截れり。一問すれば一たび截る。其の脚を截れり。其の耳を截り、其の鼻を截りたり。血は流るゝ泉の如し。其の痛み量り無し。天地爲に震動せり。日は卽ち明無し。

四天大王僉然として倶に臻る。聲を同じうして恚りて曰はく「斯の王は酷烈にして濟ひ難きを爲せり」と。道士に謂つて曰はく「以て汚心無し。吾等王及其の妻子を誅し幷びに一國を滅し以て其の惡を彰さん」と。道士答へて曰はく「斯れ何の言ぞや。此の殃は吾れ前世に佛敎を奉ぜずして毒を

【一六】原梵語詳かならず。

上に著け、母は其の足を抱きたり。口をもて鳴き足を吮る。各一手を以て其の箭瘡を捫る。胸を椎し頬を搏ち首を仰ぎて曰はく「天神地神、樹神水神。吾が子睒なるものは佛を奉じ法を信ず。賢を尊び親に孝す。無外の弘仁を懷きて潤ひ草木に逮べり」と。又曰はく「若し子審さに佛を奉じて至孝の誠、天に上聞せば、箭は當に拔き出して重毒消滅し、子は生存するを獲て其の至孝の行を卒ふべし。子の行然らず、吾が言誠ならずんば遂に當に終沒して倶に灰土となるべし」と。

天帝釋、[一二]四天大王、地祇、海龍は親の哀の聲を聞き信ずること其の言の如し。擾動せざるはなし。帝釋身下りて、其の親に謂つて曰はく「斯れ至孝の子なり。吾れ能く之を活かさん」と。天神の藥を以て睒の口中に灌ぎたり。忽然として穌ることを得たり。

父母及び睒と王逮び臣從は悲樂交集ひ、普ねく復た哀を擧げたり。王曰はく「佛を奉じて至孝の德は乃ち斯に至る」と。遂に群臣に命じて「今自り後は率土人民は皆佛の十德の善を奉じ、睒の至孝の行を修し、一國焉に則れ。然る後國豐に民康からん」と。遂に太平を致せり。

佛、諸の比丘に告げたまはく。吾れ世々諸佛至孝の行を奉じ德高く福盛なり。遂に天中の天と成れり。三界獨歩す。時に睒なるものは吾が身是れなり。國王なるものは阿難是れなり。睒の父なるものは今の吾が父是れなり。母なるものは吾が母舍妙是れなり。天帝釋なるものは彌勒是れなり。菩薩の法忍度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

四十四、[一三]羼提和梵志の本生

昔、菩薩あり。時に梵志となり羼提和と名づく。山澤に處在し樹下に精思す。果泉の水を以て飲食と爲す。内垢消盡す。空寂に處在す。弘明[一四]六通もて盡く之を知ることを得たり。智名香熏すること八方の上下に聞ゆ。十方の諸佛、緣一覺道・應儀聖衆咨嗟せざるはなし。[一五]釋梵四王・海龍地祇は朝夕肅虔して叉手稽首す。化を稟け風を承けて其の國を擁護せり。風雨時に順じ、五穀豐熟して毒

【一二】 四天大王。(Caturmahārājakāyikāḥ)といひ、帝釋天(Indra)の外將なり。六欲天の第一最初の天なり。東方持國天(Dhṛtarāṣṭra)と稱し、南は增長天(Virūḍhaka)といひ、西は廣目天(Virūpakṣa)と呼び、北は多聞天(Dhanada)又は(Vaiśrāmaṇa)といふ。須彌山の半腹に由揵陀羅といふ一山あり。山に四頭ありて四王各之に居り各一天下を護る。依て護世四天王といふなり。異譯には本經よりも詳なり。參照せよ。

【一三】 (Kṣāntiva)ならんか。忍辱を行ぜし梵志なればかく名けたるならん。

【一四】 六通。一には神境通。二には天眼通。三には天耳通。四には他心通。五には宿命通。六には漏盡通なり。六通を成就するは三乘の聖者に局るなりといふ。

【一五】 釋梵四王。釋は帝釋天のこと。梵は梵天王のこと。四王は四天王のことなり。梵天とは色界の諸王を總じて名くるなり。

衆穢を除き、進道の志を學びたり」と。

王は睒の言を聞いて哽噎して涙を流し、甚だしく之を痛悼して曰はく「吾れ不仁の爲に物命を殘夭したり。又至孝を殺したり」と。哀を擧げて云はく「此れを奈何せん」と。群臣巨細哽咽せざるはなかりき。

王重ねて曰はく「吾れ一國を以て子の命を救はん。願くは親の所在を示さば吾れ過を首さんと欲す」と。曰はく「便ち小徑に向つて斯を去ること遠からずして小蓬廬あり。吾が親は中に在り。吾が爲に親に啓さんことを。斯れ自り長へに別れん。幸に餘年を卒へんことを。愼んで追戀すること無かれ」と。勢復た哀を擧ぐ。奄りて忽ちにして絕す。王逮び士衆は重ねて復た哀慟して示す所の路を尋ねて厥の親の所に到る。

王は衆多を從へり。草木は肅々として聲あり。二親之を聞いて其の異人なるを疑へり。曰はく「行者は何人ぞや」と。王曰はく「吾れは是れ迦夷國王なり」と。親曰はく「王は玆に翔れり甚だ善し。斯に草席あり。以て息涼すべし。甘果食すべし。吾が子は水を汲まん。今且くにして還らん」と。

王は其の親の慈を以て子を待てるを覩て重ねて爲に哽噎す。王親に謂つて曰はく「吾れ兩道士慈を以て子を待てるを覩て、吾が心切に悼み甚だしく痛むこと量り無し。道士の子睒なる者は吾れ射て之を殺したり」と。親驚怛して曰はく「吾が子何の罪ありて之を殺したるか。子は仁を操り惻として地を蹈み常に地の痛きを恐る。其れ何の罪ありてか王は之を殺したる」と。

王曰はく「至孝の子は實に上賢と爲す。吾れ麋鹿を射て誤りて之に中りしのみ」と。曰はく「子已に死して將た何をか恃まんや。吾れ今に死なん。惟願くは大王吾が二老を牽いて子の屍處に著き、必らず窮沒を見ん、庶くは同じく灰土たらん」と。

王は親の辭を聞いて又重ねて哀慟せり。自ら其の親を牽いて將に屍所に至れり。父は首を以て膝

菩薩、絲髮の恚無し。慈心もて愍みて曰はく「痛しい哉斯の人や。佛經を覩ずして斯の惡を爲る」と。誓ひて曰はく「吾れ如來無所著正眞覺道者とならば、必らず玆を度せん」と。菩薩の法忍度無極なり。忍辱を行ずること是の如し。

四十三、睒道士の本生[六]

昔、菩薩あり。厥の名を睒と曰ふ。常に普慈を懷きて潤ひ衆生に逮べり。群愚の三尊を覩ざることを悲愍して其の二親を將ゐて山澤に處れり。父母年耆なり。兩目明を失へり睒爲に悲楚したり。之を言へば泣涕し、夜常に三たび興きて、[七]寒溫を消息す。至孝の行德香乾に熏ず。地祇海龍國人並びに知る。佛の十善を奉じ、衆生を殺さず。道遺りしを拾はず。貞を守りて娶らず。身の禍都べて息めり。兩舌惡罵・妄言綺語・譖謗邪僞・口過都べて息む。中心衆穢・嫉恚貪餮・心垢都べて寂す。善を信じて福有り。惡を爲りて殃あり。草茅を以て廬と爲し、蓬蒿もて席を爲り。清淨にして欲無し。志天金の若し。山に流泉あり。中に蓮華を生ず。衆果甘美にして其の邊に周旋す。夙に興きて果を採り、未だ嘗て先に甘せず。其の仁は遠く照したり。禽獸附恃す。二親時に渴したれば、睒行いて水を汲めり。

[八]迦夷國王山に入りて[九]田獵す。弓を彎にして矢を發したり。山麋の鹿を射る。誤りて睒の胸に中れり。矢毒流行して其の痛み言ひ難し。左右顧眄して涕泣して大いに言はく「誰れか一矢を以て三道士を殺す者ならんや。吾が親年耆なり。又倶に明を失へり。一朝にして我れ無くんば普く當に命を殞すべし」と。

聲を抗して哀しんで曰はく「象は其の牙を以てし、[一〇]犀は其の角を以てし、[一一]翠は其の毛を以てす。吾れに牙角光目の毛無し。將に何を以て死せんや」と。王は哀聲を聞き、馬より下りて問ふて曰はく「爾は深山に「何を」爲さんや」と。答へて曰はく「吾れ二親を將ゐて斯の山中に處れり。世の

【六】菩薩睒子經大正No.174と異譯なり。此の經には「安公錄中欠譯今附西晋錄」に依りて大正一切經は揭ぐ。然れども宋藏譯には乞伏秦三藏法師釋聖堅譯とあり。

【七】孝行の最たるものなり。夜半兩親の寒さ暑さを尋ぬること。

【八】迦夷國。迦夷羅のこと。Kapilavastu に同じ。迦毘羅婆蘇都は妙德又は黃頭居處と言ふ。悉多太子の生處なり。

【九】田獵。禽獸を追ひ捕ふること。かりのこと。

【一〇】犀。水牛に似て脚に三つの蹄あり毛色黑くして三つの角の一つは頂きに、一つは額上に、一つは鼻頭にあり、梵語 Gardah なり。

【一一】一翠。形は燕に似て總身の靑黃色なる一種の鳥。やませみといふ。六翮の上の脊毛は長さ寸餘あり飾りとして用うることを得べし。

巻の第五

忍辱度無極章第三（此に十三章あり）

忍辱度無極とは厥は則ち云何。菩薩深く惟るに[一]衆生の識神は癡を以て自ら蔽す。貢高自大なり。常に彼に勝たんと欲す。官爵國土六情の好みは己れ焉を專にせんと欲す。[二]若し彼の有を覩るならば愚なるは卽ち貪嫉す。貪嫉は内に處り、瞋恚は外に處る。施は覺らずして止む。其れを狂醉と爲す。長く盲冥に處る。五道に展轉し、太山に燒かれ煮らる。餓鬼畜生と苦を積むこと無量なり。菩薩は之を覩て卽ち覺る。悵然として歎きたり。衆生は國を亡ぼし家を破り身を危くして族を滅すること有る所以は生れて斯の患有ればなり。死して三道の辜あり。皆忍を懷き慈を行ずること能はざるに由る。其をして然らしむ。菩薩之を覺る。卽ち自誓して曰はく「吾れ寧ろ[三]湯火の酷と[四]葅醢の患に就くとも終に恚毒もて衆生に加へざるなり。夫れ忍ぶべからざるを忍ぶは、萬福の原なり。自覺の後は世々慈を行ず。衆生は已に罵詈捶杖を加へ、其の財寶妻子國土を奪ひ、身を危くし命を害するも、菩薩は輙ち諸佛忍力の福を以て毒恚を迮滅して慈悲もて之を愍み、追ふて濟護す。若し其れ咎を免るれば之が爲に歡喜するなり」と。

四十二、菩薩の本生

昔、菩薩あり。世の穢濁にして君臣無道なり、眞に背き邪に向ひ、以て道化し難きを覩たり。故に明を隱して影を藏して[五]塚間に處る。其の忍行を習ふ。

塚間に牛犢子あり。常に其の屎尿を取り以て飲食を爲せり。其の軀命に連り暴露精思す。顏貌醜く黑く人皆惡みたり。國人之を覩て更に相告げて曰はく「斯の土に鬼有り」と。見る者唾罵せざるはなし。土石もて之を撲てり。

【一】菩薩は衆生を以て癡なりとし、又狂醉となし、三塗の苦惱を受くるの愚者なりとなせり。

【二】愚かなるものは有に貪著し三毒煩惱に處り而して五道に輪廻するをいましめたり。

【三】湯火。地獄の苦しみを意味す。

【四】葅醢。しゝびしほのこと。

【五】塚間。梵語（Smaśānikah）なり。塚間住に同じ。十二頭陀功德の第十なり。墳墓の間に住することなり。

云へ、吾れ生じてより來、衆生に慈向し乾坤を潤濟するものなり。爾母子倶に全し」と。教を受けて往けり。至りて佛の恩を宣ぶるに母と子共に生く。退き還りて塗を尋ねしに、已に殺人の酷あるを疑ひて而も云はく「普慈稽首して質さん」と。

佛、阿群に告げて「凡そ人心開け、道を受くるの日始めて生れたる者と謂ふべし。三尊を覩ず。未だ重戒を受けざるは猶し兒の胎に處るが如し。其の日有りと雖も將亦た何をか覩ん。耳有りて何をか聞かん。故に曰く未だ生れざるなり」と。

阿群は心開けたり。卽ち[一四]應眞道を得たり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、昔時の普明とは吾が身是れなり。吾れ前世に之に四偈を授けたり。一たびは百王を活けたり。今は道を得て重罪を受けざらしめたり。阿群は宿命に嘗て比丘となり、米一斛を負ひ、遂に寺中に著したり。作刀一枚を上れり。歡喜して尊を歎じて稽首して去れり。米を負ひしは多力を獲たり。刀を上りしは多寶を獲たり。歡喜したるは端正を獲たり。尊を歎じたるは王となることを獲たり。作禮の故に國人に拜せらる。九十九人が其の首を确べしは遂に身を喪ふに至れり。故に前の怨を殺して而して其の指を斬りぬ。後人确べんと欲するものは其の已に喪ふを見たり。又沙門を覩て更に慈心有り。後人は卽ち其の母なり。始めて惡意有る故に阿群始の意亦惡なり。沙門を覩て更に慈なるが故に佛を見ては卽ち孝なり。[一五]淳を種ゑて淳を得たり。雜を種ゑて雜を得。善惡已に施す禍福は之に尋ぐ。影追ふて響應ずるは皆所由あり。徒自然に非ざるなり、比丘願じて言はく「汝をして佛に逢ふて道を獲せしめん」と。願の如く獲たり。三尊を供養するは絲髮の若きあり。沙門慈を以て施者を呪願して「言は其の言の如く萬に一失無きを得ん」と。菩薩の志を執る度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

【一四】應眞道。阿羅漢道に同じ。

【一五】淳。純樸なること。清淨なること。

なり」と。王逮び官屬之に詣りて曰はく「上德の賢者一たび眼を開いて相面すべけんや」と。斯の如くすること三たびなりき。答へて曰はく「吾が[一〇一]眼睛は耀射して當り難し」と。王稽首して曰はく「明日[一〇二]微饌を設けん。願くは一たび[一〇三]顧眄せられんことを」と。答へて曰はく「厠に於てせば吾れ往かん。殿に於ては則ち不らず」と。王曰はく「唯命なるのみ」と。

還りて則ち厠を裂いて其の地を堀りて則ち之を新にしたり。[一〇四]樟梓梅材あり。之もて杜梁を爲り。香湯地に沃す。[一〇五]梅檀[一〇六]蘇合[一〇七]鬱金諸香あり。之を和して泥となしたり。梅罽[一〇八]雜縚を以て座席を爲れり。[一〇九]彫文刻鏤して衆寶を好と爲す。煒々煌々たり。殿堂に踰ゆるあり。

明日王は身づから[一一〇]香鑪を捧げて之を迎へたり。阿群座に就けり。王は衣を褰げて膝行せり。供養し訖畢りぬ。

即ち經を説いて曰はく「厠は前日の汚れしなり。豈飯すべけんや」と。對へて曰はく「不可なり」と。曰はく「今は可ならんや」と。曰はく「可なり」と。阿群曰はく「吾れ未だ佛を覩ざりし時に彼の妖蠱に事へたり。心存口言身行は諸べて邪なり。邪道穢化して其の臭汚を爲せり。彼の[一一一]溷よりも甚だし。尿汚は洗ふべし。穢染は除き難し。宿祚に賴蒙して生れて佛世に値ふ。清化に沐浴して臭を去り香を懷き、内外清淨なること猶し天の眞珠のごとし。夫れ佛を覩ず四非常を知らざるものは其の志趣を觀ること猶し狂者の之に醉ふに酒を以てするがごとし。賢衆と親しまず而も十惡に依るものは其れ犲狼と檻を共にせんか」と。

王曰はく「善い哉。佛の至化は奇なるかな。乃ち厠臭は化して梅檀と爲らしむ」と。經を説き畢りぬ。即ち邁り、市を歷たり。婦人の[一一二]逆産者あるを聞きしに[一一三]命は呼吸に在り。還りて事の如く啓す。

佛、言はく「爾、往いて其れが爲に産すべし」と。阿群突然たり。世尊曰はく「爾、産を望みて

【一〇一】眼睛。めだまに同じ。
【一〇二】顧眄。粗末な飲食。
【一〇三】かへりみること。
【一〇四】樟梓梅材。樟は一種の大木、くすのきなどいふ。梓は楸に似たる一種の喬木、芽の色甚だ赤し、あづさなり。梅は梅檀のことなり。材質强靱なる一種の香木なり。
【一〇五】梅檀。梵語(Candana)旃檀那なり。香木の名。與樂と譯す。南印度摩羅耶山より出づ。其の山の形牛頭に似たれば牛頭旃檀といふ。
【一〇六】蘇合。梵名(Turuṣka)梵名咄嚕瑟劔なり。香の名なり。諸香を合して其の汁を煎るを之れ蘇合といふとあり。
【一〇七】欝金。梵名、恭矩磨(Kuṅkumam)。鬱金は草名。其の花黃にして香し以て薫香となすべし。
【一〇八】雜縚。種々雜多なる色の入りまじりたるカトリ(縚)。
【一〇九】彫文刻。ほりかざりや金を木に鏤めたるものなど。
【一一〇】香鑪。香を燒く器。金香爐、土香爐、柄香爐など種類あり。
【一一一】溷。かはやに同じ。
【一一二】逆産者。逆兒を産まんとする婦人のことならん。
【一一三】命且夕に在りと同じ。

師、阿群に告げて「爾仙を欲せんや」と。對へて曰はく「唯然り」と。曰はく「爾百人を殺して其の指を斬り取らば、今神仙を獲ん」と。命を奉じて劍を携へたり。人に逢はゞ輙ち殺し九十九人の指を獲たり。衆犇めき國震へり。母を覩て欣んで曰はく「母至らば數足らん。吾れ今仙なり」と。佛、念ずらく邪道は衆を惑はし、普天は斯の疇なり。化して沙門と爲り。其の前に在りて歩めり。曰はく「人數足れり。後を追ひて屬ならず」と。曰はく「沙門は止すべし」と。答へて曰はく「吾れ止まること久し。惟ふに爾は不らず」と。曰はく「止まるの義云何」と。答へて曰はく「吾が惡都べて止れり。爾の惡は熾なり」と。

阿群は心開け、霍として雲除かれしが如し。五體を地に投じて頓首して過を悔いたり。叉手して尋從して將に精舍に還れり。卽ち沙門と爲りぬ。

佛、爲に宿行を說きて四非常を現じたれば[九九]溝港道を得たり。樹下に退きて目を閉ぢ叉手して餘垢を練去したり。進取して著無し。王は軍師戰士數萬を召して妖賊を尋ね捕ふ。未だ之きし所を知らず。道、佛所を過ぎれり。曰はく「王は何より來りて身づから塵土を蒙りしや」と。對へて曰はく「國に妖賊あり。無過の民を殺したり。今尋ねて之を捕へんとす」と。世尊告げて曰はく「夫れ民は先づ德を修めて而も退きて邪を崇ぶ。國の政を治むる其の法何に之くか」と。對へて曰はく「貴を先にして賤を後にす。正法之を治む。若し夫れ先づ畜心を戴き、退きて聖德を懷き、正法何に之く」と。對へて曰はく「賤を先にし貴を後にする正法之を賞す。曰く「賊已に邪を釋てゝ眞を崇べり、今は沙門と爲れり」と。

王歎じて曰はく「善い哉。[一〇〇]如來・無所著・正眞道・最正覺・道法御・天人師たり。神妙の上化は乃ち玆に至らんや。始めて犲狼と爲り、今天仁と爲れり。足下を稽首せん」と。

又重ねて歎じて曰はく「斯の化奇なり。願くは一たび之を覩せしめたまへ」と。世尊曰はく「可

【九九】溝港道。須陀洹道なり。前揭あり見よ。

【一〇〇】佛の別號なり。

偈を受け畢んぬ。卽ち金錢萬二千を貢ぎたり。梵志重ねて之を誡めて曰はく「爾、四非常を存せよ。其れ禍必ず滅せん」と。王曰はく「敬んで諾す。敢て明誡を替へず」と。

卽ち樹所に至り笑を含んで且行けり。阿群曰はく「命の危き今に在るなり。何ぞ欣んで且笑はんや」と。答へて曰はく「世尊の言あり。三界は聞くこと希れなり。吾れ今之を懷きぬ。何ぞ國命之れ惜むべけんや」と。

阿群媚びて曰はく「願くは尊教を聞かん」と。王は卽ち四偈を以て之を授く。驚喜して歎じて曰はく「巍々たる世尊は四非常を陳ぶ。夫れ聞いて覩ず、所謂悖狂なり」と。卽ち百王を解して各ゝ國に還らしむ。阿群過を悔ゆ。自ら新に樹に依りて居と爲す。日に四偈を存す。命終して神遷す。王太子と爲り、妻を納れて男あらず。王重ねて之を憂ふ。因りて國に募りぬ。女之に化して男とならしむ。後遂に姝蕩して眞道に從はず。王之を恚り礫にして四衢に著けたり。行人に命じて曰はく「指を以て首を硎ぶ。苟くも之を辱しめよ」と。適ま九十九人あり。而して太子薨ず。魂靈變化し輪轉して已むなし。

佛の在世に値ふ。舍衞國に生ず。早く其の父を喪ひ、孤り母と與に居る。梵志の道を事とし、性篤にして言信ず。勇力あり象を擘す。師愛し友敬す。遐邇として賢と稱せり。師周旋する每に輙ち委するに居を以てす。師の妻は嬖を懷きて其の手を援けて婬辭もて之を誘へり。阿群辭して曰はく「凡そ世・耆友なり。男は吾れ之を父とし、女は吾れ焉を母とす。豈況んや師は之れ敬する所なるをや。身を燒いて從ふべし。斯の亂は敢へて順ぜざらん」と。師の妻恧然たり。退いて思ふて變と爲せり。婿歸れり。婦曰はく「子は彼の賢を歎ず。子を照すに足るや否や」と。具にその過を爲れり。女の妖、眞なるに似たれば、梵志信じたり。

投じたり。王曰はく「身を喪ふ事は懼れず。吾が信を毀ちたるを恨まんのみ」と。阿群曰はく「何の謂ぞや」と。

王具に道士已を見たるの誓を說いて「願くは一たび之を覩て其の重戒を受けんことを。尠寶焉を貢ぎたれば、旋死すれども恨まず」と。阿群之を放てり。還りて道士を覩る。躬づから高座を敷く。道士座に昇る。即ち偈を說いて言はく、

劫數終訖れり　乾坤烱然たり
須彌の巨海は　都べて灰煬と爲り
天龍の福盡きて　中において凋喪せり
二儀尙殞つ　國に何の常かあらん
生老病死は　輪轉して際無し
事願と違ひ　憂悲は害を爲す
欲深くして禍高し　瘡疣は外無し
三界は都べて苦なり　國何の賴りか有らん
有は本自ら無なり　因緣にて諸を成ず
盛なる者必らず衰ふ　實なる者必らず虛し
衆生は蠢々たり　都べて幻居に緣る
聲の響倶に空なり　國土も亦如なり
識神は形無し　四蛇に駕乘す、[九七]
無明の寶養は[九八]　以て樂車と爲す
形に常主無し　神に常家無し

【九七】四蛇は地水火風の四大に喩ふるなり。
【九八】無明。梵語阿尾儞也(Avidyā)なり。闇鈍の心諸法の事理を照了するの明なきをいふ。又痴の異名あり。

宰人命を承けたれば、默行して人を殺して以て王の欲に供したり。臣民[九三]嗷々たり。表聞すらく「賊を尋ねんことを」と。王曰はく「宜しく然らん」と。密かに宰人に告げて曰はく「之を愼まんや」と。有司之を獲たり。賊曰はく「王爾を命ぜしなり」と。群臣諫めて曰はく「臣聞く。王者は德を爲して仁法あり。帝淸明なれば卽ち日月に齊等し。后土の潤は乾坤に齊し。衆生を含懷すれば卽ち虛空の若し。爾は乃ち天下の王と爲るべき耳。若し仁に違して殘ふは卽ち犲狼の類なり。明を去り闇に就くは瞽者の儔なり。濟を替へなば自ら沒す卽ち[九四]坏舟に之れ等し。潤を釋てゝ枯を崇びなば卽ち[九五]火旱これ喪ふ。空に背き塞に向ひなば卽ち石人の心なり。夫れ狼殘・瞽闇・坏沒・火燒・石人の操は宰人の監たるべからず。豈天下の王たるべけんや。若し上德を崇びなば卽ち昌なり。殘賊を好まば則ち亡びん。二義臧否を惟王何に之かんや」と。

王曰はく「孩童湩を絕てり其れ可ならんや」と。曰はく「不可なり」と。王曰はく「余之の如し」と。群臣僉曰はく「犲狼は育すべからず。無道は君すべからず」と。臣民心を齊くし聲を同じうして焉を追へり。

王は奔りて山に入り神樹を覩見したり。稽首して辭して曰はく「余をして國に反らしめなば神に百王を貢がん」と。誓畢りて卽ち行けり。諸王の出でしを伺ひ、衆を突いて之を取れり。猶し鷹鷂の燕雀を撮むがごとし。九十九王を執りたり。樹神人に現ず顏華凡に非ず。阿群と謂ふ。曰はく「爾無道を爲して以て王の榮を喪へり。今復[九六]元酷を爲せり。將に何なる望を欲するや」と。阿群前んで之に輙く。忽然として現ぜず。

時に普明王、出でて民の苦樂を察せんとし、道、梵志に逢へり。梵志曰はく「大王宮に還らんことを。吾れ言ふこと有らんと欲す」と。王曰はく「昨、命じたれば、當に出づべし。信言違ひ難し」と。道士進んで坐せり。吾れ旋りて今に在り。遂に出でて阿群に獲られし所と爲れり。之を樹下に

【九三】 嗷々。騷がしき貌。

【九四】 坏舟。瓦舟に同じ。

【九五】 火旱。ひでりのこと。

【九六】 元酷。殘酷なること。

を去り三塗に處して之に出らざるはなし。後來の嗣を戒めよ。貪癡の火は身を燒くの本を以てなり。愼んで貪ること無かれ。夫れ榮尊は其の禍高し。寶多きものは其の怨衆し。王の終りし後の嗣は其の貪戒を誦し、世々に傳へて寶と爲せよ」と。四天下民は其の仁化を尊び、三尊を奉じて十善を行じ、以て治法と爲し、遂に永福を致せり。

世尊曰はく「世を覩るに能く榮貴を去り五欲を捐つるもの尠し。惟だ溝港・頻來・不還・應儀・緣一覺を獲て無上正眞道最正覺道法御天人師が能く之を絕つのみ。飛行皇帝が存すれば卽ち獲、願心に違せざる所以の者は宿命に布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の致す所にして空しくは獲ざるなり。頂生王とは吾が身是れなり。

佛、經を說き竟りたまふに阿難歡喜して佛の爲に作禮しき。

四十一、[八九]普明王經［普明王の本生］

是の如きを聞けり。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

佛、諸の比丘に告げたまはく、昔、菩薩あり。

大國王と爲れり。名づけて普明と曰ふ。普惠光被せられて十方歌懿したり。民は其の[九〇]休に賴ること猶し慈子の親を寧んずるが如きなり。隣國に王有り。法を治むるに正を以てし、力は師子の如し。走りて飛鳥を攫めり。宰人肉なし。[九一]晨犇市索せり。路に新屍を覩る。之を取りて肴と爲せり。味畜肉を兼ねて後日饌となせり。甘さ如かず。

王は太官を責む。宰人誠に歸して頭首を叩いて之けり。王心に惡然たり。曰はく「人肉甘からんや」と。默して宰人に勅したり。斯を以て常に爲せり。

世尊曰はく「夫れ味に厚きものは卽ち仁道薄し。仁道薄きものは豺狼の心興る。夫れ[九二]狼苟となるものは肉味を貪り、而も物命を賊するが故に天下焉を讎す」と。

なりといふ。娑婆の百年はこゝにては一日一夜なりといふ。城廓八萬由旬喜見城と名け此に帝釋天居住すといふ。

【八八】不諱。崩御に同じ。

【八九】梵語、須陀須摩(Sudh-aman)ならんか。智度論四にもこの王の事ならんか。持戒精進常に實語に依るとあり。

【九〇】安んずること。善美にして吉慶あればなり。

【九一】晨犇市索。朝早く犇りまはりて市に買ひ求むること。犇は古文奔なりとあり。

【九二】狼苟。苟は狗に同じ、いぬなり。宋元明三藏は狗を用ふ、宜なり。

口を開いて願を言へり。金輪は北に向ひ、七寶の四兵俱に飛ぶこと前の如し。始めて其の界に入る。遙かに地の青きを覩たり。翠羽の色の如し。

王の曰はく「爾等、青地を覩たるや」と。對へて曰はく「之を見る」と。曰はく「斯れ鬱單曰地なり」と。又「白地を覩るや」と。曰はく「之を覩る」と。曰はく「斯れ(八五)擣稻米と成る、爾等之を食せよ」と。又諸寶樹を覩る。衆軟の妙衣、(八六)臂釧指環、瓔珞の衆奇は皆樹に懸著せり、曰はく「之を覩るや」と。對へて曰はく「唯然り」と。曰はく「爾等之を服せよ」と。王治むるに仁を以てし、民を化するに恕を以てす。彼に居ること年久しく其の數上の如し。

又意を生じて曰はく「吾れに三天下あり。今北方四十萬里を獲たり。意は(八七)忉利天に昇りて帝釋の所に之かんと欲す」と。

王の意始めて然り。金輪は上に向ひ、七寶の四兵飛行して天に昇れり。帝釋の宮に入れり。帝釋、王の來れるを覩て欣んで之を迎へて曰はく「數ゝ高名に服しだり。久しく相見えんと欲す。玆に翔り快ならんや」と。手を執りて共に坐し半坐を以て之に坐せしめたり。王は左右を顧視して天の宮殿を覩るに黃金・白銀・水精・琉璃・珊瑚・虎珀・車渠・眞珠を以て宮殿と爲せり。之を覩て心欣べり。

卽ち又念じて曰はく「吾れに四國あり。寶錢無數なり。斯の榮云ひ難し。天帝をして殞さしめて吾れその位に處らんも亦上願ならざらんや」と。

惡念興りて神足滅す。釋之が故宮に還したれば、卽ち重病を獲たり。輔臣問ふて曰はく「天王疾篤し。若し不諱に在らば將に遺命有らんや」と。

王曰はく「問ふこと有るが如くんば王何を以てか身を喪はん」と。答へて「覩る所の如し。貪を以て病を獲、遂に身を喪ふことを致せり、夫れ貪は命を殘するの刃にして國を亡すの基なり。三尊

說といふも妨げなからん。

【八三】　弗于逮土。梵語(Pūrva-videha)舊譯弗婆提又は弗于逮土といひ新譯には毘提訶といふ。四大洲の中東大洲の名なり。故に東毘提訶といひ、俱舍論十一に依れば東勝身洲は東陿く西は廣し。三邊は量等し。形は半月の如し。東三百五十、三邊各二千なりといふ。

【八四】　鬱單曰土。梵語(Uttarakuru)なり。鬱多羅究留、鬱多羅鳩婁、郁多羅鳩留、鬱單越等其の數甚だ多し。大海の中心に立てる須彌山の四方に四大洲の中北方の大州の名なり。起世因本經二に依れば何の因緣有りて彼の名を說いて鬱多羅究留洲といふや。諸比丘よ。其は四天下に於て餘の三洲に比し彼より最上最妙最勝なればなり。これ隋には上作といふとあり。

【八五】　擣稻米。うすもてつきし米となりしをいふ。

【八六】　臂釧指環。うでわに同じ。臂環なり。

【八七】　忉利天。梵語(Trāyastriṃśa)なり。音譯怛唎耶怛唎奢天、多羅夜登陵舍天等あり。三十三天と譯す。欲界六天中の第二にして須彌山の頂、閻浮提の上八萬由旬の所にあり。此の天の有情の身長一由旬あり。衣の重さ六銖、壽一千歲

億數あり。

王の意存して曰はく「吾れに[八一]拘耶尼の一天下地、縱廣三十二萬あり。黎庶熾盛にして五穀豐沃なり。比門亘富にして世々希有なる所なり。吾が國焉を兼ねん。其の然りしを雖す者、願はくは彼の皇乾ならん。金銀の錢を雨し、七日七夜にして吾れを惠むこと玆の如からんも亦善からずや」と。天、其の願に從へり。二寶の錢を下して其の境界に滿つ。天寶の明なること奕々として國を曜かしたれば、王の喜び量り無し。天下拜賀し、日々群臣と歡喜して相樂めり。民皆善なりと稱したり。無極の樂を獲ること數千萬歲なりき。

王は又念じて曰はく「吾れに西土あり、三十二萬里なり。七寶の榮あり。千子國を光せり。天寶錢を雨せること世未だ嘗て有らず。其の然りしを雖す者は、吾れ聞く南方に[八二]閻浮提あり。地の廣長なること二十八萬里なり。黎庶衆多にして求めて獲ざるなし。吾れ彼の土を得んも亦快ならずや」と。

王の意始めて存したり。金輪南に向ひ、七寶の四兵は輕擧して飛行して倶に其の土に到れり。彼の王と臣民喜從せざるはなし。其の土の君民、終日欣々たり。王は止教化するのみ。年數上の如し。

王又念じて曰はく「吾れに西土あり。今南土を獲たり。天人衆寶何ぞ求めて有らざらん。今聞く東方[八三]弗于逮土三十六萬里あり。其の土の君民、寶穀諸珍願として有らざるなし。吾れその土を獲たらんに亦快ならずや」と。

口始めて爾云へり。金輪は東に向ひ、七寶の四兵飛行して倶に至る。君臣黎庶は樂しみて屬せざるはなし。又正法を以て君民を仁化したり。年數上の如し。比門德を懷けり。

王又念じて曰はく「吾れに西土南土東土あり。天人衆寶珍として有らざるはなし。今聞く北方に[八四]欝單曰土あり。吾れ王を獲る之れ亦善からずや」と。

【八一】拘耶尼。梵語(Godānīya)なり。舊譯は瞿耶尼、瞿陀尼、瞿伽尼。新譯は瞿陀尼、瞿陀尼耶。須彌山の西方にある大洲なりといふ。牛貨と譯す。慧苑音義によれば具には阿鉢喇瞿陀尼(Aparagodānīya)といふ。阿鉢喇は此に西といひ、或は鉢執忙といひ此に後といふ。謂く日沒邊處なり。瞿は牛なり。陀尼は貨なり。謂く牛を以て物を買ふこと此の洲にて錢を用ふるが如しとあり。佛教四大洲として世界觀を說くに重要なるものなり。

【八二】閻浮提。梵語 Jambudvīpa なり。舊譯は琰浮洲、閻浮提鞞波、新譯は贍部洲。須彌山の南方に當れる大洲なりといふ。而も吾人の住處なりといふ。閻浮は新譯贍部にして樹の名なり。提は提鞞波の略にして洲と譯す。此の洲の中心は閻浮樹の林あるを以てかく名くといふ。倶舍論十一に大雪山の北に香醉山あり。雪の北香の南に大池水あり無熱池と名づく。此の池の側に於て贍部林あり。樹形高大にして其の果物甘味なり。此の林に依るが故に贍部洲といふに依りて之を見れば須彌山說は印度を中心としての世界觀なるものゝ如し。而も四大洲說は之によりて立せられたる

首を燦かんのみ。

又嘗て四月八日を以て[七七]八關齋を持して中心歡喜せり。故に寶城を獲たり。壽命巨億に所願は心に從ふ。求めて獲ざる無し。世の無足を覩て唯道を得たらんに乃ち止らんのみ。

佛、諸の沙門に告ぐ。彌蘭は太山獄を出でて心の三惡を閉し、口の四刃を絶てり。身の三尤を檢す。父母に孝順に三尊を親奉す。戒を戴きて冠と爲す。戒を服して衣と爲す。戒を懷きて糧と爲す。戒を味ふて肴と爲す。食息めて坐行す。佛戒を忘れず。[七八]蹉步の間戒德を以て成る。自ら佛と爲ることを致せり。凡人の行は親に孝ならず、師を尊奉せず。吾れ其の後は自ら重罪を招きしを覩たり。彌蘭は其の類ならんや。夫れ惡を爲りて禍を追ふは猶し影の身を尋ぬるがごとし。邪を絶ちて眞を崇びなば衆禍自ら滅せん。

佛、經を說き竟りぬ。諸の沙門歡喜して禮を作しき。

四十、[七九]頂生聖王經［頂生王の本生］

是の如きを聞けり。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

是の時、阿難閑居して深く惟るに衆生始めより終りに至るまで五欲を厭ふ者尠し。日中を過ぎて後至り佛の所に向つて稽首し畢りて退ぎて白して言さく「唯世尊、吾れ閑坐して深く惟るに衆生足るを知るもの尠し。五欲を厭はざる者衆し」と。

世尊歎じて曰はく「善い哉、善い哉。爾の云ひし所の如し。然る所以は往古に王あり。名づけて頂生と曰ふ。東西南北臣屬せざるはなし。

王に[八〇]七寶あり。飛金輪力、白象、紺色の馬、明月の珠、玉女の妻、聖輔の臣、典兵の臣なり。王の斯の七寶は世を覩るに希有なり。又千子あり。端正姸雅にして聰明多智なり。天下聖なりと稱せり。猛力衆を伏し師子の如くありしなり。王既に聖にして且仁なり。普天屬するを樂めり。詩に

【七七】八關齋。八齋戒の異名なり。關は禁なり。之は殺盜等の八罪を禁閉して犯さしめざればかくいふ。倶舍論に依れば一、殺生。二、不與取。三、非梵行。四、虛誑語。五、飲酒。六、塗飾香鬘。舞歌觀聽。七、眠ニ坐嚴麗牀座一。八、食ニ非時食一。之等を離るゝことを八齋戒といふなり。

【七八】說文によれば躊躇猶豫なり。

【七九】頂生王因緣大正No.165六卷本趙宋施護譯と異譯なり。別經は既にその本生の因緣を說くに極めて詳かなり。然るに此の經は宋元の二大藏には載せざるは注意すべし。

【八〇】七寶。施護譯に輪寶、象寶、馬寶、摩尼珠寶、玉女寶、主藏神寶、主兵神寶の七寶といへり。

殿名づけて屑末と曰ふ。明月眞珠の諸寳は前に踰ゆ。壽數千萬歲なり。又疑ふらく「八女は吾れをして適せしめず。其れ出あらんや」と。其の臥するを伺ふて出づ。竊かに疾く亡去せり。

又水精城を覩たり。十六の玉女あり。出でゝ之を迎ふ。其の辭は上の如し。要ず將に城に入りて七寶殿に昇れり。城殿の衆寶玉女光華前に踰えたり。中に居ること歲數又數千萬なり。意厭足せず。又諸女の臥するを伺ふて出でて亡去せり。

復た琉璃寳城を覩るに光曜奕々として三十二女あり。出で迎へて跪拜す。虔辭上の如し。要請して城に入り七寶殿に昇る。殿を鬱單と名づく。其の中の衆寶伎樂甘食女色前に踰えたり。中に處し久長年數上の如し。又諸女の臥するを伺ひ出でて亡去せり。

遙かに鐵城を覩たり。迎ふる者無き莫し。

彌蘭惟ふて曰はく「銀城に四女あり。金城に八有り。水精に十六あり。琉璃に三十二あり。玉女光世修虔相迎へり。今迎へざる者は將に貴を以ての故ならんや」と。城を周る一匝するに鬼有りて門を開く。彌蘭、城に入りて即ち其の鬼を見たり。鬼を俱引と名く。鐵輪燗然として其の頭上を走れり。罪人を守るの鬼なり。彼の頭の輪を取りて彌蘭の頭上に著けり。腦流れて身燋けたり。

彌蘭涙を流して曰はく「四自り八に之き、八自り十六に之き、十六自り三十二に之きたり。榮屑末殿、鬱單殿に處したり。吾れ足る無きの行を以ての故に斯れを獲たり。何ぞ當に斯の患を離るべけんや」と。

守鬼答へて曰はく「其の年の數は子の來る久しきが如く、子は斯の殃を免れん」と。火輪彌蘭の頭上に處すること六億歲にして乃ち之を免れたり。

佛、諸の沙門に語げたまはく、彌蘭とは吾が身是れなり。然る所以は、未だ三尊を奉ぜざるの時は愚惑は邪を信じ、母沐浴して新衣を著して臥す。吾れ母の首を蹈む。故に太山は火輪を以て其の

佛、經を說き竟りぬ。諸の沙門歡喜せざるはなし。稽首して禮を作しき。

三十九、[六八]彌蘭經［彌蘭王の本生］

是の如く聞けり。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。

時に諸の沙門、閑居して深く惟るに世人は邪を習ひ欲を樂ふ。始めより終りに至るまで五樂を厭ふ者無し。何をか五樂と謂ふ。眼色・耳聲・鼻香・口味・身細滑なり。夫れ斯の五欲は其の命終に至るまで豈厭ふ者あらんや。日中の後、俱に佛所に詣り、佛足を稽首して退立して白して言さく「吾等世尊、惟ふに世の愚者は五欲に惑ふ。厥の命終に至るまで豈厭ふ者有るや不や」と。

佛、之に告げて曰はく「世を覩るもの彼の五樂に足るもの無し。昔、五百の商人あり。海に入りて利を採る。中に智者あり。名づけて彌蘭と曰ふ。衆の師御たり。海に神魚あり。其の名は[六九]摩竭なり。觸るれば其の船を敗る。衆皆身を喪ふ。彌蘭板に騎りて僅かに免るゝことを獲たり。風漂ふて岸に附したり。地を鼻摩と名く。岸に登りて周旋し自ら蘇息することを庶ふ。一小徑を覩たり。之を尋ねて而も進みたり。遙かに銀城を見る。樹木茂盛なり。間に浴池あり、四表に周旋するに甘水之を遶れり。四美人あり。容、天如に齊し。之を奉迎して曰はく「巨海を經涉するに厥の勞多し」と。

善賀吉に臻る。今斯の銀城は其の中に衆寶・[七〇]黃金・[七一]白銀・[七二]水精・[七三]琉璃・[七四]珊瑚・[七五]虎珀・[七六]車渠を殿となす。妾等の四女は仁の使役に給す。晩息み夙興り。惟命之く所なり。願くは他に遊ぶこと無かれ。

彌蘭城に入りて七寶の殿に昇る。懽び娛しんで欲に從ふ。願有せざるは無し。中に處して千餘年なり。彌蘭惟ふて曰はく「斯の諸の玉女は吾を邁せしめず。其れ緣あらんや」と。四女の寢を伺ふて竊に疾く亡失したり。

遙かに金城を覩たり。八玉女あり。迎辭は上の如し。玉女の華容は又四人に踰えたり。城中の寶

【六八】梵語 Milinda ならんか。

【六九】摩竭。摩伽羅 Makara なり。鯨魚、巨鼇は譯なり。海中の大魚にして一切を呑啗すといふ。

【七〇】黃金。Suvarṇa.

【七一】白銀。Rūpya.

【七二】水精。Sphaṭika. 玻璃なり。

【七三】琉璃。Vaiḍūrya.

【七四】珊瑚。Pravāḍaḥ, Vidrumaḥ.

【七五】虎珀。Aśmagarbham.

【七六】車渠。Musāragalva

山に入りて燒き煮られ割裂せらるゝこと六萬年を積む。死を求めども得ざりき。呼嗟すれども救無し。爾の時に當りて內に九親有り。表に臣民あり。資財億載して衆樂極無し。寧んぞ吾れ太山地獄に入りて燒き煮られ衆痛極無きの苦を知らんや。生存の榮あり。妻子臣民あり。孰れか能く諸苦を分取して去らんや。惟ふに彼の諸毒は其れ無量と爲す。豈たび之を憶ふ每に心但だ骨楚するのみ。身は虛汗と爲り、毛は寒竪となり。言往いて禍來る。妖は影を追ふて尋ぬ。言を發するを欲すと雖も復た咎を獲んことを懼る。太山の苦再び更ふべきこと難し。是を以て舌を縮めて都べて言無からんことを欲す。始めて十三年にして妖導師あり。王をして吾れを生埋にせしむ。大王の太山の咎を獲んことを懼れたり。勢ひ復た一言したるのみ。今沙門となり無欲の行を守らんと欲す。衆禍の門を覩て復た王とならざらん。願くは怪しむこと無かれ」と。

王、曰はく「爾は[六五]令君たり。行高く德尊なり。民を率ゐるに道を以てす。過は猶し絲髮のごとし。人の憶ふ所に非ず。之を以て罪を獲ること酷裂乃ち之の如けんや。吾れの如く今人主と爲りて心の所欲に從ふ。正法を奉ぜず。終に當に之をいかがせん」と。

[六六]卽ち聽されて道を學びたり。王は還りて國を治むるに正を以て邪まならず。遂に豐樂を致せり。墓魄卽ち自ら情を練りて欲を絕てり。志を道眞に進めて遂に佛を得るに至れり。廣く景模を說いて衆生を拯濟して以て滅度するに至れり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、時に墓魄とは吾が身是れなり。父王とは今の[六七]白淨王是れなり。母とは吾が母にして今の舍妙是れなり。夫れ榮色邪樂する者は身を燒くの鑪なり。清淨にして澹泊にして患無きの家なり。若し難を免れて罪を離れんと欲せんものは佛の敎を失ふこと無きなり。道を爲すは苦なりと雖も、猶夫の三塗に處するに勝らん。人とならば卽ち貧窶に遠かる。八難に處せず。道を學ぶの志は當に佛行の如くなるべし。緣一覺應眞滅度を獲んと欲せば之を取りて得べし。

【六五】令君。名君に同じ。

【六六】後漢譯に太子聽レ行學レ道。太子於レ是棄レ國捐レ王不レ慕ニ人物一。一心專精念レ道修レ德。功勳累積遂至ニ成佛一。佛已得レ道。復度ニ十方諸天人民一。不レ可ニ稱計一無央數劫不ニ以爲レ勞云云とあり。

【六七】白淨王。淨飯王に同じ。

墓魄惟うて曰はく「王逮び國人は吾が眞瘖を信ず。即ち默して衣を斂して水に入りて淨浴す。香を以て身に塗り具に寶服を著す。壙に臨んで呼んで曰はく「爾等、胡爲れぞ」と。答へて曰はく「太子は瘖聾なり。國の爲に嗣無し。王命ずるに生埋にせよ。冀くは賢嗣を生ぜんことを」と。曰はく「吾れは即ち墓魄なり。喪夫は車の霍然空虛なるを視、其の形容を覩るに曜々として光有り。草野遐邇なること猶し日の明なるがごとし。聖靈巨勢にして神靈祇を動かしたり。喪夫巨細慴驚せざるはなし。兩々相視るに顏貌黃靑にして言文章と成れり。畏れざるはなし。天を仰いで曰はく「太子の靈德は乃ち斯に于る」と。即ち叩頭して陳して曰はく「願くは旋りて王を寧んぜしめ、衆をして嗟せざらしめたまはんことを」と。太子曰はく「爾は疾く王に啓して吾れ能く言ふと云へ」と。人即ち馳せて聞す。王后兆民甚だしく所以を怪しめり。心懽んで善を稱ふ。悅豫せざるはなし。車は馳せ人は奔る。殷として路に塡め塞がれり。

墓魄曰はく「吾れ沙門と爲らんことを獲ば、虛靖の行も亦善からずや」と。意始めて之くの如し。帝釋即ち化して苑池の樹木と爲りぬ。世の覩る所に非ず即ち衆寶衣を去る。化して[六三]袈裟となり。王到りて已む。太子は五體を地に投じて稽首して禮するが如し。王即ち坐に就き、其の言聲を聞くに光影威靈あり。二儀爲に動きたり。

王、喜んで喩へて曰はく「吾れに爾有り。來りて國を擧げて敬愛す。當に天位を嗣ぎて民の父母と爲るべし」と。

[六四]對へて曰はく「惟だ、願くは大王、哀みて微言を採らんことを。吾れ昔し嘗て斯の國王と爲れり。名づけて須念と曰ふ。國に處し、民に臨むこと二十五年なりき。身十善を奉じて民を育するに慈を以てす。鞭杖衆兵都て息めて行はれず。囹圄に繫囚なし。路に怨嗟の聲なかりき。惠施流布して潤ひ周ねからざるなし。但し出で遊ぶに翼從甚だ衆きを以つて導臣馳除かれ、黎庶惶懼たり。終に太

【六三】袈裟。梵語迦沙曳 Kaṣāya なり。不正、壞、濁、染などゝ譯す。

【六四】後漢譯に述ぶる所詳かなり。參照せよ。

と。梵志悪然たり。妻重ねゞ之を耻ぢたり。」

時に[五四]除饉あり。進んで稽首して曰はく「願くは以て余れに惠まんことを」と。世尊戒めて曰はく「爾は昔王と爲り、女は時に鬼たり。色を以て爾を誑かす。爾の民を呑盡したり。爾、厭はざらんや」と。除饉焉を耻ぢたり。退禪して定を獲たり。[五五]溝港道を得たり。

佛、鶖鷺子に告げたり。菩薩自ら城中の人戒を受けて已に家に旋れり。三尊に歸命して自誓の辭に云はく「時當に死すべし。死すとも復た如來應儀正眞覺清淨の重戒を犯さざらん」と。戒を積むこと弘く多し。佛道遂に成ず。爾の時の長者は吾が身是れなり。王とは今の比丘是れなり。鬼とは梵志の女是れなり。城中の天人なるものは鶖鷺子是れなり。菩薩志を執る度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

三十八、[五六]太子慕魄經[慕魄太子の本生]

是の如きを聞けり。一時、佛、[五七]聞物國の[五八]祇樹給孤獨園に在しき。是の時諸の沙門に告げたまはく、往昔國あり[五九]波羅奈と名く。王に太子有り。名けて慕魄と曰ふ。[六〇]生れながらに無窮の明あり。過去・現在・未來の衆事、其の智礙無し。端正にして暉光なること猶し星中の月のごとし。

王に唯一子あるのみ。國憂へざるなし。年十三なれども口を閉ぢて言はず。瘖人の若きものあり。王后焉を憂ふ。[六一]諸梵志を呼んで其の所由を問ふ。對へて曰はく「斯れ不祥たるなり。端正にして言はずんば何ぞ大王を謚せんや。後宮嗣無し。豈彼の害に非ざらんや。法は宜しく之を生埋にすべし。必ず貴嗣有らん」と。

[六二]王即ち悪然として入りて后と議れり。后逮び宮人哀慟せざるはなし。嗟して曰はく「奈何太子、祿薄く生れて斯の殃を獲たる」と。哀しむ者路に塞がり猶し大喪有るがごとし。具に寶服を著して以て喪夫に付せり。喪夫は其の名服を奪ふ。覩て共に塚と爲さん。

【五四】除饉。梵語比丘 Bhikṣu に同じ。比丘能く福德供養を得て因果の饉乏を除けばかくいふなり。

【五五】溝港道。須陀洹に同じ。前掲せり參照せよ。

【五六】太子慕魄經大正 No. 167 後漢安息三藏安世高譯並びに太子慕魄經（開元錄云はく沐魄或は慕魄なり）大正 No.168 西晉月氏三藏竺法護譯と異譯なり。

【五七】聞物國。後漢西晉兩譯ともに舍衞國とあり。(Śrāvastī) のことなり。聞物はその譯なり。

【五八】祇樹給孤獨園。後漢譯に祇洹阿難邠坻阿藍とあり。同じ。前掲せり。

【五九】波羅奈。(Vārāṇasī) 國のこと。

【六〇】後漢譯に始生有ㇾ異。顏貌端正絕無雙比。自識ニ宿命無數劫事。所ㇾ更善惡罪福受ㇾ報壽夭好醜沒ニ此生一彼所從來生皆悉知見。とあり。

【六一】諸梵志。他の二譯に婆羅門とあり。

【六二】他の二譯は此の間の消息を語るに詳かなり。乞ふ。參照せよ。

商人喜んで曰はく「斯れ必らず天なり」と。群馳して歸命せり。妻は卽ち子を抱きて跡を尋ねて哀慟す。其の辭に曰はく「怨呼として皇天妻の爲に累載す。今以て鬼と爲らん。聲を哀んで情を傷む。辭して王の所に詣る。厥の云へし上の如し。今は僅々として自ら恃むに由無し。惟願くは大王、哀みて妾の情を理めんことを」と。

王、菩薩を召して其の所由を問ふ。卽ち見し所を以て本末之を陳べたり。王は色の美しさを覩て疾く婿を遣はして去らしむ。之を後宮に內れたり。其れが爲に淫荒む。國正しく紛亂す。鬼化して狐と爲り、日々行いて人を食ふ。害を爲すこと玆に甚だし。王は覺らず。後各命終せり。生死に輪轉したり。

菩薩德を積みて遂に佛と爲ることを得たり。狐鬼の魂靈化して梵志の家に生じたり。絶妙の色あり。佛、時に作法縣に於て食を求めたり。食畢りて城を出でて樹下に坐す。梵志佛の相好を覩るに容色紫金なり。項に日光あり。星中の月の若し。佛の此の若きを覩て其の喜び無量なり。歸りて兒母に白す。吾が女婿を獲たり。其れ世雄とならん。疾く名服を以てし、世の諸好を具したり。梵志と家室は女を携へて之を貢がん。道に足跡を覩る。妻曰はく「斯れ無欲の神雄なり。豈淫邪を以て其の志を亂さんや」と。父曰はく「吾が女は國の上華なり。胡ぞ高德にして而も迴さざらんや」と。

妻卽ち其の義を頌して曰はく

婬なる者は足を曳いて行く　恚多くして指を斂めて歩む
愚なる者は足地を築く　斯の跡は天人の尊なり

自ら辱しむる無きなり」と。

父曰はく「爾は薄智なり。戻りて行け。女を以て焉に献ぜん」と。世尊告げて曰はく「[五一]第六魔天あり、吾れに献ずること三女なりき。變じて[五二]寠鬼と爲れり。今爾は[五三]尿嚢なり。又來る何爲れぞ」

【五一】第六魔天。欲界の第六他化自在天のこと。頂上に位す。此の他化自在天王は常に佛道に障礙を與ふるを以て魔王といふ。所謂四魔の中の天魔なり。
【五二】寠鬼。老鬼に同じ。
【五三】尿嚢。鬼魅の類なり。

鼈、信じて還れり。獮猴岸に上りて曰はく「死なん。鼈蟲、豈腹中肝を當に樹に懸くべき者あらんや」と。

佛、諸比丘に告げたまはく、「兄なるものは卽ち吾が身是れなり。常に貞常を執りて終に淫亂を犯さず。宿餘殃を畢るに獮猴中に墮す。弟及び王女は倶に鼈の身を受けたり。雄なるものは調達是れなり。雌なるものは調達の妻是れなり。菩薩の執志度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

三十七、長者の本生

昔、菩薩あり。船に乘りて海を渡れり。寶を採りて乏を濟へり。海邊に城あり。苑園備に有り。華女渚に臨み其の輩を要して曰はく「斯の國は豐沃なり。珍寶恣に求めらる。屈して城に入り民の有無を觀るべし」と。

商人信じて鬼魅の厭惑に從ふ。遂に留りて與に居れり。年を積むこと五有り。菩薩感じて二親の本土を思ふ。城を出でゝ山に登り四顧遠望するに一鐵城中に丈夫有るを觀る。首に天冠を戴き、儼然として恭坐せり。菩薩に謂つて曰はく「爾等惑ひたるか。鬼魅を以て妻となす。爾の二親九族の厚きを捐てゝ鬼に呑まる。豈惑はざらんや。爾等寤むる無くんば其の眞膺を察せん。方に神馬あり、玆を翔けて衆を濟ふ。附旋して居らば爾の身命を全ふすべし。若し蠱妻を戀はゞ死して斯の城に入り、衆毒普く加はりて悔ゆるも將に救無からんとす」と。

菩薩命を承けて、詭寐して之を察す。眞を覩ること云ひしが如し。厥の心懼れたり。明日密かに相告ぐ。等人僉然り。各妻を覩るに變じて狐體と爲り競爭して人を食ひしを伺ふて憮然たらざるはなし。曰はく「吾等死せん」と。相驚いて「備さに豫め懈らば卽ち喪はん」と。

馬王臻りて曰はく「孰れか居を離れて心に所親を懷くものあらんや。疾く來りて玆に赴け。吾れ將に爾を濟はんとす」と。

吐いて死せり。甥其の金を還したり。已に殞ちしを觀て、哽噎して曰はく「貪らば乃ち身を喪ふに至らんや」と。

菩薩信を守りて寶を獲たり。調達は貪り欺いて以て身を喪へり。童子なるものは吾が身なり。舅なるものは調達是れなり。菩薩の執志度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

三十六、兄(獼猴)の本生

昔、菩薩あり。無數劫の時、兄弟貨に資し利を求めて親を養ふ。異國に之き弟をして珠を以て其の國王に現ぜしむ。王は弟の顏華かなるを覩、欣然として之を可とし、女を以て焉に許したり。珠千萬を求む。弟還りて兄に告ぐ。

兄、追ふて王の所に之き、王又兄の容貌の堂々たるを覩る。言は輙ち聖典なり。雅相齊し難し。王は重ねて焉を嘉す。女を轉じて之を許したり。女情【四九】泆豫たり。兄、心に存して曰はく「壻伯は卽ち父なり、叔妻は卽ち子なり。斯れ父子の親あり、豈嫁娶の道あらんや。斯の王人君の尊に處り、而も禽獸の行を爲せり」と。卽ち弟を引いて退けり。女は臺に登りて望んで曰はく「吾れ【五〇】魅蠱と爲り、兄の肝を食ふて可ならんや」と。

生死に展轉したり。兄は獼猴となり、女は弟と倶に鼈となれり。鼈の妻疾有り。獼猴の肝を食せんことを思ふ。雄行いて之を求めたり。獼猴の下飮を覩たり。鼈曰はく「爾嘗て樂を覩たるや」と。答へて曰はく「未だし」と。曰はく「吾が舍に妙樂有り。爾、觀んと欲せんや」と。曰はく「然り」と。鼈曰はく「爾、吾が背に昇らば、將に爾を觀んとす」と。背に昇りて隨ふ。半谿あり。鼈曰はく「吾が妻、爾の肝を食はんことを思ふ。水中に何の樂か之れ有らんや」と。獼猴心に惡然として曰はく「夫れ戒は善を守るの常なり。權に難を濟ふ之れ大なり」と。曰はく「爾、早く云はざらんや。吾れ肝を以て彼の樹上に懸けたり」と。

【四九】泆豫。恣にして安んじ樂しむ貌。

【五〇】魅蠱。一種の毒鬼ならん。

四姓曰はく「子、力を展べて此の寶を致せり。胡爲ぞ相還すや」と。道士曰はく「吾れ君が野を守り、彼れ君の地に葬る。大義より之を論ずれば寶は即ち君の有なり」と。四姓歎じて曰はく「善い哉。古の賢者だに豈能く子に踰えんや」と。

即ち青衣中に賢行あり、華色を兼ぬる者を擇んで之に給して妻と爲す。家財を分ちて以て其の居を成ず。道士曰はく「其の行を進め其の德を高くするなり」と。

爾の時の貧道士なるものは吾が身是れなり。妻なるものは[四六]裘夷是れなり。菩薩の執志度無極なり、持戒を行ずること是の如し。

三十五、童子の本生

昔、菩薩あり。身凡人爲り。三尊に歸命して戒を守りて虧かず。舅と與に行き、衒賣して自ら濟ふ。彼の異國に之きしに舅先づ水を渡れり。獨母の家に止りぬ。家に幼女あり。

女、母に啓して曰はく「後ろに[四七]澡盤あり。商人從り白珠と易ふべし」と。母は女の意に順じて以て商人に示せり。刀を以て刮視して其の眞寶を照す。佯りて地に投じて曰はく「吾が手を汚したり」と。即ち出でて路を進めたり。母子耻ぢぬ。

童子後に至る。女重ねて珠を請ふ。母曰はく「前事の耻は今の戒と爲るべし」と。女曰はく「此の童儒を見るに仁人の相あり。前の貪殘に非ず」と。又以て之に示せり。童儒曰はく「斯れ[四八]紫磨金なり。吾が貨を盡して之と易ふるも可ならんや」と。母曰はく「諾す」と。

童子曰はく「吾れ金錢二枚を匂ふて以て渡しを雇はんや」と。舅、尋ね還りて曰はく「今少珠を以て汝に惠まん。屬盤を取りて來れ」と。母曰はく「良童子あり。盡して名珠を以て吾が金盤を雇ふ。猶其の賤しきを謝せり。爾急に去らずんば、且く爾に杖を加へん」と。

舅、水邊に至りて地に蹶れて呼んで曰はく「吾が寶を還すに來れ」と。性急にして胸を椎し血を

【四六】裘夷。倶夷に同じ。耶輸陀羅夫人のことなり。

【四七】澡盤。口をそゝぎ手を洗ふたらひ。

【四八】紫磨金。又紫磨黄金なり。磨は汚れなき紫色を呈したる第一等の黄金をいふ。

れ前世に好取の穢を爲せり。今其の殃を獲たり。困陋の貧に處し、子の爲に賃客たり。今又之を犯す、無量の罪を種ゑんことは佛弟子に非ざるなり。吾れ寧ろ道を守りて貧賤にして而も死すとも無道を爲して富貴を生ぜざるなり」と。

貨主曰はく「善い哉、唯佛教のみ眞なり」と。菩薩の執志度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

三十三、貧商人の本生

昔、菩薩あり。世に處する貧困なり。商人の爲に賃す。海に入りて利を採る。船住りて行かず。商人巨細恐懼せざるはなし。請ふて[四四]神祇に禱れり。上下賜み拯へり。貧人は唯三たび自ら歸するのみ。戒を守りて犯さず。過を悔いて自ら責む。日夜各三たびなり。慈心誓願すらく「十方衆生恐怖あることなし。吾れ今日の如きなり。吾れ後に佛を得たらんに當に斯の類を度すべし」と。

乃ち七日に至るも船移適せず。海神、訛りて貨主に夢を與へて曰はく「汝貧人を棄てなば吾れ汝に去るを與へん」と。貨主夢ることを得たり。愴然として之を悼めり。私密に言議す。貧人微察し所以を具照して曰はく「吾が一人の體を以て衆命を喪ふこと無れ」と。貨主[四五]作籍して其の糇糧を給したり。下りて籍の上に著け籍を推して之を遠けたり。大魚、船を覆へし盡く商人を呑めり。貧人風に隨ふて岸を得て、其の本土に還れり。九族欣懌せり。貧人三自歸五戒十善を以てす。奉齋懺悔して衆生に慈向す。故に是の福を得たり。貧人とは我が身是れなり。菩薩の執志度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

三十四、貧道士の本生

昔、菩薩あり。戒を守りて隱居す。時榮を慕はず、四姓に依蔭し、其が爲に墓を守れり。若し喪葬あれば輙ち力を展げて助く。喪主感ず。寶を以て之を惠めり。獲し所の多少は輙ち四姓に還す。

【四四】神祇。天神地祇のこと。

【四五】籍は簿に同じきならん。或は箄ならん。筏はいかだなり。

隣國正を化す。仇慽更に親くし、襁負雲集せり。

婦は其の跛婿を嬰して國に入り乞匃せり。昔婿を將ゐて世の難を避け、今來りて仁に歸せしことを陳べたり。國人巨細、雅奇せざるは莫し。僉曰はく「賢婦なれば書すべし」と。夫人曰はく「重ねて賜ふべし」と。王卽ち婦を見、問ふて曰はく「天子を識るや不や」と。婦怖れて叩頭せり。王宮人の爲に本末之を陳べたり。執正の臣曰はく「斯れを戮すべし」と。王曰はく「諸佛は仁を以て三界の上寶と爲せり。吾れ寧ろ軀命を殞すとも仁道を去らざるなり」と。夫人、人をして之を驅けて國を出でて其の足迹を掃はしめたり。

佛、鶖鷺子に告げたり。王とは吾が身是れなり。跛人とは調達是れなり。婦とは好首是れなり。

菩薩の執志度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

三十二、凡夫の本生

昔、菩薩あり。時に凡夫と爲り。博く佛經を學び深く罪福を解す。衆道醫術、禽獸鳴啼して具に照さゞるなし。世の[四三]憒濁を覩て隱れて仕へず。佛戒を尊尙して唯正なれば是れに從はんのみ。貧に處し窮困す。商の爲に賃擔ふ。水邊を過ぎて飯す。群烏衆噪す。商人心懼る。森然として毛竪つ。菩薩之を笑へり。飯已りて卽ち去りて其の本土に還れり。顧て其の婿直に曰はく「烏鳴きて爾は笑ふ。將に以有らんや」と。答へて曰はく「烏、彼に白珠あり、其の價甚だ重し、汝殺して其の珠を取れ、吾れは其の肉を食はんと欲すと云ふ故に之を笑ふのみ」と。曰はく「爾殺されざらんや」と。

答へて曰はく「夫れ佛經を覩ざるものは滔天の惡を爲し、而して之れ殃無しと謂ふ。斯れ自らを欺くと爲す。吾れ無上正眞の典籍を覩、菩薩の淸仁を觀ず。蜎飛蚑行蠕動の類、愛して殺さず。草芥は己の有に非ず卽ち取らず。夫れ殺を好むものは仁ならず。取ることを好むものは淸からず。吾

【四三】憒濁。みだれ濁れる貌。

妻是れなり。菩薩の志を執る度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

三十一、國王の本生

昔、菩薩あり。兄弟三人あり。世の枯旱に遭ひ、黎民相啖ふ。倶に行いて食を索め、以て微命を濟へり。山嶮を經歷して食に乏しきこと日有り。兩兄各云はく「婦を以て命を濟はんこと可ならんや」と。

大兄、先づ其の妻を殺して分けて五分となせり。小弟仁惻し、哀みて食はず。中兄復た殺したり。弟殊に哽噎したり。兩兄、弟の妻を殺さんと欲す。弟曰はく「彼を殺して己を全ふするは佛仁道に非ず。吾れ爲さざるなり」と。妻を將ゐて山に入り果を採りて自ら供ふ。山に處すること年を歷たり。山中に一[四一]跛人有り。婦と與に私通せり。其の婿を殺さんと謀れり。詭りて曰はく「妾の義勞養に當れり。而して君之を爲さんことを明日翼從せん。願はくは倶に苦を歷んことを」と。曰はく「山は甚だ險阻なり。爾行くこと無れ」と。三たび辭して從はず。遂に便ち倶に行く。婦、山の高く谷の深きを覩、婿を排して之を落せり。水邊に神有り。神、接して安からしむ。婦[四二]、所を得たるを喜んで還りて跛と共に居れり。婿水を尋ねて行いて商人を覩たり。本末自ら陳べたり。商人之を愍む。載せて豐國に至れり。

其の國の王崩じたり。又太子無し。群臣相讓る。適ま立者無し。梵志をして占はしむ。「行路の人相に應ずる者あり。之を立てゝ王と爲せ」と。

梵志菩薩を覩て卽ち曰はく「善い哉。斯れ有道の君なり。兆民天仁の覆と爲すべし」と。群僚黎庶、涙を揮つて善を歎じ、壽を稱せざるは莫し。奉載せられて宮に入れり。授くるに帝位を以てす。卽ち四等を以て民を養ふ。衆邪の術、都べて之を廢したり。授くるに五戒を以てす。十善を宣布す。率土戒を持したり。是に於て天帝其の國を祐護したり。鬼妖奔迸し、毒氣消歇せり。穀菓豐熟し、

【四一】跛。ちんばなり。

【四二】計畫の都合よく運ばれたるを喜べり。

んとするや」と。嬖妾曰はく「王之を存するの至り聊か斯の夢あり、必ず異無きなり」と。

太子は琴樂を以て食を索め命を濟ふ。諸國を展轉して妃の父王の國に至る。王に妙琴あり。呼んで之を聽けり。其の音は[三七]已先王の德を咨嗟して未だ孤兒無親の哀音を出さず。其の妃は音を解したり。哽噎して曰はく「吾が君子窮せんや」と。王曰はく「何をか謂はん」と。妃具さに之を陳べたり。親に辭して曰はく「斯れは自ら妾の命なり。女は其の姓を二つにするは貞に非ざるなり。請ふ至孝の君子に翼從せん」と。二親哀を擧げたり。

妃は太子を將ゐて其の本國に還れり。王琴に妙なるものあると聞けり。[三八]形容憔悴して唯其の聲を識るのみ。王曰はく「汝は是れ吾が子法施なるものならんや」と。太子地に伏して哽噎せり。王后宮人、擧國巨細哀慟せざるは莫かりき。妃本末之を陳べたり。

王曰はく「嗚呼女人は不仁なり。猶し粳飯の毒を糅へしがごとし。佛敎之を遠ざくるも亦宜しからざらんや」と。即ち相國及び嬖妾を收めて棘を以て之を笞す。[三九]煬膠は其の瘡中に[四〇]渧し、燥すれば即ち之を裂く。坑を爲りて生きながら埋めたり。

佛、諸比丘に告げたまはく、太子の宿命嘗て白珠を賣れり。彼の妾は時に富姓の女たり。車に乘りて路を行く。相國時に御者たり。賣珠童を呼んで曰はく「汝の珠を視るに來る」と。珠を持して買はず。婬視して言調ふ。童子恚りて曰はく「吾が珠を還さずして而も婬視を爲す。吾れ汝の目を鑿らん」と。女及び御者倶に曰はく「棘笞膠渧して肉を裂き汝を生埋するも可ならんや」と。

夫れ善惡已に施し、禍福自ら隨ふこと猶し影の形に繫ぐがごとし。惡熟して罪成ること響の聲に應ずるが如し。惡を爲して其の殃無からんことを欲するは猶し種を下して生ぜざらしむるがごとし。菩薩佛の淨戒を受く、寧ろ眼を脫して死すとも淫を犯して生ぜざるなり。

爾の時太子法施なるものは我が身是れなり。相國なるものは調達是れなり。嬖妾なる者は調達の

【三七】已先王。過去の聖王たるの德を讚歎したり。

【三八】顦容憔悴。顦色やつれたる貌。

【三九】煬膠。熱を加へたるにかはのこと。

【四〇】しづくの意にてやけたにかはを瘡の中にたらすの意。燥は乾なり。

王、曰はく「太子は操を履む。[三一]佛志に非ずんば念ぜず。佛教に非ずんば言はず。佛道に非ずんば行はず。八方德を歎ず。諸國如くは莫し。其れ豈非あらんや」と。讒言緻にして數なり以て王の心を惑はす。王曰はく「骨肉相殘する之を亂賊と謂ふ。吾れ爲さゞるなり。拜して[三二]邊王と爲さん。國を去ること八千里なり」と。曰はく「爾は境外を鎭し、天に則して仁を行へ。民命を殘すること無かれ。苟も貪にして黎庶を困しむること無かれ。老を尊ぶこと親の若く、民を愛すること子の若くせよ。愼んで佛戒を修め道を守りて以て死せよ。世には姧僞多し。齒印の效は爾は乃ち信ずればなり」と。

太子、稽首泣涕して曰はく「敢て尊誨を替へず」と。即ち就いて土を鎭す。五戒十德、國民を慈化す。位に處すること一年なりき。遠民慕潤し歸化雲集す。戶を增して萬餘なり。狀を以て上聞す。王德潤ひ遠照して然らしむるなりと歎じたり。

王逮び后妃、喜んで之を歎じたり。妾殊に怨を懷き、相と姧を爲し、太子を除かんことを謀る。王の臥するを伺ふて出づ。蠟を以て印を抑へ、詐りて書を爲りて「爾慢上の罪あり面誅するに忍びず。書到らば疾く[三三]眼瞳子を脫いて使に付して國に還らしめよ」と。使往いて至れり。群臣僉曰はく「斯れ妖亂の使なり。大王よりには非ざるなり」と。

太子曰はく「大王の前齒なり。今は信現すべし。身を愛して親に違ふは之を[三四]大逆と謂ふ」と。即ち群臣と相樂しむこと三日、遍ねく國界に行き、窮に賙み乏を濟ふ。佛影を以て模す。慈心民に訓へて能く眼を脫するものを募れり。[三五]賣芻兒即ち爲に眼を出せり。以て使者を付して之を函にし馳せて本土に還らしむ。相國以て嬖妾に付したり。嬖妾は床前に懸著す。罵りて曰はく「吾が欲に從はず、眼を鑿りぬ、快ならんや」と。

大王、虵蜂の太子の目を鑿したりと夢たり。寤めて即ち哽噎せり。曰はく「吾が子將に[三六]異あら

【三一】佛志。身口意の行法悉く佛教に適ふ。

【三二】邊王。邊境王なり。

【三三】眼瞳子。瞳孔を指す。

【三四】大逆。君父を弑す之を大逆といふ。

【三五】賣芻兒。馬ぐさを賣る人を意味せんか。即ちまぐさを刈る鎌にて眼をえぐりしならん。

【三六】夢見の惡いので太子に何か異變なきかを怪めり。

從者に告げて曰はく「食を除いて食を損つ。髊疵して小苦なり。命、冀ふべし。愚者は[二九]饕餮たり。心に遠慮なし。猶し慳子の刀刃の蜐蜜を貪りて舌を截るの患ひあることを知らざるがごとし。吾れ今より食を裁つ。爾等焉に則れ」と。鸚鵡王は日に瘦せたり。其の籠の目由り勢踊して出づるを得たり。籠上に立ちて曰はく「夫れ貪惡の大なるは無欲善の景なり」と。重ねて曰はく「諸佛、貪を以て獄と爲す。網を以て毒と爲し刃と爲す。爾等、食を損てゝ余の如くすべし。菩薩は自ら斯くす。福、若し凡人と爲らば麁食命を供ふ。弊衣形を蓋ひ、食を以て心を戒しむ。日として存せざるなし。福、帝王とならば輙ち佛智を以てす。國の累を覩、福高弘多にして其の算し難しと爲す。非常牢無く唯苦にして樂なきのみ。夫れ有なれば輙ち滅す。身僞幻となり、保し難きこと猶し卵のごとし。養ひ難きこと狼のごとし。眼ありて之を覩れども寒慄せざるはなし」と。

菩薩は世々戒を以て行と爲し、遂に如來無所著正眞道最正覺と成る。天人師とも爲る。佛、諸比丘に告げたまはく、時の鸚鵡王とは、吾が身是れなり。人王とは調達是れなり。菩薩の志を執る度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

三十、法施太子の本生

昔、菩薩あり。王太子と爲り、名づけて法施と曰ふ。內淸らかに外淨なり。常に履邪の禍を以て自ら其の心を戒しむ。聖を尊び親に孝なり。衆生を慈濟せり。夫子朝覲すれば輙ち相國を須ゆ。進退は禮の如く未だ甞て儀を失はず。

王の[三〇]幸妾、內に邪淫を懷き、出でて太子を援けんとす。太子力爭して免るゝを獲たり。相首を拍ちて曰はく「去れ」と。其の冠を地に隕したり。相首髮無し。內妾之を笑ふ。耻ぢて忿を懷けり。妾王に向ひ泣いて曰はく「妾、微賤なりと雖も、猶是れ王の妻なり。太子は不遜にして妾を欲するあり」と。

【二九】饕餮。食るなり。財を貪るを饕といひ、食を貪るを餮といふ。

【三〇】幸妾。愛妾に同じ。

象、曰はく「吾が痛み忍び難し。疾く牙を取りて去れ。吾が心を亂して惡念をして生ぜしむること無かれ。惡を志念するものは死して[二二]太山餓鬼畜生道の中に入る。夫れ忍を懷き、慈を行じ、惡來りて善往くは菩薩の上行なり。正しく骨をして俎にし、肉をして脯にせしむ。終に斯の行に違せざるなり。斯の行を修する者は死すれば輙ち天に上る。疾く[二三]滅度を得ん」と。

人即ち牙を截れり。象曰はく「道士當に却行すべし。群象をして足跡を尋ねしむること無かれ」と。象は人の去り遠ざかれるに適き、其の痛み忍び難し。地に躃れて大呼し、[二四]奄して忽ち死したり。即ち天上に生じたり。

群象四來せり。咸曰はく「何人ぞや吾が王を殺せし者は」と。行いて索めたれども得ざりき。還りて王を守りて哀號したり。

師牙を以て還れり。王は象牙を覩て心即ち[二五]慟怖したり。夫人は牙を以て手中に著けたり。適之を視んと欲す。雷電霹靂して之を椎す。血を吐いて死して地獄に入れり。

佛、諸の沙門に告げたまはく、爾の時の象王なるものは我が身是れなり。大婦なるものは[二六]求夷是れなり。獵者は調達是れなり。小夫人なるものは[二七]好首是れなり。菩薩の志を執る度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

二十九、[二八]鸚鵡王の本生

昔、菩薩あり。鸚鵡王と爲れり。常に佛教を奉じ、三尊に歸命せり。時當に死すべし。死して十惡を犯さず。慈心教化し六度を首と爲す。爾の時國王好んで鸚鵡を食す。獵士競ふて索む。鸚鵡の群を覩れば網を以て之を收む。盡く其の衆を獲たり。太官に貢ぐ。宰夫焉を收め、肥えれば即ち之を烹て肴と爲す。

鸚鵡王深く惟る。衆生は擾々として獄に赴き、身を喪ふ。三界に迴流するは食に由らざるはなし

[二二] 太山等、所謂三惡道なり。

[二三] 滅度。涅槃(Nirvāṇa)をいふ。

[二四] 氣息閉ぢ塞がる貌。

[二五] 慟怖。なげきをそれる貌。

[二六] 求夷(Gopikā)なり。瞿夷に同じ。悉達太子第一の夫人なり。

[二七] 好首、調達の妻なり。

[二八] 梵に鎟陀或は叔迦(Śuka)なり。能く人言の眞似をなす。鸚鵡に關して諸經散說甚だ多し。

と。

嫡妻に恵めり。嫡妻華を得て、欣び懌んで曰はく「氷寒尤も甚だし。何に緣りてか斯の華あらんや」と。

小妻貪嫉して恚り、而も誓ひて曰はく「會々重毒を以て汝を鴆殺せん[18]」と。[19]氣を結んで殞したり。魂靈感化して四姓の女と爲りぬ。顏華人に絕す。智意流通して博く古今を識れり。仰いで天文を觀る。時の盛衰を明にす。王は茲の若しと聞いて、娉して夫人と爲せり。至りて卽ち治國の政を陳べんに義忠臣と合す。王は悅んで之を敬す。言ふ每に輙ち從ふ。夫人曰はく「吾れ夢に六牙の象を覩たり。心に其の牙を以て[20]珮几と爲さんと欲す。王之を致さずんば吾れ卽ち死せん」と。王、曰はく「妖言すること無かれ。人、聞いて爾を笑はん」と。夫人言はく「相屬心に憂結を生ぜん」と。王は議臣四人に請ふ。自ら己が夢なりと云へり。曰はく「古今に斯の象あらんや」と、一臣對へて曰はく「之れあること無きなり」と。一臣曰はく「王の夢みざるなり」と。一臣曰はく「嘗て之れあることを聞けり。所在彌に遠し」と。一臣曰はく「若し能く之を致さば、帝釋今茲に翔けん」と。

四臣は卽ち四方の射師を召して之に問ふ。南方の師曰はく「吾が亡父常に云へり。『之れあり』と。然れども遠くして致し難し」と。臣上聞して云はく「斯の人之を知れり」と。王卽ち之を現ず。

夫人曰はく「汝は直ちに南行して三千里、山を得て山に入りて行くこと二日許りにして卽ち象の所在に至れるなり。道邊に坑を作り、爾の鬚鬘を除いて沙門の服を著し、坑中に於て之を射よ。其の牙を截り取り、二牙を將ちて來れ」と。

師、命ぜし如く行けり。象の遊びし處に之きて先づ象を射たり。法服を著して鉢を持てり。坑中に於て止住せり。象王は沙門を見る。卽ち頭を低くして言はく「[21]和南道士、將に何事を以て吾が軀命を賊せんとするや」と。曰はく「汝の牙を得んと欲すればなり」と。

【一八】鴆殺。鴆毒もて殺さんずる意味なり。
【一九】鬱結のまゝに死したるなり。
【二〇】珮几。おびもの、おびたま。今日の所謂おびどめならんか。
【二一】和南道士。和尙に同じ。和南は梵語（Vandana）なり。稽首又は敬禮度我と譯す。

と難なり。奥を貫き微を解すること難なり。高行の沙門に値ふこと難なり。清心供養すること難なり。佛に値ふて[一三]決を受くること難なり』と。

吾が宿功著にして今佛の經を覩たり。三寳を奉ずることを獲たり。若し[一四]無道茹醯の酷や、湯火の戻に値はゞ終に正を釋てゝ彼の[一五]妖蠱に從はずんばあらざるなり」と。

王、有司に命じて、命に違する者を廉察して之を市朝に戮せんとす。廉人菩薩の志固くして轉ぜず、三尊を奉事して至意虧かさゞるを見る。即ち之を執りて以て聞す。王曰はく「之を市に戮せよ」と。[一六]陰に人をして尋ねしめ、その云ふことを聽察せしむ。菩薩死に就いて其の子を誡めて曰はく「乾坤始めて興り、人有りて來、衆生世に處し、六情を以て行を亂すこと狂醉よりも甚だし。三尊を覩て清明の化を導くこと尠し。爾幸に法を知れり。愼んで之を釋つること無かれ。夫れ佛法の行を捨てゝ、而も鬼妖の僞を爲す者は國を喪ふこと必せり。吾れ寧ろ身を捨つるとも眞を去らざるなり。王は今悖謬れり。爾、焉に從ふこと無かれ」と。

廉者以て聞す。王は行の眞なるを知り、即ち欣んで之を請ふ。手を執り、殿に昇らしめて曰はく「卿は眞の佛弟子と謂つべき者なり」と。拜して國相と爲し治政を委任せしめたり。

佛の清化を捨つるの儔者は其の賦役に復したり。是に於て國境尙ふて善と爲さゞるはなし。

佛、諸の沙門に告げたまはく、時の國王なるものは彌勒是れなり。清信士なるものは吾が身是れなり。菩薩志を執る度無極なり。持戒を行ずること是の如し。

二十八、象王の本生

昔、菩薩あり。身象王たり。其の心弘遠なり。[一七]佛有り法有り比丘僧有ることを照知せり。常に三たび自ら歸す。每に普慈を以て衆生を拯濟はん。誓願すらく「佛を得たらんに當に一切を度すべし」と。五百象を從へり。時に兩妻あり。象王は水中に於て一蓮華を得たり。厥の色甚だ妙なり。以て

苦酷を意味す。

【一五】あやしきまどはしのわざなり。

【一六】王は裏面にまはつて菩薩の志を試みたり。

【一七】所謂三寶なり三尊なり。

巻の第四

戒度無極章第二（此に十五章あり）

戒度無極とは厥は則ち云何ん。狂愚兇虐[一]にして好んで生命を殘す。貪餘盜竊し、婬妷穢濁に兩舌もて惡罵し、妄言綺語、嫉恚癡心もて親を危くし、聖を戮す。佛を謗り賢を亂し、宗廟[二]の物を取り、兇逆を懷き三尊を毀つ。斯の如き元惡は寧んぞ脯割[三]に就き市朝に葅醢[四]して終に佛三寶を信じて四恩普く濟ふと爲さゞらんや。

二十七、清信士[五]の本生

昔、菩薩あり。清信士たり。處する所の國の其の王は眞を行ず。臣民を勸導して三尊を知らしむ。戒を執り齋を奉ずるものは賦[六]を捐て役を除く。黎庶巨細にして王の賢を倘ふを見る。多くは善を僞りて而も潛かに邪を行ふ。王、佛戒を以て民操を觀察するに、外は善に內は穢れたるものあり。佛の清化に違ひたれば、卽ち權令に勅して曰はく「敢て佛道を奉ずるものあらば罪は棄市に至らん」と。訛善[七]の徒は眞を釋てゝ心を恣にして其の本邪に從はざるはなし。

菩薩は年耆[八]なり。正眞弘影の明を懷きぬ。令を聞いて驚いて曰はく「眞を釋て、邪に從ふて帝王と爲るを獲んや。壽二儀に齊し。富貴外無し。六樂[九]は心に由る。吾れ終に爲さゞるなり。一湌[一〇]の命と雖も、三尊至眞の化を視るを得たり。吾れ之れを欣んで奉ず。俗記籍萬億の卷を懷きて身天宮に處る。天の壽を極めて而も三尊に闇し。佛經を聞かず。吾れ願はざるなり。佛の言を稟けては卽ち戮死の患有りとも吾れ甘心せん。經に云はく、

『衆生自ら三塗[一一]に投じなば、人道を獲ること難なり。中國に處すること難なり。六情[一二]完具すること難なり。有道の國に生ずること難なり。菩薩とゝもに親しむこと難なり。經を覩て之を信ずること

【一】狂愚兇虐。殺生以下の十惡を說いて惡の爲すべからざるを誡しめたり。
【二】宗廟。先祖のたまやのこと。
【三】脯割。ほじしを割くこと。
【四】葅醢。酢につけたる菜としゝひしほのこと。
【五】優婆塞のこと。前掲見よ。
【六】賦はみつぎものなり。卽ち官府より財物を徵收すること。役はぶやくなり。人民を强制して公用に使役すること。
【七】訛善。僞善者はその本來の欲心邪惡なる行爲を恣にしたりと。
【八】年耆。年長けて老人となりしこと。禮記に六十歲をいふとあり。周禮には八十歲をいふとあり。
【九】六樂。六欲に同じ。眼・耳・鼻・舌・身・意の六識を滿足せしむるの樂を指して云へるなるべし。
【一〇】湌は飡に同じ。一杯のちやづけを意味す。
【一一】三塗。地獄、餓鬼、畜生。
【一二】六情。眼情、耳・鼻・舌・身・意これなり。
【一三】記別の授けらるゝこと。
【一四】無道葅醢の酷。三塗の

表慈を以て化す。恭惠高行比丘一人なり。踰えて凡庶に施せり。劫を累ね情を盡すなり。然る所以は比丘擁懷なり。佛經に戒有り、定有り、慧解脱度知見の種有り。斯の五德を以て衆生を慈導し、三界の萬苦の禍に遠からしむればなり。

阿難曰はく「遇はん哉。斯の理家に。面り如來無所著正眞最正覺道法御天人師并に諸の沙門を慈養するを獲、或は溝港・頻來・不還・應眞あり。或は開士あり。大弘慈を建てゝ衆生を將導する者ならんや。斯の福量り無し。其れ海の若し。稱し難し、其れ猶し地のごとし」と。

佛、言はく「善い哉。阿難。眞に云ふ所の如し。佛時遇ひ難し。經法聞き難し。比丘僧供養を得難し。[八九]漚曇華の時に一たび有るが如きのみ。佛說も是の如し」と。比丘歡喜し稽首し承行す。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

【八九】漚曇華。梵語(Udumbara)なり。優曇、烏曇、優曇波羅などゝ音譯あり。靈瑞應などゝ譯す。三千年に一たび現じ、現ずれば金輪王出づといふ。

れなり。狐とは鶖鷺子是れなり。蛇とは目連是れなり。漂人とは調達是れなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

二十六、沙門の本生

昔、菩薩あり、沙門行を爲す。恒に山林に處る。慈心悲愍あり。衆生長く苦みて三界[八六]に輪轉[八七]す。何を以てか之を濟はんやと。心を靖らかにして思惟して道を索めて弘く原ぬ。當に以て衆を拯ふべし。而して衣に虱あり。身痒く心擾る。道志立たず。手探ぐるに之を尋ねて卽ち虱を獲。中心愴然たり。求めて以て之を安んず。正しく獸骨あり。徐ろに以て中に置けり。虱は七日の食を得たり。盡くれば乃ち捨適す。生死に展轉したり。菩薩佛たるを得たり。經緯敎化す。時に天大いに雪ふる行路人を絕てり。國に理家あり。佛幷に數千比丘を請ず。供養すること七日なり。厥の心肅穆[八八]にして、宗室僉然たり。而も雪未だ晞かず。

佛、阿難に告げたまはく、諸の沙門に勅して皆精舍に還らしむ。阿難言はく「主人恭肅として厥の心未だ墮せず。雪盛にして未だ息まず。分衛するに處無し」

世尊曰はく「主人竟訖りて復供惠せざるなり」と。佛、卽ち引邁せり。沙門翼從して精舍に還れり。

明日世尊阿難に告ぐ。「汝は主人に從ひて分衞せよ」と。阿難敎を奉じて行いて主人の門に造る。門人之を覩る。其の所以を問ふこと無し。頃有りて迴還れり。稽首長跪して事の如く啓す。又其の原を尋ねたり。彼の意恒無し。何ぞ其の疾かなる。佛、卽ち爲に具に說くこと上の如し。

又曰はく「阿難吾れ慈心を以て虱の微妙を濟ふ。之に朽骨七日の食を惠みたり。今、供養を獲、世上の獻を盡くす。宿命恩を施せり。恩七日に齊し。故に其の意は止復た前の如からざるのみ。豈況んや慈心にして佛に向ひ沙門の衆に逮べり。持戒淸淨にして無欲高行なり。內己の心を端し、

【八六】三界。欲界(Kāma-dhātu)。色界(Rūpa-adhātu)。無色界(Arūpa-dhātu)のこと。

【八七】輪轉。流轉輪廻に同じ。梵語(Saṁsāra)なり。卽ち一切衆生は善惡の業を作りて三界六道に輪廻することなり。

【八八】肅穆。つゝしむ貌。

つ。內外虛耗たり。之を存するに心悲しむ。轉じて重病と成る。[八一] 四大離れんと欲して節々皆痛む。坐臥人を須ゆ。醫來りて惱を加ふ。[八二] 命將終らんと欲して諸風並興り、筋を截り骨を碎き、孔竅都べて塞がる。息絕え神逝き行じて之く所を尋ぬ。若し夫れ天に昇らば天も亦貧富貴賤あり。延算の壽あり。福盡き罪來る。下りて太山餓鬼畜生に入る。斯れを之れ苦と謂ふなり」と。

王曰はく、「善い哉、佛、苦要を說けり。我が心信ずる哉」と。

理家又曰はく「夫れ有は必らず空なり。猶し兩木相鑽りて火を生ずるがごとし。火還りて木を燒く。火木倶に盡く。二事倶に空なり。往古先王宮殿臣民あり。今は磨滅して之きし所を覩ず。斯れ亦空なり」と。

王曰はく「善い哉。佛、空要を說けり。我が心信ずる哉」と。

理家又曰はく「夫れ身は地水火風なり。强なるを地と爲し、軟たるを水と爲し、熱するを火と爲し、息するを風と爲す。命盡き神去る。四大各離る。能く保全すること無し。故に[八三] 非身と云ふ。

王曰はく「善い哉。佛、非身を說けり。吾が心信ずる哉。身は且保たず。豈況んや國土をや。痛ましい哉、我が先王。無上正眞最正覺非常苦空非身の教を聞かず」と。

理家曰はく「天地は無常なり。誰れか能く國を保つものならんや。胡んぞ藏を空にして貧飢の人に布施せざらんや」と。

王曰はく「善い哉。明師の教快き哉」と。

卽ち諸藏を空にして貧乏に布施したり。[八四] 鰥寡孤兒之をして親となり子と爲らしめたり。民は[八五] 炫煌を服して貧富齊同なり。國を擧げて欣々たり。笑を含みて且行く。天を仰いで歎じて曰はく「菩薩の神化は乃ち玆に至らんや」と。四方德を歎じて遂に太平を致せり。

佛、諸の沙門に告げたまはく、理家とは是れ吾が身なり。國王とは彌勒是れなり。鶖とは阿難是

【八一】四大。地、水、火、風の四大種のことなり。
【八二】命。壽命終らんとする時の苦痛を書きたり。
【八三】非身。又非我ともいふ。所謂無我なり。
【八四】鰥寡孤兒。年老いて妻なきもの、夫なきもの、或は幼にして父母なきものをいふ。
【八五】炫煌。かゞやきて光のあきらかなる貌。

に參治せん」と。菩薩上聞す。之を傳ふ。卽ち愈えたり。王は喜んで所由を問ふ。四人本末自ら陳べたり。王悵然として自ら咎めて曰はく「吾が闇なること甚しき哉」と。卽ち漂人を誅したり。其の國を大赦し、封じて國相と爲せり。手を執りて宮に入り坐して曰はく「賢者は何なる書を說き、何なる道を懷きて二儀の仁を爲し、惠み衆生に逮びしや」と。對へて曰はく「佛の經を說きて佛道を懷きしなり」と。王曰はく「佛に要決ありや」と。曰はく「之れ有り、佛、[七五]四非常を說けり。之に在るものは、衆禍殄ち、景祐昌なり」と。

王曰はく「善い哉、願くは其の實を獲ん」と。曰はく「[七六]乾坤終訖の時、七日竝列し巨海都索す。天地炯然として須彌崩壞す。天人鬼龍、衆生の身命は霍然として燋盡す。前に盛なりし今衰ふ所謂非常なり。明士は無常の念を守る。曰はく「天地は尙然り、官爵國土、焉んぞ久しく存することを得ん。斯の念を得るものは乃ち普慈の志有るなり」と。王曰はく「天地尙然り、豈況んや國土をや。佛、非常を說けり。我が心信ずる哉」と。

理家又曰はく「苦の尤苦なるもの、王宜しく之を知るべきなり」と。王曰はく「願くは明誠を聞かん」と。曰はく「衆生の[七七]識靈は微妙にして知り難し。之を視れども形なし。之を聽けども聲なし。弘きことや天下、高きことや無蓋にして、汪洋として表する無し。輪轉として際無し。然も[七八]六欲に飢渴すること猶し海の衆流を足さざるがごとし。[七九]斯を以て數々太山燒煮に諸毒衆苦を更ふ。或は餓鬼と爲り洋銅口を沃して太山を役作す。或は畜生と爲り、屠割剝裂し死すれば輒ち更に刄す。苦痛量り無し。[八〇]若しは人たるを獲たり。胎に處する十ケ月、生に臨んで急窄すること猶し索もて身を絞るがごとし。地に墮するの痛は猶し高きより隕下するがごとし。風に吹かれて火が己を燒くがごとし、溫湯もて之を洗ふは沸銅にて自ら沃するがごとし。手蕤身を摩するは猶し刄もて自ら剝ぐがごとし。斯の如く諸の痛甚だ苦しく陳べ難し。年長の後、諸根竝熟し、首白くして齒隕

【七五】四非常。四無常に同じ。非常・空・苦・非我なり。

【七六】乾坤終訖。壞劫の時を意味す。

【七七】識靈。魂魄のごとしといふに同じ。

【七八】六欲。一、色欲。二、形貌欲。三、威儀恣態欲。四、語言音聲欲。五、細滑欲。六、人相欲なり。

【七九】五道に於ける苦痛を述べたり。

【八〇】人界に生ずる時の苦痛を畫けり。

ること尠し。恩に背き勢を追ひ、好んで兇逆を爲さん」と。菩薩曰はく「蟲類を爾は濟ふ。人類は吾が賤なり。豈是れ仁ならんや。吾れ忍びざるなり。是に於て之を取れ」と。鼈曰はく「悔いん哉」と。遂に豐土に之けり。

鼈辭して曰はく「恩は畢れり請ふて退かん」と。答へて曰はく「吾れ如來無所著至眞正覺を獲なば必らず當に相度せん」と。鼈曰はく「大いに善し」と。鼈退きたれば蛇・狐各去れり。狐穴を以て居と爲せり。古人の伏藏せる紫磨の名金百斤を得たり。喜んで曰はく「當に以て彼の恩に報ゆべし」と。馳せ還りて曰はく「小蟲は潤を受けて微命を濟はるゝことを獲たり。蟲は穴居の物なり。穴を求めて自ら安んず。金百斤を獲たり。斯の穴は塚に非ず家に非ず劫に非ず盜に非ず。吾が精誠の致す所なり。願くは以て賢に貢がん」と。菩薩は深く惟るに「取らずして徒らに捐つ。貧民を益する無し。取りて以て布施す。衆生濟はるゝことを獲なば、亦善ならずや」と。尋いで之を取れり。漂人焉を覩て曰はく「吾れに半ばを分てよ」と。菩薩卽ち十斤を以て之を惠みたり。漂人曰はく「爾は塚を掘り金を劫めたり。罪福應に奈何すべき。半も之を分たざれば吾れ必らず有司に告げん」と。答へて曰はく「貧民の困乏あり。吾れ等しく之を施さんと欲す。爾之を專らに欲するは亦偏せざらんや」と。漂人遂に有司に告げたり。菩薩拘せらる。告訴する所なし。唯三尊に歸命して、過を悔いて自ら責む、衆生早く[七四]八難を離れ怨結あること莫く吾れの今の如くならんと慈願するのみなり。蛇と狐會して曰はく「斯の事を奈何せん」と。蛇曰はく「吾れ將に之を濟はんとす」と。

遂に良藥を銜み關を開いて獄に入りぬ。菩薩の狀を見るに、顏色損ずるあり。愴として心悲めり。菩薩に謂つて言はく「藥を以て自ら隨へり、吾れ將に太子を齚まんとす。其の毒尤も甚だし。能く濟ふ者無し。賢者よ藥を以て自聞せよ。傳ふれば則ち愈えん」と。菩薩默然たり。蛇の云ふ所の如し。太子の命將に殞ちんとす。王令して曰はく「能く玆を濟ふもの有らば之を相國に封じて吾れ與

【七四】八難。見佛聞法して道業を修するに障礙ある八ヶ所の難をいふ。地獄、餓鬼、畜生、鬱單越、長壽天、聾盲瘖瘂、世智辨想、佛前佛後なり。

二十五、理家の本生

昔、菩薩あり。大理家と爲り。財を積むこと巨億なり。常に三尊を奉じ、衆生を慈向し市を觀て鼈を覩る。心に之を悼む。價を貴賤に問ふ。鼈の主、菩薩普慈の德ありて衆生を濟はんことを尙ひ、財富數へ難く貴賤違ふこと無きを覩て答へて曰はく「百萬、能く取るものは善し、不ずんば吾れ當に之を烹るべし」と。菩薩答へて曰はく「大いに善し」と。卽ち雇ふて直の如し。鼈を持ちて家に歸れり。澡ふて其の傷を護る。水に臨んで之を放てり。其の遊去するを覩て、悲喜して曰はく「太山餓鬼衆生の類、世主の牢獄は早く難を免るゝを獲ん。身安んじて命全し。爾の今の如きなり」と。十方に稽首し、叉手して願ふて曰はく「衆生は[七三]擾々たり。其の苦無量なり。吾れ當に天となり地となり、旱となり潤となり、漂となり筏となり、飢食渴漿・寒衣熱凉・病となり醫となり、冥となり光と作るべし」と。十方の諸佛皆其の誓を善しとし、讃じて曰はく「善い哉。必らず爾の志を獲ん」と。

鼈後に夜來りて其の門を齕る。門に聲あるを怪しみ、使出でて鼈を覩る。還りて事の如く云へり。菩薩之を視る。鼈は人に語りて曰はく「吾れ重潤を受けて身體全きを得たり。以て潤に答ふる無し。蟲水居物水の盈虛を知る。洪水將に至らば必らず巨害を爲さん。願くは速かに舟を嚴れ時に臨んで相迎へん」と。答へて曰はく「大いに善し」と。明晨門に詣り事の如く王に啓す。王は菩薩の宿し善名あるを以て其の言を信用したり。下に遷りて高きに處る。時至り鼈來りて曰はく「洪水至る速かに下載すべし。吾れ之く所を尋ねなば。患無きを得べし」と。船其の後を尋ねたり。蛇有りて船に趣く。菩薩曰はく「之を取れ」と。鼈云はく「大いに善し」と。又漂狐を覩たり。曰はく「之を取れ」と。鼈亦云はく「善し」と。又漂人を覩る。頰を搏ちて天を呼ぶ。哀んで吾が命を濟はんことを。曰はく「之を取れ」と。鼈曰はく「愼んで取る無れ。凡人の心僞なり。終まで信あ

【七三】擾々。騷がしき貌。

二十四、梵志の本生

昔、菩薩あり、時に梵志となりぬ。經學明達す、國人焉を師とせり。弟子五百あり。皆儒德あり。布施を體好すること猶し自ら身を護るがごとし。時に世に佛有り。嗟[69]如來無所著正眞尊最正覺と號け、三界を將導し、神本無に還る。菩薩佛を覩る、欣然として自ら歸せり。佛及び僧を請じて七日家に留らしむ。禮を以て供養す。梵志と弟子と各々主る所を諍へり。一人の年稚あり。師之をして行かしめ還りて事の作すことを請ふ。師曰はく「事ありて作なきものは爾之を掃せよ」と。童子對へて曰はく「唯燈して主る者なきなり」と。師曰はく「善い哉。弟子よ。瓨を以て麻油膏を盛り、淨めて自ら洗浴し。白氎をもて頭を纏め、自らの手もて之を然やせ」と。天人龍鬼は其の猛力を覩て手を拊して驚愕せざるは無し。而して世未曾有なりと歎ずらく「斯れ必らず佛と爲らん」と。佛、之を嘉して、明かに夜を徹すれども而も頭は損せざらしむ。心定んで經にあり霍然[70]として想無し。七日玆の若く都て懈惓の念無し。佛則ち決を授くらく「却りて無數劫[71]にして汝當に佛となるべし、號して錠光と曰はん」と。項中肩上各々光明あり。衆生に敎授し拯濟して度を獲たり。其れ無量と爲す。天人鬼龍は佛となるべしと聞き嘉豫[72]稽首して拜賀せざるはなし。梵志念じて曰はく「彼れ其の佛を得たり、吾れも必らず得ん。須らく當に決を受くべけん」と。而して佛去りぬ。前んで稽首して曰はく「今微供を設けて誠に吾れ心を盡さん。願くは吾れに決を授けたまはんことを」と。梵志佛を得べしと聞き、喜んで身有るを忘れたり。斯れより後は遂に大布施したり。飢食寒衣病醫藥を給したり。蜎飛・蚑行・蠕動の類は其の所食に從つて時を以て之を濟へり。八方諸國稱して仁父と爲すなり。

佛、舍利弗に告げたまはく、童子とは錠光佛是れなり。梵志とは吾が身是れなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。」

【六九】嗟といふ佛のこと。

【七〇】霍然。盛なる貌にいふ。

【七一】無數劫。數限りなき時間をいふ。

【七二】嘉豫。喜悦の貌。

產して百男となる。生れながらにして上聖の智あり。啓せずして而も自ら明なり。顏景世に跨がり、相好は希有なり。力幹勢援す。人の百倍を兼ねたり。言音の響は師子の吼の若きあり。王は卽ち白象百頭に七寶の鞍勒を具し以て聖嗣に供して隣國を征せしむ。四隣降伏して咸臣妾と稱せり。又所生の國を伐ち、國人巨細悚々せざるは靡し。王曰はく「孰れか能く斯の敵を卻くる者あらんや」と。夫人曰はく「大王懼るゝこと無かれ。敵の由りて城を攻むる所の何方なるかを視よ。之に臨んで觀を興し、王の爲に之を降さん」と。王卽ち敵の由る所を視て觀を立てたり。母觀に登りて聲を揚げて曰はく「夫れ逆の大いなること其の三あり。群邪に遠らずんば二世の咎を招ぐ斯れ一なり。生れて親を識らずして孝行に逆ふ斯れ二なり。勢を恃み親を殺して三尊に毒向す斯れ三なり。斯の三逆を懷きなば其の惡無蓋なり。爾等口を張りなば信今に現はれん」と。母は其の乳を捉へ、天は重射せしめて百子の口に遍ねからしむ。精誠の感、乳を飲んで情哀なり。僉然として俱に曰はく「斯れは則ち吾が親なり」と。泣涕して頸を交ふ。叉手して步進せり。叩頭して過を悔い、親嗣始めて會したり。哀慟せざるはなし。二國和睦す。情は伯叔に過ぎたり。異方欣然として善を稱せざるはなし。諸子世の無常にして幻の如くなるを覩て親を辭して道を學ぶ。世の穢垢を遠ざけたり。九十九子皆緣一覺を得たり。一子は國を理め、父王崩じて王と爲りぬ。衆罪を大赦し、牢獄を壞し、池塞を裂き、奴使を免じたり。孝悌を慰め、孤獨を養ひ、珍藏を開けり。大布施して民の願に隨つて給したり。十善を以て國法と爲し、人々帶誦す。家には孝子あり。塔寺を興立して沙門を供養したり。經を誦し道を論じて口に四惡無し。諸毒歇盡したり。壽命益長く、天帝養護して猶し親が子を育つがごとし。

佛、諸の沙門に告げたまはく、留りて王となりし者は吾が身是れなり。父王とは今の白淨王是れなり。母とは舍妙是れなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

【六八】觀。物見櫓のこと。

薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

二十三、國王の本生

昔、獨母あり。理家の爲に賃す。田園を守視す。主人徨あり。餉食時を過ぐ。時至り欲食の沙門の乞に從はん。心に斯の人を存す。欲を絕ち、邪を棄てゝ厥の行は淸眞なり。四海の餓人を濟ふより少しく淨戒の眞賢者に惠むに如かず。所食の分を以て盡く鉢の中に置く。蓮華一枚上に著して貢ぐ。道人神足を現じて光明を放てり。母喜歎して曰はく「眞に所謂神聖なるものならんや。願くは我後に百子を生みて玆の如けん」と。母終に神遷して「應に梵志の嗣たるべし」と。其の靈は梵志の小便の處に集まれり。鹿小便を[六一]䑛めて卽ち之を感じて生る。時に滿ちて女を生めり。梵志焉を育てり。年有り十餘なり。光儀庠歩なり。居を守り火を護れり。女は鹿と戲れり。覺えず火滅す。父還りて之を恚る。行いて火を索めしむ。女は[六二]人聚に至る。[六三]一蹻歩の處に一蓮華生ず。火主曰はく「爾、吾が居を遶ること三匝せば火を以て爾に與へん」と。女卽ち命に順ふ。華は陸地に生じ、屋を圍むこと三重なり。行く者足を住めて[六四]雅奇せざるは靡かりき。斯れ須らく宣聲して其の國王に聞くべし。王は工相に命じて其の貴賤を相したり。師曰はく「必らず聖嗣あり祚を傳へて窮り無からん」と。王は賢臣に命じて娉し迎禮備れり。容華[六五]奕々たり。宮人如く莫し。懷妊の時滿ちて卵百枚を生じたれば、[六六]后妃逮び妾は焉を嫉まざるはなく、豫め芭蕉に刻して鬼形像と爲せり。產に臨んで髮を以て其の面を被覆ひ、惡露芭蕉を塗りて之を以て王に示したり。衆妖明を弊し王惑信したり。群邪は壷を以て卵を盛り、密に其の口を覆ひて江流に投じたり。天帝釋下りて印を以て口を封じ、諸天翼衞し、流に順じて停止したり。猶し柱の地に植ゑたるがごとし。下流に國あり。其の王は臺に於て水中に壷あり流れ下るに煒輝光耀して[六七]乾靈有るに似たるを覩て之を取りて焉を觀たり。帝の印文を覩て發して百卵を得たり。百婦人をして懷に育て溫煖ならしむ。時滿ちて體成ず。

【六一】䑛は舐なり。舓なり。
【六二】人聚。村里に同じ。
【六三】一蹻歩。一歩一歩歩むまにまに一蓮華を生じたり。
【六四】雅奇。不思議とすること。
【六五】奕々。光りかゞやいて美はしい貌。
【六六】后妃。皇后初め宮女達嫉妬の餘り惡計を企つれども帝釋天の爲に救はれたるを示す。
【六七】乾靈。陽の精氣なるものなり。

兩を以て子に給すれば「[五七]本とせよ」と。對へて曰はく「敬んで諾す。敢て明誨に違せず」と。卽ち以て[五八]賈に行く。性邪に行變す。好んで鬼妖を事とし、婬蕩酒樂して財盡きて復た窮す。斯の如くして五たび行き、其の財を[五九]澌盡し窮還して之を守れり。

時に理家の門外の糞上に死鼠あり。理家之を示して曰はく「夫れ聰明の善士なるものは彼の死鼠を以て生を治め居を成ずべし。金千兩ありて而も窮困せんや。今復た金千兩を以て汝に給せん」と。時に乞兒あり、遙に斯の誨を聞いて愴然として感ず。進んで猶ほ乞食す。還りて鼠を取りて去れり。彼の妙敎に循つて具に諸味を乞ふ。調和して之を炙る。賣りて兩錢を得たり。轉じて以て菜を販す。百餘を致有せり。微を以て著を致す。遂に富姓と成れり。閑居して憶ふて曰はく「吾れ本乞兒なり。緣りて斯の賄を致さんや」と。寤めて曰はく「賢なる理家彼の兒頑に訓へたるに由る。吾れ斯の寶を致せり。恩を受けて報いず。之れ明に背くと謂ふ」と。一銀案を作り、又金鼠となし、衆名珍を以て其の腹內に滿し、案上に羅著したり。又衆寶を以て其の邊に瓔珞せり。具に衆甘を以て彼の理家に禮して其の所以を陳べて「今天潤に答ふるなり」と。理家曰はく「賢なる哉、丈夫よ。敎訓と爲すべし」と。卽ち女を以て之に妻はす。居處衆諸都べて以て焉に付せり。曰はく「汝、吾が爲に當に佛の三寶を奉じ四等心を以て衆生を救濟すべし」と。對へて曰はく「必らず佛敎を修めん」と。後に理家の嗣となり一國孝を稱せり。

佛、諸の沙門に告げたまはく、理家とは吾が身是れなり。彼の蕩子とは調達是れなり。鼠を以て富を致せしものは[六〇]槃特比丘是れなり。調達は吾が六億品經を懷き、言は順に行は逆なり。死して太山地獄に入れり。槃特比丘は吾が一句を懷きて乃ち度世を致せり。夫れ言有りて行無し。猶し膏明を以て自ら賊するが如し。斯れ小人の智なり。言行相扶く。明なること猶し日月のごとし。衆生を含懷し、萬物を成濟するは斯れ大人の明なり。行は是れ地なり。萬物の由りて生ずる所なり。善

【五七】本。資本として家產を挽回せしめんとす。
【五八】賈。商賣のこと。
【五九】澌盡。澌も亦盡なり。
【六〇】槃特比丘。羅漢の名。釋尊の弟子 Panthaka なり。半他迦、槃陀伽等の音譯あり。路邊生と譯す。

天下は德を歎じたり。王は媿して相と爲さんとす、道に志して仕へず、山澤に處して數十餘載、仁は衆生に逮る。禽獸附恃し、時に四獸あり。狐・獺・猴・兎なり。斯の四獸曰はく「道士を供養し、心を靖かにして經を聽くこと積年の久しくあれども山菓都べて盡きぬ。道士徙りて果盛なる所を䛕ねんと欲す」と。四獸憂へて曰はく「一國榮華の士ありと雖も猶し濁水海に滿つるがごとし。甘露の斗升に如かざるなり、道士去らば聖典を聞かざらん。吾れ爲に衰へんや。各所宜に隨つて飮食を求索して以て道士に供せよ。請ふ此の山に留りて庶くは大法を聞かんことを」と。僉然として曰く「可し」と。獼猴は果を索む。狐は化して人と爲り一嚢の麨を得たり。獺は大魚を得たり。各曰はく「一月の粮を供すべし」と。兎深く自ら惟るに、「吾れ當に何を以てか道士に供ふべきや」曰はく「夫れ生れて死あり。身は[五四]朽器と爲す。猶し當に棄捐すべきがごとし。凡夫の萬を食むも道士の一に如かざるなり。卽ち行いて樵を取り之を然して炭と爲さん」と。道士に向つて曰はく「吾が身小なりと雖も一日の粮を供ふべし」と。言畢りて卽ち自ら火に投じたり。火爲に然えず。道士之を覩て其の斯の若きを感ず。諸佛德を歎じたり。天神は慈育し、道士は遂に留る。日に妙經を說く。四獸論を稟けたり。

佛、諸の沙門に告げたまはく、梵志とは[五五]錠光佛是れなり。兎とは吾が身是れなり。獼猴とは鶖鷺子是れなり。狐とは阿難是れなり。獺とは目連是れなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

二十二、理家の本生

昔、菩薩あり、大理家と爲り、寶を積みて國に齊し。常に好んで貧を濟ふ。惠み衆生に逮る。一切の歸を受くる、猶し海の流れを含むがごとし。時に[五六]友子あり、洪湯の行を以てしたり、家賄消盡したり。理家焉を愍しむ。之を敎へて曰はく「生を治むるに道を以てす。福利盡くる無し。金千

【五四】朽器。身は四大所造のものであり時いたれば破壞するを以て朽器に譬へり。

【五五】錠光佛。前に揭げたり。(Dipankara)なり。卷一脚註〔八一〕參照せよ。

【五六】友子。友人に同じ。

とを得たり。孔雀を害するの心あること無し。雀具に之を知れり。王に向つて陳して曰はく「王は生潤の恩を受けたり、吾れ報いて一國の命を濟へり。報ひ畢りたれば退かんことを乞ふ」と。王曰はく「可し」と。雀卽ち翔飛して樹に昇り重ねて曰はく「天下に三癡あり」と。王曰はく「何をか三と謂ふ」と。一には吾れ癡なり。二には獵士癡なり。三には大王癡なり」と王曰はく「願くは之を釋かんことを」と。雀曰はく「諸佛の重戒は色を以て火と爲す。身を燒きて命を危くする由なり。吾れ五百の供養の妻を捨てゝ、而も青雀を貪れり。食を索めて之に供す。僕使の如きあり。獵網の得られし所と爲りて殆んど身命を危くせり。斯れ吾が癡なり。獵士癡とは　吾れ至誠の言も一山の金を捨てゝ無窮の寶を棄つ。夫人邪僞の欺きを信じ、季女の妻を望みて世の狂愚を覩たる皆斯の類なり。佛の至誠の戒を捐て、鬼魅の欺きを信じ、酒樂婬亂して或は破門の禍を致し、或は死して太山に入り其の苦無數なり。還りて人の爲と思ひ、猶し無羽の鳥は昇天に飛ばんと欲するがごとし。豈難からざらんや。婬歸の妖は彼の[五二]魅魍に喩ふ。國を亡ぼし身を危くして之に由らざるはなし。而も愚夫之を尊ぶ。萬言一誠無きなり。而も射師は之を信じたり。斯れを獵者の愚と謂ふ。王は天醫を得て一國の疾を除く。諸毒都滅す。顏は盛華の如し。巨細欣頼したれば王之を放てり。斯れを王の愚と謂ふ」と。

佛、舍利弗に告げたまはく、孔雀王は是れより後は八方に周旋す。輙ち神藥を以て慈心布施せり。衆生の疾を愈したり。孔雀王とは吾が身是れなり。國王とは舍利弗是れなり。獵士とは調達是れなり。夫人とは調達の妻是れなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

二十、兕王の本生

昔、梵志あり。年百二十なり。貞を執りて娶らず。[五二]婬泆窈盡なり。山澤に靖かに處して世榮を樂はず、茅草を以て廬となし、[五三]蓬蒿を席と爲し、泉水山果、趣かに以て命を支ふ。志弘く行高し。

【五二】魅魍。厲鬼に同じ。えやみのかみなり。他の宋・元・明の三藏本は魑魅とあり。然らばすだまのことならん。

【五二】婬泆窈盡。みだりがましき心が全くなくなりし貌。

【五三】蓬蒿。よもぎのこと。

まへ」と。願卽ち心に從ふ。佛、諸比丘に告げたまはく鷂母とは吾が身これなり。三子とは舍利弗・目連・阿難是れなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。[四四]（此の章別本には維藍章の後に在り）

二十、孔雀王の本生

昔、菩薩あり、[四五]孔雀王となりぬ。妻を從ふ五百、其の[四六]舊匹を委て、青雀の妻を得んと欲す。青雀は唯[四七]甘露の好菓を食するのみ。孔雀妻の爲に日〻行きて之を取れり。其の國王の夫人疾あり。夢に孔雀の其の肉は藥と爲るべしといふと覩て、寤めて以て啓聞す。王は獵士に命ずらく「疾く行きて之を索めよ」と。夫人曰はく「誰れか能く之を得なば、娉するに季女を以てし、金百斤を賜はん」と。國の獵士分布して行きて索めんとす。孔雀王は一青雀を從へて常に食處に在るを覩て卽ち蜜麨を以て每に處樹に塗れり。孔雀輙ち取りて以て其の妻に供したり。射師麨を以て身に塗り[四八]尸踞せり。孔雀麨を取れり、人應じて焉を獲れり。孔雀曰はく「子の身を勤むるは必らず利の爲ならん。吾れ子に金山を示さんに無盡の寶となるべし。子吾が命を原せよ」と。人曰はく「大王は吾れに金百斤を賜へり。妻はすに季女を以てす。豈汝の言を信ぜんや」と。卽ち以て王に獻じたり。

孔雀曰はく「大王仁を懷き、潤周ねからざるなし。願くは微言を納れんことを、乞ふ少水を得んと。吾れ慈を以て呪す。之を服さば疾卽ち愈えん。若し其の効無くんば罪を受くるも晚らず」と。王は其の意に從ふ。夫人之を服したり。衆疾皆愈えたり。[四九]華色爗曄、宮人皆然り。國を擧げて王の弘慈は孔雀の命を全うし、一國の壽を延ぶることを得たりと歎じたり。雀曰はく「願はくは身を彼の大湖に投じて幷に其の水を呪することを得んことを。率土黎民衆疾愈ゆべし。若し疑あらば望まん。願はくは杖を以て吾が足を捶たんことを」と。王曰はく「可し」と。雀卽ち之を呪したり。國人水を飮む。聾聽き盲視る、[五〇]瘖は語り躄は申ぶ。衆疾皆然り。夫人疾除かれ、國人幷に病無きこ

【四四】宋・元・明の三藏本には此の夾註なし。

【四五】孔雀王。梵語・摩由羅(Mayūra)なり。

【四六】舊匹。舊妻に同じ。

【四七】甘露。梵語(Amṛta)阿密哩多。譯は甘露なり。佛敎の解釋に從へば甘露は是れ諸天不死の藥なり。食するものは命長く身安し。力は大に體は光やくといふ。

【四八】尸踞。うづくまりてをる貌。

【四九】華色爗曄。顏色立派にうるはしく輝やきわたる貌。

【五〇】瘖。病によりて言語を發すること能はざることおうし。おしなり。躄はこしぬけて立ち能はざるものなり。

喩して曰はく「世を觀るに皆死す。孰れか之を免るゝ有らんや。路を尋ねて佛を念じ、仁敎慈心にして彼の人王に向ひて愼んで恨む無れ」と。日日茲の如し。

中に行に應ずる者あり。而も身重胎なり。曰はく「死する敢て避けず。乞ふ須らく娩娠すべきことを」と。更に其の次を取りて以て之に代らんと欲す。其次頓首して泣涕して曰はく「必らず當に死に就くべし。倘一日一夜の生有らん。斯の須の命あらば、時至るも恨みざらん」と。鹿王其の生命を枉ぐるに忍びずして明日衆を遁したり。身ら太官に詣りぬ。[四二]厨人之を識れり。即ち以て上聞す。王は其の故を問ふ。辭答上の如し。王愴然として之が爲に涙を流して曰はく「豈畜獸天地の仁を懷きて身を殺して衆を濟ひ、古人弘慈の行を履むことあらんや。吾れ人君と爲り、日々衆生の命を殺し、己の體を肥澤す。吾れ兇虐を好み、豺狼の行を倘はんや。獸にして斯の仁を爲し奉天の德あり」と。王は鹿を去らしめて其の本居に還さしむ。一國界に勅して若し鹿を犯す者有らば人と同じく罸せんと。斯れより後王及群寮率化、黎民仁に遵ふて殺さず。潤ひ草木に及び、國遂に太平なりき。菩薩は世々命を危くして物を濟ひ、功成り德隆んなり。遂に尊雄となり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、時に鹿王とは是れ吾が身なり。國王とは舍利弗是れなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

十九、鵠鳥の本生

昔、菩薩あり身[四三]鵠鳥となり。子を生むに三有り。時に國大いに旱す。以て之を食するなし。腋下の肉を裂きて以て其の命を濟はんとす。三子疑つて曰はく「斯の肉の氣味は母身の氣と相似たり異り無けん。吾が母身肉を以て吾等を飡はす無からんや」と。三子愴然として悲傷の情あり。又曰はく「寧ろ吾が命を殞すも母體を損せざるなり」と。是に於て口を閉ぢて食はず。母食はざるを觀て更に焉を求めたり。天神歎じて曰はく「母の慈惠喩へ難し。子の孝は希有なり。諸天之を祐けた

【四二】厨人。料理人なり。

【四三】鵠鳥。辭典に依れば一種の水鳥にして白鳥の如しといふ。大いなる鳥なるがごとし。

[三七]佛に歸し、法に歸し比丘僧に歸するなり。[三八]仁を盡して殺さず。清を守りて盜まず。貞を執りて他の妻を犯さず。信を奉じて欺かず。孝順醉はず。五戒を持するに月六齋なれば其の福巍々たり。維藍が萬種の名物を布施し及び賢聖に飯するに勝る。甚だ算し難しと爲す。戒を持するよりは等心もて衆生を慈育するに如かず。其の福無盡なり。茱醼草席たりと雖も三自歸を執り、四等心を懷き、五戒を具持して山海秤量すべし。斯の福籌算し難きなり。

佛、四姓に告げたまはく、維藍者を知らんと欲せば我が身是れなり。四姓經を聞いて心大いに歡喜し、禮を作して去りき。

十八、鹿王の本生

昔、菩薩あり、身鹿の王となれり。厥の體高大にして身毛五色なり。蹄角奇雅なり。衆鹿伏從して數千群をなせり。國王出でて獵す。群鹿分散せり。巖に投じて坑に墮し、樹を遶かし棘を貫く。摧破死傷殺さるゝもの少なからず。鹿王之を覩て[三九]哽噎して曰はく「吾れ衆の長たり。宜しく當に明慮して地を擇びて遊ぶべし。苟くも美草の爲に斯に翔せり。群小を[四〇]凋殘したるは罪我れに在るなり。徑いて自ら國に入らん」と。國人之を覩て、僉曰はく「吾が王に至仁の德あり。神鹿來翔したり。以て國の瑞となす。敢て之を干する莫れ」と。乃ち殿前に到る。跪いて云ひて曰はく「小畜は生を貪る。國界に寄命して卒に獵者に逢へり。蟲類奔迸し[四一]或は生相失ふ。或は死して狼籍なり。天仁物を愛して實に哀むべきとなす。願くは自ら相選んで日々太官に供せん。乞ふ其の數を知らんとす。敢て王を欺かず」と。王甚だ奇として曰はく「太官の用ふる所日に一を過ぎず。汝等の傷死甚だ多きを知らざりき。若し實に云ひし如くんば吾れ誓ひて獵せざらん」と。鹿王退いて還れり。悉く群鹿に命ずらく、具に斯の意を以て、其の禍福を示したれば群鹿伏聽したり。自ら相差次して「應に先行すべき者は每に當に死に就くべし」と。過ぎて其の王を辭せり。王爲に泣涕じて之を誨

功勞又は勤息と譯す。
【三二】溝港。須陀洹のこと。本經註卷一〔三九〕參照。
【三三】頻來。斯陀含のこと。右脚註〔四〇〕參照。
【三四】不還。阿那含のこと。同上〔四一〕參照。
【三五】應眞。阿羅漢のこと。同上〔四二〕參照。
【三六】辟支佛。緣覺は獨覺に同じ。同上〔四三〕參照せよ。
【三七】所謂。三寶に歸依するなり。又は佛・法・僧を三尊ともいふ、本經に屢見たり。
【三八】不殺生。以下の所謂五戒なり。
【三九】哽噎。むせびなく貌なり。
【四〇】凋殘。しぼれそこなふ貌。
【四一】生きながらも住處相知らざること。

十七、維藍梵志の本生

昔、梵志あり。名けて維藍と曰ふ。榮尊にして位高し。飛行皇帝と爲りぬ。財は籌算し難し。布施を體好して[一九]名女上色にして服飾世に光けるを以て人に施與す。金鉢に銀粟を盛り、銀鉢に金粟を盛る。[二〇]操甕盥槃四寶交錯す。金銀[二一]食鼎の中に百味あり。[二二]犉水名牛皆黃金を以て衣を韜む。其の角一牛なるものは日に四升の湩を出して皆[二三]犢子を從へり。寶服を織成するに[二四]明珠を綻綴し、[二五]床榻幃帳寶絡は目を光かし、名象良馬の金銀の[二六]鞍勒は絡するに衆寶を以てす。諸車華蓋、虎皮を以て座となし、彫文刻鏤好んで有せざるはなし。名女より以下寶車に至るまで事事各々千八十四枚あり。以て人に施與す。維藍の慈惠八方上下なり。天龍善神助喜せざるはなし。

維藍惠みて以て凡庶を濟ひ、其の壽命を畢るまで日に疲懈なきが如きよりは一日一の[二七]清信具戒の女に飯するに如かず。其の福は彼に倍して籌算すべからず。又前の施を爲し幷に清信女の百よりは[二八]清信具戒の男の一飯に如かず。具戒の男の百よりは[二九]具戒女除饉の一飯に如かず。女除饉の百よりは[三〇]高行沙彌の一人に飯するに如かず。沙彌の百よりは[三一]沙門一人の戒行を具するものにして心に穢濁なく内外清潔なるに如かざるなり。

凡人は猶し瓦石のごとし。具戒高行なるものは明月の若し。瓦石は四天下に滿つ。猶し眞珠の一に如かざること又維藍が布施の多きがごとし。

具戒衆多の施に逮らんよりは[三二]溝港の一に飯するに如かず。溝港の百よりは[三三]頻來の一に如かず。頻來の百よりは[三四]不還の一に如かず。不還の百よりは[三五]應眞の一人に飯するに如かざるなり。

又維藍が前に施し及び諸の賢聖に飯するが如きよりは其の親に孝事するに如かざるなり。孝とは其の心を盡して外私無きなり。百世親に孝するよりも一辟支佛に飯するに如かず。[三六]辟支佛の百よりは一佛に飯するに如かず。佛の百よりは一刹を立て三たび自ら歸するを守るに如かず。

【一九】名女上色。有名なる婦人の容色が勝れたるに衣服を以て着飾るなり。

【二〇】操甕盥槃。風呂かめの如きものと手洗たらひの如きもの。

【二一】食鼎。煮炊きする器具類を指す。

【二二】犉水。牛の一種とあり。

【二三】犢子。小うしのこと。

【二四】明珠。眞珠や寶珠をちりばめて飾ること。

【二五】床榻。ゆかやこしかけ。とばりなど。

【二六】くら鞍勒。やくつわなり。

【二七】清信具戒の女。(Upāsikā)のこと。優婆夷なり。淸信女、近善女等と譯す。三寶に奉仕する義。總じて五戒を受けたる女子の稱にして四衆又は七衆の一なり。在家なり。

【二八】淸信具戒の男。(Upāsaka)のこと。優婆塞なり。淸信士と譯す。前項に同じくして男子の稱なり。

【二九】具戒女除饉。(Śrāmaṇerikā)のこと。これ女子の出家して十戒を受けしものの通稱なり。涅槃の圓寂を求欲するなり。

【三〇】高行沙彌。(Śrāmaṇera)のこと。所謂沙彌なり。所謂男子の十戒を受けしものなり。息慈、息惡、行慈などゝ譯す。

【三一】沙門。(Śramaṇa)なり。

衆智の敬ふ所なり。衣食身口に供らずと雖も、聖衆を奉養し、家の所有の菜糜草席に隨ふ。一日を忽にせず。諸の沙門曰はく「四姓貧困なり。常に飢色あり。吾等は彼の常食を受くべからず。經說の沙門と一心に眞を守れり。戒具はり行高し。志天金の如し。財色に珍ならず、唯經のみ是れ寶なり。六飢を絕滅するが故に誓つて[八]除饉せり。何ぞ[九]分衞を耻ぢて而も行かざらんや」と。共に佛所に詣りて本末之を陳べたり。世尊默然たり。

後日四姓身精舍に詣り、稽首し畢りて一面に坐したり。佛、諸の沙門の前に啓せし所の事を念じ、四姓に問ふて曰はく「寧日慈施して比丘を供養するや不や」と。對へて曰はく「唯然り。門を擧げて日々供へども、但恨むらくは貧に居る。[一〇]菜糜草席、聖賢を枉屈し以て默々と爲す」と。衆祐曰はく「布施の行は惟[一一]四意に在るのみ。慈心彼れに向ふ。悲心追愍す。彼れ度を成ずるを喜びて衆生を護濟す。施微薄なりと雖も、其の後生ぜし所、天上人中の二道を常と爲す。所願は自然なり。[一二]眼色・耳聽・鼻香・口味・身上衣を服す。心皆欣澤す。乏無を懼れざるなり。若し施姦薄なれば、心又悅ばず。後其の福を得たり。福中の薄なる官位七寶は得ても榮とするに足らず。處薄中に在り。心又慳儉にして敢て衣食せず。[一三]惴々恰々として未だ嘗て歡喜せず。腹飢え身寒うして乞人に似たるあり。[一四]徒生徒死して善く以て自ら祐くるなし。若し施して以て好心に懇誠ならず。[一五]憍傲にして自ら恃み、身は[一六]供恪せず。華名を綺求して遠く己を揚げんと欲す。後に少財あり、世人空稱すらく以て巨億と爲す。內に劫奪を懼れ、衣常に[一七]蕤薄に食未だ嘗て甘しとせず。亦空生空死を爲せり。比丘未だ嘗て其の門を履まず。三尊を遠離して恒に惡道に近けり。惠むに好物を以てし、四等敬奉し、手にて自ら斟酌し、意三尊に存す。誓ひて衆生をして佛に逢ひて天に昇り苦毒を消滅せしむ。後世に生ずる所の願を得ざるものなく、佛に値ふて天に生じて必らず志願の如からん」と。[一八](此の章は別本に薩和檀王經の後に在り)

【八】除饉。比丘に同じ乞匃に同じ。衆生福薄く因に在りて法の自資なく報を得ては饉乏する所多し。出家の戒行は是れ良福田なり。能く物の善を生ず。因果の饉乏を除けばなり。

【九】分衞。梵語(Piṇḍapāta)なり。或は乞食と翻し、或は團墮と翻し。乞食とは比丘行いて食を乞ひ、團墮とは乞い得たる食に就て翻したり。

【一〇】菜葉のかゆに草のむしろ。

【一一】四意。四等に相同じ。慈・悲・喜・捨のことならん。

【一二】眼色等。五根の所願意の如くして缺くることなきを示せり。

【一三】惴々恰々。憂ひ懼るゝ貌。懇ろなる貌。

【一四】徒生徒死。醉生夢死に同じ。

【一五】憍傲。おごりたかぶることなり。

【一六】供恪。つゝしむ貌。

【一七】蕤薄。菜葉服の如き粗末なる衣服のこと。

【一八】宋・元・明の三藏には此の夾註なし。

者なからしむ。民の苦樂は我に在るのみ」と。卽ち大いに其の國を赦せり。藏の珍寶を出して困乏に布施せり。飢渴の人は卽ち之に飮食せしめ、寒きものは之に衣せる。病者は藥を給せらる。田園・舍宅・金銀・珠璣・車・馬・牛・錢は意の索むる所を恣にせり。飛鳥・走獸は都べて及び衆蟲に五穀・芻草は亦好む所に從ふ。王が布施せし後より、國豐かに民富み相率ゐて道を以てす。民に殺すものなく、人の財物を盜み、人の婦女を淫し、兩舌・惡口・妄言・綺語・嫉妬・恚癡・凶愚の心は寂として消滅せり。皆佛を信じ、法を信じ、沙門を信ぜり。善を爲せば福有り、惡を爲せば殃あるを信じ、國を擧げて和樂し、鞭杖行はず、仇敵臣を稱し、戰器は藏に朽ち、牢獄に繫囚無し。人民は善を稱し、我が生遇なる哉。天龍鬼神は助喜して其の國を祐護せざるものなし。毒害消竭し、五穀豐熟し、家に餘財あり。

王內に獨り喜べり、卽ち五福を得たり。一には長壽。二には顏華日々更りて好い色なり。王の德は八方上下に動ず。四には病無くして氣力日に增す。五には四境安隱にして心常に歡喜す。王は後に壽終するに、强健の人の如く、食に飽き快く臥せり。忽然として忉利天上に上生したまふ。其の國の人民は王の十戒を奉じ、[五]地獄・[六]餓鬼・[七]畜生道中に入るものなし。壽終りて魂靈皆天に上るを得たり。

佛、諸の沙門に告げたまはく、時に和默王とは吾が身是れなりと。諸の沙門經を聞いて皆大いに歡喜す。佛の爲に禮を作して去りき。

十六、佛說四姓經

是の如く聞けり。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在しき。是の時四姓家宿命の殃に遭ふ。貧窶尤も困し。草衣草席、菜糜自ら供ふ。極困たりと雖も足無道の宅を蹈まず。手に無道の惠みを執らず。志行淸淨なり。衆邪其の心を染する能はず。朝稟暮講、經戒は口を釋てず、世尊の歎ずる所、

【五】地獄。梵語、那落迦(Naraka)或は泥梨(Niraya)など。不樂、可厭、苦具など〻譯す。其の依處地下に在るを以て義譯して地獄となせり。

【六】餓鬼。梵語、薜茘哆(Preta)なり。常に飢渴の苦を受くれば餓鬼といふ。

【七】畜生。梵語、底栗車(Tiryagyoni)なり。畜生或は傍生とも譯す。畜養する生類なればなり。人、或は驅使のために或は啖食の爲にこれを畜養す。傍生とは傍行する生類なればなり。

巻の第三

布施度無極章第一之三（此に十一章あり）

十五、和默王の本生

是の如きを聞けり。一時、佛、[一]舍衛國の[二]祇樹給孤獨園に在しき。

佛、諸の比丘に告げたまはく、昔、國王あり、和默と號く。王は仁を行じて平かなり、民を愛すること子の若し。正法國を治め、民に怨心無し。其の國廣大にして郡縣甚だ多し。境界熾盛なり。五穀豐熟にして國に災害無し。壽八萬歲なり。和默聖王は明かに宮中の皇后貴人百官侍者をして綱維を執る臣たらしむ。教は正法を以てし、各所部を理む。王常に慈心にして衆生を愍念し、其の愚惑狂悖自ら墜ちんことを悲しみ、道を存ずる原を尋ねて喜んで加へざる無し。衆生を哀護すること天帝釋の如し。[三]殺・盜・淫泆・兩舌・惡口・妄言・綺語・嫉妬・恚癡、此の如きの凶は餘として心に在くこと無し。父母に孝順し、九親に敬愛す。賢者を尋追して聖人を尊戴す。佛を信じ、法を信じ、沙門の言を信じ、善なれば福有り、惡を爲せば殃あるを信ず。斯の忠政十善の明法を以て自身に執行す。重ねて后妃に勅し、下は賤妾に逮べり。皆尊者をして相率ゐて善をなさしむ。[四]四鎭の臣民に布告し、巨細皆帶誦し心執し修行せしむ。

國に貧者あり窮困に任へず。計を失し盜を行じ財主之を得たらば、將に以て啓聞せしめんと欲す。王曰はく「爾盜みしや」と。盜者曰はく「實に盜めり」と。王曰はく「爾、何に緣りてか盜みたる」と。盜者曰はく「實に貧困にして以て自ら活くる無し。聖明王に違して火を蹈んで盜を行ぜり」と。王之を悵愍し、其の至誠を嘉して、惄然として內に愧ぢ、長歎して云はく「民の飢えし者は即ち吾れ之を餓ゆ、民の寒きものは即ち吾れ之を裸にす」と。重ねて曰はく「吾が勢は國をして貧

【一】舍衛國。(Śrāvasti) のこと。

【二】給孤獨(Anāthapiṇḍika)の買ひ求めて所有せし祇樹園(Jetavana)のこと。給孤獨は舍衛城の長者なり。よく孤危を救恤せり。佛、摩竭陀(Magadha)國に在りし時佛の所に詣りて法門をきゝ優婆塞となりぬ。後佛に舍衛國に來りて國人を化益せんことを乞ひたれば釋尊之を許したり。長者故に園林を選擇して祇陀太子の園林を買ふて其處に精舍一宇を建立したればかくいへり。

【三】殺等。十惡なり。淫泆は自分の妻妾に非ざるものに欲を行ずるもの。兩舌は新譯では離間語といひ言葉に信なきもの。惡口は新譯では麁惡語といふ。綺語は新譯では雜穢語といひ言葉に淫意を含めるをいふ。癡は邪見なり。即ち正しき因果關係を否定して僻信の福を求むるものなり。

【四】四鎭。四つの藩鎭のこと。四天王四天下を鎭護すればこれを四鎭といふ。

迎へん。神祇は助喜す。故に斯の瑞を興すならん」と。妻は兒を亡ひしより地に臥せり。使者は到れり乃ち起ちて王の命を拜す。使者曰はく「王逮び皇后は食を捐てゝ泣を銜み、身命日に衰ふ。太子を覩んことを思ふ」と。太子左右顧望せり。山中の樹木流泉を戀慕し、涙を收めて車に昇る。使者發せしより擧國歡喜す。道を治め掃除して豫め帳幔を施せり。香を燒き、華を散じ、伎樂幢蓋す。國を擧げて[64]趍蹌せり。壽を稱ふること無量なり。

太子城に入りて頓首して過を謝せり。退勞起居す。王は復た國藏珍寶を以て都て太子に付せり。勸めて布施せしむ。隣國困民歸化首尾す。猶し衆川の海に歸するがごとし。宿怨都べて然り。拜表して臣と稱す。貢献相銜み、賊寇仁を侚ぶ。偷賊施を競ひ干戈藏に戢め、囹圄毀てり。群生永く康んず。十方善を稱し、德を積んで休まず。遂に如來無所著正眞道最正覺道法御天人師獨步三界爲衆聖王を獲たり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、吾れ諸佛の重任を受く、誓ひて群生を濟ひ、極苦に嬰すと雖も、今[65]無蓋尊と爲れり。太子後終に[66]兜術天に生じたり。天より來下して白淨王に由りて生る。今吾が身是れなり。父王とは阿難是れなり。妻とは倶夷是れなり。子男とは羅云是れなり。女とは[67]羅漢朱遲母是れなり。天帝釋とは彌勒是れなり。射獵者とは[68]優陀耶是れなり。阿周陀とは大迦葉是れなり。賣兒梵志とは調達是れなり。妻とは今調達の妻[69]旃遮是れなり。吾れ宿命より來た勤苦無數なり。終に恐懼して弘誓に違はず。布施法を以て弟子と爲りて之を說く。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

【六四】趍蹌。動きまはる貌。國民一同喜びの爲に動いてる貌なり。

【六五】無蓋尊。佛と同じ。

【六六】兜術天。Tuṣita 天の事、菩薩の最後身の住處なり。兜率天、都史多等といふ。上足、妙足等と譯す。釋尊は菩薩の最後身として此に住したり。今は彌勒菩薩の淨土なり。欲界の天處にして夜摩天と樂變化天との中間にあり。

【六七】西秦譯には末利母とあり。

【六八】西秦譯には阿難とあり。

【六九】旃遮。Ciñca Mānavikā ならんか、定かならず。

に入りしに宮人亘細[61]嘘晞せざるはなかりき。王呼んで抱かんと欲し兩兒就かず。王曰はく「何を以てかせん。」兒曰はく「昔は王孫たれども今は奴婢となれり。奴婢の賤しき、緣りて王の膝に坐せんや」と。梵志に問ふて曰はく「緣ありて斯の兒を得たるや」と。之に對ふるに事の如し。

曰はく「兒を賣る幾錢なりや」と。梵志未だ答へざるに男孫[62]勸して曰はく「男は直銀錢一千に特牛百頭なるに女は直金錢二千に牸牛二百頭なり」と。王曰はく「男は長にして賤し、女は幼にして貴し。其の緣有らんや」と。對へて曰はく「太子旣に聖にして且仁なり。二儀を潤ひ濟ふ。天下喜んで附すること猶し孩の親に依るが如し。斯く天下の明圖を獲しも而も遠く逐捐せらる。山澤に處し、虎狼毒蟲之とゝもに隣たり、菓を食し草を衣、雷雨人を震はしめたり。夫れ財幣は草芥の類なるのみ。坐して迸棄せらる。故に男の賤しきを知るなり。[63]黎庶の女すら苟も華色を以てせば處するに深宮に在り。臥すれば即ち𦅸綖あり。蓋し寶帳を以て天下の名服を衣る、天下の貢獻に食し故に女は貴きなり」と。

王曰はく「年八の孩童にして高士の論あり。豈況んや其の父なるをや」と。宮人亘細は其の諷諫を聞きて哀を舉げざるはなし。梵志曰はく「直銀錢一千と特牛牸牛各百頭なり。惠むこと爾らば善し、不らずんば自ら已まん」と。王曰はく「諾す」と。即ち雇ふこと數の如し。梵志退きぬ。王は兩孫を抱きて之を膝に坐せしむ。王曰はく「屬、抱くに就かず、今來る何ぞ疾きか」と。對へて曰はく「屬は是れ奴婢なり。今は王孫たればなり」と。曰はく「汝の父は山に處りて何を食して自ら供ふるや」と。兩兒俱に曰はく「薇細なる樹菓を以て自給するのみ。日は禽獸百鳥と相娛しみ、亦愁心なし」と。王は使者を遣はして焉を迎ふ。使者道に就き、山中の樹木俯仰屈伸して跪起の禮あるに似たり。百鳥悲鳴して哀音情を感ぜり。

太子曰はく「斯なるは何の瑞ぞや」と。妻は地に臥して曰はく「父が意解釋せられて、使者來り

【六一】嘘晞。すゝり泣くこと。

【六二】人の說をとりて已の說となすことなり。

【六三】黎庶。平民の女に同じ。女氏なくして玉の輿に乘るの意なり。

患を除くは最も善し」と。

梵志曰はく「婦の賢快誠に子の言の如し。敬諾して之を受けん。吾れ以て子に寄せん。以て人に惠み無きなり」と。又曰はく「吾れは是れ天帝釋にして世の庸人に非るなり。故に來りて子を試みぬ。子佛慧を尙び〔五三〕影範雙び難し。今何なる願を欲してん。恣に求むるとも必らず從はん」と。太子曰はく「願くは大富を獲んことを常に布施を好めばなり。貪無きこと今より踰えん。吾が父王及び國の臣民をして思ふて相見ゆることを得せしめたまへ」と。天帝釋曰はく「善し」と。時に應じて現ぜず。

梵志其の志の獲たるを喜び、行きて疲れを覺えず。兩兒を連牽して望使を得んと欲す。兒は王者の孫なり、榮樂は自由なり。其の二親を去りて繩に縛せらる。結處皆傷る。哀號して母を呼ぶ。鞭たれて之を走る。梵志晝寢せるに二兒逆逃す。自ら池中に沈めり。〔五四〕荷蒻上を覆ふ。水蟲身を編す。窮めて行いて尋ね求むるに又兒を得たり。捶杖縱橫にして血流れて地を丹す。天神愍念して縛を解き傷を愈やす。爲に甘果を生じ地をして柔軟ならしむ。兄弟は果を摘み、更に相投け噉ふ。曰はく「斯の果の甘さ猶し苑中の果のごとし。斯の地の柔軟は王邊の〔五五〕緼縱の如し」と。兄弟相扶けて天を仰いで母を呼ぶ。涕泣して身を流せり。梵志の行く所、其の地は〔五六〕岑巖・〔五七〕礫石・〔五八〕刺棘なり。身及〔五九〕足蹠、其の瘡毒痛なり。若は樹果を覩て或は苦にして且つ辛なり。梵志の皮骨相連る。兩兒の肌膚光澤ありて顏色故に復したり。歸りて其の家に到れり。喜笑して且ついはく「吾れ爾の爲に奴婢二人を得たり、自ら所使に從はん」と。妻は兒を覩て曰はく「奴婢は爾らず、斯の兒端正なり。手足悅澤勞を作すに任へず。字に行いて〔六〇〕衒賣し、更に所使を買はん」と。又妻の爲に使はる。

異國に之かんと欲し、天其の路を惑して乃ち本土に之けり。兆民焉を識る。僉曰はく「斯れ太子の兒なり、大王の孫なり」と。哽噎して門に詣りて上聞せしむ。王は梵志を呼べり。兒を將ゐて宮

【五三】影範。模範に同じ。
【五四】荷蒻。蓮葉に同じ。
【五五】緼縱。ふとん、しきものの如きものなり。
【五六】岑巖。高くけはしき巖をいふ。
【五七】礫石。小石なり。
【五八】刺棘。いばらなり。
【五九】足蹠。足のうら。
【六〇】衒賣。賣ること。販賣に同じ。

す。將に虎狼鬼魅盜賊に呑まれたりとせんや。疾く斯の結を釋きたまへ。吾れ必らず死せん」と。太子久しうして乃ち言はく「一梵志あり。來りて兩兒を索めて云はく『年盡き命微なり、以て自ら濟はんと欲す』」と。吾れ以て之に惠めり」と。婦、斯の言を聞いて感踊して地に躃れ、宛轉して哀慟し、涙を流して且つ云はく「寤に夢る所の如し。一夜の中夢に老寠貧窶の梵志、吾が兩乳を割き、之を執りて疾馳せしを觀たり。正しく今の爲なり」と。哀慟して天を呼べり。一山間を動かして云はく「吾が子之きし如くんば、當に行いて求むるに如くべけんや」と。

太子は妻の哀慟尤も甚だしきを觀て、之に謂て曰はく「吾れ本爾に盟ふらく『隆孝奉遵せよ』と。吾れ大道に志し、衆生を濟はんと尙む、求められて惠まざるはなし。言誓するに甚だ明らかなり。而るに今哀慟して以て我が心を亂さんや」と。妻曰はく「太子道を求むるに厥の勞何ぞ甚だしき。夫子よ。家尊は妻子の間に在り。自由ならざるはなし、豈況んや人尊をや」と。願ふて曰はく「索むる所必らず獲なば一切智の如けん」と。

帝釋諸天僉然議して曰はく「太子の弘道は普施無蓋なり。之を試さんに、妻を以て心の如何を觀るなり」と。釋化して梵志と爲り、來りて其の前に之きて曰はく「吾れ聞けり、子の懷は乾坤の仁を以てす。普ねく群生を濟はんに布施して逆ふことなし。故に來りて情に歸せん。子の妻は賢貞德馨遠くに聞ゆ。故に來りて乞匃せん。儻も肯て相惠まんや」と。答へて曰はく「大いに善し」と。

右手を以て水を持ち梵志の手を澡り、左手に妻を提げて適之を授けんと欲す。諸天壽を稱へて歎善せざるは莫し。天地卒然として大いに動き、人鬼驚かざるはなし。梵志曰はく「止みなん、吾れ取らざるなり」と。答へて曰はく「斯の婦豈惡あらんや、婦人の惡は斯れ都べて有るなし。婦人の禮は斯れを備に首めと爲さん。然も其の父王は唯斯の女ありしのみ、禮を盡して婿に事へ塗炭を避けず。衣食趣に可なれども細甘を求めず。勤力精健にして顏華輩に踰ゆ。卿取らば吾れ喜ばん

太子の弘惠は縛して以て相付せよ」と。太子は兒を持ちて梵志に縛せしむ。自ら手に繩の端を執りぬ。兩兒身を擗して父の前に[四七]宛轉して、哀號して母を呼んで曰はく「天神地祇山樹の諸神、一たび哀んで吾が母に意を告げて言へ、兩兒以て人に惠まる。宜しく急ぎ彼の菓を捨てゝ一たび相見ゆべし」と。

[四八]二儀を哀感して山神愴然たり。爲に大いなる響を作し、雷震の若かりき。母時に果を採る、心爲に[四九]忪々たり。仰いで蒼天を看れども雲雨を覩ず、右の目瞤ぎ左の腋痒ゆ。兩乳[五〇]湩流して出でて相屬れり。母之を惟ふて曰はく「斯の怪甚大なり。吾れ菓を以て爲すより急ぎ歸りて兒を視ん、將他有らんや」と。菓を委して旋歸れり。[五一]惶々として狂へる如し。

[五二]帝釋念じて曰はく「菩薩の志隆なり。其の弘誓の重任を成ぜんと欲せしかども、妻到りて其の高志を壞するなり」と。化して師子と爲り道に當りて蹲れり。婦曰はく「卿は是れ獸中の王なり、吾れも亦人中の王子たり。倶に斯の山に止まる。吾れに兩兒あり皆尙微細なり、朝來未だ食せず、須らく我を望むべきのみ」と。師子之を避けたり。婦路を進むことを得たり。廻りて復前に於て化して白狼と作れり。婦の辭前の如し。狼又焉を避けたり。又化して虎と爲りぬ。適ゝ梵志遠かれり。乃ち遂に退きぬ。

婦、還りて太子の獨り坐せるを覩て、慘然として怖れて曰はく「吾が兒いかん。而るに今獨り坐するや。兒常に吾れ菓を以て歸るを望覩して奔走して吾れに趣く。地に蹹れて復起き跳踉して喜笑して曰はく『母歸りしや。飢兒飽かん』と。今之を覩ざるは將に以て人に惠みしや。吾れ坐すと兒立ちて各左右に在り、身に塵有るを覩て競ひて共に拂ひ拭ふ。今兒は來らず、又處をも覩ず、卿、以て誰に惠みしや。早く相語るべし」と。乾坤に禱祀すらく「情實に云ひ難し。乃ち良嗣を致さん。今兒の戲具泥象・泥牛・泥馬・泥猪・雜巧の諸物地に縱横す。之を覩て心に感ず。吾れ且に發狂せんと

【四七】宛轉。倒れころがる貌。
【四八】二儀。天と地又は陰陽を指す。
【四九】忪々。懼れ戰く貌。
【五〇】湩流。乳汁を湩といふ。
【五一】惶々。をそれる貌にいふ語。
【五二】帝釋。因陀羅（Indra）なり。脚註卷一【一五】を參照せよ。

る。

母故に蔭を堀りて其の埳に人を容れたり。二兒中に入りて柴を以て上を覆へり。自ら相誡めて曰はく「父呼べども應ふることなかれ」と。太子仰いで問ふて其の前坐に請はる。果蓏前に置き、果を食して飲み畢れり。之を慰勞して曰はく「遠くを歷て疲倦せられなん」と。對へて曰はく「吾れ彼こより來れり。身を擧げて惱痛す。又大いに飢渴せり。太子は光き暉る、八方[四二]歎懿し、巍々として遠照すること太山の如く有り。天神[四三]地祇、孰れか甚だ善せざらん。今故に遠くより歸りて窮れり。庶くは微命を延べんことを」と。

太子惻然として曰はく「財盡きたれども惜むこと無けん」と。梵志曰はく「二兒を以て吾が老に給養せしむべし」と。答へて曰はく「子、遠來して兒を求む。吾れに違心無けん」と。太子焉を呼びぬ。兒弟懼る。又相謂つて曰はく「吾らを父は呼び求む。必らず以て鬼に惠むならん。命に違して應ふること無れ」と。太子隱れて其の埳に在り、柴を發いて之を視る。兒出でて父を抱き戰慄涕泣せり。呼號して且つ言はく「彼れは是れ鬼なり、梵志に非ず。吾れ數ゝ梵志を覩たり。顏類未だ玆の若きもの有らず。吾等を以て鬼の爲に食と作す無れ、吾が母果を採りて來り歸る何ぞ遲き。今日定んで死して鬼に噉はるれば母歸りて吾を索む。當に牛母の其の[四四]犢子を索むる如くなるべし。狂走して哀慟しなば父必らず悔いん」と。

太子曰はく「自ら生れて布施して未だ嘗て微悔せざりき。吾れ以て焉を許さん。爾ら違ふこと無かれ」と。梵志曰はく「子、普慈を以て相惠む。兒母歸らば卽ち子の洪潤は敗れて吾が本願に違はん。早く去るに如かず」と。太子曰はく「卿の願は兒を求むる故に遠くより來れり。終に敢て違はざらん。便ち[四五]速邁すべし」と。太子、右手を[四六]沃澡し左手に兒を持ちて彼の梵志に授けたり。梵志曰はく「吾れ老いて氣微なり、兒は捨てゝ逝邁して其の母の所に之かん。吾れ緣りて之を獲んや。

【四二】歎懿。專一にして美なることを讚歎するなり。
【四三】地祇。地神に同じ。
【四四】犢子。小牛に同じ。
【四五】速邁。速かに往くこと。
【四六】沃澡。洗ひそゝぐこと。

猶し霜の樹に著けるがごとし。朝夕心に其の早喪を欲せんことを希へども未だ卽ち願に從はず。之をいかんともする無けん」と。

歸りて其の婿に向つて事の如く具に云へり、曰はく「子、奴使あらん。妾行きて汲まず。若し其れ今の如くんば吾れ子を去らん」と。婿曰はく「吾れ貧に緣りて給使を獲んや」と。妻曰はく「吾れ聞く、布施上士を須大拏と名く。洪慈にして衆を濟ひ、其の國を虛耗せり。王逮び群臣は徙して山中に著けり。其れに兩兒あり。乞はゞ則ち卿に惠まん」と。妻數々言へる有り。婦を愛して違ふこと難し。卽ち其の言葉を以て葉波國に到る。宮門に詣りて曰はく「太子之に安んずるや」と。衞士上聞す。王は斯の言を聞いて心結內塞して涕泣交々流る。頃有りて曰はく「太子は逐はれたるは惟ふに斯の輩の爲なり。而るに今復來らんや。請ふ勞倈を現じて其の所以を問はん」と。對へて曰はく「太子は潤馨なり。遐邇詠歌せり。故に遠く歸命せり。庶くは自ら蘇息せん」と。王曰はく「太子の衆寶は布施せられて都て盡きたり。今は深山に處る。衣食充さず、何を以てか子に惠まん」と。對へて曰はく「[四〇]德徽巍々たり。遠く自ら竭慕せり。光顏を覩るを貴し、齒を沒したれども恨みなきなり」と。

王、人をして其の徑路を示さしむ。道に獵士に逢ふて曰はく「子、諸山を經歷せらる。寧んぞ太子を覩たるや不や」と。獵士素より太子の迸逐の所由を知れり。勃然として罵りて曰はく「吾れ爾の首を斬らん。太子を問ふ爲あらんや」と。梵志惡然として懼れて曰はく「吾れ必らず子に殺されん」と。當に權に之を詭るべきのみ、曰はく「王逮び群臣は太子を呼んで國に還して王たらしむるなり」と。答へて曰はく「大いに善し」と。喜んで其の處を示せり。遙かに小屋を見て、太子亦其の來るを覩る。兩兒之を覩て中心に[四一]怛懼せり。兄弟倶に曰はく「吾が父、施を尙ぶ。而も斯の子來れり。財盡きて副ふるものなし。必らず吾ら兄弟を以て之に惠み與へん」と。手を携へて倶に逃

【四〇】德徽巍々。德の美はしい貌。

【四一】怛懼。悲しみ驚きをそれる貌。

子を下して車を以て之に惠めり。太子は車馬衣裘身寶雜物、都て盡きて餘りなし。妻をして女を嬰せしむ。己は自ら男を抱きたり。國に處するの時彼の名象衆寶車馬を施し、毀逐を見るに至りても未だ曾て恚悔せず。和心相隨ふ。歡喜して山に入れり。三七二十一日乃ち檀特山中に到れり。太子は山の樹木茂盛し、流泉美水甘果備はり、鳬鴈[三二]鴛鴦[三三]は其の間に遊戲し、百鳥嚶々相和して悲鳴せるを觀たり。

太子之を觀て其の妻に謂つて曰はく「爾斯の山を觀るに、樹木は天に參し、折傷あること尠く、群鳥悲鳴して每處に泉あり。衆果甚だ多く以て飲食と爲る。唯道のみ是れ務めて以て誓に違ふこと無れ」と。

山中の道士は皆節を守りて學を好む。一道士あり。[三四]阿周陀と名く。久しく山間に處りて玄妙の德あり。即ち妻子と之に詣りて稽首す。却りて叉手して立てり。道士に向つて曰はく「吾れ妻子を將ゐて斯に來りて道を學ぶ。願くは洪慈誨を垂れて吾が志を成ぜんことを」と。道士之に誨ふ。太子は焉に則けり。柴草を屋となし、結髮蒸服、果を食し泉を飲みぬ。男を耶利と名づく。小さな草服を衣る。父に從ふて出入す。女を罽拏延と名く。鹿皮衣を著け母に從ふて出入す。山に處る一宿なり。天爲に泉を增し、其の味重甘なり。藥樹木を生じ、名果茂盛なり。

後鳩留縣老貧の梵志あり。其の妻年豐なり。顏華端正なり。瓶を提げて行いて汲む。道に年少の遮要調に逢へり。曰はく「爾、貧に居らんや、以て自ら全ふすること無けん。彼の老財を貪りて庶くは以て歸居せん。彼の翁は道を學ぶに內否して敎化の紀に通ぜず、一人を成ずることを希ふ。專愚[三五]儱悷なり、爾、將貪る所ならんや。顏狀醜黑・鼻正[三六]匾㔟・身體[三七]繚戾・面皺[三八]脣頞・言語[三九]蹇吃・兩目又青にして狀類鬼の若し。身を擧げて好きところ無し。孰れか僫憎せざらん。爾、室家となりて將愧厭なからんや。婦、調の聲を聞きて淚を流して云はく「吾れ、彼の翁の鬚鬓正に白きを觀て

【三二】かもとかり。
【三三】をしどり。
【三四】阿周陀。西秦譯には阿州陀とあり。年五百歲にして絕妙の德ありといふ。
【三五】儱悷。愚直で悲しい貌。
【三六】匾㔟。鼻の格恰のうすくして醜いさま。
【三七】繚戾。身體がねぢけてこれ又醜いさま。
【三八】頞は醜き形にいふ字。
【三九】蹇吃。言語の吃りてすら〳〵云ふ事能はざる樣なり。

すとも心の感絶は必らず死して疑ひなからん」と。

太子曰はく「遠國の人來りて妻子を乞ふも吾れに逆心無し。爾は情戀を爲さん。儻ひ惠むこと道に違ひて都て洪潤を絕つは吾が重任を壞するなり」と。妻曰はく「太子の布施するは世の希有なりと覩る。當に弘誓を本として愼んで倦むこと無かるべし。百千萬世人として卿の如きはなし。佛の重任に逮んで吾れ敢て違せざるなり」と。太子曰はく「善し」と。

即ち妻子を將ゐて母に詣りて辭別す。地に稽首して愍然として辭して曰はく「願くは重恩を捐てん。玉體を保寧して國事に[三]執掌し、願數慈諫して自由を以て彼の天民を枉ぐる無れ。當に忍ぶべからざるを忍び、忍びを含んで寶と爲すべし」と。母訣辭を聞いて顧みて侍に謂つて曰はく「吾が身石心の如く剛鐵の猶し。今一子有りて而も逆逐せらる。吾れ何なる心ならんや。未だ子あらざりし時結願して嗣を求む。懷妊の日樹が華を含むが如し。日々其の成るを須てり。天、願を奪はず吾をして子あらしむ。今育成就して當に生離すべけんや。夫人嬪妾嫉む者快喜して復た相敬せず」と。

太子妻兒と稽首して拜退せり。宮內巨細哽噎せざるはなし。出でて百揆吏民と哀訣して倶に城を出でて去れり。竊に云はざるはなし。「太子は國の聖靈にして衆寶の尊なり。二親何なる心ありて之を逐ひしや」と。太子城外に坐して諸の送者に謝し之をして居に還らしむ。兆民拜伏す。僉然哀みを擧ぐ。或は躃踊して天を呼ぶものあり。音響國を振ふ。

妻と與に道を進めり。自ら本國を去ること遠きを知れり。一樹下に坐せり。梵志あり遠くより來りて乞ふ。身の寶服と妻子の珠璣とを解きて盡く以て之に惠めり。妻子をして車に昇らしめ轡を執りて去れり。始めて道に就かんと欲したり。又梵志來從して馬を乞はんとするに逢へり。馬を以て之に惠めり。自ら轅中に於て車を挽きて道を進めり。又梵志來りて其の車を匃ふに逢へり。即ち妻

【三】詩經にいはく王事は鞅掌すと。鞅は荷なり。謂はく之を奉ずるなり。負荷捧持なり。

太子欣然として侍者に勅すらく「國中の黎庶にして窮乏あるものは之に勸めん。疾く來りて其の所欲に從つて之に恣にし違ふことなかれ。國土・官爵・田宅・財寶・幻夢の類なり磨滅せざるなし」と。兆民巨細弃りて宮門に詣れり。太子は飲食衣被七寶の諸珍を以て民の所欲に恣にして布施し訖竟りぬ。貧者皆富みたり。

妻を曼坻と名く。諸王の女なり。顏華韡燁なり。一國無雙なり。首より足に至る皆七寶瓔珞を以てす。其の妻に謂つて曰はく「起ちて吾が言を聽け、大王吾れを徙して[二七]檀特山に著き十年を限りと爲す。汝之を知らんや」と。妻驚いて而も起ち太子を視て淚を出して且云はく「將、何の罪ありて乃ち逬逐を見る。國の尊榮を捐てゝ深山に處するや」と。其の妻に答へて曰はく「吾れ布施することを以て國內を虛耗にす。名象戰寶を以て怨家に施したり。王逮び群臣恚りて我を逐はんのみ」と。妻は卽ち稱願して「國は豐熟に王臣兆民富壽極なからしむ。惟だ當に志を建てゝ彼の山澤に於て成道弘誓すべし」と。

太子曰はく「惟ふに彼の山澤は恐怖の處なり。虎狼害獸止むること爲し難し。又毒蟲・[二八]魍魎・鬾鬼・雷電・霹靂・風雨・雲霧あり。其れ甚だ畏るべし。寒暑度に過ぐ。樹木依り難し。[二九]蒺藜礫石卿の堪ゆる所に非ず。爾は王者の子なり、榮樂に於て生れ中宮に長じたり。衣は則ち細軟なり。飮食は甘美なり。臥すれば則ち帷帳あり。衆樂は[三〇]耳を聒し願はゞ則ち心を恣にす。今山澤に處し臥すれば則ち草蓐、食すれば則ち果蓏、人の忍ぶ所に非ず。何を以てか之を堪へんや」と。

妻曰はく「細靡衆寶帷帳甘美は何ぞ己を益せん。而も太子とゝもに生きながら離居せんや。大王出づる時は幡を以て幟となす。火は煙を以て幟となす。婦人は夫を以て幟と爲す。吾れ太子を恃むは猶孩の親を恃むがごとし。太子國に在りて四遠に布施す吾れ輙ち願はんこと同じ。今當に嶮を歷べけんや、而も猶留りて榮を守らんや。豈仁道となさんや。儻ひ來りて乞ふものありて所天を覩

【二七】檀特山。(Dantaloka)といふ。陰山と譯す。西域記には此の山は北印度の犍陀羅(Gandhāra)にありて往昔須大拏太子の菩薩行を修せし所となせり。

【二八】魍魎等。山川の精、木石の怪。すだまともいふ。

【二九】刺のある一種の藥草なり。

【三〇】聒は亂なり驚かすなり。

はざる者なり。今行蓮華上の白象を乞匂せんと欲す。象を羅闍惒大檀と名く」と。

[二五]太子曰はく「大いに善し。唯諸君に金銀雜寶を上げて心の求むる所を恣にし、以て自ら難ずる無れ」と。即ち侍者に勅して「疾く白象に金銀鞍勒を被せて之を牽いて來れ」と。左に象勒を持し、右に金甕を持し、梵志の手を澡りて慈歡して象を授けたり。梵志大いに喜べり。即ち呪願竟る。倶に象に升騎して笑を含んで去れり。

[二六]相國百揆悵然たらざるはなし。僉曰はく「斯象は猛力の雄なり、國恃んで以て寧し。敵仇戰を交ふるに輙く爲に震奔す。而るに今讎國に惠む。將何をか恃まん」と。倶に現陳して曰はく「夫れ白象なるものは勢力能く六十象を辟せり。斯れ國の敵を却くるの寶なり。而るに太子惠を以て怨を重ぬ。中藏日に虚し。太子自ら恣に布施して休まず、臣等懼る、數年の間に擧國妻子必らず施惠の物と爲らん」と。

王其の言を聞いて慘然久しうして曰はく「太子は佛道を好んで喜び、窮に賙んで乏を濟ひ、群生を慈育するを以て行の元首となす。縱ひ禁止するを得れども假使拘罰は斯れ無道となす」と。百揆僉曰はく「切磋の教儀は失ふこと無く拘罰を虐と爲す。臣敢て之を聞す。逐ふて國を出でて田野に置かしめ、十年の間慚ぢ自ら悔いしむるは臣等の願なり」と。

王は即ち使者を遣はして就いて之に語げて曰はく「象は是れ國寶たり、怨に惠むは胡爲ぞ。罰を加ふるに忍びず。疾く國を出でて去れ」と。使者命を奉じて之に語すこと斯の如し。太子對へて曰はく「敢て天命に違せず。願くは乞はん、布施して乏しきを濟ひ七日にして國を出でなば恨み無し」と。使者以て聞す。王曰はく「疾く去れ。汝を聽さゞるなり」と。使者反りて曰はく「王命從はず」と。太子重ねて曰はく「敢て天命に違せず。吾れに私財あり。敢て國を侵さず」と。使者又聞す。王即ち之を聽す。

【二五】西秦譯にはこゝで太子は白象を布施することに對して一應考慮したる一條あり。參照すべし。

【二六】相國百揆。宰相大臣百官のこと。

ら正覺を致せり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

十四、[一九]須大拏經［須大拏太子の本生］

昔、葉波國王を號して[二〇]濕隨といふ。[二一]其の名薩闍なり。國を治むるに正しきを以てす。黎庶怨無し。王に太子あり。須大拏と名く。容儀は世に光やき、慈孝齊ち難し。四等普護し、言は人を傷けず、王に一子あり、之を寶とする無量なり。[二二]太子親に事ふること之を天と同じくす。有知の來りて常に布施して群生を拯濟せんと願ふ。吾が後世をして福を受けて無窮ならしむ。愚者は非常の變を覩ず之を保つべしと謂ふ。有智の士照して五家あり、乃ち布施を尙ぶの士なり。十方の諸佛緣一覺[二三]無所著尊・施を歎じて世上の寶と爲らざるなし。太子遂に隆んに普く施せり。惠み衆生に逮ぶ。衣食を得んと欲するものは聲に應じて之を惠む。金・銀・衆珍・車・馬・田宅、求めて與へざるなし。光馨遠く被り、四海咨嗟す。

父王に一[二四]白象あり。威猛武勢にして六十象を蹸す。怨國來戰すれども象は輙く勝つことを得たり。諸王議して曰はく「太子の賢聖は求めて惠まざるなし。」と。梵志八人を遣はして太子の所に之きて白象を乞はしめて「若し能く之を得れば吾れ重ねて子に謝せん」と。命を受けて卽ち行く。鹿皮の衣を著け、履屣瓶を執り、杖を鼓へて遠く涉り、諸の群縣を歷て千有餘里なり。葉波國に到り倶に杖を柱にして一脚を翹げて宮門に向つて立てり。衞士に謂つて曰はく「吾れ聞く太子、貧乏に布施して潤ひ群生に逮ぶ。故に自ら遠涉して吾れ乏しき所を乞はんとす」と。衞士卽ち入りて事の如く表聞す。太子之を聞いて欣然として馳せ迎ふ。猶子の親を覩るがごとし。稽首して足を接して之を慰勞して曰はく「由來する所あらん。苦體如何ん。求索する所を欲して一脚を以て住するや」と。對へて曰はく「太子の德光八方に周聞す、上蒼天に達して下黃泉に至る。巍々として太山の如し。歎仰せざるはなし。卿、天子の子と爲り、言を吐いて必らず信審ならん。布施を尙んで衆願に違

【一九】 太子須大拏經（大正 No. 171）と異譯。西秦の沙門聖堅譯すとあり。舍衞國祇洹阿難邠坻阿藍（Śrāvastī の Anātapiṇḍika の所有なる Jetavana）に於て佛說きしとあり。別譯に從へば阿難隨從後廿餘年の說法なりしといふ。須大拏太子の本生譚は諸經に廣く散說せらる。

【二〇】 異譯に濕波とあり。

【二一】 異譯は王に就いて語ること詳なり。參照せよ。

【二二】 異譯は太子の生立に關して語ること詳かなり。就きて參照すべし。

【二三】 無所著。佛の德號なり。佛は煩惱に執著することなければなり。

【二四】 西秦譯には白象の名須檀延とあり。象は大威力ありて而もその性柔順なり。白象に就いては釋尊の托胎に因んで諸經の散說甚だ多し。

く來促して我が後に隨へ」と。

前んで國市に到れり。別して奴婢を賣る。各〻一主を與へて相去ること數里なりき。時に長者あり。此の奴を買ひ得たり。斯舍を守らしむ。諸に埋者あり其の税を收めしむ。妄動することを得ず。是の時婢者の屬する所の大家の夫人甚だしく妬めり。晨夜作さしめて初めより懈息せず。其の後數日あり。時に婢は【一六】挽娠して生みし所の男兒あり。夫人恚りて言はく「汝は婢使たり、那ぞ此の兒を得たる。促取して之を殺せ」と。

大家の敎に隨ひて卽ち其の兒を殺したり。持行して之を埋むるに往いて奴の所に到る。共に相見るを得て言はく「一男兒を生めり、今日已に死す。錢を持ち來らず。今寧んぞ唐しく之を埋むるを得べけんや不や」と。其の奴報へて曰はく「大家甚だ急なり、備さに此を聞かば我を罪すること小ならず。卿、促持して去り、更に餘處を索めて此に住することあるべからず」と。

王は夫人と相見えしと雖も、勤苦を說かざりき、各々怨心無し。是の如き言語須臾の頃に、恍惚として夢の如し。王及び夫人は自然に還りて本國の中宮に在り。正殿に上座して前の如く異らず。及び諸群臣後宮婇女は皆悉く故の如し。所生の太子亦自然に活く。王及び夫人は心の內に自ら疑ふらく「何に緣りてか此に致るや」と。文殊師利は虛空の中に在り、七寶蓮華の上に坐して、身色の相を現じて讚じて言はく「善い哉、今汝の布施の至誠是の如し」と。王は夫人とともに踊躍歡喜して卽ち前んで禮を作せり。文殊師利は爲に經法を說けり。三千刹土は爲に大震動す。一國人を覆へり。皆無上正眞の道意を發したり。王は夫人とともに時に應じて卽ち【一七】不起法忍を得たり。

佛、阿難に告げたまはく、是の時の王とは卽ち我が身是れなり、時の夫人とは今の俱夷是れなり。時の太子とは今の羅云是れなり。佛言はく「阿難よ。我れ【一八】宿命の時、布施せしこと是の如し。一切人を用てするが故に身命を惜まず。無數劫に至りて恨悔あることなく、榮冀する所なくして自

【一六】挽娠。分娩に同じ。

【一七】不起法忍。又無生法忍といふ。見惑を斷じて空理を生ずるを無生法忍を得るといふなり。空理は無生無起なれば無生法又は無起法といふ。

【一八】宿命。前世の生死又は前世の生命なり。

婆羅門言はく「我れ餘を用ゐず。王身が我がために奴と作り、及び王の夫人は我が爲に婢と作ることを得んと欲す。若し能く爾らば便ち我に隨いて去らんことを」と。王甚だ歡悅して報へて言はく「大いに善し。今我が身は定んで自ら願くは道人に屬して[一四]使令を供給することを得べし。其の夫人は大國王の王女なれば當に往いて之に問ふべし」と。時に王卽ち入りて夫人に語りて言はく「今道人有り。年少にして端正なり。遠方より來り、我が身を乞ふて持用して奴と作さんと欲せり。今復た並に卿を索めて婢と作さんと欲す。當に之をいかがすべき」と。其の夫人言はく「王の報へ云何」と。王曰はく「我れ已に之が奴と作ることを許したり、未だ卿を許さざるのみ」と。時に夫人言はく「王、相棄てんが爲に獨り自ら便を得。我を度するを念ぜず」と。

是の時夫人卽ち王に隨いて出でたり。道人に白して言はく「願くは身を以て道人の使に供へんことを得ん」と。時に婆羅門復た王に語りて曰はく「審實に爾るや不や、吾れ今去らんと欲す」と。王道人に白さく「我れ生れながら布施して未だ嘗て悔いあらざりき。道人に從はんのみ」と。逝心曰はく「汝當に我れに隨いて皆悉く徒跣すべし。履を著くるを得ず。當に奴の法の如くすべし。得て掩はざる莫れ」と。

王は夫人とともに皆言はく「唯諾す」と。大家の敎に從つて敢に命に違はず。時に婆羅門は便ち奴婢を將ゐて道を涉りて去れり。文殊師利は卽ち化人を以て其の王處及び夫人の身に代へたり。國事を領理すること其れ故の如からしむ。王夫人といふは本大國の王女にして端正無雙なり。手足柔軟なり。深宮に生長して寒苦を更へず。又復重身懷妊となり數ケ月、步んで大家に隨ふ。身を擧げて皆痛む。足底破傷して復た前む能はず。疲極は後に在り。時に婆羅門還顧して罵りて言はく「汝は今は婢と作れり。當に婢法の如くすべし。汝の本時の態を以てすべからず」と。

夫人長跪して白して言さく「敢てせざるなり。但小疲して極住止息せしのみ」と。[一五]喊言して「疾

【一四】使令。給仕すること。

【一五】喊は呵なり。恚る聲なり。又大語ともいふ。

に服するが故に來りて乞匃す」と。

國人其の斯の如きかを嘉し、之に敎へて曰はく「天王普く慈育して群生に逮ぶ。明日當に東門を出で、布施すべし。汝其れ之を逆へよ、汝の善行を賞んで汝に賜ふに必らず多からん」と。明日王より乞匃したり。王之を默識したり。其に群臣の爲に妻の本末を說きぬ。一臣曰はく「當に之を燒くべし」と。一臣曰はく「之を斬れ」と。法を執れる大臣曰はく「夫れ罪は正を去りて邪に入り、悖逆の行を爲す者より大なるは無し。當に兇人に釘ちて〔一〇〕蠱女の背に著け長く焉を負はしむべし」と。群臣僉曰はく「善い哉。その好む所に從はん。執りて之を持つは明なり」と。王は十善を以て民を化し、欣戴せざるはなし。王逮び臣民終に天上に生ず。罪人の夫妻死して地獄に入りぬ。

佛、諸の比丘に告げたまはく、時の王なるは我が身是れなり。罪人は調達是れなり。妻は懷杆女子是なり。菩薩智慧度無極なり。布施を行ずること是の如し。

十三、〔一一〕薩和檀王經〔薩和檀王の本生〕

昔、國王を薩和檀と號け、解して一切施といふなり。求め索むる所あり、人意に逆はず。布施すること是の如し。其の王の名字は八方に流聞す。聞知せざるものなし。時に〔一二〕文殊師利往いて之を試みんと欲し、化して年少の〔一三〕婆羅門となりぬ。異國より王の宮門に來詣したり。守門の者に語りて、「我れ遠くより來りて大王を見んと欲す」と。時に守門の者即ち白すに此の如し。王甚だ歡喜して即ち出で、奉迎せり。子の父を見るが如し。前んで爲に禮を作す。便ち請ふて坐せしむ。問訊して、「道人從來する所あるや。塗路に冒涉して疲倦無きを得んや」と。逝心言はく「我れ他國に在り。王の功德を聞き、故に來りて相見ゆ。今乞匃せんと欲す」と。王言はく「大いに善し。得んと欲する所の者は自ら疑難すること莫れ。今我れを名づけて一切の施と爲す。何等をか求めんと欲する」と。

〔一〇〕 蠱女。毒女に同じ。

〔一一〕 Sarvadāna-rāja ならんか。

〔一二〕 文殊師利。Mañjuśrī。妙德・妙首・普首・濡首・敬首・妙吉祥の六譯あり。常に釋迦如來の左に侍して智慧を司る。

〔一三〕 婆羅門。(Brāhmaṇa)。天竺四姓の一。婆羅賀摩拏。沒囉憾摩はその音譯なり。外意、淨行・淨志・淨意などの譯あり。大梵天を信仰して淨行を修する一族なり。

國政は其の手足を杌にして其の鼻耳を截れり。敗舡[八]して之を流したり。罪人は天を呼んで相屬けん事をと。道士之を聞いて愴然たり。悲楚して曰はく「彼は何人ぞや。厥の困むも甚だし。夫れ弘慈は己を恕して命を危くし、群生の厄を濟ふものは是れ[九]大士の業なり」と。

身を水に投じて波を盪かし流を截る。舟を引いて岸に著き、之を負ふて還居せり。心を勤めて養護し、瘡愈えて命全し。年を積みて四とせあり。慈育倦むなし。妻淫避くるなし。罪人とともに謀を通じて其の婿を殺さんとす。曰はく「子は之を殺さば吾れ子とともに居らん」と。罪人曰はく「吾れに手足なし。殺すこと能はざるなり」と。妻曰はく「子坐せよ、吾れに自ら計有り」と。詐りて首の疾を爲し、其の婿に告げて曰はく「斯れ必らず山神の所爲なり。吾れ之を解かんと欲す。明日君に從ふて以て福を祈らんことを求む」と。婿曰はく「大いに善し」と。

明日遂に行く。山岸の高さ四十里、三面壁立す。覩る者皆懼る。妻曰はく「術法あり、子日に向いて立て、吾れ自ら之を祭らん」と。婿即ち日に向へり。妻佯りて之を遶ること數周なり。推して山下に落したり。山の半ばに樹あり。樹葉緻厚に而も柔軟なり。道士樹に攀りて立つことを得たり。樹菓甘美にして之を食して自ら全し。

樹側に龜有り。亦日々菓を食ふ。樹に人有るを覩て懼れて敢て往かず。其の飢えしこと五日なり。昧を冒して菓に趣けり。兩つながら倶に害なし。遂に相摩近したり。道士超踊して龜に騎りぬ。龜驚いて跳び地に下りぬ。天神之を祐く。兩ながら倶に損無し。因りて故國に還れり。

弟は國を以て兄に讓れり。兄以て己を恕す。弘く慈んで群生を拯濟したり。王は其の國を治めたり。日々出でゝ布施し、四百里の內は人・車・馬・衆寶・飯食は自由なり。東西南北惠育之くの如し。王の功名周著にして十方は德を歎じたり。妻は婿を以て死したりと爲し、國人己を識るもの無けん。杌婿に負きて國に入れり。自ら陳ぶるに「結髮室家世の衰亂に遭ふ、身更に凋殘なり。天王の慈惠

【八】舡は船に同じ。
【九】大士。菩薩に同じ。

と聞き、其の武士に命じて曰はく『吾が首を得たるものは男女の使各々千人、馬千疋・牛千頭・金銀各々千斤を賞すべし』と。今子よ吾が首を取り、金冠及劍を明證と爲せ、彼の王の所に之かば、賞重多にして傳世の資たるべし。吾が心欣然たり」と。答へて曰はく「不仁にして道に逆ふ、寧ろ死すとも爲さざるなり」と。王曰はく「斯の翁、吾れを恃んで以て活く、而るに窮せしめんや、吾れ今首を以て汝に惠まん、汝をして罪なからしむるなり」と。起ちて十方を稽首して流涕して誓つて曰はく「群生危き者は吾れ當に之を安んずべし。眞に背き邪に向ふ者ならば吾れ當に三尊に歸命せしむべし。今首を以て子の窮するを拔き、子をして罪なからしむ」と。劍を引いて自ら毀ち以て彼の難を濟へり。

梵志は首・冠・劍を以て彼の王の所に詣りぬ。王は舊臣に問ふ。「仁王は力千人に當り、而も此の子の獲し所と爲らんや」と。舊臣頓首して地に躃る、哀んで慟痛して能く對ふるなし。更に梵志に問へり。梵志は本末を之れ陳ぶ。兆民路に躃れ巷に哭したり。或は血を吐くものあり。或は息絶えて尸視するものあり。彼の王逮び臣武士、巨細〔七〕嗼呼せざるなし。

王は天を仰いで長歎して曰はく「吾れ無道なる哉。天仁子を殘したり。仁王の尸及び首を取りて之を連ぬるに金薄を以てしたり。其の身殿上に坐著したり。三十二年天子となり、後乃ち其の子を立てゝ王と爲し、隣國は子之を愛せざるなし。仁王壽終りて卽ち天上に生ず。

佛、諸の比丘に告げたまはく、仁王とは我身是れなり。隣國の王とは目連是れなり。其の國群臣とは今の諸比丘是れなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

十二、波羅㮈國王經〔迦蘭王の本生〕

昔、波羅㮈國王に太子あり迦蘭と名く。兄弟二人あり。父王身を喪ふ。國を以て相讓る。適立者なし。兄は妻を將ゐて遁邀して山に入りて道を學ぶ。臨江の水に止まれり。時に他國に犯罪者あり。

【七】嗼呼。悲痛の聲をしぼりて嘆き悼むこと。

巻の第二

布施度無極章第一之二　（此に四章あり）

十一、波耶王經［波耶王の本生］

昔、[一]波羅㮈國王あり、[二]波耶と名く。[三]國を治むるに仁を以てす。干戈廢れ、杖楚滅し、囹圄毀たれ、路に呼嗟なし。群生所を得たり。國豐に民熾なり。諸天仁を歎じたり。王城の廣長四百里にて千六百里にて圍まる。王は日々此の中の人に飯はす。皆其の願に從ふなり。

隣國其の國豐熟にして災害消滅せしと聞き、臣と謀りて曰はく「彼の國の豐熟なると兆民富み樂しむ。吾れ之を得んと欲す。往いて必らず尅さん」と。臣妾僉曰はく「喜んで王の願に從はん」と。即ち師を興して仁國に之く。仁國の群臣以て聞す。之を距がんと欲したり。仁王慘然として曰はく、「吾れ一人の身を以て兆民の身を戮す、吾が一人の命を愛して兆民の命を杌にす。一々再食し一身に數衣あり。時とともに何ぞ諍はん。而して春天の德を去りて豺狼の殘を取らんや。吾れ寧ろ一世の命を去るとも大志を去らず、已を恕して群生を安んずるは蓋し天の仁なり」と。

[四]權に臣に謂つて曰はく「各々退いて明日更に議せん」と。夜則ち城を踰え、[五]遁邁して山に入り一樹の下に坐す。梵志ありて來る。其の年六十なりき。王に問ふて曰はく「彼の仁國の王萬福にして[六]恙無からんや」と。答へて曰はく「彼の王已に命を喪へり」と。梵志之を聞きて地に頓して哀慟す。王之を問ふて曰はく「汝の哀何ぞ甚だ重からんや」と。答へて曰はく「吾れ聞けり彼の王の仁は群生に及べり。潤帝釋の如し。故に馳せて歸命せんとしたれども而し彼れ凋喪せりとは。吾れ老窮なればなり」と。

王曰はく「彼の仁王なるものは我れ則ち是れなり。隣國の王吾が國の豐熟にして民熾んに賓多し

【一】波耶㮈。梵語（Vāranasi）なり。婆羅奈斯、婆羅痆斯とも音譯す。江繞とも譯す。恒河（Ganges）の流域に在り。今日の Benares なりといふ。有名なる鹿野苑は此の中にあり。
【二】波耶（Pāya）ならんか。定かならず。
【三】國いかにもよく治まりて仁德の及べるを見る。
【四】權。權方便の意ならん。
【五】遁邁。遁は避くるなり。去るなり。還るなり亦退還するなり。邁は往くなり。即ち遠行するなり。
【六】恙は憂なり。

行を亡さず、上聖と謂つべけんや。子は親を存して行を全うせり。孝を謂つべけんや。吾れ豺狼たり、生を殘して苟飽なり。今命は子に在り、赦されて戮さゞりき。後豈之に違はんや。今國を返さんと欲すれども何なる道に由らんや」と。對へて曰はく「斯く路を惑はすものは吾の爲なり」と。王を將ゐて林に出でゝ群寮と會したり。王曰はく「諸君長生を識るやいなや」と。僉曰はく「識らず」と。王曰はく「斯れ卽ち長生なり。今其の國を還して吾れ本居に返らん。今より伯仲となり禍福之を同うせん」と。太子を立つるの日、率土悲喜交ゝ幷びに壽を稱へざるはなし。貪王其の國に還りて更に相貢献す。遂に降平を致せり。

佛、諸の沙門に告げたまはく、時の長壽王とは吾が身是れなり。太子とは阿難是れなり。貪王とは調達是れなり。調達は世々毒意を我れに向けたり。我れ輒ち之を濟ふ。阿難と調達とは本自ら怨み無し。故に相害せざるなり。吾れ世世忍んで忍ぶべからざるは意を制して行を立てたり。故に今佛を得たり。三界の尊となりしなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。【一〇四】

【一〇四】異譯には佛海船の師となり、法橋もて河津を度る大乘道の輿もて一切の天人を度す云云との八十句あり。

し」と。

遂に傭賃に出でたり。臣と爲りて菜を種ゑたり。臣偶園に行きて菜を視るに甚だ好し。其の意狀を問ふ。園監對へて曰はく「市賃の一人園種するに妙なり」と。臣、現問して曰はく「悉く能くする所ならんや」と。曰はく「百工之れ巧なり。吾れ其の首と爲らん」と。臣其の王に請ふて爲に饌に上らしむ。太官に踰ゆるものあり。王曰はく「斯の食誰かこれを爲りしや」と。臣狀を以て對ふ。王卽ち之を取りて厨監たらしむ。每事可し。擢んでゝ近臣と爲せり。[一〇一]之に告げて曰はく「長壽王の子は吾れの重讎なり。今汝を以て蕃屛と爲さん」と。卽ち曰はく「唯然り」と。

王曰はく「獵を好まんや」と。對へて曰はく「臣之を好む」と。王卽ち出でゝ獵す。馬を馳らして獸を逐ふ。衆と相失ふ。唯長生とのみ倶に山に處る三日、遂に飢困に至る。劍を解いて長生に授く。其の膝を枕して眠る。長生曰はく「今汝を得んやいなや」と。劍を拔いて之を斬らんと欲す。忽ち父の命を憶ふ。曰はく「父の敎に違はば不孝と爲る」と。劍を復にして止む。

王、寤めて曰はく「屬よ、長生が吾が首を斬らんと欲せしを夢たり。將何か所有らんや」と。對へて曰はく[一〇二]「山に强鬼あり。喜んで灼熱となる。臣、自ら侍衞す。將何をか懼れんや」と。王復還りて臥せり。斯の如くする三たびなり。遂に劍を投じて曰はく「吾れは仁父の爲に爾の命を原赦せん」と。王、寤めて曰はく「夢に長生が吾が命を原ぬると見る」と。

太子曰はく「長生とは吾が身是れなり。父を念ひ讎を追ふて今に于る。吾が父沒せんとするに臨んで口に仁誡を遺せり。吾れ諸佛の忍辱惡來善往の道に遵ひ、而も吾れ極愚の性を含みて兩毒を以て相注がんと欲す。三たび父の誡を思ひ、三たび劍を捽てたり。願はくは大王よ、疾く重患を相誅除したまはんことを。身は死して神遷しなば惡意生ぜざらん」と。

王過を悔いて曰はく「吾れ暴虐たり。[一〇三]臧否を別たず。子の先君は高行純備なり。國を亡すも

【一〇一】食王はこゝで長生太子に汝兵法を知れりや否やと質したる一條は異譯にあり。

【一〇二】異譯には是れ故に山神の所爲なるのみと在り。

【一〇三】臧否。善惡のこと。

もなし。故に來りて乞匄せんとす。庶くは餘命を存せんことを。大王國を亡ふて吾が命窮れり」と。卽ち爲に哀慟したり。王、曰はく「子の來歸窮れり。而して正しく吾れ國を失へりに値ふ。以て子を濟ふものなし。亦痛ましからずや」と。涙を拉りて曰はく「吾れ新王が吾れを募る甚だ重しと聞けり。子、吾が首を取りて重賞を獲べし」と。答へて曰はく「然らず。遙に天子の仁、衆生を濟ふ潤ひ天地に等しきに服せり。故に本土を委ねたり。庶くは自らの濟ひを蒙らんことを。今勅にて首を斬る敢て命を承けざるなり」と。

王曰はく「身朽器たり、豈敢て保たんや。夫れ生るれば死有り。孰れか常存あらん。若し子取らず會、灰土となるなり」と。梵志曰はく「天王は天仁の惠を布けり。必らず命を殞して以て下劣なるものを濟はんと欲す。惟願くは散手相尋ねて去らんのみ」と。王卽ち尋いで之に從ふ。故に城門縛して以て聞せしむ。國人王を覩て哀號して國を動したり。梵志は賞を獲たり。

貪王は四衢に命じて生きながら之を燒き殺さんとす。群臣啓して曰はく「臣等の舊君なり。當に終沒に就くべきなり。乞ふ微饌を爲して以て死靈に贈らんことを」と。貪王曰はく「可し」と。百官黎民哀慟して路に塞がる。躃踊宛轉して天を呼ばざるものなし。

[九七]太子長生亦佯はりて樵を賣り父の前に當りて立てり。[九八]父之を覩て天を仰ぎて曰はく「父の遺誨に違ひ、兇を含んで毒を懷き、重怨を蘊み、禍を萬載に連ねんは孝子に非ざるなり。諸佛は[九九]四等にして弘慈の潤あり。德天地を韜み、吾れ斯の道を尋ねたり。身を殺して衆を濟ふも、猶孝道の微行だに獲ざることを懼る。況んや虐を爲して讎に報いる者なるをや。吾が言を替へざれば孝と謂ひつべし」と。

子は父の死を視るに忍びず、還りて深山に入る。王は命終せり。太子は哀呼して血は口より流れたり。曰はく「吾が君臨終に仁を盡すの誡ありと雖も、吾れ必らず之に違ひ當に[一〇〇]毒鴆を誅すべ

【九七】異譯には太子長生時に出でゝ道邊に在り人語るを聽聞して父王が貪王の爲にとらはれたるを知ると在り。

【九八】異譯には父當に死すべきを覩見して心中に悲痛したる長生を見て父は長生が恐くは其の瞋恚して父のために報怨せんことを見るとあり。

【九九】四等。又四無量心のこと四梵行ともいふ。慈maitri悲Karuṇā。喜Muditā。捨Upekṣā これなり。梵語はCatvāri-apramaṇāni. 平等に一切の衆生を利すれば四等心と名づくるなり。

【一〇〇】毒鴆。一種の毒鳥。人その羽を浸したる酒を飲めば死ぬといふ。こゝでは隣國の貪王を指すなり。

隣國の小王操を執りて暴虐なり。貪殘なる法を爲り、國荒れて民貧しく、群臣に謂つて曰はく「吾れ聞くならく長壽の其の國豐富にして斯を去ること遠からず、仁を懐きて殺さず、兵革の備へなし。吾れ之を奪はんと欲す。其れ獲べけんや」と。群臣曰はく「可なり」と。

則ち戰士を興して大國界に到れり。[九二]蕃屛の臣、馳せて其の狀を表すらく「惟願はくは豫に備へんことを」と。

長壽則ち群臣と會して議して曰はく[九三]「彼の王來れりとは惟吾が國民の衆寶多きを貪るのみ。若し之と戰はゞ必らず民命を傷り、己を利し民を殘して貪にして仁ならず。吾れ爲さゞるなり」と。群臣僉曰はく「臣等舊軍謀兵法を習ふ。請ふ自ら之を滅さん。聖恩を勞はすこと無れ」と。王曰はく「勝たば則ち彼れ死す。弱ければ則ち吾れ喪ふ。彼の兵も吾が民も皆天の生育なり。身を重んじて命を惜む。誰か然らざらんや。己を全うして民を害するは賢者之を爲さゞるなり」と。

群臣出でゝ曰はく「斯れ天仁の君失ふべからざるなり」と。自ら相撿率して兵を以て賊を拒めり。長壽之を覺る。太子に謂つて曰はく「彼れ吾が國を貪る。毒を懐きて來れり。群臣吾が一人の身を以て民の命を殘せんとす。[九四]今吾れ國を委す。庶くは天民を全うして其の義可ならんや」と。太子曰はく「諾す」と。父子城を踰えて卽ち名族を改めて山草に隱る。

是に於て貪王遂に其の國に入る。群臣黎庶其の舊君を失ふて猶し孝子の其の親を喪ふがごとく、哀慟して[九五]躃踊し、悶然らざる無し。貪王は之に黄金千斤錢千萬を募りたり。

長壽道の邊りに出でゝ樹下に坐して精思すらく、衆生の生死勤苦は非常・苦・空・非身を覩ずして欲に惑はされ、其の苦しみ無數なるを悲愍せらる。[九六]遠國の梵志、王の施を好みて衆生の命を濟ふと聞きて遠くより來り窮して樹下に於て息めり。倶に相問訊したり。各々本末を陳べたり。

梵志驚いて曰はく「天王何に緣りてか茲の若くならんや」と。涙を流して自ら陳べて「吾れ餘年幾

て釋尊に歸して中心人物となれり。

【九一】長壽王經(大正No.161)と異譯なり。此の長壽王經に從へば舍衞國の祇樹給孤獨園に於て說けりと有り。

【九二】蕃は敵なり。屛は牆なり。まがき。へだて。卽ち王室の守護なり。

【九三】長壽王の崇高なる非戰論以て可ㇾ味。

【九四】長壽王遂に戰はずして國を隣國の王に委して太子長生と遁世して山に入れり。

【九五】躃踊。かなしみて胸をうちをどりあがること。禮記に躃踊は哀の至りなりとあり。

【九六】遠國の梵志。異譯に遠方の婆羅門とあり。

恩愛絶ち難く、生死止み難し。吾れ倫恩愛の本を絶ちて生死の神を止めんと欲す。今世之を抒めども盡きずんば世々之を抒む。卽ち住して兩足を倂せて瓢にて海水を抒みて、[八三]鐵圍外に投じたり。天有り、[八四]遍淨と名く。遙かに之を聞けり。深く自惟して曰はく「昔、吾れ錠光佛の前に於て斯の人其の志願を獲たりしと聞く。必らず世尊となりて吾が衆生を度せん」と。天卽ち下りて其を助けて水を抒みたり。十分八を去れり。

海神悔い怖れて曰はく「斯れ何人ぞや。而も無極の靈あらんか。斯の水盡きん、吾が居壞するなり」と。卽ち衆寶を出して其の諸藏を空にして以て普施に與ふ。普施受けずして曰はく「唯吾が珠を得んと欲するのみ」と。

諸神其の珠を還したり。普施其の水を返して其の本土に旋れり。路を尋ねて布施す。過ぎにし所の國國に貧民無し。處々の諸國操を改めざるはなし。[八五]五戒・[八六]十善を以て國政を爲め、獄を開いて大赦せり。潤ひ衆生に逮べり。遂に佛を得るに至れり。

佛、諸の沙門に告げたまはく、普施とは我が身是れなり。父とは[八七]白淨王是れなり。母とは卽ち吾が母[八八]舍妙是なり。道士女とは今倶夷是れなり。時の銀城中の天なるものは今現に[八九]阿難是れなり。金城中の天とは[九〇]目連是れなり。琉璃城中の天とは舍利弗是れなり。菩薩は劫を累ねて四恩を勸行す。誓願して佛たらんと求め、衆生を拯濟す。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

十、[九一]長壽王の本生

昔、菩薩あり大國王と爲り、名づけて長壽と曰ふ。太子を名づけて長生といふ。其の王は仁惻にして恒に悲心を懷き、衆生を愍傷す。誓願濟度精進して倦まず。刀杖を行はず。臣民怨みなし。風雨時節、寶穀豐沃なり。

【八三】鐵圍外。鹹海を圍繞して一小世界を區劃する鐵山なり。鐵より成るといふ。梵語、Cakravāḍa なり。須彌山を中心として外に七山八海あり第八海は卽ち鹹海にして瞻部等の四大洲此にあるなり。

【八四】遍淨。梵語（Śubhakṛtsna）遍淨天なり。色界（Rūpadhātu）第三禪天の第三天此の天の淨光周遍するが故に。

【八五】五戒。殺生・偸盜・邪婬・妄語・飮酒の制戒なり。

【八六】十善。右五つの制戒に左の六を合していふ。卽ち惡口、倚語、貪欲、瞋恚、邪見の五を制することなり。五戒十善は卽ち能く理に隨順するを以て善と名くるを得るなり。

【八七】白淨王。釋尊の父王淨飯王（Śuddhodana）のこと迦毘羅衞城（Kapilavastu）の王たり。

【八八】舍妙。釋尊の母君Māyā夫人のことなり。

【八九】阿難。阿難陀 Ānanda の略。歡喜慶喜の譯。斛飯王の子なり。提婆達多の弟なり。佛成道の夜に生るといふ。

【九〇】目連。摩訶目乾連（Mahāmaudgalyāyana）の略。佛十大弟子の一人神通第一と稱せらる、初の舍利弗と六師外道の一人なれども後緣により

を濟ふと深思したり。毒歇んで首を垂れたり。之を登りて城中に入れり。天人あり。喜辭すること前の猶し。請ふて留ること三時なり。所志を供へんことを願へり。期竟りて辭退す。又神珠一枚を送れり。「明耀なること百六十里なり。珠の所在に衆寶尋ね從ふて其の明內に滿つ。志の所欲に在らば、求めて獲ざるものなし。子、若し無上正眞覺道を得たらば、吾れ願くは弟子と爲り最明の智あらん」と。曰はく「必らず爾の願を獲ん」と。普施珠を得て曰はく「斯れを以て衆生の困乏を濟ふに足らん」と。

其の舊居に返れり。海の諸の龍神、僉會議して曰はく「吾等巨海なり、唯斯の三珠ありてのみ吾が榮華を爲せり。道士は悉く得たり。吾等何ぞ榮えんや。寧ぞ都て諸の寶を亡ふても斯の珠を失はざらんや」と。

海神化して凡人と爲り、普施の前に當りて立ちて曰はく「吾れ仁者は世上の寶を獲たりと聞けり。觀るを得べけんや」と。卽ち以て之を示したり。神は其の首を搏ちて卽ち其の珠を取りたり。普施惟て曰はく「吾れ險阻を歷て巨海に經跨して乃ち斯の寶を獲たり。以て衆生の困乏を拯濟せんと欲したるに反つて斯の神の爲に奪はれたるか」と。曰はく「爾、吾れに珠を還せ。不ば吾れ爾の海を竭さん」と。

海神答へて曰はく「爾の言は何ぞ虛なる。斯の巨海は深廣にして測り難し。孰れか能く之を盡さんや。天日殞つべし。巨風却くべし。海の竭し難きは猶し空の毀ち難きがごときなり」と。

普施曰はく「昔、吾れ〔八二〕錠光佛の前にて道力を得て衆海を反覆し、指して〔八三〕須彌を擢んで、天地を震動せしめ、又諸刹を移さんことを願へり。佛、吾が志に從つて吾が願を與へたり。吾れ今之を得たり。今爾、鬼魅糸髮の邪力、焉んぞ能く吾が正眞の勢を竭さんや」と。卽ち經を說いて曰はく「吾れ無數劫よりこのかた母乳の湩を飮みたり。啼哭の淚は身死して血流る。海の受けざる所なり。

【八二】錠光佛。梵語（Dīpaṁkara）燃燈佛ともいふ。提和竭、提洹竭、大和竭羅は音譯なり。

【八三】須彌（Mt. Sumeru）のこと。修迷樓、蘇迷盧等は音譯、妙高、妙光、安明、善積、善高はその譯なり。佛敎の解釋もて一小世界の中心を意味す。帝釋天所住の金剛山なりといふ。

吾れ當に[七五]無蓋の慈を興して以て彼の毒を消すべし。夫れ兇は卽ち火なり。慈は卽ち水なり。水を以て火を滅す。何ぞ嘗て滅せざらんや」と。卽ち坐して慈定を興すらく「願くは衆生早く[七六]八難を離れ、心に惡念を去り、佛に逢ふて法を見、[七七]沙門と與に會し、無上正眞の明道を聞く事を得、心開け垢滅して吾が所見の如からしめん事を」と。

斯の慈定を興したるに蛇毒卽ち滅して首を垂れて眠れり。普施其の首に登りて城に入れり。城中に天神有り。普施の來るを覩て欣豫として曰はく「久しく聖德に服し、今玆に來翔し、吾が本心を成ずるなり、願くは留まること[七八]一時九十日ならんことを」と。普施然許したり。天王卽ち正事を以て近臣に委付したり。身自ら饌を供ふ。朝夕肅懷せり。[七九]諸佛の非常・苦・空・非身の高行と濟衆の明法とを稟受したり。時日食畢れり。普施路を進む。天王明月の眞珠一枚を以て之に送りて曰はく「珠を以て自ら隨明すること四十里なり」と。志と願とを發して云はく「衆の寶は滿足す。若し後に佛たるを得たらんに、願くは弟子と爲り親しく聖側に侍らん」と。普施曰はく「可し」と。

卽ち復た前行するに黃金城を覩たり。嚴飾銀に踰えたり。又毒蛇あり。城を圍ふこと十四匝なり。巨軀前に倍したり。首を擧ぐること數丈なり。普施復た弘慈の定を思ふ。蛇毒卽ち消えて首を垂れて眠る。之に登りて城中に入る。天人あり。普施を覩て歡喜して曰はく「久しく靈耀に服したり。玆に翔ぶ甚だ善し。願くは留ること二時百八十日ならんことを。吾願くは養を盡さん。惟威神を留めんのみ」と。卽ち之を然許したり。留りて爲に無上の明行を說法したり。訖りて卽ち辭退したり。天人復た神珠一枚を以て之を送れり。「明耀なること八十里なり。志の所願、衆寶は其里數に滿てり。若し子道を得たらんに願くは弟子とならん。神足無上ならん」と。其の神珠を受けたり。

卽ち復た路を進む。[八〇]琉璃城を覩る。光耀前に踰えたり。又毒蛇あり。巨軀甚大なるなり。城に遶ること二十一匝なり。首を仰げて目を矚らし、彼の城門に當れり。復坐して普慈の定は誓つて衆生

と經典にいへり。

【七四】箕箒。ちりとりや、はうき、卽ち雜役のこと。

【七五】無蓋。廣大無邊なる慈悲の事無上莫など丶同じ卽ち佛陀の慈悲なり。卽ち所として蓋はざることなきをいふ。

【七六】八難。見佛聞法するに障りある八ケ處なり。卽ち、一、地獄。二、餓鬼。三、畜生。四、鬱單越。五、長壽天。六、聾盲瘖瘂。七、世智辨聰。八、佛前佛後なり。

【七七】沙門。室囉摩拏(Śramaṇa)なり。息、息心、貧道などと譯す。功勞又は勤息とも譯す。勞苦して佛道を修行し又は勤修して煩惱を息むる義なり。

【七八】一夏九十日のこと。夏安居の意味。

【七九】諸佛出世の本懷は衆生をして非常・苦・空・非身等の原理をさとらしめて佛道修行せしむるに在りといふも過言にあらざるべし。

【八〇】琉璃。梵語(Vaidūrya)吠琉璃なり。七寶の一なり。遠山寶、不遠山寶など譯す。

こと是の如し。

九、普施商主の本生[六七]

昔、菩薩あり。[六八]四姓より生る。地に墮して、即ち曰はく「衆生は萬禍なり。吾れ當にこれを濟ふべし、佛儀を覩ず、明法を聞かず、吾れ當に其の耳目を開きて其の盲聾を除き、之をして無上正眞衆聖の王、明範の原を覩せしめ、聞かせしむべきなり。布施して誘進すれば服從せざるなし」と。[六九]九親驚いて曰はく「古世よりこのかた未だ幼孩にして斯る言葉を爲せしを聞かず、將、是れ天龍鬼神の靈ならんや。當に之を卜せしめん」と。即ち親に答へて曰はく「吾れは上聖の化懷する所と爲り、普明の自然は彼の衆妖に非ず、愼んで疑ふこと無れ」と。言畢りて即ち默す。

親曰はく「兒は乾坤弘潤の志あり、將、凡夫に非ざらんや」と。兒を名けて[七〇]普施といふ。年十歲あり。佛の諸典籍流俗衆術貫綜せざるなし。親を辭して衆を濟ひ、貧乏に布施せり。親曰はく「吾れに最福の上名あり。爾意を恣にして衆貧に布施すべし」と。對へて曰はく「足らず。乞ふ沙門と作らんことを。吾れに[七一]法服、[七二]應器、[七三]策杖を賜へ。斯を以て衆を濟ふは即ち吾が生の願ひなり」と。親は兒の始め生れたるの誓を憶ひ、辭禦なし。即ち其の願により沙門と爲ることを聽したり。周旋教化して一大國を經たり。國に豪姓有り。亦衆書に明かなり。普施の儀容堂々として光華煒曄なり。厥の性惔怕にして淨なること天金の若く、上聖の表ありて將に世雄爲らんとするを覩て、普施に謂つて曰はく「欲あらば相告げよ。願くは聖人に足る。吾れに陋女あり。願くは[七四]箕箒の使たらしめよ」と。答へて曰はく「大いに善し、須らく吾を還すべし」と。

即ち路を進めて海邊に之く。附載して海を度れり。岸に上りて山に入る。無人處に到れり。遙かに銀城を覩る。宮殿は明好なり。時に毒蛇あり、城を遶りて七匝あり。體の大きさ百圍あり。普施の來るを見て、仰然として首を擧げたり。普施念じて曰はく「斯れ毒を含むの類必らず害心あり。

【六七】佛說大意經（大正 No. 177）と異譯なり、劉宋求那跋陀羅（guṇabhadra）の譯。こゝでは普施は大意となり父の名は摩訶檀母の名は栴陀とあり。國名は歡樂無憂にして王は慶慈哀なりき。舍衞國祇樹給孤獨園の說法なり。兩者の結構大差なし。

【六八】四姓。一、婆羅門（Brahmaṇa）二、刹帝利（Kṣatriya）三、吠舍（Vaiśya）四、首陀羅（Śūdra）。印度の四つの社會階級にしてこゝではその何れかの一を指せしならん。恐くは第三吠舍の階級ならん。

【六九】九親。九族と相同じ。親戚一同ともいふ意なり。父母兄弟妻子等の親類なり。

【七〇】異譯は大意とあり。年十歲は異譯には十七歲とあり。

【七一】法服。法衣なり。三衣の總名なり。三衣に法制あり。法の如く製すれば法服と名く。

【七二】應器。比丘の食器、鐵鉢のこと。梵語 Pātra 鉢多羅なり。應器はその譯名なり。又應量器ともいふ。法に應ずる食器の意味なり。

【七三】策杖。又錫杖といふは普通なり。十八物の一。梵語、喫棄羅（Khakkhara）なり。智杖又は德杖ともいふ。功德を行ずる本なるが故に聖人の表幟、賢士の明記、道法の正幢なり

るに逢ふて曰はく「爾、之く所あらんや」と。答へて曰はく「仙歎の所に之き、庶くは餘命を全ふせん」と。仙歎即ち還りて王より金五百兩を貸り、藥を市ひて以て療す。病者悉く瘳ゆ。

自ら商人と海に入りて寶を採らんとす。獲たる所弘く多し。國に還り、舟を置きて歩行す、道乏しく水無し。仙歎一の井水を得たり。等人を呼んで之を汲み、却りて自ら取りて飲む。商人其の得たる所の白珠は光り耀きて衆に絶せしを覩て、貪りて尤惡を爲り、聖を毀ちて仁を殘せんとす。共に仙歎を排して之を井に投ず。菩薩の仁德は神に感じ祇を動かしたり。天神接承して毀傷せざらしむ。商人國に還れり。王曰はく「仙歎何にか之けり」と。對へて曰はく「國を去りて別れたれば之く所を知らず」と。曰はく「爾、乃ち之を殺したるか」と。曰はく「不らず」と。

仙歎は井に於て空傍の穴を覩たり。之を尋ねて而も進み、彼の家の井を出でたり。七日ばかりにして行きて其の本國を得たり。王、曰はく「何に緣りてか空しく還りしや」と。對へて曰はく「不遇なり」と。王は思を靖にして曰はく「其れ必らず以有らんか」と。商人を召して問はく、「爾誠に之を首にせしかども即ち活く。欺ける者は死なり」と。即ち皆之を首にして獄に付して罪を定む。仙歎涕泣して馳せて宮門に詣る。叩頭して罪を請ひき。王曰はく「政に違するなり」と。又重ねて請ふて曰はく「愚者は倒見にして未だ明に責むるに足らず、其の無知なるに原るなり」と。

王は仙歎の仁覆へるを嘉し、商人の凶罪を原ねて、勅して物を還さしむ。商人僉曰はく「仙歎は佛を奉ぜざるものなり。豈斯の仁有らんや」と。各名寶を擇んで以て之を還したり。仙歎各々其の半ばを受けたり。商人叩頭して曰はく「祐を蒙りて命全し。願くは盡く納めんことを」と。斯に於て之を受けて以て王に金を還したり。又大いに布施したり。王逮び臣民、相率ゐて戒を受けたり。子は孝に臣は忠に、天神榮衞して國は豐に民は康かなり。四境德に服して善を稱へざるは無かりき。

佛のたまはく「時に仙歎なるものは是れ我が身なり」と。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずる

〔六四〕窠藪と爲す。常に已を危くするを恐る。豈敢て之を有せんや。願くは士衆之を輩いて以て吾が憂を除かんことを」と。

王、曰はく「誠なる哉。斯の言よ」と。卽ち之を遣はして去らしむ。退きて齋房に入り、心を靖かにして思を精したり。卽ち醒寤して曰はく「身尙保らず。豈況んや國土妻子衆諸久しく長ずるを得べけんをや」と。卽ち佛經を撰錄し、文を誦して義を釋したり。心の垢照除せらる。貞臣を進め忠諫を納れ、大いに其の國を赦したり。民の寶を還し、群僚を序し、寬正を議したり。群臣に謂つて曰はく「夫れ佛經の妙義重戒を覩ざる者は其を聾盲となす。彼の理家は富みたれども唯我は貧し」と。卽ち國界に勅して財寶を散出す。貧困を賑給して民の所欲を恣にす。佛廟寺を立て、繒を懸けて香を燒き、諸の沙門に飯はす。身自ら〔六五〕六齋なりき。斯の如くすること三年なりき。四境寧靖なり、盜賊都て息み、五穀熟成にして民に飢寒なかりき。王は後壽終りて卽ち第二天に上生したり。

佛、諸の沙門に告げたまはく、時に王なる者は吾が身是れなり。理家なるものは〔六六〕鶖鷺子是れなり。王に覩國を勸めし者は阿難是れなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

八、仙歎理家本生

昔、菩薩あり。大理家と爲り、名けて仙歎と曰ふ。財富みて無數なり。佛の明典を覩て、世は無常にして榮命保ち難く、財は已の有に非ず、唯布施の功德のみありて朽ちざるを覺る。黎民に告げて若し貧乏なるもの有らば、願を恣にして之を取れと。斯の如くすること數月なり。

時に政寬に民富み、財の乏しき者無し。仙歎念じて曰はく「惟當に藥を市ひて衆疾を供護すべきのみ」と。卽ち良藥を市ひて衆生の命を濟ふ。慈育普く至り、恩周ねからざるなし。累年の惠み、德香遠く熏りて四方の病者馳せ來れり。首尾其の弘潤を歎じたり。德を以て天に配し、財賄り都盡し、身づから行きて寶を採り、家を去ること百餘里、一水上に於て數乘の車が重病者を載せた

〔六四〕窠藪。住家・集合地といふ意より轉じて根源の事ならん。

〔六五〕六齋日を守りて佛道修行せしこと。六齋日とは八、十四、十五、二十三、二十九、三十日の六日なり。

〔六六〕鶖鷺子。舍利弗のこと。鳥の名に因みしは或は言ふ母の眼彼の鶖鷺のそれに似たると或は言ふ母の才辯は猶鶖鷺のごとし何れなるか定かならず經典にこの字を用ふる極めて多し。

地主の王は卽ち妻子の罪を釋せり。二王相見え、其の原を尋問して、具さに所由を陳したり。國に巨細なく涙を墮さざるものなし。地主の王國を分ちて治む。故國の臣民は王の所在を尋ねて、率土迎へ奉れり。二國の君民は一たびは悲めども、一たびは喜びたり。

時に王といふは吾が身是れなり。妻といふは(五七)倶夷是なり。子といふは(五八)羅云是れなり。天帝といふは調達是れなり。山中の梵志といふは(五九)舍利弗是れなり。彼の國王とは(六〇)彌勒是れなり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

七、國王の本生

昔、菩薩あり。大國王と爲れり。民を理るに正しきを以てし、心に偏頗なし。然も遊觀せず。國相啓して曰はく「願くは一たび出でて遊びたまはんことを」と。王曰はく「大いに善し」と。明日卽ち出でたり。人民悅豫して普く其の所を得たり。國富み、姓の居舍は妙雅に、瓦は金銀を以てし、服飾道に光けるを覩て曰はく「吾が國富める哉」と。心甚だ欣豫せらる。宮に還りて之を憶ふ。曰はく「斯の諸の(六一)理家何ぞ國を益せんや。勅して其の財を錄して(六二)軍儲を爲らん」と。

一理家あり。其の私財三千萬ありと疏を以て王に現ぜり。王怒りて曰はく「何ぞ敢て面り欺かんや」と。對へて曰はく「少來生を治するに凡そ私財あり。宅中の寶なり。五家の分は吾が有に非ざるなり」と。曰はく「何をか私財と謂ふ」と。對へて曰はく「心に佛業を念じ、口に佛教を宣べ、身に佛事を行ず。五家分を捐てて佛の宗廟を興し、賢衆に敬事して其の衣食に供ふ。(六三)蜎飛蠕動蚑行の類を慈養し、心、安んぜざる所は以て之を加へず。斯れは之れ、福德は我が之所に隨ふこと、猶し影の形に隨ふが如し。所謂私財なり。五家分とは一には水、二には火、三には財、四には官、五には命盡と爲す。身は家寶に逮び、之を世に捐てゝ已に當に獨り逝くべし。殃福の門は未だ之く所を知らず。世、幻の如きを覩る故に敢て之を有せざるなり。五家分を計らば十億有るべし。斯は禍の

【五七】倶夷。耶輸陀羅(Yaśodharā)のこと。釋尊の夫人なり。Gopikā は倶夷なり。相同じ。善覺王の女なり。

【五八】羅云。羅睺羅(Rāhula)なり。倶夷夫人の子なり。十五歳にして父釋尊の弟子となり阿羅漢果を成じて十大弟子の中の一人密行第一となれり。

【五九】舍利弗。Śāriputra なり。十大弟子の第一人者、釋尊の滅より早く逝けり。智慧第一の稱あり。

【六〇】彌勒。Maitreya 將來佛のこと。五拾六億七千萬歳の後佛となるといふ記別を持てり。

【六一】理家。富豪、財産家のこと。

【六二】軍儲。軍費、軍需品のこと。

【六三】微細なる飛蟲及び蛆蟲のこと。

其の宿を仰ぎ視てこれ國を失へりと覩たり。[五五]心を靖かにして息を禪すれば、天帝釋が貪嫉して國を奪ひ、委頓して疲疵せられたるを覩たり。道士、神足を以て忽然として王の所に之けり。曰はく「將に何なる求めを欲して志を勞すること玆の若くあるべきや」と。曰はく「吾が志の存する所は子具に之を知れり」と。

道士卽ち化して一轅の車を爲りて以て王に送れり。還りて展に各々離れたり。

天化して梵志となり、復其の車を乞ふ。卽ち復之を惠めり。轉進すれども未だ彼の國に至らざること數十里なるに、天、復化して前の梵志となり、來りて銀錢を索む。王、曰はく「吾れ國を以て人に惠めり、子の錢を侻忘したり」と。梵志曰はく、「三日にして必ず吾が錢を還すべし」と。王卽ち妻子を以て各一家に質として銀錢一千を得たり以て梵志に還したり。

妻は質家の女に侍りぬ。女浴するに身の珠璣衆寶を脫して以て架に懸著せり。天化して鷹と爲り、衣と寶とを撮りて去れり。女云はく「婢盜みたり」と。之を錄して獄に繫ぐ。

其の兒は質家の兒と倶に臥す。天、夜往いて質家の兒を殺したり。死家兒を取りて獄に付したり。母子倶に繫がる。飢え饉えて形を毀てり。呼嗟すれども救ひ無し。吟泣すること終日、罪成りて市に棄てらる。

王は賃して銀錢一千を得たり。行きて妻と子とを贖はんとす。市を歷て之を覩る。卽ち十方諸佛を存念す。自ら悔過して曰はく「吾が宿命惡んぞ玆に致らんや」と。心を靖にして禪に入れり。神通の明は天の所爲なりと覩る。空中に聲有りて曰はく「何ぞ急に之を殺さざらんや」と。王曰はく「吾れ聞く。帝釋は普く衆生を濟はんに赤心惻愴たり。育むに慈母よりも過ぐ。[五六]含血の類祐を蒙らざるはなし。爾爲に惡緣帝位を獲ること無からんや」と。釋、重毒を懷き、惡熟して罪成り、生じて太山に入れり。天人龍鬼善を稱せざるはなし。

【五五】此の道士通力ありしを以て禪定に入りて王の動靜を見たるなり。

【五六】含血の類。衆生と相同じ。

ることを得たり。臣民壽を稱へり。悲喜交々集へり。諸天、德を歎じたり。內に施すといひつべけんや。[四九]四王は擁護し衆毒消歇したり。境界病無し。五穀豐熟し、牢獄烈毀す。君臣は欣々たり。

佛、諸の沙門に告げたまはく「時に乾夷國の王といふは卽ち吾が身なり。逝心といふは[五〇]調達是れなり」と。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

六、國王の本生

昔、菩薩あり。大國王となれり。民を理むるに慈を以てし、己を恕して彼を度す。月月巡行し、貧乏を拔濟するに、鰥寡には藥、糜粥を以てせられ、出でて巡行したまふ毎に則ち命じたまふ。「後車には具に衆寶衣被醫藥を載せよ」と死者あれば之を葬り、貧民を覩たまふ毎に輙ち自ら咎責したまふ。「君貧德なれば民窮するなりと。君富德なれば民家足る。今民貧しければ則ち吾れ貧し」と。王の慈み斯の若し。名、十方に被れり。第二帝釋、坐して其が爲に熱す。釋、心に卽ち懼れて曰はく「彼の德は巍々たり。必ず吾が位を奪はん。行卽ち畢らんや」と。

卽ち自ら變化して老[五一]梵志と爲り、王より銀錢一千を乞ふ。王卽ち之を惠む。曰はく「吾れ[五二]西窶して人の之を盜まんことを恐る。願くは以て王に寄せんことを」と。王、曰はく「吾が國に盜無し」と。重ねて曰はく「王に寄せんことを」と。王卽ち之を受けたり。

天、又化して梵志と爲り宮門に詣れり。近臣以て聞す。王卽ち現ぜり。梵志歎じて曰はく「大王の功名は[五三]八極に流布して、德行は希有なり。今故に遠くより來りて乞はんとす」と。曰はく「吾れ、宿薄く、祐生したれども凡庶にあり。尊榮を欣慕して斯の國を乞はんとす」と。王、曰はく「大いに善し」と。卽ち妻子と輙く輕乘して去れり。

天帝復化して梵志と爲れり。王より車を乞ふ。車馬を以て之に惠めり。

妻子と路を進め、山に依りて止宿せり。五通道士あり。王とは友なりき。王の德を[五四]悅憶せらる。

にして劫簸なり。分別時節の意味にしてこれは長時のことにして通常の年月を以て算し能はざるなり。

【四六】五濁。娑婆世界の濁惡世を意味す。劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁なり。

【四七】天人師。如來十號の一。梵名 Deva-manuṣya-śāstṛ 提婆摩菟舍喃なり。天と人との師なればなり。

【四八】樹神。梵語 Vṛkṣadevaḥ ならん。樹の精のことならん。

【四九】四王。六欲天の第一なる四王天のこと。

【五〇】調達。提婆達多(Devadatta)のこと。天熱天授は譯。斛飯王の子にて阿難の兄に當る。釋尊の從弟なり。

【五一】梵志。Brahmacārin なり。婆羅門四時期の一。或は梵天法を欣求するものを指す。

【五二】西窶。老骨と成りしを意味す。

【五三】八極。極は窮りなり。東西南北四維はそれなり。土地の窮り盡る所なり。

【五四】よろこべる意味なり。倪は悅に從へり宋藏に依りてなり。

く、「上聖と功を齊しうす」と。天龍善神の道に志あるもの愴然たらざるはなし。進行して或は[39]溝港・[40]頻來・[41]不還・[42]應眞・[43]緣一覺を得たり。[44]無上正眞の道意を發するものあり。斯の猛志を以て諸菩薩の[45]九劫の前に跨がり、誓ひて[46]五濁に於て[47]天人師となりて諸の逆惡を度し僞りて道に順ぜしむ。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

五、乾夷王の本生

昔、菩薩あり大國王と爲り、國を乾夷と名け、王を偏悅と號く。內は明にして外は仁なり。顏は和かに正平なり。民は其の化に從ふ。獄に繫囚なし。黎民貧乏にして求め索むる所を恣にすれば慈惠和潤にして恩あること帝釋の如し。他國の逝心王の仁施は衆の所欲に從ふに服せり。群邪妬嫉して僞を以て眞を毀てり。宮門に詣りて曰はく「吾れ聞くならく、明王の黎民の困乏を濟ひたまふは猶天潤の普く覆へるがごとし」と。衛士に告げて曰はく「爾聞すべけんや」と。近臣以て聞したまふ。王即ち現じたまへり。

逝心現じて曰はく「明王の仁澤は四國に被り、有識の類咨嗟せざるは靡し。敢て所願を執りて以て上聞したまはんと欲す」と。王曰はく「大いに善し」と。逝心曰はく「天王は施を尙ぶ。求めば則ち違ふこと無し。時に宜しく應に人首を用つて事を爲すべし。願くは王の首を乞ひたてまつりて以て望に副はん」。と王の曰はく「吾が首を何ぞ好んで之を得んと欲するや。吾に衆寶有り、益して以て子に惠まん」と。逝心受けず。

又工匠をして七寶の首を作り各〻數百枚ならしめて以て逝心に與ふ。逝心曰はく「唯王の首を欲せんのみ」と。王、未だ嘗て人に逆はず、即ち自ら殿を下り、髮を以て樹に纏ひて曰はく「吾れ首を以て子に惠まん」と。逝心、刀を拔いて疾く步みて進めり。[48]樹神之を覩て其の無道を忿りて手を以て其の頰を搏てり。身即ち繚戾れり。面は反り向きと爲り、手は垂れて刀を隕せり。王、平康な

【三九】溝港。須陀洹(Srotāpannaḥ)のことなり。譯して入流、至流、預流といふ。今いふは流水處を取つていふなり。小乘四果の第一、一切の聖道を說いて流となし、能く相續して涅槃に向ふが故に。

【四〇】頻來。斯陀含(Sakṛd-āgāmī)のこと、一來と譯す。玄應曰はく頻來とは訛なり頻來と作るべしと。小乘四果の第二。欲界の煩惱を斷じながら人天に一往來するが故に。

【四一】不還。阿那含(Anāgāmin)のこと。不來、不還と譯す。煩惱を斷盡して欲界に還來せざる位なり。小乘四果の第三なり。

【四二】應眞。阿羅漢(Arahat)のこと。應眞、應供、應義と譯す。一切の煩惱を斷盡したる小乘第四の聖者なり。

【四三】緣一覺。辟子佛のことなり。梵語 Prateka-Buddha のこと。緣覺、獨覺は其の譯なり。十二因緣飛華落葉を觀じて自ら無常を覺悟して斷惑證理する佛なり。

【四四】無上正眞。梵語 Anuttara samyak saṃbodhi なり。阿耨多羅三藐三菩提はその音譯にして佛の智慧のこと。眞正に偏く一切の眞理を知る無上の智慧を意味するなり。

【四五】九劫の劫は梵語 Kalpa

くれば愼んで懸無からんことを。便ち疾く民に勅して皆穀を種ゑしめよ」と。王即ち命の如し。男女業に就き家修らざるは無し。稻は化して[三四]蓏と爲れり、農臣以て聞す。王の曰はく「須く熟せしむべし。蓏は實に國を覆へり。皆[三五]稻穬を含めり。中に數斛を容す。其の味苾芬たり。香一國に聞えたり。國を擧げて欣懌び、王の德を歎詠す。四境の讎國は皆臣妾と稱したれば黎民雲集して國界日長し。率土戒を持し三尊に歸命す。王及び臣民壽終りし後皆天上に生じたり。

佛言はく「時に貧人といふは吾が身是れなり。劫を累ねたる仁惠は衆生を拯ひ濟へり。功は徒らに朽ちずして今果して佛たるを得たり。[三六]天中天と號す。[三七]三界の雄となれり」と。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。」

四、菩薩の本生

昔、菩薩あり。時に[三八]逝心と爲り恒に山澤に處る。專精に道を念じて諸の惡を犯さず。果を食し水を飲みて徼餘を畜へず。衆生の愚癡自ら衰ふるを慈しみ念じ、危厄を覩る每に命を沒して之を濟へり。行きて果蓏を索めり。道に乳虎に逢ふ。虎、乳したるの後、疲れ困んで食に乏しく、飢饉にて心荒み、還りて子を食はんと欲す。菩薩之を覩て愴然として心悲めり。衆生世に處して憂苦し其れが爲に量り無し。母と子相呑みて其の痛さ言ひ難きを哀しみ念じ、哽び咽んで淚を流し身を廻して四顧して以て虎に食せしめて子の命を濟ふべきを索めたれども都て所見無かりき。內に自ら惟かりて曰はく「夫れ虎は肉食の類なり」と。

深く重ねて思惟するに「吾れ志を建て道を學ぶ。但し衆生重苦に沒在せしを以て之を濟ひ、禍を去るを得て身命永く安んぜしむるを欲せんが爲なるのみ。吾れ後に老いて死す。身は棄捐に會ふ。慈み惠んで衆を濟ひ德を成ずるには如かず」と。即ち自ら首を以て虎口の中に投ぜり。頭を以て與ふるは疾く死して其の痛さを覺えざらしめんと欲せんのみ。虎母子倶に全し。諸佛は德を歎ずら

[三四] 草類に生ずる實にして即ち核なしといふ。

[三五] 稻の熟せざるものなりといふ。

[三六] 天中天。佛の尊號なり。梵語はDevati-Devaḥなり。天は人之を尊ぶ。然るに佛は更に天の尊ぶ所なればかくいふ。

[三七] 矢張佛の別稱なり。三界は欲界、色界、無色界なり。三界の雄者は即ち佛なればなり。

[三八] 婆羅門(Brāhmaṇaḥ)のことなり。心を遠く梵行に止むるの意ならん。

海に投じたり。海大魚飽いて小なるもの活かるを得たり。魂靈化して〔三〇〕鱣魚の王と爲りぬ。身は里數あり。海邊に國あり。其の國枯旱したり。黎庶飢饉となり更る〳〵相呑噉す。

魚は爲に涙を流して曰はく「衆生は擾々たり其れ苦痛なる哉。吾が身里數の肉あり庶民の旬月の乏しきに供ふべし」と。卽ち自ら身を盪して國の渚に上れり。國を擧げて之を噉ひて以て生命を存せり。肉を韲いて數月而も魚猶生けり。天神下りて曰はく「爾忍苦を爲す其れ堪へざけんや、何ぞ放壽せずして斯の痛さを離すべきや」と。魚の曰はく「吾れ自ら命を絶つ、神逝いて身腐れり。民後飢饉にして將に復た相噉はんとす。吾れ覩るに忍びず、心其が爲に感じたり」と。天の曰はく「菩薩慈を懷きて齊ち難し」と。天爲に心を傷めて曰はく「爾必らず佛を得て、吾が衆生を度するならん」と。

人あり。斧を以て其の首を斫り取り、魚時に死したり。魂靈卽ち感じて王の太子と爲りぬ。生れながら上聖の明あり、〔三一〕四恩弘く慈しみ、潤〔三二〕二儀に齊し。民の困窮を愍みて言が之れ哽咽ぶ。然れども國尙旱す。心を靖にして齊肅み食を退け獻を絕てり。頓首して過を悔いて曰はく「民の不善と咎は我が身に在り、願くは吾が命を喪ひ、民を惠みて雨澤あらん事を」と。日々哀慟すること猶至孝の子が聖父の喪に遭へるがごとし。精誠遠きに達したれば卽ち各佛に五百人有り來りて其の國界に之けり。王聞きて心に喜悅したまひ身無きが若し。稽首して迎へ奉れり。請ひて正殿に歸せしめ、皇后、太子肅虔せざるはなし。最味法服乏しき所は供へ足して、五體を地に投じて稽首して叩頭し、涕泣して曰はく「吾が心穢れ行濁れり。〔三三〕三尊四恩の教に合せざるなり。人民を苦しめ酷ぐ、罪は當に己を伐りて下劣に流被すべし。枯旱累載し、黎庶飢饉を怨み痛みて情を傷る。願くは民の灾を除き、禍を以て我を罪せんことを」と。

諸の各佛曰はく「爾は仁君たり。慈惻仁惠にして德帝釋に齊し。諸佛普く知れり。今汝に福を授

〔三〇〕鱣魚。大黃魚なり。口は頷下に在り鱗なくして甲あり。大なるものは長さ二三丈ありと。

〔三一〕四恩。一に父母の恩、二に衆生の恩、三に國王の恩、四に三寶の恩なり。

〔三二〕二儀。天と地を指して二儀となせしならん。

〔三三〕佛法僧の三寶と同じ。四十二章經に三尊は佛法僧なりと。

の重さを踰えたり。自ら割くこと斯の如し。身の肉都て盡きたれども未だ重さと等しからず。身瘡の痛さ其れ無量なり。王慈忍を以て心に鴿を活けんことを願へり。又近臣に命じて曰く「爾疾く我を殺して髓を秤りて鴿の重さと等しからしめよ。吾れ諸佛を奉じて[二六]正眞の重戒を受けたり。衆生の危厄を濟はんに、衆邪の惱ありと雖も、猶微風の若し。焉んぞ能く太山を動さんや」と。鷹、王の守道を懷きて移さず慈惠の齊ち難きを照す。各本身に復れり。帝釋と邊王、地に稽首して曰く「大王よ。何なる志尙を欲して惱み苦しむこと玆の若きか」と。

人王曰はく「吾れ、天帝釋及び[二七]飛行皇帝の位を志さず。吾れ、衆生の盲冥に沒して三尊を覩ず佛の敎を聞かず、心を凶禍の行に恣にし身を[二八]無擇の獄に投じつゝあるを覩る。斯の愚なる惑を覩、之が爲に惻愴たり。誓願して佛たらんことを求め、衆生の困厄を拔濟して泥洹を得さしむ」と。天帝驚いて曰はく「愚謂へらく大王は吾が位を奪はんと欲す。故に相擾せしのみ。何なる勅誨を將らんや」と。王の曰はく「吾が身の瘡をして愈やし復舊の如からしめ、吾が志尙をして布施して衆を濟ひ、行は高く今より踰えせしめたまへ」と。天帝は卽ち天醫神をして藥は身に傅はり、瘡愈え色力前より踰えせしめたり。身瘡斯を須ゐて豁然として愈えたり。釋卻りて稽首して王を遶ること三匝にして歡喜して去れり。是れより後は布施すること前に踰えたり。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

三、貧人の本生

昔、菩薩[二九]貧しく窶れて尤も困しめり。諸の商人と倶に他國に之く。其の衆皆信佛の志あり。窮乏なるものに布施して衆生を濟度せり。等人僉曰はく「衆皆慈惠なり、爾將に何を施さんとするや」と。答へて曰はく「夫れ、身は假借の類にて棄捐せざるはなし。吾れ海魚の巨細相呑むを覩る。心爲に愴々たり。吾れ當に身を以て其の小なるものに代りて須臾の命を得せしむべし」と。卽ち自ら

【二六】正眞。佛教の大精神を意味す。

【二七】飛行皇帝。轉輪聖王のこと。梵語、斫迦羅伐辣底曷羅闍(Cakravarti-rāja)なり。此の王身に三十二相を具し卽位の時天より輪寶を感得し、それを轉じて四方を征服するを以て此の名あり。又空中を飛行すること自在なれば飛行皇帝といふ。

【二八】無擇地獄は。無間地獄の古譯なり。無間の業報によりてこの地獄に墮すといふ。

【二九】貧窶。窶にして且貧なること。窶とは禮儀のなきことなり。

み濟ひ、常に悲愴あり。天帝釋、王の慈惠の德が十方に被れるを覩て、[20]天神[21]鬼[22]龍僉然として曰く「天帝の尊位は初め常人無し。戒具り行高く慈惠にして福隆なり、命盡きて神遷れば則ち天帝と爲り、己の位を奪はんことを懼る。往いて之を試し以て眞僞を照さんと欲す」と。

帝、邊王に命じて曰く「今彼の人王の慈潤[23]霧霈として福德巍々たり。子の志求むるところ吾が帝位を奪はんことを恐る。爾化して[24]鴿と爲り、疾く王の所に之き、佯り恐れ怖れて哀を彼の王に求めよ。彼の王の仁惠必らず爾の歸るを受けん。吾れ當に後を尋ねて王より爾を索むべし。王終に還さずんば必らず當に肉を市ふて以て其の處に當るべし。吾れ詭りて止らず。王の意淸眞ならば許して終に違はず。會自ら身の肉を割き以て其の重さに當るなり。若し其の肉を秤りて隨ひて而も自ら重く、肉盡きて身痛し共れ必らず悔いん。意に悔いるものあらば所志成ぜざるなり」と。

釋即ち化して[25]鷹と爲り、邊王化して鴿と爲る。鴿疾く飛んで王の足下に趣く。恐れ怖れて云はく「大王我を哀みたまへ。吾が命窮れり」と。王曰く「恐るゝ莫れ、恐るゝ莫れ。吾れ今汝を活けん」と。鷹尋いで後に至り、王に向ひて說いて曰く「吾が鴿爾に來る。鴿は是れ吾が食なり願くは王よ。相還したまはんことを」と。王の曰く「鴿來りて命を以て相歸れり。已に其の歸するを受けたり。吾が言信を守りて終始違ふこと無し。爾苟くも肉を得なば吾れ自ら足して爾に重さ百倍ならしめん」と。鷹曰く「吾れ唯鴿を欲して餘の肉を用ゐず、希くは王よ。當に相惠むべし。而るに吾が食を奪はんや」と。王の曰く「已に彼の歸するを受けたり、信天地より重し。何ぞ心に之を違はんや。當に何物を以てせば汝が鴿を置いて歡喜して去るべきや」と。鷹の曰く「若しも王の慈惠必らず衆生を濟ひたまはゞ王の肌肉を割きて鴿のと等しからしめよ。吾れ欣んで之を受けん」と。

王の曰はく「大いに善し」と。卽ち自ら髀肉を割きて之を秤り鴿の重さと等しからしむ。鴿自ら

【二〇】 天神は梵語、泥縛多(Devata)なり。梵天、帝釋天等の天衆を總稱していふ。

【二一】 鬼は梵語、薜荔多(Preta)。餓鬼のことなり。諸天に驅使せらるゝの類の總稱なり。

【二二】 龍は梵語、那伽(Nāga)。長身、無足、蛇屬の長にして神力を有し雨雲を喚起すといふ。

【二三】 雨多き貌なり。大雨なり。

【二四】 鴿。梵語、播羅縛多(Pārāvata)或は迦布德迦(Kapotaka)何れも鴿なり。鴿に關する物語は涅槃經或は智度論等にも出でゝ有名なり。

【二五】 鷹。梵語(Padekah)なり。荻原博士の梵語辭典に依る。

昔、菩薩あり。其の心眞に通ぜり。世の無常にして榮命の保ち難きを覩て、財を盡して布施せり。[一五]天[一六]帝釋が菩薩の群生を慈しみ育て、布施して衆を濟ひ、功勳巍々として德の十方に重れるを覩て、己の位が奪はれん事を懼れたり。因りて地獄を化し爲れり。其の前に現はれて曰く「布施して衆を濟はゞ命終して魂靈は[一七]太山地獄に入らん。燒かれ煮られ、萬の毒は施しと爲りて害を受くるなり。爾、惠みを爲さんや」と。菩薩報へて曰く「豈德を施して而も太山地獄に入る者あらんや」と。釋曰く「爾其れを信ぜずんば[一八]辜者に問ふべし」と。菩薩問ふて曰く「爾何なる緣を以て地獄に處るや」と。罪人曰く「吾れ昔世に處し、家を空にして窮なるものを濟へり。衆の厄を拯け拔いて、今、重辜を受けて太山獄に處るなり」と。

菩薩問ふて曰く「仁惠して殃を獲、施を受くるものは之の如くならんや」と。釋曰く「惠みを受くるものは命終して天に昇らん」と。菩薩報へて曰く「吾れ之を拯け濟ふは唯衆生の爲にのみ、假に子の云ふが如くんば誠に吾れ願ふなり。慈惠して罪を受くるとも吾れ必らず之を爲さん。己を危くして衆を濟ふは菩薩の上志なり」と。釋曰く「爾、何なる志・願ありて斯の高行を尙ぶや」と。答へて曰く「吾れ佛を求むるに衆生を擢んで濟ふて、[一九]泥洹を得、生死に復らざらしめんと欲するなり」と。

釋、聖趣を聞きて因りて却つて頭を叩いて曰く「實は布施をもて衆生を慈しみ濟はゞ、福に遠かり禍を受けて太山獄に入る者無きあり、子の德は乾坤を動し、吾が位を奪はん事を懼れたり。故に地獄を示して以て子の志を惑はさんとしたるのみ、聖人を愚欺き、其の重ねたる尤を原ねて、既に悔過し畢りぬ」と。稽首して退きぬ。菩薩の慈惠度無極なり。布施を行ずること是の如し。

二、薩波達王の本生

昔、菩薩大國王と爲れり。薩波達と號く。衆生に布施して其の索むる所を恣にせり。厄難を愍

---

rya)なり。毘利耶は音譯。勇猛に善法を修行することなり。

【一二】 禪那（Dhyāna)のことなり。思惟修又は靜慮と譯し心を一境に住めて散亂せしめざるを云ふなり。

【一三】 明度は智慧波羅蜜のことなり。般若(Prajñā)の事なり。物事を決斷し簡擇して俗諦を知り眞諦を照すことなり。

【一四】 須達拏、須提梨拏、蘇達拏に作る。Sudāna 太子の事なり。善牙、善愛、好愛、善與、善施などゝ譯す。釋尊の布施行を行ぜし本生譚の中で最も有名なるものとす。

【一五】 天(deva)。提婆なり。光明の義自然最勝の義あり。人間以上の勝妙なる果報を受くる所なり。帝釋のことなり。

【一六】 帝釋は忉利天(Trāyas-triṃśa）の主人なり。梵名釋迦提婆因陀羅(Śakradevānām Indra)なり。須彌山(Sumeru)の頂上喜見城に住して他の三十二天を統攝するなり。

【一七】 太山地獄。泰山府君の支配する地獄ならん。この太山說は元道教思想を奉ずる道家より來れるものならん。

【一八】 辜者。罪人なり。

【一九】 泥洹。涅槃(Nirvāṇa)に同じ。滅、滅度、不生、無爲など譯す。生死の因果を滅して寂靜の境界に入る義なり。

六度集經[1]

卷の第一

呉・康居國沙門康僧會[2]譯す

布施度無極章第一之一（此に十章有り）

是の如く聞けり。一時、佛[3]、王舍國[4]の鷂山の中に在しき。時に五百の[5]應儀、菩薩千人と共に住したまへる中に菩薩あり、阿泥察と名く。佛、經道を說きたまふ。常に心を靖かにして惻み聽けり。寂然として念無し。意定んで經に在るなり。[6]衆祐之を知りて爲に菩薩の[7]六度無極難逮高行を說きたまひ、疾く佛と爲ることを得しむ。何をか謂ふて六と爲すや。一には[8]布施と曰ふ。二には[9]持戒と曰ふ。三には[10]忍辱と曰ふ。四には[11]精進と曰ふ。五には[12]禪定と曰ふ。六には[13]明度無極高行と曰ふ。

布施度無極とは、厥は則ち云何。人・物を慈しみ育て、群邪を悲しみ愍むなり。賢なるものを喜び度することを成ずるなり。衆生を護り濟ふなり、天に跨がり地を踰え、河・海を潤し弘くして衆生に布施するなり。飢ゑたる者は之に食せしめ、渴する者は之に飲ましむるなり。寒衣にて凉なるを熱かにす。疾く濟ふに藥を以てす。車・馬・舟・輿、衆寶名珍、妻子國土を索むれば卽ち之に惠むこと、猶、太子[14]須大拏が貧乏なるものに布施せしこと親が子を育てしが若く、父王より屏逐せられども愍みて而も怨まざるがごとし。

一、菩薩の本生

【一】或は六度無極經といひ、或は雜無極經といふ。

【二】宋元明三本藏には天竺三藏法師といへり。

【三】佛(Buddha)。佛陀又は浮圖の略にして覺者又は智者と譯す。有常無常等の一切の諸法を覺知したるを以て名けらる。

【四】王舍國(Rājagrha)。中印度國摩伽陀(Magadha)の首府にして頻婆娑羅王(Bimbisāra)の新に奠められたる都なり。

【五】應儀は阿羅漢(Arahat)のこと。應供ともいふ。小乘の極果。一切の煩惱を破したるに名づく。

【六】衆祐。世尊の別號なり。衆德ありて自ら祐くればかくいふなり。

【七】六波羅蜜(ṣaḍpāramitā)のことなり。菩薩の修行すべき萬行なり。

【八】布施は檀那(dāna)の譯なり。福利を人に施與して幸福を增進せしむることなり。

【九】戒(śīla)を受持して罪惡を犯さゞることなり。

【一〇】羼提(Kṣānti)の譯、諸の侮辱や侵害を堪へ忍んで恚恨することなく佛道修行することなり。

【一一】又勤ともいふ。梵語(Vi-

【五】大正第十四卷 No. 475. p. 538. b 維摩經卷第一羅什譯參照。

【六】大正第四十六卷 No. 1925. p. 686. a 法界次第初門下卷參照。

【七】大正第七卷 No. 220. p. 991—1120 大般若五百七十九卷以下六百卷參照。

【八】大正第二十五卷 No. 1509 大智度論第十一卷以下參照。

【九】大正第四十四卷 No. 1851 p. 705. a—10. c 大乘義章卷十二參照。

【10】前註六、p. 686. a—7. c 參照。

【11】大正第五十五卷 No. 2154. p. 96. a—7. a 參照。

【12】孫權 (A. D. 222—252) 吳國の主權者たり。Nanjiō. Appendix II. 387 Coll.

【13】孫皓(A. D. 264—277)吳の國の主權者たり。

【14】現存大正第五十五卷 No. 2145. p. 42. c—3. c 出三藏記集第六卷。

【15】同上、p. 46 b-c.

【16】此の經の序文は縮刷藏經宙五、p. 49. b 三序共大正一切經には收錄せられず、未審。

以上

昭和七年五月二十日

譯者　成田昌信　識

に因り序文を寄せたるに依れば、次の如し。

取りて之を讀めば大いに都べて直指して人に示す。發心を始めて妙覺を成ぜんに、淨を以て土と爲し、淸涼を以て界となし、極樂を以て國となし、塵勞を出でずして聖境冥現し、眞火の中に蓮生ずるものなるものか。夫れ人は乾坤の內、宇宙の間に在り、千百劫を經て常に纏縛に在り、度と稱する所の者は苦海を超えて彼岸に登らんことは出世の謂也。是の故に布施以て之を度し、持戒以て之を度し、忍辱以て之を度し、精進以て之を度し、禪定以て之を度し、明度以て之を度せん。昔人言へる有り、一實祕あるは形山に在り、形山とは生滅の軀なり。度六有りと雖も、心を攝すれば則ち一にして是れ戒なり。戒に因りて定を增し、定に因りて慧を發し、所寶心に在り、而る後之を度と謂ふか、故に明法身の體は楞嚴を辨ずる莫く、六度を必して、而る後其の體全し。明法身の用なるものは華嚴を辨ずるなく六度を必して而る後其の用行はる。罔象の玄珠を傳へ、沈迷の毒箭を拔き、所謂無位の眞人面門に在りて出入せん。蟒は懺を聞きて以て天に生じ、龍は法を聽きて道を悟れり。若し見聞する者有らば、安(いづく)んぞ菩提心を發さざるを知らんや。其の仁を推して以て物を濟ひ、其の孝を廣くして衆を伏するに至りては庶幾くは佛法の要は文字に在らず亦文字を離れざるものにちかゝらん。是の經を讀むものは是の如き觀を作せ。云云。

とあり。以て六度集經を讀まんずる人としての心得を示したる好個の指針といふべけん。

又六度は因に卽し果に卽し、因に非ず果に非ず離卽離非、一にあらず六にあらず所謂無極なりといひし如く六波羅蜜は既にその一を究竟する時には既に他の五自ら卽し、布施行を完ふする時は持戒も忍辱も精進も禪定も智慧も行じ得るを示したるものに、今吾人も之を讀み且譯出してその感極めて深きものあるを信ず。

全卷九十に近き本生譚は釋尊の宿世の物語として見る時には單に釋尊生涯の偉大さを示せる一つのメルヒン(Märchen)として取扱ふべきなれども、吾人の活教訓として現實の姿に轉移してながむる時は實に興味津々として盡きざる所謂無極の行として之を尊ばるべきものなりと思惟するものなり。

【一】 Nanjō. 目錄 No. 143 參照。

【二】 大正第五十五卷 No. 2145. p. 7. a 參照。
同　上 No. 2149. p. 230. a 大唐內典錄卷二、參照。
同　上 No. 2154. p. 490. b 開元釋敎錄卷二、參照。

【三】 大正第九卷 No. 262. p. 3. c 法華經卷第一、參照。

【四】 大正第三卷 No. 152. p. 1. a 六度集經卷第一。

以て世に處したれば第二帝釋を初めとして諸大天王悉く王の人格を敬し、聖王の盛德に見えんとするに至れり。依りて遂に天上に遊び、後下りて臣民に教ふるに佛の明法を以てし、正心國を治め、孝順相承せしめられたり。

　阿難念彌經以下の四經は出三藏記集の康僧會傳に依りて明かなるが如く單獨に譯出せられたるもの﹅如く、道宣の大唐內典錄には明かに六度集經の外に右の四經を列ねて揭げしを見る。故に現今の六度集經は後之を合糅して現在の形に整へしことを合點すべし。されば此等の四經は察微王經を除き、他の三經の形は聞如是一時佛在云云とありて一經として獨立の存在なりしを肯定することを得。

　以上は現藏六度集經の梗概なりしも、要之、布施といひ、持戒といひ、忍辱・精進・禪定・智慧といふも皆悉く菩薩の大行にして、經中に說かれし一々が釋尊宿世の本生譚に相違なきも、移して以て倫理道德修養の一大通規にして、之を吾人の修養の側よりすれば此の六度の行によりて社會百般の改革も行はれ、人各ゝ至誠以て事に當り、道德の遵守勤勉力行以て世の進步に貢獻し、共存共榮に資する一大教科書といふも敢て過言に非ざるべきを信ずるものなり。

四、本經の異譯經に就いて

　既述せしが如く本經は總じて九十一章より成立せる經典なるを以て其の中に經典の形式を具備するもの尠からず。又其等の或るものは單獨に他人に依りて時代を異にして譯出せられし三四の經典を見る。今之を列擧すれば左の如し。

一、頂生王因緣經　六卷　宋・施護等譯　〔大正・No. 165〕六度卷四・40
一、太子慕魄經　一卷　後漢安息三藏安世高譯　〔大正・No. 167〕六度卷四・38
一、太子墓魄經（開元錄云沐魄或は慕魄）一卷　西晉月氏三藏竺法護譯　〔大正・No. 168〕
一、太子須大拏經　一卷　西晉沙門聖堅奉詔譯　〔大正・No. 171〕六度卷二・14
一、菩薩睒子經　一卷　安公錄中闕譯今附西晉錄　〔大正・No. 174〕六度卷五・43
一、睒子經　一卷　西晉沙門聖堅奉詔譯　〔大正・No. 175〕同　上
一、九色鹿經　二卷　吳月氏優婆塞支謙譯　〔大正・No. 181〕六度卷六・58
一、同　上　同上　同人（明大藏に入るもの）〔同　上〕同　上
一、鹿母經　一卷　西晉月氏國三藏竺法護譯　〔大正・No. 182〕同　上
一、同　上　同上　同人（明大藏に入るもの）〔同　上〕同　上

以上六經十四卷なり。

　尙、新舊二譯の內容及び用語上の差異等に關して揭ぐべき等の處、時間少く遂に出さず、讀者の諒解を乞ふ所以なり。

五、結　語

　西曆一五九〇年、明の萬曆庚寅の年、五嶽山人沔陽陳文燭玉叔が句容令の夏日葵の囑に依りて六度集經の出版されたる

て調達の悪殃を防ぎし物語、龍を殺して一國を濟ひし兄の本生、彌勒女人身と爲りたれば帝釋、種々に身を變化して示し最後に誡めて曰はく「爾は勤めて佛を奉ぜよ、佛時値ひ難し、高行の比丘は供事を得難く、命呼吸の間にすらあり、世間の殃惑に隨ふこと無かれ」とありし物語、更に女人にて求願する女人の本生譚等を收む。

【七卷】 如來因中に禪定行を行じて四禪八定を修し專注一心無二なり。更に此の世に現生して四門に遊びて世の非常を覺りて更に入禪し、沙門相を見、大神變等を行ぜし等の九章を收錄せり。常悲菩薩の本生あり、那賴梵志の本生ありて此の卷を閉づ。昔者、題耆羅と那賴との二梵志ありて道を修せり。此の兩人夜起きて經を誦し、疲極して題耆先づ臥せしを那賴誤りてその首を蹈みしより、彼れ憤然として怒り明旦汝を殺して七分となさんといへば那賴も然らば吾れ明日より太陽の昇るを止めんとて相爭ふこと數日、國中の大王百官悉く困窮したるに依り、王はその原因を尋ねしめしに兩梵志の爭論なりしかば、王百官を率ゐて詣り之を和解せしめて天日再び世に出でたりといふ物語なり。それといふも衆祐說いて、兩菩薩は其の國主三尊を知らず、臣民又憤々にして邪見自ら蔽ふて宛ら冥中に目を閉ぢて行くが如きを覩て、其の徒らに死して佛經を見ざるを憐みたれば此の變をなし、君民の明を覩んと欲したるなりといへり。

【八卷】 如來因中に智慧行を行ずること無量無邊なりと雖もこゝには須羅太子の本生より、遮羅國太子の本生、菩薩明を以て鬼妻と離れたる凡人たりし物語、儒童梵志の本生、摩調國王南の本生、阿難念彌の本生、鏡面王、察微王、梵摩王等の本生譚九章を收錄せり。尼呵遍國王の孫たる須羅王子は內に慈仁あり、和明照大にして夙に佛たらんと誓ひ、六度の高行を一時たりとも心より釋てず。偶ま祖父王は召して王位を繼承せしめんと致せしが、祖父王の志、只昇天をのみ冀ふて徒らに惡虐なる梵志の言に迷はされたれば、皇孫之を難じて正道にかへさんと努力し、幾多の波瀾を經て遂に祖王より位を讓られて以て善政を之れ布きたれば、衆生踊躍し嗟歎して佛の仁化を喜び、潤ひ天地に過ぎ、八方恩澤に浴して恰も幼童の慈母に依るがごとかりき。祖王壽終じて天上に生ぜりとなす物語や、昔者儒童たりし時、錠光如來に對して華を買ふて上りしが如き本生に、更に又摩調王と爲り、世々生れ代りて遂に喃王の時代に於て最も道心堅固に八戒を奉じ六齋日には必らず人民をして之を奉ぜしめ、父母に孝順に老を敬ひ、鰥寡幼弱乞兒をして足らざる所を求めしが如き、嵩高眞實を

じ、戒を戴きて冠と爲し、戒を服して衣と爲し、戒を懐きて糧となし、戒を味ふて肴となし、斯くして佛戒を忘れず、蹐歩の間と雖も戒德を以て成ずることを以て自ら佛とならんとせしが如き、或は頂生王にせよ普明王にせよ、悉く淨戒の因緣を有せしを見るを得ん。

【五卷】　如來因中に忍辱行を行じ、睒道士の本生より、羼提和梵志、童子、國王、獼猴、龍、雞王、盤達龍王、雀王、叔、六年守飢畢罪に關し最後に釋家の畢罪に關する物語十三を收載せり。睒道士に對する忍辱の物語の如きは寧ろ悲愴にして哀れなるを覺ゆ。睒・常に普慈を懐きて潤ひ衆生に逮びしが、一般人の自覺もなく三尊を覩んとする信なきを患ひ、其の二親と共に山澤に處し孝養至らざるなきを見る。殊に兩親ともに老年にして明を失ひ、身心の不自由甚だしきも何等意に介せず、只佛の十善を奉じ、その志天金の如しとあり。然るに不幸なる哉、國王獵して山處に至り誤りて矢箭睒の胸に中つ、睒爲に驚き悲みて老年盲目の親あるを語りて大王に白したまへり。吾が老年の親に云云の事を述べて何卒貴方達は幸に老年を完ふせられ、愼んで追戀すること無かれと。大王此の何等恨怨なき様に甚く感動して親を懇ろに訪ねたるに兩親の失望落膽甚だしく、更に大王の心を打ちし何者かゞあり、時恰かも天帝釋・四天大王・地祇等親の哀める樣子に心擾動して帝釋下りて遂に睒道士を蘇せりといふが如き、或は獼猴たれども慈心もて衆生を拯はんとする心あり、山谷窮陷の人を拯へども、後却りて石を以て首を打たれ昏倒すれども別に恚意なくその人その惡を懐きしを哀めるが如き、或は阿難と共に龍に生れて忍辱を行じ、或は摩天羅王雞として生れたれども一念發起して沙門の行を積み山林に居を構ふること三十餘年間、時に獵士烏・蛇の三者困窮せるを濟ひ、後こゝに在りても人間たる獵士は忘恩的行爲をせしに反し、烏と蛇は身を犧牲にして道士を濟ふてその高恩に酬ゐたりしを見るが如き、六年守飢畢罪經に說きし物語や、釋家に起りし畢罪物語の如き、因果必然の道理を說き、善因善果、惡因惡果のいかんともすべからざるを說きて、惡を爲らば禍尋ぐこと猶し響の聲に應じて影の形を追ふがごとし、されば愼んで春天の仁に逮ひて豺狼の兇を尙ぐこと勿れといへり。

【六卷】　如來因中に精進道を行ぜし物語十九章を收錄せり。卽ち凡人の本生より、獼猴王、鹿王、修凡鹿王、驅耶馬王、魚王、龜王、鸚鵡王、鴿王、精進辨比丘、佛三事を以て笑ふ淸信士の本生、小兒聞法卽解の本生、身を殺して賈人を濟ひし商人の本生、童子の本生、調達人に敎へて惡を爲さしめたれば、菩薩天王に生れ

薩は佛の四非常を王者に說法して之を覺らしめ、其の國貧富同じく太平を致せる一賢人の敎化の力誠に偉大なるを仰がざるを得ず。

【四卷】 此の卷に在りては、如來因中に戒を行じて信を行ふ淸信士の本生より象王・鸚鵡王・法施太子・國王・凡夫・貧商人・貧道士・童子・獼猴・長者・墓魄太子・彌蘭王・頂生王・普明王の十五章を收めたり。如來は昔優婆塞たりし時、その國王はまことは眞正を行じ、戒を奉じたれども、人民の多くは僞りて之を奉ぜず、潛かに邪惡さへ行ひければ王は之を矯正せんとして、方便を以て臣民に命じて、自今敢て佛道を奉ずるものは死罪に處すべしと、以て民心の眞實の精神を試みしに、菩薩は此の無暴なる令を聞き、慨歎して當に死刑に行はるゝとも佛道を棄つる能はずと只一人頑張りたれば、後國王は菩薩の志操堅固なるを喜び、遂に國相に拔擢して、一國の治政を委ねられ長く國家安康の基礎を確立したるを讀みて一大衝動を與へらるゝものあり。或は鸚鵡王となりて假令鳥類に生るれども、深く三尊に歸命し、身を捨てゝ衆に代り、或は法施太子の如き父王の嬖妾に愛せられて從はざるにより讒せられて放逐の如き災難に會へども敢て恨みず、後眼睛を要求せられたれども忤はず、偏へに淨戒を守りしが如き、或は菩薩昔兄弟三人あり、兩兄は各妻を殺して食したれども末弟たる菩薩は獨り殺さずして山に入りて生活せしが偶一跛人あり妻と相通じて、菩薩を亡きものにせんとせしが果さず、後に菩薩は國王となり、妻不義を犯して國內に到りしを看破して諸臣に示したれば諸臣は直ちに之を戮すべしと主張せしに、菩薩たる王は、諸佛は仁を以て三界の上寶と爲す、吾れ寧ろ軀命を殞すとも仁道を去らざるなりといひしが如き、或は太子墓魄の年十三に至るまで口を閉ぢて言はず、瘖人に等しければ王后等しく之を耻ぢ且つ患ひければ梵志に相せしむ、梵志對へて、斯れ不祥の甚だしく、端正にして言はず、宜しく太子を生埋にすべきなりと奏上したまひければ、太子墓壙に臨んで己の誓願を聲高らかに大王に白して、吾れ沙門たることを許さるれば、虛靖の行も亦善しと。而もそれより述ぶる所極めて詳かにして己の本生を父王に物語り、今誓願して言はざるを明にせしが如き、或は彌蘭商人の初め未だ三尊を奉ぜざるの時、愚惑は邪を信じ、母は沐浴して新衣を著して臥せしを吾れ母の首を蹈みしを以て太山に入りて無限の苦を受け、或は又彌蘭は四月八日を以て八關齋を持したれば後ちに寶城を得て歡喜極りなく、而もそれより、彌蘭は太山獄を出でゝ心の三惡を閉し、口の四刃を絕ち、身の三尤を檢し、父母に孝順に三尊を奉

國を治むるに仁慈を以てし、干戈廢れ、杖楚滅し、囹圄毀たれて國豐かに人民安んじ以て聖代を致せるにより却りて隣國の羨望する所となりて、攻めらるれども敢て背かず、國民の貴き生命を失ふことの無殘なるを慨きて、一人城を出でて遁邁し山に入りて佛道修行するを見、迦蘭王はその太子たりし時、妻と共に出城して佛道修行をなし、妻淫亂にして罪人と通じ、太子を亡きものにせんと謀りしかども、天神之を祐けて再び國に歸り弟退きて位を太子に讓りたれば王者となり、後は毎日出でては布施行を行ひしを說き、更に薩和檀王の本生に至りては所謂其の名の示すが如く一切施なれば求め索められて施さゞるはなかりき。卽ち文殊師利化して年少の婆羅門となり王所に詣でて遂に王及び夫人を奴と婢となさしめて苦ましむるが如き、而も事へて厭はず踊躍歡喜して事ふるに至りて終に文殊は本身に立ち還りて經法を說けるが如きを見る。須大拏太子の物語に至りては極めて有名にして太子は性來施を好み終に大王最愛の白象まで施したれば大臣等之を諫めたれば父王之を擯したまふ。されば國を出でゝ山に至りしが又梵志來りて車・馬を乞ひ、終には二兒並びに妻をも一時に施與し、無量の辛苦を受けて國に還歸せしを見たり。父王は太子の罪を許したまひければ、これより太子は國藏を放ちて珍寶悉く布施してやまざりき。終に酬ゐられて兜率天に生じ、それより人界に生じて遂に釋尊となりし一篇の哀話は須大拏太子の本生譚として藏經廣く散說せられたるなり。

〔三卷〕　此の卷には矢張布施行の物語十一章を收めたり。和默王、維藍梵志、鹿王、鵠鳥、孔雀王、兎王、理家、國王、梵志、沙門、四姓等の本生是れなり。此の中にて最も興味深き一段は理家の本生譚にして、昔、菩薩は大富豪となり、積財巨億なる上、常に三尊を奉じ、衆生を慈向したり。時に市場に至りて百萬圓をもて鼈を得、之を江水に放ちしが、魚虫類なりと雖も鼈は昔日の高恩に酬ゐんとして菩薩の身に危難あるを覺り未前に尋ね來りて大洪水近きにあれば速かに舟の用意して逃亡すべきを教へたれば菩薩はそれを信じて舟の用意をなせしに翌日果して大洪水至りたれば、菩薩は鼈と共に乘船して危難を逃るゝを得たり。然るに避難の途中にて一匹の蛇と漂狐とが洪水に苦しみつゝありしを見て菩薩之を拯へり。然るに其の後一漂人來れり。鼈之が救濟に反對したりしが菩薩は之を却けて濟ひしに依り、後驚くべき忘恩的行動がこの萬物の靈長たる漂人によりてなされ、反對に虫獸類たる蛇と狐とにより救はれたる物語の如き、誠に之を讀みて人心の怖ろしく驚くべきを知れり。而も菩

化に翻譯に大いに努力して後ち大發展したりし素地を造りし元祖なりといふべし殊に六度集經に見らるゝ如く、大乘思想を鼓吹し、常に布施持戒等の菩薩行を以て大衆を勸導したる卓見は特筆するに足るものあり、頑冥固愚なる孫皓の教化に當りし史蹟の悉く事實には非ざるべきも、彼に本業經の百三十五願を分析説明して先づ敎法より信に入らしめ、後ち遂に五戒を授けたりといふはげに眞相に近きものならん。

三、本經の內容檢討

本經八卷は大正一切經第三卷に攝められ、縮刷藏經は宙五に卍字藏經は九ノ四にあり。古來より菩薩の因緣本生譚なりしを以て多く愛讀せられしが如し。今八卷の大略を先づ示せば施度のみは三卷廿六章に分たれ、餘は各ゝ一卷にして戒度には十五章、忍度には十三章、進度には十九章、禪度には九章、明度には九章と合計九十一章より成り、十二部經の中には正しく本生經に屬するものなり。今少しく簡單に各經卷に就きて解說せんとす。

〔一卷〕　如來は因中布施行を行じ或は菩薩となり、國王となり、貧人となり、又は財產家と生れて菩薩の第一位に置かるゝ布施行を心ゆくばかり修行し、而もその心根には常に世は無常なり、榮命保ち難く慈悲心頓に向上して衆生を拯濟せんとする一念凝つて飽迄も布施の大行を以て實行せるを見る。國王たりては薩波達王や乾夷王、或は有名なる長壽王となりて國帑を擧げて貧民救濟し、乏しきには滿たさしめ、病めるには藥を與へ、監獄には囚人なく、民心欣々然としてその生業に就き、國富み、五穀豐かにして大いに民心を安んぜしめしを說けり。その懷きし心は常に佛法僧の三寶に歸し天地四恩の敎に合し、假令其の身は太山地獄に於て燒かれ煮られ、無限の苦惱を受くると雖も化他行のためには身命以て厭はず、高遠にして絕大なる人心の偉大性を示して遺憾なく讀む者をして坐ろ歡喜の念を湧かしめずんば措かざるの趣きあり。されば帝釋先づ菩薩の心を試みんと欲し、種々に誘へども菩薩の心確固不動にして動かず遂に無上正覺者たるの强大なる信念を有するを示せるなり。又或は貧人となりて其の施すべきものなきに至りては衆生の命を濟ふべき爲には遂に最後の身體までも捨てゝ惜まざる天帝豈感ぜざらんや、されば尙幾多流轉して最後に阿耨多羅三藐三菩提を得て成佛せしなりと一々が極めて高尙なる布施行なるに驚愕せざるを得ざるなり。

〔二卷〕　こゝには波耶王の本生より迦蘭王、薩和檀王の本生より極めて有名なる須大拏太子の本生四章を載す。波耶王

り。高さ數尺あり、以て皓に呈したり。皓の使は之を廁の前に著き四月八日に至りたれば皓則に至り尊像に汚穢もて灌佛し訖り、還りて諸臣と共に笑ひ興じて樂を爲せり。然るに未だ暮陰ならざるに嚢腫痛にて叫呼すれども堪忍すべからず。太史占ひて曰く「大神の所爲を犯せばなり」と。群臣諸廟に禱祀して至らざる所なしと雖も而も苦痛は彌（いよいよ）劇しく死を求むれども得ざりき。綵女先に法を奉ずる者あり。皓の病を聞いて因りて問訊して云はく「陛下、佛圖中に就きて福を求めたまふや不（いな）や」と。皓・頭を擧げて問ふて「佛神大ならんや」と。綵女荅へて「佛は夫れ大聖なり。天神の尊ぶ所なり」と。皓は心に還悟し具さに語意したまふ故に綵女は卽ち像を迎へて殿上に著き、香湯を以て洗ふこと數十邊、燒香懺悔したまへり。皓・枕上に於て叩頭して自らの罪逆を陳べたまひしかば、頃（しばら）く痛みし所あれども卽ち間隔ありしかば更に寺に至りて問訊せしめて、「諸道人の中能く經を說くものを來見せしめよ」と。

僧會卽ち使に隨ふて入りたれば、皓は罪福の因を問ふ。會は具さに爲に敷析し辭甚だ精辯にして至誠なりしかば、皓先づ了解し、欣然として大いに悅びたまふ。因りて更に沙門戒を看んことを求めたれども、會は戒文祕禁の故を以て輕宣すべからざるを思ひ、乃ち本業の百三十五願を二百五十事に分作して述べ、行步坐起常に衆生の拯濟を願ふべきを强張したれば、皓・慈願の深きは世書の遠く及ばざるを見て益ゝ善意を增上したれば、會遂に五戒を授けたり。然る所、旬日にして疾癒えたり。故に皓は會の所住の寺を修築せしめ號して天子寺と爲せり。

皓は宮內に宣勅して宗室群臣僉佛教を必奉すべきを說きたまふ。更に會は吳朝に在りて正法の勝れたるを說き、皓に對

六

しては其の性凶麁なれども妙義を讃へ、唯應報近驗を叙べて其の心を開導したり。

康僧會は建初寺に於て經法を譯出せしが經錄によりて增減不同ありしが、阿難念彌經・鏡面王・察微王・梵皇王經・道品及六度集經、並びに經體文義の允正なるを妙得して[一四]安般守意・法鏡・[一五]道樹等の三經に註釋し併せて經の序をも製したり。或は又泥洹唄聲を傳へ、淸音哀亮にして後世の模倣する處となりしといふ。吳の天紀四年九月（A.D. 280）に寂したり。後の經錄は現藏にある舊雜譬喩經二卷をも僧會の譯出なりとせり。此の中にて阿難念彌以下の四經は現存八卷本中の第八の最後に加へられ、吳品（出三藏記は道品とあり）經五卷以下の數經ありしと傳ふれども開元錄時代に既に散佚したりといふ。康僧會はかくの如く當時尙南方支那に佛教の行はれざるに率先して至り、教

衝して盤卽ち破碎したり。權肅然として驚き起ちて曰く「希有の瑞なり」と。

會進んで言して曰く「舍利威神は豈直光相のみならんや。乃ち之を劫燒すれども燔くこと能はず、舍利の杵は壞する能はず」と。權命じて鐵槌の砧を執り力士をして之を撃たしむ。砧槌は並びに陷して舍利異るなかりき。權大いに嗟服したり。卽ち爲に塔を建てゝ以て初めて佛寺あり、故に建初寺といふ。名に因んで其の地を佛陀里と爲せり。時に紀元二百四十七年なりき。

是れより江左に大法遂に興れり。然るに孫權死して(二三)孫皓卽位するに及んで、性昏虐にして無知なれば塔廟を燔かんと欲せり。群臣僉諫めて曰く「佛の威力は餘神に同じからず」となせり。康會又感瑞していはく「大皇寺を創めよ。今若し輕毀すれば恐くは後悔を貽さん」と。

皓は嬖臣張昱を遣はして寺に詣らしめ、會を詰らしめたり。昱は又優雅にして才辯あり。難問縱橫なりき。會も亦應機に騁辭したれば文理交ゝ出でて旦より夕に至りたれども昱能く旣退せざりき。會、門に送りし時寺側に淫祀者あり。昱曰く「玄化既に孚なり。此の輩何故ぞや。近して革らざらんや」と。會は曰く「震霆山を破れども聾者は聞えず。非音の細なりとも苟くも理に在りて通ずれば、則ち萬里懸應せん。若し其れ阻塞すれば肝膽楚越せん」と。

昱還りて歎ずらく「會は才明にして臣の測る所にあらず。願くは天鑒之を察せんことを」と。

皓大いに朝賢を集め、馬車もて會を迎へられたり。會、坐に就きしかば、皓問ふて曰く「佛教の所明に善惡應報ありと。何者か是れならんや」と。

會、對へて曰く「夫れ明主は孝慈を以て世を訓ふ。則ち赤烏翔面老人星見、仁德もて物を育すれば則ち醴泉涌出して嘉禾出づ。善く既に瑞有らば惡も亦之くの如し。故に惡を爲りて隱るれば鬼得て之を誅し、惡を爲りて顯るれば人得て之を誅せん。稱し易し積惡餘殃なることを。詩詠以て福を求めども回らず、儒典の格言ありと雖もこれ卽ち佛教の明訓なり」と。皓曰く「若し然らば則ち周孔は已に明なり。何をか佛教を用ゐん」と。會曰く「然り、周孔言ありと雖も略にして纇近を示す、釋教に至りては則ち備さにして極めて幽遠なり。故に惡を行ずれば則ち地獄の長苦あり、善を修すれば則ち天宮の永樂あり。玆を擧げて明を以て勵を勸むるも亦大ならずや」と。皓乃ち服せり。皓は是くの如く正法を聞けりと雖も、而も昏暴の性よく其の虐に勝へず、衷心信ずるの念なかりき。

後、使宿衞兵等は後宮の治園に入り、地中に於て一つの立てる金佛像を得た

本經は支那三國時代康居の沙門康僧會によりて紀元二百五十一年より二百八十年の間に於て譯出せられたる古經なり。從つて本經を通讀するに古譯特有の譯語と譯者に極めて注意せざるべからず。今康僧會傳を[二]出三藏記集に從ひて摘抽し以て僧會その人の風丰に接すること強ち徒爾ならざるべきを信ずればその概要を述べんとす。

僧會の先祖はもと康居人なりしが代々天竺（印度）に住し、彼の父は商人なりしを以て交址に移りて幼年時代を送れりといふ。會、年十餘歳にして兩親を失ひたれば後幾くもなく出家したりといふ。至性篤實を以て聞え、人と爲り弘雅にして識量あり、志篤く學問を甚だしく好み、出家後は礪行殊に甚だしく峻嚴に三藏を明練して博く六典を覽、天文學圖緯凡そ貫渉せざるなしといふ。

當時[三]孫權は都を建業（今の南京）に奠め江左を稱制して權勢を誇れり。然れども未だ佛敎を知らざりき。時に會、偶ま大法を江左に運流せんと欲し、乃ち錫を振ひて東遊し、赤烏十年（A. D. 241）を以て建業に至り、茅茨を營立して像を設け道を行じたり。當時の役人孫權に奏上して曰く「胡人あり境に入りて自ら稱すらく沙門なりと。容服は恒に非ず事應驗察せんや」と。權曰く「吾れ聞くならく漢明が神夢にて號して佛なりと稱せりと。彼の所事は豈其の遺風ならんや」と。卽ち會を召して詰問して何なる靈驗あらんやと。會曰く「如來の遷跡は忽ち千載を逾ゆ、遺骨舍利神曜無方なり、昔阿育王塔を起つる八萬四千なりき。夫れ塔寺をおこすは遺化を表する所以なり」と。

權以て誇誕なりとなし卽ち會に謂つて曰く「若し能く舍利を得ば當に造塔を爲すべし。其れ虛妄の如くんば國に常刑あり」と。會、期を請ふこと七日なり。乃ち其の屬（ともがら）に謂つて曰く「法の興廢は此の一擧に在り。今至誠ならざれば後將（また）何をか及ばん」と。乃ち共に潔齋靜室し銅瓶を以て几に加へたり。燒香禮請して七日の期畢りたり。寂然として應無かりければ申（かさ）ねて求むる二七日なりしが亦復前の如し。

權曰く「此れ欺誑なり。將に罪を加へんと欲するや」と。會は更に三七日を請へり。權又特に聽したり。

會曰く「法雲應被して吾等感ずる無し、何ぞ王憲を借らんや。當に死を誓ひて期と爲すべきのみ」と。三七日の暮まで猶所見無かりき。震懼せざるは無し。既に五更に入りしに忽ち瓶中鏘然として聲あるを聞けり、會自ら往いて視たるに果して舍利あるを獲たり。

明旦權に呈したれば擧朝集り觀たり。五色の光焰照して瓶上を耀かせり。權手に自ら瓶を執り、銅盤に瀉ぎしに舍利所

妙門・十六特處・通明・九想・八念・十想・八背捨・八勝處・十一切處練禪・十四變化願智頂禪・無諍三昧・三々昧・師子奮迅超越三昧・乃至三明六通等の出世間の定にして是れ亦二乘と共通せるに依りて二乘共禪とも稱するなり。出世間上々禪とは自性等の九種の大禪・首楞嚴等の百八三昧・諸佛不動等の百二十三昧等にして凡夫二乘等と共通せざるにより不共禪と稱するなり。(六)般若波羅蜜(Prajñāpāramitā)。般若とは智慧と譯す。卽ち一切法を照し通達無礙なるが故なり。之にまた聲聞・緣覺・菩薩の別あり。聲聞の智慧は四諦の觀門に從ひて結使を斷じ人空無漏の智を發すに留まり、緣覺の智は十二因緣を觀じて人空無漏智を發し亦能く我執の習氣を侵除し、然るに菩薩の智慧は初發心より已來六度を行じ魔軍衆並びに諸煩惱を破し一切智を得て佛道を成就し乃至無餘涅槃に入るなり。天台大師は以上六度の行を菩薩は質直清淨心に住して修成すべきを說き、而も六度の一々に次の如き五種心を具足して能く初めて波羅蜜と稱せらるゝといふ。卽ち一には其の實相を知り、一切皆空不可得の見地に住して而も勤修精勵すべきこと。二には慈悲心を起し此の行に依つて一切の樂を與へ一切の苦惱を拔除せんと欲すること。三には發願して無上佛果を得んと願じ凡夫二乘の果報を求めざること。四には迴向して此の功德を迴し薩婆若に向ひ一切衆生に施すこと。五には方便を具足して一法を修する每に旋轉して一切佛法に通曉し遍く諸行を修すべきこと。菩薩は能く此の五心を具足せば因中說果して事究竟とも、到彼岸とも、或は度無極とも譯せらるゝ波羅蜜行を修すと稱せられ、無上菩提の佛果に至りて方に其の行の具足成滿を見るなりといへり。

(ロ)六度の開合辨相

六度を開きて十となすことあり十波羅蜜は以上の六に方便・願・力・智の四を加ふるものにして或は第六の般若を開出して十となすといひ、或は六度の助伴として示したるなりといひ、その助伴說に對して經典の間に異論あり。又六度を分類して或は前の三は化衆生力卽ち利他行にして、後の三は護煩惱力卽ち自利行なりとするものあり。或は福智と分ち、布施・持戒・精進の三は是れ福分なりとし、餘の三は是れ智分なりとするものあり、或は又前三は之れ福分なりとし、般若は智分にして餘は兩者に通ずとなす經典あり、更に又前五は福にして般若のみ智なりとするもの、或は前五及び事中の般若を福分とし、理觀の般若のみこれ智分なりとする等枚擧に遑なく詳しくは大乘義章第十二卷を參照せらるべし。

二、譯者傳の概觀

今六度に對する解釋を慧遠の[九]大乘義章並に天台の[一〇]法界次第とによりて概説すれば左の如し。

(イ)六度の行相

(一)檀那波羅蜜(Dānapāramitā)は略して檀波羅蜜ともいひ、布施到彼岸などと譯す。布施とは己が財事を以て分布して他人に與ふるを布といひ、己を輟めて人に惠み、之を目づけて施といふ。之に就き三事あり、一に內に信心あり、二に外に福田あり、三に財物あること、此の三事和合する時、心に捨法を生じて能く慳貪を破するを布施といふなり。布施には財施と法施と無畏施との別あり。(二)尸羅波羅蜜(Śilapāramitā)、尸羅とは戒・好善・清涼等と譯し、戒とは所謂道德律にして防非止惡能く佛の制戒に順應し受持するをいひ、好善とは好んで善道を行じ自ら放逸せざるをいひ、清涼とは三業の炎は非にして行人を焚燒すること等しく熱の如く戒は能く防息するが故にかくいへり。之に在家出家の別あり。在家の受持する戒は所謂三歸・五戒・八齋戒等にして出家の受持する戒は比丘の十戒・式叉摩尼の六法・大比丘の二百五十戒・五百戒等より三千威儀・八萬律行・乃至菩薩大乘戒の十重四十八輕戒等なり。(三)羼提波羅蜜(Kṣāntipāramitā)。羼提とは忍辱と譯す。他人の毀を加ふるを辱といひ、辱に於て能く安住するを忍といふ。或は內心能く外の所辱の境に安忍するをいふ。之に生忍と法忍の別あり。生忍とは或は恭敬供養の中に於て能く忍んで著せず憍逸を生ぜざることはその一、或は瞋罵打害の中に於て能く忍んで瞋恨怨惱を生ぜざるはその生忍の二なり。法忍に又二種ありて或は非心法の寒・熱・風・雨・饑・渇・老病等を忍ぶこと、或は心法なる瞋恚・憂愁・癡・婬欲・憍慢・諸邪見等を忍ぶをいふ。(四)毘梨耶波羅蜜(Viryapāramitā)。毘梨耶は毘離耶とも書き精進・勤などと譯す。心に法を練るを精といひ、精心務達するを進といふ。卽ち善法を欲樂し勤行して自ら放逸せざるなり。之に身精進と心精進との別あり。前者は身に善法を勤修して行道・禮誦・講說・勸助・開化するをいひ、或は施戒の善法を勤修するをいひ、後者は心に善道を勤行して心々相續すること、或は忍辱・禪定・智慧を勤修するをいふ。(五)禪那波羅蜜(Dhyānapāramitā)。略して禪波羅蜜ともいひ、禪那とは定・思惟修・功德叢林と譯す。心を一境に止めて觀念を凝すが故に定といひ、一切の攝心繫念し諸の三昧を學する故に思惟修といひ、依りて以て能く諸德を生ずるが故に功德叢林といふ。禪に二種あり。世間禪と出世間禪となり。前者は世間の根本四禪・四無量心・四無色定等の凡夫所行の禪なり。後者は更に出世間禪と出世間上々禪とに分れ、出世間禪とは六

六度集經解題

一、題名と六度の解釋

本經は[一]六度集經(Ṣaḍpāramitā-saṁgraha sūtra or Ṣaḍpāramitā-sannipāta-sūtra)と稱し、六度の次第順序によりて菩薩行に關する因緣を類聚せし本生譚なりとす。僧祐の[二]出三藏記集等に依れば或は六度無極經といひ、或は度無極集といひ、或は雜度無極經と稱す。九卷本とあれども開元釋教錄は八卷本となし經錄の間卷數一定せず。度無極は新譯家之を波羅蜜多(Pāramitā)と音譯し、或は略して波羅蜜と呼び度又は度無極或は到彼岸と譯せり。菩薩たるものは此の六度の行を修して生死海を度り、涅槃常樂の彼岸に到達するを以て最となし、之に對して聲聞は苦・集・滅・道の四諦を觀じ、緣覺は無明・行・識乃至生老死等の十二因緣を觀ずるを以て佛教々理の立て前となせるなり。故に[三]法華經には諸の菩薩の爲に應ぜる六波羅蜜を說き、阿耨多羅三藐三菩提を得て一切種智を成ぜしむといへり。

六度とは[四]本經第一卷に衆祐之を知りて爲に菩薩の六度無極難逮高行を說き、疾く佛と爲ることを得しむ。一には曰く布施、二には曰く持戒、三には曰く忍辱、四には曰く精進、五には曰く禪定、六には曰く明度無極高行とあり其の出據明かなり。[五]維摩經佛國品には六度の何たるかを說明して曰く、布施は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時一切能捨の衆生來りて其の國に生ず。持戒は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、十善道を行ずる滿願の衆生來りて其の國に生ず。忍辱は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時三十二相莊嚴の衆生來りて其の國に生ず。精進は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、一切の功德を勤修する衆生來りて其の國に生ず。禪定は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、心を攝めて亂れざるの衆生來りて其の國に生ず。智慧は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、正定の衆生來りて其の國に生ずと。之に依りて之を見れば六度は正しく天台智者大師の[六]法界次第にて云へる如く、今の六波羅蜜は即ち是れ菩薩正行の本なりと斷定して菩薩の道は願行相扶け、既に大願を發さば必らず須らく修行すべしと敎へられたり。

此くの如く六度は佛道修行の上に於て極めて必要缺くべからざるものなれば諸經に廣く散說せらる。就中其の最も詳かなるものは[七]大般若經五百七十九卷以下六百卷まで、[八]大智度論十一卷以下並に六波羅蜜多經等なりとす。

此の罪を犯すを用ての故に　苦を受くること訾量り難し。
此の餘殃を以ての故に　脅肋之が爲に痛む
[三]難提和羅と謂うて　迦葉佛を輕毀す。
此を見るを用て、沙門　佛道を得ずと言ふ。

佛五百弟子自說本起經（終）

世尊品第三十

【三】難提和羅、Nandipāla. 巴利傳には Ghaṭīkāra-Kumbhakāra とせり、迦葉佛の第一の供養者なり、生天し、釋迦佛出家の時、給侍せしといふ作瓶天子といふはこの人なり、今本經のこの處の文意味確かならず。

是の罪を犯すを用ての故に、
是の餘殃を以ての故に
曾て捕魚の肆に在り、
魚を捕へ殺す者あり、
是の犯す所の罪に從つて、
燒炙と黑繩とに在り、
隨樓勒國王
是の餘殃有るを以て
惟衛世尊の時
粳米を食せしめず
是の犯す所の罪を用て、
黑繩獄に墮し、
此の餘殃有るを以て
我を請じ終に一時
曾て病を治むる醫となり
藥分を合せ倒錯り、
此の罪を犯すを用ての故に、
此の餘殃有るを以て
吾れ昔前世の時
力士と相撲し

身地獄の中に墮ち
鐵刺佛の前に見はる。
生れて漁者の子と爲り、
我れ其の時、心を生ず。
太山地獄に墮し、
勤苦甚だ毒痛なり
釋子を傷殺せし時
今に頭痛を得。
其の弟子を罵詈し
常に生麥を啖ましむ。
口惡言を出すに坐して
苦を受くること計るべからず
一〇 怨を結ぶ婆維門
三月中麥を啖む。
時に尊者の子を療し
疾をして轉た劇しさを增さしむ。
地獄に墮して甚だ苦しむ。
是の故に下痢を得
曾て手搏師爲り、
一一 有佛子を害殺す

【九】隨樓勒。Vidudabha。波斯匿王が釋迦族の卑姓の女に生ませし子にて、王子の時、釋迦族に耻かしめられたりとて王位を奪うて釋迦族を伐ち殺戮す。

【一〇】怨結婆羅門。Verañja-ka。ヹーランヂャーは市邑の名なり、この地の婆羅門、佛を請し、而も忘れて食を送らず、三ケ月佛この地にて馬麥を食し給ふ。中本起經はこの婆羅門の名を阿耆達Agnidattaとせり、印度佛教固有名詞辭典七五六頁を見よ。

【一一】害殺有佛子。有佛子の意味明かならず、佛性あるものゝ意か。

「仙人愛欲深く
諸の[五]摩納之を聞き
時に一切の學志、
大衆の中誹謗するものあり、
是の犯す所の罪に緣つて
佛と五百の弟子と
佛を一切明と爲す、
[六]和世吒弟子
是の罪殃を犯し已りて、
生れて太山の獄にあり
此の餘殃あるを以て
大衆會の中に在りて
曾て三兄弟と爲す。
推撲つて深き谷に墜し、
是の犯す所の罪を以て
燒炙と黑繩に在り、
此の餘殃有るを以て
是に於て石墮落ちて
船に乘りて江海に入り、
時に共に船の上に載り、」

自ら高うして樹間に處る」と。
便ち共に我れ宜ふところに効ふ。
家々に乞匃を行ずるに、
「仙人垢欲有り」と。
須陀利女人
悉く共に誹謗せらる。
虛妄の謗有り、
是を沙門と爲すや。
便ち惡道中に墮す。
勤苦甚だ酷毒なり。
[七]旃遮摩尼女
虛妄にて佛を揜殺す。
共に錢財を諍ふ。
石堆以て之を殺す。
太山地獄に墮し、
毒痛甚だ酷苦なり。
[八]調達の石に拈たる。
中りて佛の足 指を傷つく
倶に深水を渡らんと欲し
刀を拔いて賈人を殺す。」

【五】 摩納。Māṇava。婆羅門種姓の青年のことなり。

【六】 知世吒弟子。知の字恐らくは和なるべし。但しこの本生譚を知らず。

【七】 旃遮摩尼女。Ciñcā。外道女にてその美貌を利用し、外道等、佛と關係ありと言はしめ腹に衣布を卷きつけ姙めるが如くなし佛を詈らしむ、このこと露はれ旃遮は墮獄す、この果報を招く前因について は佛が前生Abhibhū佛の弟子難陀を誹謗せしためなりとUdāna A. pp.263—264に出づ。

【八】 調達。提婆達多(Devadatta,)のことなり、佛の從弟にて佛に背く。

一切の所作辨じ
弟子衆に圍遶せらる。
愍れみ傷み極哀あり、」
比丘衆を觀察し
明かに我が語る所を聽け、」
身始めて作す所有ると
吾れ昔し宿命の時、」
瑕穢なき善妙の
衆人大に來り會り
杻械を著けて閉繫す。」
吾れ時に沙門の
其の心に慈哀を發し
是の罪殃を以ての故に、」
後來つて人間に生れ、」
是を用て餘殃あり、」
【四】須陀利異道
曾て婆羅門と爲り、」
五百の學志有り
時に大神力の
我れ道人の至るを見て、一

踊つて虛空の中に在り、」
寂然として五百あり
一切の人を慈しみ護る。
便ち自ら是の言を說きたまふ。」
前世の造る所と
今獲る所の餘殃と
【二】作人にして【三】文雜と名く。
辟支佛を誹謗す。
善妙の士を縛束す。
出づるを須ひ死囚の如し。
縛束を得て苦惱するを見、
身則ち救解を爲す。
地獄に墮して甚だ久し
常に人の爲めに謗らる。
此の最後の世に於て
共に議りて我を誹謗す。
博聞にして道術を持つ。
術を藂樹の間に講ず。
五通の比丘有りて來り
誹謗して其の惡を揚ぐ。

【二】作人。召使、勞働者のことなり。

【三】文雜。Mucali ? Munda? Udāna A. pp. 263—4, Apadāna p. 299 には、佛もと Mucali といふ浮浪人にて Surabhi 辟支佛と女人と非行ありと誹りしためなりとせり。

【四】須陀利。Sundarī 外道の女にて、外道にそゝのかされ、佛と關係あるが如く言ひ觸らし、後自らは外道等に殺さる。後この事露はれ外道等は刑せらる。

大力の化黠なし
歎んで大衆人を勸め、」
世尊衆くの恐れを壞し
佛仁あり、大牢獄の
大龍大師子
大智慧の世尊、
精進にして大力あり、
衆くの天民を降伏し、
佛は大にして天中の天なり。
悉く智慧の足を禮し奉る。
恒に大生死に在り
神通極り無き哀
大龍大天人
廣施極りなきの施、」
尊長士仙人、
大弟子を成就し、
衆祐中の最上
諸の度脱したまふ所勝れ、」
諸の色欲を斷絶し
時に遊んで龍王の

開化す大明慧、
大醫多く兼ぬる所なり。
無上に諸の憂を除きたまふ。
閉繫の度脱を爲したまふ。
著なき大比丘
衆の塵勞を救濟し給ふ。
方便ありて大に堅彊なり。
大道寂靜として安し。
一切の諸の鬼神、
佛出でて世間を哀れみ
羂と羅網を壞決したまふ
大牢獄を度脱したまふ。
衆會に於て最先なり。
已に弘なる寂跡に逮ぶ。
已に諸の尊法を度し、
導師の德極尊なり
無上にして愁憂を除きたまふ。」
一切相好の尊なり。
諸の恩愛を拔濟し給ふ。
阿耨達大池に在り、

我れ時に應じて生じ已る。
度脫して徑路なく、
我が願ふ所の如く、
佛世尊を供養し
唯仁每に悉く
悉く其の果實を獲、
是くの如く出蜜尊、
阿耨達池に於て

世尊品第三十(五十偈)

一切に勝りて普ねく明かなり、
諸の垢を除盡することを得、
諸の通慧にて普ねく見、
諸の怨と恐懼とを度し
衆くの所化を曉了ならしめ
矜み傷みて衆生を度し
一切の人(の惑)を除去し、
一切の人の中の最たり、
大人極りなきの慧
大光極りなきの法

獼猴の作す所の行(の報)なり。
便ち甘露句を得たり。
輙ち得ること其の意の如し。
求むる所則ち具足す。
我が作す所の功德を念ず。
可意安穩吉なり
比丘僧中にあり
自ら本の作す所を說く。

一切世間の最たり。
一切の衆會を降したまふ。
大人一切に暢かなり
法船にて彼岸に渡したまふ
欣然として世間を愍れみ
義を以て一切を救ひたまふ
悉く諸の繫縛を解き給ふ。
法を說きて衆の眼となり給ふ。
大雄の極名聞ゆ。
以て最法を度し給ふ。

【二】以度於最法。意味確かならず、後に來る已度諸尊法の句意と同一なるべし。暫らく是くの如く讀む。

世尊無等人
此の一鉢の蜜を受け
我れ時に甚だ踊悦し
專ら法王の前に住し
彼に在りて願を發して言はく
來つて世尊の世に値ひ
是の作す所の德に緣り、
等正覺
出(家)を得て沙門となり、」
已に無所著と爲り、
自在を得て羅漢となり、」
名曰けて出蜜と爲す。」
前の作す所の福
數百の比丘と
設ひ窮乏の路に在り
心適自ら發願し
我が心の念ふ所を知り
蜜の美食を齎持らし
我れ尋で即ち之を受け、
以て比丘僧に施し
彼の時死せる蜂を見、
服食して弟子に及ぼし給ふ。
叉手して佛に向ふ。
其の心常に精進、
我をして人身を得せしめ
最上の義を得せしめよ。
因つて用つて人身を得
無上の導師を見奉るに逮び
釋師子に給侍し
清涼にして滅度す。
六通大神足あり、
諸の比丘も亦知る。
今に於て恭敬を得ることを知る。」
共に遊行周旋し
比丘僧飢渇するも
我れ蜜漿を得んと欲すれば
衆人即ち遠くより來り、
以用て我れに奉上る。
自然に極めて美にして多し。
可意にして甚だ飽滿す。

我れ罪を作る少き耳、　福を作す亦多からず
皆其の果實を獲　爲す所の二罪福
羅槃颰提尊　比丘僧に在りて
阿耨達池に於て　自ら本の所作を說く。

【一】摩頭惒律致品第二十九（二十一偈）

昔惟耶離に於て　身大獼猴と爲り、
趣き往いて佛鉢を取り、　比丘に見られ呵せらる。
「佛鉢を壞する無きを得よ」と。　世尊比丘に告げ給はく。
「比丘よ、呵するを得ること勿れ。　是は終に鉢を壞さず」と。
我れ時に佛鉢を取り　徐々に持て樹に上り
盛るに鉢に滿つる蜜を以てし、　便則ち樹より下る。
手に鉢に滿つる蜜を擎げ　以て世尊に奉上る。
蜜の中に蟲の穢有り、　正覺は肯て受けず
佛其の鉢の中を見たまふに　死せる蜂と蜜と雜る。
尋で好んで之を擇び出し、　復擎げて重ねて佛に上る。
時に佛、世の光燄、　復更に受くることを聽さず。
我れ水を以て淨め洗ひ、　仍て前んで稽首して上る。
水を以て其の上に灑ぎ、　更に異鉢の中に盛り、
佛尊を供養し已つて　心踊躍り歡喜ぶ。

【一】摩頭惒律致。Madhu-vasiṭṭha, Madhuvāseṭṭha, この人のこと巴利語經典に缺く。智度論、賢愚經、有部破僧事等に出づ。この經に出す所に同じ、委しくは印度佛教固有名詞辭典三五三頁を見よ。

積功徳を作すべし。
旣に多く勞煩せず
口を用て寶言を說き
命盡き壽終りて後
地獄より出づるを得て
世々所生の處
迦葉佛の世の時
波羅㮈の中道に
世の光曜の
卽ち佛に順うて禮を爲し
佛世尊の遊ぶ所、
每に出入に隨ひ行き
是の作す所の德に緣て
等正覺
釋師子の所に於て
已に無所著と爲り
羅漢となり自在を得、
名曰けて持法と爲す。
一切の衆くの聚會
諸天及び人民

是の如くして自ら立辨すべし。
塔寺亦速に訖ると。
坐して語の罪報を犯す。
便ち地獄の中に墮す。
短小の身にして玄醜
衆の爲めに輕邈せらる。
鳥の鳥となり、赤き嘴なり。」
翺翔す叢樹の間
比丘に圍遶せらるゝを瞻見す。」
口に悲しき音聲を出す。
波羅㮈國の時、
常に遶り向うて悲鳴す。
來つて還人身を得
無上の導師に見るに逮び
出(家)を得て寂志となり
清涼にして滅度す。
六通大神足
正眞にして辯才あり
我が音聲を聽聞く。
一切皆歡喜す。

是くの如き等の尊と　世々共に會遇し
我をして此の法を承け　仁者の得る所の如くならしめよ」と。
是の作す所の德に緣つて　安を受くること長く且つ久し。
天上人間に於て　作す所の德　自ら見はる。」
亦國王となることを得、」　天人無數反。
未だ曾て惡道に墮せず、」　亦罪殃有ることなし。」
彼に從つて餘福あり、」　是の最後の世に於て
來つて勢富の家に生る。」　釋種の大姓に生る。
爾の時佛世尊　所生の地に來詣し給ふ。」
我れ卽ち寂志と爲る、　幷に親屬と倶なり。
我れ本立つる所の願　輙ち意の如く具足す。
已に無所着を得、　淸涼にして且つ滅度す。」
勢を捨てゝ沙門と爲る。」　颰提佛の敎を受け
阿耨達池に於て　自ら本の作す所を說く。」

羅槃颰提[一]品第二十八（十四偈）

拘樓秦佛[二]の時、　昔塔を起すものあり
我れ時に彼に在りて住す。」　其の寺甚だ高大なり。
此の塔寺を興造し　我れ口に之を呵譴す。
是の塔甚だ太大　何の日か當に成就すべき

【一】羅槃颰提。Lakuntaka-bhaddiya. 舍衞城の富家に生る、ラクンタカは侏儒の義なり。容貌醜き故に人に輕蔑せらる。妙聲あり、印度佛教固有名詞辭典三三九頁を見よ。
【二】拘樓秦佛。Krakucch-anda, Kakusandha.過去七佛の第四佛なり。委しくは印度佛教固有名詞辭典二五七頁を見よ。

粗細の食を得と雖も、
亦我を知ること能はず
諸の人民來り趣き
我れ爾の時自力にて
是の時各馳せ走り
力を盡くして後より追うて、」
即ち流河を渡り
四向を周匝して視、」
我れ今日獨り食す。
飽滿して意盈ち足り、」
是に於て比丘有り、」
威神大に巍々、
意慮り常に念言ふ。」
本功德を修めず、
即ち清淨の心を興し、
當に比丘に施與すべし。」
時に世尊便ち受けて
用て我れを憐愍れみ傷み、」
我れ時に即ち願を發す。」
後勢富の家に生れ、

常に分つて以て身に與ふ。」
毎に隨つて我が語を用ゆ。
行いて飯食の具を求む。
彼れ從り便ち出で去る。
遠くに赴いて相求索む。
我れに及逮ぶこと能はず
便ち却つて一面に坐す。
靜にして來る人無きを得、
柔軟にして美且つ香ばし
終に慕うて安隱を獲たり。」
則ち緣覺世尊なり。
生死除こりて餘無し。
窮賤は甚だ苦劇なり。
是の故に我をして貧ならしむ。」
歡び踊り意に念言ふ。
是れ本衆祐者なり。
則ち彼に於て飯食したまふ。
便ち飛んで虛空に在り
「復我をして貧ならしむる勿れ。」
端正にして妙華の如く、」

是の作す所の福に因つて
脂惟尼に生る、
迦葉佛塔を見て
輙ち其の寺中に詣で
是の施塔を用つての故に
刹柱と槃を興す。
彼に從つて餘福有り
釋氏の王家に生れ、
我が身自然に
莊嚴羅屬を成し、」
佛肯く見て我を
已に諸漏を除き盡し
難提父母の子
阿耨達池に於て

波羅捺國に生れ
子と作りて恚害なし
其の心歡喜を爲す。
承露槃を竪立す。
及び璽飾塔を治し、
福を受くること量るべからず。」
是の最後の世に於て、
便ち佛の弟と爲る。
大人の相好あり
平等三十を布く。
端正最第一と說く。
甘露句を逮得す。
比丘僧の中に於て
自ら本の所作を說く。

跋提品第二十七（十九偈）

昔世穀米貴し。
比丘五百有り
一切諸の長者
分衞して飯食を得、

飢餓大に恐懼る。
食を求む、卽ち施與す。
衆くの道術に惠施す。
便ち持ち來つて我れに授く。」

【二】脂惟尼。Siviの音寫か。

【一】跋提。Bhaddiya Kaligodhāputta. 釋迦族の王家に生れ、王となりしが出家す、カーリゴーダーはその母の名なり。印度佛教固有名詞辭典八九頁を見よ。

未だ曾て亂意を起さず、　身口に罪を犯さず
乃ち果實を得るに値ふ。　罪福離るべからず。
是くの如く難雲尊　比丘僧に在りて
阿耨達池に於て　自ら本の所作を說く。

難提品第二十六（十四偈）

昔惟衞佛の世　我れ煖浴室を施す。
一たび比丘僧を洗ひ　便ち自ら發願して言はく
「我をして是等の尊衆と　共に集會せしめ
世々清涼を得　離欲垢塵無からしめ
端正にして常に徐好　清淨にして妙花の若くならしめよ」と。
彼に於て壽終りて後　便ち天上に生ずることを得、
天上人間に在りて　顏色好く端正、
世々所生の處、　住する所大勢尊なり。
彼に於て壽終りて後、」　來つて還人間に生ず。
諸天及び人民　我を見て厭き足ることなし。」
辟支佛塔を見　泥を繕治して整頓す。
塑飾鮮白ならしめ、」　上に幡蓋を懸く。
我れ時に自ら發願し　相好を得んことを欲求む。
金體紫磨の色、　端嚴にして比有ることなし

【一】難提。Nanda。佛の異母弟にして、佛の姨母摩訶波闍波提(Mahāprajāpati)の子なり、佛成道後初めての歸城の時、難陀の結婚の日近かりしが、佛導いて出家せしめ給ふ。爾來難陀欲樂を逐ふ心繫し、佛方便を以て之を除きさとりを得せしめ給ふ。印度佛教固有名詞辭典四四三頁を見よ。

其の鹿子比丘　六通大神通
阿耨達池に於て　自ら本の作す所を說く。」

羅雲品第二十五（十偈）

我れ昔曾て王と爲り　摩羯國に典主たり。
人民甚だ衆多なり。」　事を決するに義理を以てす。」
爾の時、仙人有り　他の溝の中の水を飲む。
即ち來つて我が所に詣り、」　前んで我に語ること是くの如し。
「大王よ我は賊たり　乏しくして與へられざる水を飲む。」
便ち當に我を謫罰すること、」　拷盜竊者の如くせよ。」
我れ時に即ち報りて言く　「仙人法藥を持つ。
我れ恣に仁者に聽す、」　便ち去つて其の欲に隨へ。」
「大王よ、我れ狐疑す。」　咎結んで除くことを得ず
便ち當に我を謫罰せよ、」　今乃ち殃罪を消さん」と。
即ち勅して後園に著け、」　之を忘るゝこと六日に至る。」
六日を過ぎ已つて後、　亦飲食を得ず。
是の因緣に坐するが故に、　未だ曾て惡意有らざるも
燒炙黑繩に墮して　六萬歲を更歷す。
是の有餘の殃を畢つて　今最後の生に於て
母の腹の中に處在り、　六年にして乃ち生ずることを得

【一】羅雲。Rāhula. 羅睺羅、羅云等と音寫す。佛世尊の實子にて佛成道後歸城の時七歲にて出家す。印度佛教固有名詞辭典五二六頁以下を見よ。
【二】摩羯國。前の註に出づ。

我れ俟の說く所の
其の志踊躍して喜び
是の喜悅の意と
天上人間に在りて
今最後の世に於て
等正覺導師
釋師子の所に於て
已に無所着を得、」
今者吾れ是に於て
衣被及び飮食
その爲に衣服を縫ひ
四方諸藥を給し、」
天人往いて
卿當に醫藥を以て
仁が國當に利を興し、」
耆域醫王を遣はし、」
四面より醫藥來り、」
彼の時、王蓱沙、」
是に於て來つて我に
悉く比丘僧

辟支佛の飛行を聞き、
一意叉手して向ふ。
醫藥を布施せしことに緣るが故に、」
功德自然に見はる。」
復還人身を得
無有上に値見し
出家して寂志となる。」
清涼にして滅度す。
供を受くること甚だ衆多なり。」
床臥所安具
醫藥を施せしに從ふが故に
所安乏しき所なし。
蓱沙の國王に告げて語る。」
彌迦弗に施與すべし。
衆藥大に熾盛なるべし。
藥を擎て鹿子に與ふ。
皆悉く我に歸趣す。
大神通(ある者)を施遣す。」
具足柔軟堂を授く。
千二百五十に遍ねし。」

【二】 一本於昔とあれども今者と讀みたる方意味善く通ず。

【三】 耆域醫王、Jiva-Komara-bhacca 普通耆婆と音譯す、王舍城の頻婆娑羅王家に事へし醫師なり。

【四】 具足柔軟堂。意味不明なり。

宿世に精進を行じ
已に（解）脫し三達智を、」
自ら本の宿命の
忉利天上に於て
七返人間に還り、
富貴君子の家
是に於て七彼に七、」
本悉く之の
是くの如く所與の果を識知し、」
世々所生の處、
時に尊阿那律
阿耨達池に於て

方便常に堅彊なり。
具足すること佛の教の如し。
行を造り更歷する所を識る。
七世を積んで彼に在り。
人間轉、勢尊なり。」
金珠寶自然なり。」
生死凡そ十四
前世の所行と、
曾て慳嫉の意なし。
常に不生死を求む。
衆僧の中に處り
自ら本の作す所を說く。」

彌迦弗品第二十四（鹿子十四偈）

昔我れ勇狗を逐ひ
緣一覺の尊
之に給するに醫藥を以てし、」
尊人七日を過ぎて
我れ時に見て告げて
衆祐已に來り臻る。

往いて藥肆上に詣る。
身體不豫を得たり、
瞻養七日に至る。
便ち飛んで虛空に昇る。
家の僕童客に語る。
是くの如く家を出でて學ばん

【一】彌迦弗。Mrgaputra, Migaputta。他の諸傳にこの人なきが如し。

家と種姓とを興す意　財利の所欲
當に能く斯の著を斷つべし。」　終に戒を捨離せず。
寧ろ我が身を沒せしめん。」　其の壽憎惡する所なり
我れ當に大刀を捉るべし。」　此の命を用て安ぞ爲さん。
便ち利き刀劍を執り　因緣する所を除割す。
垢濁を刈截し已つて　然る後心解脫す。
一心便ち解度し、　稍數人をして寂かならしむ
我れ慈みの果實に於て　速に法の光明に値ふ。
我が壽終に向ふ時、」　尊き妙法を講說す。
【三】是の行ふ所に緣つて　定意度無極(を得)
釋子大神足　【四】弱根薩波達
阿耨達池に於て　自ら本の所作を說く。

【一】阿那律品第二十三(無獵九偈)

昔我れ曾て食せず　彼の世の時施與す。
沙門大通和莅叱を　遭遇して見る。
故を以て釋種に生れ、」　號して阿那律と曰ふ。
功德にて自ら　俳伎の娛しむ所を娛樂す。
時に等正覺を見、　卽ち喜んで世尊を慕ふ。
之を覩て心踊躍り、」　家を捨てゝ寂志と爲る。

【三】緣是所可行。今可の一字を除いて譯す。前生臨終に法を講說せし行に依つて今最後に定の得達を得たるをいふ。

【四】弱根。婆娑論三五にはこの人を鈍根者として出す。弱根は鈍根の意味なり。

【一】阿那律。梵音 Anirud-dha, Anuruddha. 釋迦族の甘露飯王の子にて、摩訶那摩の弟なり。佛陀の從弟なり。天眼第一と稱せらる、印度佛教固有名詞辭典四十七頁以下參照。

【二】阿那律の本生譚は法句註一卷百三十三頁有部藥事十七等に出づ、法句註に依れば前生 Uparittha と名くる辟支佛を供養し未來「なし」といふ語を聞かざらんといふ誓願を立てしと云ふ。今この文の和莅吒は多分ウパリッタの音寫なるべく大通の沙門卽ち辟支佛を見て、食物を自ら食べずして供養したるを云ふなり。

諸の族姓子の
我れ寂志と爲り、
世尊無等人
屢數率ひて我を勵まし、」
吾れ便ち佛無上の、
唯仁者、我が身
是に於て惠み與へ已りて、」
然る後寂志と作り、
「七年を長久と爲す。
今日便ち布施し
〔二〕是の教(?)を尊ぶを用ての故に、
唯仁、我れ七日、
信の故に沙門となり、」
二十五歲中
是の弊惡の道に於て
捐損の業を奉行し
彼に於て甚だ慚愧し
親屬を毀辱し、
是を作す不可と爲す。
已に志を出し寂を守る。

來る者皆家を棄つるを見、
家と愛欲と財を捨つるを羨む。
我を慈念し愍哀し
勸め導いて出家せしむ。
嘉教に敬ひ遵ふも、
七年布施を行じ
七歲を終竟り
勝れたる智慧の誨を受けんと。
人命を甚だ短かしと爲す
誰か能く身命を保たんや。
即時に寂志と作れ」と
出家して鬚髮を除き、
佛法を修行する身となり、」
寂定の心水の如し
念を起し家事に着し
亦甘露を用ひず
極り無き利を求むることを發す
悉く當に仇憎と見るべし。
亦僥恨まられず。
豈復返つて居を懷はんや。

【二】用尊是往故。意味を解する能はず。

比丘の爲に說かず、　人に示し與ふることを肯んぜず。
儻し餘、本を知らば　便ち當に我等に與ふべしと乞ふも、
設ひ比丘有り來つて　我が所に至り事を問ふも、
吾れ則ち之を欺き詐る。　解せずして意に恨を結ぶ。
衆くの道人悉りて還り　憂恚罵詈して言く、
何ぞ嫉んで法を說かざるや。　仁者豈佳と爲すや。
壽終らんと欲する時に臨み、　心卽ち自ら悔責す。
未だ曾て法を講論せず、　是を大不善と爲す。
自ら壽の盡くるに向ひし、　餘すこと過ぎて七日有るを知り、
衆僧類を聚會め　時に應じて爲に法を說く。
晝夜諸要を講じ、　貪と嫉妬とを蠲除く。
法を說くこと未だ竟畢らずして、　彼に於て便ち命過ぐ。
我が分別する所の如く　聞く者極めて妙快なり。
敎を受けて義を思惟し、　展轉相勸化し
說く所の法尠少なきも　人を聚會むること七日なり。
是を用て天に生ずることを得、　天伎以て自ら娛しみ、
天上の壽終りて下り　來つて還人身を受く。
迦維羅衛に在り、　釋國の王家に生る。
端正にして見る者敬ひ、　衆の愛樂する所と爲る。
大財極り無きの寶、　普く度無極を以てす。

昔我れ先世の時、」　曾て養猪者爲り
江水の傍に在りて、　衆くの猪の口を繫擦す。
渡らんと欲して江の半に至り、」　身獨り渡ることを得るに由り
猪、喘息するを得ず、」　中流に皆溺れ死す、
爾の時、我が治生　亡遺して依る所無し。」
仙人來つて彼れに至り、」　頂より慈哀あり
便ち勸めて我を教化し　吾が鬚髮を剃除し、」
解喩して善律を誨え　無相三昧を行ぜしむ。
彼に於て壽終りて後、」　便ち天上に生ずることを得
天の壽復竟盡きて　即ち還道人と爲る。
等正覺を見るに逮び　家を捨てゝ寂志と爲る。
所在、意朦瞑、　經を受けて尋いで輙ち忘る。」
我れ一偈を諷學して　三月にして乃ち諳知ず
四句を習ひ讀誦し　諸の愛欲を斷絕す。
世尊、時に之を問ふ。」　朱利槃毒、
從來善惡の事を　阿耨達池に於て說く。

醐醍施品第二十二（二十七偈）

迦葉佛滅度し給ひ、　我れ後の弟子となる。
轉聞にして三世を知り　常に經法を祕惜み、

【二】無相三昧。三三昧の一。ものに對し相を取らず心を止めざるを云ふ。

【一】醍醐施。Sarpadāsa Sappadāsa. 上座偈四〇五—四一〇偈註にこの人のこと出づ。出家後心進まず苦しみ悩み毒蛇に嚙ましめんとして毒蛇嚙まず、剃刀を取り頭に當て、戒の淸らかなりしことを考へて喜びを生じ證る、阿羅漢具德經には薩哩波那娑とし、有部藥事一七には蛇僕とし、婆沙論三五には蛇奴とす、醍醐施はSarpidāyaka と見たるものなるべし、印度佛教固有名詞辭典五〇〇頁を見よ。

彼の時、我れ　意の惡を興發起す。
我れ當に何を持用て　是の比丘を施飼はん
時に飯食を停め置き　蟲を生じ臭惡ならしめ
往いて諸の作使を觀、　然る後に之を供養す。
是の作す所の罪を以て、」　壽終りて地獄に墮つ。」
【三】合會燒炙の　苦痛言ふべからず。
地獄より出づることを得て　世々所生の處、
若干の方便を作すも　飯食を求めて得難し
是を最後の世となし、」　來つて還人間に生ず。
等正覺無上の　導師を見るに逮び
信を以ての故に出家し　諸の漏を除害し盡す。
已に無所着を得て、　清涼にして滅度す。
仁者吾れ是に於て　神足にして常に自在なり。
食を求むるに方便を設くるも　若干も得ること能はず。
遠く行いて道路を避け、　疲勞言ふべからず。
既に乃ち飯食と諸の供具と、」　僥むる所を得。
承伽迦葉尊　【四】大通所作に名く。
阿耨達池に於て　自ら本の作す所を說く。」

【一】朱利般毒品第二十一（八偈）

【三】合會。燒炙、共に地獄の名、前の註に出づ。

【四】大通名所作。意味不明なり。

【一】朱利般毒。Cūḍapanthaka, Cūla-panthaka. 王舍城の人にて摩訶槃毒(Mahāpanthaka)の弟なり。性愚鈍にしてさとること能はず。佛に依り方便を以てさとりを得さしめらる。印度佛教固有名詞辭典一三六頁を見よ。

辟支佛を害し已つて　是の惡罪殃を犯し
彼に於て壽終已りて　太山地獄に墮し、
苦痛無數千　懊惱言ふべからず。
來つて還人身を得、」　短命にして速疾に過ぐ。」
所在勢富を得、　衆人に供養せらる
腸胃毎に憔爛して　然る後乃ち命過ぐ。
家居を棄捐て去り、」　沙門となり慕ふ所なし。」
精進して佛教を修め、」　一切の欲を斷除し
假令我れ身を捨て　般涅槃に向ふ時にも、」
諸の腸胃五臟　各各崩壞して爛れん。」
我が作す所の過惡　及び行ふ所の善行
悉く還、果實を受く、」　善惡前後を俱にす。
[三]舍衞城里に生れ　荼提大神足
阿耨達池に於て　自ら本の作る所を說く。」

[一]禪承迦葉品第二十(十一偈)

諸の比丘僧有りて　七歲を終竟り
時に國の穀米貴にして　飢餓大に恐懼す。
我れ一人を分得す、　[二]摩竭妙道人
緣一覺の尊　清涼にして漏有ることなし。

【三】舍衞城。前の註に出づ。
【一】禪承迦葉。チヤータカには Losaka-tissa 前生の業に依り出家後も食を得る能はず舍利弗に依りて初めて食を得ることを出せり、智度論三〇は羅頻周として出せり。印度佛教固有名詞辭典三四八頁を見よ。
【二】摩竭。Magadha。摩揭陀國、王舍城の屬する國なり、今この摩竭妙道人と云ふも摩揭陀國の妙道人の意なるべし。

心に自ら悪を念じ已つて
持用て之を飯食す。
此の飯食を噉い已つて
其の腸胃を結刮し
法を楽しむ得道の人
諸天及び鬼神
是の長者大悪にして
清涼にして漏す所なきを、」
我れ語る所を聞知し
我等の罪量りなし。
親族是の言を聞き、」
皆諸の道人を會し
諸の道人に歸命し
五百の道人を請じ、」
重ねて悔過自首し
飯食を供養し已つて
我をして是等の
是くの如く等しく得度し
世々所生の處、
我をして貪ぼり嫉み

[二]馬通を飯中に糅え
殺すも苦しむ所なしと謂へり。」
病を得て甚だ困厄す。
五臓を傷絶す。
即ち已に命過ぐと爲す。」
倶共に聲を發して言く
道人の緣一覺の尊、
傷ない害し殺すと。
思念し苦しみ悩み愁ふ
坐にして善き道人を害す。」
悉く共に愁憂して念ふ。」
對つて悔過自首す。
悔過自首し已つて
供養するに飯食を以てす。」
衆くの道人に歸命し
心に自ら願を發して言く
諸の尊者と合會せしめよ。
我が心(解)脱すること是くの如くならしめよ。
貧窮に在らしむる勿れ。
悪む心意を興さしむる勿れ。

【二】馬通、前に出づ。

貨提[一]第十九　（二十七偈）

曾て王舍城に在り、　富大尊者と爲る。
五百の道士有りて　我が家に住すること一年、」
五百の諸の長者　一切皆往詣す。
彼の時諸の道人　各一家に就いて食す。」
譬へば我等の如きが故に、」　家中炊ぐ所の食
一一諸の比丘　供養すること亦是くの如し。」
年長の道士に聽き　彼の分與の長者、
無上尊道人　其の心念是くの如し。
五百人を飯食し　豆の羹以て上に灌ぐ。
我が作すところの供具　比丘を飼ふこと是くの如し。」
是くの如く連なること二日、　彼の比丘を布施す。
我れ時に輙ち意を興す。　貪ぼり嫉み惡くむ心意なり。」
尙我が子婦女、　及び姉妹、
兄弟諸の親屬を飼ひ難し。　是の飯食の供養にて、
何ぞ況んや此の比丘、　當に供養する三月なるべきおや。」
五百人を供養すれば　大に我が家を減損す。
我れ比丘をして　方便を作して死せしめんと欲す。
假令命過る者は　我が物を損用せす。

【一】貨提。Sāti-kaivartaputra, Sāti Kevattaputra. 巴利中部三八經、中阿含二〇一經にはこの人が識は輪廻すと云ふ邪見を抱き佛に誡しめらるゝこと出づ。印度佛教固有名詞辭典六〇四頁を見よ。

假令能く樂ふもの
命存すれば、數、見るべし。
時に父母知識
「設使沙門と作るも
時に親厚の知識
「父母已に汝を聽す。
父母共に約を結ぶ。
數來つて相見なば
彼れ聞いて善哉と言ふ。
往いて世尊の所に詣り、
「唯然なり已に我を聽す。
世尊我が髮を下し
承露槃を施せし故に、」
天上世間に於て
佛普ねく見て我を
已に阿羅漢を得。
是の故に當に歡喜し
當に塔寺を供養し
賴吒惒大尊
阿耨達池に於て

沙門となるも續いて在らん。
死すれば當に奈何がすべき。」
共に悲好の音を出し
來つて我を見なば當に聽すべし。」
便ち往いて之に謂つて言く。
明者沙門と爲れ。
假令沙門と爲るも
子、汝の出家を聽す。」
自ら養ふに勢力あり
便ち前んで佛に白して言く、
便ち佛の尊教を受けん。」
我をして沙門と作らしむ。
安きを受くること甚だ衆多なり。
功德自然に見はる。
[七]閑居を樂しむ第一と說き給ふ。
淸涼にして滅度す。
心を悅ばし大哀に向ふべし。」
大恐懼を脫するを得べし。」
閑居　[八]五納衣
自ら本の作す所を說く。」

【七】巴利經典にては信に依り出家せるものゝ第一とし、增一阿含經には貴家種族出家學道とせり。

【八】五納衣。前の註に出す。

端正にして甚だ姝好
人中に在りて娯樂し、」
可意世尊を敬ひ、
我れ見て心歡喜び
本の功德の致す所
慈哀我を愍傷し
諸佛の正敎
沙門と爲すことを得ず、」
卽時、家に還歸り、」
父母願くば我が
父母我が言を聞き
子は命終る時と雖も
我れ時に飮食せず
淸白の法を志し
我れ時に飮食せず
假令我を聽さずば、」
六日飮食せず
淸白の法を志し
時に親厚の知識、
「善哉、之を聽し去れ、

顏貌[六]敷愉の如し。
一切自ら恣にせんと欲す。
來りて投樓吒に詣づ
便ち沙門と作らんと求む。」
化變比倫し難し。
口に便ち是の言を發す。」
父母樂はざれば
族姓子自ら報え
前んで父母に白して言く
出家して沙門となることを聽せ。」
愁憂勝うべからず
相遠離することを欲せずと
一心に樂しむ所なし。
求めて沙門と爲らんと欲す。
空地に萎臥し
便ち當に是に死すべし。
一心樂しむ所なし。
求めて沙門と爲らんと欲す、
往いて父母に謂つて言く、
死人の身を用つて(何をか)爲んや。

【六】一本、敷踰の如しとあり。意味不明。

唯仁、我れ身の本の　作す所の惡を追念す。
悉く是の果實　可意にして樂しく安穩なるを受く。
廣く行うて周旋あり　生　老病　死を離る
一切の惱みと　愁憂と及び啼哭とを脫す。
是くの如く樹提尊　比丘僧の中にあり、
阿耨達池に於て　自ら本の作す所を說く。

[一]賴吒和羅品第十八（二十六偈）

王有り　修惟尼[二]　其の王一子有り。
[三]賴吒拔檀　是の王の最小子なり。
迦葉佛吉祥　大塔寺を興起す
父の王の意を護らんと欲して　爲めに刹の柱頭を作る。
心歡喜び踊躍り、　承露槃を建立す。
願くば我れ沙門と作り、　等正覺と共に會せん。
是の功德を用ての故に、　世々所生の處、
天上人間に於て、　其の德自然に見はる。
是を最後の生と爲し、　[四]投樓吒國に在り。
尊者の家に生れ、　獨り一女有るのみ、
一切に愛敬せらる。　是くの如く　[五]拘獵王
是れ我が親里の家　國土亦是くの如し。

【一】 賴吒和羅。Rāṣṭrapāla, Raṭṭapāla 俱流(Kuru)國の Thullakoṭṭhika 邑の長者の子なり、佛に見え出家を乞ひ父母之を許さず、斷念し死を決し、漸やく許されて比丘となる、後歸國して法を說く。信に依り出家せるもの〻第一と佛に稱せらる。印度佛教固有名詞辭典五四四頁を見よ。
【二】 修惟尼。梵語Śrīの音寫ならんか、次次行の吉祥はその譯語を出せしものなるべし。
【三】 賴吒拔檀、Rāṣṭavardana.
【四】 投樓吒國。Thullakoṭṭhika の音寫なり、大穀舍を持てるの意なり。
【五】 拘獵王。俱流(Kuru)國の王。

是に於て佛大智
羅閱祇に來り詣り給ふ。
我れ大智慧佛の
心歡喜び踊躍り
遙に世の光熖
卽ち車乘より下り
欣然として我れ前み行き、
如來畢竟を禮し奉り
我れ久しく正雄を思ひ、
導師人中の明
世尊、上るもの有ること無し。
四諦【五】の事を解說し、
彼を無極哀と曰ふ。
大に通じて出家を欲し、
卽時、大智慧の
說いて比丘來れと言ひ
是を以て放逸なく
甘露の處に遭遇し
等正覺導師
以て阿羅漢を成じ

導師無有上
導師愍傷を加へたまふ
王舍城に詣り給ふを聞き、
仁ある世尊に往詣り
光明の出て、普ねく照すを見、
步行して往いて佛に詣る。
最勝足を稽首し、
却つて一面に在つて坐す。
今乃ち大人を見る、
魔の羅網を降伏し給ひ、
時に應じて我を愍傷し給ひ、
如應に爲に講說し給ふ。
世尊說き給ふこと是くの如し。
大戒【六】を受くることを得ることを願ふ。
佛者無等倫
具足して沙門と成る。
堅き精進、定意、
無爲にして無動を興し
無有上を見奉るに及び
淸凉にして滅度す。

【五】四諦。苦・集・滅・道の四諦、佛獨爾の法なり。
【六】大戒。具足戒のこと。出家の後具足戒を受けて一人前の比丘となる規定なり。

我れ時に彼の供、
衣被飲食の施と
時に諸天の中の尊、
彼の天帝我に謂ふ、
即時に祠壇を化す。
天上の座を施設し
彼の時佛世尊、
請供滿一月
我れ天の飲食を以て
大人並に弟子に
是の功德を以ての故に、」
九十一劫より
作る所の福、
我れ大聖惟衞
今最後の世に於て
〔四〕蓱沙王の宮に生れ、
蓱沙國王の爲に、
衆人、諸天及び人民に
我れ天の伎樂に在り
世に生れて人身を得、

床臥と諸の所安と
床座の悉く具足するを見る
帝釋來つて我れに詣づ
我れ當に汝の伴と爲らんと。
可意嚴かなること天の如し。
供ふるに天の飲食を以てす。
惟衞無等人
尊人及び弟子
導師に供養し
奉るに天の衣被を以てす、
恩を受くること量るべからず。」
未だ曾て惡道に歸らず。
天上及び世間を照見す、
無極尊に侍し奉る。
〔三〕羅閱祇城
富家量りなきの寶あり。
一切に愛敬せられ、
供養せらる。
是に於て世に自ら恣にす。」
天の伎樂に自ら娛しむ。」

【三】羅閱祇城、王舍城、前に出づ。

【四】蓱沙王、Bimbisāra. 普通頻婆娑羅と音譯す。摩揭陀國王舍城の王にして阿闍世王の父なり、佛を信ずること厚く、佛敎最初の寺、竹林精舍を奉献す。

是を最後の生と爲し
已に一切苦を解き
迦耶是くの如く
阿耨達池に於て
甘露句を逮得す
清涼にして滅度を得
比丘僧の中に在り
自ら本の所作を說く。

樹提衢品第十七[一]（三十偈）

惟衛佛世尊、
時に富める長者あり、
時に佛の眷族
惟衛佛尊及び衆を請じ
我れ槃頭摩に主たり、
飯食日に珍異、
佛を飯食すること是くの如く、
彼の時最後の施を
好き飯食と衣被と
微妙の祠壇を作る
諸の安んずる所と
一一の比丘に
彼の國王の最後に
極まり無き離と
槃頭摩國城
[二]阿能乾那と名く。
六十二百千
供(養)すること三月
我れ人中尊を供(養)す。
佛と弟子に供養す。
槃頭摩國に在り、
槃頭王興さんと欲す。
及び床臥とを供養す。
是れ王の起す所なり。
床座、衆百千を奉上し、
惠施して意に可ならしむ。
供養する所是くの如し。
神通尊導師に奉事す。

【一】樹提衢、Jyotiska, Jotika。王舍城の長者の子にして、その富を阿闍世に妬まれ、禍の至らんとするを恐れ佛弟子となる。火生と譯せらる。この人の本生譚、法句註四、一九九頁等に出づ、委しくは印度佛教固有名詞辭典二五〇—一頁を見よ。
【二】阿能乾那、原語不明、法句註にてはこの名に當るものを Aparājita 又は Avarāja とせり。

是の過惡を用ての故に
來つて還人身を得、
是くの如きこと五百世
右の臂常に枯槁し
仁者是を識念せよ、
殃を獲ること甚だ衆多なり、」
等正覺に値見し
已に阿羅漢を得て
仁者我れ是に於て
今一つの右の臂に於て、」
假令男子ありて
壽終りて地獄に墮ち
外、色を犯すべからず
智者覺了の人
設ひ他の婦女を見るも
我れ更に泥犁の中、
我れ是の罪を犯せし時、」
悉く是の果實を獲
等正覺導師
已に無所着を得、」

壽終りて地獄に墮ち
右の臂自然に枯る。
所生の處皆然り
苦痛にして甚だ便ならず
罪を作る薄少のみにして
善惡離るべからず、
家を捨て沙門と爲り
清涼にして滅度に入る。
神足自在あり、
左の臂の便に如かず
他人を犯すを喜む者は
苦痛甚だ酷毒なり
盛火を捐棄するが如くせよ、」
已に毎に止足を知り
當に不淨觀を作すべし
苦を受くること計るべからず。
自ら言ふに足らずと謂へり
罪福離るべからず
無有上に値見し
清涼にして滅度を得

是の功德の本に緣つて
來つて還人間に生れ
未だ等正覺を見ず
[三]泥蓮水の邊に在り、」
世等倫なし。
[五]恆水の側に在り
我等變化を見、
大尊念ひ愍みて傷み
佛の塔寺を供養し
是を用つて衆庶等
優爲迦葉尊
阿耨達池に於て

天上に生ずること甚だ久しく
勢ある族種に在り
家を捨てゝ異道を學ぶ
久しく　[四]編髮志を習ふ。
我等を愍念して哀れみ
感動して變化を見はす。
佛に從つて髮を下すことを求む。
我等の出家を聽し給ふ。
前んで稽首し禮を作し、
淸涼にして滅度す
及び　[六]江河迦葉
自ら本の所作を說く。」

「迦耶品第十六（捉取十五偈）

昔香を賣る者となり、
一童女人有り
容貌端正にして好く、
[一]適捉へて與に調戲し
身亦觸を犯さず
唯但其の臂を執り、」

旣に香を獲て之を賣る。
香肆上に來り到る。
彼の我が所に趣くを見、」
欲意を以て之を察著す。
亦與に合會せざるも
他の女人に嬈るを爲す、」

【三】泥蓮水。Nairañjanā, Nerañjarā。優留毘羅林の傍を流るゝ川にて世尊六年の苦行を捨てゝこの河にて沐浴し給ひしことにて有名なり。委しくは印度佛教固有名詞辭典四五三―四頁を見よ。
【四】編髮志、Jaṭila の譯語にて、結髮せる行者なり。拜火敎徒はこの結髮行者なり。
【五】恆水。Gaṅgā。今のガンジス河なり。上の註、五河を見よ。
【六】江河迦葉。上に云ふ那提迦葉 Nadī-Kāśyapa, Nadī-Kassapa のことなり。三兄弟の季の弟にて二百人の結髮行者を率ひ世尊の弟子となる。
【一】迦耶迦葉。Gayā-Kāśyapa, Gayā-Kassapa. 三迦葉兄弟の中兄にて、三百の結髮行者を率ゆ。伽耶に住めるが故に伽耶迦葉と呼ばる。

此くの如き道人の法
我が身をして是くの如き
施す所形色なし。
香もなく亦味もなし。
作す所の德少なき耳、
て天上人間に在り
是の最後の世に於て
等正覺導師
我が本求め願ふ所、
是に於て悉く意の如く、
是に於て悉く
悉く其の果實を獲
是くの如く彼の大尊
阿耨達池に於て

逮得する所の法身
正願の義を疾に成ぜしめよ。
其の氣も亦穢惡
我が施す所是くの如し。
福を獲、安きこと極まりなし。
其の福自然に見はる。
還人身を得
無有上に値見し
世尊上人を見奉るにあり
清涼にして滅度を得、
本の作す所の功德を識知し
可意歡喜して受く
阻羅大通と名く
自ら本の所作を說く。

優爲迦葉品第十五　（八偈）

導[一]二人有り。
[二]迦葉佛の塔の
衆くの賈人を合集し、
時に兄弟二人

同類悉く兄弟なり
搪揬し崩壞し壞し落つるを見、
更に補治して塔を起す。
倶に扶けて刹の柱を竪つ。

【一】優爲迦葉。Uruvilva-Kāśyapa, Uruvela-Kassapa。摩揭陀國の婆羅門にて五百の編髮行者の拜火教徒を率ひ、優留毘羅の林に住す。伽耶迦葉、（次品の人これなり）那提迦葉（この品の江河迦葉と云ふこれなり）の兄なり、佛成道の第一年、佛に化されて弟子となる。委しくは印度佛教固有名詞辭典七一七頁を見よ。
【二】迦葉佛。前に出づ。

其の年百六十　此に於て垢濁なし。
未だ曾て疾病有らず　所生の處常に安し。
佛普ねく見て法を說き給ふ。」　少欲にして睡眠なし
藥を布施する者の　其の福廣きこと是くの如きを觀よ。
今我れ悉く本　少功德を殖え
悉く其の果實を獲、」　可意にして安隱なるを識念す。
時に賢薄拘盧　衆比丘僧に在り
阿耨達池に於て　自ら本の作す所を說く。

〔一〕摩訶咀第十四　（大長十二偈）

昔、韋皮師と作り　本生亦安隱、
時に國大に穀貴なり　皮を柔にして以て韋と爲す。
時に好殷き皮を得　煮熟して大に美ならしむ。
時に沙門來りて　乞匃して食を欲求むる有り、
之を見て卽ち歡喜し　卽ち分つて用て布施す。
其の寂志食し已つて　尋いで飛んで虛空に在り。
道人の踊躍するを見、　時に應じ叉手して向ふ。
普ねく（その）在る所を恭敬し、　遊ぶ所輙ち追隨す。
欣喜廣大の心　便ち自ら發願して言く
我をして逮ぶこと是くの如くならしめ　常に尊者と倶ならしめよ。

〔一〕摩訶咀。この人の原語不明。

是くの如く尸利羅　比丘僧の中に在り
阿耨達池に於て　自ら本の作す所を說く。

一 薄拘盧品第十三　（頌十二偈）

我れ昔曾て藥を　二 槃曇摩國に賣る、
惟衞佛の世に在り、　諸の比丘僧を敬ふ。
時に病瘦者有り、　行いて其の疾を藥療す。
諸の根藥を供給し、　以て諸の比丘に惠む。
一歲諸の衆僧をして　乏少する所なからしむ。
時に諸の沙門に施し、　三 一呵梨勒を與ふ。
九十一劫に於て　未だ曾て惡道に歸らず。
天上人間に在りて　其の福自然に見はる。
作す所の德少なき耳、　福を受くること量るべからず。
一呵梨勒を施して　長久へに善處に生ず。
其の餘の所有の福　今還人身を得、
平等覺導師　無有上に値見し
未だ曾て自ら、　郡縣の施を受くる所を識念せず。
唯仁、我れ二夜にして、　四 三達智を證通し、
常に麁惡の服を衣　五 五納の震越
家を棄て學道を行じ、　閑居に在ることを願ひ樂ふ。

【一】薄拘盧、Dvākula, Bākula。憍賞彌の長者の家に生れ、閻牟那河に水浴中一大魚に呑まれ、ベナレスの人に救はれ、兩婦人の子の如くなり依つて兩家(Dvākula)の名あり、歸佛出家してさとりを得て說法を好まず、無病長壽なり。印度佛教固有名詞辭典七三頁以下を見よ。
【二】槃曇摩國。前の槃頭摩に同じ。
【三】呵梨勒。Haritakī。印度に產する藥木なり、果實、胡實の如し。
【四】三達智。普通三明と曰はるゝものにて宿命通、衆生死生通、漏盡通なり。
【五】五納之震越、五納は五衲衣にて五色雜碎なるを補綴したる弊衣のことなり、震越の意味不明。越はガマムシロなり、音クワツなるべし。

家中我が言を聞き
馳散して八方に赴く。
母は恩愛を以ての故に、
天人とやせん鬼神とやせん、
我れ時に即ち啓して曰く
宿命の施を追識して
時に母其の言を聞いて
然も許し勸めて之を助け、
家中眷屬多く
衆の敬愛する所と爲り、
我れ爾の時適生れて
是に縁つて諸の寂志、
彼に於て便ち布施し、
等正覺に値ふことを得て、
初め生れて家興り熾なり、
是の故に尸利と號け、
家に生れて貪る所なく、
信に縁つて出家して學び、
國主の爲めに欽まはれ
多く衣食の供

愁憂して用て惶懼し
乳母悉く避け去る
便即ち我に告げて言はく
何を以て言ふこと大に疾きや。
我れは是れ人にして鬼に非ず。
好んで惠人を見んと欲す。
踊躍して畏るゝ所なし
意の布施する所を恣にせしむ
母、我れに供養することを勅す
見る者喜ばざるなし。
其の家即ち興りて熾なり
我れを尸利維と名く
諸の貧陋に給足す。
便ち家を捨て道を爲す。
地に墮ちて能く語言り
其の名自然に流る。
亦恐懼を用ひず
神通一切を具ふ。
大臣衆人民より
牀臥諸の所安を獲。

尸利羅[1]品第十二（二十偈）

昔、波羅奈[2]城
機惟王[4]塔を起し
爾の時の王の作す所なり
我れ時に佛尊のために
是の功徳を以ての故に
天上人間に在り
在々所生の處
財の數計るべからず
我れ五百世に於て
衆庶の人、寂志
緣一覺の行
清淨觀喜の心にて、
是の功徳に由るが故に、
勢貴の釋種に生れ、
家中寧ろ寶と
我當に以て施與し、
我與ふるに厭き憊るゝことなく、
爭善に答報を見る。

迦葉佛[3]泥洹したまひ、
七寶にて造り甚だ大なり
最大の太子あり
第一の刹の柱を建つ
世々所生の處、
其の福自然に見はる
國に於て甚だ殷富、
常に大布施を喜び、
惠施して惜む所なし。
及び梵志に給贍し
愛欲を離れて漏無し。
五百衆を供養す。
此の最後の世に在りて、
時に應じて口に言を說く。
錢財と及び物とあらば
諸の貧窮を救足すべし。
衆くの下劣を救濟せん。
豈能く惠む所有らんや

【一】尸利羅。Śrira? Sirira? 諸傳にこの人見えず、或はSirimaか、然らば舍衞城の人にて毘舍種なり印度佛教固有名詞辭典六二一頁を見よ。
【二】波羅奈。Bārāṇasi。迦尸(Kāsi)國の首都にて、今のベナレスなり。
【三】迦葉佛。Kāśyapa, Kassapa。過去七佛の第六佛なり。印度佛教固有名詞辭典を見よ。
【四】機惟王。Kṛki, Kiki。迦葉佛の世、迦尸國の王にて佛に歸依して佛入涅槃の後、佛のために塔を立つ。印度佛教固有名詞辭典三〇六—七頁を見よ。

即ち床上より起ち、」
諸天我を愍念み、
時に國城を出でゝ
遙に彼岸を視見、
又[六] 大寂志を見
之に我が窮厄を告げ
世尊深き軟なる音にて
童子來れよ、懼るゝこと勿れ、
心衆くの苦惱を捨て
往いて大哀所、
絕妙無等倫に詣る
倒に其の義を解識するが如く
彼に於て道諦を見、
瞿曇大慈哀にして
時の一夜中
一切の諸漏盡きて
是れ我が前世の時、」
是の我が最後の世
是くの如く賢夜耶、」
阿耨達池に於て

殿を下り之を避けて逝く。
其の門自然に開く
往いて流水の側に詣り、」
沙門の寂根を見、
聲を擧げて大に叫び、
[七]我が欲を捨つるを神通せよ、」
我が辛苦の言を用ひ給ふ。
此に於ては窮厄なしと
輙ち彼岸に度り
世尊無比人
譬へば飢渴の者の
即ち其の義を解識し、
佛に從つて捨家を求む。
我れに沙門となることを聽したまふ。
天の時將に曉に向はんとするに應り
清涼にして滅度を得、
更、作せし所の善行なり
甘露の跡を逮得す。
尊者の子神通(あり)
自ら本の作す所を說く。

【六】大寂志。大沙門即ち釋尊のこと。
【七】神通我捨欲。いかに讀むべきかを知らず。暫らく神通を以て我が捨欲を助け給への意味にとりて譯す。

自ら三昧より立ち
[二]亦分衛に出でず
設ひ我れ聚落に入りて
端正の色を見ると雖も
彼の諸の形色を瞻るに
衆くの壞敗の本を察するに
我が思行是くの如し。
[三]四梵行を奉遵し
彼の壽終りて後に於て
梵(天)に於て壽命盡きて
勢ある貴き長者の爲めに
衆の爲めに見て敬はれ、
晝日常に修行し
女人の衆多を見て
鼓を枕にし臥せ眠る者
伎樂の器を地に散し
彼に於て退いて
不淨處と
適此を觀覩已りて
我が時逼迫し、

修行して懈怠せず
亦飲食を思はず
行いて飲食を求め
當に惡露觀を作すべし。
死人の如く異なることなし。
一切樂しむ所なし。
而して愛欲を離るゝことを得、
深く惟うて輕戲せず。
便ち梵天に昇ることを得、
下りて [四]波羅奈に生れ
其の家に生れて子と作る。
正受 [五]度無極
夜に於て睡眠らず
等しく觀ること腐の積むが如し。
箜篌を執る伎人
夢想して寱語を爲す。
宿本の功德行を思念し
前世更歷せし所を想識り
志求して欲意なし。
是を仁者、我れ捨て去り、

【二】 分衛。托鉢のことなり。

【三】 四梵行。慈無量心、悲無量心、喜無量心、捨無量心の四無量心のことなり。

【四】 婆羅奈、Bārāṇasī。迦尸國の首都にて今のベナレスなり。

【五】 度無極は波羅蜜 Pāramitāの古譯なり、依つて正受度無極は禪定波羅蜜なり。

吾れ是の仁に於ては　神足漏あることなきも、
身體疾病多く、　所在安穩ならず。
是に於て悉く　我が本の作す所の行を識念す。
皆其の果實を獲　罪福離るべからず
是くの如く難陀尊　比丘衆の中に在りて
阿耨達池に於て　自ら本の所作を說く。

夜耶品第十一　（名聞二十六偈）

昔一の道人あり、　聚落に入りて乞匃す
死亡の女人の　靑膖して甚だ臭惡なるを見、
結跏趺坐して　無常變を觀視
敗れて不淨なるを省察し、　一志定心を學ぶ
便ち彼の坐上に於て　微細の音響あり
聲を聞いて用て恐怖し、　則ち一心より起ち
死腹の潰壞し　惡露不淨にして
衆孔より流れ出で　臭處當るべきこと難く、
腸胃五臟見はれ、　心肝皆散絕し
若干無數の蟲あるを見る。　觀已りて還心を靜め
外に死身を察し　內に自己の軀を省み、
彼爾り我れも是くの如し　本を計るに皆虛無なりと

【一】夜耶。Yaśa Yasa。ベナレスの長者の子にて、佛成道間もなき頃、家居を厭ひ家を逃れ出て佛に見え出家す、印度佛教固有名詞辭典を見よ。

難陀品第十[一]（欣樂十二偈）

[二]王舍國城の東　曾て富尊の者と爲る。
時に世穀飢貴なり。　道士の彼に遊ぶあり
時に我れ坐して獨り食す。」　好き道士有りて來る。
[三]壞破せる緣一覺なり、」　自在にして無漏を得たり。」
貪嫉の意を興起し、」　其の心惡を志す。
今この比丘來る。　[四]焉ぞ同太歲を得んや
是の念に於て飲食に　雜糅するに馬の[五]通を以てす。」
道人之を食し已つて　時に應じて即ち命過ぐ。
我が身命終已りて　地獄に墮ち甚だ久し
[六]合會及び叫喚　世々脯とし煮らる
地獄より出づるを得て、」　便ち還人身を得、
身常に疾病多く　懊惱して命盡く。
是くの如く五百世　在々所生の處
病を抱いて常に窮厄し、」　懊惱して乃ち命過ぐ。
是の最後の世に於て、」　已に人の中に生るゝことを得
還等正覺導師　無有上を見たてまつり
出家して沙門となり　釋師子の法を受け
已に羅漢道を得て　淸凉にして滅度を取る。」

【一】難陀。Nanda。佛の異母弟の難陀と異人なり、有部藥事一六にこの本生譚出づ、其處には有喜と釋せり。
【二】王舍國城。前に出でし羅閱祇のことなり、國の字は正しく云へば誤入と云ふべし。
【三】壞破緣一覺。緣一覺は前に云ふが如く辟支佛の譯なり。故に壞破は煩惱を壞破せるの意味なるべし。
【四】焉得同太歲。目出度きことなしの意なり。
【五】通。便通馬糞のこと後にも出づ。
【六】合會。八熱地獄の第三Saṅghātaのこと。叫喚は同じく第四Rauravaのことなり。

時に等正覺の
大衆會と倶に
適大衆會を見、
到りて大衆會の
意彼の中に於て
本願に副ふことを獲す
時に彼の大慈愛の
仁者善く此に來れ、
我れ時に應じて喜び踊り、
世尊の足を稽首し、
是に放て尊大哀し
次第に分別して說き
【三】能仁鬚髮を除き給ふ。
佛寂志と作らしめ、
是を以ての故に號字け
此に緣つて佛我れを說き、
佛勇猛大尊、
神通極り無き哀
善來尊是くの如く
阿耨達池に於て

比丘僧に圍遶せられ、
【二】甘露句を講說し給ふを見、
卽疾に奔走りて趣く。
飲食の具を希望せんと欲す、
皆坐して法を聽かんと欲するを見、
未だ饒施者有らず。
如來之に告げて言はく
便ち來つて此の座に坐せ。
則ち一心叉手し
却つて一面に在りて坐す。
瞿曇極めて慈悲
我が爲めに四諦を講じ、
是に因て道跡を見る。
彼に於て神通を得
名けて曰つて茶竭と爲す。
【四】正受第一と爲す。
世雄最勝と爲す。
我が衆苦を度脫し給ふ。
衆僧の中に在り
自ら本の所作を說く。

【二】　甘露句。Amṛtāpada涅槃のこと。

【三】　能仁。釋迦牟尼の譯語なり。

【四】　正受第一。禪定第一に同じ、されど巴利聖典、漢譯聖典共に入火定とせり。

周匝王邊に在り、
端正にして見る者喜び
時に我れ駕を嚴かにして出で、
行遍し遊觀せんと欲し、
彼に於て遊觀の時、
安定の儀を奉行し、
時に我れ沙門を見、
其の形像を憎惡み
「何の爲めに鬚髮を下し、
身體に癰と疽と疥と(あり)
是の造る所の罪、
彼に於て壽終りて後、
獄より脫れ出づるを得て、」
身體に癰と疽と疥とあり、」
瓦器を捉つて乞匃し
衣弊み服庵穢にして
往いて至詣らんとする所、」
杖を執りて驅叱せられ、
是くの如きこと五百世
窮困して當に飢餓し

快樂極まり有ることなし。」
顏色比を爲すこと難し。
諸衆前後を導く。
幷に衆くの婇女を從ふ。
相寂なる沙門を見る。
身に赤絳き衣を服る。
惡意を興發起し
瞋恚りて歡喜ばず、
顏貌黑くして醜陋、
身と意と俱に羸疲す」。
口に惡語を說くを用ての故に、」
便ち地獄の中に墮す。
容色黑くして醜惡、
身と意と俱に羸疲す。
棄てられし死人の衣を著け
住する所安き處なし。
乞うて口を係餬せんと欲す。」
人の爲めに嫉辱せらる。
在々所生の處
勤苦して餓死せんとす。」

是の作る所の罪に緣つて　[二]大山地獄
[三]燒炙黑繩の中に墮し、　苦を更ること計るべからず。
地獄の中より出でて　世々所生の處
常に大餓渴を患ひ　勤苦して飢死す。
今最後の世に於て　已に還人身を得、
等正覺導師　無有上に値見し
釋師子の所に於て　已に[四]寂志と作ることを得
無著道を[五]成爲し　清涼にして滅度す。
唯仁、我れ是の神足に於て　能く飛行すれども
還坎窟の中に入り　爾乃し食を得る耳。
是の故に當に歡喜して　父母に供事し、
一心に稽首禮すべし。　祚を保つこと量有ることなし。
唯仁、我れ　[六]昔作す所の惡行を識念す。
皆種ゆる所の實を受く。　罪福離るべからず。
賓頭盧閉門　時に僧中に會在し
阿耨達池に於て　自ら本の所作を說く。

[一]貨竭品第九　（善來二十一偈）

曾て尊者の子となり、　[二]般頭摩國に在り、
族姓、財寶多く、　眷族に圍遶せられ、

【二】大山地獄。普通の印度佛教古典にこの名の地獄なし。
【三】燒炙。八熱地獄の第七Tapana也、黑繩に第二のKālasuttaなり。
【四】寂志。梵語Śramaṇa普通沙門と音譯す。
【五】成爲し、成就しの意味なるべし。
【六】昔所作惡行の昔は恐らく何等かの誤字ならんか今暫らく昔となす。
【一】貨竭。Svāgata Sāgata。憍賞彌國の人にて、佛の侍者たりしことある一人なり、佛に入火定第一と稱せらる。印度佛教固有名詞辭典五五六頁を見よ。
【二】般頭摩、前に出づ。

常に天と人との間にあり、」　作す所照見を得、
九十一劫を過ぎて、　未だ曾て惡道に歸らず。
少しの功德を作し已つて、」　安を獲ること甚だ衆多し。
已に無所著を得て　滅度して淸く且つ凉なり。
假令我本　佛の功德を知るも是くの如し。」
常に當に塔寺を供(養)すべし。」　得る所の福此に踰ゆ。
是の故に明正覺の德の　弘泰なるを知るを以て、」
當に塔寺を供養すべし、」　其の福終極なし。
佛普く見て我を　經樂第一と爲すと說きたまふ。」
多聞若干種　辯才の德眞に至る。
時に長者凡耆　曾て衆僧の中に在り
阿耨達池に於て　自ら本の所作を說く。」

賓頭盧品第八[一]　（乞閉門十一偈）

我れ本父母を經て　生れて子の中の尊と爲る。」
謹んで其の父に敬ひ事へ、」　亦母に孝養す
二親及び妹弟　奴客僮僕使
吾れ父母の爲めに說き、」　飮食は時節を以てす
時に貪嫉の意を起し　當に父母に食せしめず。」
瞋恚して語に於て謗り　能く飯食の財を得たり。」

【二】經樂第一。前に云ふ頓辨第一と同じ意味なるべし。

【一】賓頭盧。Pindola-bharadvaja。憍賞彌國王の輔師の子にて、歸佛後神通を示し、佛に呵せらる、又師子吼第一と稱せらる、印度佛教固有名詞辭典五〇四—五〇五頁を見よ。

其の餘の功德福
勢ある長者の家に生れ、
生れて父の敬ふ所となり、
身體柔軟にして好く、
足底に異毛を生じ、
〔三〕吾れ子の爲めに
過去九十劫
我が身足を擧げ
今の最後の世に於て、
無所着を成就し、
佛普く見て我を
解脫し盡し漏なし
是くの如く　拘梨種〔四〕
阿耨達池に於て

今の最後の世に於て
憍貴にして兄弟なし。
即ち言教を垂るゝを聞き、
寶藏の億種々を施與す。
自然に長さ四寸
穩安にして無害を得たり。
其餘復一の如し。
地を踏む時を識念せず。
已に還人身を得、
淸涼にして滅度を爲す。
精進尊第一と說きたまふ。
已に不動句を得たり。
衆僧の中央にあり、
自ら本の功德を說く。

一〇

〔一〕凡耆品第七　（取善八偈）

我れ福德を了せず
惟衞佛の寺を見、
金寺紫磨色
現に塔寺に供養し、

本亦義を識らず。
供養して侍し奉る。
幡繖と香華を以てし、
善處に生るゝことを得たり。

【三】吾以子施與寶藏億種々。意味通せず、恐らく以は爲の誤か、「即ち言教を垂るゝを聞き」は子の言に依りの意味にて、その子の願に依り子のために大布施をなしたるを云ふものなるべし。

【四】拘利種。巴利語系の名 Soṇa-Kolivisa のコーリを寫したるものなるべし。

【一】凡耆。Vaṅgīsa。舍衞城の婆羅門にて呪に通し、佛陀と術を爭はんとして教化せられ弟子となる。詩作に巧みにして、屢々佛の前に卽興詩を歌ふ。佛頌辨第一と稱し給ふ。

唯我れ之を憶念し、
今已に實報の
是の作す所の行に緣りて、
無漏にして著する所なく、
五道爲に已に盡き、
是を最後の世となす。
生死の本を解脫し
我今是の緣を以て
時に長者須𦍒
阿耨達池に於て
身の作す所の功德
可意にして快き安穩を得たり。
終始を斷じて生ぜず
清涼にして滅度を得たり。
復胞胎を更へず
然らば則ち復起たず
已に所有海を度る。
號けて須𦍒と曰ふを得たり
衆僧の中に會在して
自ら本の所作を說く。

輪論品第六（明聽十六偈）

惟衞佛の世の時、
本四方僧の爲めに、
加ふるに床臥具を以てし
既に心に歡喜を興し、
「我れ等正覺を見奉り、
無上の無爲に逮び、
是の因は功德の本にして、
既に自然に見はれて
槃頭摩國土（に於て）
一房舍を興立し
皆用持て布施し
時に應じて是の願を發す。
沙門となることを得、
清涼にして正に滅度せしめよ」と
九十一劫安けらく
天上世間に在ることを得。

【四】五道、地獄、餓鬼、畜生、人間、天上の五道。

【一】輪論。Śrona-vimśati-koti Sona-Kolivisa. 二十億耳と譯す、瞻波（Campā）の長者の子なり、佛に見え、信に依つて出家し精進にして足蹠に血を流す、佛精進第一と稱し給ふ。輪は輸なるべし。この人のこと印度佛教固有名詞辭典六三一頁を見よ。

【二】槃頭摩。Bandhumatī。毘婆尸佛の時の都城の名なり。

須鬘品第五（善念十四偈）

昔は出でて遊觀し、
頭上に傅飾を戴き、
惟衞神通佛、
遙に衆庶の人の
親友と倶に家を發で
悉く清淨の心を以て
我れ時に廣施を見、
便ち林中の華を取り
生るゝ所餘に墮ちず
是の德本に因るが故に
後等正覺、
阿羅漢を果證りて
唯一つの華を施すのみにて、
天上に自ら娛樂するを得、
假令我れ素
便即ち塔寺を起すは、
未だ必ずしも心に歡喜せざれば、
如來等正覺、

時に親友と倶なり。
耳に須鬘花を著く
彼に於て大寺を立つ。
共に仕して奉事するを見、
各共に好華を齎らし
彼の佛寺に供へ散す
亦復初めて意を發し、
以用つて佛寺に上る。
天に昇り、下りて人と爲る。
作す所の善を照見す。
無上の導師に値へ
淸涼にして滅度を得たり。
更に百千歲
餘の福として泥洹を得たり、
佛の功德の無量なると、
その福極り有ること無きを知るも、
其の福猶少と爲す
及び諸佛の弟子、

【一】須鬘 Sumana。善念又は善意と譯さる。智度論二〇（大正藏二五・二七一左）に須鬘耳とあるはこの人なるべし。但し、他諸本に見えず。拙著印度佛教固有名詞辭典六五三頁を見よ。

【二】惟衞佛、Vipaśyin Vipassī 毘婆尸佛とも寫す。過去七佛の第一佛なり。

【三】泥洹。涅槃に同じ、さとりのことなり。

離欲(者)の爲めに
假、天下道人の
[二]四方僧の一歩の地を
設復是の滿天下の
佛寺に於て一歩の地を、
我が身造る所の福、
此を以て曉に、
當に佛寺を掃除して、
當に佛寺に供事すべし。
唯君よ、吾れ昔曾て
彼を致すを以て果實は
是の故に佛寺の爲めに
唯仁は此れ第一の
是に於て能く供事すれば
皆一切の婬怒癡を
心の悅を輕空せず
如來正覺、
是くの如く輪提陀、
阿耨達大池に在りて、

經行する所を除掃するに如かず
經行處を掃除するも
掃除するに加かず
精舍を掃除するも
掃除するに加かず
是を以て差特を知る。
其の心に欣踊を懷くべし。
之の等覺の道德高きを知る。
其の祚を獲ること甚だ大なり。
作す所の善を識念す。
下意安穩の樂なり。
好淨の心にて供事せよ。
福田にして上有ることなし。
安きを得ること而も量りなし。
破壞し除くが爲めなり。
福を得ること薄少ならんや。
及び諸佛の弟子に向ふ。
諸の比丘の前
自ら本の所因を說く。

【二】四方僧。四方現前僧とも云ひ、狹い一寺院の僧ではなく廣く天下の比丘・比丘尼を總括して云ふ時の僧伽の意味なり。

歡悅の心を用つての故に　人にして天上に勝ることを得、
是くの如く　拘律尊、[五]　比丘衆と
阿耨達大池に於て、　自ら本の因緣を說く。

輪提陀品第四[一]　（淨除十七偈）

我れ昔寺に往詣し、　地の不淨なる處を見て、
卽ち其の掃箒を取り、　便ち彼の寺舍を掃く。
竟に寺の淸淨なるを覩て、　心中甚だ忻び踊る。
我をして垢塵なからしめ　此の寺舍の淨きが如くならしめよ。
是の功德を用ての故に、　在々所生の處
面色和悅にして姝はしく、　端正にして比すべきこと難し。
其餘の福祚は、　是の最後の世に於て、
父母則ち吾を名け　號曰けて淨除と爲す。
我れ親族の中に於て、　生るゝ時亦淸淨
一切に愛敬せられ、　見る者厭極なし。
正覺導師にして無上なるに、　値見することを得て、
已に阿羅漢と成り、　淸涼にして滅度す。
我の志願する所、　吾をして垢塵なからしめよとなり、
今無垢の羅漢　無漏にして所作辨ず。
假令是の普天下を、　掃除して、淨かならしむるも

【五】拘律尊。拘律は委しくは拘律陀 Kolita にして目連の在家の時の名なり、尊は尊稱。

【一】輪提陀。原語不明なり。翻梵語二（大正藏五四・九九四○）には輪提、應云輪弟。譯曰淨除亦云校定と云へり、依つて拙著印度佛教固有名詞辭典には暫らく Suddhita となせり。

我をして是くの如き、　大力大神足を得せしめん。
是の福德を以ての故に、　在々所生の處、
天上及び人中に、　造る所の福を照耀す。
是の最後の世に於て、　復人身を逮得し、
以て正覺導師　無有上に値見し、
以て釋師子の所に於て、　沙門と爲作り
則ち阿羅漢と成り、　淸涼にして滅度す。
作る所の善甚だ少くして、　安穩を得ること無量なり。
我れ復不善を作す、　今說く、且らく之を聽け、
東、[二]羅閱祇を出で、　生れて尊き者の子となり、
舍外に出でて遊戲し、　人の家に飯食を求む。
卽ち其の父母の　二人共に相娛むを見る。
之を見て卽ち我を撾ち　罵詈して我を逐ふ。
[三]但正命耳を以て　其の身施行せず、
[四]黑繩獄に墮し、　苦を受くること計るべからず。
其の彼の餘殃の故に、　是の最後の世に於て、
諸の外異道學　身を撾ち碎いて韲の如し。
吾れ當に是の疾を以て、　壽終りて滅度すべし。
彼の所作の餘殃　爾らば乃ち滅盡するのみ
是の故に當に悅の心にて、　至孝父母に事ふべし。

【二】羅閱祇 Rājagṛha 王舍城のこと、摩揭陀國の都城なり。

【三】この目連の過去の惡業に就いて法句註四三・九五頁以下には、前生妻の語に迷うて老父母を森に連れ出し盜人の如く裝ひて老父母を打ち殺せしことゝなせり。この下に罪業を示す文は意味不通なり、殊に但以正命耳は一本但以止命取とあれども共に意味明かならず。

【四】黑繩獄。Kālasūtra niraya. 十六大地獄の一なり。

常に中家に生じ、　志多く沙門と作らん」。
是の功徳を用ての故に、」　吾れ五百世を以て、
常に人身を獲致し、　世々沙門と作る。」
是の最後の世に於て、　復還人種を得、
以て正覺導師　無有上に値見し、
則ち辨じて釋師子の所に於て、」　沙門と爲り、
阿羅漢を成就し、　清涼にして滅度す。
今世尊目前に、　比丘僧衆に於て、
我れを智慧の上（とし）、」　正法輪を轉ずと論じ給ふ。
舍利弗智慧、　比丘衆の前
阿耨達大池に於て　自ら本の宿行を說く。

摩訶目揵連品第三　（十五偈）

我れ仙と爲り、閑居し、　林樹の間に處る。
彼に於て、人有りて來り、　我れに沙門と作ることを求む。
吾れ其の鬚髮を除き、　爲めに其の衣服を浣ふ。
之を縫うて之を染め、　心中自ら歡喜ぶ
彼れ退いて一面に在り、　而して結跏趺坐す。
則ち辟支佛を得て、　便ち虛空に飛ぶ。
我れ時に卽ち願を興す。　身をして神足を得せしめ

比ぶべきものなきを云ふ。
【三七】　七覺意。七善提分に同じ。七善提分は擇法善提分、精進善提分、喜善提分、除善提分、捨善提分、定善提分、念善提分なり。
【三八】　八道行、八正道のこと、八正道は、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定なり。
【一】　舍利弗。Sāriputra, Sāriputta。摩揭陀國のナーラカ村の婆羅門なり目連と友にて馬勝比丘に導かれて歸佛す、智慧第一と稱せられ、又法將と曰はる、印度佛教固有名詞辭典五九三頁以下を見よ。
【二】　沙門。Śramaṇa Samaṇa の音譯。勤息の譯あり、善事を勤修し惡を止息する意味なり。本經には他に寂志と譯せり。
【三】　釋師子。釋迦族の師子の意味にて釋尊を指す。
【一】　目連。Mahāmaudgalyāyana Mahāmoggālana。この人は舍利弗の友にて舍利弗に導かれて歸佛す、神通第一と稱せらる、外道に打たれて殉教の死を遂げたりと傳へらる。

此の衆等と最後に俱に、 合會して行ひ正直にして邪を離る。
佛は如來にして說き給ふところ善し。 禁戒を奉ずる人は志さす所を得。
その意念の欲し求むる所の如く、 最後に我身に具滿するを以て、
爲めに生死を盡し、根株を拔き、 我れ皆諸の愛結を絕除す。
則ち是れ佛の法王子と爲す。 第一止足にして常に道を思ひ、
心空に清淨にして著する所なし。 其の志堅固にして能く轉ずるものなし。」
譬へば大山の動かすべからざるが如し。
是くの如く迦葉尊、 諸の比丘僧と、
阿耨達大池に於て、 自ら本の福緣を說く。

舍利弗品第二 （十偈）

吾れ仙と爲り閑居し、 彼に於て沙門
辟支佛の尊を見奉る。 身に絳き衣被を著け給ふ。
之を覩て心歡喜び、 之が爲めに衣服を浣ふ。
復爲に袈裟を縫ふ。 數々爲めに禮を作す。
彼れ則ち我を愍念し、 便ち虛空の中に飛び、
上下に水火を出し、 須臾にして忽ち見えず、
我れ卽時叉手し、 自心是の願を作す。
「我をして是くの如き、 聰明大智慧を得せしめよ、
豪家に生ぜしむる勿れ、 亦賤種に生ぜしむる勿れ。」

【一八】 仁佛。今は慈仁ある佛陀の意味なるべし。
【一九】 辟支佛。Pratyeka Buddha. Pacceka Buddha もと敎團を作らず孤立の佛陀の意なり、獨覺と譯す。原語のPratyekaが緣の原語Pratyāyaに近き處より、辟支佛は因緣を觀じてさとると曰はれ又緣覺と譯さるゝに至る。本經には緣一覺と譯さる。
【二〇】 漏。Āsava の譯にて、煩惱の異名。
【二一】 鬱單曰。Uttara-Kuru。四大洲の一にて須彌山の北にあり、故に北の俱流洲と云ふ。この洲は無我所、無所著、定量壽の三に於て我が南閻浮洲に勝る。
【二二】 勝命天。何の天を指すか明かならず。
【二三】 忉利。Trāyastriṁśat Tāva tiṁsa。六欲天の第二にて、三十三天あるが故に三十三天といふ。忉利は音譯なり。帝釋天この三十三天を統ぶ、委しくは印度佛敎固有名詞辭典六八一頁以下を見よ。
【二四】 梵志種。印度四姓の第一の婆羅門種姓 Brahmaṇa のこと。
【二五】 五樂。五欲に同じ、色、聲、香、味、觸の五境の可意の境界のことなり。
【二六】 無等倫、佛の何人にも

行詣り、進んで江河に遊ぶ。　悅びて輩類を見て相娛樂す。
佛[一七]天中の天も亦是くの如し。　弟子と倶にして飛騰し給ふ。
佛至りて諸の弟子に告げて曰はく、　寧ろ、前世に更歷せし所を識り、
我が爲めに各誰(の)行歩を說け、　而して其の福を獲ること量るべからずと。
彼の迦葉、[一八]仁佛の弟子、　譬へば師子の深山を歷るが如く、
設ひ歷るところあるも敢て當るなし。　則ち前世に作し行ふ所を說く。
野の燕麥を採取せし耳、　少しく[一九]辟支佛に施與せし所、
解脫の心樂しく、[二〇]漏あることなし。　空行を奉じて意寂莫なり。
彼の時、心念に此の願あり。　尋いで卽ち上法を思惟す。
是くの如きの人と倶に合會せんと。　此に終りて[二一]欝單曰に生ず。
彼の因緣の福の致す所を用て、　更に千反欝單曰を歷、
然る後に[二二]勝命天に生じ、　中に於て最特にして、雙ぶもの有ることなし。
吾れ、彼の福の造る所の德を用つて、　亦復千反[二三]忉利に生じ、
種々の華香寶瓔を著け、　身微妙好にして自在なり。
旣に天上に於て壽終已りて、　便ち復則ち欝單曰に生ず。
彼の前世の願の致す所を用つて、　是の福を作せし因緣を以ての故に、
富家[二四]梵志種に生る。　財產衆業無央數なり。
[二五]五樂の中に在つて貪らず、　其の是の佛[二六]無等倫の大哀して講說し給ふ可き所の法に於て、
諸力一心衆根を定め、　[二七]七覺の意、[二八]八道行、
以て此の法を獲致すと爲す。　便ち諸漏を盡し、手に燈を執り、

【七】本起。Upadāna過去生の行業の今生あらしむるものを云ふ。
【八】正覺。佛陀のこと。
【九】度世。世を度ること、迷を離れること、さとり。
【一〇】大迦葉。摩揭陀國の婆羅門にて、多子塔下にて佛に歸す。佛半座を分けて優遇し給ふ、佛涅槃の後、阿難と共に佛教々團を統括す。委しくは印度佛教固有名詞辭典三六九頁以下を見よ。
【一一】法御。法を悟り法に依る御者、人々を制御統制する人の意味なり。
【一二】舍衞。舍衞城Śrāvastī, Sāvatthi 喬薩羅國の主都、波斯匿王の都城あり、城外に祇園精舍東園精舍あり。
【一三】四瀆。前の註に出づる四河のことなり。
【一四】私頭は Sindhū。那提は Nadī にて河の原語。伯師子は Oxus(嬀水)の音譯なるべし。卽ち四河の中二河を出したるものなり。
【一五】神足。神通に同じ、歩行にて其の處に至る能はず、只神通あるもの至り得との意也。
【一六】大通。大神通。
【一七】天中天。神々の中の神の意味で佛の異名の一なり、般若經等にこの名多く出づ。

佛五百弟子自說本起經

西晋三藏竺法護譯

蓋し、[一]阿耨達龍王(晋に無焚と名く)は、佛、世に在せし時、[二]受別の菩薩なり。神猛の德あり。崑崙の墟に據る。斯の龍の居る所の宮館寶殿は[三]五河の源として則ち[四]典覽す。八味の水の池あり、華殖七色なり。此の水を服する者は卽ち[五]宿命を識る。時に龍王、佛世尊と及び五百の上首の弟子を[六]請ず。饍を進むること畢訖りて、(諸弟子)、蓮華の上に坐し、追て[七]本起造る所の罪福を講ず。皆纖微に由つて報應を受け、劫を彌り紀を歷、能く自ら濟ふなし。僥、正覺に値うて、乃ち[九]度世を得たり。各、自ら歌を撰んで、頌を造つて曰く、

[一〇]大迦葉品第一（十九偈）

佛は人中の上にして[一一]法の御たり。　結獄を斷除して[一二]舍衞に遊び給ふ。
諸根寂かと爲りて德は巍々たり。　如來自ら共の比丘に告げ給ふ。
諸の鬼神の娛樂する所あり。　種々の衆華無央數なり。
[一三]四つの瀆、涌き出でて四方に向ふ。　彼の諸の流河、江海に歸す。
[一四]私頭那提伯師子、　人至ること能はず、[一五]神足到る。
飛行疾かにして乃し越ゆるのみ。　疾に共に彼の淵流池に詣らん。
比丘曰く、善し、唯命に從ふ。　[一六]大通安住の上弟子、
(世)尊の敎勅を聞いて神足に乘じ、　譬へば鴈王の衆鴈を導くが如く、

【一】阿耨達龍王。Anavatapta Anotatta。雪山の頂上にあり、諸河の源となると考へられたる阿耨達池に住む龍王なり。無熱惱、無焚と譯す。拙著印度佛教固有名詞辭典四十五頁を見よ。

【二】受別。記別を受くることにて記別とは將來何時、さとりを開くべしとの佛の豫言のことなり。

【三】五河。普通。殑河(Gaṅgā)、私頭(Sindhū)、細多(Śītā)、嚩芻(Oxus)の四河・阿耨達池より流れ出づとなす、五河となせるはこの經典のみなり、印度佛教文學にて五河と云ふは Gaṅgā(恆伽) Yamunā(搖尤那)Aciravatī(阿夷羅婆提)Sarabhū(舍罕浮)Mahī(摩企)にて、印度古典文學にては恆河の本流支流を合せて左を五河とす、Sindhū=Indus(信度) Vipāśā=Bias(毘鉢奢) Airāvatī=Ravi(藹羅筏底) Śatadrū=Sutlej(設咀荼盧) Vitastā=Jhelam(毘吒婆多)今茲に五河の源となすは後者を云ふものなるべし。

【四】典覽。典攬と同じ、主り取る意味にて五河を悉くそこに收めとつてゐることなり。

【五】宿命。過去生のこと。

【六】請。請招、請待。

である。さうしてこの聖典としての阿波陀那に於ける阿波陀那の意味は、今生の禍福を前生の所行に依つて説明するところの古譚である。さうして恐らく、佛陀並に辟支佛に關するものはほんのつけたりであつて、弟子達に關するものが主要であり、それ故にそれは又、前に云ふ所の佛陀の傳記及び本生説話に對する關心と共に存在した比丘・比丘尼の所行、行業に對する關心、それがこゝでは特に比丘・比丘尼の本生説話にのみ向けられてゐるが、その關心が阿波陀那を生み出すもととなつたといふ私の所論を裏づけるものであらうと思ふ。

それであるから、十二部經でいふ所の阿波陀那は Jātaka に非ず Upama に非ざる古譚、説話を廣く云ふのであるが、聖典としての阿波陀那は、佛陀、辟支佛、佛弟子、然し乍ら主として佛弟子の前生の功罪、委しく云へば今生の禍福を説明するに足る前生の功德罪殃を説いたものである。この佛五百弟子自説本起經は卽ちその聖典としての阿波陀那である。

聖典としての阿波陀那は、錫蘭上座部にあることは申す迄もない。これは二卷になつて Miss. Mary E. Lilley に依つて巴利聖典協會から一九二五年―一九二七年に出版せられてゐる。菩薩本行經（大正藏三・一一二左）に、「昔佛在阿耨達池、告五百阿羅漢、汝等各々自説前世宿行今得成道、時諸阿羅漢承佛敎誨各々自説宿行所作功德」とあり、婆多竭梨が定光佛の時、佛塔を掃除し功德を積んだことを説いてゐるから、この今の自説本起經と同じい形式であつて、異なるものがあつたことが知られる。今暗記の失があつて申譯ないが、薩婆多有部の典籍にもこの五百弟子自説本起がある筈であるから、少なくとも三本以上、この經典に類したものがあつたことが知られる。して見ると、聖典としての阿波陀那は諸部派間に幾本かゝあつたものであることが解るのである。然しこの現存の自説本起經が何派の所傳であるかは解らない。或は大衆部の所傳ではなからうか。

この佛五百弟子自説本起經の三十編中巴利阿波陀那にその相當するものゝあるのは、左の通りである。

1	III. 3	16	III. 535
2	III. 1	17	
3	III. 2	18	III. 18
4		19	
5		20	
6	III. 386	21	III. 14
7	III. 541	22	
8	III. 8	23	III. 4
9	III. 32	24	
10		25	III. 16
11		26	III. 15
12		27	III. 43
13	III. 393	28	III. 538
14		29	
15	III. 535	30	I.

譯者 赤沼智善 識

昭和七年五月十日

この後者の例の本は明かに相當經の經題から見て阿波陀那であるが、この中者の例の本起といふも阿波陀那の譯語であると考へられる。龍樹は十二部經中の阿波陀那を「阿波陀那者與世間相似柔軟淺語」と云ふてゐるが(智度論三十三往二・七四右)、蓋しそれはぎりぐの重要な教義を記した文字ではなく、佛教的教化の目的を有しては居るが相當に興味を本意とする文學形式のものと云ふ意味であらう。一種の文學形態ではあるが、本生說話と異なることは前に云ふた關心の焦點が全く異なるところから明白である。勿論、後期に於ては、この兩者の混亂が起り、菩薩本起經、所行本起經、菩薩本緣經の如き、釋迦佛の前生物語も阿波陀那とせられて居るが、初め其の成立する時にはつきり分れて居つたものと思ふ。この阿波陀那を支那では譬喩と譯した事が多いが、譬喩の譯語は適當ではない。譬喩は Upama であつて、これも M. 7 Vatthupama s. (中九三水淨梵志經)、M. 29 Sāropama S. (增四三・四) 等の喩說せられたる經典が原型になつて、一つの譬喩文學、後の百喩經の如きを生じ來つたが、この Jātaka に屬するもの Apadāna に屬するもの Upama に屬するものは自ら截然たる別々の分野を持つてゐたものだと私は考へる。

二

阿波陀那の原始的な形態は以上の如きものと私は考へるが、この阿波陀那の原意はいかん、譯語は何が適當であるかといふ問題になると頗る困難なことになる。Apadāna は、Apa+dā+na であるが、Apa は Ava に同じく Ut に對する前置詞であり、dā は dyati 結びつけるといふ意味の語原であり、さうしてそれからして物語、讀物 (Legend) といふ意味の語になつたものであらう。古來、本、本起、本緣、譬喩、證喩經等の譯があり、何れの譯も適當といふことは出來ないが、本の緣の譚と云ふ意味で本緣とか本緣譚とか云ふ譯がいかゞであらうか。

今こゝに譯出した佛五百弟子自說本起經はこの謂ふ所の阿波陀那であつて、正確に云へば阿波陀那の三十編を編集した一冊の書としての阿波陀那である。前者の阿波陀那は九分經十二部經で云ふ阿波陀那であり、後者の阿波陀那は小尼柯耶、又は雜藏に編入されてゐる經典籍としての阿波陀那である。この漢譯阿波陀那に相當するものとしては、巴利語の小尼柯耶に屬する Apadāna があるが、巴利の Apadāna は佛阿波陀那、辟支佛阿波陀那を初めとしてこれに舍利弗以下五百八十七人の上座上座尼阿波陀那を含んだ大きなものであり、これは大迦葉を初め世尊を最後とする三十編から成るもの

佛五百弟子自說本起經解題

一

阿波陀那(Apadāna)といふ語には十二部經の中で曰はれてゐる阿波陀那と聖典として出來上つてゐる形のものが阿波陀那と呼ばれてゐるのと二つあるが、勿論前者が先きであつて、後者はその名に依つて作られ集められたものが、さう呼ばれるやうになつたものであり、從つてその意味する所にも自ら幾らかの相違があるのである。今かういふ阿波陀那といふものはどうして出來たものであらうか。

一體、原始佛教々團の人々の間には、教祖世尊の經歴言行が一つの關心事であると共に、進んで又その教祖世尊の偉大さをしかあらしめたところの過去、輪廻を信ずるものにとつての過去は遠き過去世に積かる過去であるか、この過去がどうあつたかも亦關心事の一つであつたでなければならぬ。この教團の人々の關心事が一は佛傳文學を生み來ると共に、一には當時の物語古譚を取り入れて本生說話(前生物語)をなし初めたのであつて、事實、原始經典中に、又律部の犍度分中に、佛傳の一とくさり〳〵が編纂さるゝ迄に至ると共に、それは後に纒められたる佛傳の構成要素となるに至り、又佛陀の本生說話も追々に數を加へて、バルフートの塔の建立せらるゝ時分には、その數十が彫刻せらるゝ迄に至り、年を經ると共にその數を加へて、遂に今日我々の所有する Jātaka と稱する厖大な物語說話叢書となるに至つたのである。以上は佛陀に關する教徒の關心が生み來つたのであるが、それと共に教徒には教徒達の中の勝れた人々の事蹟、又は有名無名に拘らず、教團に入る迄の、入つた後の感激的な場面を有する人々の事蹟の追憶記億も亦重大な關心の一つでなければならなかつた筈であるが、この追憶記憶が形をとつて一つの作品となつた時、又その他何等かの教訓を含んで一つの物語が纒められた時、及びこれに合せて釋迦佛以外の佛陀又は辟支佛の事蹟が纒めて語られる時等、これが阿波陀那(Apadāna)と呼ばれて、早くから、原始經典中に編入せられてゐたのである。前者は喩へば、中阿含一二三沙門二十億經(Mahāvagga V. 7–59)、中阿含一三二頼吒恕羅經(M. 82)等の如きがこれであり、中者は中阿含七二長壽經本起經(Mahāvagga X. 2. 2–20. M. 128)の如きがこれである。後者は長阿含—一大本經(D. 14)の如きこれである。

れば更に相殊勝にして、彼の天趣中の福徳の因緣なり。善い哉自性は無倒を增上し、實相生起すれば蘊性を了知す。遷變の相盡くれば勝義を發生し、是の如き懺謝は其の過患を盡くす。多種の煩惱は理に迷ひ事に迷ふ、利・鈍を了知すれば品數無等なり。是の如き根は分別に隨つて倶に生じ、斷ずる時の所在は別に論說するが如し。法數の次第は勝力を趣求し、賢善の修作は眞實圓滿なり。是の如く賢善は根本を修習し、祕密甚深は根本行と名くるなり。是を菩薩修行勝行と謂ふ。

菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第三十四

菩薩本生鬘論（終）

施は相貌の自在と爲す。布施は空の如く根本寂靜にして、誠諦は是の如く災禍發生するも有力能く治す。別別なるも眞實は清淨可意にして、修習の智慧は眞正解脱なり。是の處は、菩薩は苦已み眞實にして、譬喩も及ぶこと無し。煩惱染五蘊の繫縛を盡くし、清淨行を修す。是の如き名色は五蘊皆捨し、瀑流染諍は盡く煩惱障なれば、寂靜行を修すれば自性發生すと。是の處は、運載は布施を增上し、彼の造作の性は制度甚深なり。智慧を發生すれば趣求を增上し、無倒は本より、縛染の時分を盡くす。天趣は寂靜の造作にして眞實、淨妙無垢は根本の力用なり。我執の利惑は鈍染貪癡にして、勤求自在なるも繫縛盡くし難し。有力の相貌は布施を希求し、果報の增上は勝義を出生す。相狀の止寂は處所清淨にして、眞實の勝因は彼の聞持の義なりと。是の處は、菩薩は暗鈍の業無く、生死に隨順して群類を誘接す。天趣の有情は無倒の因の義にして、聖行を造作し十善業を崇む。無相の運動は相合の義を求め、勝妙の修行は流轉の行無し。寂靜無滅なれば殊勝發生し、彼の我執の相は自在の殊勝なり。顚倒の眞實は纒蓋の自性にして、如如の聖性は本智冥合す。後得の緣は變影の如く方に得、因果の位は親・非親等を異にす。法性の圓滿は始末此の如く、在纒の名は出纒の法身を藏す。邊際を造作すれば法體を精求し、止息に隨順すれば重きも復た遠離す。義利を發生すれば施行無畏にして、造作を發起するは本來の相貌なり。分別する布施は須からく勝れたる心ならず、無相の福田は眞實殊勝なり。布施の本性は能破壞の相にして、無性の本は自から希求無し。清淨の最勝は貪欲遠離し、道行の邊際は吉祥勝妙なり。彼の如性を求むれば不可得にして、眞門に推入すれば可も無く亦た不可も無し。言說の自性は名句文に依り、名句文は假の言詮にして實を安んず。根本不生なれば聞持長養すと。是の處は、無壞安靜なれば常寂にして、天人も清淨なれば亦た驚畏無し。善い哉不虛は自性を增上し、最上無倒は止息眞實なり。圓滿の相貌は淨性無諍にして、布施有力は福德の本なり。慈母の因は族望を上と爲し、寂靜を希求すれば煩惱生ぜず。彼此恭奉す

眞實如如なれば造作の義無し。菩薩施を行ふは其の報を思ふこと無く、無倒の相貌にして平等の施と爲す。根本寂靜は勝妙の修作にして、繫縛在る所に喧煩諍訟す。自在の時分は處所に安靜にして、根本の相狀は殊勝に動轉す。寂靜を趣求すれば屛處に造作し、彼彼眞實なれば並に楚毒無し。眞實の諍訟は暗鈍の根本なれば、是に於て無倒なれば勝福の因を增す。在處止寂なれば行施普く及び、生生の處浄因相應せん。平等を成就すれば止息を了知し、最上の行施は無貪等と倶なり。苦受の遷變は智慧增長し、自性を愛樂すれば安靜止息す。布施するの處は業報虛しからず、自性無我なれば如の義を了知す。清淨なる誠諦は究竟して空の如く、禪定寂靜なれば苦惱を生ぜず。不動の名色は自性を了知し、上妙の愛樂は殊勝業を求む。清淨の快樂は是を聞持することにして、大有情の體は溫潤和悅す。最上の勝義は安靜平等にして、密部の語言は功能議し難し。如性は誠諦眞實なれば重ずべしと。是の處は。彼の增上力を修崇すれば、發生せし顚倒も圓滿殊勝なり。云何か本性の位極は尊崇なりや。始生は卽ち餘法の不類を具し、體勝劣有れば彼れ實性有り。因を可得と爲すは眞實の了知にして、上妙の體性は殊勝の人なり。進退常に定れば光明を增盛し、平等の所用は根本の施行なり。十種の戒忍等の行を發生すれば、眞實の造作は寂靜の意樂なり。靜住の施無くば倒染の行有り、不可得を生ずれば相貌の義を止む。身相は界性に隨順すれば得可く、變動無き行は寂靜依る可し。有無は遷變すべからず倶に離れ、眞言の行相は思議遠隔す。持戒の功德は尊大の因にして、禪定の力は入聖の道なり。平等は作業遠離に相應し、繫縛も亦た除くと。是の處は、菩薩は增上を稱讚し、運載の殊勝は淨行を了知す。根本と邊際とは倶に不可得、智慧了知は彼れ實に行相なり。福德の所在は力用の變遷にして、勝義の力用は天帝の功なり。是の處は、平等は影像の修作にして、自性は福祿增上趣向す。梵行淸淨は意地の本にして、究竟增上は圓滿無倒なり。布施の心は勝義を發生し、相狀の淨妙は世を擧つて希有なり。見る者厭ふこと無く菩薩の行を修し、慈母の

菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第三十三

〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第三十四〕

瀑流顚倒の因は我慢を生じ、第六意識は謂ふ所の本なり。菩薩は云何が時分長遠にして、大果を證せんと欲して少因なること能はず。萬行の因を修して無邊の果を獲、菩提涅槃は言慮兩ながら亡ず。大悲圓滿に精進行を修するとは云何なる時分ぞや。空の如き麁重は障礙出で難く、三根本智八後得智は方に除遣すべく果報自在なり。法報化身は聞持具足し、根本の力用は敎法清淨なり。勝義眞實なるは聲聞の果にして、定性は無餘灰身して智滅す。有性は迴心して變易身に入り、大乘に隨順すれば直に成佛に至る。佛法の梵行は圓滿の運載なれば、是れ大有情にして自他倶に利す。彼の有情の身は佛種皆具し、有障・無障或は凡或は聖も、此れ一の自性にして曠劫常在なり。是處は、心法善なれば壞るべからず。大人の中可欲に隨順し、乃至平等並に皆濟益す。殊勝の荷負は精進行を求め、纒蓋の性は本我執より生ず。聚落の希ふ所は喧諍の事、眞の垢穢にして清淨行無し。平等は處所に悲願引接し、圓滿なる意地は利物捨つること無し。國中の王は善く言ふて化する譽あり、彼の時の人民從ふ者風の如し。誠實の邊際は清淨自在にして、造作は處所に嚴麗比無し。聞持を具足すれば身心安泰にして、施設の自性は勝因を增上す。天趣の煩惱は殺害有るが故に、三乘の善友は力用接す可し。眞實の自性は究竟安樂にして、師子王の如安畏無怖なり。聽受を希求すれば聞持滿足し、自性清淨なれば解脫の義を生ず。性本の增上は相貌の力用にして、默靜にして無相なれば澄心無動なり。寃家は往古より觸對現前し、卒に免離し難きも極勝の善を修すれば、前の愆罪を答謝して福輕重ならん。寃家は自ら有情の支分を免れ、自性を了知すれば煩惱を止息す。全く聖行に憑る。毒藥を造作すれば諍訟を發興し、本有の支分は言說を增上す。勢分自在なれば不可得有り、

は梵行止住し、纒縛禍難は澄慮安止す。上妙を趣求して大果を進修し、有力は心を興し精進すること是の如し。離染の邊際は圓滿獲得し、德行無倒なれば纒蓋遠離す。相狀を觀示すれば勝力を勤修し、時分の顚倒は全く道行を斷く。誠諦を愛樂すれば不虛の[六]說を盡くし、無言說有らば實に大法雨なり。究竟最上なれば遠離の法を盡くし、勝善無諍は隨順の所求なり。根本施を斷けば唯だ支分を行ずるのみ、聖人教を垂れたまふこと虛しく設けず。塵汚の行は煩惱の纒蓋にして、垢染と遷變とは俱に不可得なり。丈夫の行は種族殊勝にして、不動常寂は一も言說無し。珍寶を破らざる心は常に守護にして、全く無作用なれば流轉の性無し。智解了知するは如如の性にして、業報の修感は影響是の如し。菩薩の慈悲は曲げて所言を盡くし、分別して眞實に引導すること此の如し。清淨の力用は垢染已むこと無く、快樂の處は以て比譬すべきものなし。彼の施の自性は勝義清淨にして、懺悔を成就すれば天の如く穢無し。勝義垢染は言說の相を離れ、不可說は根本の勝用有り。亦た不可說は我の自性にして、本生常の義は眞實の義有り。彼の造作は隨順行有り、我見の推求は顚倒行と爲す。瀑流と染との見は俱に分別を生じ、語言寂靜なれば荷負誠實なり。是の有情の義は清淨施を行じ、運載すること多種なれば生死の義を越ゆ。善い哉施を行へば貧苦の義を除き、祕密の功は言及ぶべからず。彼の愛樂は增上の言說にして、寂靜は處所に希戀已むこと無し。殊勝なる布施は心を用ふること普く均しく、身分無倒なれば處所鮮潔なり。勝義の無縛は聖力無畏にして、是の事無垢なれば此の性清淨なり。遷變の法は聞持の力用にして、自性を損減すれば平等行無し。垢染盡くること有れば戒德除く可く、天中の行は須からく眞實を貴ぶ。惡趣の報は亦た並に虛しからず、善・不善の業は功力齊等なり。忍行は云何ぞ勤苦無退なるや。設ひ違損に遇ふとも 志 堅ければ屈し難く、寒熱に逼迫するも安然として忍受す。凡夫の行は眞實に唯だ施すのみ、智慧清淨なる造作の相貌は、復た惡趣有るも圓滿に報を受くるなり。

【六】底本には說字を設字に作る恐らくは誤りならん。

れば眞實を增上す。身相淨妙なれば邊遠を憶念し、如見寂靜なれば息念已まず。止息に自在なれば禪那清淨にして、行施心等ければ大有情類なり。本自性を修すれば殊勝の功力にして、相貌に依止すれば自在を增長す。圓滿なる勝義は無畏安靜にして、耳根の聽用は所在無礙なり。靜住邊遠は慮を澄せば止息し、根本の怖を盡くせば清淨施を爲すなり。聖道にして縛無くんば鈍慢有ること無く、造作不壞なれば施行轉堅し。和合は記念有力にして忘れず、最上清淨の道行を發生す。影像を遷變するは上妙の勝因にして、運載平等なれば無倒常寂なり。淨妙の布施は在處安穩にして、勝因の功行は在處にして有り。從順して菩薩の行を修作するは廣大なる有情にして無邊行を施すなり。明利恭謹なれば無畏勝妙にして、無我にして中に處するは澄寂にして敬愛なり。自性有力の行は無倒行にして、無邊際の聽聞有らば遠離す。不壞の苦果は眞實發生し、本無の相貌は安靜無動なり。圓滿有果の自性は澄靜にして、本智平等なれば理事虛しからず。涅槃は求む可し明利を增上す、我慢生ぜざれば邊際壞るゝこと無し。寂靜隨順の本は智道を後にし、清淨の力用は造作を成滿す。處所に滅ずること無き顚倒は本を生じ、時分に布施の修作有ること無し。力用殊勝なれば淨妙の自性にして、天趣の報は梵行の修因なり。淨妙の勝軍は煩惱と敵し、金剛不壞は能く自性を摧く。清淨の修施は暗鈍の止まんことを求む、是の如きは究竟の行を崇修するなり。眞實は處所に平等なれば染無く、力用具足すれば遠離增上せん。自性究竟するは殊勝の修作なるに、云何ぞ本實は淨妙の獲る所なりや。我處の力用は施行增さず、自在清淨なれば染の惡施無し。云何ぞ舍宇を修造するに堪へざるや。果報は不精なれば貧乏を感ぜられ、流轉堅からざれば遷移陷墜す。德行を勤求すれば快樂從ひ順じ、支分を壞らざれば身體故の如く、果報を成就すれば福德廢すること無しと。是の處は、菩薩の教誡は安靜なれば、眞實自在の體性求むること無し。主は無畏にして最勝盡くること無く、不壞の自性は有力發生し、[五]檀那行を修する功用滿足せん、是の如き一切行は菩提行なり。無修の本

【五】檀那は梵語ダーナにして施の義なり。

布施は國王も愛すべし。聽聞の義祕密藏の義無く、克實不行は世行を圓滿にし、死苦の想念は棄捨を圓滿にす。是の如く澄寂は善事の趣求にして、苦惱患難は速に捨離を獲、隨順記念は國土豐盈なりと。云何ぞ如如の行を發生するや。一切處所に垢穢清淨なれば、諸相塵垢の想念止息す。運動は是の如く寂靜の根本にして、是の如く丈夫の喧諍皆息み、世間安靜にして人民和悅せん。是の如く縛法安樂なれば無慮にして、勝義邊際の根本は是の如し。

菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第三十二

〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第三十三〕

眞實の邊際は殊勝の荷負にして、根本清淨は自性の相貌なり。果は多種あるも力用の因行にして、謂はゆる隨順聽聞菩薩の行相なり。殊勝なる方所の邊際は無倒にして、圓滿なる力用を發生すれば縛無し。根本の行施は遷變の行無く、淨因を生ぜざれば相狀得難し。想念の法は眞實の煩惱にして、因法を生起すれば止息究竟せん。障礙遠離すれば識性は清淨の敎法に隨順し。智慧は力用の自性を了知せば、遷變の根本は布施を首と爲す。心行は悲みて殊勝の自性を導き、清淨の行業は自在の力なり。謂はゆる力用眞實なれば如性不生にして增ゝ善行を修し、煩惱繫縛の思惟は善業にして果報增上すとは聖敎の言說なり。知見了知するは彼此の勝行にして、聖法を想念するは清淨の作業なり。眞實趣類繫縛の法は惡業實有なれば醜果無きにあらず。聖說を想念せば捨棄するや、淨妙眞實ならば往趣無きにあらず。處所に不生なれば正理方に顯れ、不動なること山の如きは清淨の相狀なり。苦果起る時[三]末那同じく生じ、隨順の所依は更互の義有り。瀑流染性は[四]第六と俱なれば、次第して生じ總別の報有り。本因を希求すれば造作無靜にして十善相ひ資くれば方に百數を成ず。施を修すれば演說遠劫長時にして、善淨の力用は縛染遠離す。生本の造作は無因なれば起らず、所在如如な

【三】底本に未那とあるも末那ならん。
【四】第六は第六意識のこと即ち末那識なり。

を勤修し、教誨の根本は善を發生せしむるなり。復た靜住有らば自ら勝法を證し、行位高く遷りて漸く聖位に登り、自性の種種祕密を明了す。光明の力用は殊勝鮮潔にして、本因を獲得すれば無怖の自性なり。彼此增上するは圓滿の根性にして、施設の本元は無倒淸淨なり。我執無き性は是の幻を了知し、實際の因は淨妙の行を修す。本不生起らば解脫を了知し、梵行希求は寂然として止住す。寃報は無對にして肅然として遠離し、甚深微妙の法藏を敬仰せば、殊勝の敎法は運載の功用なり。王の敎令は是の處林の如くなるも、是の如き人民は咸く來り依り慕ふ。法令巖峻なれば生靈一の如く、治化の聖功は物を豐にするを最上とす。寃敵は終り有りと雖も患を爲さず、萬物を運載すれば百も遺失無し。一切の方所は咸く依りて敎を受く、彼の國云何ぞ肅然として寂靜ならんや。菩薩言を出さば甚深にして畏るべし、云何ぞ無倒處所に止息するや。變動の法は所在に益濟し、崇修の事行は全く欺詐無し。普く康安を得ば衆庶異無く、治化興行し歡樂極り無し。勝義寂止すれば天の安靜なるが如く、淸淨の行施は普均に濟給す。彼彼皆法は平等の修治にして、造作の施は圓滿日用と爲す。多種の障は盡き難ければ復た故の如く、染諍を了知すれば是の族類を盡くし、心地は繫縛の事と相應すること無し。惡業既に成りぬれば卒に移易し難く、朋友林を成しぬれば遠離し能ふこと無し。煩惱諍ひ競へば力已むこと能はず、造業を止息すれば復た勝行を修す。聖敎の法行を修するは止息行にして、煩惱障を遠くるは眞淨の法に依る。自性・相狀・體の義は空の如く、廣大なること空の如きは塵勞の麁重なり。法本無我は寂然として淸淨に、邊際深遠の敎行を發生す。有學を造作するは寂靜の法なり、是の如く處所に安靜なれば無畏にして、顚倒の修崇は染諍の相貌なり。又復淸淨眞實を修作し、聽聞に相應せば空の義の如し。平等に隨順せば廣大殊勝にして、隨順して本智の三種を造作す。王者橫に物を損ずることを懺謝せば、殊勝を聽習して趣求の心有らん。彼此の自性は俱に言說を離れ、暗鈍長養は世間の邊際なり。梵行は世間に淸淨を破らず、彼れ求むる

り。體性無諍ならば如性清淨にして、師子の善淨自在有力なり。殊勝の相貌は增上愛すべく、屈伸進止は庠序則有り。聽聞して離怖するは力用の修作にして、勝義の鬪持は實行を發生す。布施無倒ならば自性安靜にして、色相の殊妙は運動澄寂なり。造作の功能は世間に希有なれば、廣大嚴麗にして清淨無比なり。寃家は捨て難く聖方に入るを除く、勝義無倒なれば力用自ら止み、根本の寂靜に發趣すれば喧しきこと無く、我慢の邊際は理惑斷じ難し。荷負の勝法は力用無對にして、正理に隨順するは清淨の自性なり。忿性は不善にして熾然として發起し、火の如く止み難きも、寂靜に自在なれば供養を修設す。暗鈍我慢は穢濁の處は、究竟の中間無倒を獲得し、自在に布施を造作し盡くること無きも我慢を具足す。眞實の勝義は自在に無垢清淨に進趣し、處所に邊際の施行普く均し。楚毒災禍も梵行に止息し、塵垢暗鈍も密部能く止む。根本の荷負は聖力施すべく、倒染を洗濯し究竟して盡きしむ。種族の修施は普遍なること雲の如く、根本の眞實は圓滿清淨なり。彼の勝義の因は有力無畏にして、黃金の伏藏自然に發生せん。澄寂は處所に彼彼の因行にして、微妙甚深なれば解脱の義を生ず。金剛は壞ること無く能く煩惱を摧く、一清淨に合すれば根本遠離す。自在の勝力は流轉の義無く、靜住の獲得は推求の意無し。布施は無邊なるも思惟の義無く、屈伸進趣すれば寂靜に和合す。生死を解脱すれば煩惱を斷ずる義なり。王は國を護りて生靈を安ずるなり。勝義の增上は寂寂を義と爲し、本無倒を起せば作用の事を除く。星曜安然なれば遷變の義無し。成就して失はず勝事を增長し、眞實の根本は光耀の事を增す。星辰を遠離するは災禍の事、欺誑種種なるは大智慧行なり。遷を了知すれば愚癡の患を盡くし、造作の根本は有情の盛事なり。垢穢を荷負して遍く布施を修し、有情の楚毒は遷變して捨て難し。眞實を成就する祕妙の語言を進退和合し崇奉頂戴せよ。識等の五種の果報は有と爲す、善・不善業は親に非ざれば論ぜず。顚倒垢染は勢用生起し、專ら星辰を求むれば本位に安居し、彼の運載力の自性虛しからず。暗鈍の施設は善淨

遮驕す。我慢の意は勝義止息し、慧解相ひ從へば顚倒の想無し。有情の彼の影は能く捨離するもの無し、善惡の報も相ひ隨ふこと亦た然り。是の如く聞持は淸淨の本にして、甚深の法は淨施を發生す。財賄多しと雖も惠施を生ぜざれば、意地慳貪にして積聚し捨て難し。悲敬して【三】布施する主は分有り、眞實を生起するは聞持の力用なり。時に實因を分たば纏蓋に自在にして、親族も時に資益を干煩すること無し。有情に布施し惠捨を愛樂せば、云何ぞ因を修して急時に相ひ濟はんや。憂受の時は心地安じ難く、受報の果は前因の事に依る、善惡を了知すれば影響虛しからずと。是の處は、云何ぞ喧煩止息するや。患難の邊際は聽聞有ること無く、彼の增上因は貧病止息す。寂靜誠實ならば何ぞ過患有らんや。菩薩は接引し言を垂れて誨止したまへば、此の如き渴乏究竟して有らず。云何ぞ自性は諍訟を樂まざるや。平等の義利は彼我普く均し。是の處は、不壞にして流轉の義無し。勝義の根本は無倒の梵行にして、根本の勝因は如々にして無怖なり。智慧不常なれば三性不定にして、有支を發起するは本貪愛に由る。是の如く夜暗は黑白分ち難きも、善淨の力用は明白照然として、怖畏を遠離し無倒淸淨なり。如性は畏を離れ勝義の邊際たり、色蘊は見るべく四蘊は分ち難し。根本の眞實は處所に得べく、垢染・諍訟の邊際は煩惱なり。最上なる一切の根本は布施にして、敎法の義利は處所に聽聞す。災禍の相狀は破壞せざること無く、無倒寂靜ならば自在に施を修せん。根本の顚倒を遠離すれば法を生じ、淨妙の邊際は增上の勝義なり。勢力の有情は聖法を了知し、增上の根本は生類を荷負す。本施行を修して寂靜進修し、自在の造作は勝行を發生す。淨妙の邊際は楚毒を遠離し、繫縛の力用は怨家息除す。自性の捨施は勝妙の制度にして、邊際眞實は修習の最上なり。希求の相貌は無倒の修習にして、施設の自性は運動止息す。名色五蘊は福德感應するも、飢渴熱惱は能く捨離すること無し。繫縛生起すれば苦毒盡くること無く、心所の法は心と相應し、施を行じて貧窮の類を濟益す。根本の聞持は誠諦の施行にして、善妙は毒を除く安穩の心行な

【三】布字底本に不字に作るも文意通ぜず恐くは誤りならん。

竟して施行等の法を修崇せよ。眼根は殊妙の作業を照了し、福德は益濟等の事を進修す。善法に相應せば我執の縛無く、如實の行なり。覆障は眞實を了知すること能はず集諦の行にして、相貌・纏蓋・染障を發生する意地の造作は不如法行なり。圓滿なる遷變は自性の法體にして、過去の想念は所作の因行なり。作法の顚倒は諍訟の過患にして、有情の根本は處所に垢染す。布施究竟すれば災禍を除免す。是の如き力用は界性清淨にして、行歩安祥として殊勝の軌範なり。是の如く清淨は處所の制度にして、寂靜の自性は諸法の道行なり。廣大なる義利は、隨順して了知し、我見の推求は處所に最上たり。根本一清淨の因行に合すれば、流轉は無倒にして勝義を希求し、遠行の力用は淨妙の因果にして、心分の驚怖は憂惱の思慮なり。廣大圓滿は諸天の梵行にして、驚畏は有情の身分を破壞す。雲の遍く覆ひ乾枯を潤澤し、嚴麗種々にして處所に安居するが如し。廣大平等に布施を修行せば楚毒の有情の苦惱息除し、眞實殊妙の果報を獲得せん。障染・顚倒・怨結を遠離する教導は淨妙の功德を增上し、有情は勝因を清淨に修作す。布施行を修すれば慳悋の障を除くこと、雲の相狀が熱惱を息除するが如し。淨妙にして眞實なれば顚倒遠離し、快樂の自性は制度畏れ無し。增上の果報は支分殊妙にして、希求を造作すれば[一]諍訟止息せん。靜住は修飾の相貌安泰にして、卒暴は煩惱の捨離を生ぜず。究竟の邊際眞實を造作すれば、貪欲顚倒隨順して止息す。生死に棄背し染障を解脫せば、遷變の相狀刹那に皆盡きん。因の處感を招くこと盡くること無きを了知すれば、圓滿祕藏安靜として無我なり。邊際の趣求は清淨無縛にして、寂靜は無染にして意法常止なり。自性は義利の嗔諍息除すること、世間種々希世の物、隱覆して知れざれば忽然として棄てらるゝがごとし。我執に順從すれば恪惜して與ふること無く、纏縛を增上し堅固にして解き難し。楚毒既に傷くるも百事無記なり。是の如く寂靜は塵坌生ぜず、主者清淨なれば智慧了知す。寂靜の處は垢染止息し、造作の相貌は本より自ら眞實なり。知見に隨順すれば惰恣轉た盛にして、繫縛發生し塵勞

【一】諍字底本に誦字に作る文意通ぜず恐くは諍字ならん。

り。清淨の修崇は顚倒の染無く、廣大なる城邑は豐物熾盛にして、淨妙殊勝全く諍訟無きがごとく、本行の施行は世間の資益にして、吉祥の勝事は支分を發生す。遷變の根本は遷變行を修し、我・我所の見は前後に發生す。正解脱の義は染分皆止み、有・無は眞實移轉して定まらず、我執を本と爲す慢等方に生ぜん。運載眞實なれば義利無盡にして、聖所に奔詣して餚饍供養す。纒縛有力なれば苦海出で難く、若し見道に入らば分別して皆斷ぜん。明了行を修すれば輪迴止息し、五蘊名色は無爲此に非ず。佛果究竟すれば餘は皆因分にして、運載圓滿すれば無上の覺位なり。善業長時三無數劫なれば、纖瑕必ず片をも去つて善遺すこと無し。根本の進修は是れ大有情にして、福德の殊勝なる體性は無縛なり。眞實の力用は根本の勝因にして、貪瞋を止息するは人天の行なり。布施を勤修するは福樂の因にして、戒行無虧なれば其體尊大なり。相貌力用增上すれば無慢にして、安靜無縛なれば塵汚自ら妙きん。德業の尊崇は群生依附し、人天趣の類は雲の如く普く覆はん。清淨最上の寂然は無諍にして、淨法不虛なれば祕密成就せん。隨順貪欲は勝果を希求し、自性の了知は力用眞實なり。生不可得は約せば性說の如く、性不可得は不可得なること無し。根本の愛樂を了解すれば寂靜にして、清淨の勝因は損減の義無し。有不可得は約せば遍計の說にして、有爲の法は緣に伎らざる時有不可得なり。緣に遇ひ合する時無不可得にして、尊貴の人福德廣大なるを大有情と名く。毒藥を合して修するは顚倒の施設、眞實の修因は我慢の法を除き、善支の力に伎りて自在に進修す。靜住安樂は煩惱の垢染と麁重種々の難事と瀑流の苦果顚倒の法を遠離す。究竟增上諦の法は智解に隨順して變動を了知し、無諍の根本は種々の勝事なり。造作する平等は遷動の法にして、貪愛の進修は相貌の行なり。修作の自性は淸淨の因相にして、根本の縛力四方に衰患す。布施は往來の貧病を濟給し、彼の災の自性は慳恪に因りて得、熾然なる毒害は清淨行無し、隨順は處所縛障の所得なり。第六意識は眞實の推尋にして、能く貪欲種々の因行を斷ず。彼々十種の惡行に順從するは究

屬す。正法を聽聞すれば暗鈍の性無く、道行平等なれば有力の荷負なり。清淨の教法は殊勝を詮表し、善淨を聞持する功用測り難し。是の如く修習すれば安然淸淨なり、云何ぞ眞實の本智は如を證するや。是の如きの智と境と相稱へば、心緣慮亡し語談詞喪す。是の如く自性は無所得を得、快樂自在なれば安隱の行を獲るなり。意地に染無くんば身心安泰にして、眞實淸虛なれど塵も罣礙すること無し。大悲常寂に趣向することを發生せん。

菩薩布施力用周遍尊者護國本生之義第三十一

〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第三十二〕

王者の狀貌は世の希有を盡くし、生靈を教令する本は其の道に存す。希世の物は無意にして念を挂く、謂はゆる隨順聽聞は菩薩の眞實根本の相狀にして、世尊の病患老相死苦なり。何をか繫縛相應と謂ふや、怨家顚倒苦惱憂意なり。云何が捨離といふや。世間の有情は我執盡くること無く、大悲願力も捨つる期有ること無し。諍訟纏蓋の根本は驚畏にして、善い哉生類は耽婪して捨つること無し。煩惱飢渴は苦の極にして免れ難く、世間の眞實は何の時か快樂ならんや。學地遷移すれば安樂何ぞ在らんや、生起積聚すれば毀壞滅亡し、慳貪飢渴の貧病は捨て難く、我慢欺輕は彼の物を殄鑠す。平等の導引は倶に安處に登り、廣大なる福德は親族の和合なり。積聚の了知は本生の所用にして、虛幻の了知は少しも實有ること無し。宗祖族類は相繼ぎて有るも、貧病と安樂とは二事等しきこと無し。吉祥なる勝義は圓淨生起し、無倒の善淨は根本より無畏なり。淨覺の功は熾然に發起し、無始本有なれば何の所にか希求せんや。布施は染を除きて力用縛無く、相貌止息は聞持具足す。無倒の淨住は根本行を修し、寂靜に喧しきこと無きは眞實の運載なり。慈雲普く覆へば我慢有ること無く、繫縛の力用は自性の邊際なり。根本の遷變は彼々如々にして、暗鈍顚倒は我執の纏縛な

卷の第十六

愛樂して無上智力を希求すれば、有情を殊勝なる彼岸に運載し、第六意識は智道を勤修し、誠實の布施は根本行を求むと。是の處は、制度法義を究竟し、聽聞は相を亡じて布施の法を修し、清淨殊勝の智力を蘊集す。淨覺の有情は無礙神足あり、圓滿の聞持は具足せる力用なり。道行の福緣は最上の勝行にして、寂靜の了知は圓滿の施法なり。有情の卒暴は纏縛の境界にして、四種の梵行は希求の發起なり。生類は因緣に繫縛有ること無く、隨順して煩惱を造作するは因行なり。軌範師等は喧寂を指陳し、戒を得法を乘り教授して戒を證す。四種の師範は自在有力にして破壞すべからず。人中の命盡くれば七支戒捨し、又復た殊勝の智解を修作し、廣大なる寂靜の因業を了知せば、纏蓋染行倏然として止息す。楚毒の因緣は寂然として遠離し、我慢の法は清淨に除遣す。菩提薩埵は是の處をもつて引導し、眞實の義利を聽聞施設す。彼の行寂靜を希求して修持し、誠諦なる淨妙の因行を發起し、知見は善淨の制度を了解す。瀑流の煩惱は勢用廣大にして、勝義無倒なれば遠離を了知す。根本淨妙は正解脫義にして、隨順は帝釋諸天の行なり。靜住し染無くんば快樂清淨にして、造作の義を離れ煩惱生ぜず、諍訟の義無く喧動止息し、身心を束縛するを名けて安靜と爲す。有情は實無く四大假合にして、比譬する能はず虛幻にして說き難きも、聚沫・浮泡・陽焰・谷響・刻木・懸絲・鏡像・水月となす。佛言はく、出息は入息を保ち難く、靜住して彼岸の法を崇修し、肅靜にして喧靜無く精純操節、此の如き行由然として說くべし。善男子よ、上妙の布施なる國城妻子身分支節の體は其の性の如く可ならず亦た不可ならずと。又云く、勝義を發生すれば意在ること此の如く緣の法を了知して種々行を修し、智慧は如々の勝法を聽聞す。是の如く我見は染慧の一分なり。染慧に就て唯だ自性の斷を說くのみ、分別して業を發するも亦た自性斷なり。自餘の心所は相應斷に

堅牢の義なり。

菩薩本生鬘論卷第十五

菩薩布施力用周遍尊者護國本生之義第三十一

用は諍訟止息す。施行を了知するは殊勝の因にして、根本淸淨は自性の使然なり。菩提薩埵は苦言して導化したまはく、無因を恐畏するは眞實の果報なり、須からく因力に仗りて報應を知るべし。還同影響は學位の修行にして、身體に縛無くんば人趣の行門なり。五戒三歸は邊際を希求し、最上の因行は現行・順・後・不定・四種現在に報を受け、前生の布施は四種の義利なり。次前に說くが如く彼の縛の邊際なり。云何ぞ能く棄つるは有情の修行なりや。梵靜止息は善淨の因緣にして、唯だ施戒を修するは菩薩の敎誡なり。是の如く天趣有力は怖れ無く、是れ大有情興顯の處、無倒の修習は眞實の行なり。云何ぞ寂靜は塵勞の義を棄つるや。勝義生ぜざるは顚倒の行、人中の王は福力天の如し。語言敎令は四方依り稟け、制度の法は嚴峻遏ること無し。勝義の殊妙圓滿に了知し、善の中害せざるは悲を以て體と爲す。正に瞋害を翻ぜば有情を損惱し、百數の中此は善染に通ず。有支の自性は惟れ阿賴耶なり、此を三界五趣四生の體と爲す。此の識性を離るれば皆總て成ぜず、彼の因の法は　盡く善惡に通ず、無記の法は果を招かざるが故に。菩提薩埵は敎に依りて說く所、四果の羅漢是に誘接す。快樂の法は布施に因りて得、不壞の勝處は彼々を運載す。云何ぞ無實の體性は不堅なるや。布施の隨順は飢渴を拯濟し、意地に施を爲すは自性を了知し本より破壞無し。云何なるをか不生といふや。法體は緣に仗る無因より生ぜず、彼の布施の邊は殊勝の相を求め、廣大眞實は無我を勝と爲す。最上の行施は時に棄捨無く、善淨の色相は持戒より方に得。身欲の遷移は病等の摧壞にして、支分を了知すれば堅牢の性ならず。靜慮の因緣は暫時も住すること有るも、無漏の法資は變易盡くること無し。人趣の行門は攝心是の如し。異相の勢力は身心衰昧し、自性眞實は名色殞盡す。快樂熾盛なれば風の燭を滅するが如く、圓滿なる涅槃の自性を了知す。云何が怨對は臨終に現前するや、心意無因なるに如何ぞ生起するや。天主帝釋は善惡を了知すれば敎乘の義利虛設すべからず。希求して造作すれば根本義を發し、解脫の義を證すれば自性究竟し、世間に隨順するは不

る法體の性は有るに非ず、涅槃眞性の體何ぞ有るに非ずや。祕密甚深湛然として安靜なり。菩提薩埵は此に於て心を存し、混鎔無動にして靜慮澄寂なり。流轉ぜざる法は是に於て教誡す。自他を損滅するは煩惱性の行なり。菩提薩埵は是に於て接引す。最上の法は損減すべからず、上位を希求するは彼岸の義なり。無倒を發生すれば教行を了知し、彼の修進有るは勝妙の相狀なり。荷負は有情の患難を運載し、教法を聽聞するは殊勝の意義なり。塵垢を遠離して清淨行を獲、出離を趣求するは三乘の果報なり。菩薩は彼々の生類を了知すと。是の處は、根本行を修し、智慧を發生し照して無生を解す。塵勞を棄背して勝處を祈求し、煩惱を侵損して漸進し功を施し。道芽增ゝ盛なるも障染屈し難く、眞實は諍訟究竟して生ぜず。淨施の教授は聖共に宣說し、善く知足するが故に貪愛生ぜず。眞實は處所に證誡して善を修し、根本染盡くれば正行崇修す。菩薩の語言は彼の染の遠離なり。處所に顚倒すれば諍訟增ゝ多く、智慧推求して無義を棄捨す。實有の邊際は正法の宣示にして、根本の淨心は隨順施を爲す。淨妙の因は有德依附し、聖人宣說すれば有情共に稟く。廣大の繫縛は梵行止息し、菩薩の導化は愛語の施設なり。生靈を荷負して淨妙の行を修し、施行の邊際は圓滿にして無礙なり。先づ器を成すは天帝の功を用ひ、增上の勝法は轉變の修作なり。是の處は、化現は施に因りて感を招き、生死に流轉するは縛力の起す所なり。菩薩は此に於て緣に隨ひ化導し、清淨心等は熾然の修作なり。眞實の布施は相貌止寂にして、教導して施を爲すは無邊普遍なり。殊勝の行業は四方共に悉くし、彼の施は增上廣大の施設なり。是の處は、自在なる菩薩の所爲なり。我見の根本は教導を信ぜず、移轉運用は自己を出でて能くす。有情の身分は取捨己に由り、生類の纒縛は行を恣にする非法なり。進止屈伸し哀求して懺謝し、因無きも遷變倏忽として有り、意地生ぜざれば荒榛艸芥なり。清淨の因緣は護念に非ざること無く、卒暴の災祥は聖力能く止む。清淨は處所に患難生ぜず、善根を相續するは菩薩の化諭なり。不壞の相貌は報力の功にして、自在の力

ば義利を圓滿にし、世間に無顚倒行を成就す。布施を勤修すれば我慢を行ふこと無く、勝業允就して制度清淨に、貪欲止息せん。世間の飢渴は施無くして得、天趣の中にも亦た貧病有り。此は欲天上に在りては殺害有り、帝釋と修羅と瞋恨するのみ。貪欲・憂惱は欲界中に有り、死支は上地一切皆有り、遷變の時分義利之に准ぜよ。清淨の運載は嚴峻有力にして、本行の布施は倒染の義無し。云何が死支は第八正捨なりや、云何ぞ生支は第八正生なりや。唯だ此の識上に生死を建立するのみ、自餘の識體は支を立つべからず。設ひ別の說有るとも並に隨轉門なり。增上聞持は善因の本にして、眞實吉祥は患を了知する本なり。寂靜を進修するは希有の聞持にして、五蘊の名色は運載眞實なり。是の如く無我の布施は誠諦にして、德行嚴潔ならば百福安靜なり。妙善寂靜を希求すれば生無く、破壞すべからざれば流轉の義無し。荷負增上を趣求すれば畏れ無く、眞實の布施は有力增修す。勝義の施は力を盡くして成辦せんが爲なり。彼の怨對の相は聽聞して捨離し、清淨なる如々は生滅本より寂す。遷變する支分は念々に相續し、自性の法は一も得る所無し。菩薩行門の敎導此の如し。禪那寂靜は無慮無思にして、瞋恚の事無く安靜なること空の如し。瞋恚の患熾然なること火の如しと了知すれば、本來無倒是に於て寂滅す。凡夫の行は布施を先と爲し、無倒の修設は穢の因を離る。淨妙眞實は暗鈍の相を離れ、色相を趣求するは力用の修作なり。煩惱諍訟は止息を勤修し、鈍弱の慢類は繫縛と相應す。精進は彼々の因相を趣求し、有情の勝行は自を利し他を利す。無倒の根本は人天の習ふ所、自性の安住は善行の修持なり。菩提薩埵は意樂に行施し、運載の法は他を利するを務と爲す。平等の力用は渴仰して修崇し、清淨の敎法は根本如々なり。微より著に至るまで行施を本と爲し、勝義寂靜は唯だ聖法に依る。淨妙の修行は殊勝の安住にして、災禍の本は煩惱の生起なり。眼根は色を照して本より自ら縛無く、清淨の力用は寂然として了知す。無始不生は如性に得可く、湛靜の因緣は無法に離る可し。理不可得ならば何ぞ趣求すべけんや。流轉せざ

【二】禪那は梵語デャーナにして靜慮の義にて禪定なり。

獄に化生す。無にして忽ち有り、中有の生は有體の類並に然り、本有・死有・體有・別無く、生有・死有は本識に依りて立つ。生死一念とは聖の言說に依る。法有執持の處は染淨有り、慧解趣求は聞持具足す。我見生ぜざれば煩惱遂に止み、善道を欲求すれば淨法方に生ず。殊勝の因は發生に地有り、本施心無くんば報を獲ること微劣なり。無爲寂靜は勝義の根本にして、菩薩の善友は無畏に導引す。増上の荷負は本來の自性にして、安樂無慢は是の如く進修す。嚴峻なる制度は靜住の依止にして、語言の慢法有ること無し。無諍を求趣すれば平等安靜なり。王は誠諦にして敎令均平なり。有情の貪行は遂に業道を成じ、善業清涼は菩薩の誘導なり。自在の行施は心に拘礙無く、順現・順生・順後・順不定の報なり、是を四種受報の先後と名く。運載する三乘は各〻彼岸に隨ふ、人天の彼岸は暫得にして還り捨つ、三乘究竟の永得に同じからず。勤求趣向すれば日滿ちて方に成る、究竟終畢するを方に彼岸と名く。不可壞の義は不可流の義なり、重復の義無し。是を彼岸と名く。自性の善法は唯心所法にして、相應の善法は王所に通ず。彼此の増上は邊際の因にして、慧解は究竟の言說を了知し、自性は愛樂聽聞して了知す。有情の趣向する主なる者は施と爲す。聽聞修習は快樂安靜にして、樂欲の法は貪愛の本なり。善法の時は精進と倶にして、欲は三性に通じて染と非染と倶なり。聖教の中に說く、德行は多種なるも益物に非ざること無し、聽聞の功は唯だ智慧を生ずるのみ。莊嚴の相貌は殊麗鮮潔にして、一切の自性は遷變するも眞實なり。福德智慧は淨妙愛すべく、修建は處所に淨妙にして雜無し。云何ぞ解脫は煩惱倶に盡くるや。聖道起る時黑暗現ぜず、寂靜の運載は遷移殊勝なり。煩惱垢染能く損壞すること無からんや。是の處は、智起れば暗障皆盡き、無倒清淨の趣求は得難し。諍訟災禍は敎乘にて止息し、病患垢穢は纏縛有ること無し。貪・瞋・癡の毒は顚倒の本にして、眞實の智慧は有情起し難し。寂靜を趣求すれば傾動無きが故に。菩薩の敎誨は處所に廣大なり、崇修する有力は災難生ぜず。平等の安住は云何ぞ無畏なりや。清淨行を修すれ

菩提薩埵は善く言ひて誨諭し、諸天も共に勝義の邊際を稟く。煩惱盡く止まば飢渇永く棄て、増上因有らば了知分別す。義利殊勝なれば聞持を具足し、無倒の修作は善く障染を除く。實の大丈夫は二種の遷變あり、本染も染すること無くんば淨妙發生し、遠離の相貌は邊際行を修す。善淨增上するは善住の修作にして、諍訟止息すれば作業邊際し瀑流遠離す。天趣眞實なれば身相嚴麗にして、清淨の勝因は有力增上す。是の如く惡趣の因有ること無くんば、隨順は是の如く廣大の知見なり。能斷の根本は煩惱障の縛にして、了知に隨順するは彼々の力用なり。身相の力用は遷變の希求にして、世間に隨順するは災患の根本なり。布施の義利は報應を祈ること無く、眞實は怨對其の止息を求む。天趣に造る因は施行を先と爲し、智慧了知するは是れ大有情なり。我慢增盛すれば梵行止息し、善淨の修作は了知無相なり。種々の心行は希求を願はず、寂靜の修崇は無諍止息なり。我見の自性は染慧に依りて說き、有情の行施は其の相亡びず。瀑流を發生すれば自性纒縛し、根本の災禍は邊際此の若し。纒蓋顚倒は善い哉眞實にして、清淨は處所に時分無邊なり。施行は眞實にして安靜に止息し、是の如く無諍の義利相應すと。是の處は、菩薩は平等なれば自在に物を濟ひ普く均し、自性を了知すれば平等に敎示し、始終一の如く亦た愛憎無し。供養施設し殊勝を上と爲し、生類を救濟して暫時も替ること無し。我見は時分彼此俱に亡じ、憍恣を了知すれば肅然として盡く止む。聖の說に非ざること無し。清淨の趣求は相狀有ること無く、有情損滅すれば唯だ惡趣に生ず、前身滅謝すれば後身復た起り、上古佛と同時にして得たり。菩提薩埵の敎誡する言說は眞實の義利を造作すること此の如し。惡を息むを上と爲し、根本の染法は我見を始と爲す。情に順ひて貪を生じ情に違ひて瞋を起し中容は癡を起す。後より生ずる餘惑二十六法あり、斯に因りて染障有り顚倒を造作して推求す。不眞實の煩惱染法無く、實は種有り假は立を用ふ。是の處は、根本の布施は有力なり、敎導を發生す云何が化生するや。善業殊勝なれば諸天に化生し、不善業勝るれば地

愚癡を淨むれば、究竟の智慧にして眞實無縛なり。廣大なる行施は希求有ること無く、進趣圓滿にして屈伸自在なり。聞持の因行は相貌無倒にして、繫縛垢染の體性は空の如く、運載修崇して自性に安住す。有情の因行は布施を本と爲す。論難往復は練慧の功にして、行蘊は遷流無常の義なり。煩惱の重障は顚倒なること眞實にして、彼彼の災禍熾然として息まず。流轉の因は澄心を行へば自ら止み、制度の力用は聞持すれば圓滿なり。彼此相應すれば殊勝の義利となり、暗鈍障染も語言によりて分別す。纒蓋の行相は聖道をもつて除く可く、勝相に隨順すれば清淨を本と爲す。遷變の影像は無實を了知し、道行の希求は聽聞に畏無し。淨妙の因は圓滿なれば獲可く、力用の邊際は山の如く動くこと無し。供養して和合を希求すれば有力にして、敎誨の誠諦は施行を本と爲す。災禍垢穢は顚倒生起し、淨妙の因行は流轉息除す。德業の自性は移轉して動くこと無く、染垢隨順すれば進趣生ぜず。敎導の因緣は無倒を發起し、離過の語言は無物にして得可し。如如の性は空有倶に泯じ、自在の力用は荷負發生す。進退は復た三有を生ずること是の如く、暗鈍の邊際は淨妙生ぜずと。是の處は、無倒なれば本智倶に起り、煩惱瀑流究竟して隨斷す。不壞の神足廣大に增修し、施行無畏なれば勝因常寂なり。顚倒有ること無く自在圓滿にして、師長を尊重し義利安靜なり。處所廣大なること別別此の如く、淨妙無壞にして無諍訟を求むと。是の處は、貪欲は種々の法を見る、根本纒蓋は止息有るに非ず。慧解遷變すれば染縛皆盡き、善妙の相狀は眞實の修施なり。義利無倒なれば安靜なること山の如く、本を求むる力用は梵行の修作なり。暗鈍の法無くして根本行を求むれば、根本の智と用と善く淨く冥合し、智は眞如の理に合して神に契ひて會す。有情の布施は發生を義と爲し、語言を了知すれば自性を精求す。身分殊勝なれば名色清淨にして、是れ大丈夫の作業止息す。平等の慧解は廣大なる修作にして、和合の邊方は力用圓滿なり。福德自在なれば纒蓋止息し、染障を遠離すれば慢法生ぜず。希求の力用は智解了知し、善く神足を修して遷移止息す。

菩薩は施行眞實なれば癡暗情類餘知る所無く、時分邊際は眞實の力用なり。云何ぞ法性の勝義は寂靜なりやと、布施は隨順希樂の法なればなり。云何ぞ進修は清淨の力用なりやと、暗慢の障無く顚倒の法無く、供養精進して十善增百す。王族は熾盛なれば善事崇多にして、心法は眞實なれば慧解清淨なり。災患の根本は菩薩誨示し、彼此の行因は遷變自在なり。智慧教法は清淨の調伏にして、祕密の自性は有情より發生す。清淨和合は心淨解脫なりと。菩薩の是の處は生類を誘接するにあり。聽聞の自性は遠離を獲得し、增上慢の法は寂靜を了知す。梵行無諍は畏懼施と爲し、增上する暗慢を調伏するは寂靜なり。有情の善語は行施を增上し、勝行の因業は愛樂の力用なり。調伏の作業は勝義の因行にして、多聞の有情は義利を增上す。梵行無諍は供養を興顯すと。是の處は、自性無倒なれば眞實にして、淨妙の根本は智有りて施を修するなり。顚倒垢染は止息に隨順し、寂靜無畏は教導を增上す。善い哉牛乳は諸味中の上にして、廣大なる智慧は時分の邊際なり。善い哉邊方の相貌は殊勝にして、寂靜の趣求は無邊の供養なり。淨妙の語言は殊勝の止息にして、怖懼發生し懺悔安靜なり。根本の調伏は自然の清淨にして、根本の自性は求むるも得べからず。平等の義利は寂靜眞實にして、自性の邊際は進修止息す。清淨の趣求は殊勝安靜にして、患難の因は顚倒永く息み、果報を希求すれば損滅して皆止む。菩薩の教導は患難生ぜず、諍訟染惡の造作止寂す。荷負の希求は增上遠離にして、貪病垢染一切生ぜず。暗鈍の作業は彼彼畏無く、有情聽聞すれば殊勝なる有力なり。清淨なる施の邊は眞實に隨順し、遷變有ること無く廣大清淨なり。根本不生は眞如自性にして、淨妙の行施は自在無倒なり。因行の殊勝は處所壞ること無く、清淨の布施は無倒の修因なり。煩惱息除すれば寂然として安靜に、善淨相應すれば聞持具足す。根本の勝義は倒を離れ誠實にして、善友の因緣は崇修替ること無し。力用廣大なれば障染生ぜず、淨妙殊勝なれば寂靜の根本なり。生靈を荷負するは眞實の力用にして、慧解の功能は最上の殊勝なり。善く貪欲・瞋恚・

し、顚倒諍訟は處所を愛樂す。渴乏の邊際は自性を損減し、隨順寂靜は調伏清淨なり。顚倒愛樂飢渴邊際すれば、有情記念して靜住發生すと、菩提薩埵の善言是の如し。無顚倒の法は諍訟の事を止め、清淨の調伏は安住すること自在なり。念は能く明記して自性を聞持し、制度寂靜なるは淨妙の本なり。有情教誨を聽受すれば安靜にして、布施の勝因は有情の憶念なり。我見の根本は雜染を發起し、勝力を成就すれば施行寂靜ならん。上妙の因行は平等發生し、圓滿具足は修行の時分なり。言說無怖なれば雜染損減し勝義無倒にして諍訟を生ぜず。時分瀑流の發生を邊際すれば、此因は祕密の性なれば諍染を離る。清淨無雜なれば災患盡く止み、無倒の行を修すれば寂靜如如ならん。喧煩の力用は相狀憍恣にして、流轉の因性は清淨無倒なり。有情了知すれば遠離を增上し、教誨の語言は薩埵の行施にして、修崇を增上するは清淨の希求なりと。云何ぞ無我は義利を發生するや。行施の根本は語言の教授にして、增上の邊際は寂靜を發起す。安樂の處は災禍遠離し、吉祥の智慧は自性の希求なり。云何ぞ染盡くれば嚴峻清淨なりや。顚倒無邊なりとは菩薩の誨諭なり。云何ぞ大施の廣福是の如くなりや。聚落寂靜なれば勝用を造作し、佛果を趣求すれば生類を導引す。彼の怖畏行の邊際は空の如く、了知して運載するは增上の快樂なり。愛樂の色相は調順を發生し、眞實の行施は已に諍訟を除く、彼は如性有るも遷移の義無し。繫縛の本は怖懼の邊際なれば名色五蘊聚むべく、受想行識は質無く了り難し。木縛が因を爲すは眞實生ずる義なり。處所に施行するは寂靜の調伏にして、慢法は自在に淨住して止息す。根本の施設は聞持具足し、三箭を遠離すれば垢染皆息まん。云何して造作の根本は邊際なりや。彼の言說の體は究竟すれば是の如し。眞實の飢渴は悲願普く濟ひ、意地有力なるは進修の本なり。災禍垢染あらば勝因方に盡き、諍訟瀑流は暗鈍を發起す。有情の運載成就することと是の如し。眞實の生相は果報の狀貌にして、靜住は處所に勝因增上するなり。云何ぞ時分は根本の自性なりや。處所に驚畏險隘すること山の如しと。是の處は、

住の根本は殊勝の邊際にして、力用の根本は祕藏の自性なりと。是の處は、我見に因る無き希求にして、彼此の邊際は繫縛を本と爲す。云何してか顚倒・諍訟を生起するや。云何してか支分平等にして寂靜なりや。聲相詮表の功を壞らざればなり。是の如き因相は寂靜の本なり。障染の根本は智起れば方に斷ぜん。業を造る根本は十種の惡行なり。菩薩は廣大なる顚倒を調伏し、有情は災禍是の如く發生す。造作の時分は勝因を邊際し、清淨なる如如は積聚の義無し。瀑流を增上すれば色相纒縛し、自在なる有情は貪にして情性を恣にし、眞實不虛の相貌增上す。國王勢力あれば復た諍訟無く、三性は因行の力用修すべく、貪欲趣求は學地に隨順す。時分は此の如く倒染を發生し、瀑流增上すれば義利止息す。荷負の力用は布施を發生し、平等の力用は止息に進趣す。丈夫は無畏の相貌を上と爲し、染惡增上すれば究竟して無盡なり。彼の相の邊際は勝義を發生し、運載廣大なれば施因發生す。自性の垢染邊際して盡く止まん。顚倒の相貌は盡くして不可得なるも、相貌圓滿なれば垢染遠離せん。彼此の災難橫に生じて久遠なるも、善見安靜ならば義利誠諦ならん。平等の力能は菩薩の調伏にして、勝義を發生し慢等生ぜざるなり。正理如如は災患止息すとは、是の處は、菩薩は善言をもて敎導し、清淨なる運載は祕密を增上し、梵行息靜なれば眞實無畏ならん。根本の力用は患難皆盡き、布施し運載すれば正念に隨順す。根本の眞實は暗慢止息し、善言の敎誨は淨妙寂默なり。平等の淨因は聽聞殊勝なりと。云何なる造作か處所に清淨の雲を布き生類を覆蔭するや。垢穢障染諍訟顚倒なれば學位止息し、自性の根本顚倒を調伏すれば寂靜を趣求せん。是の如き遷變は有情の相狀なれば、憂苦災禍熱惱遠離すれば相貌端正にして聽聞無諍ならんと。是の處は、布施し誠諦を聞持すれば有情を荷負する菩薩增上し、敎導の語言は災難を縛すること無し。是の如く煩惱は空の麁重に迷ひ、增上の因行は功德自在なりと。是の處は、有情一合具足すれば暗慢の增長も遷變して空の如く、無倒發生して義利を聞持す。無怖是の如くなれば因行を增上

なり。無倒の行施は有情の力用なれば、一根本に合せば善いかな童子、具足淨妙にして平等不變なり。淨き施は倒無く童子の因深く、有情の自性は施を修すること增上す。顚倒の恐懼は調伏すること性の如く、勝義の增上は寂靜の修作にして、染惡楚毒と暗鈍を止息す。是の如く布施は平等の給與にして、人趣の生類は自性の遷變なり。有情甚だ衆ければ荷負已むこと無しと。是の處は、究竟の寂靜なれば動ずること無く、卒暴も崇修して勝乘を上と爲す。自在の行施は四蘊知り難く、力用增上すれば淸淨を發生す。時分を壞らずして崇めば果利を修し、國王は最勝にして寂靜眞實なり。智慧發生すれば聞持運載し、誠諦の因行は希求を調伏す。王者は上妙福德殊勝にして、煩惱の邊際は天人咸棄つ。有情の聽聞する天趣は是の如く、淸淨の自性は菩薩の安慰なり。過去にて是の如き寂靜の施維は、煩惱の地に悲愍を發起するなり。增上の調伏は縛因を傾け壞り、慧解淸淨にして慢等止息す。遷變する影像は狀を想ふて驚畏し、愛樂する淨施の增上は是の如し。正理本より寂なれば顚倒行無く、彼の類を運載して語言を發生す。運載は纏縛垢穢を遷移し、施行を修すること無くば我慢の因を作す。自性の法因は驚懼の相狀なり、云何ぞ染障は寂靜の行無きや。造作は我見の力用なれば喧諍なり。是の如く祕密寂靜有ること無し。是の處は、有情淸淨行を修し、無倒恭奉なれば殊勝の因業なり。有情隨順なれば淸淨の邊際にして、自在に修作すれば無倒を發生す。語言憍恣なれば諂詐の行を增し、自性を趣求すれば流轉行を遠ざく。謂はゆる淸淨なる造作の因行は、縛染の自性怖懼すること是の如し。眞實に遠離すれば語言增上して、楚毒暗鈍顚倒息除せん。增上の相貌は我染を遠離し、聖道の長養は障染の義を除くなり。淨妙なる眞實は遠劫に成ぜし所なれば、發生する邊際は誠實の諍訟なり。具足して關持する有情は自在にして、纏蓋調伏の制度止むべし。圓滿なる邊際は廣大無倒にして、彼の處を希求すれば勝義を發生し、相貌寂靜にして止息を執持す。力用を損壞して作業生ぜず、暗鈍の染邊は縛體仍ち在り。正理は解脫の義を發生し、靜

り。進んで密に法物を取らば命盡を成し、發趣顚倒は縛因驚懼す。増上の止息は安樂殊勝にして、意地清淨なれば倒染生ぜず。煩惱纒縛善く調伏を修し、力能く運載し増上して施を行ふ。我見の因緣は聖道除くべく、義利を崇修し淨妙無垢なり。眞實の邊際は布施の崇修にして、意勝因を發すは荷負の根本なり。遷變の調伏は聞持無倒にして、心法殊勝なれば愛戀止むこと無し。災禍を作業すれば障難多種にして、纖毫障染微細斷じ難し。非想第九と聖と相ひ隣し、究竟すれば處所に聖因方に斷ず。遷移する相貌は勢力皆盡き、彼の名色の相は運用増修す。自在處の邊は驚畏已まず、喧靜廣大なれば梵行止息す。煩惱の作業は變動を發起し、瀑流の染惡は顚倒齊しく生ず。眞實の纒縛は希求止息し、大有情の類は隨順して進修す。福德の誠諦は勝義を發生し、災禍を作業するは我見を因と爲す。意地は多種の慢行を増長し、是の如き時分梵行除息す。聽聞して施を行へば清淨の果利あり、眞實の勝因は自在に發生す。勝義の自性は纒蓋遮閉し、誠實を了知すれば勝義の因の處あり。放逸を了知すれば廣大の邊際にして、楚毒を了知すれば損害の相貌なり。寂靜を發生すれば智慧の邊際にして、清淨の布施は雜染の遠離なり、過去の遷變は聚落の所在なりと。是の處は、眞實は苦毒の捨離なり。四蘊の名名は染淨皆攝し、増上の希求の力用は施の爲なり。天趣の有情は淨妙にして施を修し、究竟して眞實ならば染障を遠離す。垢穢を造作すれば諍訟増盛し、圓滿の進修は施行清淨なり。慧解の増上は力用に隨順し、布施に精進するは荷負の力能なり。運載して損減するは究竟の功德なり。是の如く邊際の止は此に在り。纒蓋を恐畏すれば進修して調伏し、誠諦の祕密は印相圓滿なり。無邊なれば處所に不壞の施と爲す。善相の力能は怖畏の遠離にして、天報の獲得は長遠の時分なり。力用の邊際は清淨の自性なりと。是の處は、増上せば瀑流損壞し、隨順して調伏せば究竟して施を行ふ。云何ぞ淨妙の天趣を希求するや。纒縛あるも布施せば處所に増上し、垢染已まざるも眞實に運載す。自性無倒なれば聞持を増上し、清淨安靜なれば處所に寂靜

巻の第十五

〔菩薩布施力用周遍尊者護國本生之義第三十一〕

施の義を發生するは菩提の勝因にして、淸淨の覺慧は默靜能く離る。本修の制度は忍行にして寂靜なり。梵行は三災を調伏して運載し、十善能く離る。吉祥の勝定は趣向發生し、時分を了知すれば聚落平等にして、殊勝の所在は聽聞の了知なり。謂はゆる菩薩の眞實を聽聞するは根本の相貌にして福德を邊際す。勝義の力用は本より自ら無生にして、道德の圓滿は淸淨の誨示なり。我見をもつて業を造らば貪愛隨つて生じ、智慧吉祥にして平等の普濟なり。垢穢生ぜずば解脫淸淨にして、彼の實道の行は恐怖止息す。染淨を根本とすれば愛戀捨て難く、身語意の十業道隨つて生ぜん。寂靜を增上すれば顚倒染を盡くし、月滿ち淸涼に鑑照すること是の如し。我慢邊際すれば作用するに時無く、善く靜に止息すれば聞持具足す。勝義の眼根發生すれば用を見、世間の相狀と體性とは堅からず。慢等の根の因は一切無實にして、勝義を發生して能く飢荒を盡くし。病惱の因緣は相狀驚畏乃至希奇變動有ること無く、〔一〕尸羅淸淨なれば聽聞眞實なり。慢類の因緣は生起に隨順し、染因流轉し災難を發生す。根本を造作すれば勝乘をもつて能く離れ、趣求聞持すれば布施を增上す。垢染の勢力は顚倒繫縛なるも、淸淨は得難く處所に安靜なること、月滿ち空に當つて幽も燭せざること無し。自在に止息すれば塵垢遠離し、世間は虛幻なり究竟して堅からず。善賢の法は有情の調伏にして、生起の處誠實安靜なり。纒蓋の本は運動遷移し、自性を愛樂するは無諍を上と爲す。不壞の染性は崇敬恭肅にして、增上の荷負は殊勝を發生す。是の處は、云何が我我增上し自性の纒蓋心法と相應するや。眞實の力用は相貌皆息み、意地無智なれば勝因生ぜず。顚倒の垢染は災熱熾盛にして、雜染の自性は諍訟の本なり。欲貪の相狀は患難成就し、移轉取捨すれば種性不定な

【一】尸羅は戒なり。

なり。身相は欲貪の造修なれば眞實にして、瀑流を增上すれば力用遷變す。施設して運載すれば懺謝前愆す。是の如く教誨は運載の功無く、求めて施行を修し興して供具を修す。聞持具足すれば祕藏眞實にして、瀑流の驚異變動是の如し。是の處は、希求は有情の邊際にして、垢穢眞實なる邊は方に諍訟なり。遷變を恐懼すれば速に施行を修し、隨順愛樂して眞實に修作せよ。顚倒の垢染も驚懼すれば終に盡き、有情移轉するも六道を越ゆること無し。繫縛の遷流は施設の相貌にして、十善の因を修すれば人天の報を感ず。彼の時分の邊は運載止息し、彼の天の勝義は因相を壞ること無し。憂苦の自性は煩惱發生し、我見は本縛にして纒蓋多種なり。是の如く了知すれば清淨の調伏にして、如來は圓滿無等の力用なり。聽聞して修作するは賢善の功德にして、布施は圓滿勝義の邊際なり。是の如く賢善は自性を了知し、制度の趣求殊勝なること此の如し。顚倒を恐畏するは善淨の調伏にして、寂靜にして施を修する發趣是の如し。如來の祕藏は無等を義と爲し、圓滿なる無倒は影像を離るゝ義なり。瀑流を遷移するは聖言量に憑り、分別し運載するは平等の發生なり。無畏を進修するは作業の增上にして、暗鈍具足するは顚倒の增修なり。彼の清淨の處は誠實行を修し、自在に進修するは十種の勝利なり。是の如きは增上淨妙の神足にして、不壞の慧香清淨を獲得せん。

菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第三十

菩薩本生鬘論卷第十四

顚倒を損減すれば勝義を成就し、不壞は空の如く遷變止息す。是の如く調伏すれば染慧邊際し、彼の天の變易は淨妙の本なり。善靜の祕密は慢等の相無く、眞實の增上は聽聞無壞なり。常に施行を行へば無倒の邊際なり。清淨增上すれば毒藥喧諍倒染邊際し、所處驚畏すること刃の蜜を舐むるが如し。遷變の根本は諍訟の增上にして、國界の損ずる所は妙善安住なり。具足して鬪持すれば一に相貌に合し、清淨なる止寂は色相增上す。勝義無倒なれば時分に遠離し、過去せし災禍の相貌を了知す。飢荒に逼らるゝは飮食全く虧くればなり、有情の善因は淨妙增上す。施を行ひ喧しきこと無きは寂靜の施設にして、上妙有力は遷變殊勝なり。病患は誠實息みて復た增し、顚倒なれば怖畏憂苦轉た多し。患難無き時は發歇替ること無く、瀑流の煩惱起滅して復た生ぜん。布施の力用は心を傾け惱むこと無し。云何が學地に制約教誡せんや。力用の荷負は恐畏息除し、染倒の根本は煩惱復た增さん。色相を愛慕すれば貪婪已むこと無く、德行崇修の勝因は貴むべし。自性を壞らずして三箭を遠離し、布施は十到彼岸を發生す。清淨の教誨は賢なるかな義利や、纒蓋は流るゝが如く相貌空に等し。我見增上するは煩惱を本と爲し、彼の造業は善妙を行じて施を修す。清淨の有力は因行を增上し、根本の寂靜は勝義を發生す。飢渴は眞實に施行を修する無ければなり。尊貴增上は戒を持てば方に得、果報の殊勝は物を愍みて能く成ず。有情は時分に供養修崇し、眞實の造作は進修の祕行なり。是の處は、邊際の淨妙は有力にして、瀑流は是の如く隨順止息す。纒蓋諍訟は聽聞すれば除遣し、我慢增上すれば欺輕慠逸なり。諍訟災禍は調伏すれば止息し、意地發生すれば寂靜增上す。治を修して施を行へば種種に相を亡じ、煩惱を除滅する眞實の力用なり。有情の名色は別報の功德にして、倒染の我法は寂滅遠離す。能く貪欲を壞れば倒染皆盡き、身體の邊際は清淨の力用なり。彼の我見を求めば暗慢悉く除き、平等を愛樂して究竟して隨順す。聚落豐盈すれば殊勝清淨にして、無怖を增上すれば運載發生す。寂靜の因を施せば流轉の相を止め、緣生無き處殊勝の義利

趣暫く止み、寂靜の邊際は自性畏れ無し。誠實を聽聞すれば塵垢遠離し、力用を增上すれば時分を運載す。過去の種種なる染淨の布施は、修行純無く果を受くること間雜なり。善趣の果報は寂靜の修持にして、圓滿眞實は自在有力なり。無倒にして善を修すれば屈伸益有り、如如を壞らざれば止寂として無修なり。顚倒の希求は災禍の本にして、纏蓋は畏るべく沒溺して出で難し。慳貪熾盛なれば怨親已むこと無く、解脫の相狀は蓮の散壞するが如し。殊勝を增上すれば清淨有力にして、行蘊の增上は遷流を義と爲す。戒香芬馥として善妙愛すべく、處所に修崇すれば嚴潔を增上す。希求を動轉するは淸淨の敎誨にして、彼我の繫縛は顚倒の修行なり。和合して寂靜に自在なれば皆息み、飲食遷變するも心淨く修設すれば、力用止息し善因調伏す。善淸淨法は自性の根本にして、時分に養育すれば果報殊勝なり。具足して鬪持すれば勝義畏れ無く、國界寂靜なれば邊方止息せん。布施の自性は慳貪已に離れ、淨妙にして無怖を獲べきこと是の如し。十善行中布施を本と爲す、九到彼岸次第して發生すればなり。是の處は、丈夫が諍訟恐怖惡行を息めんことを求むれば眞實を發起し、時分の義邊一に所在に合せん。造作の相貌寂靜なること是の如し。我見は廣大なる煩惱の本にして、身體の自性は究竟して堅からず。無上の邊際の覺位は方に得、法性止寂として不可得を了る。荷負違はざれば接して生類を誘ひ、殊勝なる眞實は上妙の敎誨なり。彼の處は、自在淸淨の邊際にして、圓滿無畏の色相は鮮淨なり。上妙吉祥は遠離の作業にして、趣向の力用は法性空の如し。離怖畏の相は十種の業道なりと。是の處は、云何ぞ自在無怖なりや。根本の福業は無倒眞實にして、聖言量の說は靜住法の如く喧煩を離るゝ義なり。垢染諍訟は色に依るを本と爲す。寂靜の法は塵勞を捨離する義なり。敎誨の無倒は善淨を因と爲し、垢穢無きの行は顚倒染を盡すなり。淸淨の布施は濟益是の如く、運載平等にして一合の相を離る。眞實の造作は希求して施を行ひ、自在の力用は制度調伏なり。彼の時分は天趣の長遠なるが如く、淸淨なる相狀は澄瑩なること月の如し。

無邊なり。愛欲に隨順すれば善に契ふこと無く、善哉方所多種の相貌なり。淨妙なる修緝は是を念ずること無く、常に荷負を思ひ苦を濟ひ息むこと無し。屈伸相資けて唯此を懷ふのみ。是の處は、廣大なる發起は悲み導き、心を興すこと自在にして寂靜眞實なり。煩惱の施は梵行の爲に止むべく、作業の邊際は刹帝利の本なり。彼の修は是の如く無倒有力にして、十善の功能は群生仰ぎ重ず。供具の施設は微妙にして得難く、纏縛垢穢諍訟止息せん。誠實は愛すべく法性を本と爲し、蓮の水を出でて鮮潔微妙なるが如く、澹靜澄瑩にして纖塵無きのみ。布施の希求は嚴麗此の如く、彼れ彼れの縛法は顚倒の災禍なり。障染我見は功用制し難く、善淨有力は眞實の勝因なり。名色止寂なれば塵垢方に盡き、我慢も眞實なれば倒染の義無し。染慧纒縛は眞實の遷變なり。相狀の顚倒は染因已まず、繋纒に自在なれば諍訟を增長す。造業を邊際すれば教誨息除し、彼は業の果報先後を去來す。聖道起る時惡業便ち斷じ、聞持を具足すれば有情平等なり。彼れ彼れ處所に清淨殊勝にして、根本の聖道は染障止息せん。淨因を發起すれば眞實を了知し、塵垢諍訟は進修して已に除きぬれば、障染を解脫して無怖を增上するなり。顚倒增上すれば隨つて諍訟を生じ、正理の教授は勝義を發生す。云何ぞ淨施の海は衆の應器なりといふや。勝義の根相は歡樂自在にして、我慢生ぜず梵行清淨なり。解脫して增ゝ修すれば障染能く離れ、有情の福報は淨施を因と爲す。諸天の淨妙は因の勝るゝを了知し、眞實を邊際すれば祕藏常寂なり。世間の法は散壞の義有るも、是の如く梵行は自性澄靜なり。我見廣大なれば計執邊無く、熱惱して諍訟すれば障染屈し難し。身體苦受すれば想念已むこと無く、雜染を執持すれば師恩を知らず。殊勝生起すれば誠實無倒にして、雲の普く覆ふが如く熱惱生ぜず。是の如く調伏進修して遠離すれば、勝乘眞實にして染倒止息せん。殊勝の義利は支分有力にして、勝行を進修すれば垢染を去除す。清淨にして無欲なれば善妙にして止息し、調伏の意地は布施を發生す。和合し止息すれば顚倒已に亡じ、勝義誠諦なれば自性了知す。垢染纒蓋なれば天

靜なり。我慢增上すれば勝義止息し、和合の修行は安住にして無動なり。勝因を趣求すれば自在に修作し、善妙なれば方所に能く捨離すること無く、布施の邊際は諍訟無き處なり。是の處は、彼は實に無倒の崇修にして、大丈夫の相は生靈を悲導す。明白に思惟に安住すれば荷負極めて整濟し難く、是の如き災難は處所に增上す。圓滿無動なれば力用增上し、愛樂遷移すれば安住を希ふこと無く、淨行修すること無けれども垢染替へ安し。云何なる病患災禍も誠實なれば、寂靜祕密の力用にして止むべし。云何にして顚倒暗鈍の因深きや。增盛なる縈縛は纒蓋何ぞ止まん。煩惱の本は傾動に由ること無く、慢類癡迷增上すれば止み難し。纒縛は解り難く須からく聖力に憑るべし。染縛の相貌は制遏するも已むこと無ければ、靜住し修崇して教導勉むべし。垢穢を造作する力用は捨て難く、障重ければ功深きも極めて懺謝し難し。此の如き苦楚は穢業成就し、無倒にして修持すれば靜住止寂なり。飢渇を棄背すれば勝義圓滿にして、荷負すること遠劫なれば生類を調伏し、力用の無邊なる聖道は是の如し。種子現行すれば有地に發生し、清淨の教法は趣求すれば獲得せん。圓滿なる勝義は靜住して縛無く、根本の力用は寂靜の調伏なり。瀑流に隨順すれば遷變も眞實にして、病難の支分も了知すれば實無し。衆生に布施すれば安靜を獲得し、遺形の支分も了知すれば淨き意なり。無顚倒に處すれば義利果ずべく、善法相應すれば自在に安住す。我見增上すれば苦惱和合し、能く貪欲を壞れば作業清淨なり。時分に聽聞すれば正理發生し、恐怖無因にして想念勉むべし。根本の荷負は清淨有力にして、有情の煩惱は何の法を修してか離れんや。彼の處は、自性の福德は甚大なり。是の如く邊際は勝義の本にして、群生を悲愍し此を以て則と爲す。不壞の勝義は有情依る可く、意地の眞實は相貌の本なり。處所の有邊は平等の調伏にして、損壞は方所に能く止息すること無し。房今不安なれば心由ること在る有り、自在發生すれば定慧依るべし。影像は遷變するも法性は無動にして、世間は平等に凡聖此に依る。邊際を崇修すれば法の得べき無く、刹塵の量功德

礙なり。清淨なる因行は本來縛無く、解脫は根本の力用にして清淨なり。梵行廣大なれば飢渴止息し、知見をもつて調伏すれば精嚴替ること無し。淨施を希求すれば聞持有力にして、意地積集すれば無倒眞實なり。圓滿に聽聞すれば因力廣大にして、有情を運載し障染遠離す。楚毒も施すこと無くんば圓滿勝義にして、寂靜の聽聞は縛因の捨離なり。清淨の運載は一に祕密に合すと。是の處は、菩薩の增上趣求清淨の衆は自在に聞持を具足して慢無し。是の如く遷變繫縛有ること無くんば、增上趣求は根本殊勝にして、諍訟止息し清淨の敎誨なり。悲み導き運用する勝義の修作は、云何に獲得し、云何に趣求するや。清淨の布施は止息に隨順し、我法有ること無く圓滿寂靜なり。憂苦の煩惱は善淨をもつて能く離る。云何が損減は淨法の因無きや。是の處は、丈夫の眞實に趣向するは、名相に隨順し諍訟を調伏するなり。貪欲に因ること無くんば普く布施を行ずるなり。云何が遷變は化生を上と爲すや。淨妙鮮潔なる彼は施戒に因る。增上の獲得は最上にして怖無く、安靜なる止息は勝義寂靜なり。災禍の衆無くんば楚毒の衆無く、本來自性清淨の祕密なり。學地の調伏は寂靜邊際にして、善因の自性は根本止息なり。正理の施は知見有力と爲し、顚倒・希求は本來自性にして、煩惱の因は我見の纒縛なり。是の處は情類の發起は語言なり。是の處は、云何に生靈は捨離するや。其數は千の怖畏有りて已むこと無し。清淨の誨示は慧解發生し、繫縛の因は苦惱壞るゝこと無し。布施の普く周きこと空の如く平等なり。是の如く進修すれば殊勝獲べく、煩惱の調伏は諍訟已むこと無し。根本の智行は無邊を發起し、生靈の戀慕依附すること是の如し。遷變の影像は是れ大有情にして、生靈を悲戀し憂苦も捨つるなし。平等なる隨順は有情を調伏し、紊亂生ぜず敎誨是の如し。暗慢遠離すれば寂靜の語言にして、制度愛すべく器に應ずる施設なり。有情善哉を廢すること無くんば畏れ無く、調伏運載すれば審諦殊勝なり。眞實を聽聞すれば天帝化を垂れ、無諍を本と爲す。自在の勢力は屈伸の所用なり。瀑流の染法は熱惱の邊際にして、染因を破壞すれば力用安

〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第三十〕

圓滿なる施因の報は飢渴を除き、增上の自性は相貌鮮潔なり。謂はゆる隨順聽聞は菩薩の行にして、時分有力ならば福德を長養する根本の相狀なり。作業の邊際は彼れ彼れ是の如し。增上の力用は進止屈伸眞實の權設にして利益に非ざること無く、三根本善は出生の所依より。布施の勝因は身相を莊嚴し、意地の中は眞實なること是の如し。淨妙の聞持は甚深の誠諦にして、身相の廣大は嚴峻なる依止なり。淨妙の處は鮮潔にして皆盡し、四蘊明顯の色相舒べ暉く。平等無畏は進止を了知し、本識の自證は勝因の蘊聚なり。彼れ彼れの色相身體は是の如く、荷負して邊際を增上するは有力なりと。是の處は、布施は心淨を本と爲す。此の大菩薩は是に於て愛樂し、聲相を了知すれば聽聞有力なり。彼は實に淨心なれば能く貪欲を壞り、清淨にして勝れたる力は勝行を進修す。方所に無動ならば遷變已むこと無し。云何が調伏して禪那寂靜なりとは。是の如く聖道の功用廣大なれば、增上了知して是の如く寂靜なり。圓滿の邊際は煩惱遠離し、有情の邊際は六道を越ゆること無し。寂默を成就するは唯智慧に憑るのみ。是の如く遷變は善因止息し、解脫は無諍にして障染遠離す。云何が聲相は聽聞の義利にして、智慧は無量の聖力の推求なりや。摩訶薩は是れ大有情にして、悲み導き運載して平等に聞持す。寂靜和合なれば鈍染止息し、眞實の教誨は暗慢悉く除く。楚毒を調伏すれば勝義無倒にして、悲愍發生すれば善妙の聲相なり。意地の希欲は大有情の義にして、彼れ彼れの發趣は荷負の邊際なり。不壞の勝因の根本は祕藏にして、愚癡の根本は有情の顚倒なり。聚落は方所にあれば地遠くして赴き難きも、十善の有情は七衆奔附せん。生靈の止息は增上を義と爲し、聽聞を圓滿にするは施行の邊際なり。名稱廣大なれば荷負乏しきこと無く、殊勝の義利は有情の調伏なり。施を行ふこと鮮潔なれば塵垢も染むること無く、勝因有力なれば空の如く無

最上の修行す。正解脱の義は清淨の本、塵勞を了知すれば本來寂靜なり。有情は十善の淨妙增上すれば、垢蓋・纒蓋湛然として安靜なり。諸天は心地清淨を本と爲し、色相の光潔は道行の進修なり。聞持增上すれば障染を止息し、界性は世間安樂にして無壞なり。調伏は處所の相狀を本と爲し、眞實の力用は顚倒の因無し。十善の教誨は殊勝清淨にして、福德自在なれば相貌無盡なり。有情の智慧は意解を增修し、調伏の義利は淨妙の勝因なり。第六意識は湛然を上と爲し、自性の眞實は慢等の法無きなり。是の如く德行を進修するを上と爲し、卒暴の染無くば煩惱行を止む。前道に進趣するは安靜なる福業にして、運載の本は煩惱の離念なり。清淨澄寂なれば顚倒生ぜず、義利を聽聞するは有情の施設なり。顚倒の因行は染惡纒縛にして、清淨の教誨は塵勞の遠離たり。眞實を壞らざれば善意に施を行ひ、愚暗を了知すれば安靜に修設す。語言を壞らざれば教行誠諦にして、清淨の根本は舌相損ずること無く、正理を希求すれば勝義澄寂なり。云何に運載して善妙に施を行ふや。隨順修行せば最上清淨にして、調伏の邊際は無我の義利なり。王者は制度肅然として止息し、是の如き我見は廣大無邊なり。誠實なるも無智は煩惱の本にして、己に順つて貪を生じ情に違ふて瞋發る。二十六惑の因は我見生じ、若し根本末障を斷ぜば隨つて除かんと。是の處は、王者は勝れたる義利を發すれば、器界の邊方彼此安靜なり。十種の業道は纒蓋有らず、患難を了知すれば錯置盡く止まん。彼の天邪見なれば顚倒の相狀にして、隨順聞持は安靜止息なり。根本は眞實の繫縛を知見するにあり。是の如き勝義は聽聞の法、平等發生すれば聞持具足し、無畏を獲得すれば力用を發生す。是の如く無縛淨妙ならば施を行ひ、名は本四蘊なるも色の所依無く、陳白懺謝すれば清淨圓滿なり。三乘を運載して得る所は彼岸にして、罪を懺して圓滿ならば靜住を修し持つなり。天趣清淨ならば快樂獲べく、眞實の趣求は無倒清淨なり。

菩薩施行莊嚴護國本生之義第二十九

て得、五種熾然ならば色・聲・香・味・地・水・火・風・觸塵の收むる所なり。力用も繫縛・愛戀は捨て難く、施因は我慢に縛せらるゝこと有ること無し。悲み導くこと發生すれば清淨の調伏なり。是の如きを名けて淨施を獲得すと爲すなり。普く勝義を獲れば苦果已に除き、大乘に隨順すれば究竟して得べし。乃至壽命の邊際を趣求すれば、布施は勝利を獲得せざること無し。根本の寂靜は我慢の邊無く、殊勝の有情は運載を義と爲す。本有の災禍は寂靜の處無く、淨妙なる施の邊は無學果を證す。小隨中の害は我慢と俱なり。暗鈍の丈夫は染慢增盛し、自性の力用は彼の慢の法無し。煩惱は諍を本とする顚倒の修行にして、有情の自性は調伏と安靜なり。病難繫縛は色力を損壞し、勝因を發起すれば調伏遠離す。靜住の根本は寂靜の行を修し、清淨の布施は貪癡を捨離すと。是の處は、王者は聖智周く普して、遍く治化を施せば災患生ぜず。聽聞實有れば邪佞自ら止まん。敎令に隨順すれば破壞すべからず、世間の怖畏は聖力をもつて伏すべし。根本の止息は殊勝なる力用にして、修作を增上すれば衆類を運載し、遍く怖無きを用ひば捨離を希求す。云何が根本の聞持具足すといふや。無怖を增長すれば同義利を尋ね、勝因を運用して眞實に止息せん。增上の力用は十善の本にして、彼の施は善い哉往く所壞るゝこと無し。邊方を荷負すれば生靈安靜にして、彼の自在の力は我見と俱なり。有情嚴峻なれば施行を進修し、染汚・諍訟は施設して遠離せん。聖道の力用は調伏の修行にして、智慧の勝因は造修すること劫を往く。是の處は、菩薩は意地に遍く修し、無始遠劫より佛法を知見す。勝義の根本は應器の受用にして、刹塵の自性は本識の攝藏なり。是の如く修學し善く住し止[illegible]すれば、影像の遷變は寂靜の修行なり。我見・諍訟を無始より遠離し、無倒・清淨にして布施行を行ずれば、善く淨く三業を懺悔すれば安靜に、流轉の法ならず寂然として安住せん。遠く慧解を行じて有情を荷負すれば、寂靜の邊際は增上の調伏なり。善因を發生すれば熾然なる有力にして、根本の顚倒・纏縛遠離せん。意地眞實なれば彼は十種の善にして、了知して處所に

實に無きのみ。遷變は無動ならば湛然として止息し、諍訟の根本は體虚にして報實なり。作業の邊際は勢力止め難く、怖畏を具足せば暗鈍增上し、顚倒の邊際發生すること是の如し。安靜無動ならば顚倒有ること無く、士夫の力用は熾然として增修す。彼の顚倒の染は密行止息し、廣大なる自性は殊勝に進修す。上妙發生すれば自性を調伏し、清淨の果報は圓滿にして有力なり。云何に趣求してか惡を捨て善を修するや。熾然なる發趣は邊際を究竟し、種種の布施は勝行を進修す。根本の勝義自性を發生すれば、運載の修行は世間の軌範なり。寂靜の趣求は流轉の行無く、正解脫は縛を破壞する義無し。云何して諍を盡すを本智の分位とするや。有情は支分一合すれば得べきなり。云何してか心分の相狀は得難きや。四蘊の名名は本色相無く、忍行の邊際は靜住を本と爲す。湛然として清淨なれば鮮潔にして汚無く、勝義の自性の根本は不生なり。繫縛の施は無始の遠離と爲し、相貌は不生の力用にして隨順なり。彼の苦惱の行は進んで修すれば止息し、方所に摧壞すれば寂然として遠離す。熾然圓滿なれば相貌遷變し、苦因は安靜なれば保つべきこと有ること無し。生起する力用は相狀希有にして、殊勝なれば方所に止寂安靜なり。歡樂變動は崇修を意とすべく、施は運用を爲せば自在無倒なり。云何が本寂は生滅の相を盡すや。云何が染を斷ずるに事に迷ひ理に迷ふや。本智は俱に斷ずれば顚倒邊際し勝義は息むべし。云何が界性といふや。名色を增上すれば五蘊熾にして、圓滿鮮潔なれば化生有るべし。倒無くして進み修すれば澄寂・安靜にして、淨妙なること測り難く十力を義と爲す。清淨の色相は湛然として澄瑩に、色澤分明なること溫潤玉の如し。制度は是の如く快樂無比にして、和合增上すれば淨妙獲べし。施行具足すれば內外俱に捨て、憂受邊際すれば顚倒も彼の心に施すこと無し。是の處は、諍訟を本と爲せば、是の如きを名けて化生有ること無しと稱す。智慧深遠なれば諸天咸仰ぎ、善い哉施を行ずれば福德熾然なりと。是の處は、靜住を希求する力用は、圓滿に荷負し邊際に自在なるなり。是の如き知見は施を修することに因つ

の意地を發生す。名色和合するは福德の相貌にして、甚深に進趣するは施行の邊際なり。是の如く勝義は寂靜の根本にして、正等にして無倒なれば增上し發生せん。病力損壞するは殊勝の修行にして、根本の諍訟は瀑流の染惡なり。力用乃至邊際を施設し、寂靜の行を修するは縛無き自性なり。是の如く甚深なれば我の諍訟無く、性の本は無畏なれば聲色干せず。煩惱の趣求は善の相應に非ず、根本染の見は塵勞の因を起し。自在の相貌は顚倒の希求にして、自性業用の本は心より起るなり。根本の染障は千種を發生し、諍訟は施が止息遠離を爲す。清淨の圓月は光普からざる無く、根本の聖智は染無く不斷なり。自在にして無縛ならば制度增上し、煩惱損減すれば增上進修せん。勝義は無倒なれば能く貪欲を斷じ、無縛の邊際は清淨の和合なり。眞實なる彼の因は寂靜の修行にして、煩惱を造修することを如來は永く斷じたまへり。我見の義邊は貪慢隨つて生じ、一たび名色に合すれば力能く修作せん。施を修することを損減するは貧病の因にして、自性の力用たる災禍遷流は處所に修崇せば多く諍訟を增さん。有情は色相を能く捨離すること無く、佛法の梵行は能く障染を離るゝも、火の熾然なる勢の如く能く止むること莫し。本より寂靜を修すれば怖畏の縛無く、邊際に運載するは遷變行を修するなり。寂靜遠離は是の如き盡相にして、聞持を具足するは制度の敎誨なり。染諍を盡さんと求むるは殊勝の力用にして、聽聞と施行は根本の慢を除くなり。造作して一切の自性を發生すれば、煩惱・憂苦・恐怖・遠離せん。云何が施行は遷變崇修となすや。調伏の邊際は方所に眞實にして、勝義の希求は空の如く無礙なり。熾然なる智慧は圓滿の力用にして、清淨なる施因は究竟して患を除く。名色熾盛なること[一]迦毘羅の如く、是の如く自在は熾然なる修作にして、衆聖の和合なれば勝義平等なり。云何してか心法は形質有ること無きや。諸法を集起すれば棄捨の義無く、苦受の因相は垢染を本と爲す。顚倒・繫縛あらば憂惱盡くること無く、運載する增上の作業は無倒なり。障染・瀑流・增上するは何ぞや。熾然なる猛焰は卒瀑も遏め難く、平等にして無邊ならば眞

【一】迦毘羅は梵語にしてKapila、黄色の義、迦毘羅仙人とて有名なる七仙の一人なり。

卷の第十四

眞實の運載は遷變の希求にして、智性の圓滿は世間の調伏なり。寂靜なる聖因は眞實を荷負し、覺位の邊際は往古の修崇なり。智慧を希求し乃至遷變し本染を遠離し寂靜ならば有ること無く、四蘊の名名と質と不可得なり。世間の瀑流は暫時も住すること無く、根本の勝義自性は無邊なり。眼の能く見るに非ず本智をもつて得べし、寂靜にして無作ならば時に遷變有らんも、成就すれば平等の時分を發生せん。自性增上するは勝義の知見にして、力用を發起するは聞持を具足するなり。世間の處所には色界を上と爲し、第四禪の中には三災の患を離れ、聖人の行は靜住と相應せり。善行を修崇するは清淨の獲得にして、果報の功德は勝因を成就す。學處を造作すれば德行修業し、上妙の修崇は世間の邊際なり。圓滿なる運載は善利を獲得し、增上遷變の根本は眞實なり。顚倒を調伏すれば施行を發生し、聞持を趣求すれば本業を成就す。瀑流の心法は根本暗鈍にして、正解發生すれば圓滿寂靜なり。清淨の教誨は隨順して修作し、名色の本性は五蘊を體と爲す。十善に隨順するは最上の修作にして、時分・相・因には煩惱具足せり。垢染の相貌は災禍の本にして、復た解脫を修すれば寂靜の處なり。生門十二なるも盡く百數を攝し、日の照すが如く色鮮淨にして愛すべし。彼の國界の王者は甚だ善く、平等に導き化して災禍盡く止み、能く作業に於て善靜なれば遠離すと。是の處は、國王は正直にして邪無く、內外治化すること聖智神の若し。覺性增上すれば顚倒の心無く、世間に最上の言說を問難して大聞持を求む。世間は顚倒繫縛の相貌にして、自在の力能は無因の止息なり。邊際を希求すれば怖の因を遠離し、方所に暗鈍なるは顚倒の修作なり。風災の劫には大千の中は壞ると。是の處は、菩薩は增上甚深なれば、處所に調伏して圓滿寂靜なり。眞實に邪見の支分を除遣し、語言の最上なる談論を發生す。是の如き本有清淨の力用は、自在に難行

天も亦た有るなり。平等と自在此の語言は王者の殊勝とし此を之れ愛樂す。復た邊際一修作に合することと有らば、時分と處とに因行を發起すること無し。意地增上すれば盡して染諍無く、語言を發起すれば寂靜の色相なり。暗慢は時分に自性を成就し、顚倒・垢染の毒藥は止め難し。我慢止寂すれば自性を趣求し、煩惱・染毒は我見を本と爲す。云何が眼は彼を求めて前道と爲すや。菩薩語言す。縛染の色相は彼の淨戒を障へ、本我の相を修すれば眞實の纒蓋にして清淨止息し、我見を造作するは無性の本なり。王は善き敎を施して彼の果を成就し敎令を發起す。云何が眞實に布施行を求め、世間を圓滿にし梵行の語言清淨の敎誨をなし大國王の世間の勝義をもつて化導する有りや。云何が復た邊際は根本を增上する有りや。聖の言說の如くんば、上妙なる相狀は大國王普く惠施を行じて治化語言すと爲すなり。十種の善事は色相を遷變し、圓滿にして無盡なれば殊勝寂靜なり。明月生ずる時群星皆息み、聖智發起すれば衆垢自ら殄きん、障礙生ぜざれば世間を圓滿にす。是の如く具足して勝因を趣求し生處を了知すれば、邊際平等にして禪定相應し、支分遷變して彼此を圓滿にするなり。

菩薩本生鬘論卷第十三

世間は出で難きも禪定は安樂なり。無倒眞實なれば色相壞るゝこと無く、依止を造作するは殊勝の妙因なり。趣求し修習し耳に聞き心に想へば、廣大なる我執も全く悲しき導き無し。寂靜は種種の苦惱を邊際し、不安なれば眞實に暗慢息むこと無く、貪瞋欲界の染法を增上し、根本の十種は本因行を求む。王者は聖意を根本善友とし、邊際の因は煩惱業を造り意地圓滿なり。邪見の人有り顚倒の本を生ぜば、我見の邊際は世間を本と爲す。增上して淸淨の善業を造作すれば、彼岸の果報是の如く發生せん。禪定の法は究竟の力用にして寂靜殊勝なり。布施・持戒は根本の增上にして、勝義の相を修すれば飢渴の事を除く。最上の垢染は師恩を知らざれば、無上等覺も惑ふて知らず、淸淨の法は圓滿なる因行にして、眞實の心は世の勝義なり。云何なるをか寂靜といふや。處所に相貌正義にして邪無く、究竟の力用は寂靜にして多種なり。快樂圓滿は淸淨の邊際にして、安樂の業用は淨妙の施の爲なり。最上の力用は別別の趣求にして、止息を增上すれば無倒眞實なり。此の怖畏に處して聽聞淸淨なれば、暗慢の染をして惡行を止息せしむるなり。是の處は、平等なる天趣は廣大にして、有力は眞實に知見を識別す。煩・慢・倒・有らば趣求の心無し、云何が世間義利の因無きや。眞實を造作すれば我縛隨つて生じ、種種に慢無きことを處所に了知すれど、暗慢長養して增上熾然なり。梵世は平等なりと。是の處は、王福德莊嚴有ること、猶火聚の如く熾然明煥なり。本因に縛の遷變する力用無くんば縛實の慢無し。云何が無邊淸淨衆等といふや。縛の遷變瀑流の煩惱無くんば、慢等增上し趣求し生ずるの相、寂として靜妙本より遠離を了知すればなり。顚倒の生相は邊際を趣求し、處所に慢等の諍訟を發生す。教授の語言は彼を造作し、眞實の邊際は圓滿の積集なり。增上して生起するは語言の究竟にして、災禍の本たる縛は煩惱の染因なり。光明の相貌は盧舍那[一]と名くるなり。菩薩語言すらく。殊勝なる有情は寂靜なる三業なり。飢渴力無き邊際にして空の如く、貪瞋の心は平等なれば有ること無し。梵世の有情は四禪地に住し、顚倒の趣求は諸

【一】盧舍那は梵語にして Rocana, Vairocana, 光明遍照の義なり。

するが如く寂靜も是の如し。死生は常に煩惱・災禍に事へ、行施と希求とは寂靜の修作なり。時分の邊際は崇修廣大にして、彼の相狀の法は色相を本と爲す。無倒の希求は勝義の施設にして、苦惱の隨順は快樂に因ること無く、長時惡趣の報を獲得せん。無邊の色相は能く憍恣を盡くし、諸天の施因は王者の報なり。彼れ彼れの生相は我の根本にして、暗鈍を造作すれば清淨有ること無し。顚倒を發起すれば無常の過患にして、苦惱は一切の諍訟を生起す。生起の時分は自性を恭ひ謹み、種種の心の遷變を捨離し、縛を彼の出家の相に求め、我見を遠ざけば根本の行を盡くさん。云何してか憍慢諍訟盡くること無きや。清淨を趣求するは根本自性なれば、是の如く平等は寂滅に隨順し、聞持を具足すれば學地を圓滿す。無間地獄の時分は劫を論じ、苦楚息まず何の時にか出づべきや。彼の天は上妙にして清淨眞實なれば、廣大なる色相は福德盡くること無く、德行の邊際は圓滿に增上し、殊勝なれば處所に忍行を修習す。布施の義利は上位を希求し、增上殊勝の貪は施行を修して運載す。云何が根本不變の貪求といふや。是の如き修作は勝義を趣求し、意は布施十善業道を修するなり。

菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十八

〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十九〕

邪見も勝義無染にして有力に施を行ぜば、本無學地は正見に隨順すれば纏蓋遠離す。謂はゆる隨順聽聞は菩薩の眞實なり。云何なる相貌か福德の邊際なりや。荷負する顚倒有ること無くんば眞實にして、戒を持ちて修業すれば果報清淨なり。梵行の人は無我を了知し、彼の顚倒の本は相貌眞實なり。布施廣大なれば禪定成就し、梵行を增上すれば快樂の義利なり。淨妙を了知すれば悲願圓滿にして、運載行を修して意地を發生すれば處所の運用快樂無倒なり。放逸纏蓋は染行の邊際にして、

を本と爲す。煩惱の邊は苦楚を除くも無盡なりと。是の處は、菩薩は暗慢を造作するも邊際を了知すれば染因も益無し。善淨にして施を行へば三途の業無く、正理に隨順すれば眞實に趣向し、染惡の心の行相無きのみと。是の處は、王者は了知して治化すれば根本の言說是の如く無相にして、意地眞實なれば止息を趣求す。我見は遷變し希求する時分に覺慧は止まるべし。菩薩は正理無盡の慧にして、種種の自性は眞實を修崇す。是の如き義利は聖の言說を稟くと。是の處は、平等は眞實を了知し、意地の根本は清淨最上なれば、遷變を造作するも繫縛遠離す。彼の顚倒の本は災禍染垢にして、纏蓋を增上するも止息行を修し、行施圓滿なれば身相具足し、心淨く遷變すれば隨順を了知す。彼此の影像諸天は有を盡くし、清淨心は等しく眞實無諍なり。飢渴苦惱の相應は損壞し、暗慢の法は無倒なれば止息す。顚倒なる染法も邊際すれば空の如く、廣大なる悲願も清淨なれば遠離す。繫縛の自性は顚倒有力にして、煩惱の邊際は彼れ彼れの作業なり。諍訟熾然なれば瞋恚火の如く、煩惱行れずば勝義有力なり。方處に邊際せば無縛の相貌にして、時分の根本は我執を損壞するなり。聲相寂靜なれば力用圓滿にして、熾然の相貌は根本の自性なり。運載有力なれば趣求廣大にして、平等の因行は顚倒皆盡き本有の寂靜なり。王者は增上の慧解測り難く、眞實を了知すれば自性を出生す。具足して廣大ならば智力遷變し、相貌無畏なれば憍恣を了解す。清淨は增上の煩惱を止息し、一切の殊勝なる寂靜は荷負なり。聖者は清淨にして平等・祕密なれば、倒染・諍訟皆盡きざるは無し。此の如く我縛の邊際すれば根本煩惱の染因寂然として止息し、清淨の色相は進趣是の如し。運動の止息は眞實の自性にして、清淨の相貌は色相を遷變す。四果の羅漢は盡く我執を除き、彼の寂默の法は善い哉施を行ず。根本の染を盡くせば是の處清淨にして、有情の調伏は唯善敎に憑る。我性は暗慢の邊際に自在なれば、顚倒の本有りて布施の行無し。圓滿なる色相は意に祕密有り、倒染の行無くんば眞實なること此の如し。云何が空の如き善心は制度なりとは、王の遷變

分に施を修す。殊勝の相貌は寂靜眞實にして、阿羅漢果は作業已に盡き、彼此處所に色相を增上し、聞持供養寂靜趣求す。彼の勝義の相は恭奉圓滿にして、無染の造作は邊際を義利とす。清淨を修する處には布施を行ひ、自性の邊際は處所に廣大なり。三の根本染なる貪・瞋・癡の行は清淨なれば處所に邊際に運載す。病患は眞實に有情の修作にして、染汚無き行は天人の因なりと。是の處は、眞實の布施は殊勝なること、是の慈母の恩愛は養育なるが如し。彼れ彼れ處所に懺悔有力なるは、眞實にして圓滿なる荷負の德業なり。隨順して寂靜なるは香氣の物、相貌增上するは究竟の趣求なり。顚倒染を遠離すれば復た行相有り、垢染無盡なれば趣求自在なり。無我なれば本生の相皆盡くと爲し、寂靜にして聽聞すれば慢等生ぜず。根本の遷變は彼の煩惱性にして顚倒暗鈍なり、布施を行ずと雖も自體諍を興す、垢染を造作すれば災禍に隨順し、色相眞實なれば染縛を希求す。諍訟の煩惱は眞實を了知し、繫縛倒染に自在なるは修行なり。無倒垢染は荷負を希求し、清淨は處所に煩惱止寂す。遷變行を求めば瀑流生起し、天趣の中には義利を上と爲し、菩薩の敎誨は聽聞運載なり。是の大國王已に布施を生ずるは無倒の修作にして、此の大貪愛は捨てず、力制する所無きは淨行の遠離なり。是の如き造作は趣求するも無きこと有り。修行を發起し染無くんば彼の行は眞實の恭奉なり。根本に如來を崇修して因を求めば、彼の時分自ら暗鈍無きこと有り。隨順寂默なれば快樂して施を行ひ、佛地は清淨眞實を先と爲す。德行相應すれば染障皆盡き、懺悔すれば本業以て增盛すること無し。淨業は清涼にして有情の修作なりと。是の處は、王者は淨妙にして無倒を增上し治生するは眞實の根本なり。最上を崇修し止息を趣求し、染盡き施す是の如きを布施と爲す。顚倒を盡さんことを求め貪止み隨順し、本因を造作すれば自性止息し、染諍の義利は災難具足し、倒染止息すれば我見生ぜず、最上の施は一に祕密に合すと爲す。彼れ彼れ眞實ならば根本の修施にして、染縛を造作するは根本の遍蓋なり。止息を敎誨して安靜ならば清涼にして快く、樂の心は清淨

ん。彼の縛永く斷ずれば身體の邊際にして、十種の本染を聖者は止息せりと。是の處は、天人は垢染を破壞し瞋恚止息し造作を生ぜず、勝因無畏にして寂靜を了知す。王者は荷負すれば邊遠止息し、自在の色相は實に動作無し。清淨の體性は邪魔遠離し女人善を障るの本を了知すと。是の處は、天人眞實なる時分は瞋恚を行ぜず造作寂靜にして、清淨の因相なれば諍訟已に息めり。國王は生靈を荷負して在る有れば正理方に行れ五蘊誠諦なり。增上の修作は垢染遠離し、自在の運用は根本の施設なり。相貌自在なれば因行眞實にして、想念無ければ已に彼此の力用なり。怖畏盡く止むは勝義の根本なり。彼の災禍眞實に止息すれば、破壞の相ならず垢染を遷變するなり。王が王施せば制度の止息を爲すなり。是の如く天趣も水火風の災上下すること有るべく、第四禪天は三災並に止み、善淨生起し瀑流を了知す。三界の所在は瞋の一法にして、忿等の七法中二法に隨ふ。欲界中には諂誑の二法有り、下二地には根本の九法有り、小隨憍一・大隨八法は並に三界に通ずる邊際の了知なり。清淨を崇修すれば支分を造作し、根本有力ならば災禍止まんことを求むと。是の處は、菩薩は圓滿の忍力なれば清淨に施を行ひ眞實の力用なり。相應の運載は聞持具足し、根本の色相は暗慢を希求す。戒法を略說して圓滿に修作し、清淨勝因の力用は染を止む。增上の悲願は我慢皆盡き、隨順の趣求は如來の言說なり。福德清淨は無倒の自性にして、煩惱を了知するは相應の邊際なり。善惡趣の類は思惟を善友とし、苦惱は是の如く勝心を發し難し。聞持を增上すれば繫縛を遷變し、有情の憍恣は貪欲の所生なり。染惡の自性は遠離して生ぜず、名色有力なれば五蘊は善心をもつて止息す。增上の寂靜生ずれば因自ら止み、彼れ彼れの煩惱は根本寂に止まれば無倒清淨にして、不壞の有力は清淨の自性なり。災禍を盡す教誨を求むれば止息し、色身を依と爲す有情は往業す。彼の如き相盡くれば有學增上し、根本の寂靜は身體の自性なり。勝義の教法は無我の行を修し、清淨の大法は義利殊勝なり。誠實を了知すれば染縛遠離し、種種の運載は時

倒を增上するは瀑流の染法にして、染障を造作する相貌は有力なり。我見を本と爲すは聖に非ざれば斷じ難し、三乘の見道は根本の智斷なり。餘の惑は遂に滅し究竟して生ぜず邊際の遠離なり。諦は實に空の如く無倒寂靜にして、意地の初學は放心自在にして自相圓滿なり。彼の纒蓋の性は暗鈍繫縛にして垢染の行有り、諸天は自在に是の如く修崇す。彼の染縛の體は煩惱を性と爲し、我見の發生する根本は染慧なり、淨因を發生すれば有情止息す。王の敎令は力用傾かされば暗鈍我慢は淸淨に遠離せん。是の如く世間すら善く邊際を修す、云何が壽命は自性に安住して器用眞實なりや。彼の施の實義は無顚倒の性にして、憍慢邊際すれば淸淨に止息す。造作する因性は善淨の制作なり。云何が殊勝の布施を修作するや。根本の我慢は憍恣を發生し、遷變を止息するは勝義の殊異なり。圓滿の了知は趣求眞實にして意地莊嚴なり。王者の深旨は、根本の邊際は究竟の自性にして、淨心眞實なれば布施殊勝なり。淸淨の自性は相貌の修作にして、處所に發生するは有力の修作なり。具足して聞持するは世間の破壞なりと。云何が支分淸淨に止息するや。是の如き有は根本の祕密無ければなり。王者は生靈の制度を了知し、彼れ彼れは淨戒を積集して彼此の眞實を發生す。瞋恚・憍慢・相貌・繫縛は諍訟の處なれば、天人有力は修習を發生し、遠離を增上するは作業の體性にして、災難を了知すれば殊勝自ら止まん。本縛は染倒・暗鈍・具足し、平等は、縛染諍訟を了知す。天趣は淨妙なる時分の勝因にして、忍行の邊際は聖者の敎誨なり。煩惱の障は纒縛の自性にして、王施の敎令は聖智の了知なり。是の如きは邊際の崇作を增上するなり。根本の顚倒は增上慢の類にして、如來の性は眞實に無我なれば、災禍の根本は寂然として皆盡き、甚深無倒なれば力用自在に、煩惱瀑流の體性盡くべし。女人を了知すれば深く過患を生じ、邊際顚倒は名色の相貌なり。我慢の支分は顚倒有ること無く、聖說を稟くるに依りて布施有力にして、有情毒無くんば彼は勝義諦なり。又復勝因の根本自性は愛支染盡き名色の處無し。寂靜祕密は天人の相にして、暗鈍慢染邪魔止息せ

邊際なり。福業を趣求すれば勝義の止息にして、無顚倒の行は荷負の因を修す。清淨なる自性寂靜の處は福業を成就し流轉遠離し、瀑流邊際すれば造作止息せん。清淨の進修は和合圓滿にして、顚倒煩惱の作用は眞實に、布施し智有らば所在に有力なり。有情の煩惱は淨智生ぜず、有德の荷負は力用の根本なり。世間を想念する義利の修作は造作の邊際にして有力平等なり。卒暴の有情は力用顚倒にして、布施の殊勝は相貌の根本なり。慈忍の行を修するは寂靜の義利にして、懺悔清淨の了解は教法なり。祕密の住持は智慧の制約にして、愛慕し修崇するは平等の自性なり。有力を莊嚴するは淨妙の自性にして、因行の邊際は殊勝の敎法なり。飢渴捨離すれば解脫し安靜にして、彼れ實に造作すれば是の如く皆盡き、憍慢は處所に染因盡き止まん。此の平等の因は清淨の敎法なりと。是の處は、王者は布施行を行ふこと淨妙無倒にして佛果を希求し。隨順して施を修する善男子は天趣是の如く寂靜の運載は彼岸行を修し、時分邊際すれば愛樂殊勝なり。是の如く諸天は殊妙の邊際にして、寂靜を發起すれば慢無くして眞實なり。勝義の行相は止息安靜にして、清淨の力用ある王者は天の如し。眞際を了解すれば根本の方處にして、清淨の施設は根本の色相なり。十種の煩惱は患難を了知し、處所に誠諦なる力用は眞實なり。界性の根本は陰覆蓋の如く、處所の坑穽は災禍の邊際なり。自在に施を修すれば諍訟を遠離し、淨妙を增上すれば誠諦に趣向し、遷變隨順す。彼れ彼れの力用は了知して進趣し、染無きの心は體清淨にして無我なり。殊勝の相を作すは力用の根本にして、遠離の邊際は貪行の止息なり。隨順は善友にして寂靜に施を行ひ、清淨は暗慢を敎誨する自性なり。王者は盡して根本の纏縛を止め、顚倒せる過去の纒の體を了知し、隨順は煩惱の施設を息滅し、想念已むこと無くんば有情暗鈍ならん。眞實の遷變寂靜を發生すれば、顚倒垢染も空の如く無邊ならん。造作し遷變すれば暗慢已まず、煩惱顚倒厶染障を究竟すれば、清淨にして敎誨寂然として有ること無し。彼れ彼れの顚倒の作業の眞實は貪愛の支分を根本の體と爲す。染

淨の布施は熾然として增上し、根本の力用は禪定寂默なり。布施相應すれば楚毒皆盡き、根本の荷負は障染盡き止まん。敎法の力用は祕密無倒にして、十善の邊際は傍類止息すと。是の處は、王女人有りて主と爲り、勝義眞實にして十善行を修し、天趣の有情は色相增上し、清淨は律部の根本眞實なり。密意清淨にして發生する修作は、天趣眞實に愛樂して施を修し、衆生を調伏して復た智慧を生ず。意地に了知すれば修作を發生し、心體の力能は圓滿殊勝なり。淨施を發起すれば女人遠離し、快樂勝因の義利を了知すれば、知見の邊際を增上して有力なり。不壞の祕密は無倒の隨順にして、意地の自性は支分の根本なり。眞實を呼召して本業を崇修し、放逸を遠離して清淨に施を行ふ。善相の名色は道行に相應し、殊勝の義利は敎誨を趣求するなり。顚倒垢染なれば快樂修し難く、靜住の遷變は清涼作すべし。善施の發生は無倒の思念にして、布施の戒行は德業を增上す。勝義は德究竟して增上すべく、聖人の運載は和合清淨なり。圓淨解脫は增上の相狀にして、色體の不虛は殊勝の有力諦實の安住なり。是の如く無倒の邊際なる修作は種種の道行針を穿つが如く有力なり。平等の本性なる無相の修作は自性寂靜にして眞實の因行なり。德業の運すべきは和合と遠離となり。有聖の根本は無我の進趣にして、有學の修する因は增上の祕密なり。瀑流の煩惱は增上して動かず、色體本有の心も亦た本生なり。了知して趣求すれば空の如き相無く、勝義の寂靜は作業止むべし。根本不生なれば希求何ぞ有らんや。正解脫の義は無相の依止にして、彼の寂に因りて生ずる清淨は無修なり。聽聞して施を行ぜば默靜にして安を求め、煩惱の意すれば清淨を發起す。本修の施行は力用殊勝にして破壞すべからず。運載無倒なれば相貌を了知し、根本不生なれば熾然なること是の如し。無倒にして有力ならば眞實慢の邊は淨妙止むべく、禪定寂靜ならば意地止息し、世間の聽聞は怖畏盡くべし。是の如き忍行は殊勝にして邊際の因は煩惱の本なり。自性有力ならば了知運載し、聽聞の相貌は愛樂養育なり。自性を究竟すれば福德遷變し、彼れ彼れの遠離は處所の

上なれば淨妙香潔なり。十善の修崇は煩惱を遷變し、意地の時分は彼れ彼れ寂靜なり。瀑流の煩惱は根本より遠離すれば、愛樂は莊嚴にして進止寂靜なり。三根本の智は清凉殊勝にして、自在の色相は施を修する力用なり。慢無くんば方所に聞持を具足し、移轉發生は根本の相貌なり。貪愛を遠離し趣求增上すれば、正行の十善は有染息除し、無諍を養育すれば怖畏盡止し、我見復生ずれば煩惱を引き起さん。清淨を發生し增上修作すれば、福德寂靜にして眞實を發生せん。瀑流顚倒も根本は誠諦にして、相貌の發生は清淨の制度なり。是の如き慢類の自性損壞すれば、德行の修崇は清淨の遠離なり。眞實の制度は名色發生し、寂靜の處は欲貪飢渴す。隨順は所在に支分圓滿にして、坑穽の施設は養育を具足し、遷變吉祥の智慧は慢を起すの處を了知し、廣大寂靜の根本の力用なり。是の處は、清凉なる淨妙の邊際は趣類を了知すれば我慢生ぜず、寂靜增上すれば染垢皆盡く。運載の眞實は十善の敎導にして、餓鬼趣の如く業を造くること等しき無し。善根の荷負は聞持の施設にして、聽聞の相狀は平等の安住なり。顚倒垢穢は依止する處無く、了知は暗鈍障染を遠離す。自在なる依止は修作の趣求にして、隨順眞實は遷變の根本なり。無倒清淨は色相の根本にして、廣大なる發生は恩育の施設なり。聞持を愛樂するは運載の根本にして、貪欲の施は自性顚倒と爲す。諍訟を造作すれば殊勝の果無く、相狀の繫縛は增上有ること無し。究竟して動轉すれば相貌皆盡き、愛樂し養育すれば諍訟の染有り。煩惱障染は顚倒を增上すと。是の處は、有情我見なれば喧諍にして、顚倒なる慢等の因業を造作し。王は善き敎を行ふて聞持具足し、忍の行は無動にして寂靜として止息するは遠離を增上するなり。彼れ彼れの熱惱は染縛によりて獲る所、慧は三性に通じて意と相應す。增上の修作は瀑流の染慧にして、力用に實有れば遷變に自在なり。行蘊の生ぜざるは遷變に由ること無く、惡を息むる勝義は平等を聽聞するなり。是の如く瀑流は遠離を增修し、聽聞は我我の邊際する施設なり。眞實の意地は染縛除息し、十善を究竟すれば了知して止息せん。清

靜の邊際ならば貪瞋癡の法根本より無義なり。不善の本は慢等の煩惱を緣と爲して諸の苦惱を受くることを生ず。勝義の根本は無畏の力際にして貪慢の因緣は眞實の自性なり。有情の造作は止息して生ぜず、清淨の法は無垢の染行なり。毒害顚倒は了知すれば起らず、飢渴の因は煩惱の報なり。顚倒に隨順すれば戒行斷こと有り、義利を聽聞すれば止息して生ぜず。慢等の煩惱は繫縛して起り、布施・慈忍は究竟して圓滿なれば因無くして有り。色相本空なれば修するも不可得にして、瀑流永く斷ずれば忍行方に成ぜん。世間の破壞は覺性の了知にして、自在に進止するは智解明白なればなり。相貌を成就すれば寂然として遠離し、自體寂靜なれば清淨にして止息せん。恭奉殊勝なれば最上を了知し、解脫の邊際は忍慈の德行なり。名色の自性は破壞すべき相にして、終身の行業は忍戒を先と爲して力用度を成ぜん。種子たる識の性は眞實の勝義無倒にして、暗鈍・纏蓋の無邊なるも皆盡き。彼れ施を修する處語言寂靜なり。云何ぞ學地は深法の遠離といふや。是の處は、修習廣大なれば無我にして、種種の修習は一切彼此無し。最上の相貌は養育の報にして、蓮の開合するが如く香氣遠く聞ゆ。無垢清淨は塵坌生ぜず、國界は中に處して卒暴を生ぜず。憍慢の相を除くは正行の邊際なり。應器は平等にして彼此を別つこと無く、支分の相貌は意地遷變なり。無恚の義利は無慢の自性にして、自在を發生すれば諸天有學なり。淨妙にして憍無くんば煩惱生ぜず、相盡くることを了知せば語言增上し聽聞誠有り、根本の災禍荷負するの能有らん。云何が眞實は身相の了知にして、隨順は圓滿に遷變は修作なりやと。是の處は、國王心を興して布施すれば聞持を具足し相貌を修崇し、諍訟患難動轉して平等なり。增上の慧は敎導を發生し、寂靜の處は眞實を趣求す。能く方所に於て施すを制度と爲し、布施の邊際は色心ともに眞實なり。恭奉圓滿は善施增上し、無相の力用は造作興綷す。殊妙の相狀は國界具足し、最上の趣求は習學聞持にして廣大の因を修す。彼の無垢の邊は聞持增上し、自性の寂默は如來の性なり。莊嚴平等なれば顚倒の相無く、名色最

卷の第十三

眞實善淨なること是の如き德行は染縛の相盡きて安樂を獲得し、是の如き勝義は平等にして皆盡き、布施を發生して圓滿止寂なり。勝義の因を修すれば殊勝有力にして、煩惱を止息し力用自在なり。祕密の行を作せば誠諦に自在にして、熾然に因を修すれば名色壞るゝこと無し。彼の十善行は煩惱生ぜず、能く自性を持てば淸淨有力なり。時分の法は寂靜に隨順し、王者の道德を修崇するは無盡なり。相應の力用をもつて布施行を修し、究竟して善淨なれば聽聞は惡を息め、一切の快樂は能く彼を運載し、淸淨の語言は本より自ら王者なり。是の如き聖法は義利安靜にして、敎導を成就し圓滿有力にして無倒淸淨なり。殊勝なる有情は我執を生ぜず、王は善く敎へ能ふ。是の如く無倒なれば隨順して止息し、學位は力能く趣求し運載せん。云何してか善妙の因を獲得するや。無怖の修作は三乘究竟し、彼の天の瞋恚は共に眞實を聚め、障染の邊際は有力に隨順す。是の如く世間に繫縛生起するは、欲天の有情根本より有るべし。名色淨妙なれば義利誠實にして、殊勝の有情は根本行の如し。勝義眞實なれば福德無邊にして、圓滿は如來の根本聖力なり。眞實の造作は惡法を息除し、悲願の成滿は王者の敎令と應器との如し。是の如く天人恭奉する智慧の施は聖力の制度と爲す。彼の智は云何にして發起趣求するや。是の如き崇修と智解とは眞實なり。

菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十七

〔菩薩施行莊嚴尊者護國本生之義第二十八〕

淸淨眞實なれば盡して染諍無く、廣大にして楚毒を邊際する圓相なり。謂はゆる聽聞は菩薩の敎誨なればなり。云何が煩惱行無きを趣求すれば倒・暗・慢・欲貪無くんば無義なりや。有情究竟して寂

卷の上……〔一――三六〕……三三五

卷の下……〔三七――七〇〕……三六九

◇　　◇

卷の第五……〔八七―一一五〕……二一一

卷の第六……〔一一六―一四一〕……二四一

巻の第三…………〔三九——五七〕…………一六五

巻の第四…………〔五八——八六〕…………一八四

醍醐施品第二十二……九二
阿那律品第二十三……九五
彌迦佛品第二十四……九六
羅雲品第二十五……九八
難提品第二十六……九九
颰提品第二十七……一〇〇
羅槃颰提品第二十八……一〇二
摩頭剎律致品第二十九……一〇四
世尊品第三十……一〇六

六度集經解題……〔一―一四〕……一一五

六度集經（全八卷）……〔一―一八八〕……一二七

卷の第一……〔一―二〇〕……一二七

布施度無極章第一之一……一二七

一、菩薩の本生……一二七
二、薩波達王の本生……一二八
三、貧人の本生……一三〇
四、菩薩の本生……一三三
五、乾夷王の本生……一三三
六、國王の本生……一三四
七、國王の本生……一三六
八、仙歎理家の本生……一三七
九、普施商主の本生……一三九
一〇、長壽王の本生……一四二

卷の第二……〔二一―三八〕……一四七

目次

（本 丁）（通頁）

本緣部 六

岡教遂
赤沼智善
成田昌信
常盤大定
譯

國譯一切經

大東出版社藏版